
東 松 山 市

銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ

高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ
(第1分冊)

2 0 1 0

独立行政法人 都市再生機構
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 錢塚・城敷遺跡空中写真（合成）



1 銭塚遺跡全景 南から



2 城敷遺跡全景 南から



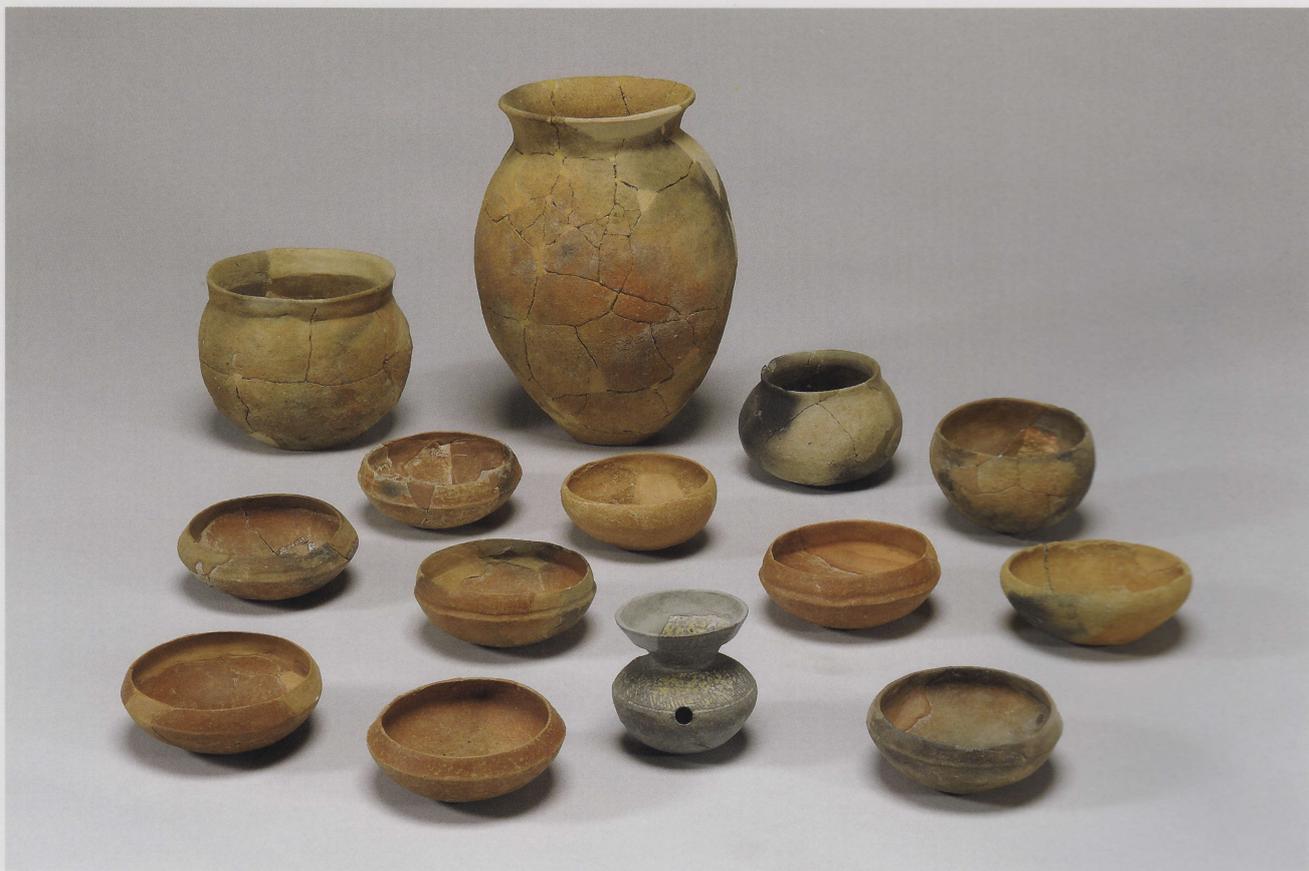
1 錢塚遺跡第1号土器棺墓



2 錢塚遺跡第1号土器棺墓出土弥生土器 (1)



1 錢塚遺跡第1号土器棺墓出土弥生土器(2)



1 錢塚遺跡第4号住居跡出土土器



2 錢塚遺跡第18号住居跡出土土器



1 錢塚遺跡第7号溝跡・第12号溝跡出土土器



2 錢塚遺跡第18号溝跡出土土器



1 城敷遺跡第4号溝跡梯子出土状況



2 城敷遺跡第4号溝跡出土樽型甕

銭塚遺跡・城敷遺跡の紹介

銭塚遺跡・城敷遺跡は、東松山市の南東部にあります。最近まで水田の下に眠っていましたが、発掘調査したところ、都幾川が運んだ土砂によってつくられた古い自然堤防という高まりの上に立地していることがわかりました。

銭塚遺跡からは弥生時代（約1,900年前）の土器棺墓というお墓が見つかり、中から小児のものと思われる歯が出土しました。丁寧に埋葬した様子から、子供への愛情が伝わってきます。また、奈良・平安時代（約1,100～1,300年前）のムラからは、奈良の都で使用された土器（畿内産土師器といいます）や、東海地方で生産された当時の高級須恵器が見つかりました。もしかしたらこの地域を支配した豪族が住んでいたのかもしれませんが。

城敷遺跡からは、古墳時代前期から後期（約1,650～1,500年前）の大きなムラ跡が見つかりました。このムラは蛇行して流れる大溝（河川）の両岸につくられていました。川へ降りるために地面を削ってつくった階段、堰、堤防のような木組みなど、河川を生活に積極的に取り込んだ様子がわかります。出土したたくさんの遺物の中には、長さ3mにも及ぶ長い梯子や樽形甕とよばれる非常に珍しい須恵器などがあります。

序

埼玉県は、高次の都市機能と交通利便性を備えながら、豊かな緑とゆとりのある空間に恵まれています。こうした「都市の魅力」と「田園のゆとり」を併せ持った「田園都市」の創造を目指し、都市基盤の整備や美しいまちなみ形成に取り組んでいます。独立行政法人都市再生機構による「高坂駅東口第二地区特定土地地区画整理事業」では、「むさし緑園都市」の一翼として、あふれる自然と都市機能が調和した人に優しい街づくりがすすめられています。

事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として城敷遺跡、銭塚遺跡、反町遺跡の3遺跡が知られておりました。これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）の調整により、当事業団が独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社の委託を受けて実施いたしました。

城敷遺跡と銭塚遺跡は、弥生時代から平安時代にかけて栄えた集落遺跡です。遺跡のなかを蛇行する大溝に沿って、住居跡や掘立柱建物跡などが発見され、数多くの土器や石製品、鉄製品、木製品が出土しました。古墳時代の須恵器には、近畿地方から運ばれてきた貴重なものが含まれています。また木製品には長大な梯子はしこや扉材などの建築部材が多く見られ、大規模な建物跡の存在を窺うことができます。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発や各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社、東松山市教育委員会並びに地元関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 刈部 博

例言

1. 本書は東松山市に所在する銭塚遺跡第2次・第3次調査、城敷遺跡第1次・第2次調査の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。なお、城敷遺跡は「じょうしき」・「しろしき」の二通りの呼称があり、調査時は前者で呼称したため、略号を「JOSK」とした。その後、東松山市教育委員会との協議で「しろしき」と呼称することとなったため、本書では全てその呼称で統一した。

城敷遺跡第1次調査

城敷遺跡第1次 (JOSK 1次)

埼玉県東松山市大字高坂347-1他

平成15年5月14日付け 教文第2-12号

平成15年5月14日付け 教文第2-13号

銭塚遺跡第2次調査・城敷遺跡第2次調査

銭塚遺跡第2次 (ZNDK 2次)・

城敷遺跡第2次 (JOSK 2次)

埼玉県東松山市大字高坂340-2他

平成16年4月27日付け 教文第2-9号

銭塚遺跡第3次調査

銭塚遺跡第3次 (ZNDK 3次)

埼玉県東松山市大字高坂307-1他

平成17年4月11日付け 教生文第2-2号

3. 発掘調査は、高坂駅東口第二特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)が調整し、都市基盤整備公団(当時)の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 銭塚・城敷遺跡(第2次調査)については、以下の文献があるが、本報告がすべてに優先する。

富田和夫2005「東松山市銭塚・城敷遺跡(第2次)の調査」『第38回遺跡発掘調査報告会発表

要旨』埼玉考古学会

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3の組織により実施した。

銭塚・城敷遺跡の発掘調査は、3カ年にわたって実施した。

城敷遺跡第1次調査

平成15年4月8日～平成15年4月30日

平成15年8月1日～平成16年3月24日

担当者 伴瀬宗一・池田恵美子

銭塚遺跡第2次・城敷遺跡第2次調査

平成16年4月8日～平成17年3月31日

担当者 富田和夫・伴瀬・福田 聖・菊地

真・松本美佐子・池田

銭塚遺跡第3次調査

平成17年4月1日～平成18年3月31日

担当者 富田・大谷 徹・山本 靖・菊地

整理報告書作成事業は、平成19年度から平成23年度までの予定で実施している。平成19年4月9日から平成22年3月24日まで富田が、平成21年4月8日から平成22年3月24日まで山本が担当して実施し、第I巻を事業団報告書第369集『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』(本書)として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は株式会社GIS関東に、空中写真撮影は朝日航洋株式会社・中央航業株式会社に委託した。

7. 出土木製品の樹種同定(平成19年度)・年代測定・獣骨同定(平成20・21年度)はパリノサーヴェイ株式会社に、漆器の科学分析(平成20年度)は漆器文化財研究所に委託した。平成20年度の樹種同定は、独立行政法人森林総合研究所能城修一氏に依頼した。

巻頭図版(口絵)の遺物写真については、小川忠博氏に委託した。

8. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、

出土遺物の写真撮影は富田・山本・福田が行った。

9. 出土品の整理・図版作成は富田・山本が行い、赤熊浩一・瀧瀬芳之・上野真由美・福田・松本の協力を受けた。
10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、I-2・3、IV-5を福田が、IV-1～4・6～11、VIIを富田が、II-2、III-3、Vを山本が、VI-1をパリノサーヴェイ株式会社が、VI-2を漆器文化財研究所が行った。
11. 本書の編集は富田・山本が行った。
12. 本書に掲載した資料は平成22年4月以降埼玉県

教育委員会が管理・保管する。

13. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略、50音順)
東松山市教育委員会 飯塚武司 岩田明広
上原真人 江原昌俊 金井塚良一 加藤修司
加藤恭朗 栗岡真理子 黒濟和彦 黒濟玉恵
酒井清治 篠原祐一 白井久美子 高久健二
鶴間正昭 根本 靖 平野寛之 藤野一之
宮島秀夫 宮本長二郎 宮瀧交二 山田昌弘
渡辺 一

凡例

- 遺跡全体におけるX・Yの数值は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

錢塚遺跡ZP-15グリッド北西杭の座標は、X = 600.00m、Y = -38230.00m。北緯36° 00' 28.23"、東経140° 15' 38.40"である。（小数点以下第3位切捨て）

ZP-15グリッドの世界測地系による換算値はX = 954.52m、Y = -38522.39mである。（小数点以下第3位切捨て）

城敷遺跡C-15グリッド北西杭の座標は、X = 470.00m、Y = -38230.00m。北緯36° 00' 24.09"、東経140° 15' 38.40"である。（小数点以下第3位切捨て）

C-15グリッドの世界測地系による換算値はX = 824.57m、Y = -38522.39mである。（小数点以下第3位切捨て）
- 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
- グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばR-8グリッド等と呼称した。
- 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SD…溝・河川流路 SE…井戸跡
SK…土壙 SA…柱穴列
SX…堤防状遺構・その他不明遺構
SY…畠跡 Pit・P…小穴・柱穴
- 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、木製品等例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

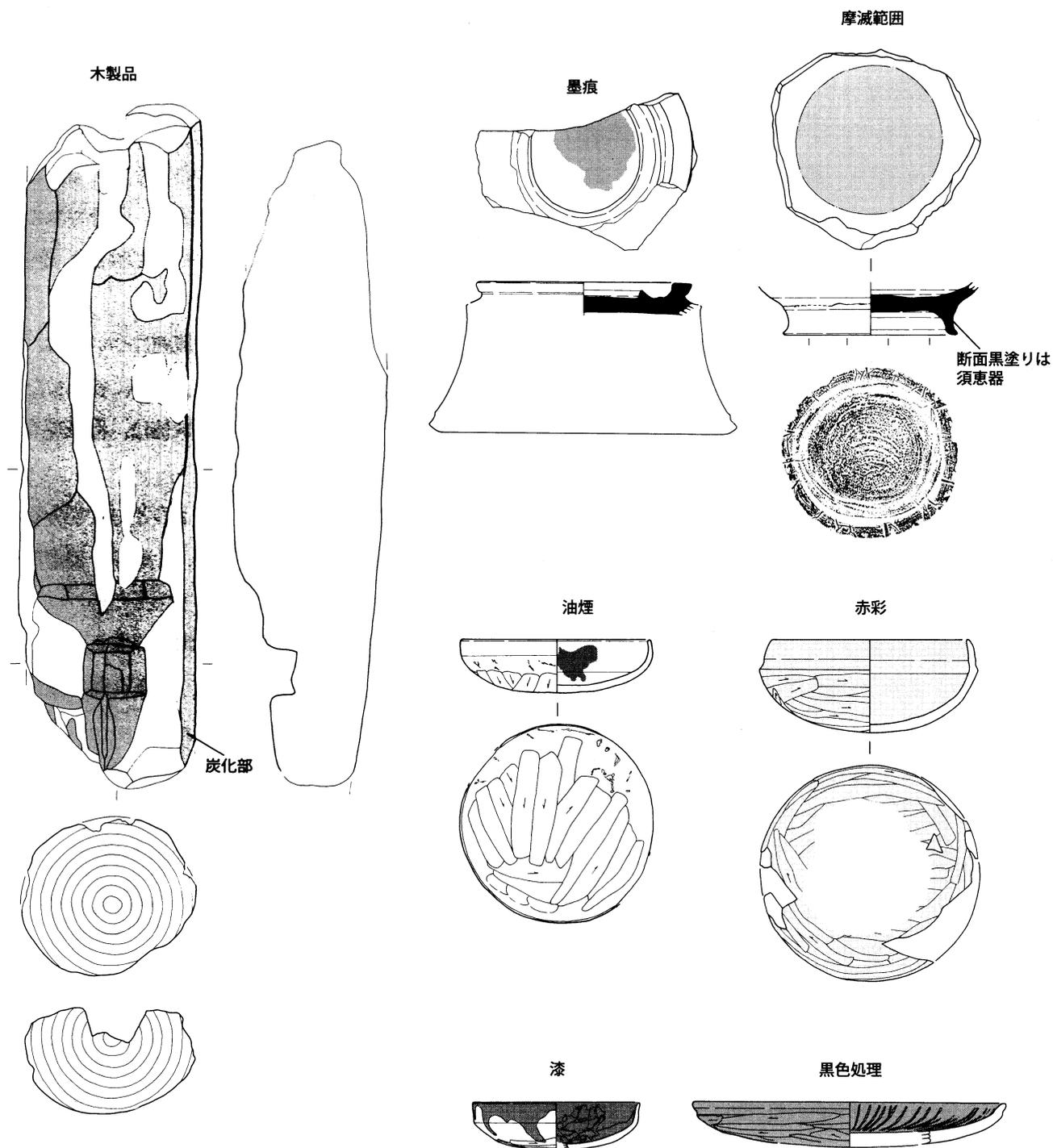
全測図 1：300
遺構図 1：60 遺構拡大図 1：30
土師器・須恵器・木製品など 1：4
土器拓影図・石器（紡錘車・砥石など） 1：2・1：3・1：4
鉄器・小型製品（耳環など） 1：2
石製模造品 1：1
- 実測図の表記方法は以下のとおりである。断面を黒塗りしたものは須恵器。また、彩色された土器についてはその範囲に網を掛けて示した（赤彩・灰釉10%・黒色処理30%）。

漆・油煙の付着範囲、摩滅範囲については、範囲に網を掛けて示すとともに、図中に表記した。
- 遺構断面図に表記した水準数值は、海拔標高を表す。
- 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - 器種は、弥生土器→弥生、土師器、須恵器と表記した。
 - 口径・器高・底径は、cm単位である。
 - ()内の数值は推定値、それ以外の数值は現存値を示す。
 - 胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石 D-長石
E-石英 F-軽石 G-砂粒子 H-赤色粒子 I-白色粒子 J-白色針状物質
K-黒色粒子 L-その他
 - 残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
 - 備考には出土位置、注記No、赤彩の有無、煤の付着、推定される須恵器産地、調整や整形の特徴などを記した。

9. 本文中の遺構所属時期については、古墳時代前期・中期等の表記以外に本書第Ⅲ期等の記載がある。これはⅦ調査のまとめに示した時期分割案を使用した。

10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50000・1/25000地形図、東松山市都市計画図1/2500を使用した。



遺物図表現方法

目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2
(1)	発掘調査	2
(2)	整理・報告書の作成	2
3.	発掘調査・報告書作成の組織	3
II	遺跡の立地と環境	5
1.	地理的環境	5
2.	歴史的環境	9
III	遺跡群の概要	26
1.	反町遺跡群の概要	26
2.	銭塚遺跡の概要	33
3.	城敷遺跡の概要	45
4.	反町遺跡の概要	53
IV	銭塚遺跡の遺構と遺物	57
1.	竪穴住居跡	57
2.	掘立柱建物跡	199
3.	柱穴列	219
4.	土壌	220
5.	土器棺墓	233
6.	井戸跡	239
7.	溝跡	242
8.	畠跡	311
9.	堤防状遺構	315
10.	ピット	315
11.	グリッド他出土遺物	321

(第2分冊)

V	城敷遺跡の遺構と遺物	329
1.	竪穴住居跡	329
2.	掘立柱建物跡	419
3.	土壌	423
4.	溝跡	428
5.	大溝跡	441
6.	ピット	495
7.	グリッド出土遺物	498
VI	自然科学分析	501
1.	銭塚遺跡の自然科学分析	501
(1)	樹種同定	501
(2)	放射性炭素年代測定	504
(3)	骨同定	505
(4)	種実同定	506
2.	城敷遺跡出土ウルシの赤外分光分析	508
VII	調査のまとめ	511
1.	銭塚遺跡・城敷遺跡出土遺物の編年的位置について	511
2.	銭塚遺跡・城敷遺跡の集落変遷について	529

写真図版

挿 図 目 次

(第 1 分冊)

第 1 図	埼玉県の地形……………	5	第34図	第 2 号住居跡出土遺物……………	57
第 2 図	東松山周辺の地形……………	6	第35図	第 3 号住居跡……………	58
第 3 図	都幾川最下流域の微地形分類図	7	第36図	第 3 号住居跡出土遺物……………	59
第 4 図	早俣低地の微地形と集落……………	8	第37図	第 4 号住居跡……………	60
第 5 図	弥生時代中期から古墳時代中期の周辺遺跡…	10	第38図	第 4 号住居跡出土遺物 (1) ……	61
第 6 図	古墳時代後期から中世の周辺遺跡…	19	第39図	第 4 号住居跡出土遺物 (2) ……	62
第 7 図	基本層序……………	26	第40図	第 5 号住居跡……………	63
第 8 図	銭塚・城敷・反町遺跡の調査区位置図…	27	第41図	第 6 号住居跡……………	64
第 9 図	グリッド網図……………	28	第42図	第 6 号住居跡出土遺物……………	64
第10図	銭塚遺跡・城敷遺跡全体図 (1/2500) …	30	第43図	第 7 号住居跡……………	65
第11図	反町遺跡 (第 1 ~ 3 次) 全体図 (1/2500) …	31	第44図	第 7 号住居跡出土遺物……………	66
第12図	銭塚遺跡全体図 (1/1250) …	32・33	第45図	第 8・11号住居跡……………	67
第13図	銭塚遺跡全測図 (1) (1/300) …	34	第46図	第 8 号住居跡出土遺物……………	68
第14図	銭塚遺跡全測図 (2) (1/300) …	35	第47図	第 9 号住居跡・カマド……………	69
第15図	銭塚遺跡全測図 (3) (1/300) …	36	第48図	第 9 号住居跡出土遺物 (1) ……	70
第16図	銭塚遺跡全測図 (4) (1/300) …	37	第49図	第 9 号住居跡出土遺物 (2) ……	71
第17図	銭塚遺跡全測図 (5) (1/300) …	38	第50図	第 9 号住居跡出土遺物 (3) ……	72
第18図	銭塚遺跡全測図 (6) (1/300) …	39	第51図	第10号住居跡出土遺物……………	73
第19図	銭塚遺跡全測図 (7) (1/300) …	40	第52図	第10号住居跡……………	74
第20図	銭塚遺跡全測図 (8) (1/300) …	41	第53図	第11号住居跡出土遺物……………	74
第21図	銭塚遺跡全測図 (9) (1/300) …	42	第54図	第12号住居跡……………	75
第22図	銭塚遺跡全測図 (10) (1/300) …	43	第55図	第12号住居跡出土遺物……………	76
第23図	銭塚遺跡全測図 (11) (1/300) …	44	第56図	第13号住居跡……………	77
第24図	城敷遺跡全体図 (1/1250) ……	47	第57図	第13号住居跡出土遺物……………	77
第25図	城敷遺跡全測図 (1) (1/300) …	48	第58図	第14・15号住居跡……………	78
第26図	城敷遺跡全測図 (2) (1/300) …	49	第59図	第14号住居跡出土遺物……………	78
第27図	城敷遺跡全測図 (3) (1/300) …	50	第60図	第15号住居跡出土遺物……………	79
第28図	城敷遺跡全測図 (4) (1/300) …	51	第61図	第16・17号住居跡……………	80
第29図	城敷遺跡全測図 (5) (1/300) …	52	第62図	第16号住居跡出土遺物……………	81
第30図	城敷遺跡全測図 (6) (1/300) …	53	第63図	第17号住居跡出土遺物……………	81
第31図	城敷遺跡全測図 (7) (1/300) …	54	第64図	第18号住居跡 (1) ……	83
第32図	城敷遺跡全測図 (8) (1/300) …	55	第65図	第18号住居跡 (2) ……	84
銭塚遺跡			第66図	第18号住居跡 (3) ……	85
第33図	第 2 号住居跡……………	57	第67図	第18号住居跡 (4) ……	86
			第68図	第18号住居跡 (5) ……	87

第69回	第18号住居跡 (6) ……………	88	第106回	第30号住居跡出土遺物 (4) ……	125
第70回	第18号住居跡出土遺物 (1) ……	89	第107回	第31号住居跡 ……………	126
第71回	第18号住居跡出土遺物 (2) ……	90	第108回	第31号住居跡出土遺物 ……	127
第72回	第18号住居跡出土遺物 (3) ……	91	第109回	第32号住居跡 ……………	127
第73回	第18号住居跡出土遺物 (4) ……	92	第110回	第32号住居跡出土遺物 ……	128
第74回	第18号住居跡出土遺物 (5) ……	93	第111回	第33・43号住居跡 ……………	130
第75回	第18号住居跡出土遺物 (6) ……	94	第112回	第33号住居跡出土遺物 ……	131
第76回	第18号住居跡出土遺物 (7) ……	95	第113回	第33・43号住居跡出土遺物 ……	132
第77回	第18号住居跡出土遺物 (8) ……	96	第114回	第35号住居跡 ……………	135
第78回	第19号住居跡……………	100	第115回	第35号住居跡出土遺物 ……	136
第79回	第19号住居跡出土遺物……………	101	第116回	第36号住居跡・カマド ……	137
第80回	第19・23号住居跡出土遺物……………	101	第117回	第36号住居跡出土遺物 ……	138
第81回	第20号住居跡……………	102	第118回	第37号住居跡 ……………	139
第82回	第20号住居跡出土遺物……………	102	第119回	第38号住居跡 ……………	139
第83回	第21号住居跡……………	103	第120回	第38号住居跡出土遺物 ……	140
第84回	第21号住居跡出土遺物……………	104	第121回	第39号住居跡 ……………	141
第85回	第22号住居跡……………	106	第122回	第40号住居跡 ……………	143
第86回	第22号住居跡出土遺物……………	107	第123回	第40号住居跡出土遺物 ……	144
第87回	第23号住居跡・出土遺物……………	108	第124回	第41号住居跡 ……………	145
第88回	第24号住居跡……………	109	第125回	第41号住居跡出土遺物 ……	145
第89回	第24号住居跡出土遺物……………	109	第126回	第42号住居跡 ……………	146
第90回	第25号住居跡……………	110	第127回	第42号住居跡出土遺物 (1) ……	147
第91回	第25号住居跡出土遺物 (1) ……	111	第128回	第42号住居跡出土遺物 (2) ……	148
第92回	第25号住居跡出土遺物 (2) ……	112	第129回	第43号住居跡出土遺物 ……	150
第93回	第26号住居跡……………	113	第130回	第44号住居跡 ……………	151
第94回	第26号住居跡出土遺物……………	114	第131回	第45号住居跡 ……………	151
第95回	第27号住居跡……………	115	第132回	第45号住居跡出土遺物 ……	152
第96回	第27号住居跡出土遺物……………	115	第133回	第46号住居跡 ……………	153
第97回	第28号住居跡……………	116	第134回	第46号住居跡カマド ……	154
第98回	第28号住居跡出土遺物……………	116	第135回	第46号住居跡出土遺物 (1) ……	155
第99回	第29号住居跡……………	117	第136回	第46号住居跡出土遺物 (2) ……	156
第100回	第29号住居跡出土遺物 ……	118	第137回	第46号住居跡出土遺物 (3) ……	157
第101回	第30号住居跡 (1) ……………	119	第138回	第46号住居跡出土遺物 (4) ……	158
第102回	第30号住居跡 (2) ……………	120	第139回	第47号住居跡・出土遺物 ……	160
第103回	第30号住居跡出土遺物 (1) ……	121	第140回	第48号住居跡 (1) ……………	161
第104回	第30号住居跡出土遺物 (2) ……	122	第141回	第48号住居跡 (2) ……………	162
第105回	第30号住居跡出土遺物 (3) ……	123	第142回	第48号住居跡出土遺物 ……	162

第143図	第49号住居跡	163	第180図	第4号掘立柱建物跡	203
第144図	第49号住居跡出土遺物	164	第181図	第5号掘立柱建物跡	204
第145図	第50・57号住居跡	166	第182図	第6号掘立柱建物跡	205
第146図	第50号住居跡カマド	167	第183図	第7号掘立柱建物跡	206
第147図	第50号住居跡出土遺物	167	第184図	第8号掘立柱建物跡	207
第148図	第51・54号住居跡	169	第185図	第9号掘立柱建物跡	208
第149図	第51号住居跡出土遺物	169	第186図	第10号掘立柱建物跡	209
第150図	第52号住居跡	170	第187図	第11号掘立柱建物跡	210
第151図	第52号住居跡カマド	171	第188図	第12号掘立柱建物跡	211
第152図	第52号住居跡出土遺物(1)	172	第189図	第13号掘立柱建物跡	211
第153図	第52号住居跡出土遺物(2)	173	第190図	第14号掘立柱建物跡・第1号柱穴列	212
第154図	第53号住居跡	175	第191図	第15号掘立柱建物跡	214
第155図	第53号住居跡出土遺物	176	第192図	第16号掘立柱建物跡	215
第156図	第55号住居跡	178	第193図	第17号掘立柱建物跡	216
第157図	第55号住居跡カマド	179	第194図	第18号掘立柱建物跡(1)	217
第158図	第55号住居跡出土遺物(1)	180	第195図	第18号掘立柱建物跡(2)	218
第159図	第55号住居跡出土遺物(2)	181	第196図	第19号掘立柱建物跡	220
第160図	第55号住居跡出土遺物(3)	182	第197図	掘立柱建物跡出土遺物	221
第161図	第56号住居跡・出土遺物	183	第198図	第20～28号土壇	223
第162図	第58号住居跡	184	第199図	第29・30・32～38号土壇	225
第163図	第59号住居跡	184	第200図	第39・40・42～44・46～50号土壇	227
第164図	第60号住居跡	185	第201図	第51～57号土壇	229
第165図	第60号住居跡出土遺物	185	第202図	第24・30・37・39・42・43号土壇出土遺物	231
第166図	第61号住居跡	186	第203図	第44号土壇出土遺物	232
第167図	第61号住居跡出土遺物	186	第204図	第1号土器棺墓	233
第168図	第62号住居跡	188	第205図	第1号土器棺墓遺物出土状況(1)	234
第169図	第62号住居跡出土遺物	189	第206図	第1号土器棺墓遺物出土状況(2)	235
第170図	第63号住居跡(1)	190	第207図	第1号土器棺墓出土遺物(1)	236
第171図	第63号住居跡(2)	191	第208図	第1号土器棺墓出土遺物(2)	237
第172図	第63号住居跡出土遺物(1)	192	第209図	第1～3・5～8号井戸跡	240
第173図	第63号住居跡出土遺物(2)	193	第210図	第1・2・5・7・8号井戸跡出土遺物	241
第174図	第63号住居跡出土遺物(3)	194	第211図	第7・12号溝跡見取り図	243
第175図	第64号住居跡	198	第212図	第7号溝跡	243
第176図	第64号住居跡出土遺物	199	第213図	第7号溝跡遺物出土状況(1)	244
第177図	第1号掘立柱建物跡	200	第214図	第7号溝跡遺物出土状況(2)	245
第178図	第2号掘立柱建物跡	201	第215図	第7号溝跡出土遺物(1)	246
第179図	第3号掘立柱建物跡	202	第216図	第7号溝跡出土遺物(2)	247

第217図	第7号溝跡出土遺物(3)……………	248	第254図	第26・27・28号溝跡……………	294
第218図	第7号溝跡出土遺物(4)……………	249	第255図	第29号溝跡(1)……………	296
第219図	第7号溝跡出土遺物(5)……………	250	第256図	第29号溝跡(2)……………	297
第220図	第7号溝跡出土遺物(6)……………	251	第257図	第29号溝跡出土遺物(1)……………	298
第221図	第12号溝跡……………	255	第258図	第29号溝跡出土遺物(2)……………	299
第222図	第12号溝跡遺物出土状況(1)…	256	第259図	第29号溝跡出土遺物(3)……………	300
第223図	第12号溝跡遺物出土状況(2)…	257	第260図	第30号溝跡……………	303
第224図	第12号溝跡遺物出土状況(3)…	258	第261図	第31号溝跡……………	304
第225図	第12号溝跡出土遺物(1)……………	260	第262図	第32・33・35・36号溝跡……………	305
第226図	第12号溝跡出土遺物(2)……………	261	第263図	第37～41号溝跡……………	306
第227図	第12号溝跡出土遺物(3)……………	262	第264図	第42・43号溝跡……………	307
第228図	第12号溝跡出土遺物(4)……………	263	第265図	第44～47号溝跡……………	308
第229図	第12号溝跡出土遺物(5)……………	264	第266図	第45号溝跡出土遺物……………	309
第230図	第12号溝跡出土遺物(6)……………	265	第267図	第48号溝跡……………	309
第231図	第12号溝跡出土遺物(7)……………	266	第268図	第49号溝跡……………	310
第232図	第12号溝跡出土遺物(8)……………	267	第269図	第49号溝跡出土遺物……………	311
第233図	第12号溝跡出土遺物(9)……………	268	第270図	畠跡(1)……………	311
第234図	第13号溝跡……………	273	第271図	畠跡(2)……………	312
第235図	第14号溝跡……………	274	第272図	畠跡(3)……………	313
第236図	第14号溝跡遺物出土状況……………	275	第273図	畠跡(4)……………	314
第237図	第14号溝跡出土遺物(1)……………	276	第274図	第1号堤防状遺構……………	315
第238図	第14号溝跡出土遺物(2)……………	277	第275図	ピット出土遺物……………	321
第239図	第15号溝跡……………	279	第276図	グリッド他出土遺物(1)……………	322
第240図	第15号溝跡出土遺物……………	280	第277図	グリッド他出土遺物(2)……………	323
第241図	第16・17号溝跡……………	281	第278図	グリッド他出土遺物(3)……………	324
第242図	第17号溝跡出土遺物……………	282	第279図	グリッド他出土遺物(4)……………	325
第243図	第18号溝跡……………	283	第280図	グリッド他出土遺物(5)……………	327
第244図	第18号溝跡出土遺物(1)……………	284	第281図	試掘出土遺物……………	328
第245図	第18号溝跡出土遺物(2)……………	285	(第2分冊)		
第246図	第18号溝跡出土遺物(3)……………	286	城敷遺跡		
第247図	第18号溝跡出土遺物(4)……………	287	第282図	第76号住居跡(1)……………	330
第248図	第19号溝跡……………	290	第283図	第76号住居跡(2)……………	331
第249図	第20・21号溝跡……………	291	第284図	第76号住居跡出土遺物……………	332
第250図	第22号溝跡……………	291	第285図	第78号住居跡……………	334
第251図	第23号溝跡……………	292	第286図	第78号住居跡出土遺物……………	334
第252図	第24号溝跡……………	292	第287図	第79号住居跡……………	335
第253図	第25号溝跡……………	293	第288図	第79号住居跡出土遺物……………	336

第289図	第80号住居跡	336	第326図	第97号住居跡	393
第290図	第80号住居跡出土遺物	337	第327図	第98号住居跡	394
第291図	第81号住居跡	338	第328図	第98号住居跡出土遺物	395
第292図	第81号住居跡出土遺物	339	第329図	第99号住居跡	396
第293図	第82号住居跡	341	第330図	第99号住居跡出土遺物	397
第294図	第82号住居跡出土遺物	341	第331図	第100号住居跡	398
第295図	第83号住居跡	342	第332図	第100号住居跡出土遺物	399
第296図	第83号住居跡出土遺物	343	第333図	第101・102号住居跡	401
第297図	第84号住居跡	345	第334図	第101・102号住居跡出土遺物(1)	402
第298図	第84号住居跡出土遺物	346	第335図	第101・102号住居跡出土遺物(2)	403
第299図	第85・86号住居跡	348	第336図	第103号住居跡	406
第300図	第85・86号住居跡出土遺物	349	第337図	第103号住居跡出土遺物(1)	407
第301図	第87号住居跡	350	第338図	第103号住居跡出土遺物(2)	408
第302図	第87号住居跡出土遺物	351	第339図	第104号住居跡	410
第303図	第88号住居跡	352・353	第340図	第104号住居跡出土遺物	411
第304図	第88号住居跡出土遺物(1)	354	第341図	第105号住居跡	412
第305図	第88号住居跡出土遺物(2)	355	第342図	第105号住居跡出土遺物	414
第306図	第89・90号住居跡	357	第343図	第106号住居跡	415
第307図	第89号住居跡出土遺物	358	第344図	第106号住居跡出土遺物	416
第308図	第92号住居跡	360・361	第345図	第107号住居跡	417
第309図	第92号住居跡出土遺物	362	第346図	第107号住居跡出土遺物	417
第310図	第91号住居跡	364	第347図	第13号掘立柱建物跡	419
第311図	第91号住居跡出土遺物(1)	365	第348図	第14号掘立柱建物跡	420
第312図	第91号住居跡出土遺物(2)	366	第349図	第15号掘立柱建物跡	421
第313図	第93号住居跡	377	第350図	土壙(1)	424
第314図	第93号住居跡出土遺物	378	第351図	土壙(2)	425
第315図	第94号住居跡	380	第352図	第37号土壙出土遺物	425
第316図	第94号住居跡遺物出土状況	381	第353図	第36号土壙出土遺物	426
第317図	第94号住居跡出土遺物(1)	382	第354図	第30・32号土壙出土遺物	427
第318図	第94号住居跡出土遺物(2)	383	第355図	溝跡(1)	428・429
第319図	第94号住居跡出土遺物(3)	384	第356図	溝跡(2)	430
第320図	第95号住居跡	386	第357図	溝跡(3)	432・433
第321図	第95号住居跡出土遺物	387	第358図	溝跡(4)	435
第322図	第96号住居跡	389	第359図	溝跡(5)	436
第323図	第96号住居跡カマド	390	第360図	溝跡(6)	438・439
第324図	第96号住居跡出土遺物(1)	391	第361図	溝跡出土遺物	440
第325図	第96号住居跡出土遺物(2)	392	第362図	第4号溝跡地点配置図	442

第363図	第4号溝跡第1地点	443	第389図	第4号溝跡第2地点出土遺物(12)	478
第364図	第4号溝跡第1地点遺物出土状況	444	第390図	第4号溝跡第2地点出土遺物(13)	480
第365図	第4号溝跡第1地点出土遺物(1)	446	第391図	第4号溝跡第2地点出土遺物(14)	482
第366図	第4号溝跡第1地点出土遺物(2)	447	第392図	第4号溝跡第2地点出土遺物(15)	483
第367図	第4号溝跡第1地点出土遺物(3)	448	第393図	第4号溝跡第2地点出土遺物(16)	485
第368図	第4号溝跡第1地点出土遺物(4)	450	第394図	第4号溝跡第3地点	488・489
第369図	第4号溝跡第1地点出土遺物(5)	452	第395図	第4号溝跡第3地点出土遺物(1)	490
第370図	第4号溝跡第1地点出土遺物(6)	453	第396図	第4号溝跡第3地点出土遺物(2)	491
第371図	第4号溝跡第1地点出土遺物(7)	454	第397図	第4号溝跡第3地点出土遺物(3)	493
第372図	第4号溝跡第1地点出土遺物(8)	455	第398図	第4号溝跡第3地点出土遺物(4)	494
第373図	第4号溝跡第1地点出土遺物(9)	457	第399図	グリッド出土遺物(1)	498
第374図	第4号溝跡第2地点	458	第400図	グリッド出土遺物(2)	499
第375図	第4号溝跡第2地点遺物出土状況(1)	460	第401図	銭塚遺跡 木材	502
第376図	第4号溝跡第2地点遺物出土状況(2)	461	第402図	銭塚遺跡 出土骨	506
第377図	第4号溝跡第2地点遺物出土状況(3)	462	第403図	銭塚遺跡 種実遺体	507
第378図	第4号溝跡第2地点出土遺物(1)	464	第404図	城敷遺跡 赤外線吸収スペクトル	509
第379図	第4号溝跡第2地点出土遺物(2)	465	第405図	土器変遷図(1)	512
第380図	第4号溝跡第2地点出土遺物(3)	467	第406図	土器変遷図(2)	513
第381図	第4号溝跡第2地点出土遺物(4)	468	第407図	土器変遷図(3)	516
第382図	第4号溝跡第2地点出土遺物(5)	469	第408図	土器変遷図(4)	519
第383図	第4号溝跡第2地点出土遺物(6)	471	第409図	土器変遷図(5)	521
第384図	第4号溝跡第2地点出土遺物(7)	472	第410図	参考図(1)	522
第385図	第4号溝跡第2地点出土遺物(8)	473	第411図	参考図(2)	523
第386図	第4号溝跡第2地点出土遺物(9)	474	第412図	参考図(3)	526
第387図	第4号溝跡第2地点出土遺物(10)	475	第413図	集落変遷図(1)	530・531
第388図	第4号溝跡第2地点出土遺物(11)	477	第414図	集落変遷図(2)	532・533

表 目 次

(第1分冊)

第1表	調査の工程	3	第8表	第10号住居跡出土遺物観察表	73
銭塚遺跡			第9表	第11号住居跡出土遺物観察表	74
第2表	第3号住居跡出土遺物観察表	59	第10表	第12号住居跡出土遺物観察表	76
第3表	第4号住居跡出土遺物観察表	60・62	第11表	第13号住居跡出土遺物観察表	77
第4表	第6号住居跡出土遺物観察表	63	第12表	第16号住居跡出土遺物観察表	81
第5表	第7号住居跡出土遺物観察表	66	第13表	第17号住居跡出土遺物観察表	81
第6表	第8号住居跡出土遺物観察表	67	第14表	第18号住居跡出土遺物観察表	87・88・97・98・99・100
第7表	第9号住居跡出土遺物観察表	72・73	第15表	第19号住居跡出土遺物観察表	101

第16表	第19・23号住居跡出土遺物観察表…	101
第17表	第20号住居跡出土遺物観察表…	103
第18表	第21号住居跡出土遺物観察表…	104
第19表	第22号住居跡出土遺物観察表…	106
第20表	第24号住居跡出土遺物観察表…	109
第21表	第25号住居跡出土遺物観察表…	112
第22表	第26号住居跡出土遺物観察表…	114
第23表	第27号住居跡出土遺物観察表…	116
第24表	第28号住居跡出土遺物観察表…	117
第25表	第29号住居跡出土遺物観察表…	118
第26表	第30号住居跡出土遺物観察表…	124・125
第27表	第32号住居跡出土遺物観察表…	129
第28表	第33号住居跡出土遺物観察表…	133
第29表	第33・43号住居跡出土遺物観察表	133
第30表	第35号住居跡出土遺物観察表…	135
第31表	第36号住居跡出土遺物観察表…	137・139
第32表	第38号住居跡出土遺物観察表…	140
第33表	第40号住居跡出土遺物観察表…	144
第34表	第41号住居跡出土遺物観察表…	145
第35表	第42号住居跡出土遺物観察表…	149
第36表	第43号住居跡出土遺物観察表…	150
第37表	第46号住居跡出土遺物観察表…	158・159
第38表	第47号住居跡出土遺物観察表…	160
第39表	第48号住居跡出土遺物観察表…	162
第40表	第49号住居跡出土遺物観察表…	165
第41表	第50号住居跡出土遺物観察表…	168
第42表	第52号住居跡出土遺物観察表…	174
第43表	第53号住居跡出土遺物観察表…	176
第44表	第55号住居跡出土遺物観察表…	182
第45表	第56号住居跡出土遺物観察表…	183
第46表	第61号住居跡出土遺物観察表…	186
第47表	第62号住居跡出土遺物観察表…	188・189
第48表	第63号住居跡出土遺物観察表…	195・196
第49表	第64号住居跡出土遺物観察表…	199
第50表	掘立柱建物跡出土遺物観察表…	219
第51表	土壙出土遺物観察表…	232
第52表	井戸跡出土遺物観察表…	241

第53表	第7号溝跡出土遺物観察表…	252
第54表	第12号溝跡出土遺物観察表…	269
第55表	第14号溝跡出土遺物観察表…	278
第56表	第15号溝跡出土遺物観察表…	280
第57表	第18号溝跡出土遺物観察表…	288
第58表	第29号溝跡出土遺物観察表…	301
第59表	第49号溝跡出土遺物観察表…	310
第60表	銭塚遺跡ピット一覧表…	316
第61表	ピット出土遺物観察表…	321
第62表	グリッド他出土遺物観察表…	325
第63表	試掘出土遺物観察表…	328

(第2分冊)

城敷遺跡

第64表	第76号住居跡出土遺物観察表…	333
第65表	第78号住居跡出土遺物観察表…	335
第66表	第79号住居跡出土遺物観察表…	336
第67表	第80号住居跡出土遺物観察表…	337
第68表	第81号住居跡出土遺物観察表…	340
第69表	第82号住居跡出土遺物観察表…	341
第70表	第83号住居跡出土遺物観察表…	344
第71表	第84号住居跡出土遺物観察表…	347
第72表	第85・86号住居跡出土遺物観察表…	349
第73表	第87号住居跡出土遺物観察表…	351
第74表	第88号住居跡出土遺物観察表…	355
第75表	第89号住居跡出土遺物観察表…	358
第76表	第92号住居跡出土遺物観察表…	359
第77表	第91号住居跡出土遺物観察表…	367
第78表	第91号住居跡出土滑石剥片一覧…	368～376
第79表	第93号住居跡出土遺物観察表…	379
第80表	第94号住居跡出土遺物観察表…	385
第81表	第95号住居跡出土遺物観察表…	388
第82表	第96号住居跡出土遺物観察表…	392
第83表	第98号住居跡出土遺物観察表…	395
第84表	第99号住居跡出土遺物観察表…	397
第85表	第100号住居跡出土遺物観察表…	400
第86表	第101・102号住居跡出土遺物観察表…	404
第87表	第103号住居跡出土遺物観察表…	409

第88表	第104号住居跡出土遺物観察表 … 411	第97表	城敷遺跡ピット一覧… 495・496・497
第89表	第105号住居跡出土遺物観察表 … 413	第98表	グリッド出土遺物観察表…………… 499
第90表	第106号住居跡出土遺物観察表 … 416	第99表	銭塚遺跡樹種同定結果…………… 502
第91表	第107号住居跡出土遺物観察表 … 417	第100表	銭塚遺跡放射性炭素年代測定分析試料… 504
第92表	土壙出土遺物観察表…………… 427	第101表	銭塚遺跡放射線炭素年代測定及び暦年 較正結果 ……………… 505
第93表	溝跡出土遺物観察表…………… 440	第102表	銭塚遺跡骨同定結果 ……………… 506
第94表	第4号溝跡第1地点出土遺物観察表… 449	第103表	銭塚遺跡種実同定結果 ……………… 507
第95表	第4号溝跡第2地点出土遺物観察表… 466		
第96表	第4号溝跡第3地点出土遺物観察表… 492		

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版 1 1 銭塚・城敷遺跡空中写真(合成)

巻頭図版 2 1 銭塚遺跡全景 南から

2 城敷遺跡全景 南から

巻頭図版 3 1 銭塚遺跡第1号土器棺墓
2 銭塚遺跡第1号土器棺墓出土
弥生土器(1)

巻頭図版 4 1 銭塚遺跡第1号土器棺墓出土
弥生土器(2)

巻頭図版 5 1 銭塚遺跡第4号住居跡出土
土器

2 銭塚遺跡第18号住居跡出土
土器

巻頭図版 6 1 銭塚遺跡第7・12号溝跡出土
土器

2 銭塚遺跡第18号溝跡出土
土器

巻頭図版 7 1 城敷遺跡第4号溝跡
梯子出土状況

2 城敷遺跡第4号溝跡出土樽形礎

銭塚遺跡

図版 1 1 全景 西から(1)

2 全景 西から(2)

3 全景 西から(3)

4 全景 北から

5 全景 北西から

6 全景 北東から(1)

7 全景 北東から(2)

8 全景 東から

図版 2 1 ZH-16~19、ZG-17~19
グリッド付近全景 西から

2 ZG-19・20グリッド付近全景
東から

3 ZG~ZJ-22グリッド全景
南から

4 ZH-15~ZJ-13グリッド全景
北東から

5 ZJ-13~ZJ-12グリッド下層全景
北から

6 ZJ・ZK-17~23グリッド全景
西から

7 ZJ・ZK-17~23グリッド全景
東から

8 ZK-17~ZN-15グリッド全景
北から

図版 3 1 ZK-25~34グリッド全景

2 ZK-32~34グリッド全景

3 ZP~ZW-25グリッド下層全景
東から

4 ZO-17~24グリッド全景
西から

5 ZP~ZR-25グリッド全景
北から

6 ZS-24~34グリッド全景
西から

7 ZF・ZO-37・38グリッド全景
南から

8 ZF・ZO-37・38グリッド全景
北から

図版 4 1 ZO-25~37グリッド全景
東から

2 ZO-25~37グリッド全景
西から

3 第2号住居跡

4 第3号住居跡

5 第3号住居跡カマド

6 第4号住居跡

7 第4号住居跡遺物出土状況(1)

8 第4号住居跡遺物出土状況(2)

図版 5 1 第6号住居跡

	2	第7号住居跡		7	第24号住居跡遺物出土状況
	3	第7号住居跡カマド		8	第25号住居跡
	4	第8号住居跡	図版10	1	第25号住居跡遺物出土状況(1)
	5	第8号住居跡掘り方		2	第25号住居跡遺物出土状況(2)
	6	第9号住居跡		3	第25号住居跡遺物出土状況(3)
	7	第9号住居跡カマド		4	第26号住居跡
	8	第9号住居跡カマド断面		5	第26号住居跡カマド
図版6	1	第9号住居跡カマド袖		6	第28号住居跡
	2	第9号住居跡遺物出土状況		7	第29号住居跡
	3	第10号住居跡		8	第30号住居跡
	4	第10号住居跡カマド	図版11	1	第30号住居跡遺物出土状況(1)
	5	第11号住居跡		2	第30号住居跡遺物出土状況(2)
	6	第12号住居跡		3	第30号住居跡遺物出土状況(3)
	7	第12号住居跡カマド		4	第31号住居跡
	8	第13号住居跡カマド		5	第32号住居跡遺物出土状況(1)
図版7	1	第14号住居跡		6	第32号住居跡遺物出土状況(2)
	2	第16号住居跡		7	第32号住居跡遺物出土状況(3)
	3	第16号住居跡紡錘車出土状況		8	第33号住居跡
	4	第17号住居跡	図版12	1	第33号住居跡遺物出土状況
	5	第17号住居跡遺物出土状況		2	第35号住居跡
	6	第18号住居跡(1)		3	第35号住居跡遺物出土状況
	7	第18号住居跡(2)		4	第35号住居跡カマド
	8	第18号住居跡遺物出土状況(1)		5	第36号住居跡
図版8	1	第18号住居跡遺物出土状況(2)		6	第36号住居跡カマド(1)
	2	第18号住居跡遺物出土状況(3)		7	第36号住居跡カマド(2)
	3	第18号住居跡遺物出土状況(4)		8	第36号住居跡カマド(3)
	4	第18号住居跡遺物出土状況(5)	図版13	1	第38号住居跡
	5	第18号住居跡遺物出土状況(6)		2	第38号住居跡長頸瓶出土状況
	6	第18号住居跡遺物出土状況(7)		3	第39号住居跡
	7	第19号住居跡		4	第40号住居跡
	8	第19号住居跡遺物出土状況		5	第40号住居跡貯蔵穴
図版9	1	第20号住居跡		6	第41号住居跡
	2	第21号住居跡遺物出土状況		7	第42号住居跡
	3	第22号住居跡		8	第42号住居跡遺物出土状況(1)
	4	第22号住居跡遺物出土状況	図版14	1	第42号住居跡遺物出土状況(2)
	5	第23号住居跡		2	第42号住居跡遺物出土状況(3)
	6	第24号住居跡		3	第42号住居跡遺物出土状況(4)

	4	第42号住居跡遺物出土状況 (5)	図版19	1	第55号住居跡遺物出土状況 (1)
	5	第43号住居跡		2	第55号住居跡遺物出土状況 (2)
	6	第44号住居跡		3	第55号住居跡遺物出土状況 (3)
	7	第46号住居跡		4	第55号住居跡遺物出土状況 (4)
	8	第46号住居跡カマド・貯蔵穴		5	第58・59号住居跡
図版15	1	第46号住居跡貯蔵穴		6	第60号住居跡
	2	第46号住居跡遺物出土状況 (1)		7	第61号住居跡
	3	第46号住居跡遺物出土状況 (2)		8	第62号住居跡
	4	第46号住居跡遺物出土状況 (3)	図版20	1	第62号住居跡カマド (1)
	5	第46号住居跡遺物出土状況 (4)		2	第62号住居跡カマド (2)
	6	第46号住居跡遺物出土状況 (5)		3	第63号住居跡
	7	第46号住居跡遺物出土状況 (6)		4	第63号住居跡遺物出土状況 (1)
	8	第46号住居跡遺物出土状況 (7)		5	第63号住居跡遺物出土状況 (2)
図版16	1	第47号住居跡		6	第64号住居跡
	2	第48号住居跡		7	第64号住居跡貯蔵穴
	3	第48号住居跡カマド		8	第1～3号掘立柱建物跡
	4	第49号住居跡	図版21	1	第1号掘立柱建物跡
	5	第49号住居跡遺物出土状況 (1)		2	第2号掘立柱建物跡
	6	第49号住居跡遺物出土状況 (2)		3	第3号掘立柱建物跡
	7	第50号住居跡		4	第4号掘立柱建物跡柱痕確認状況
	8	第50号住居跡カマド (1)		5	第4号掘立柱建物跡
図版17	1	第50号住居跡カマド (2)		6	第5号掘立柱建物跡
	2	第50号住居跡カマド断ち割り		7	第6号掘立柱建物跡
	3	第51・54号住居跡		8	第7号掘立柱建物跡
	4	第52号住居跡	図版22	1	第8号掘立柱建物跡
	5	第52号住居跡カマド		2	第9号掘立柱建物跡
	6	第52号住居跡遺物出土状況 (1)		3	第10号掘立柱建物跡
	7	第52号住居跡遺物出土状況 (2)		4	第11号掘立柱建物跡
	8	第52号住居跡遺物出土状況 (3)		5	第12号掘立柱建物跡
図版18	1	第52号住居跡遺物出土状況 (4)		6	第13号掘立柱建物跡
	2	第53号住居跡		7	第14・15号掘立柱建物跡、 第1号柱穴列確認状況
	3	第53号住居跡カマド		8	第14・15号掘立柱建物跡、 第1号柱穴列
	4	第53号住居跡遺物出土状況	図版23	1	第14号掘立柱建物跡柱痕出土状況
	5	第55号住居跡		2	第14号掘立柱建物跡ピット2礎板
	6	第55号住居跡カマド (1)		3	第14号掘立柱建物跡ピット5礎板
	7	第55号住居跡カマド (2)			
	8	第55号住居跡カマド断ち割り			

- | | | | | | |
|------|---|------------------|------|---|----------------------|
| | 4 | 第14号掘立柱建物跡ピット5 | 図版28 | 1 | 第7号溝跡ZN-15グリッド |
| | 5 | 第14号掘立柱建物跡ピット6礎板 | | 2 | 第7号溝跡ZN-15グリッド |
| | 6 | 第15号掘立柱建物跡ピット9礎板 | | | 遺物出土状況 |
| | 7 | 第15号掘立柱建物跡ピット2礎板 | | 3 | 第7号溝跡ZO-16・17グリッド |
| | 8 | 第16号掘立柱建物跡 | | 4 | 第7号溝跡ZO-16・17グリッド |
| 図版24 | 1 | 第18号掘立柱建物跡確認状況 | | | 遺物出土状況(1) |
| | 2 | 第18号掘立柱建物跡栗石 | | 5 | 第7号溝跡ZO-16・17グリッド |
| | 3 | 第18号掘立柱建物跡 | | | 遺物出土状況(2) |
| | 4 | 第24号土壌 | | 6 | 第7号溝跡ZO-16・17グリッド |
| | 5 | 第27号土壌炭化物出土状況 | | | 遺物出土状況(3) |
| | 6 | 第37号土壌 | | 7 | 第7号溝跡ZO-16・17グリッド |
| | 7 | 第38号土壌 | | | 紡錘車出土状況 |
| | 8 | 第42号土壌 | | 8 | 第7・12号溝跡ZM-11・12グリッド |
| 図版25 | 1 | 第43・44号土壌 | 図版29 | 1 | 第7・12号溝跡ZM-11・12グリッド |
| | 2 | 第43号土壌 | | | 遺物出土状況 |
| | 3 | 第44号土壌 | | 2 | 第7号溝跡ZM-11・12グリッド |
| | 4 | 第1号土器棺墓確認状況 | | | 遺物出土状況 |
| | 5 | 第1号土器棺墓断面 | | 3 | 第12号溝跡ZM-11・12グリッド |
| | 6 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(1) | | | 遺物出土状況 |
| | 7 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(2) | | 4 | 第7・12・15・16号溝跡 |
| | 8 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(3) | | | ZO-15・16グリッド 東から |
| 図版26 | 1 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(4) | | 5 | 第7・12・16号溝跡ZO-15・16 |
| | 2 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(5) | | | グリッド 西から |
| | 3 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(6) | | 6 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| | 4 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(7) | | 7 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| | 5 | 第1号土器棺墓遺物出土状況(8) | | | 遺物出土状況(1) |
| | 6 | 第1号土器棺墓歯遺物出土状況 | | 8 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| | 7 | 第1号土器棺墓掘り込み底面 | | | 遺物出土状況(2) |
| | 8 | 第1号井戸跡 | 図版30 | 1 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| 図版27 | 1 | 第2号井戸跡 | | | 遺物出土状況(3) |
| | 2 | 第3号井戸跡木製品出土状況 | | 2 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| | 3 | 第5号井戸跡 | | | 遺物出土状況(4) |
| | 4 | 第5号井戸跡曲物出土状況(1) | | 3 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| | 5 | 第5号井戸跡曲物出土状況(2) | | | 遺物出土状況(5) |
| | 6 | 第6号井戸跡 | | 4 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |
| | 7 | 第7号井戸跡 | | | 遺物出土状況(6) |
| | 8 | 第8号井戸跡 | | 5 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド |

- | | | | | |
|------|------------------------------------|------|---|-----------------------|
| | 遺物出土状況（7） | | 3 | 第1号堤防状遺構
焼土堆積状況（1） |
| 6 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド
遺物出土状況（8） | | 4 | 第1号堤防状遺構
焼土堆積状況（2） |
| 7 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド
遺物出土状況（9） | | 5 | 第1号堤防状遺構
焼土堆積状況（3） |
| 8 | 第12号溝跡ZO-15・16グリッド
遺物出土状況（10） | | 6 | 第1号堤防状遺構東西断面（1） |
| 図版31 | 1 第12号溝跡ZO-15・16グリッド
遺物出土状況（11） | | 7 | 第1号堤防状遺構東西断面（2） |
| | 2 第12号溝跡ZO-15・16グリッド
遺物出土状況（12） | 図版35 | 8 | 第1号堤防状遺構東西断面（3） |
| | 3 第12号溝跡ZO-15・16グリッド
遺物出土状況（13） | | 1 | 第3号住居跡（第36図1） |
| | 4 第13号溝跡 | | 2 | 第3号住居跡（第36図5） |
| | 5 第14号溝跡・第28号土壙 | | 3 | 第4号住居跡（第38図3） |
| | 6 第14号溝跡・第31号住居跡遺物
出土状況 | | 4 | 第4号住居跡（第38図4） |
| | 7 第14号溝跡遺物出土状況（1） | | 5 | 第4号住居跡（第38図1） |
| | 8 第14号溝跡遺物出土状況（2） | | 6 | 第4号住居跡（第38図1）拡大 |
| 図版32 | 1 第14号溝跡遺物出土状況（3） | 図版36 | 7 | 第4号住居跡（第38図5） |
| | 2 第14号溝跡遺物出土状況（4） | | 8 | 第4号住居跡（第38図6） |
| | 3 第14号溝跡遺物出土状況（5） | | 1 | 第4号住居跡（第38図7） |
| | 4 第18号溝跡 | | 2 | 第4号住居跡（第38図8） |
| | 5 第18号溝跡遺物出土状況 | | 3 | 第4号住居跡（第38図9） |
| | 6 第20・21号溝跡 | | 4 | 第4号住居跡（第38図10） |
| | 7 第26号溝跡 | | 5 | 第4号住居跡（第38図11） |
| | 8 第28号溝跡 | | 6 | 第4号住居跡（第38図12） |
| 図版33 | 1 第29号溝跡 | 図版37 | 7 | 第4号住居跡（第38図13） |
| | 2 第29号溝跡遺物出土状況 | | 8 | 第4号住居跡（第38図18） |
| | 3 第30・31号溝跡 | | 1 | 第4号住居跡（第38図20） |
| | 4 第32・33号溝跡・第50号土壙 | | 2 | 第4号住居跡（第39図25） |
| | 5 第42・43号溝跡 | | 3 | 第6号住居跡（第42図1） |
| | 6 第44～47号溝跡 | | 4 | 第6号住居跡（第42図2） |
| | 7 畠跡（1） | | 5 | 第6号住居跡（第42図3） |
| | 8 畠跡（2） | | 6 | 第7号住居跡（第44図1） |
| 図版34 | 1 第1号堤防状遺構（1） | 図版38 | 7 | 第8号住居跡（第46図2） |
| | 2 第1号堤防状遺構（2） | | 8 | 第8号住居跡（第46図3） |
| | | | 1 | 第8号住居跡（第46図9） |
| | | | 2 | 第8号住居跡（第46図10）表 |
| | | | 3 | 第8号住居跡（第46図10）裏 |
| | | | 4 | 第9号住居跡（第48図1） |

- 5 第9号住居跡 (第48图3)
- 6 第9号住居跡 (第48图11)
- 7 第9号住居跡 (第48图14)
- 8 第9号住居跡 (第48图15)
- 9 第9号住居跡 (第48图24)
- 图版39 1 第9号住居跡 (第48图16)
- 2 第9号住居跡 (第48图17)
- 3 第9号住居跡 (第49图29)
- 4 第9号住居跡 (第49图28)
- 5 第9号住居跡 (第49图30)
- 6 第9号住居跡 (第49图31)
- 图版40 1 第9号住居跡 (第49图32)
- 2 第9号住居跡 (第49图35)
- 3 第9号住居跡 (第50图38)
- 4 第9号住居跡 (第49图36)
- 5 第9号住居跡 (第49图37)
- 6 第9号住居跡 (第50图41)
- 7 第9号住居跡 (第50图42)
- 8 第9号住居跡 (第50图43)
- 图版41 1 第12号住居跡 (第55图3)
- 2 第12号住居跡 (第55图6)
- 3 第15号住居跡 (第60图1)
- 4 第16号住居跡 (第62图1)
- 5 第16号住居跡 (第62图4)
- 6 第17号住居跡 (第63图1)
- 7 第17号住居跡 (第63图5)
- 8 第18号住居跡 (第70图3)
- 9 第18号住居跡 (第70图4)
- 10 第18号住居跡 (第70图11)
- 图版42 1 第18号住居跡 (第70图12)
- 2 第18号住居跡 (第70图12) 底部
- 3 第18号住居跡 (第70图13)
- 4 第18号住居跡 (第70图16)
- 5 第18号住居跡 (第70图15)
- 6 第18号住居跡 (第70图15) 底部
- 7 第18号住居跡 (第70图18)
- 8 第18号住居跡 (第70图21)

- 图版43 1 第18号住居跡 (第70图20) 扩大
- 2 第18号住居跡 (第70图20)
- 3 第18号住居跡 (第70图22)
- 4 第18号住居跡 (第70图23)
- 5 第18号住居跡 (第70图24)
- 6 第18号住居跡 (第70图27)
- 7 第18号住居跡 (第70图29)
- 8 第18号住居跡 (第70图28)
- 9 第18号住居跡 (第70图30)
- 10 第18号住居跡 (第71图34)
- 图版44 1 第18号住居跡 (第71图35)
- 2 第18号住居跡 (第71图36)
- 3 第18号住居跡 (第71图37)
- 4 第18号住居跡 (第71图39)
- 5 第18号住居跡 (第71图41)
- 6 第18号住居跡 (第71图43)
- 7 第18号住居跡 (第71图44)
- 8 第18号住居跡 (第71图45)
- 9 第18号住居跡 (第71图49)
- 10 第18号住居跡 (第71图50)
- 图版45 1 第18号住居跡 (第71图51)
- 2 第18号住居跡 (第72图61)
- 3 第18号住居跡 (第72图64)
- 4 第18号住居跡 (第72图66)
- 5 第18号住居跡 (第72图69)
- 6 第18号住居跡 (第72图70)
- 7 第18号住居跡 (第72图71)
- 8 第18号住居跡 (第72图72)
- 9 第18号住居跡 (第72图73)
- 10 第18号住居跡 (第72图74)
- 图版46 1 第18号住居跡 (第72图76)
- 2 第18号住居跡 (第73图77)
- 3 第18号住居跡 (第73图78)
- 4 第18号住居跡 (第73图79)
- 5 第18号住居跡 (第73图80)
- 6 第18号住居跡 (第73图87)
- 7 第18号住居跡 (第73图88)

- | | | | | | |
|------|----|-----------------------|------|----|----------------------|
| | 8 | 第18号住居跡 (第73图89) | | 10 | 第21号住居跡 (第84图15) 側面 |
| 图版47 | 1 | 第18号住居跡 (第74图94) | | 11 | 第22号住居跡 (第86图1) |
| | 2 | 第18号住居跡 (第74图101) | 图版51 | 1 | 第22号住居跡 (第86图2) |
| | 3 | 第18号住居跡 (第74图105) | | 2 | 第22号住居跡 (第86图4) |
| | 4 | 第18号住居跡 (第74图107) | | 3 | 第22号住居跡 (第86图5) |
| | 5 | 第18号住居跡 (第74图108) | | 4 | 第22号住居跡 (第86图8) |
| | 6 | 第18号住居跡 (第74图108) 拡大 | | 5 | 第22号住居跡 (第86图9) |
| | 7 | 第18号住居跡 (第75图109) | | 6 | 第22号住居跡 (第86图11) |
| | 8 | 第18号住居跡 (第75图115) (1) | | 7 | 第22号住居跡 (第86图15) |
| 图版48 | 1 | 第18号住居跡 (第75图115) (2) | | 8 | 第23号住居跡 (第87图1) |
| | 2 | 第18号住居跡 (第75图115) (3) | | 9 | 第25号住居跡 (第91图2) |
| | 3 | 第18号住居跡 (第75图115) (4) | 图版52 | 1 | 第25号住居跡 (第91图1) |
| | 4 | 第18号住居跡 (第75图115) (5) | | 2 | 第25号住居跡 (第91图3) |
| | 5 | 第18号住居跡 (第75图115) (6) | | 3 | 第25号住居跡 (第91图6) |
| | 6 | 第18号住居跡 (第75图117) | | 4 | 第25号住居跡 (第91图8) |
| | 7 | 第18号住居跡 (第76图123) | | 5 | 第25号住居跡 (第91图11) |
| 图版49 | 1 | 第18号住居跡 (第76图122) | | 6 | 第25号住居跡 (第91图20) |
| | 2 | 第18号住居跡 (第76图127) | | 7 | 第25号住居跡 (第91图21) |
| | 3 | 第18号住居跡 (第77图135) | | 8 | 第25号住居跡 (第92图24) |
| | 4 | 第18号住居跡 (第77图142) | 图版53 | 1 | 第25号住居跡 (第92图25) |
| | 5 | 第18号住居跡 (第77图143) | | 2 | 第26号住居跡 (第94图5) |
| | 6 | 第18号住居跡 (第77图145) | | 3 | 第26号住居跡 (第94图6) (1) |
| | 7 | 第18号住居跡 (第77图146) | | 4 | 第26号住居跡 (第94图6) (2) |
| | 8 | 第18号住居跡 (第77图149) | | 5 | 第29号住居跡 (第100图3) |
| | 9 | 第18号住居跡 (第77图148) | | 6 | 第30号住居跡 (第103图2) |
| | 10 | 第18号住居跡 (第77图144) | | 7 | 第30号住居跡 (第103图10) |
| | 11 | 第18号住居跡 (第77图150) 表 | | 8 | 第30号住居跡 (第103图11) |
| | 12 | 第18号住居跡 (第77图150) 裏 | 图版54 | 1 | 第30号住居跡 (第103图12) |
| 图版50 | 1 | 第20号住居跡 (第82图3) | | 2 | 第30号住居跡 (第103图13) |
| | 2 | 第20号住居跡 (第82图4) | | 3 | 第30号住居跡 (第103图20) |
| | 3 | 第20号住居跡 (第82图6) | | 4 | 第30号住居跡 (第103图21) |
| | 4 | 第20号住居跡 (第82图7) | | 5 | 第30号住居跡 (第103图28) |
| | 5 | 第21号住居跡 (第84图5) | | 6 | 第30号住居跡 (第103图24) |
| | 6 | 第21号住居跡 (第84图6) | | 7 | 第30号住居跡 (第103图26) |
| | 7 | 第21号住居跡 (第84图7) | | 8 | 第30号住居跡 (第104图34) 拡大 |
| | 8 | 第21号住居跡 (第84图8) | | 9 | 第30号住居跡 (第104图34) |
| | 9 | 第21号住居跡 (第84图15) 上部 | | 10 | 第30号住居跡 (第103图30) |

- | | | | | | |
|------|---|----------------------|------|-------------------|-------------------|
| 图版55 | 1 | 第30号住居跡 (第104图36) | 4 | 第36号住居跡 (第117图6) | |
| | 2 | 第30号住居跡 (第104图38) | 5 | 第36号住居跡 (第117图7) | |
| | 3 | 第30号住居跡 (第104图41) | 图版60 | 1 | 第36号住居跡 (第117图9) |
| | 4 | 第30号住居跡 (第104图42) | 2 | 第36号住居跡 (第117图10) | |
| | 5 | 第30号住居跡 (第104图45) | 3 | 第36号住居跡 (第117图12) | |
| | 6 | 第30号住居跡 (第104图48) | 4 | 第36号住居跡 (第117图11) | |
| | 7 | 第30号住居跡 (第104图48) 扩大 | 5 | 第38号住居跡 (第120图1) | |
| | 8 | 第30号住居跡 (第104图49) | 6 | 第38号住居跡 (第120图2) | |
| 图版56 | 1 | 第30号住居跡 (第105图54) | 7 | 第38号住居跡 (第120图4) | |
| | 2 | 第30号住居跡 (第105图60) | 8 | 第38号住居跡 (第120图6) | |
| | 3 | 第30号住居跡 (第106图65) | 图版61 | 1 | 第38号住居跡 (第120图13) |
| | 4 | 第32号住居跡 (第110图1) | 2 | 第40号住居跡 (第123图1) | |
| | 5 | 第32号住居跡 (第110图2) | 3 | 第42号住居跡 (第127图7) | |
| | 6 | 第32号住居跡 (第110图8) | 4 | 第42号住居跡 (第127图8) | |
| | 7 | 第32号住居跡 (第110图13) | 5 | 第42号住居跡 (第127图6) | |
| | 8 | 第32号住居跡 (第110图18) | 6 | 第42号住居跡 (第127图1) | |
| | 9 | 第32号住居跡 (第110图17) | 7 | 第42号住居跡 (第127图4) | |
| 图版57 | 1 | 第32号住居跡 (第110图19) 扩大 | 8 | 第42号住居跡 (第127图18) | |
| | 2 | 第32号住居跡 (第110图19) | 图版62 | 1 | 第42号住居跡 (第127图14) |
| | 3 | 第32号住居跡 (第110图28) | 2 | 第42号住居跡 (第127图13) | |
| | 4 | 第32号住居跡 (第110图27) | 3 | 第42号住居跡 (第127图16) | |
| | 5 | 第32号住居跡 (第110图26) | 4 | 第42号住居跡 (第127图20) | |
| | 6 | 第33号住居跡 (第112图1) | 5 | 第42号住居跡 (第127图21) | |
| | 7 | 第33号住居跡 (第112图3) | 图版63 | 1 | 第42号住居跡 (第128图22) |
| | 8 | 第33号住居跡 (第112图4) 扩大 | 2 | 第42号住居跡 (第128图23) | |
| | 9 | 第33号住居跡 (第112图4) | 3 | 第42号住居跡 (第128图24) | |
| 图版58 | 1 | 第33号住居跡 (第112图10) | 4 | 第42号住居跡 (第128图26) | |
| | 2 | 第33·43号住居跡 (第113图10) | 图版64 | 1 | 第42号住居跡 (第127图11) |
| | 3 | 第33号住居跡 (第112图22) | 2 | 第42号住居跡 (第127图10) | |
| | 4 | 第33·43号住居跡 (第113图4) | 3 | 第42号住居跡 (第128图28) | |
| | 5 | 第33·43号住居跡 (第113图20) | 4 | 第43号住居跡 (第129图1) | |
| | 6 | 第35号住居跡 (第115图2) | 5 | 第43号住居跡 (第129图5) | |
| | 7 | 第35号住居跡 (第115图4) | 6 | 第45号住居跡 (第132图1) | |
| | 8 | 第36号住居跡 (第117图2) | 7 | 第45号住居跡 (第132图2) | |
| 图版59 | 1 | 第36号住居跡 (第117图4) | 8 | 第46号住居跡 (第135图6) | |
| | 2 | 第36号住居跡 (第117图5) | 图版65 | 1 | 第46号住居跡 (第135图1) |
| | 3 | 第36号住居跡 (第117图8) | 2 | 第46号住居跡 (第135图2) | |

	3	第46号住居跡 (第135図7)		2	第52号住居跡 (第152図6) 底部
	4	第46号住居跡 (第135図16)		3	第52号住居跡 (第152図11)
	5	第46号住居跡 (第135図17)		4	第52号住居跡 (第152図16)
	6	第46号住居跡 (第135図18)		5	第52号住居跡 (第152図7)
図版66	1	第46号住居跡 (第135図12)		6	第52号住居跡 (第152図9)
	2	第46号住居跡 (第135図12) 穿孔拡大 上から		7	第52号住居跡 (第152図10)
	3	第46号住居跡 (第135図12) 穿孔拡大 下から	図版72	1	第52号住居跡 (第153図34)
	4	第46号住居跡 (第136図20)		2	第52号住居跡 (第153図36)
	5	第46号住居跡 (第136図22)		3	第53号住居跡 (第155図1)
	6	第46号住居跡 (第136図26)		4	第53号住居跡 (第155図3)
	7	第46号住居跡 (第136図25)		5	第53号住居跡 (第155図2)
図版67	1	第46号住居跡 (第136図23)		6	第53号住居跡 (第155図8)
	2	第46号住居跡 (第136図24)		7	第55号住居跡 (第158図1)
	3	第46号住居跡 (第137図27)	図版73	1	第55号住居跡 (第158図3)
	4	第46号住居跡 (第137図28)		2	第55号住居跡 (第158図4)
図版68	1	第46号住居跡 (第137図29)		3	第55号住居跡 (第158図6)
	2	第46号住居跡 (第137図30)		4	第55号住居跡 (第158図8)
	3	第46号住居跡 (第138図33)		5	第55号住居跡 (第158図9)
	4	第46号住居跡 (第138図36)	図版74	1	第55号住居跡 (第158図7)
図版69	1	第47号住居跡 (第139図2)		2	第55号住居跡 (第159図11)
	2	第48号住居跡 (第142図5)		3	第55号住居跡 (第158図10)
	3	第48号住居跡 (第142図6)		4	第55号住居跡 (第159図12)
	4	第49号住居跡 (第144図8)	図版75	1	第55号住居跡 (第159図15)
	5	第49号住居跡 (第144図9)		2	第55号住居跡 (第159図16)
	6	第49号住居跡 (第144図16)		3	第55号住居跡 (第159図17)
	7	第50号住居跡 (第147図4)		4	第55号住居跡 (第159図18)
図版70	1	第50号住居跡 (第147図6)		5	第55号住居跡 (第159図19)
	2	第50号住居跡 (第147図1)		6	第55号住居跡 (第160図20)
	3	第50号住居跡 (第147図2)	図版76	1	第55号住居跡 (第160図21)
	4	第52号住居跡 (第152図1)		2	第55号住居跡 (第160図23)
	5	第52号住居跡 (第152図2)		3	第55号住居跡 (第160図24・25)
	6	第52号住居跡 (第152図3)		4	第55号住居跡 (第160図28)
	7	第52号住居跡 (第152図4)		5	第55号住居跡 (第160図22)
	8	第52号住居跡 (第152図5)		6	第55号住居跡 (第160図26)
図版71	1	第52号住居跡 (第152図6)		7	第55号住居跡 (第160図27)

- | | | | | |
|------|----|----------------------|------|--------------------------|
| 图版77 | 1 | 第56号住居跡 (第161图1) | 10 | 第16号掘立柱建物跡 (第197图17) |
| | 2 | 第56号住居跡 (第161图2) | 11 | 第7号井戸跡 (第210图6) |
| | 3 | 第61号住居跡 (第167图3) | 图版81 | 1 第39号土壙 (第202图7) |
| | 4 | 第62号住居跡 (第169图3) | | 2 第39号土壙 (第202图11) |
| | 5 | 第62号住居跡 (第169图4) | | 3 第43号土壙 (第202图22) |
| | 6 | 第62号住居跡 (第169图5) | | 4 第44号土壙 (第203图28) |
| | 7 | 第62号住居跡 (第169图2) | | 5 第1号土器棺墓 (第206图) |
| | 8 | 第62号住居跡 (第169图1) | | 6 第1号土器棺墓 (第206图) 拡大 |
| | 9 | 第62号住居跡 (第169图17) | | 7 第1号土器棺墓 (第207图3) |
| 图版78 | 1 | 第62号住居跡 (第169图18) | | 8 第1号土器棺墓 (第207图3) 拡大 |
| | 2 | 第62号住居跡 (第169图19) | | 9 第1号土器棺墓 (第208图4) |
| | 3 | 第63号住居跡 (第172图1) | | 10 第1号土器棺墓 (第208图4) 拡大 |
| | 4 | 第63号住居跡 (第172图2) | 图版82 | 1 第1号土器棺墓 (第207图1) |
| | 5 | 第63号住居跡 (第172图3) | | 2 第1号土器棺墓 (第207图1) 口縁部拡大 |
| | 6 | 第63号住居跡 (第172图4) | | 3 第1号土器棺墓 (第207图1) 頸部拡大 |
| | 7 | 第63号住居跡 (第172图5) | | 4 第1号土器棺墓 (第207图2) |
| | 8 | 第63号住居跡 (第172图8) | | 5 第1号土器棺墓 (第207图2) 拡大 |
| | 9 | 第63号住居跡 (第172图13) | | 6 第1号土器棺墓 (第208图5) |
| | 10 | 第63号住居跡 (第172图16) | 图版83 | 1 第7号溝跡 (第215图1) |
| 图版79 | 1 | 第63号住居跡 (第172图11) 拡大 | | 2 第7号溝跡 (第215图2) |
| | 2 | 第63号住居跡 (第172图11) | | 3 第7号溝跡 (第215图5) |
| | 3 | 第63号住居跡 (第172图12) 拡大 | | 4 第7号溝跡 (第215图5) 拡大 |
| | 4 | 第63号住居跡 (第172图12) | | 5 第7号溝跡 (第215图6) 外面 |
| | 5 | 第63号住居跡 (第172图23) | | 6 第7号溝跡 (第215图6) 内面 |
| | 6 | 第63号住居跡 (第172图24) | | 7 第7号溝跡 (第215图9) 拡大 |
| | 7 | 第63号住居跡 (第172图25) | | 8 第7号溝跡 (第215图9) |
| | 8 | 第63号住居跡 (第173图29) | 图版84 | 1 第7号溝跡 (第215图17) |
| | 9 | 第63号住居跡 (第173图33) | | 2 第7号溝跡 (第215图28) |
| 图版80 | 1 | 第63号住居跡 (第173图34) | | 3 第7号溝跡 (第215图29) |
| | 2 | 第63号住居跡 (第173图37) | | 4 第7号溝跡 (第215图30) |
| | 3 | 第63号住居跡 (第173图50) | | 5 第7号溝跡 (第216图39) |
| | 4 | 第63号住居跡 (第174图55) | | 6 第7号溝跡 (第216图41) |
| | 5 | 第64号住居跡 (第176图1) | | 7 第7号溝跡 (第216图43) |
| | 6 | 第64号住居跡 (第176图2) | | 8 第7号溝跡 (第216图45) |
| | 7 | 第64号住居跡 (第176图5) | | 9 第7号溝跡 (第216图46) |
| | 8 | 第64号住居跡 (第176图6) | | 10 第7号溝跡 (第216图47) |
| | 9 | 第63号住居跡 (第174图62) | 图版85 | 1 第7号溝跡 (第216图49) |

- | | | | | | |
|------|----|----------------------|------|----|-----------------------|
| | 2 | 第7号沟迹 (第216图50) | | 3 | 第12号沟迹 (第225图26) |
| | 3 | 第7号沟迹 (第216图51) | | 4 | 第12号沟迹 (第225图26) 底部扩大 |
| | 4 | 第7号沟迹 (第216图52) | | 5 | 第12号沟迹 (第225图27) |
| | 5 | 第7号沟迹 (第217图57) | | 6 | 第12号沟迹 (第225图27) 底部扩大 |
| | 6 | 第7号沟迹 (第217图58) | | 7 | 第12号沟迹 (第226图30) |
| | 7 | 第7号沟迹 (第217图59) | | 8 | 第12号沟迹 (第226图29) |
| | 8 | 第7号沟迹 (第217图60) | | 9 | 第12号沟迹 (第226图32) |
| | 9 | 第7号沟迹 (第217图62) | 图版90 | 1 | 第12号沟迹 (第226图33) |
| | 10 | 第7号沟迹 (第217图63) | | 2 | 第12号沟迹 (第226图34) |
| 图版86 | 1 | 第7号沟迹 (第217图64) | | 3 | 第12号沟迹 (第226图36) |
| | 2 | 第7号沟迹 (第217图64) 底部 | | 4 | 第12号沟迹 (第226图37) |
| | 3 | 第7号沟迹 (第217图68) | | 5 | 第12号沟迹 (第226图38) |
| | 4 | 第7号沟迹 (第217图68) 底部 | | 6 | 第12号沟迹 (第226图39) |
| | 5 | 第7号沟迹 (第217图70) | | 7 | 第12号沟迹 (第226图40) |
| | 6 | 第7号沟迹 (第217图71) | | 8 | 第12号沟迹 (第226图41) |
| | 7 | 第7号沟迹 (第217图72) | | 9 | 第12号沟迹 (第226图42) |
| | 8 | 第7号沟迹 (第217图73) | | 10 | 第12号沟迹 (第226图43) |
| | 9 | 第7号沟迹 (第217图74) | 图版91 | 1 | 第12号沟迹 (第226图44) |
| 图版87 | 1 | 第7号沟迹 (第217图75) | | 2 | 第12号沟迹 (第226图45) |
| | 2 | 第7号沟迹 (第217图76) | | 3 | 第12号沟迹 (第226图46) |
| | 3 | 第7号沟迹 (第218图80) | | 4 | 第12号沟迹 (第226图47) |
| | 4 | 第7号沟迹 (第218图83) | | 5 | 第12号沟迹 (第226图48) |
| | 5 | 第7号沟迹 (第220图105) (1) | | 6 | 第12号沟迹 (第227图49) |
| | 6 | 第7号沟迹 (第220图105) (2) | | 7 | 第12号沟迹 (第227图51) |
| | 7 | 第7号沟迹 (第220图108) (1) | | 8 | 第12号沟迹 (第227图51) 底部扩大 |
| | 8 | 第7号沟迹 (第220图108) (2) | | 9 | 第12号沟迹 (第227图52) |
| 图版88 | 1 | 第7号沟迹 (第220图106) | | 10 | 第12号沟迹 (第227图53) |
| | 2 | 第7号沟迹 (第220图107) | 图版92 | 1 | 第12号沟迹 (第227图54) |
| | 3 | 第7号沟迹 (第220图109) | | 2 | 第12号沟迹 (第227图56) |
| | 4 | 第7号沟迹 (第220图110) | | 3 | 第12号沟迹 (第227图58) |
| | 5 | 第7号沟迹 (第220图111) | | 4 | 第12号沟迹 (第227图59) |
| | 6 | 第12号沟迹 (第225图1) | | 5 | 第12号沟迹 (第227图60) |
| | 7 | 第12号沟迹 (第225图11) | | 6 | 第12号沟迹 (第227图57) (1) |
| | 8 | 第12号沟迹 (第225图9) | | 7 | 第12号沟迹 (第227图57) (2) |
| | 9 | 第12号沟迹 (第225图28) | | 8 | 第12号沟迹 (第227图57) (3) |
| 图版89 | 1 | 第12号沟迹 (第225图3) 内面 | | 9 | 第12号沟迹 (第227图61) |
| | 2 | 第12号沟迹 (第225图3) | 图版93 | 1 | 第12号沟迹 (第227图62) |

- | | | | | | |
|------|----|-----------------------|-------|----|----------------------|
| | 2 | 第12号溝跡 (第227図63) | | 3 | 第12号溝跡 (第233図145) |
| | 3 | 第12号溝跡 (第227図64) | | 4 | 第14号溝跡 (第237図8) |
| | 4 | 第12号溝跡 (第227図66) | | 5 | 第14号溝跡 (第237図1) |
| | 5 | 第12号溝跡 (第227図68) | | 6 | 第14号溝跡 (第237図2) |
| | 6 | 第12号溝跡 (第228図70) | | 7 | 第14号溝跡 (第237図4) |
| | 7 | 第12号溝跡 (第228図73) | | 8 | 第14号溝跡 (第237図6) |
| | 8 | 第12号溝跡 (第228図75) | 図版98 | 1 | 第14号溝跡 (第237図7) |
| | 9 | 第12号溝跡 (第228図79) | | 2 | 第14号溝跡 (第237図9) 拡大 |
| | 10 | 第12号溝跡 (第228図81) | | 3 | 第14号溝跡 (第237図9) |
| 図版94 | 1 | 第12号溝跡 (第228図82) | | 4 | 第14号溝跡 (第237図10) |
| | 2 | 第12号溝跡 (第228図84) | | 5 | 第14号溝跡 (第238図25) |
| | 3 | 第12号溝跡 (第229図97) | | 6 | 第14号溝跡 (第238図26) |
| | 4 | 第12号溝跡 (第229図98) | 図版99 | 1 | 第14号溝跡 (第238図24) (1) |
| | 5 | 第12号溝跡 (第229図102) | | 2 | 第14号溝跡 (第238図24) (2) |
| | 6 | 第12号溝跡 (第229図106) | | 3 | 第14号溝跡 (第238図24) (3) |
| | 7 | 第12号溝跡 (第229図113) | | 4 | 第14号溝跡 (第238図24) (4) |
| | 8 | 第12号溝跡 (第230図117) | | 5 | 第15号溝跡 (第240図2) |
| | 9 | 第12号溝跡 (第230図128) | | 6 | 第18号溝跡 (第244図1) |
| 図版95 | 1 | 第12号溝跡 (第231図129) (1) | | 7 | 第18号溝跡 (第244図9) |
| | 2 | 第12号溝跡 (第231図129) (2) | 図版100 | 1 | 第18号溝跡 (第244図14) 外面 |
| | 3 | 第12号溝跡 (第231図130) (1) | | 2 | 第18号溝跡 (第244図14) 内面 |
| | 4 | 第12号溝跡 (第231図130) (2) | | 3 | 第18号溝跡 (第244図18) |
| | 5 | 第12号溝跡 (第232図132) (1) | | 4 | 第18号溝跡 (第244図19) |
| | 6 | 第12号溝跡 (第232図132) (2) | | 5 | 第18号溝跡 (第244図24) |
| | 7 | 第12号溝跡 (第233図136) 表 | | 6 | 第18号溝跡 (第244図32) |
| | 8 | 第12号溝跡 (第233図136) 裏 | | 7 | 第18号溝跡 (第244図34) |
| 図版96 | 1 | 第12号溝跡 (第233図137) 表 | | 8 | 第18号溝跡 (第245図35) |
| | 2 | 第12号溝跡 (第233図137) 裏 | | 9 | 第18号溝跡 (第245図37) |
| | 3 | 第12号溝跡 (第233図137) 拡大 | | 10 | 第18号溝跡 (第245図44) |
| | 4 | 第12号溝跡 (第233図142) (1) | 図版101 | 1 | 第18号溝跡 (第245図39) 拡大 |
| | 5 | 第12号溝跡 (第233図142) (2) | | 2 | 第18号溝跡 (第245図39) |
| | 6 | 第12号溝跡 (第233図143) (1) | | 3 | 第18号溝跡 (第245図41) 拡大 |
| | 7 | 第12号溝跡 (第233図143) (2) | | 4 | 第18号溝跡 (第245図41) |
| | 8 | 第12号溝跡 (第233図138) | | 5 | 第18号溝跡 (第245図46) |
| | 9 | 第12号溝跡 (第233図139) | | 6 | 第18号溝跡 (第245図47) |
| 図版97 | 1 | 第12号溝跡 (第233図140) | | 7 | 第18号溝跡 (第245図48) 内面 |
| | 2 | 第12号溝跡 (第233図144) | | 8 | 第18号溝跡 (第245図48) |

- | | | | | | |
|-------|----|-----------------------|-------|----|----------------------|
| 図版102 | 1 | 第18号溝跡 (第246図62) 表 | 図版106 | 1 | 第29号溝跡 (第259図50) |
| | 2 | 第18号溝跡 (第246図62) 側面 | | 2 | 第29号溝跡 (第259図51) |
| | 3 | 第18号溝跡 (第246図62) 裏 | | 3 | 第29号溝跡 (第259図54) |
| | 4 | 第18号溝跡 (第246図53) | | 4 | 第29号溝跡 (第259図55) |
| | 5 | 第18号溝跡 (第247図70) | | 5 | 第29号溝跡 (第259図56) |
| | 6 | 第18号溝跡 (第247図73) | | 6 | 第29号溝跡 (第259図58) |
| | 7 | 第18号溝跡 (第247図76) | | 7 | 第29号溝跡 (第259図57) (1) |
| | 8 | 第18号溝跡 (第247図80) | | 8 | 第29号溝跡 (第259図57) (2) |
| | 9 | 第18号溝跡 (第247図81) | | 9 | 第45号溝跡 (第266図1) 外面 |
| | 10 | 第18号溝跡 (第247図72) (1) | | 10 | 第45号溝跡 (第266図1) 内面 |
| | 11 | 第18号溝跡 (第247図72) (2) | 図版107 | 1 | 第45号溝跡 (第266図3) (1) |
| 図版103 | 1 | 第29号溝跡 (第257図4) | | 2 | 第45号溝跡 (第266図3) (2) |
| | 2 | 第29号溝跡 (第257図15) | | 3 | 第45号溝跡 (第266図3) 拡大 |
| | 3 | 第29号溝跡 (第257図15) 底部拡大 | | 4 | 第49号溝跡 (第269図5) |
| | 4 | 第29号溝跡 (第257図17) | | 5 | グリッド (第276図1) |
| | 5 | 第29号溝跡 (第257図19) | | 6 | グリッド (第276図4) |
| | 6 | 第29号溝跡 (第257図20) | | 7 | グリッド (第276図2) |
| | 7 | 第29号溝跡 (第257図21) | | 8 | グリッド (第276図3) |
| | 8 | 第29号溝跡 (第257図22) | 図版108 | 1 | グリッド (第276図7) |
| | 9 | 第29号溝跡 (第257図24) | | 2 | グリッド (第276図10) 外面 |
| 図版104 | 1 | 第29号溝跡 (第257図25) | | 3 | グリッド (第276図10) 内面 |
| | 2 | 第29号溝跡 (第258図29) | | 4 | グリッド (第276図14) |
| | 3 | 第29号溝跡 (第258図30) | | 5 | グリッド (第276図19) |
| | 4 | 第29号溝跡 (第258図34) | | 6 | グリッド (第276図21) |
| | 5 | 第29号溝跡 (第258図35) | | 7 | グリッド (第276図22) |
| | 6 | 第29号溝跡 (第258図37) | | 8 | グリッド (第276図24) |
| | 7 | 第29号溝跡 (第258図38) (1) | | 9 | グリッド (第276図25) |
| | 8 | 第29号溝跡 (第258図38) (2) | 図版109 | 1 | グリッド (第277図33) |
| 図版105 | 1 | 第29号溝跡 (第258図41) | | 2 | グリッド (第277図39) |
| | 2 | 第29号溝跡 (第258図42) | | 3 | グリッド (第277図42) |
| | 3 | 第29号溝跡 (第259図43) | | 4 | グリッド (第277図37) |
| | 4 | 第29号溝跡 (第259図45) | | 5 | グリッド (第277図40) |
| | 5 | 第29号溝跡 (第259図44) 上面 | | 6 | グリッド (第279図50) |
| | 6 | 第29号溝跡 (第259図44) 側面 | | 7 | グリッド (第280図58) 表 |
| | 7 | 第29号溝跡 (第259図44) 下面 | | 8 | グリッド (第280図58) 裏 |
| | 8 | 第29号溝跡 (第259図48) | 図版110 | 1 | グリッド (第280図62) 表 |
| | 9 | 第29号溝跡 (第259図49) | | 2 | グリッド (第280図62) 裏 |

3	グリッド (第280図63)		南から
4	グリッド (第280図64)	7	ZW・ZX-14・15グリッド全景
5	グリッド (第280図65)		南から
6	グリッド (第280図59)	8	ZW-19グリッド全景 南から
7	グリッド (第280図60)	図版115	1 第76号住居跡
8	試掘1 (第281図1)	2	第76号住居跡遺物出土状況(1)
9	試掘2 (第281図2)	3	第76号住居跡遺物出土状況(2)
10	遺構不明 (第280図61)	4	第76号住居跡カマド
11	羽口 表	5	第76号住居跡カマド遺物出土状況(1)
12	羽口 裏	6	第76号住居跡カマド遺物出土状況(2)
図版111	1 第14号掘立柱建物跡(第197図10)	7	第76号住居跡カマド支脚検出状況
	2 第14号掘立柱建物跡(第197図11)	8	第76号住居跡貯蔵穴
	3 第14号掘立柱建物跡(第197図12)	図版116	1 第76号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
	4 第14号掘立柱建物跡(第197図13)	2	第78号住居跡
	5 第14号掘立柱建物跡(第197図14)	3	第78号住居跡遺物出土状況
図版112	1 第14号掘立柱建物跡(第197図15) 表	4	第78号住居跡炉跡
	2 第14号掘立柱建物跡(第197図15) 裏	5	第81号住居跡遺物出土状況(1)
	3 第5号井戸跡(第210図4) 表	6	第81号住居跡遺物出土状況(2)
	4 第5号井戸跡(第210図4) 裏	7	第81号住居跡貯蔵穴
図版113	1 第5号井戸跡(第210図4) 拡大	8	第82号住居跡
	2 第2号井戸跡(第210図2)	図版117	1 第83号住居跡
	3 第5号井戸跡(第210図3) 表	2	第83号住居跡遺物出土状況(1)
	4 第5号井戸跡(第210図3) 裏	3	第83号住居跡遺物出土状況(2)
	5 第8号井戸跡(第210図7) 表	4	第83号住居跡カマド
	6 第8号井戸跡(第210図7) 裏	5	第83号住居跡カマド遺物出土状況
		6	第83号住居跡カマド袖部芯材土器
		7	第84号住居跡
		8	第84号住居跡遺物出土状況
城敷遺跡		図版118	1 第84号住居跡カマド
図版114	1 ZS-15~24グリッド全景	2	第84号住居跡貯蔵穴
	西から	3	第84号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
	2 ZT-7~ZX-5グリッド全景	4	第85号住居跡
	北から	5	第85・86号住居跡
	3 ZW-12~20グリッド全景	6	第87号住居跡(1)
	東から	7	第87号住居跡(2)
	4 ZW-12~20グリッド全景	8	第87号住居跡遺物出土状況(1)
	西から(1)	図版119	1 第87号住居跡遺物出土状況(2)
	5 ZW-12~20グリッド全景		
	西から(2)		
	6 ZW~ZY-14・15グリッド全景		

- | | | | | | |
|-------|---|-------------------|-------|---|----------------------|
| | 2 | 第87号住居跡カマド | | 7 | 第95号住居跡遺物出土状況 (3) |
| | 3 | 第88号住居跡 | | 8 | 第96号住居跡 |
| | 4 | 第88号住居跡遺物出土状況 (1) | 図版124 | 1 | 第96号住居跡遺物出土状況 (1) |
| | 5 | 第88号住居跡遺物出土状況 (2) | | 2 | 第96号住居跡遺物出土状況 (2) |
| | 6 | 第88号住居跡遺物出土状況 (3) | | 3 | 第96号住居跡遺物出土状況 (3) |
| | 7 | 第88号住居跡遺物出土状況 (4) | | 4 | 第96号住居跡カマド |
| | 8 | 第88号住居跡遺物出土状況 (5) | | 5 | 第96号住居跡カマド遺物出土状況 (1) |
| 図版120 | 1 | 第88号住居跡遺物出土状況 (6) | | 6 | 第96号住居跡カマド遺物出土状況 (2) |
| | 2 | 第88号住居跡カマド | | 7 | 第97・98号住居跡 |
| | 3 | 第89・90号住居跡 | | 8 | 第97・98号住居跡遺物出土状況 |
| | 4 | 第89・90号住居跡遺物出土状況 | 図版125 | 1 | 第98号住居跡遺物出土状況 (1) |
| | 5 | 第89号住居跡遺物出土状況 | | 2 | 第98号住居跡遺物出土状況 (2) |
| | 6 | 第89号住居跡カマド | | 3 | 第99号住居跡ピット1遺物出土状況 |
| | 7 | 第91号住居跡 | | 4 | 第100号住居跡 |
| | 8 | 第91号住居跡遺物出土状況 | | 5 | 第100号住居跡遺物出土状況 (1) |
| 図版121 | 1 | 第91号住居跡カマド | | 6 | 第100号住居跡遺物出土状況 (2) |
| | 2 | 第91号住居跡カマド遺物出土状況 | | 7 | 第100号住居跡遺物出土状況 (3) |
| | 3 | 第92・93・97・98号住居跡 | | 8 | 第100号住居跡カマド |
| | 4 | 第92号住居跡 | 図版126 | 1 | 第100号住居跡カマド遺物出土状況 |
| | 5 | 第92号住居跡遺物出土状況 (1) | | 2 | 第101・102号住居跡 |
| | 6 | 第92号住居跡遺物出土状況 (2) | | 3 | 第102号住居跡貯蔵穴 |
| | 7 | 第93号住居跡遺物出土状況 (1) | | 4 | 第102号住居跡勾玉出土状況 |
| | 8 | 第93号住居跡遺物出土状況 (2) | | 5 | 第103号住居跡 |
| 図版122 | 1 | 第93号住居跡遺物出土状況 (3) | | 6 | 第104号住居跡 |
| | 2 | 第93号住居跡遺物出土状況 (4) | | 7 | 第105号住居跡 |
| | 3 | 第93号住居跡遺物出土状況 (5) | | 8 | 第105号住居跡遺物出土状況 (1) |
| | 4 | 第93号住居跡カマド | 図版127 | 1 | 第105号住居跡遺物出土状況 (2) |
| | 5 | 第93号住居跡カマド支脚 | | 2 | 第105号住居跡カマド |
| | 6 | 第94号住居跡 | | 3 | 第106号住居跡カマド |
| | 7 | 第94号住居跡遺物出土状況 (1) | | 4 | 第107号住居跡・第38号土壙 |
| | 8 | 第94号住居跡遺物出土状況 (2) | | 5 | 第13号掘立柱建物跡 |
| 図版123 | 1 | 第94号住居跡遺物出土状況 (3) | | 6 | 第14号掘立柱建物跡 |
| | 2 | 第94号住居跡カマド | | 7 | 第15号掘立柱建物跡 |
| | 3 | 第94号住居跡カマド遺物出土状況 | | 8 | 第37号土壙 |
| | 4 | 第95号住居跡 | 図版128 | 1 | 第31号土壙 |
| | 5 | 第95号住居跡遺物出土状況 (1) | | 2 | 第36号土壙 |
| | 6 | 第95号住居跡遺物出土状況 (2) | | 3 | 第33号土壙 |

- | | | | | | |
|-------|---|---------------------|-------|---|---------------------|
| | 4 | 第32号土壙 | | | 椅子脚 |
| | 5 | 第30号土壙 | | 5 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(17) |
| | 6 | 第30号土壙遺物出土状況 | | | 須恵器長頸瓶・建築材 |
| | 7 | 第18号溝跡 | | 6 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(18) |
| | 8 | 第16号溝跡 | | 7 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(19) |
| 図版129 | 1 | 第10号溝跡 北から | | 8 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(20) |
| | 2 | 第10号溝跡 南東から | | | 梯子 |
| | 3 | 第10号溝跡遺物出土状況(木製盤) | 図版133 | 1 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(21) |
| | 4 | 第17号溝跡 | | | 梯子 |
| | 5 | 第24号溝跡 | | 2 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(22) |
| | 6 | 第24・25号溝跡 | | | 梯子 |
| | 7 | 第26号溝跡 | | 3 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(23) |
| | 8 | 第14・15号溝跡 | | | 梯子 |
| 図版130 | 1 | 第12・13号溝跡 | | 4 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(24) |
| | 2 | 第4号溝跡第1地点全景 南から(1) | | | 梯子 |
| | 3 | 第4号溝跡第1地点全景 南から(2) | | 5 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(25) |
| | 4 | 第4号溝跡第1地点全景 東から | | | 梯子 |
| | 5 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(1) | | 6 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(26) |
| | 6 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(2) | | | 梯子 |
| | 7 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(3) | | 7 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(27) |
| | 8 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(4) | | | 梯子 |
| 図版131 | 1 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(5) | | 8 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(28) |
| | 2 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(6) | | | 梯子 |
| | 3 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(7) | 図版134 | 1 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(29) |
| | | 漆原木 | | | 梯子 |
| | 4 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(8) | | 2 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(30) |
| | | 漆原木 | | | 梯子 |
| | 5 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(9) | | 3 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(31) |
| | | 紡織具 | | | 梯子 |
| | 6 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(10) | | 4 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(32) |
| | 7 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(11) | | | 梯子 |
| | 8 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(12) | | 5 | 第4号溝跡第1地点土層断面 |
| 図版132 | 1 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(13) | | 6 | 第4号溝跡第2地点全景 南から |
| | 2 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(14) | | 7 | 第4号溝跡第2地点全景 西から |
| | | 須恵器高坏 | | 8 | 第4号溝跡第2地点全景 東から |
| | 3 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(15) | 図版135 | 1 | 第4号溝跡第2地点昇降施設 |
| | 4 | 第4号溝跡第1地点遺物出土状況(16) | | 2 | 第4号溝跡第2地点遺物出土状況 |

3	第4号溝跡第2地点堰状施設	5	第76号住居跡 (第284図1)
4	第4号溝跡第2地点堰状施設 遺物出土状況	図版139 1	第76号住居跡 (第284図2)
5	第4号溝跡第2地点護岸施設(1)	2	第76号住居跡 (第284図6)
6	第4号溝跡第2地点護岸施設(2)	3	第78号住居跡 (第286図1)
7	第4号溝跡第2地点護岸施設 遺物出土状況(1)	4	第78号住居跡 (第286図3)
8	第4号溝跡第2地点護岸施設 遺物出土状況(2)	5	第78号住居跡 (第286図4)
図版136 1	第4号溝跡第2地点護岸施設 遺物出土状況(3) 木製四脚槽	6	第80号住居跡 (第290図1)
2	第4号溝跡第2地点護岸施設 遺物出土状況(4) 木製輪鍬	7	第80号住居跡 (第290図2)
3	第4号溝跡第2地点杭列(1)	図版140 1	第80号住居跡 (第290図3)
4	第4号溝跡第2地点杭列(2)	2	第80号住居跡 (第290図4)
5	第4号溝跡第2地点杭列(3)	3	第80号住居跡 (第290図5)
6	第4号溝跡第3地点全景 北から	4	第81号住居跡 (第292図2)
7	第4号溝跡第3地点全景 東から	5	第81号住居跡 (第292図6)
8	第4号溝跡第3地点テラス部 遺物出土状況	6	第81号住居跡 (第292図11)
図版137 1	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(1)	7	第81号住居跡 (第292図28)
2	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(2)	8	第81号住居跡 (第292図29)
3	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(3) 木製槽	図版141 1	第81号住居跡 (第292図26)
4	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(4)	2	第81号住居跡 (第292図27)
5	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(5) 須恵器樽形甗	3	第81号住居跡 (第292図30)
6	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(6) 須恵器樽形甗	4	第82号住居跡 (第294図1)
7	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(7) 須恵器樽形甗	5	第83号住居跡 (第296図4)
8	第4号溝跡第3地点遺物出土状況(8) 須恵器樽形甗	6	第83号住居跡 (第296図10)
図版138 1	第76号住居跡 (第284図10)	7	第83号住居跡 (第296図11)
2	第76号住居跡 (第284図13)	図版142 1	第84号住居跡 (第298図1)
3	第76号住居跡 (第284図8)	2	第84号住居跡 (第298図3)
4	第76号住居跡 (第284図9)	3	第84号住居跡 (第298図10)
		4	第84号住居跡 (第298図5)
		5	第84号住居跡 (第298図7)
		図版143 1	第85・86号住居跡 (第300図1)
		2	第85・86号住居跡 (第300図2)
		3	第87号住居跡 (第302図2)
		4	第87号住居跡 (第302図1)
		5	第87号住居跡 (第302図4)
		図版144 1	第87号住居跡 (第302図8)
		2	第88号住居跡 (第304図18)
		3	第88号住居跡 (第304図22)
		4	第88号住居跡 (第304図23)

- 5 第88号住居跡 (第304図24)
- 図版145 1 第88号住居跡 (第304図25)
- 2 第88号住居跡 (第304図1)
- 3 第88号住居跡 (第305図26)
- 4 第88号住居跡 (第305図27)
- 5 第88号住居跡 (第304図20)
- 6 第88号住居跡 (第304図21)
- 7 第89号住居跡 (第307図12)
- 図版146 1 第89号住居跡 (第307図2)
- 2 第89号住居跡 (第307図11)
- 3 第89号住居跡 (第307図10)
- 4 第91号住居跡 (第311図3)
- 5 第91号住居跡 (第311図14)
- 6 第91号住居跡 (第311図2)
- 図版147 1 第91号住居跡 (第311図5)
- 2 第91号住居跡 (第311図15)
- 3 第91号住居跡 (第312図17)
- 4 第91号住居跡 (第311図6)
- 5 第91号住居跡 (第311図16)
- 6 第91号住居跡 (第312図18)
- 図版148 1 第91号住居跡 (第312図19)
- 2 第91号住居跡 (第312図20)
- 3 第91号住居跡 (第312図21)
- 4 第91号住居跡 (第312図22)
- 5 第91号住居跡 (第312図23)
- 6 第91号住居跡 (第312図24)
- 7 第91号住居跡 (第312図25)
- 8 第91号住居跡 (第312図26)
- 9 第91号住居跡 (第312図27)
- 10 第91号住居跡 (第312図28)
- 11 第91号住居跡 (第312図29)
- 12 第91号住居跡 (第312図30)
- 13 第91号住居跡 (第312図31)
- 14 第91号住居跡 (第312図32)
- 15 第91号住居跡 (第312図33)
- 16 第91号住居跡 (第312図34)
- 17 第91号住居跡 (第312図35)
- 18 第91号住居跡 (第312図36)
- 19 第91号住居跡 (第312図37)
- 20 第91号住居跡 (第312図38)
- 21 第91号住居跡 (第312図39)
- 22 第91号住居跡 (第312図40)
- 23 第91号住居跡 (第312図41)
- 24 第91号住居跡 (第312図42)
- 25 第91号住居跡 (第312図43)
- 26 第91号住居跡 (第312図44)
- 27 第91号住居跡 (第312図45)
- 28 第91号住居跡 (第312図46)
- 29 第91号住居跡 (第312図47)
- 30 第91号住居跡 (第312図48)
- 31 第91号住居跡 (第312図49)
- 32 第91号住居跡 (第312図50)
- 33 第91号住居跡 (第312図51)
- 34 第91号住居跡 (第312図52)
- 35 第91号住居跡 (第312図53)
- 36 第91号住居跡 (第312図54)
- 37 第91号住居跡 (第312図55)
- 38 第91号住居跡 (第312図56)
- 39 第91号住居跡 (第312図57)
- 40 第91号住居跡 (第312図58)
- 41 第91号住居跡 (第312図59)
- 42 第91号住居跡 (第312図60)
- 43 第91号住居跡 (第312図61)
- 44 第91号住居跡 (第312図62)
- 45 第91号住居跡 (第312図63)
- 46 第91号住居跡 (第312図64)
- 47 第91号住居跡 (第312図65)
- 48 第91号住居跡 (第312図66)
- 49 第91号住居跡 (第312図67)
- 50 第91号住居跡 (第312図68)
- 51 第91号住居跡 (第312図69)
- 52 第91号住居跡 (第312図70)
- 53 第91号住居跡 (第312図71)
- 54 第91号住居跡 (第312図72)

- 55 第91号住居跡 (第312图73)
- 56 第91号住居跡 (第312图74)
- 57 第91号住居跡 (第312图75)
- 58 第91号住居跡 (第312图76)
- 59 第91号住居跡 (第312图77)
- 60 第91号住居跡 (第312图78)
- 图版149 1 第91号住居跡 (第312图79)
- 2 第91号住居跡 (第312图80)
- 3 第91号住居跡 (第312图81)
- 4 第91号住居跡 (第312图82)
- 5 第92号住居跡 (第309图14)
- 6 第92号住居跡 (第309图15)
- 7 第92号住居跡 (第309图2)
- 8 第93号住居跡 (第314图1)
- 9 第93号住居跡 (第314图3) 内面
- 10 第93号住居跡 (第314图3)
- 11 第93号住居跡 (第314图9)
- 图版150 1 第93号住居跡 (第314图4) 内面
- 2 第93号住居跡 (第314图4)
- 3 第93号住居跡 (第314图8)
- 4 第93号住居跡 (第314图10)
- 5 第93号住居跡 (第314图13)
- 图版151 1 第93号住居跡 (第314图7)
- 2 第93号住居跡 (第314图12)
- 3 第94号住居跡 (第317图1)
- 4 第94号住居跡 (第317图5)
- 5 第94号住居跡 (第317图6)
- 6 第94号住居跡 (第317图10)
- 7 第94号住居跡 (第317图13)
- 图版152 1 第94号住居跡 (第317图14)
- 2 第94号住居跡 (第317图15)
- 3 第94号住居跡 (第317图26)
- 4 第94号住居跡 (第318图31)
- 5 第94号住居跡 (第319图34)
- 6 第94号住居跡 (第319图48)
- 7 第94号住居跡 (第319图49)
- 图版153 1 第94号住居跡 (第318图29)
- 2 第94号住居跡 (第318图30)
- 3 第94号住居跡 (第318图33)
- 4 第95号住居跡 (第321图23)
- 图版154 1 第96号住居跡 (第324图1) 内面
- 2 第96号住居跡 (第324图1)
- 3 第96号住居跡 (第324图3)
- 4 第96号住居跡 (第324图8)
- 5 第96号住居跡 (第324图9) 内面
- 6 第96号住居跡 (第324图9)
- 7 第96号住居跡 (第324图13)
- 图版155 1 第96号住居跡 (第324图10) 内面扩大
- 2 第96号住居跡 (第324图10)
- 3 第96号住居跡 (第324图14)
- 4 第96号住居跡 (第325图19)
- 5 第96号住居跡 (第325图20)
- 6 第96号住居跡 (第325图21)
- 图版156 1 第98号住居跡 (第328图1)
- 2 第98号住居跡 (第328图6)
- 3 第98号住居跡 (第328图8)
- 4 第99号住居跡 (第330图1)
- 5 第99号住居跡 (第330图2)
- 6 第99号住居跡 (第330图5)
- 7 第100号住居跡 (第332图1)
- 8 第100号住居跡 (第332图2)
- 图版157 1 第100号住居跡 (第332图7)
- 2 第100号住居跡 (第332图9)
- 3 第100号住居跡 (第332图10)
- 4 第100号住居跡 (第332图11)
- 5 第100号住居跡 (第332图14)
- 6 第100号住居跡 (第332图18)
- 图版158 1 第100号住居跡 (第332图15)
- 2 第100号住居跡 (第332图17)
- 3 第102号住居跡 (第334图2)
- 4 第102号住居跡 (第334图7)
- 5 第102号住居跡 (第334图10)
- 6 第102号住居跡 (第334图13)
- 图版159 1 第102号住居跡 (第334图3)

- 2 第102号住居跡 (第334図4)
- 3 第102号住居跡 (第334図21)
- 4 第102号住居跡 (第335図23)
- 5 第103号住居跡 (第337図4)
- 6 第103号住居跡 (第337図6)
- 7 第103号住居跡 (第337図13)
- 8 第103号住居跡 (第337図21)
- 図版160 1 第103号住居跡 (第337図16)
- 2 第103号住居跡 (第337図18)
- 3 第103号住居跡 (第337図19)
- 4 第103号住居跡 (第338図24)
- 5 第103号住居跡 (第338図25)
- 6 第103号住居跡 (第338図26)
- 図版161 1 第103号住居跡 (第338図30)
- 2 第103号住居跡 (第338図29)
- 3 第103号住居跡 (第338図28)
- 4 第103号住居跡 (第338図35)
- 5 第104号住居跡 (第340図1)
- 6 第104号住居跡 (第340図14)
- 図版162 1 第105号住居跡 (第342図7)
- 2 第106号住居跡 (第344図2) 内面拡大
- 3 第106号住居跡 (第344図2)
- 4 第106号住居跡 (第344図4)
- 5 第106号住居跡 (第344図5)
- 図版163 1 第106号住居跡 (第344図1)
- 2 第36号土壙 (第353図8)
- 3 第36号土壙 (第353図9)
- 4 第36号土壙 (第353図16)
- 5 第36号土壙 (第353図15)
- 6 第36号土壙 (第353図17)
- 7 第32号土壙 (第354図23)
- 図版164 1 第30号土壙 (第354図25)
- 2 第10号溝跡 (第361図8) 細部
- 3 第10号溝跡 (第361図8)
- 4 第4号溝跡第1地点(第366図9)
- 5 第4号溝跡第1地点(第367図21)
- 図版165 1 第4号溝跡第1地点(第365図2)
- 2 第4号溝跡第1地点(第365図3)
- 3 第4号溝跡第1地点(第365図4)
- 4 第4号溝跡第1地点(第366図14)
- 図版166 1 第4号溝跡第1地点(第365図1)
- 2 第4号溝跡第1地点(第367図23)
- 3 第4号溝跡第1地点(第367図28)
- 4 第4号溝跡第1地点(第366図7)
- 内面
- 5 第4号溝跡第1地点(第366図7)
- 6 第4号溝跡第1地点(第366図8)
- 内面
- 7 第4号溝跡第1地点(第366図8)
- 図版167 1 第4号溝跡第2地点(第378図1)
- 内面拡大
- 2 第4号溝跡第2地点(第378図1)
- 3 第4号溝跡第2地点(第378図2)
- 4 第4号溝跡第2地点(第378図3)
- 5 第4号溝跡第2地点(第378図9)
- 6 第4号溝跡第2地点(第378図10)
- 7 第4号溝跡第2地点(第378図12)
- 8 第4号溝跡第2地点(第378図11)
- 図版168 1 第4号溝跡第2地点(第378図6)
- 2 第4号溝跡第2地点(第379図25)
- 3 第4号溝跡第2地点(第378図8)
- 4 第4号溝跡第2地点(第379図15)
- 5 第4号溝跡第3地点(第395図5)
- 6 第4号溝跡第3地点(第395図6)
- 図版169 1 第4号溝跡第3地点(第395図2)(1)
- 2 第4号溝跡第3地点(第395図2)(2)
- 3 第4号溝跡第3地点(第395図2)(3)
- 4 第4号溝跡第3地点(第395図2)
- 細部(1)
- 5 第4号溝跡第3地点(第395図2)
- 細部(2)
- 6 第4号溝跡第3地点(第395図2)
- 細部(3)
- 図版170 1 第4号溝跡第3地点(第395図3)

- 2 第4号溝跡第3地点(第395図7)
- 3 第4号溝跡第3地点(第395図8)
- 4 第4号溝跡第3地点(第395図9)
- 5 第4号溝跡第3地点(第395図10)
- 6 第4号溝跡第3地点(第395図19)
- 7 第4号溝跡第3地点(第396図22)
- 8 第4号溝跡第3地点(第396図25)
- 9 第4号溝跡第3地点(第396図24)
- 図版171 1 第4号溝跡第3地点(第395図12)
内面
- 2 第4号溝跡第3地点(第395図12)
内面拡大
- 3 第4号溝跡第3地点(第395図12)
- 4 第4号溝跡第3地点(第395図14)
- 5 第4号溝跡第3地点(第395図16)
- 6 第4号溝跡第3地点(第395図17)
- 7 第4号溝跡第3地点(第395図18)
- 図版172 1 第4号溝跡第1地点(第368図36)
- 2 第4号溝跡第1地点(第368図37)
- 3 第4号溝跡第1地点(第368図38)
- 4 第4号溝跡第1地点(第368図39)
- 5 第4号溝跡第1地点(第368図39)
細部
- 図版173 1 第4号溝跡第1地点(第368図40)
- 2 第4号溝跡第1地点(第368図41)
- 3 第4号溝跡第1地点(第369図43)
- 図版174 1 第4号溝跡第1地点(第369図42)
- 2 第4号溝跡第1地点(第369図42)
細部(1)
- 3 第4号溝跡第1地点(第369図42)
細部(2)
- 4 第4号溝跡第1地点(第369図42)
細部(3)
- 5 第4号溝跡第1地点(第369図42)
細部(4)
- 図版175 1 第4号溝跡第1地点(第369図44)
- 2 第4号溝跡第1地点(第370図45)
- 図版176 1 第4号溝跡第1地点(第370図46)
- 2 第4号溝跡第1地点(第373図52)
- 図版177 1 第4号溝跡第1地点(第370図47)
- 2 第4号溝跡第1地点(第370図47)
細部(1)
- 3 第4号溝跡第1地点(第370図47)
細部(2)
- 4 第4号溝跡第1地点(第370図47)
細部(3)
- 5 第4号溝跡第1地点(第370図47)
細部(4)
- 図版178 1 第4号溝跡第1地点(第371図48)
- 2 第4号溝跡第1地点(第371図48)
細部
- 図版179 1 第4号溝跡第1地点(第372図49)
- 2 第4号溝跡第1地点(第372図49)
細部(1)
- 3 第4号溝跡第1地点(第372図49)
細部(2)
- 4 第4号溝跡第1地点(第373図53)
- 図版180 1 第4号溝跡第1地点(第373図51)
- 2 第4号溝跡第1地点(第373図54)
- 3 第4号溝跡第1地点(第373図54)
細部(1)
- 4 第4号溝跡第1地点(第373図54)
細部(2)
- 図版181 1 第4号溝跡第1地点(第372図50)
- 2 第4号溝跡第1地点(第372図50)
細部(1)
- 3 第4号溝跡第1地点(第372図50)
細部(2)
- 4 第4号溝跡第1地点(第372図50)
細部(3)
- 5 第4号溝跡第1地点(第372図50)
細部(4)
- 6 第4号溝跡第1地点(第372図50)
細部(5)

- 7 第4号溝跡第1地点(第372図50)
細部(6)
- 図版182 1 第4号溝跡第2地点(第380図28)
2 第4号溝跡第2地点(第380図28)
細部
3 第4号溝跡第2地点(第380図29)
4 第4号溝跡第2地点(第380図30)
- 図版183 1 第4号溝跡第2地点(第381図31)
2 第4号溝跡第2地点(第381図32)
3 第4号溝跡第2地点(第382図33)
- 図版184 1 第4号溝跡第2地点(第382図34)
2 第4号溝跡第2地点(第382図35)
3 第4号溝跡第2地点(第382図36)
4 第4号溝跡第2地点(第382図39)
5 第4号溝跡第2地点(第382図37)
- 図版185 1 第4号溝跡第2地点(第382図38)
2 第4号溝跡第2地点(第383図40)
3 第4号溝跡第2地点(第383図41)
4 第4号溝跡第2地点(第383図45)
5 第4号溝跡第2地点(第383図42)
- 図版186 1 第4号溝跡第2地点(第383図43)
2 第4号溝跡第2地点(第383図46)
3 第4号溝跡第2地点(第383図44)
4 第4号溝跡第2地点(第384図47)
- 図版187 1 第4号溝跡第2地点(第384図48)
2 第4号溝跡第2地点(第385図54)
3 第4号溝跡第2地点(第384図49)
- 図版188 1 第4号溝跡第2地点(第384図50)
2 第4号溝跡第2地点(第387図58)
3 第4号溝跡第2地点(第385図55)
- 図版189 1 第4号溝跡第2地点(第385図52)
- 図版190 1 第4号溝跡第2地点(第384図51)
2 第4号溝跡第2地点(第384図51)
細部
3 第4号溝跡第2地点(第389図62)
- 図版191 1 第4号溝跡第2地点(第386図56)
2 第4号溝跡第2地点(第386図57)
- 3 第4号溝跡第2地点(第389図64)
- 図版192 1 第4号溝跡第2地点(第385図53)
2 第4号溝跡第2地点(第385図53)
細部
3 第4号溝跡第2地点(第387図59)
4 第4号溝跡第2地点(第387図59)
細部(1)
5 第4号溝跡第2地点(第387図59)
細部(2)
- 図版193 1 第4号溝跡第2地点(第388図60)
2 第4号溝跡第2地点(第388図60)
細部(1)
3 第4号溝跡第2地点(第388図60)
細部(2)
4 第4号溝跡第2地点(第388図61)
- 図版194 1 第4号溝跡第2地点(第389図63)
2 第4号溝跡第2地点(第389図63)
細部
3 第4号溝跡第2地点(第389図65)
4 第4号溝跡第2地点(第389図65)
細部(1)
5 第4号溝跡第2地点(第389図65)
細部(2)
- 図版195 1 第4号溝跡第2地点(第389図66)
2 第4号溝跡第2地点(第389図66)
細部
3 第4号溝跡第2地点(第393図84)
4 第4号溝跡第2地点(第393図84)
細部
- 図版196 1 第4号溝跡第2地点(第390図68)
2 第4号溝跡第2地点(第390図69)
3 第4号溝跡第2地点(第393図82)
4 第4号溝跡第2地点(第393図82)
細部
- 図版197 1 第4号溝跡第2地点(第390図70)
2 第4号溝跡第2地点(第390図71)
3 第4号溝跡第2地点(第390図72)

- | | | | | | |
|-------|---|--------------------|-------|---|--------------------|
| | 4 | 第4号溝跡第2地点(第391図74) | | 2 | 第4号溝跡第2地点(第392図79) |
| 図版198 | 1 | 第4号溝跡第2地点(第391図73) | | | 細部 |
| | 2 | 第4号溝跡第2地点(第393図83) | | 3 | 第4号溝跡第2地点(第393図85) |
| | 3 | 第4号溝跡第2地点(第393図83) | 図版202 | 1 | 第4号溝跡第3地点(第397図29) |
| | | 細部 | | 2 | 第4号溝跡第3地点(第397図30) |
| 図版199 | 1 | 第4号溝跡第2地点(第390図67) | | 3 | 第4号溝跡第3地点(第397図31) |
| | 2 | 第4号溝跡第2地点(第391図75) | | 4 | 第4号溝跡第3地点(第397図31) |
| | 3 | 第4号溝跡第2地点(第392図78) | | | 細部(1) |
| | 4 | 第4号溝跡第2地点(第391図76) | | 5 | 第4号溝跡第3地点(第397図31) |
| 図版200 | 1 | 第4号溝跡第2地点(第392図77) | | | 細部(2) |
| | 2 | 第4号溝跡第2地点(第392図81) | 図版203 | 1 | 第4号溝跡第3地点(第398図33) |
| | 3 | 第4号溝跡第2地点(第392図81) | | 2 | 第4号溝跡第3地点(第398図34) |
| | | 細部(1) | 図版204 | 1 | 第4号溝跡第3地点(第397図32) |
| | 4 | 第4号溝跡第2地点(第392図81) | | 2 | グリッド(第399図12) |
| | | 細部(2) | | 3 | グリッド(第399図2) |
| | 5 | 第4号溝跡第2地点(第392図80) | | 4 | グリッド(第399図6) |
| | 6 | 第4号溝跡第2地点(第392図80) | | 5 | グリッド(第399図16) |
| | | 細部 | | 6 | グリッド(第400図21) |
| 図版201 | 1 | 第4号溝跡第2地点(第392図79) | | | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会（以下県教委）では、都市基盤整備公団埼玉地域支社（当時・以下公団／現独立行政法人都市再生機構・以下都市機構）が東松山市高坂地区で行う高坂駅東口第二地区特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の保護について、平成13年度より協議を重ね、調整を図ってきた。

区画整理事業地内の埋蔵文化財については、公団埼玉地域支社都市整備部長（当時）より、平成13年11月7日付けさ24-24号で「埋蔵文化財の所在及び取り扱い」について照会があった。

当時、この事業予定地では周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていなかったため、県教委では平成13年12月及び平成14年1月に確認調査を実施し、平成14年2月7日付け教文第1459号で、埋蔵文化財の所在と取り扱いについて回答した。

これを基に協議を重ねたが、より厳密な埋蔵文化財の所在状況を把握する必要が出てきたため、平成14年8月と11月に確認調査を追加実施した。その結果は、平成14年11月25日付け教文第1169号で詳細な回答を行った。これらの確認調査によって、事業地内には銭塚遺跡（No.34-369）・城敷遺跡（No.34-370）・反町遺跡（No.34-371）の3遺跡が所在し、工事に先立ち、記録保存の発掘調査を実施すべき遺構が所在していることが確認された。

このため、発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）が実施機関としてあたることとし、事業団、公団、文化財保護課（当時）の三者により調査方法、期間、経費などについて協議し、最終的には、平成15年3月31日付けで「高坂駅東口第二地区埋蔵文化財に関する協定書」を公団埼玉地域支社長（当時）、県教委教育長、事業団理事長の三者で締結した。

その結果、発掘調査が次のとおり実施された。

城敷遺跡：平成15年4月8日～4月30日、8月1日～平成16年3月24日、平成16年4月8日～平成17年3月31日

銭塚遺跡：平成16年4月8日～平成18年3月31日

城敷遺跡は、調査の中で遺跡範囲が北東に拡大することが明らかになった。平成16年9月に確認調査を再度実施し、平成16年11月1日付け教文第1095号で拡大した部分についても事前に記録保存を行う必要がある事を回答した。

なお、協定書については平成17年3月31日付けで変更した。

文化財保護法第57条の3（当時）の規定による埋蔵文化財発掘通知は公団埼玉地域支社長（当時）から平成15年4月1日付けさ24-5号、平成16年3月30日付けさ24-31号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は県教委教育長から平成15年5月14日付け教文第3-71号、平成15年4月19日付け教文第3-14号で行われた。

文化財保護法第57条の1（当時）の規定による発掘調査届については、事業団理事長から地元東松山市教育委員会経由で県教委教育長あて提出された。これに対する県教委としての発掘調査の指示は次の文書で行った。

城敷遺跡

平成15年5月14日付け教文第2-12号

平成15年5月14日付け教文第2-13号

平成16年4月27日付け教文第2-9号

銭塚遺跡

平成16年4月27日付け教文第2-9号

平成17年4月11日付け教文第2-2号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

銭塚・城敷遺跡の発掘調査は、高坂駅東口第二特定土地区画整理事業に先立ち、平成15・16年度に城敷遺跡第1・2次調査、平成16・17年度に銭塚遺跡第2・3次調査を実施した。

後述するように事業地内には両遺跡とともに反町遺跡が所在する。両遺跡を含めた一連の調査として、平成17・18年度に第1・2次調査を実施した(表1)。

城敷遺跡第1次調査

城敷遺跡第1次調査は、平成15年4月8日から平成15年4月30日、平成15年8月1日から平成16年3月24日まで期間を分けて実施した。調査面積は7,000㎡である。

4月の調査では、事務手続きを行い、下旬から表土掘削に一部着手し、重機を使用して遺構確認面まで表土を除去した。

並行して補助員による遺構確認作業後、A区において遺構精査に着手した。

8月からの調査で本格的な調査に入った。当初から重機を使用して遺構確認面までの表土を除去し、基準点測量を行った。

並行して補助員による遺構確認作業後、調査区の中央から遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行い、3月17日に空中写真撮影を実施した。

銭塚遺跡第2次調査・城敷遺跡第2次調査

銭塚遺跡第2次調査は、平成16年4月8日から平成17年3月31日まで、城敷遺跡第2次調査と並行して実施した。銭塚遺跡と城敷遺跡は南北に接した遺跡のため、両者を一体として調査にあたった。調査面積は12,700㎡である。

4月当初から事務手続きを行い、4月下旬から表土掘削に一部着手し、重機を使用して遺構確認面まで表土を除去した。補助員による作業に着手

した。遺構確認作業と並行して、各時期の遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行った。空中写真撮影は、城敷遺跡の南側を8月15日に、銭塚遺跡と城敷遺跡の北側については3月15日に実施した。

遺構の調査終了後、機材及び城敷遺跡西側に設置していた事務所を撤去、事務手続きを行い、調査を終了した。

銭塚遺跡第3次調査

銭塚遺跡第3次調査は、平成17年4月1日から平成18年3月31日まで、反町遺跡第1次調査と並行して実施した。第3次調査の調査区は、第2次調査の調査区の北東側に連続する2,000㎡である。

4月当初から事務手続きを行い、事務所を反町遺跡に移設した。補助員による作業に着手し、各時期の遺構精査を実施した。その後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行った。空中写真撮影は、反町遺跡と合わせて、平成18年3月9日に実施した。

(2) 整理・報告書の作成

銭塚遺跡第2・3次、城敷遺跡第1・2次調査にかかる整理・報告書作成事業は4ヶ年計画で実施しており、本年度と来年度の2期に分けて報告する予定である。本報告に関わる整理事業は、平成19年4月9日から平成20年3月24日、平成20年4月8日から平成21年3月24日、平成21年4月8日から平成22年3月24日までの3ヶ年にわたって実施した。

遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺構から順次、遺物実測を開始した。機械実測(3スペース、オルソイメージャー)を利用して素図を作成し、この素図をもとに実測図を完成させた。実測図は製図ペンで墨入れ(トレース)し、必要に応じて拓影を採った。実測図と拓影図を組み合わせレイ

アウトを行い、遺物図版の版下を作成した。

遺構図は図面整理と修正を経て、第二原図を作成した。第二原図はスキャナでコンピュータに取り組んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレース・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に石膏による復元作業を行い、選択して写真撮影を実施した。並行して

第1表 調査の工程

	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
発掘調査							
城敷 (1次)	■						
(2次)		■					
銭塚 (2次)		■					
(3次)			■				
反町 (1次)			■				
(2次)				■			
報告書作成							銭塚Ⅱ・城敷Ⅰ (第369集)
銭塚・城敷							(本報告)
反町						反町Ⅰ(第361集)	(既報告)

調査時に撮影した写真を選択し、写真図版を作成した。

作成したデータをもとに原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。完了後印刷業者を選定し入稿し、校正を3回行い、平成22年3月下旬に報告書を刊行した。

また、校正と並行して、図面類・写真類・遺物・データ類、委託成果を整理し、報告書との対照を可能にした上で収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成15年度 (発掘調査)

理事長	桐川卓雄	調査部	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員 (調査第二担当)	劔持和夫
主 席	田中由夫	統括調査員	伴瀬宗一
		調査員	池田恵美子

平成16年度 (発掘調査)

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員 (調査第二担当)	劔持和夫
主 席	田中由夫	統括調査員	富田和夫

統括調査員	伴 瀬 宗 一
主任調査員	福 田 聖
調査員	菊 地 真
調査員	松 本 美佐子
調査員	池 田 恵美子

平成17年度（発掘調査）

理事長	福 田 陽 充	調査部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調査部長	今 泉 泰 之
管理部		調査部副部長	坂 野 和 信
管理部副部長	村 田 健 二	主席調査員（調査第二担当）	劔 持 和 夫
主 席	高 橋 義 和	統括調査員	富 田 和 夫
		統括調査員	大 谷 徹
		統括調査員	山 本 靖
		調査員	菊 地 真

平成19年度（報告書作成）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調査部長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整理第二課長	富 田 和 夫
総務課長	松 盛 孝		

平成20年度（報告書作成）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調査部長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整理第二課長	富 田 和 夫
総務課長	松 盛 孝		

平成21年度（報告書作成）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調査部長	小 野 美代子
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整理第二課長	富 田 和 夫
総務課長	田 中 雅 人	主 査	山 本 靖

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

錢塚・城敷遺跡は、埼玉県ほぼ中央、東松山市の南部、大字高坂に所在する。東武東上線高坂駅の東側約2kmに位置し、現在の遺跡周辺は水田と屋敷林に囲まれた住宅地になっている。

埼玉県は、おおまかに秩父山地を中心とする山地とそれに連なる台地・丘陵からなる西部地域、荒川低地を中心とする日本最大の平野である関東平野の多くを占める東部地域に分けられる(第1図)。遺跡は両者の接点に当たる県のほぼ中央に位置し、北側に東松山台地、南側に高坂台地を臨む都幾川右岸の低地に立地する。この低地は県東部の低地に連続している。

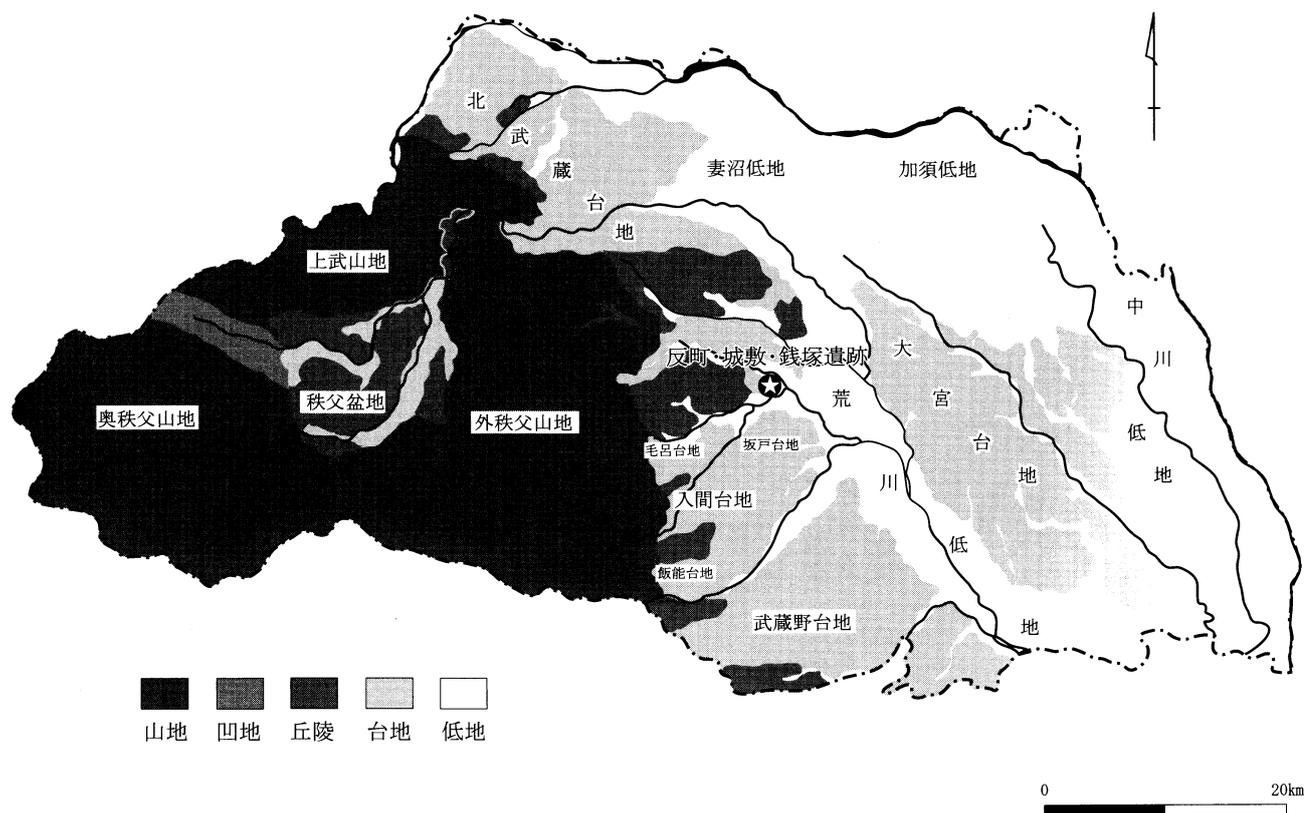
埼玉県では、このような地形上の特性から、西部の山地・丘陵を源流とする河川が発達している。県土の約3分の1を河川とその周辺の低地が占め、流域面積は国内で最大である。大きく、県北部が利根川とその支流の流域、県中部、県南部が

荒川とその支流の流域になり、その流下によって現在の地形は形成されている。

遺跡周辺の地理的環境については、菊地真により詳細に検討されており、それを引用する(菊地2007)。

「埼玉県中央部には半島状に突き出す2つの丘陵があり、北側を比企丘陵、南側を岩殿丘陵と呼ぶ。丘陵は市野川、都幾川、越辺川による開析が進み、谷が発達している。比企丘陵の東側は独立した残丘となり、吉見丘陵とも呼ばれている。この丘陵の間であって、市野川と都幾川に挟まれる台地を東松山台地と呼び、都幾川と越辺川に挟まれた小さな台地を高坂台地と呼ぶ(第2図)。

東松山台地は武蔵嵐山の管生から東松山市根岸まで、東西に伸びる台地である。現在の東松山市街で標高約40m、根岸で約20mを測る。約10～8万年前に形成された武蔵野面(M2面、ステー



第1図 埼玉県の地形

ジ4)に対比され、都幾川などによる扇状地の地形である。北の江南台地などはより早く、約12万年前に形成された(M1面)。

台地上は北側から谷の開析が進むものの、全体としては平坦である。市野川、都幾川の両河川沿いは、断続的に一段低い面が分布する。これは河岸段丘であり、約5万年前の立川期(ステージ3)以降に形成されたと考えられる。

高坂台地は東武線の高坂駅が位置する台地で、岩殿丘陵の東側に続く小規模な台地である。東松山台地と同様、扇状地の台地で、河川の浸食をまぬがれて三角形に残されている。台地上は平坦であり開析されていない。

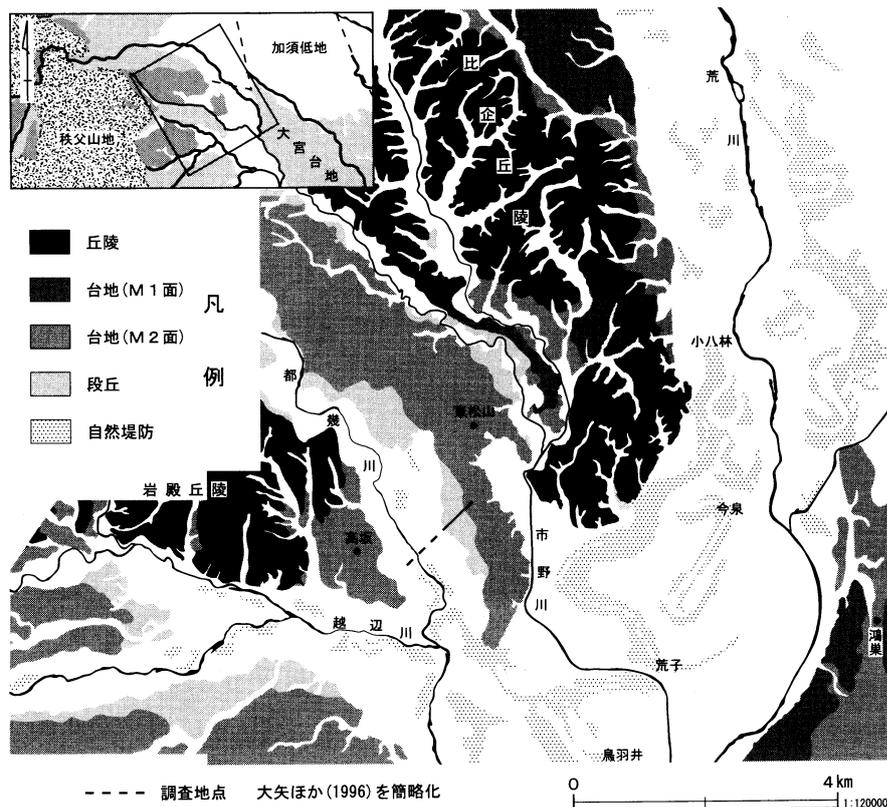
都幾川は東松山市内を流れる代表的な河川の一つであり、滑川、市野川と比べ、下流に広い沖積低地を形成している。都幾川は高坂台地の東側で大きく南へと流れを変え、落合橋で越辺川と合流する。坂戸市と川島町との境界でもある。堤外は現在の氾濫原で旧河道などが認められる。堤内の沖積低地には、集落がのる自然堤防が細長くの

びている。

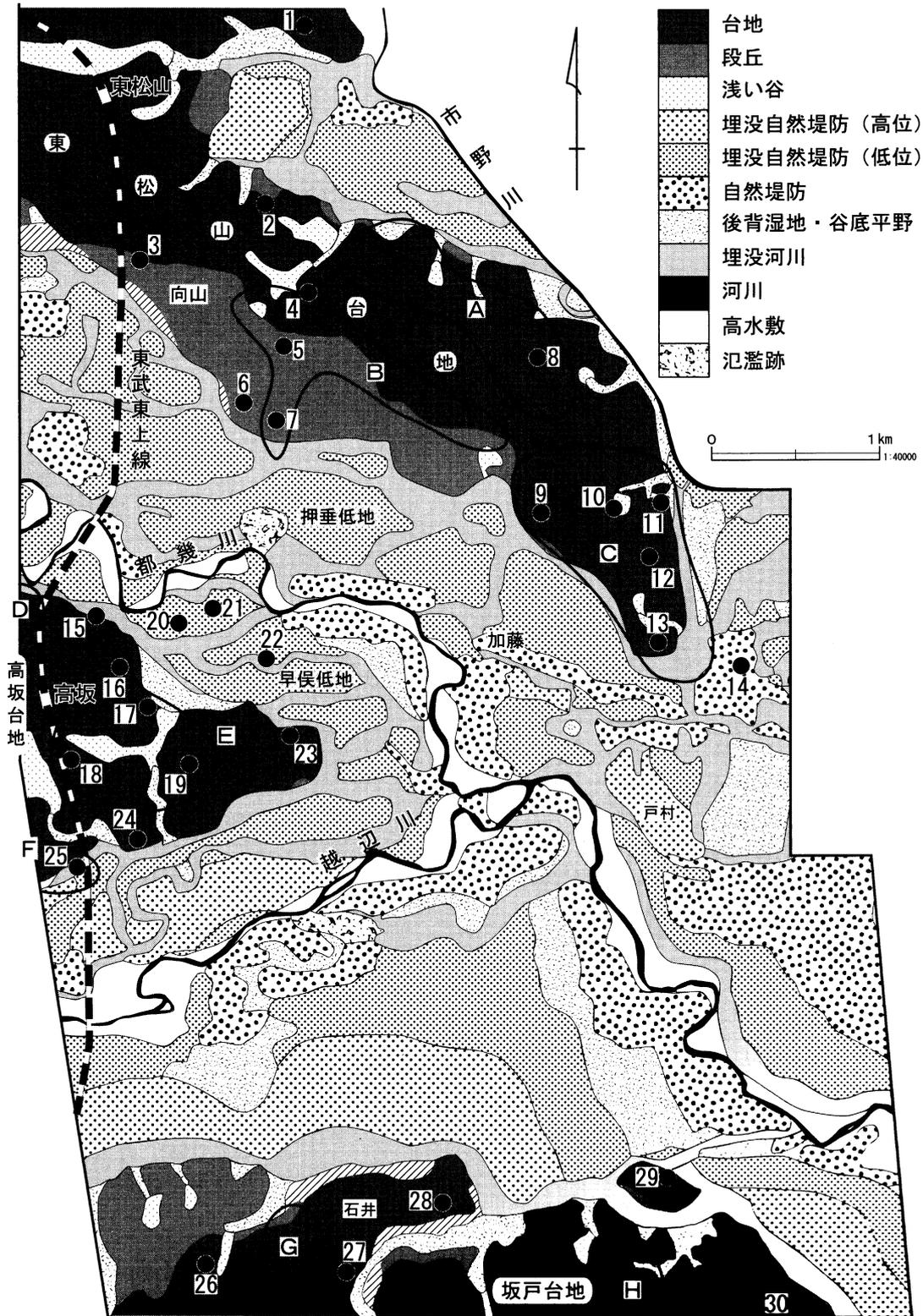
遺跡はこの都幾川の低地に当たる。東松山市唐子橋以东は特に氾濫原が広がっており、都幾川左岸が押垂低地、右岸が早俣低地と仮称されている。菊地氏は米軍撮影空中写真の判読によって、この低地の自然堤防を、自然堤防、沖積面(自然堤防I)、沖積面(自然堤防II)と高低差から3面に区分し、後二者は沖積面下に埋没している過去の自然堤防であるとしている(第3図)。

遺跡の載る自然堤防(沖積面II)は、河床の礫層中から今回報告するローリングを受けた縄文後期の土器片が出土しており、縄文後期から遺構の検出されている弥生時代中期までの時期に陸化した可能性が高い。

また、本事業に伴う反町・城敷・銭塚遺跡の調査では複数の河川跡が検出され複雑な変遷が考えられる。反町遺跡では、各時代の都幾川により異なる水際の景観が広がっていたものと推定される。

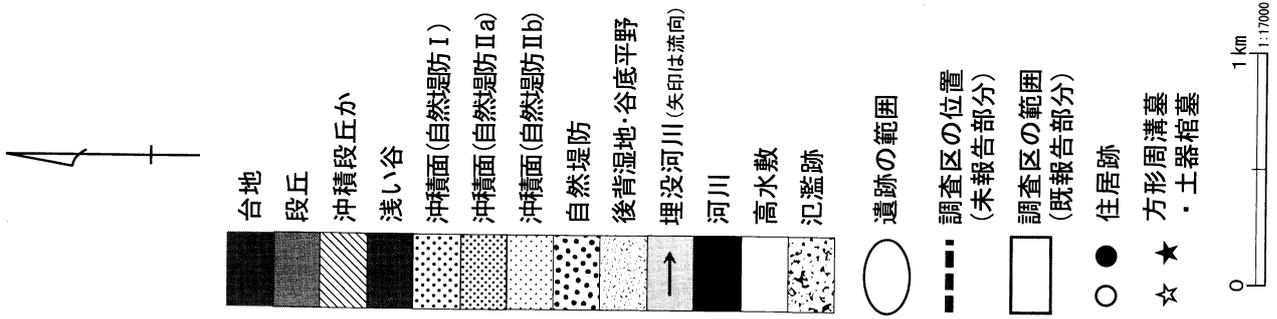
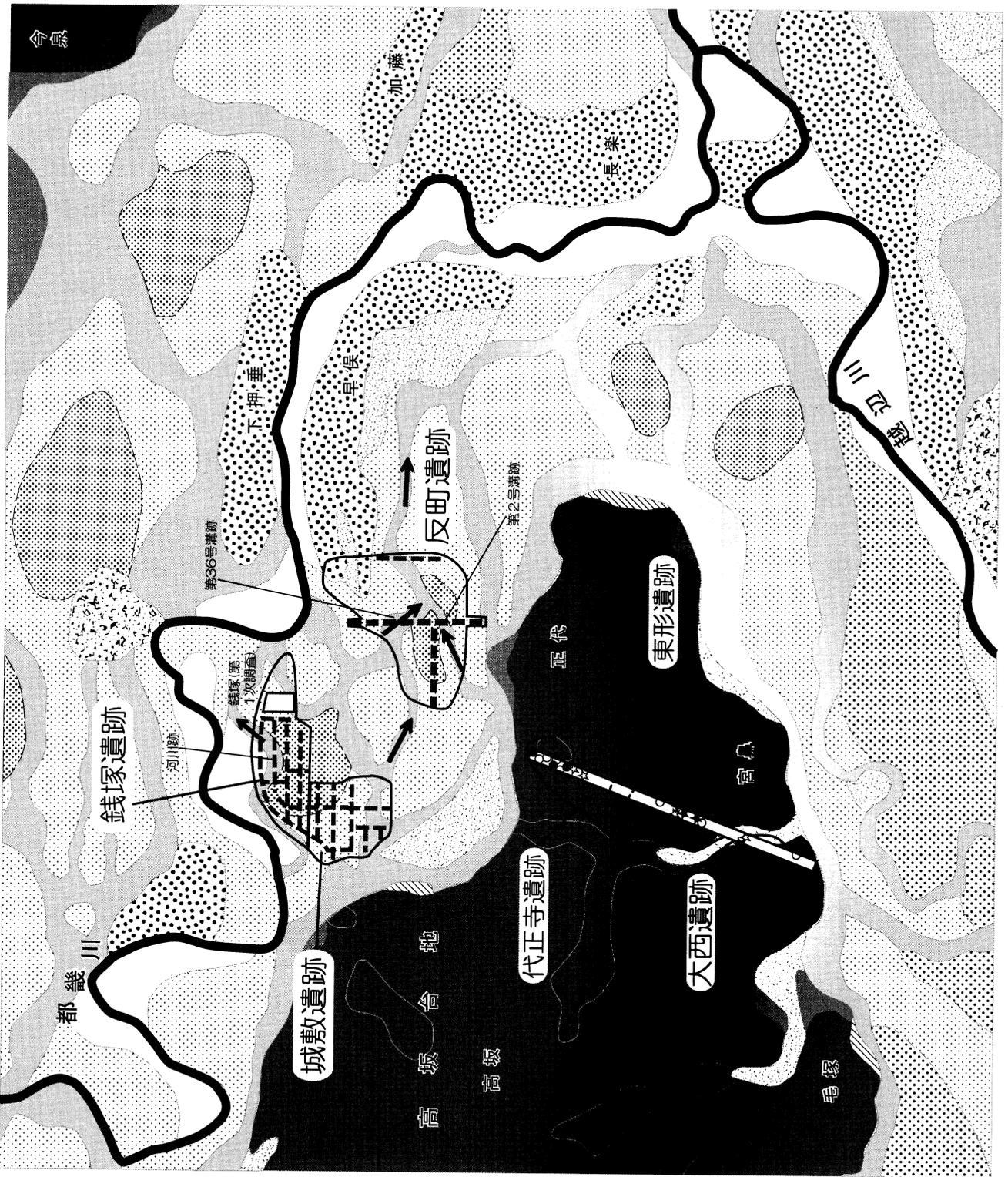


第2図 東松山周辺の地形



- 1 上松本遺跡 2 五領遺跡 3 籠田遺跡 4 山王裏遺跡 5 上川入遺跡 6 西浦遺跡 7 野本將軍塚古墳
 8 番清水遺跡 9 古吉海道遺跡 10 下道添遺跡 11 下山遺跡 12 古凍根岸裏遺跡 13 天神原遺跡
 14 正直稻荷塚遺跡 15 高坂一番町遺跡 16 高坂式番町遺跡 17 高坂参番町遺跡 18 下寺前遺跡
 19 代正寺遺跡 20 城敷遺跡 21 銭塚遺跡 22 反町遺跡 23 東形遺跡 24 大西遺跡 25 杉の木遺跡
 26 勇福寺遺跡 27 柵遺跡 28 勝呂遺跡 29 附島遺跡 30 木曾免遺跡
 A 柏崎古墳群 B 野本古墳群 C 古凍古墳群 D 諏訪山古墳群 E 高坂古墳群 F 桜山古墳群 G 新町古墳群
 H 雷電塚古墳群

第3図 都幾川最下流域の微地形分類図



第4図 早俣低地の微地形と集落

2. 歴史的環境

弥生時代中期後半（第5図）

弥生時代中期では、高坂台地、松山台地、吉見丘陵、坂戸台地に遺跡が展開する。

本遺跡の南側に広がる高坂台地上には、東形遺跡、代正寺遺跡（鈴木1991）、大西遺跡（鈴木1991）が所在する。早俣低地に面する台地北縁の東形遺跡（85）からは、詳細は不明だが竪穴住居跡数軒が検出されている。台地の中央にある代正寺遺跡（13）は、埋没谷を挟んで南北に遺構が展開している。宮ノ台式の竪穴住居跡14軒、方形周溝墓6基が検出されている。代正寺遺跡の南西には、谷を隔てて大西遺跡（14）がある。越辺川の低地に面した南向きの緩斜面に立地し、竪穴住居跡1軒、土器棺墓2基、土坑1基が検出されている。反町遺跡の南側の高坂台地上には、この時期の遺跡が台地全体に展開しているのである。

高坂台地と都幾川を隔てた対岸に当たる松山台地南側の段丘面には、西浦遺跡（4）、野本氏館跡（6）（山本・西井1997、菊地2007）が所在する。西浦遺跡、野本氏館跡は隣接する一体の遺跡である。中期後半の竪穴住居跡2軒、方形周溝墓2基、土坑6基が検出されている。

西浦遺跡、野本氏館跡の両遺跡の2.5km下流の台地南東端には天神原遺跡（24）（埼玉県教育委員会1996）がある。竪穴住居跡1軒、溝跡1条が調査されている。

都幾川兩岸の台地裾を中心に、中期後半の遺跡が展開している様相が窺える。

更に松山台地の東側の吉見丘陵の尾根上には、大行山遺跡（40）（弓1995）がある。東側に広がる市野川の低地が一望できる場所で、竪穴住居跡12軒、方形周溝墓1基が検出されている。未報告のため詳細は不明だが、宮ノ台式を主体とし、中部高地系土器が出土しているとのことである。

高坂台地と越辺川を挟んだ南側に当たる坂戸台地には、台地の北縁の小台地上に新町遺跡（52）

（加藤1988）が、越辺川が東から南に大きく流れを変えた東縁に塚越渡戸遺跡（56）、附島遺跡（57）（加藤1985b・1988）、更に南側に木曾免遺跡（59）（篠田2008）、小沼堀ノ内遺跡（60）（加藤1985a）がある。

新町遺跡からは竪穴住居跡1軒、溝跡1条が、塚越渡戸遺跡からは住居跡3軒が、附島遺跡からは住居跡6軒、溝跡3条が検出されている。塚越渡戸遺跡からは中部高地系土器が出土している。附島遺跡の出土土器は大部分が宮ノ台式である。

木曾免遺跡は、この地域で唯一全体の様相が明らかになっている環濠集落である。断面V字形の環濠に囲まれた大小の竪穴住居跡11軒をはじめとする竪穴住居跡13軒、環濠外には方形周溝墓3基が造られている。宮ノ台式を中心に中部高地系や東海系の土器が出土している。小支谷を挟んだ北側にある小沼堀ノ内遺跡では、土器棺墓1基が調査されている。

弥生時代中期後半は、都幾川流域の台地縁辺部や坂戸台地を中心に多くの遺跡が分布し、さいたま市の芝川流域と並ぶ県内でも有数の弥生時代の中心の一つであったものと思われる。また、宮ノ台式を中心に、中部高地系を客体的に出土する様相が共通しており、地理的な位置関係を反映した地域色となっている。

弥生時代後期前半（第5図）

埼玉県内では遺跡の存在がほとんど知られていないが、反町遺跡の所在する比企地域は櫛描文が施される岩鼻式の遺跡が分布する地域である。

早俣低地では、反町遺跡に隣接する銭塚遺跡（2）（富田2005）から土器棺墓1基が検出され、この時期に反町、銭塚の広い範囲に遺構が分布していたことが分かる。南側の高坂台地では、中期から継続して代正寺・大西遺跡で竪穴住居跡、土器棺墓が検出されている。対岸の松山台地の西浦遺跡・野本氏館跡からは、竪穴住居跡2軒が検出



第5図 弥生時代中期から古墳時代中期の周辺遺跡

1 反町遺跡	23 根岸稻荷神社古墳	45 屋田遺跡	67 鶴ヶ丘遺跡
2 銭塚遺跡	24 天神原遺跡	46 長岡遺跡	68 女堀Ⅰ・Ⅱ遺跡
3 城敷遺跡	25 古凍根岸裏遺跡	47 稻荷前遺跡	69 御伊勢原遺跡
4 西浦遺跡	26 古吉海道遺跡	48 広面遺跡	70 東女堀原遺跡
5 野本將軍古墳	27 下道添遺跡	49 中耕遺跡	71 上組Ⅰ・Ⅱ遺跡
6 野本氏館跡	28 下山遺跡	50 相撲場遺跡	72 霞ヶ関遺跡
7 高坂二番町遺跡	29 番清水遺跡	51 勇福寺遺跡	73 日枝神社遺跡
8 高坂一番町遺跡	30 天神山古墳	52 新町遺跡	74 登戸遺跡
9 諏訪山古墳群	31 籠田遺跡	53 石井前原遺跡	75 天王山古墳群
10 諏訪山29号墳	32 五領遺跡	54 柵遺跡	76 景台遺跡
11 高坂三番町遺跡	33 西吉見糸里遺跡	55 勝呂遺跡	77 高窪遺跡
12 下寺前遺跡	34 三ノ耕地遺跡	56 塚越渡戸遺跡	78 富田後遺跡
13 代正寺遺跡	35 原遺跡第3地点	57 附島遺跡	79 白井沼遺跡
14 大西遺跡	36 山の根古墳	58 北谷遺跡	80 平沼一丁田遺跡
15 杉の木遺跡	37 原遺跡第2地点	59 木曾免遺跡	81 村並遺跡
16 桜山古墳群	38 下遺跡	60 小沼堀ノ内遺跡	82 柳町遺跡
17 駒掘遺跡	39 久米田遺跡	61 堂地遺跡	83 宮ヶ谷戸遺跡
18 根平遺跡	40 大行山遺跡	62 花影遺跡	84 安楽寺遺跡
19 舞台遺跡	41 観音寺遺跡	63 宮裏遺跡	85 東形遺跡
20 附川遺跡	42 八幡遺跡	64 一天狗遺跡	86 小代氏館跡
21 雉子山遺跡	43 岩鼻遺跡	65 御折山田遺跡	
22 正直玉作遺跡	44 大谷古墳群	66 鶴ヶ丘遺跡	

されている。

都幾川を北西に遡った自然堤防上には雉子山遺跡(21)(栗原ほか1973)があり、竪穴住居跡2軒が調査されている。その南側1kmの河岸段丘上にある附川遺跡(20)(今泉・横川ほか1974)から、遺構は検出されていないが、壺や甕がまとめて出土している。

都幾川を中心とする遺跡の分布は、兩岸の沿辺部が主体となり、概ね中期から継続しているといえよう。

松山台地には、北東側の市野川の低地を臨む台地縁辺に観音寺遺跡(41)(宮島・江原1989、渡辺・宮島1996)が、市野川と滑川によって分断された狭長な岩鼻台地上に岩鼻遺跡(43)(江原1993)、八幡遺跡(42)(渡辺・宮島1988)がある。観音寺遺跡からは、岩鼻式の遺構は検出されていないが、土器片が出土している。岩鼻遺跡は「岩鼻式」の標識遺跡で、これまでに11次に渡り14軒の竪穴住居跡、2基の土器棺墓が検出されている。八幡遺跡からは土器棺墓が1基検出されている。

遺跡の分布は希薄だが、岩鼻遺跡のような中核

的集落の存在は松山台地における新たな遺跡の展開を窺わせるものである。

坂戸台地には、台地の北縁に当たる小台地上に新町遺跡を取り囲むように、柵遺跡(54)(加藤2001)、石井前原遺跡(53)(加藤・北堀・柳楽1988)、勇福寺遺跡(51)、相撲場遺跡(50)(谷井1973)が立地する。

柵遺跡は坂戸台地を開析して北流する谷内川の右岸に当たり、同じく坂戸台地を開析して北流する飯盛川に通ずる小支谷に面している。一辺10mを超える大型のものを含む竪穴住居跡2軒、方形周溝墓4基、土器棺墓4基が検出され、北側が集落、南側が墓域と考えられている。

石井前原遺跡からは長径7.7mの大型の竪穴住居跡1軒が検出されている。

相撲場遺跡からは竪穴住居跡3軒が検出されている。坂戸台地の遺跡は、越辺川の支流に当る小河川の縁辺に立地しているのが特徴的である。谷水田との関係を窺わせるものである。

また柵遺跡で見られるような方形周溝墓と土器棺墓との並設される様相は、弥生時代後期前半の、妻沼低地や千葉県等でもみられるもので、共

通した様相を示している。時期的な特徴ともいえるであろう。

弥生時代後期後半（第5図）

早俣低地や東松山市域は比企地域を中心に分布する吉ヶ谷式が展開する地域である。

早俣低地では、反町遺跡にこの時期の遺構はなく、城敷遺跡とともに吉ヶ谷系の土器が出土しているが、弥生時代の吉ヶ谷式とは異なるようである。

一方南側の高坂台地では、中期から継続する大西遺跡で竪穴住居跡8軒、土壙1基が検出され、代正寺遺跡から集落域が移ったものと考えられている。対岸の松山台地の西浦遺跡・野本氏館跡からは、竪穴住居跡2軒が検出されている。この両遺跡は中期から継続し、早俣低地で遺構が検出されない吉ヶ谷式期にも継続しており注目される。同じく都幾川を臨む支谷に面して籠田遺跡（31）（村田1982）がある。住居跡1軒が調査されている。

また、この時期はこうした継続型の集落のみではなく、新たに台地のより奥に展開する遺跡がみられる。特に比企丘陵の物見山丘陵の東縁から高坂台地には集中した分布が見られる。根平遺跡（18）（水村・井上ほか1980）からは竪穴住居跡6軒が、駒堀遺跡（17）からは竪穴住居跡14軒、方形周溝墓1基（谷井・今泉・野部1974）が、舞台遺跡（19）（水村・井上ほか1978・1979）からは住居跡1軒、杉の木遺跡（15）（小峰1963、宮島・江原2003、大谷・宅間2006）では竪穴住居跡16軒、炉跡2箇所、土壙3基、溝1条が検出されている。駒堀遺跡の住居跡は大型のものが多い。未報告のため詳細は不明だが、高坂二番町（7）・高坂三番町遺跡（11）（柿沼・佐藤・宮島2008）からは数十軒の住居跡や環濠の可能性が高い溝跡が検出されている。

松山台地では、未報告部分が多いため詳細は不明だが、後期前半から継続する観音寺遺跡（宮島1995・1996）で竪穴住居跡8軒以上、方形周溝墓

5基以上が検出されている。特に第4号方形周溝墓は20m程度の規模があり、中心埋葬施設が検出され、銅釧と鉄剣が出土しており注目される。また五領遺跡（32）では遺構は不明だが、吉ヶ谷式の新しい段階の資料が出土している。下道添遺跡（27）からは住居跡が検出されているが、どちらかといえば古墳時代に下がる可能性が高い。

東松山台地北側の比企丘陵の南側、滑川左岸の谷津沿いには吉ヶ谷式の標識遺跡である吉ヶ谷遺跡（金井塚1965）があり、住居跡2軒が調査されている。その西側には、詳細は不明だが、住居跡14軒、方形周溝墓6基が調査された新井遺跡（木村1986）がある。吉ヶ谷式としては、駒堀、高坂二番町・三番町遺跡と並ぶ大規模集落といえよう。

坂戸台地北側のこの時期の集落は前段階から継続するものが多い。附島遺跡では住居跡2軒が検出されている。

更に高麗川を遡った箇所にも遺跡が造られる。鶴ヶ丘遺跡（66）では住居跡3軒、一天狗遺跡（64）（斉藤1994）では2軒の住居跡から、吉ヶ谷式と岩鼻式の土器が出土しているが、古墳時代前期の土器が混在しており、住居跡の時期については評価が分かれているようである。その対岸に当たる高麗川と小畔川によって挟まれた台地上の高麗川を臨む北西縁に花影遺跡（62）（谷井1974）が立地する。方形周溝墓8基が検出され、現在のところ吉ヶ谷式の方形周溝墓群の全容を知ることができる唯一の例になっている。

またその南の飯能台地には、霞ヶ関（72）、女堀（68）、上組（71）の各遺跡から吉ヶ谷式の土器が主体的に出土しており、分布域の南限になっている。吉ヶ谷式の集落はあまり大規模なものはみられず、単発的なものが多い。そうした中で物見山丘陵や滑川左岸の台地上に分布が集中する様相はこの時期の遺跡の谷地との関係を示すものである。時期的な特徴を示すものといえよう。

古墳時代前期（第5図）

比企地域では、吉ヶ谷式と型式的な連続関係をもたない五領式土器が展開する。弥生時代に比べて遺跡数が急激に増加することが知られている。早俣低地でも本遺跡と城敷遺跡で広い範囲で遺構が分布することが知られている。

南側の高坂台地では、吉ヶ谷式の資料がほとんど見られなかった代正寺遺跡に再び集落、墓域が営まれる。

弥生時代中期から継続する大西遺跡で竪穴住居跡2軒、土壙1基が検出され、大西遺跡の南側に程近い下寺前遺跡からは住居跡25軒、方形周溝墓1基が検出されている。また未報告であるが小代氏館跡（86）からは方形周溝墓6基が検出されているという。対岸の松山台地の西浦遺跡・野本氏館跡からは、竪穴住居跡2軒が検出されている。大西、西浦の両遺跡は前述のように、弥生時代中期から古墳時代前期まで継続しており、長期継続型の集落として注目される。吉ヶ谷式から継続する竈田遺跡からは住居跡8軒が検出されている。更に西側の都幾川を臨む附川遺跡からは住居跡6軒が検出されている。

吉ヶ谷式の集中した分布が見られた物見山丘陵から高坂台地にかけては遺跡の分布が異なっている。根平遺跡の資料は一部に五領式土器が含まれており、住居跡の平面形も吉ヶ谷式に特徴的な長方形のものではなく隅丸方形であることから、この時期まで下がる可能性もある。駒堀遺跡からは竪穴住居跡3軒（谷井・今泉・野部1974）が、桜山古墳群（16）（小久保・利根川1981）で住居跡4軒が検出されている。未報告のため詳細は不明だが、高坂三番町遺跡からは搬入品の器高1mを越える大廓式の完形壺を用いた土器棺墓が検出されている。関東地方では完形の大廓式土器の壺の出土は知られておらず、貴重な例である。

松山台地の遺跡の分布はあまり濃密とはいえないが、関東地方の古墳時代前期の標識遺跡であ

る五領遺跡（大塚1963・1964・1965・1967、金井塚1963・1965）や布留式系の土器群が出土している下道添遺跡（坂野1987）などの注目される遺跡が展開している。五領遺跡は100軒以上の軒数からなる大遺跡だが、未報告であるため詳細は不明である。標識遺跡であるとともに、古くから畿内系、東海系、山陰系の土器が出土したことで知られている。市ノ川と都幾川に挟まれた形で松山台地が南東に延びる先端近くには古凍根岸裏遺跡（25）、下道添遺跡が立地する。古凍根岸裏遺跡（村田1984）からは住居4軒、方形周溝墓7基が検出されている。古凍根岸裏と一体になると考えられる下道添遺跡からは住居跡19軒、方形周溝墓13基が検出されている。住居跡群が先行し、周溝墓群は同じ箇所にてそれを壊して造られている。2号墓は検出された範囲で145mの規模を測る大型のもので、報告書では方台部の規模が20mを超える前方後方形と推定されている。吉ヶ谷式系統の土器をはじめ東海西部系、畿内系とされる土器群が出土している。観音寺遺跡からは竪穴住居跡3軒が、岩鼻遺跡からは住居跡7軒が検出されている（東松山市1981）。両遺跡とも後期から継続するものである。

市野川に面した台地の東側には番清水遺跡（29）が立地する。住居跡23軒が検出されている。住居跡にはこの時期のものとしてはきわめて大きな一辺13.9mにも及ぶものがある。

以上のように、五領式の松山台地上の遺跡は注目されるものが多く、こうした様相が後述するような多くの古墳を析出する背景になっているものと思われる。

吉ヶ谷式の集落が多く認められた比企丘陵の北部は遺跡の分布が希薄で、熊谷市（旧江南町）の塩古墳群を中心とする地域に集中した分布が認められるのみである。

このように五領遺跡、古凍根岸裏・下道添遺跡のような大規模な集落も存在するが、その他の集

落は単発的で少数の住居から構成される場合が多く、吉ヶ谷式における台地・丘陵上の様相とは異なるようである。

逆に関東地方全体でいえることだが、この時期にはこれまで遺跡のなかった場所に数多くの遺跡が展開するようになる。この丘陵の東側、市野川の自然堤防上には原遺跡(35)、下遺跡(38)(太田2004)、西吉見条里遺跡(33)(太田2005)、三ノ耕地遺跡(34)(弓1997・太田1998)といった集落遺跡が知られている。特に原遺跡からは未報告のため詳細は不明だが豪族居館の区画溝と考えられる大溝が検出されているという。下遺跡からは周溝が1基検出されている。西吉見条里遺跡からは、多量の木製品が出土する溝が検出されている。三ノ耕地遺跡は後述する墳墓群としてよく知られているが、墳墓構築以前は集落であったことが明らかになっており、住居跡13軒が検出されている。丘陵上の大行山遺跡(弓1995)からは竪穴住居跡16軒が検出されている。

その南側、松山台地の南東に当たる川島町域の荒川低地にもこの段階から遺跡が多く認められるようになる。安楽寺(84)、宮ヶ谷戸(83)、柳町(82)、村並(81)、尾崎(津田ほか2002)、元宿(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2006・2007)、富田後(78)(福田2006)、白井沼(79)(中山2005・栗岡2007)、平沼一丁田(80)(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2007)、堂地(61)(若松ほか2000)の各遺跡が荒川の縄文時代以来の度重なる乱流により形成された自然堤防上に立地している。このうち本格的な発掘調査が実施されたのは、尾崎遺跡と首都圏連絡中央自動車道路関係で調査された元宿、富田後、白井沼、平沼一丁田、堂地の各遺跡である。また、これらの遺跡からは周溝遺構が検出される場合が多い。この遺構は最近の研究では、建物跡の外側に巡らされた周溝と考えられている。早俣低地では現在のところ一例の検出例もなく、対照的である。

町教育委員会で調査した尾崎遺跡からは周溝5基が検出されている。

圏央道関係の遺跡で報告書が刊行されているものは、白井沼、堂地遺跡である。白井沼遺跡からは竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、周溝9基、井戸跡6基、溝66条、谷1箇所が、堂地遺跡からは井戸跡1基が検出されている。白井沼遺跡からは搬入品の大廓式土器や県内で2例目となる鶏形土製品が出土している。

元宿、富田後、平沼一丁田の各遺跡はいずれも未報告である。元宿遺跡からは周溝10基、方形周溝墓6基、溝7条が検出されている。その西側の埋没河川を隔てた対岸に当たる富田後遺跡からは周溝遺構105基、掘立柱建物跡5棟、方形周溝墓7基、井戸跡27基、溝25条、土壇14基が検出されている。荒川低地でも屈指の周溝群で、相当大規模な集落と考えられる。

やや離れた平沼一丁田遺跡からは、周溝遺構3基、掘立柱建物跡5棟、溝2条、土壇5基が検出されている。県内では初例となる布堀をもつ掘立柱建物跡が1棟確認されている。

以上のように川島町域に当たる低地には大規模な遺跡が展開しており、反町遺跡の都幾川・越辺川の下流域に当たることから両者の関係が問題となるであろう。

これらの周溝が検出される遺跡とは別に、注目されるものとして、正直玉作遺跡(22)(石岡1980)が挙げられる。遺跡は農業用水管の敷設時に発見され、当初模倣坏が出土していること、県内で前期の玉作遺跡の例が知られていなかったことから後期のものと考えられてきた。しかし、腕輪形石製品の未製品が存在することや、反町遺跡、桶川市前原遺跡でも玉作工房の存在が明らかになったことから前期のものとする評価が定まりつつある。本遺跡における玉作りとの関係や至近に立地する根岸稻荷神社古墳との密接な関係が考えられる。

坂戸台地北側では方形周溝墓が検出されてい

るものが多い。木曾免遺跡では164×142mの大型の周溝墓1基が、小谷を隔てた西側の北谷遺跡(58)(黒坂2008)でもほぼ同規模の周溝墓が検出されている。附島遺跡で周溝墓2基、勇福寺遺跡で周溝墓5基、景台遺跡(76)で周溝墓1基が検出されている。篠田が指摘するようにこれらの周溝墓は台地の縁辺部に造られているものがほとんどである。逆に大規模な集落は知られておらず、附島遺跡で住居跡6軒、高窪遺跡(77)で住居跡8軒、石井前原遺跡で大小の住居跡5軒が検出されているにとどまっている。

高麗川右岸の花影遺跡に隣接して、墓域と集落域の双方が調査されている宮裏遺跡(63)(澤口2008)がある。住居跡50軒以上、方形周溝墓40基以上が検出され、やはり台地の縁辺に方形周溝墓群が展開している。方形周溝墓には大小があり、大型の24号周溝墓の中心埋葬施設からは碧玉製の管玉と勾玉、水晶の棗玉が出土している。水晶の棗玉は前期の例としては県内で唯一のものである。また勾玉も方形周溝墓から出土しているものとしてはさいたま市井沼方遺跡、熊谷市一本木前遺跡の例が知られるのみである。反町遺跡の玉作りを考える上で興味深い資料である。

高麗川左岸の毛呂山台地の北側、越辺川を北に臨む自然堤防上には入西遺跡群が広がる。五領式の集落は中耕遺跡(49)(杉崎1993)で知られるのみである。住居跡73軒、掘立柱建物跡6棟が検出され、吉ヶ谷系の土器が出土している。その集落を壊して方形周溝墓群が造られている。この墓域は南西側の広面遺跡(48)(村田1990)の方形周溝墓群と一体のものと考えられ、中耕遺跡で68基、広面遺跡で22基が検出されている。また西約400mに位置する稲荷前遺跡(47)(富田1992・1994)からも周溝墓36基が検出されている。これらの周溝墓は平面形態が四隅切れから全周、一隅切や一辺の中央が切れる形態へと変遷することが明らかになっており、集落出土土器からも窺える

吉ヶ谷系の集団が変質していく様相を示している。特に広面SZ9や中耕SR41・42は方台部に盛土が遺存し、古墳同様の版築状の工程が明らかになっていることから、古墳との関係も問題になる。いずれも残念ながら埋葬施設は検出されていない。

子畔川を挟んだ飯能台地には、日枝神社遺跡(73)、鶴ヶ丘(67)、霞ヶ関、女堀、上組の各遺跡から古墳時代前期の集落跡が検出されている。

出現期古墳(第5図)

反町遺跡が位置する東松山市周辺は出現期古墳が多く分布することでも知られている。

諏訪山29号墳(10)(坂本・金子1986)は4世紀から7世紀にかけて展開する諏訪山古墳群の1基である。高坂台地の縁辺に立地し早俣低地を臨む位置にある。墳長53m、後方部長29m、後方部高3.6m、前方部高1.6mの前方後方墳であることが知られている。焼成前穿孔壺や大廓式土器が出土している。反町遺跡の玉作り工房や集落とほぼ同時期と考えられ、両者の関係が問題となる。

古墳群中の墳長68mの前方後円墳、諏訪山古墳は後続する古墳である可能性があり、中期の33号墳と合わせて系譜関係が窺えるものである。

天神山古墳(30)(金井塚1968・埼玉県教育委員会1994)は番清水遺跡の西側に位置し、前方後円墳であるおくま山古墳をはじめとする柏崎古墳群の1基である。従来前方後円墳だと考えられていたが、詳細分布調査により4世紀後半の前方後方墳であることが明らかになった。墳丘の東側は削られて住宅が建てられているが調査の結果全長57m、周堀幅5m以上になると推定されている。周堀から赤彩された大型の複合口縁壺が出土し、昭和初期の土取りの際に石室が発見され、玉と彷彿内行花文鏡が出土している。

根岸稲荷神社古墳(23)(埼玉県教育委員会1994)は舌状の松山台地の南端、東側の広大な荒川低地を臨む箇所に立地している。眼下の低地には正直玉作遺跡があり、両者の密接な関係が窺え

る。現在この台地は新しく掘削された新江川により独立した景観になっているが、本来は松山台地と一体のものであり北西側に展開する古凍古墳群の1基として位置づけられるものである。北西側には古凍根岸裏、下道添遺跡がある。方墳状であるが、詳細分布調査により小型の前方後方墳であることが明らかになった。墳長25m、周堀幅5m以上になると推定されている。周堀から吉ヶ谷系の完形の焼成後底部穿孔壺、五領式の複合口縁壺、焼成後穿孔の壺底部、鉢等が出土しており、4世紀前半の築造と考えられる。

山の根古墳(36)(埼玉県教育委員会1994)は吉見丘陵から派生する尾根上に立地し、その地形を生かして墳丘が造られている前方後方墳である。眼下には市野川の低地が広がり、三ノ耕地遺跡等を見下ろす位置にある。円墳1基、方墳1基とともに古墳群を形成し、その主墳となる。墳丘長548mで前方部の高さ1.9m、後方部の高さ3mである。周堀は巡らされておらず、裾をテラス状の平坦面として削り出している。出土遺物はくびれ部に集中しており、五領式の複合口縁壺、壺、甕、鉢、高坏が出土している。

このように、遺跡周辺の台地、丘陵上には前方後方墳の分布が多く、それらは流域の低地を睥睨するような立地にある。一方、低地部にも三ノ耕地遺跡や中耕・広面遺跡に前方後方形の墳墓が認められる。この違いは何によるものかが問題である。

野本將軍塚古墳は、墳長115m、後円部高13m、前方部高13mの前方後円墳である。築造年代については、4世紀代(甘粕1976)、5世紀後半から6世紀初頭(金井塚1979)、5世紀中葉から後葉(坂本1990)の3つの考えがあるが、いずれも確証は得られていない。仮に4世紀台のものであるとすれば、本遺跡の集落や玉作り工房との関係、特に玉作りという特殊な製品の生産の評価が問題に

なると考えられる。

古墳時代中期(第5図)

城敷・銭塚遺跡では、古墳時代前期終末段階に衰退した集落が、古墳時代中期後半期から再び形成され始める。城敷遺跡では5世紀末～6世紀前半を中心に集落が営まれ、6世紀後半に再び集落が衰退する。これと連動し、銭塚遺跡では7世紀頃から集落が形成される。このような集落動向と連動し、古墳時代前期まで隆盛を極めた反町遺跡の集落は、竪穴住居跡4軒・土壇5基が発見された、城敷遺跡の衛星的な集落となる。

城敷・銭塚遺跡の近隣には、この時期の大規模集落の調査例がなく、城敷遺跡が最大規模の集落遺跡といえる。かろうじて、玉太岡遺跡・大西遺跡からそれぞれ1軒ずつの住居跡がみついているが、点的な分布で、大規模な集落が形成されたような兆しはみられない。

やや範囲を広げると、吉見丘陵上の吉見町久米田遺跡では5世紀後半代の住居跡6軒(埼玉県1982)、都幾川を遡上した嵐山町行司免遺跡では住居跡45軒(嵐山町1998)、坂戸台地では鶴ヶ島市脚折山田遺跡では住居跡11軒(西川・斉藤1981)が調査されている。

入間台地上では、川越市鶴が丘遺跡・霞ヶ関遺跡・女堀遺跡(6軒)・女堀Ⅱ遺跡(8軒・立石1987)・上組Ⅱ遺跡(22軒・黒坂1989)・御伊勢原遺跡(68軒・立石1989)等が、この時期の集落遺跡としてあげられる。なかでも、上組Ⅱ遺跡・御伊勢原遺跡は大規模集落として位置づけられ、御伊勢原遺跡からは所謂集落内祭祀跡が2ヶ所発見されている。

このような入間台地上に立地するこの時期の集落遺跡は、いずれも弥生時代後期・古墳時代前期から継続的に営まれてきた集落で、行司免遺跡も同様である。これに対し、近隣の東松山台地・高坂台地・坂戸台地では、古墳時代前期までは集落が多く形成されていたにもかかわらず、古墳時

代中期には散在的・単発的な集落形成となっており、きわめて対照的である。

このような状況の中で、大規模な集落として城敷遺跡が形成された意義は大きい。解釈の一つとして、この時期に集落の中心が、東松山台地・高坂台地などの台地上から低地部へ進出していったことが考えられる。今後、低地部からこの時期の集落遺跡の発見も期待される。別の解釈として、この時期の諏訪山古墳群中の首長墓が、B種ヨコハケが施された埴輪が樹立された円墳の諏訪山33号墳であり、諏訪山29号墳（前方後方墳）→諏訪山古墳（前方後円墳）という墳形の系譜からは、その勢力の衰えは否めない。この影響化のもと、周辺の集落が縮小してしまった可能性も考えられる。

古墳時代後期（第6図）

古墳時代後期になると、城敷・銭塚遺跡の周辺では、再び集落の形成が活発となる。

城敷・銭塚遺跡南側の高坂台地上には、大西遺跡（184）・下寺前遺跡（183）・大門遺跡などの集落遺跡が展開する。大西遺跡では、6世紀前半～7世紀後半の集落の一部が調査されている（鈴木1991）。下寺前遺跡では5世紀末から6世紀中頃にかけての集落が営まれ、第2号住居跡からは初期須恵器（有蓋高坏・埴）が出土している（高橋他1994）。大門遺跡では、7世紀代の集落が発掘されている。

高坂台地西方の比企丘陵上には、舞台遺跡（69）がある。舞台遺跡は関越自動車道建設事業と区画整理事業に伴って3次に及ぶ発掘調査が実施され、5世紀末葉～7世紀後半段階までの93軒の住居跡が発見されている（谷井1974、井上1978・1979）。須恵器生産との関わりも推定され、台地から丘陵上に立地する集落として最大規模で、中心的な存在である。舞台遺跡の南方、越辺川水系に面した丘陵南端には駒堀遺跡（76）がある。主に5世紀後半～末葉と7世紀の集落が調査され

ている（今泉1974）。比企地域の中で先駆的にカマドが導入された遺跡として、注目される。大塚原遺跡（74）では7世紀後半の住居跡8軒が調査されている。

都幾川流域左岸の松山台地及び北比企丘陵・吉見丘陵上には、古吉海道遺跡（60）、籠田遺跡（47）、古凍根岸裏遺跡（63）、番清水遺跡（56）、観音寺遺跡（27）、笹塚遺跡（58）、玉太岡遺跡の集落遺跡が展開する。観音寺遺跡では鬼高期の住居跡50軒余りが調査されている（高橋他1994・渡辺1996）。このほかには、大規模な古墳時代後期集落の調査例はみられない。古凍14号墳の墳丘下から6世紀中葉頃の住居跡3軒が調査された（宮島他1999）。都幾川水系を遡ると嵐山町東落合遺跡から鬼高期の集落が調査されている（嵐山町2003）。

次に越辺川右岸・高麗川流域の様相を見ると、中流域には坂戸市桑原遺跡（91）・田島遺跡（92）・棚田遺跡（85）・稲荷前遺跡（86）・塚の越遺跡（87）・金井遺跡（99）・足洗遺跡（98）などから構成される入西遺跡群がある。入西遺跡群のなかで低位面に位置する桑原遺跡・田島遺跡・棚田遺跡では、5世紀末葉頃から集落が形成される。6世紀後半の様相が不明確であるが、7世紀には塚の越遺跡・稲荷前遺跡・金井遺跡・足洗遺跡へと集落が拡大していく。入西遺跡群の西側に位置する長岡遺跡（84）でも、6世紀後半～7世紀の集落が大規模に展開している模様で（加藤他1992）、特に7世紀段階の住居跡の密集度が高いことが指摘されている（加藤2008）。越辺川右岸下流域では、坂戸市上谷遺跡（121）・前林遺跡（122）・大穴遺跡（120）から構成される中小坂遺跡群が、5世紀から6・7世紀にかけて継続する拠点的な遺跡群で、安定的に集落が展開する（加藤2008）。

入間川・小畦川水系の入間台地では、川越市御伊勢原遺跡（157）・女堀Ⅱ遺跡（159）・上組Ⅰ・Ⅱ遺跡（160）が、5世紀から6・7世紀にかけ

て営まれた拠点的な集落遺跡である。

以上のような、古墳時代後期の活発な集落展開と連動して、小型の円墳を主体に構成される後期古墳群が数多く造営されてくる。

城敷遺跡の集落動向と軌を一にした反町遺跡では、古墳時代中期の集落の衰退後、和泉期終末から鬼高期初頭以降には墓域に転化する。前方後円墳を主墳とする大小の円墳で構成された古式群集墳が造営され、現在までに28基の古墳が調査されている。古墳群を形成した母集落に関しては、時間的・地理的要因などから城敷遺跡がその有力候補となる。

高坂台地は古墳・古墳群の密集度が極めて高い地域で、反町遺跡に築かれた古墳群の存在は、低地部にも古墳群の造営が進出していたことを窺わせる。

毛塚古墳群（N）は、高坂台地南縁に展開する。30基を超える円墳から構成され、3基の円墳が発掘された杉の木遺跡（185）の調査によって、6世紀代の造墓活動であったことが明らかにされた（大谷2006）。高坂古墳群（M）は、高坂台地中央から東部にかけて展開する。城敷・銭塚遺跡を臨む台地東縁部には、前方後円墳の高済寺古墳が築造されている。詳細は不明であるが、採集された埴輪から6世紀前半の築造と推定されている（大谷前掲書）。代正寺遺跡（68）からは16基の古墳跡が発見され、5世紀後半～6世紀前半に営まれた古式群集墳の存在が明らかにされた。その他、高坂神社古墳・払田神社古墳や、高坂二番町遺跡・高坂三番町遺跡などからも古墳跡が発見されている。

諏訪山古墳群（L）は、都幾川を臨む高坂台地北縁に位置し、50基を超える古墳から構成される。4世紀前半代の前方後方墳の諏訪山29号墳（全長45m）を嚆矢に、4世紀後半の前方後円墳の諏訪山古墳（全長68m）、5世紀後半の諏訪山33号墳という首長墓の系譜が辿れる有力な古墳群であ

る。諏訪山古墳群は後期群集墳にも引き継がれ、富士浅間神社古墳（前方後円墳か?）、横穴式石室が採用された諏訪山4号墳（6世紀後半）、埴輪消滅後に築造された諏訪山3号墳（7世紀前半）へと続き、概ね7世紀まで古墳造営が継続されたことが考えられている（若松他1987）。

高坂台地と九十九川を挟んで隣接する比企丘陵田木台地では、田木山（71）・桜山（70）・舞台（69）・根平（72）・駒堀遺跡（76）などで、凝灰質砂岩切石積み横穴式石室を埋葬主体とする円墳が調査されている。

松山台地の古凍・柏崎古墳群には、野本將軍塚古墳（52）と、おくま山古墳（57）の2基の前方後円墳が含まれる。野本將軍塚古墳は築造年代が不明で、おくま山古墳は6世紀初頭前後の盟主墳である。古凍古墳群は6世紀前半を中心とする後期群集墳で、12基の円墳が現存する。古凍根岸裏遺跡で10基、宿東遺跡で2基、下道添遺跡（61）で3基の古墳が調査されている。また、古凍4号墳の周溝に近接する3基の土壙から、6世紀末から7世紀と推定される鉄製壺鐙や轡などの馬具がまとまって出土している。これは、古凍4号墳に伴う馬の殉葬祭祀の可能性が指摘されている（宮島他1999）。柏崎古墳群は4基の古墳が調査され、内3基から横穴式石室が検出されている（金井塚1968）。

市ノ川右岸の下松古墳群では、1基の帆立貝式古墳と3基の円墳が調査され、6世紀初頭から6世紀第3四半期にかけて順次築造されたことが判明している。帆立貝式古墳からは「弓を担ぐ人物埴輪」が出土し、注目を集めている（江原2004）。

市ノ川を挟んで対峙する左岸の台地上には、岩鼻古墳群が存在する。6世紀初頭前後から中葉にかけて築造された群集墳で、埋葬主体は堅穴系（粘土槨）である。

南側の吉見丘陵には久米田古墳群（H）が存在する。埴輪をもつ姫塚古墳・久米田1～3号墳と、



第6図 古墳時代後期から中世の周辺遺跡

1 反町遺跡	46 前耕地遺跡	91 桑原遺跡	136 大境遺跡	181 揚楯木遺跡
2 城敷遺跡	47 籠田遺跡	92 田島遺跡	137 松原前遺跡	182 滝・祇園遺跡
3 銭塚遺跡	48 五領遺跡	93 中原遺跡	138 古海道東遺跡	183 下寺前遺跡
4 嵐山町金平遺跡	49 上川入遺跡	94 広面B遺跡	139 伴六遺跡	184 大西遺跡
5 花見堂遺跡	50 野本氏館跡	95 広面A遺跡	140 出雲伊波比神社	185 杉の木遺跡
6 茶臼山古墳	51 西浦遺跡	96 西峰西浦遺跡	141 塚場遺跡	186 若宮八幡古墳
7 屋田遺跡	52 野本將軍塚古墳	97 中耕遺跡	142 新しき村遺跡	187 勝呂廃寺
8 平谷窯跡	53 野本中原遺跡	98 足洗遺跡	143 大寺廃寺遺跡	188 掘ノ内遺跡
9 寺谷廃寺遺跡	54 山王裏遺跡	99 金井A遺跡	144 旭台遺跡	A 唐子古墳群
10 羽尾窯跡	55 権現塚古墳	100 金井B遺跡	145 西原遺跡	B 月輪古墳群
11 五輪沼窯跡	56 番清水遺跡	101 芦山遺跡	146 上新田遺跡	C 西原古墳群
12 打越遺跡	57 おくま山古墳	102 金内山遺跡	147 共栄遺跡	D 黒岩横穴墓群
13 城原北遺跡	58 笹塚遺跡	103 相撲場遺跡	148 お寺山遺跡	E 御所古墳群
14 沢口遺跡	59 鷲神社裏遺跡	104 勇福寺遺跡	149 在家遺跡	F 岩粉山横穴墓群
15 八幡遺跡	60 古吉海道遺跡	105 石井上宿遺跡	150 南精進遺跡	G 根古屋古墳群
16 中原遺跡	61 下道添遺跡	106 石井前原遺跡	151 東洋大学工学部構内遺跡	H 久米田古墳群
17 岩鼻遺跡	62 下山遺跡	107 御門遺跡	152 河越館跡内・龍光他	I 羽黒山古墳群
18 八耕地遺跡	63 古凍・根岸裏遺跡	108 明泉遺跡	153 山王遺跡	J 西吉見古代道路跡
19 伊波比神社	64 根岸稲荷神社古墳	109 青木堀ノ内遺跡	154 山王久保遺跡	K 野本古墳群
20 横見神社	65 天神原遺跡	110 住吉中学校遺跡	155 霞が関遺跡	L 諏訪山古墳群
21 冑塚古墳	66 高坂氏館跡	111 宮町遺跡	156 的場古墳群	M 高坂古墳群
22 岩の上遺跡	67 小代氏館跡	112 清進場遺跡	157 御伊勢原遺跡	N 毛塚古墳群
23 附川遺跡	68 代正寺遺跡	113 附島遺跡	158 東女堀原遺跡	O 鳩山窯跡群
24 二十二耕地遺跡	69 舞台遺跡	114 駒方遺跡	159 女堀Ⅱ遺跡	P 西戸古墳群
25 息障院	70 桜山古墳群・窯跡群	115 横沼新田遺跡	160 上組Ⅰ・Ⅱ遺跡	Q 川角古墳群
26 松本町遺跡	71 田木山遺跡	116 小沼堀の内遺跡	161 五畑東遺跡	R 苦林古墳群
27 観音寺遺跡	72 根平遺跡	117 木曾免遺跡	162 中組遺跡	S 善能寺古墳群
28 吉見百穴横穴墓群	73 緑山遺跡	118 丸山遺跡	163 八幡前・若宮遺跡	T 入西古墳群
29 松山城	74 大塚原遺跡	119 高窪遺跡	164 東下川原遺跡	U 成願寺古墳群・若宮遺跡
30 大行山遺跡	75 立野遺跡	120 大穴遺跡	165 仙波遺跡	V 片柳古墳群
31 散布地	76 駒掘遺跡	121 上谷遺跡	166 道光林遺跡	W 新山古墳群
32 日向山遺跡	77 雷遺跡	122 前林遺跡	167 若宮遺跡	X 新町古墳群
33 かぶと塚古墳	78 小用廃寺	123 西谷ツ窯跡	168 王神遺跡	Y 勝呂古墳群
34 久米田遺跡	79 小用窯跡	124 登戸遺跡	169 拾石遺跡	Z 塚越古墳群
35 和名窯跡群	80 西戸丸山窯跡	125 山田遺跡	170 新宿遺跡	AA 雷電塚古墳群
36 和名遺跡	81 神明台遺跡	126 富士見遺跡	171 光山・上猿ヶ谷戸遺跡	AB 牛塚山古墳群
37 山の根古墳	82 明神台遺跡	127 花影遺跡	172 登野山遺跡	AC 脚折遺跡群
38 御所遺跡	83 まま上遺跡	128 羽折遺跡	173 宮ノ越遺跡	AD 下小坂古墳群
39 原遺跡第2地点	84 長岡遺跡	129 宮裏遺跡	174 城ノ越遺跡	AE 鶴ヶ丘古墳群
40 原遺跡第3地点	85 棚田遺跡	130 八幡遺跡	175 小山ノ上遺跡	AF 南大塚古墳群
41 西吉見条里遺跡	86 稲荷前遺跡	131 一天狗遺跡	176 稲荷上遺跡	AG 上広瀬古墳群
42 三ノ耕地遺跡	87 塚の越遺跡	132 宮田遺跡	177 旭原遺跡	AH 笹井古墳群
43 倉敷遺跡	88 稲荷森遺跡	133 雷電池東遺跡	178 張摩久保遺跡	AI 下唐子古墳群
44 江網遺跡	89 三福寺遺跡	134 若葉台遺跡	179 堂の根遺跡	
45 志久遺跡	90 大河原遺跡 (古墳群)	135 富士見一丁目遺跡	180 今宿遺跡	

埴輪をもたないかぶと塚古墳 (33) や方墳の茶臼山古墳 (6) があり、6世紀から7世紀中頃にかけて築造された古墳群である。また、吉見丘陵には222基からなる吉見百穴横穴墓群 (28) と数百基に及ぶと推定される黒岩横穴墓群 (D) がある。いずれも6世紀末には成立し、7世紀にかけて展

開された横穴墓群と考えられている (金井塚他1978)。このように、墳丘を築いた古墳群と横穴墓群ということなる墓地形態が並存する点は注目される。

北比企丘陵には三千塚古墳群が造営される。盟主墳である秋葉塚古墳・長塚古墳の2基の前方後

円墳には、前方部に竪穴式石室、後円部に片袖型横穴式石室が採用されていた（金井塚他1962）。6世紀中葉段階の築造と推定されており、この地域への横穴式石室導入のあり方を示す資料である。

都幾川水系を遡上すると下唐子古墳群（AI）がある。下唐子古墳群は附川古墳群・若宮古墳群が含まれる有力な群集墳である。円墳の若宮八幡古墳（186）には胴張横穴式石室が採用されているが、唯一埴輪を持つ古墳でもあり、古墳群中最古の6世紀末葉に位置づけられる。青塚古墳（21）、附川遺跡7・8号墳（23）などは、埴輪をもたずに胴張横穴式石室構造の内部主体を採ることから、7世紀前半から中頃にかけて築造された古墳群と考えられている。

このように、都幾川や市ノ川流域の台地上には、数多くの古墳群や横穴墓群が形成されている。その一方では、集落の検出例が少なく、意外な感がある。今後は、城敷・銭塚遺跡や反町遺跡のように、都幾川や市ノ川によって形成された広大な沖積地微高地上の遺跡の発見に注目して行く必要がある。

越辺川右岸・高麗川流域では、古墳時代後期の拠点的な集落として入西遺跡群が展開する。その周辺に、毛呂山町西戸古墳群（P）、川角古墳群（Q）・苦林古墳群（R、毛呂山町大類古墳群と坂戸市塚原古墳群の総称）、坂戸市入西古墳群（T、善能寺・大河原・三福寺・北峰古墳群の総称）など、越辺川を臨む台地縁辺部に古墳群が累々と築かれ、入西遺跡群の隆盛を窺うことができる。因みに、苦林古墳群には5基の前方後円墳が含まれている。また、高麗川左岸には坂戸市成願寺古墳群（U）、右岸には浅羽野古墳群などがある。浅羽野古墳群の主墳上屋神社古墳は直径45mの円墳で、凝灰岩切石積みの胴張檜次式石室が構築されている。

越辺川下流域右岸地域には、新山古墳群（W）・片柳古墳群（V）・新町古墳群（X）・勝呂古墳群（Y）・塚越古墳群（Z）・雷電塚古墳群（AA）・

牛塚山古墳群（AB）など多数の古墳群が造営されている。新町古墳群は、前方後円墳の胴山古墳、方墳の太子塚古墳と円墳8基から構成される古墳群である。胴山古墳は全長63.2m、埴輪の破片が採集されており、6世紀後半の築造とされている。勝呂古墳群の主墳は勝呂神社古墳で、径40mを超える円墳である。雷電塚古墳群の雷電塚古墳は、墳長47mの前方後円墳である。多条凸帯の円筒埴輪の存在から、6世紀中葉の築造と推定されている。坂戸台地の東端には、10基を超える円墳から構成される牛塚出古墳群が位置する。1号墳からは木棺直葬の主体部が発見され、大刀一振が副葬されていたという（塩野2004）。3・6・7・8号墳から比企型坏や埴輪が出土しており、6世紀代の築造と考えられている。

入間台地では、小畦川流域に川越市下小坂古墳群（AD）・川越市鶴ヶ丘古墳群（AE）・日高市六ツ塚古墳群など造営されている。下小坂古墳群は6世紀前半～7世紀にかけて築造された古墳群である。どうまん塚古墳（円墳）からは桂甲、馬具、乳文鏡など、粘土槨が採用された下小坂3号墳からは珠文鏡、馬具、円筒埴輪など豊富な副葬品が発見されている。小堤山神古墳は55×63mの円墳で、主体部が胴張横穴式石室、7世紀の築造と考えられている。他に前方後円墳2基、帆立貝式前方後円墳1基を擁し、有力な首長墓系列が迎えられる古墳群である。鶴ヶ丘古墳群では、鶴ヶ丘稻荷神社古墳（岩瀬1985）と鶴ヶ丘1号墳（小久保1976）が発掘され、7世紀後半代の版築と掘込地業工法が採用された注目すべき方墳である。

入間川水系では、前方後円墳牛塚古墳と30基以上の円墳で構成される川越市市場古墳群（156）、上円下方墳の山王塚古墳を擁する南大塚古墳群（AF）、狭山市笹井古墳群（AH）、上広瀬古墳群（AG）などがある。牛塚古墳からは、金銅製指輪や銀装刀子などの特殊な副葬品や、埴輪の出土から6世紀末葉の築造年代が想定されている。山王

塚古墳は方台部一辺63mの大型墳で、律令期に繋がる在地勢力の動向を見極めるうえで重要視される古墳である。

さらに、集落や古墳群の活発な展開に並行して、埴輪や須恵器の窯業生産も開始されている。

古墳時代の比企丘陵は、武蔵国の中での須恵器生産の揺籃地でもある。高坂台地に接する丘陵にある桜山窯跡群から埴輪窯跡と共に、県内最古段階の須恵器窯跡2基（6世紀前半・MT15併行期か）が発見された（水村1982）。須恵器窯跡は桜山窯跡を唱矢として、7世紀初頭の根平遺跡1号窯跡（井上1980）、7世紀中葉～後半の舞台遺跡C-1・2号窯跡（井上1978・1979）が相次いで操業された。各窯跡出土の器形は非常に個性的で、時期的にも継続しないことから、今のところ技術的な系譜関係を辿ることはできない。また、立野遺跡（75）では7世紀後半の工房跡と思われる竪穴住居跡2軒が調査され、多量の須恵器や円面硯などが出土した。遺跡周辺に未知の須恵器窯がまだ眠っていることを教えてくれている。いずれにせよ、古墳時代須恵器窯跡が集中する地域であり、律令期武蔵国最大の須恵器窯跡である南比企窯跡群成立の胎動と見ることができ注目される。

比企丘陵では7世紀前半の鳩山町小用窯跡（79）で、特徴的な櫛描波状文を施す小型短頸壺が焼成されている（高橋1977）。その他、坂戸台地には西谷ツ窯跡（123）1号窯が単独で築かれ、須恵器大甕と坏皿蓋が焼成されていた（加藤他1992）。比企丘陵北部に位置する滑川町には羽尾窯跡（10）、平谷窯跡（8）が築窯された。

埴輪窯跡は先述した桜山窯跡群があり、須恵器窯跡2基のほかに埴輪窯跡17基が調査された。桜山窯跡群は6世紀前半～後半に操業され、附川古墳群出土の人物埴輪に作風が類似するという。また、毛塚32号墳の円筒埴輪や人物・馬形埴輪の特徴から桜山窯跡群から供給された可能性が指摘されている（大谷2006）。吉見町の和名窯跡群（35）

では4基の埴輪窯跡が検出されている。6世紀中葉～後半の操業と推定され、久米田古墳群や吉見丘陵地内の古墳群に供給されたと考えられている（高橋他1994）。

奈良・平安時代（第6図）

まず、都幾川右岸と越辺川に挟まれた高坂台地周辺の状況から概観する。反町遺跡には該期の集落は非常に少ないが、現都幾川自然堤防に寄った銭塚遺跡からは安定した集落が検出されており、低地帯における集落形成は継続した、というよりも水田開発とともに集落形成も積極的に進められたと推定される（菊地2007）。高坂台地上には代正寺遺跡、大西遺跡、下寺前遺跡、大門遺跡で7世紀後半～9世紀の集落が検出されているが、大規模な例は少ないようだ。下寺前遺跡では「堂」的な建物跡と勝呂廃寺Ⅱ期の平瓦が出土しており、その性格が注目される。南比企丘陵東麓では、立野遺跡から7世紀後半の須恵器選別所的な大型住居跡2軒、緑山遺跡から8世紀初頭前後の住居跡4軒、大塚原遺跡からは7世紀後半の住居跡8軒が検出されている。緑山遺跡では3軒の住居跡から勝呂廃寺Ⅱ期の平行叩きを施す平瓦が出土しており、酒井清治氏は立野遺跡が須恵器、緑山遺跡が瓦の「製品管理・製作工房の統率者の居住地」と捉えた（酒井1982）。これら丘陵東麓の窯業生産は8世紀前半以降途絶し、代わって比企丘陵には7世紀後半以降南比企窯跡群が成立し、8世紀初頭から本格的な生産体制が整備され、9世紀末葉に至るまで大規模な須恵器と瓦生産が行われた。中核的な支群である鳩山窯跡群では須恵器窯跡群と工人集落が一体的に調査され、大きな成果を挙げている（渡辺1988・1990・1991・1992）。

都幾川左岸の松山台地周辺では山王裏遺跡（54）、上川入遺跡（49）、中原遺跡（93）、西浦遺跡（51）、古吉海道遺跡（60）、下山遺跡（62）、番清水遺跡（56）、岩鼻遺跡（17）、岩の上遺跡（22）、沢口遺跡（14）などがある。下山遺跡は比企郡家

の遺称地「古凍」に位置する。山王裏・上川入・中原・西浦遺跡は、古凍の西方至近距離に位置する遺跡で実質的に同一遺跡と見てよい。山王裏遺跡からは8世紀初頭～9世紀後半の住居跡37軒と基壇状遺構・竪穴状遺構・粘土採掘壙、中原遺跡からは7世紀後半～8世紀前半の住居跡13軒、上川入遺跡からは8世紀初頭～9世紀後半の住居跡7軒、西浦遺跡からは8世紀初頭～10世紀初頭前後の住居跡35軒が検出され、松山台地の中心的な集落である。山王裏遺跡では基壇に竪穴状遺構と区画溝が伴い、勝呂廃寺Ⅱ期の瓦が出土した。粘土採掘壙は基壇構築に伴い掘削されたと考えられている。時期は8世紀初頭である。西浦遺跡からは円面硯22点、「比」「厨」などの墨書土器、「企」と朱書された須恵器が出土している。郡庁院や正倉は発見されていないが、比企郡家または（且つ）寺院に密接に関係する遺跡群であろう（赤熊2002）。古吉海道遺跡からは8世紀初頭～9世紀後半の住居跡4軒、下山遺跡からは須恵器浄瓶、番清水遺跡からは住居跡17軒、岩の上遺跡からは9世紀の住居跡が8軒検出されている（野辺1973）。

吉見丘陵の律令期集落の様相は不明確である中で、西吉見古代道路跡（J）の発見は注目される（永井2002）。従来の予想されていた東山道武蔵路からは若干方位を違えて、比企郡家推定地「古凍」と埼玉古墳群を結ぶライン上に位置している。東山道武蔵路あるいは郡家道ともいわれ、その性格は議論を呼ぶところである（弓2002）。

越辺川右岸・高麗川流域では越辺川支流の大谷木川左岸に毛呂山町伴六遺跡（139）、高麗川左岸にまま上遺跡（83）などがあるが、中・下流域に比較して集落規模は小さいようだ。伴六遺跡北側には出雲伊波比神社（140）が鎮座している。越辺川中流域には稻荷前遺跡・塚の越遺跡・金井遺跡・足洗遺跡などから構成される「入西遺跡群」が7世紀以降9世紀まで継続的に集落が維持されている。住居跡数は稻荷前遺跡230軒、塚の越

遺跡89軒、金井遺跡91軒、足洗遺跡38軒を数え、隣接する長岡遺跡を加えると越辺川流域で最大規模の遺跡群である。越辺川右岸の広大な可耕地を生産基盤とした古墳時代以来の在地勢力が、律令期に至っても勢力を伸張しえた集落群であり、南比企産須恵器を交易場に搬入する際の中継地という性格も指摘されている（渡辺2006）。いずれにせよ律令期入間郡内において屈指の遺跡群であることは疑いない。

越辺川下流域では7世紀後半に勝呂廃寺（187）が建立された。勝呂廃寺は北武蔵最大級の白鳳寺院であり、8・9世紀に至るまで存続したとされている。在地有力氏族の関与が想定される。周辺には勝呂神社古墳をはじめ、6～7世紀の集落が分布（勝呂遺跡）している。勝呂遺跡からは「寺」と墨書された9世紀初頭前後の須恵器坏が住居跡から出土し（加藤1992）、門前町的な集落が展開する可能性はあるものの、今のところ大規模に展開する集落となる様相は見られないようだ。坂戸台地東端部には附島遺跡（113）、木曾免遺跡（117）、上谷遺跡（121）、前林遺跡（122）が調査されているが、集落規模には小さく、律令期には衰退するようだ。台地を開析する小支谷沿いには番匠・下道遺跡と横沼新田遺跡（115）がある（黒坂2008）。両者は同一遺跡と見てよく、平安時代の住居跡18軒、掘立柱建物跡12棟が検出された。調査区の北東端に1間四面の建物跡と3×2間の側柱建物跡が位置する。仏堂的な宗教施設と考えると集落との関係を示唆するものといえようか。

一方、坂戸台地内陸部に集落が進出するのが該期の特徴で、勝呂廃寺の南方に宮町遺跡（111）、住吉中学校遺跡（110）、清進場遺跡（112）御門遺跡（107）、青木堀ノ内遺跡（109）などがある。宮町遺跡では「路家」の墨書土器、棹秤の権が出土し、陸上交通や交易に関わる遺跡の性格を暗示している。

さらに内陸に遡上すると若葉台遺跡（134）、富

士見一丁目遺跡（135）、山田遺跡（125）、一天狗遺跡（131）などがある。若葉台遺跡では住居跡279軒、掘立柱建物跡234棟等が検出され、四面庇建物跡や5×3間の長大な掘立柱建物跡など、特異な建物群を内包する（加藤1995・斉藤1994）。古墳時代まで空地であった場所に、8世紀1/4期後半に忽然と大集落が形成される点でも特異である。出土遺物の中には、奈良三彩陶器3点、和同開珎、銅鈴、円面硯25点、青銅製帯金具、朱書土器14点などがある。隣接する富士見一丁目遺跡は実質的に若葉台遺跡と同一遺跡で、住居跡14軒、掘立柱建物跡33棟が検出されている（黒坂1998）。竪穴住居跡に対する掘立柱建物跡の比率が際立って高い点の特徴である。こうした点と可耕地から離れた占地、出土遺構・遺物の特異性などから若葉台遺跡群の性格に関して入間郡家説・郡司層の居宅説・庄家説（斉藤他1983）など諸説が唱えられてきた。近年では716年建郡の高麗郡家との関わりが指摘されている（宮瀧1999）他、地方豪族（大伴部直氏）の居宅集落説が提示されている（渡辺2006）。山田遺跡は若葉台遺跡に隣接する。奈良三彩の火舎や「片牧」の墨書土器が出土しており、一天狗遺跡からは多量の墨書土器、漆紙文書や円面硯が出土している。

小畔川水系では左岸に日高市光山・上猿ヶ谷戸遺跡（171）がある。上流に遡ると左岸に日高市拾石遺跡（169）、王神遺跡（168）、道光林遺跡（166）、若宮遺跡（167）、右岸に堀ノ内遺跡（188）、飯能市域では堂ノ根遺跡（179）・張摩久保遺跡（178）などが代表的な遺跡である。光山・上猿ヶ谷戸遺跡は住居跡55軒、掘立柱建物跡40棟などが検出され、小畦川中流域の拠点的な集落である。7世紀後半から8世紀後半まで継続する点で旧高麗郡域の集落とすると特異である。大型住居跡の存在や墨書土器、漆付着土器、馬具・鍵の出土から、報告者は近くを通るであろう東山道武蔵路と水路の結節点に作られた流通・交易の拠点集落と捉

えた。さらに8世紀後半に集落が衰退する点に関しても、宝亀二年（771）武蔵国が東山道から東海道に所属替えになる事象との関連を探っている（井上1994）。

光山・上猿ヶ谷戸遺跡以外は8世紀前半以降形成された集落で、高麗建郡という歴史動向を反映している。拾石・王神遺跡はいずれも8世紀中葉～9世紀中葉にかけて形成された集落で、拾石遺跡からは住居跡46軒が検出され、「家長」の墨書土器、漆紙、石製帯金具が出土している。王神遺跡からは鳥形硯が出土した。水路跡と道路跡は両遺跡を貫通していることが判明している。堀ノ内遺跡の9世紀前半の住居跡からは皇朝十二銭の隆平永寶（796年初鑄）が出土した（日高市1997）。道光林遺跡は3軒の住居跡が調査され、8世紀前半の土器群が出土しており、高麗建郡当初の集落と考えられる（日高市1997）。

飯能市堂ノ根遺跡からは8世紀初頭の常陸国新治産須恵器と土師器のいわゆる常総型甕が検出された。これらは常陸から下総・上総国周辺に広く分布する土器群であり、高麗建郡段階に常総地域からの移住を、具体的に物語る一級資料である（富元1993）。堂ノ根遺跡に隣接する張摩久保遺跡は飯能市域最大級の集落で、円面硯や銅鏡、第22次調査では皇朝十二銭の隆平永寶（796年初鑄）が出土している（富元1994）。新掘遺跡・新井原遺跡からはロクロ整形の土師器甕が出土した。陸奥地域の甕に類似するが、時期的な整合性が取れない。今後の課題であろう。

入間川水系では左岸に川越市霞ヶ関遺跡（155）、山王遺跡（153）、山王久保遺跡（154）、五畑東遺跡（161）、花見堂遺跡（5）、東下川原遺跡（164）、八幡前・若宮遺跡（163）などがある。霞ヶ関遺跡・山王遺跡・山王久保遺跡は実質的に同一遺跡である。畿内産土師器・「入厨」墨書土器、大型掘立柱建物跡の存在などから、入間郡家の有力候補であり、最近平野寛之氏らによって詳細な検討が加

えられている（古代の入間を考える会2008）。郡家政庁と正倉は未だ確定はできないが、状況証拠からみて霞ヶ関遺跡群の中に入間郡家が存在したと考えるのが最も妥当であろう。五畑東遺跡からは「入主」の墨書土器が出土した。八幡前・若宮遺跡からは「驛長」の墨書土器と酒の醸造に関わる帳簿木簡が出土し、東山道武蔵路第三駅に比定する見方が有力である（酒井1993・木本2000）。しかし、遺跡そのものは土師器焼成壙と粘土採掘壙が検出された土器生産遺跡であり、駅家施設そのものとは異なる（富元2005）。平野氏は八幡前・若宮遺跡は郡家近傍の生産拠点と評価し、駅路は霞ヶ関遺跡と八幡前・若宮遺跡の間を通過すると考えている（平野2008）。最近、古海道東遺跡（138）で東山道武蔵路の一部と思われる道路跡側溝が発見され、ルートの特定に一石を投じた（内田2007）。これが正しいとすれば「勝呂廃寺ルート」よりも東に振れる「宮町-古凍ルート」に近くなるか。今後の検討が必要である。

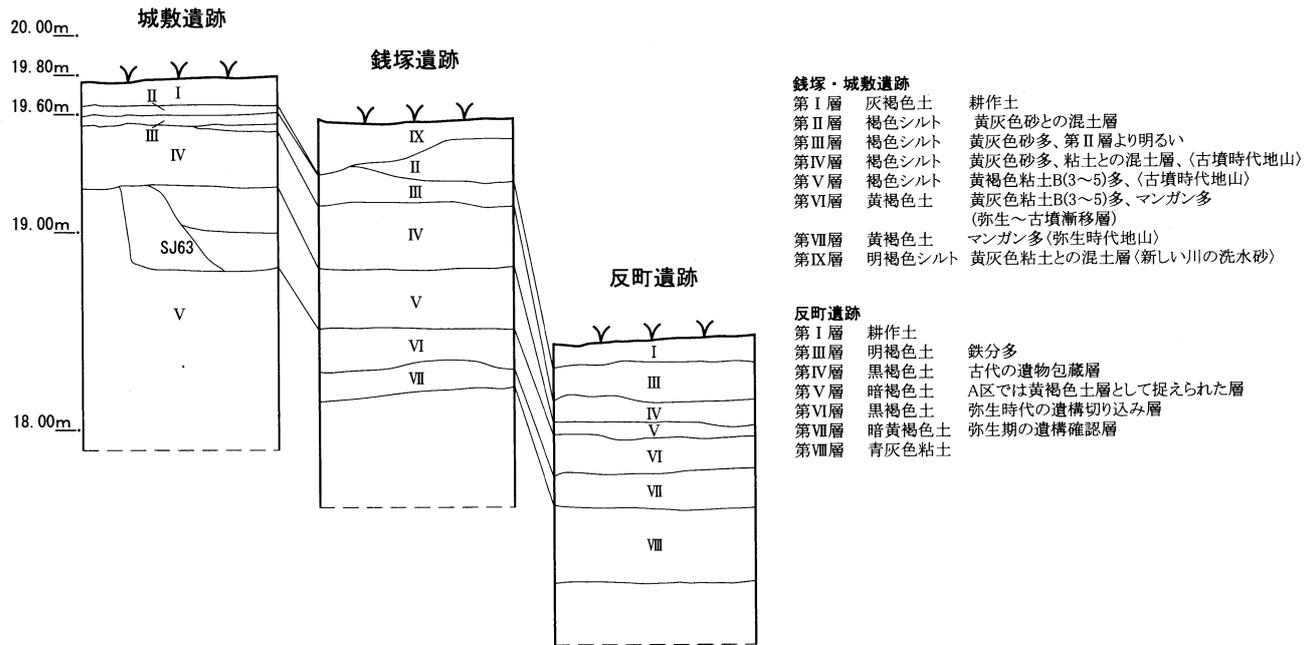
入間川を遡上すると、左岸に狭山市宮ノ越遺跡（173）、城ノ越遺跡（174）、小山ノ上遺跡（175）、今宿遺跡（180）、宮地遺跡など、遺跡が入間川沿いに帯状に連なる一大集落群が形成されている。8世紀以降の集落がほとんどであるが、上広瀬古墳群（AG）や笹井古墳群（AH）、柏原古墳群が存在することから集落形成は古墳時代後期に遡ることが予想される。右岸下流域では川越市小仙波・弁天西遺跡があり、弁天西遺跡からは畿内産土師器が出土している（富田2002）。現状では遺跡数が少ないが、周辺には広大な可耕地が広がっており、今後遺跡の増加が予想される。右岸中流域では狭山市稻荷上遺跡（176）、揚榎木遺跡（181）、

滝・祇園遺跡などがある。上流の入間市域には前内出・八坂前・新久窯跡等から構成される東金子窯跡群が存在し、8世紀中葉以降10世紀に至るまで大規模な須恵器生産が行われた。

中世（第6図）

反町遺跡には中世の遺構は確認されていない。遺物としては河川跡から陶器類や青銅製花瓶、竹製箆など鎌倉時代初期の製品が少量検出されているのみで、時期的な動向を語るには材料不足である。一方遺跡周辺は中世の遺跡が数多く分布し、蓄積資料も膨大である。ここでは遺跡近在の中世遺跡の紹介にとどめておく。まず、都幾川対岸の野本將軍塚古墳墳頂、利仁神社経筒遺跡から発見された建久七年（1196）銘銅製経筒が最古段階の資料である。経筒・鏡の銘文に「源新次郎」、「吉見郡大串郷住人藤原氏」などと記されていた。將軍塚古墳の北西に隣接する野本氏館跡（50）は鎌倉時代の所産とされている（埼玉県教育委員会1988）が、幅4mの堀跡の一部等が調査され、14世紀後半のかわらけや片口鉢が出土した（山本1997）。反町遺跡の南側と西側にある高坂台地には小代氏館跡（67）と高坂氏館跡（66）、高坂二番町遺跡などがある（江原2005）。小代氏館跡は確認調査で14世紀前半頃の堀跡が検出された。高坂氏館跡は都幾川を望む急崖縁辺にある。高済寺境内周辺に土塁と空堀が残る。後北条家家臣、高坂刑部が居住したといわれている。高坂氏館跡と小代氏館跡の間には高坂二番町遺跡、大西遺跡、代正寺遺跡があり、13世紀～14世紀の遺物が濃密に分布している。江原氏は高坂台地全体を、牧や信仰空間を含みこんだ「居館」と捉えている（江原1996）。

III 遺跡群の概要



第7図 基本層序

1. 反町遺跡群の概要

(1) 基本層序

高坂駅東口第二土地区画整理事業地は東松山市大字高坂地内に所在する。事業地内には銭塚、城敷、反町の3遺跡が存在する。いずれも都幾川の乱流によって形成された、現在は水田になっている埋没自然堤防上に立地し、相互に関連をもって営まれた遺跡群である。都幾川右岸に形成されたこれら3遺跡をまとめて扱う場合、仮に反町遺跡群と呼ぶことにする。

反町遺跡群は遺構の検出される面は灰褐色のシルトもしくは砂質であり、埋土も同様の土質であることから、遺構確認は困難を極めた。

3遺跡の基本土層(第7図)は、現代の耕作土(I層)、分層は困難だが中世から近世の水田土壌と考えられる土層(II・III層)、古代の遺物包含層(IV層)、古墳時代の地山(V層)、弥生~古墳時代の漸移層(VI層)、弥生時代の地山(VII層)、粘土層(VIII層)という構成である。地点によって堆積環境が異なることから、色調はもとより、含

有物、土質も異なる。全体的に、城敷、銭塚遺跡はシルト質で、反町遺跡は砂質である。

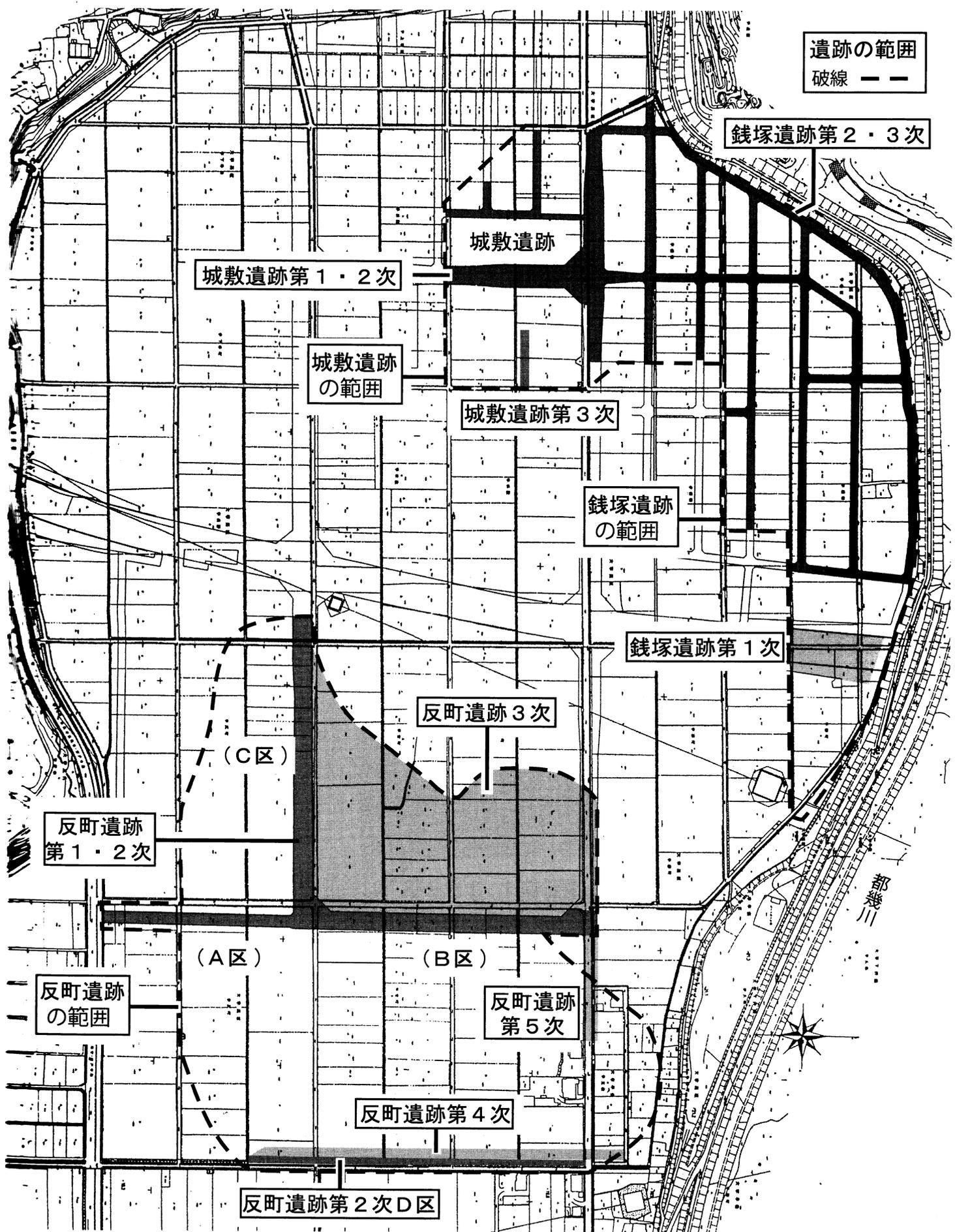
古墳時代の遺構検出面の標高は、城敷遺跡西側が192m前後、銭塚遺跡中央部が186m前後、反町遺跡中央部が180m前後である。地形そのものも傾斜しており、反町遺跡の中でもC→A→D区と遺構検出面の標高が下がっている。遺跡内で検出されている河川跡の河床面も東へ行くほど傾斜している。昭和40年代まで早俣の渡しに帆掛け舟が入っていたということなので下流に行くほど、更に水深が増すのであろう。

遺跡の南側に接する高坂台地とは6~7mの比高差が、北側を東流する都幾川の対岸、松山台地縁辺の段丘面にある西浦遺跡とは3~4m、松山台地上の山王裏遺跡とは10m近い比高差がある。

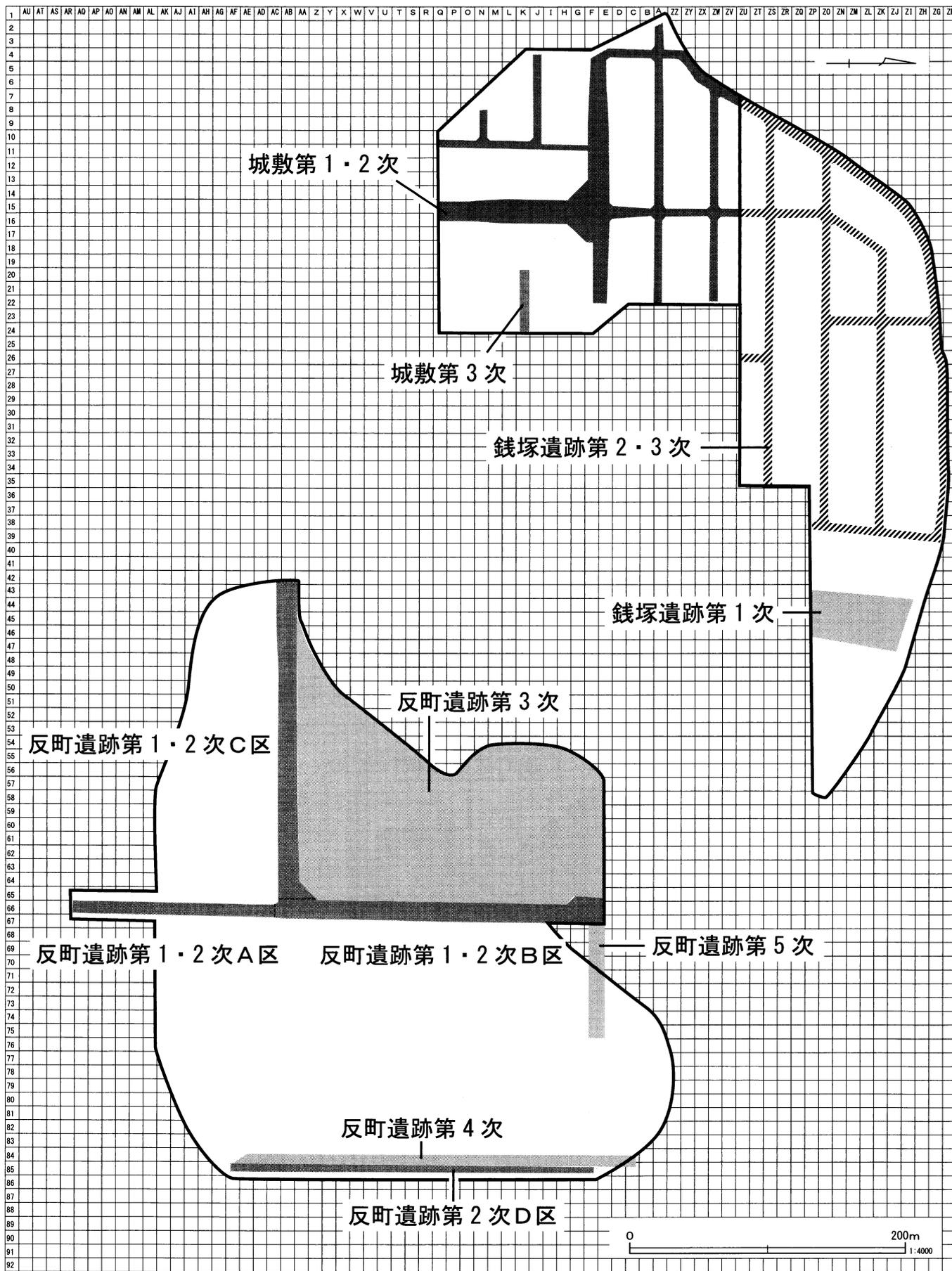
(2) 遺構の概要

反町遺跡群から検出された遺構の概要は以下のとおりである。

銭塚遺跡(第1次調査)



第8図 銭塚・城敷・反町遺跡の調査区位置図



第9図 グリッド網図

竪穴住居跡1軒（平安）
溝跡10条（平安・中世）
土壙19基（中世他）
ピット多数

銭塚遺跡（第2次・第3次調査）（本書報告）

竪穴住居跡62軒（古墳・奈良・平安）
掘立柱建物跡19棟（古墳・奈良・平安）
ピット列1条
土壙35基
土器棺墓1基
井戸跡7基
溝跡38条
畠跡1箇所
堤防状遺構1箇所
ピット多数

城敷遺跡（第1次・第2次調査）

竪穴住居跡108軒（本書31軒報告）
掘立柱建物跡15棟（本書3棟報告）
土壙40基（本書9基報告）
大溝跡7条（1条7地点）（1条3地点報告）
溝跡30条（本書21条報告）
ピット多数

城敷遺跡（第3次調査）

竪穴住居跡7軒
掘立柱建物跡2棟
土壙1基
溝跡1条
ピット5基

反町遺跡（第1次・第2次調査）

竪穴住居跡117軒
方形周溝墓7基
古墳12基
土壙61基
土器棺墓2基
大溝跡（河川跡）5条
溝跡68条

反町遺跡（第3次調査）

竪穴住居跡190軒
古墳15基
土壙11基
大溝跡2条
溝跡12条
窯状遺構1基

反町遺跡（第4次調査）

竪穴住居跡5軒
方形周溝墓3基
土壙8基
大溝跡1条
溝跡17条

反町遺跡（第5次調査）

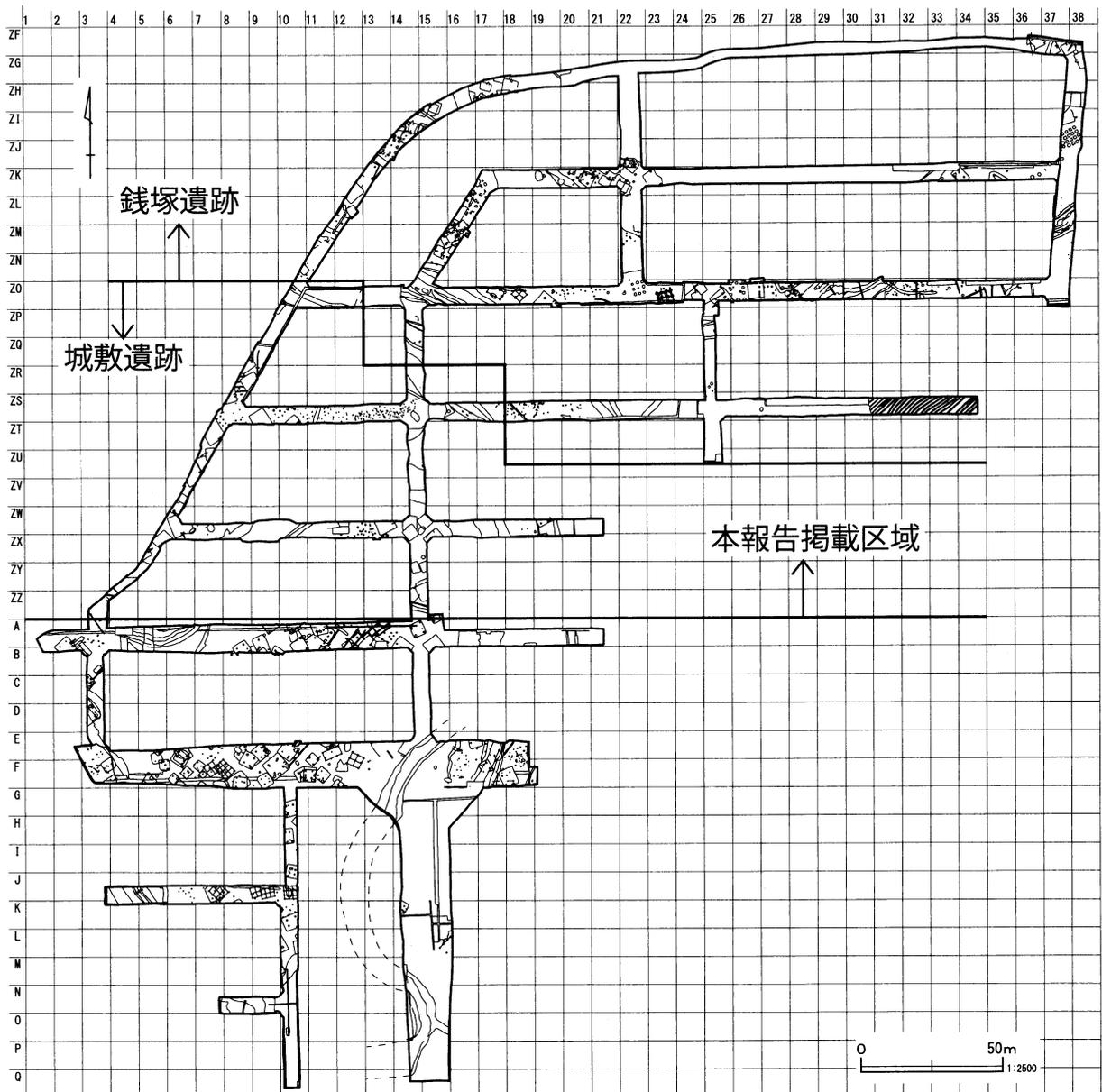
竪穴住居跡41軒
古墳跡1基
土壙4基
溝跡6条

（3）遺跡群の動態

遺跡群の形成から消滅に至る動態を時期別に粗描してみたい。

まず、遺跡群の成立期は弥生時代中期後半である。遺跡群東部に位置する反町遺跡の南域から竪穴住居跡と溝跡が検出され、安定的な集落が形成される。この集落は後期初頭に方形周溝墓と土器棺墓から構成される墓域に変化することが判明している。同時に墓域西側に集落域が移動することもわかっており、集落の移動が具体的に語ることのできる資料が整いつつある。この段階の遺構は銭塚遺跡に土器棺墓が1基検出されている。反町遺跡の在り方を参考にすると、周辺に方形周溝墓を伴う可能性があろう。当然集落の存在も予想され、遺跡群の中でも複数の小集落形成を想定することもできよう。

弥生時代後期後半の集落の存在は不明であるが、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭（五領期）になると、城敷遺跡、反町遺跡に集落が営まれる。特に反町遺跡第1～3次調査区には200軒を超え



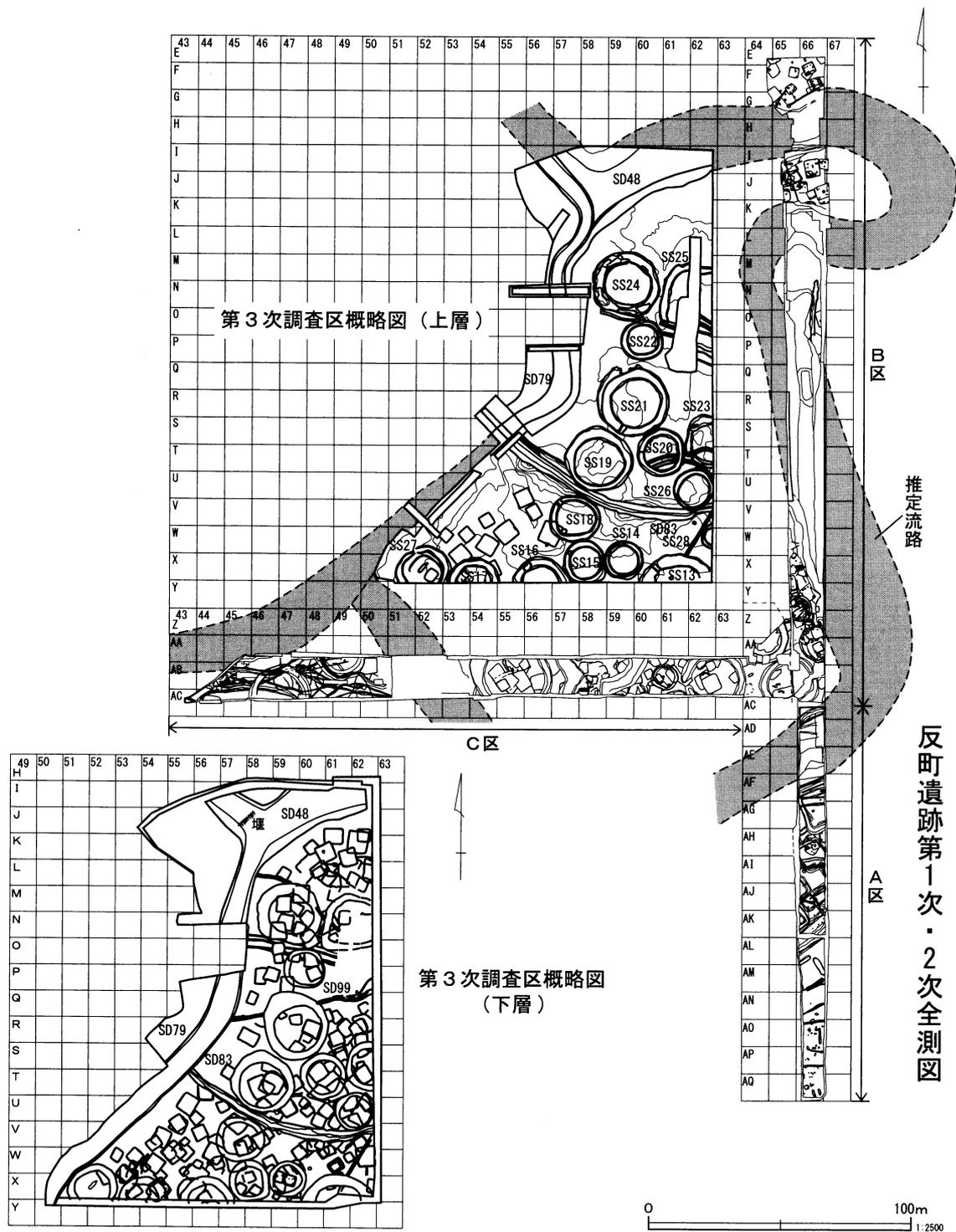
第10図 銭塚遺跡・城敷遺跡全体図（1/2500）

る多数の住居跡が作られ、当地域でもかなり有力な在地勢力の基盤となる集落を構成した可能性がある。この時期の墓域は反町遺跡南域と東端部から方形周溝墓が検出されており、集落域の周囲に墓域を形成したことが判明する。

銭塚遺跡には古墳時代前期の集落は発見されなかったが、一部下層遺構として、焼けた高まり（堤防状遺構とした）などがあり、全く集落がなかったとは言い切れない。反町遺跡、城敷遺跡の古墳時代前期集落が古墳時代中期には縮小に向かったようだ。反町遺跡第3次調査で洪水層が集

落を覆ったことが判明しており、あるいは自然災害の影響が存在したのかもしれない。

古墳時代中期後半から後期初頭（和泉式期終末から鬼高期初頭）頃になると、集落構成は大きく変貌する。反町遺跡は前方後円墳を中核とした円墳群が累々と形成され、墓域に転化する。この時期の集落は、城敷遺跡を中心に形成され、一部銭塚遺跡からも検出されている。城敷遺跡・銭塚遺跡からは古墳は検出されておらず、城敷・銭塚遺跡＝集落、反町遺跡＝墓域という一対一の対応関係が現象的には認められるが、遺跡群西側に位置



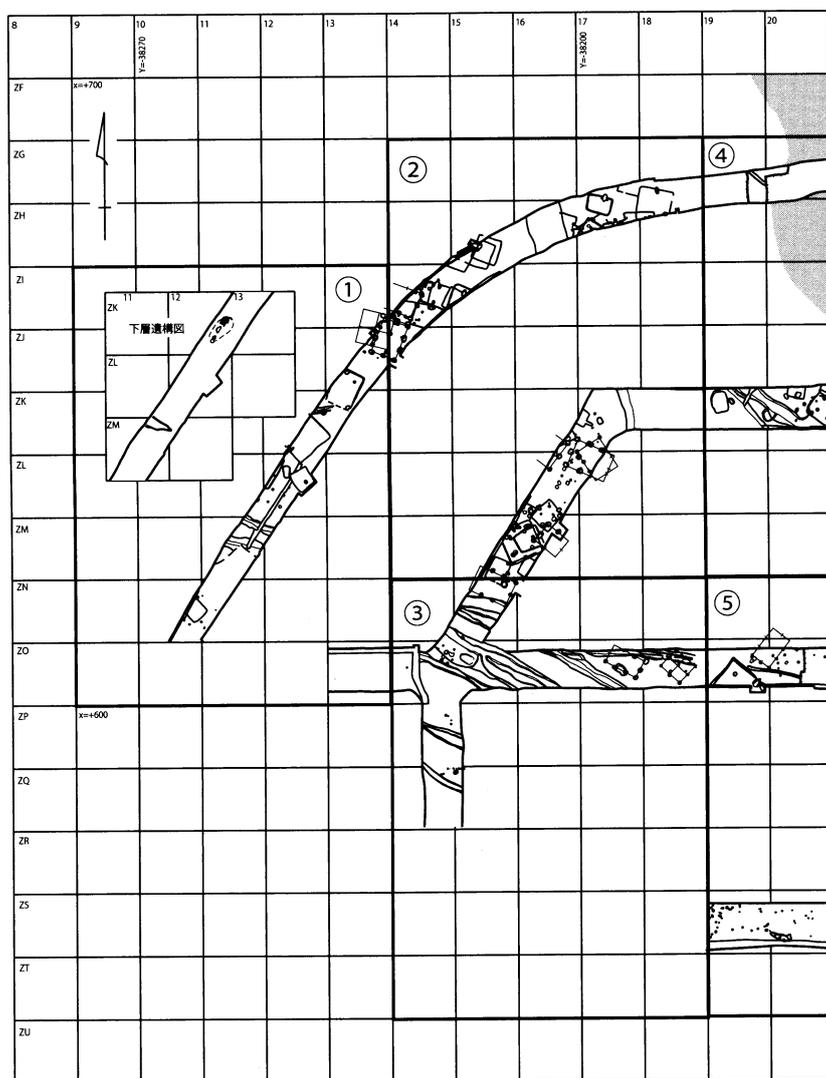
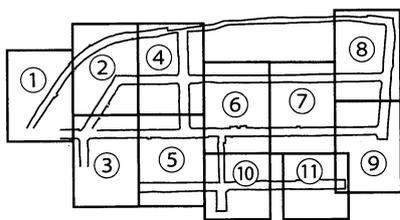
第11図 反町遺跡(第1~3次)全体図(1/2500)

する、高坂台地上の古墳群の動向も考慮しつつ検討することが必要となる。

城敷遺跡の集落は、古墳時代後期、6世紀後半段階には縮小から消滅に向かうようだ。城敷遺跡北側に接する銭塚遺跡は、古墳時代中期末から後期初頭頃集落として成立し、7世紀を経て8・9

世紀に至るまで集落として維持される。大きくみれば、城敷遺跡から銭塚遺跡に集落域が移動すると捉えることもできる。

城敷遺跡から銭塚遺跡へという集落移動の原因は何か。反町遺跡群の動向を左右するキーワードは大溝跡(河川流路)である。城敷遺跡、反町



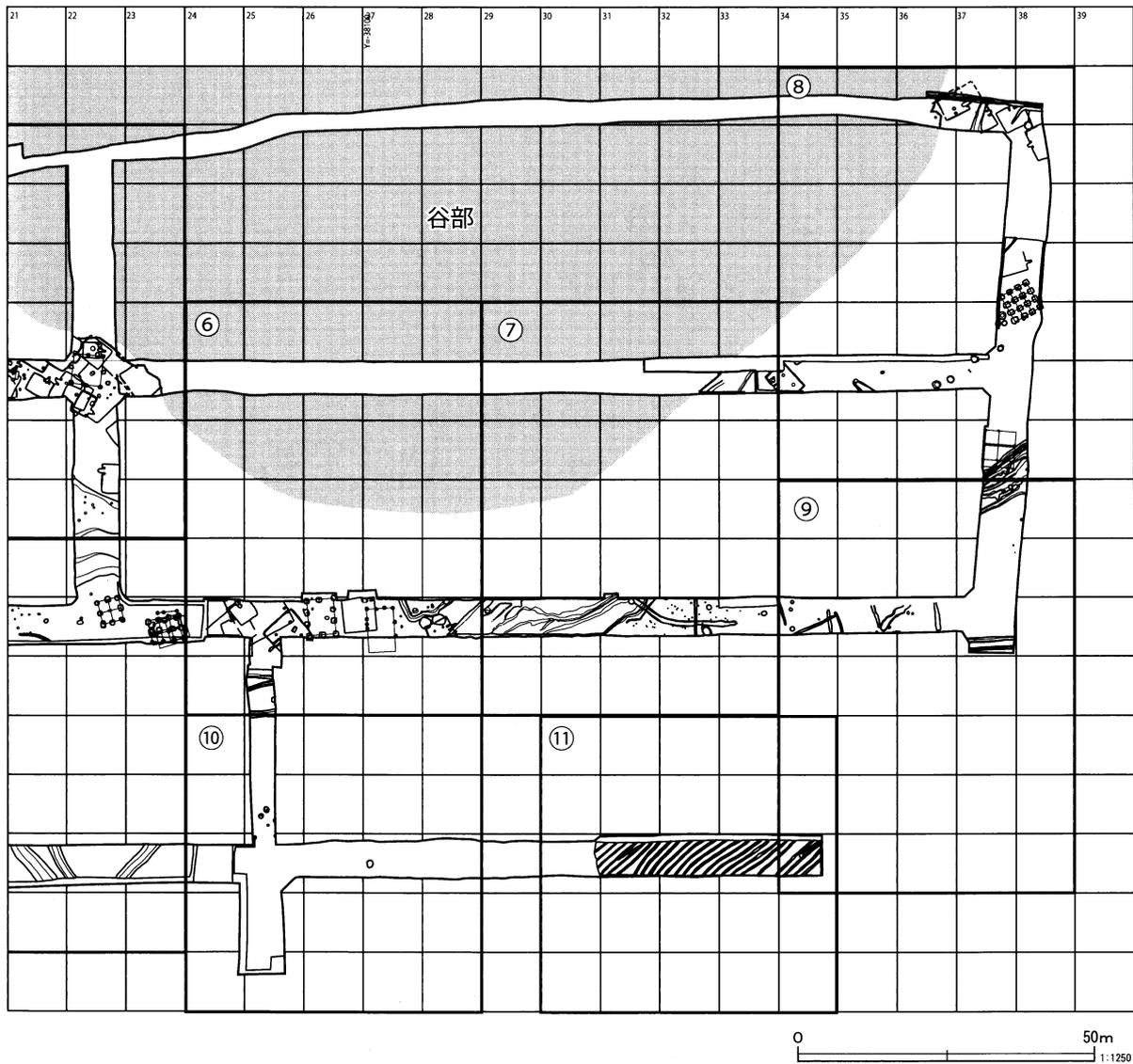
第12図 銭塚遺跡全体図 (1/1250)

遺跡でも集落内を縫うように大きく蛇行する河川流路が発見されている。流路の中からは堰の跡、護岸、祭祀の場、そして河川の岸に昇降する階段状施設など、流路を人為的にコントロールして生活した痕跡が多数発見された。遺跡の消長が河川の流路変更と水位の変化に連動した可能性は高いであろう。

反町遺跡の奈良・平安時代集落域は、遺跡北端部にほぼ限定される。遺跡群南半の城敷遺跡と反町遺跡の大部分は非集落域＝おそらくは水田化していく。一方、遺跡群でもより高位（標高）にある銭塚遺跡と反町遺跡北端部が集落域として機能するのであろう。銭塚遺跡は中世の井戸跡や

区画溝が発見されており、中世後期頃までは居住域として確実に機能した。反町遺跡の下限年代は不明確であるが、北端部から板石塔婆が発見され、大溝跡から中世の遺物が若干検出されており、同様に中世まで降るものと予想される。

当該地区は「高坂条里」としても知られてきた。調査では条里水田の検出はできなかったが、城敷遺跡の土層断面観察から古墳時代集落衰退後、水田土壌が形成されることが推定された。城敷遺跡と反町遺跡の大部分は、遅くとも律令期以降は生産域として土地利用され、平成の土地区画整理事業が実施されるまで居住域として復活することはなかったと考えられる。



2. 銭塚遺跡の概要

銭塚遺跡は過去3次の調査が実施された。第1次調査は一般国道407号東松山バイパス道路改築工事に伴い実施された。東西に長い銭塚遺跡の東端近くに位置する。調査区北側は都幾川が東流する。地表面の標高は20m前後、調査面積は3,500㎡である。9世紀末葉～10世紀初頭頃と思われる平安時代の竪穴住居跡1軒と中世後期の区画溝と思われる遺構群が検出された(菊地2007)。

銭塚遺跡第2次・3次調査区は第1次調査区の西側50mに位置する。

銭塚遺跡の今回の調査区(2・3次)は、区画整理事業街路予定地を対象としており、南北約200m、東西約500mの範囲に縦横にトレンチを入

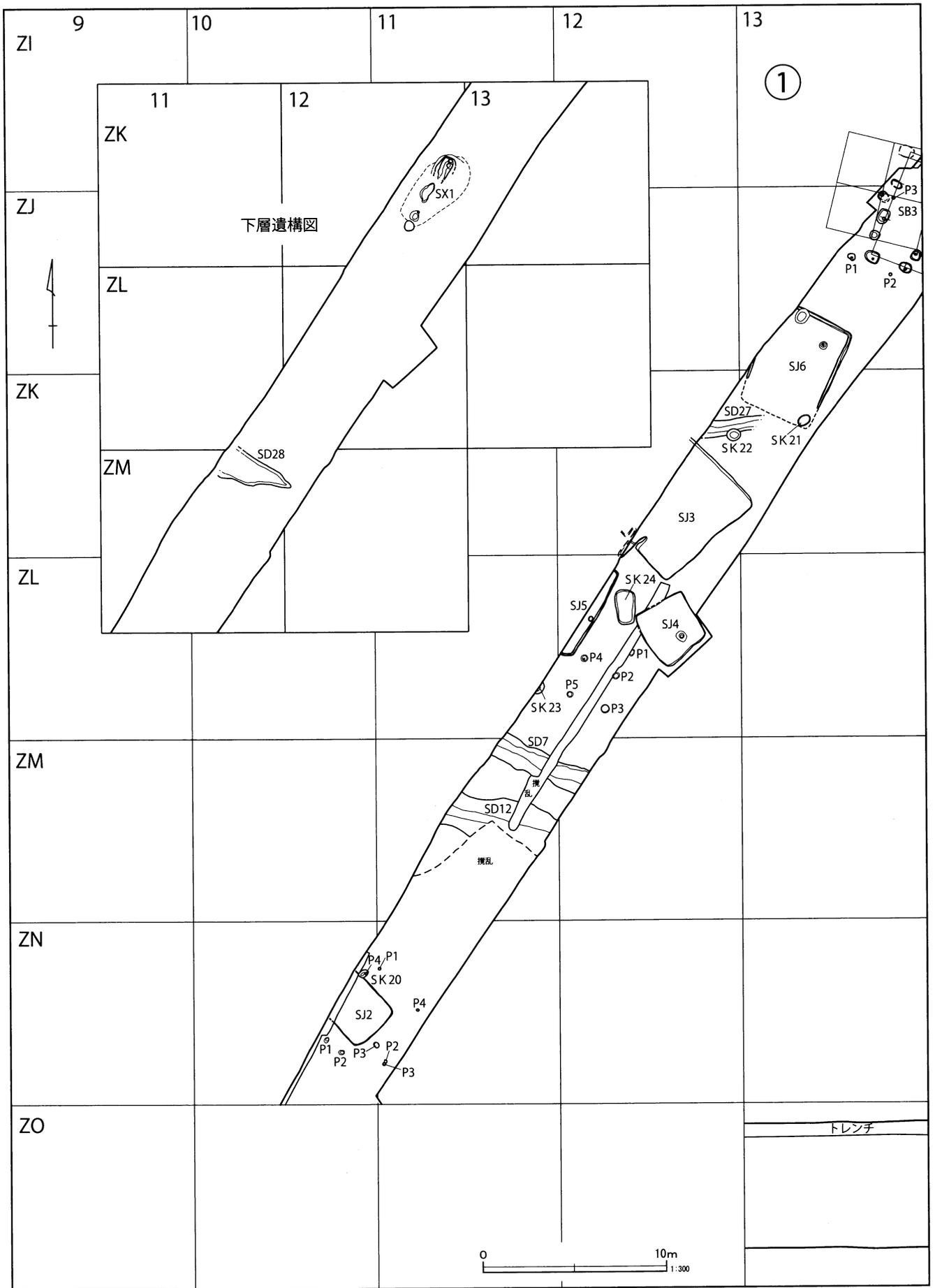
れた形になっている。

城敷遺跡(1・2次)は銭塚遺跡の南側に接しており、本来は一遺跡とすべきものであろう。南北約270m、東西約250mの広がりを持つ。

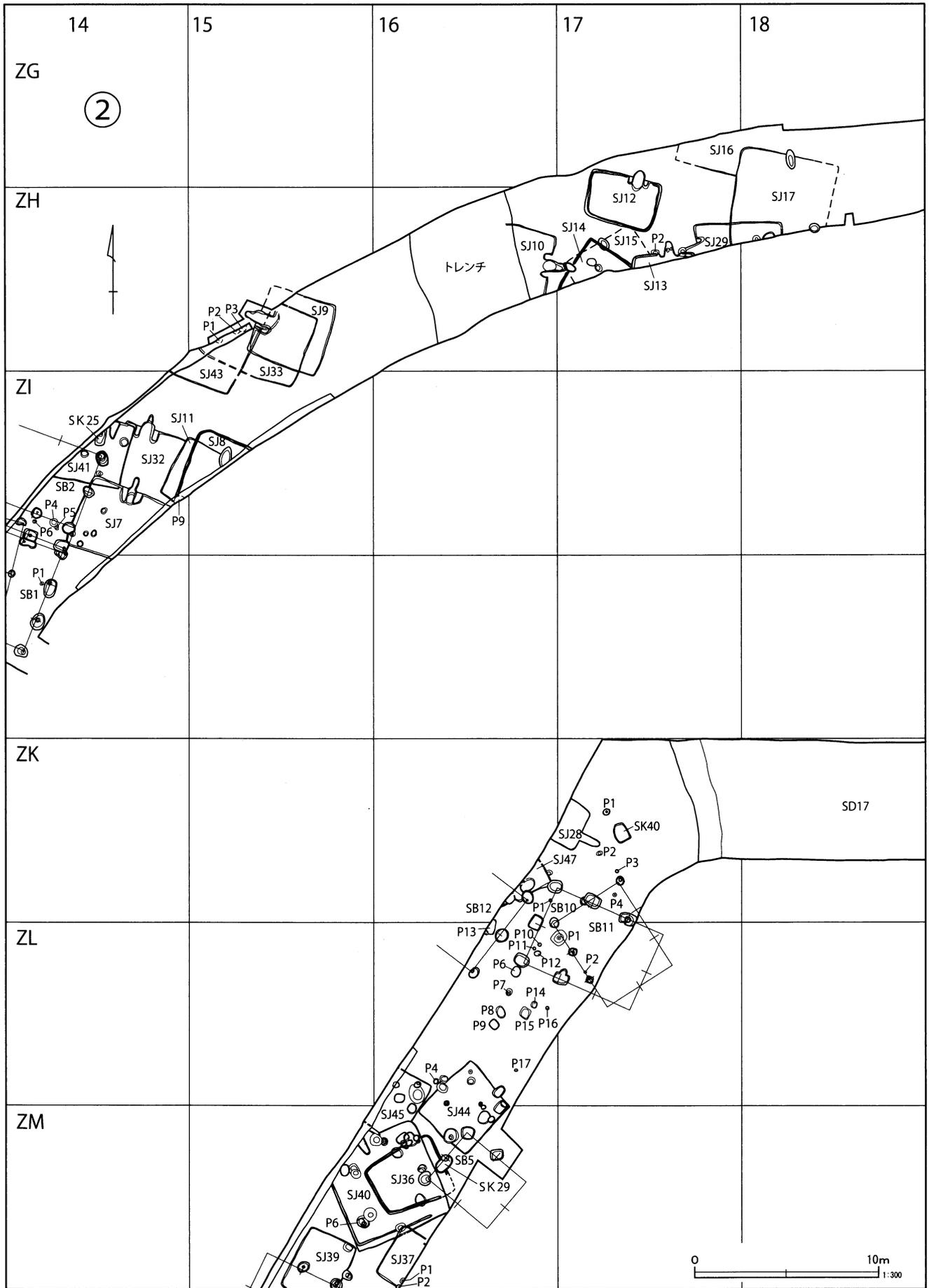
銭塚遺跡第2次・3次調査区と城敷遺跡第1次・2次調査区を合わせた調査面積は21,700㎡に上る。

銭塚遺跡第2次・3次調査区からは、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世に至る大規模な集落跡であることが明らかになった。

遺構確認面は一面と理解していたが、調査区北西部のZK-12グリッド、ZM-11グリッドからは部分的に下層遺構が検出された。時期は不明確であるが、古墳時代前期に遡る可能性がある。予想



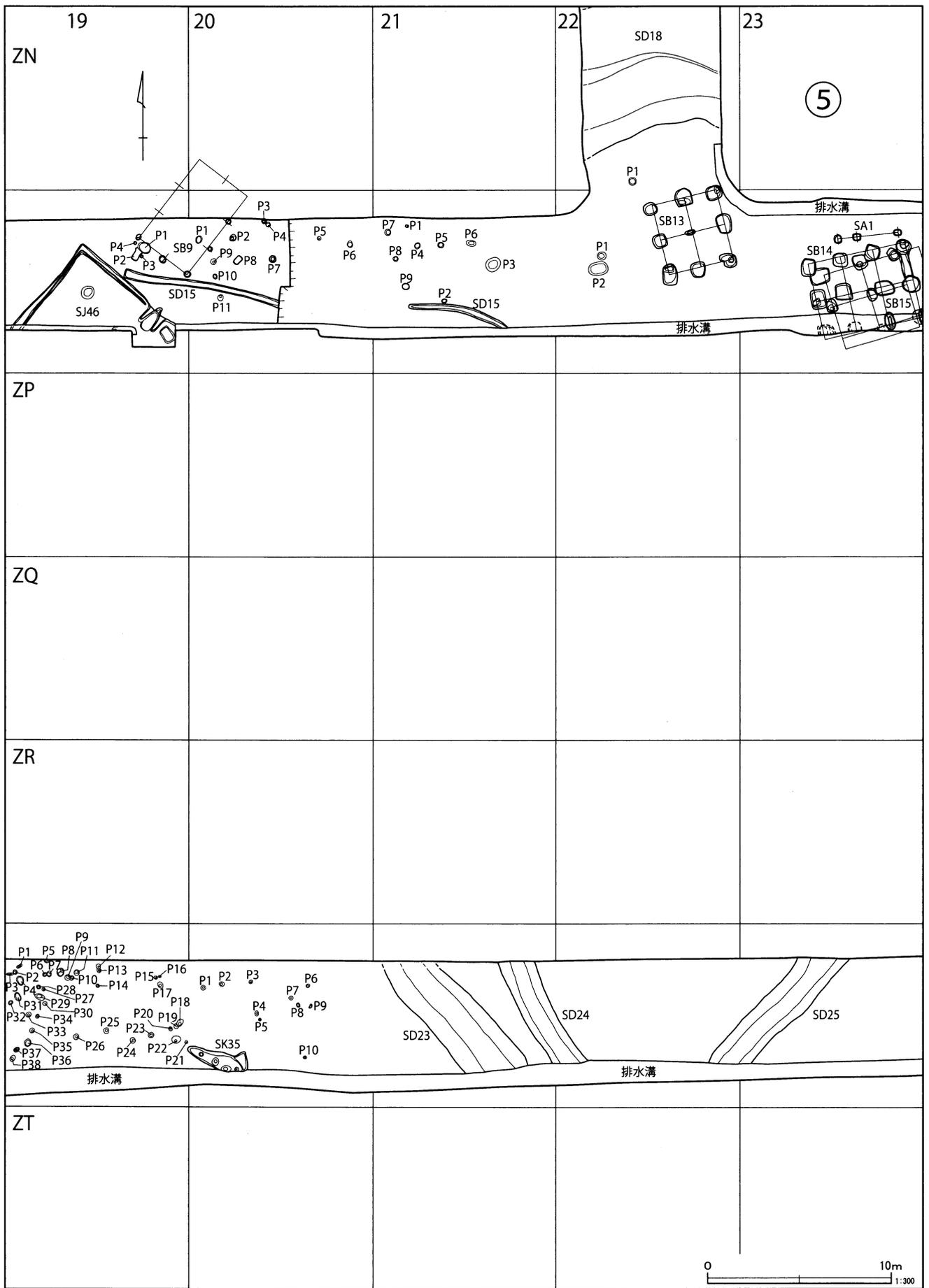
第13図 銭塚遺跡全測図 (1) (1/300)



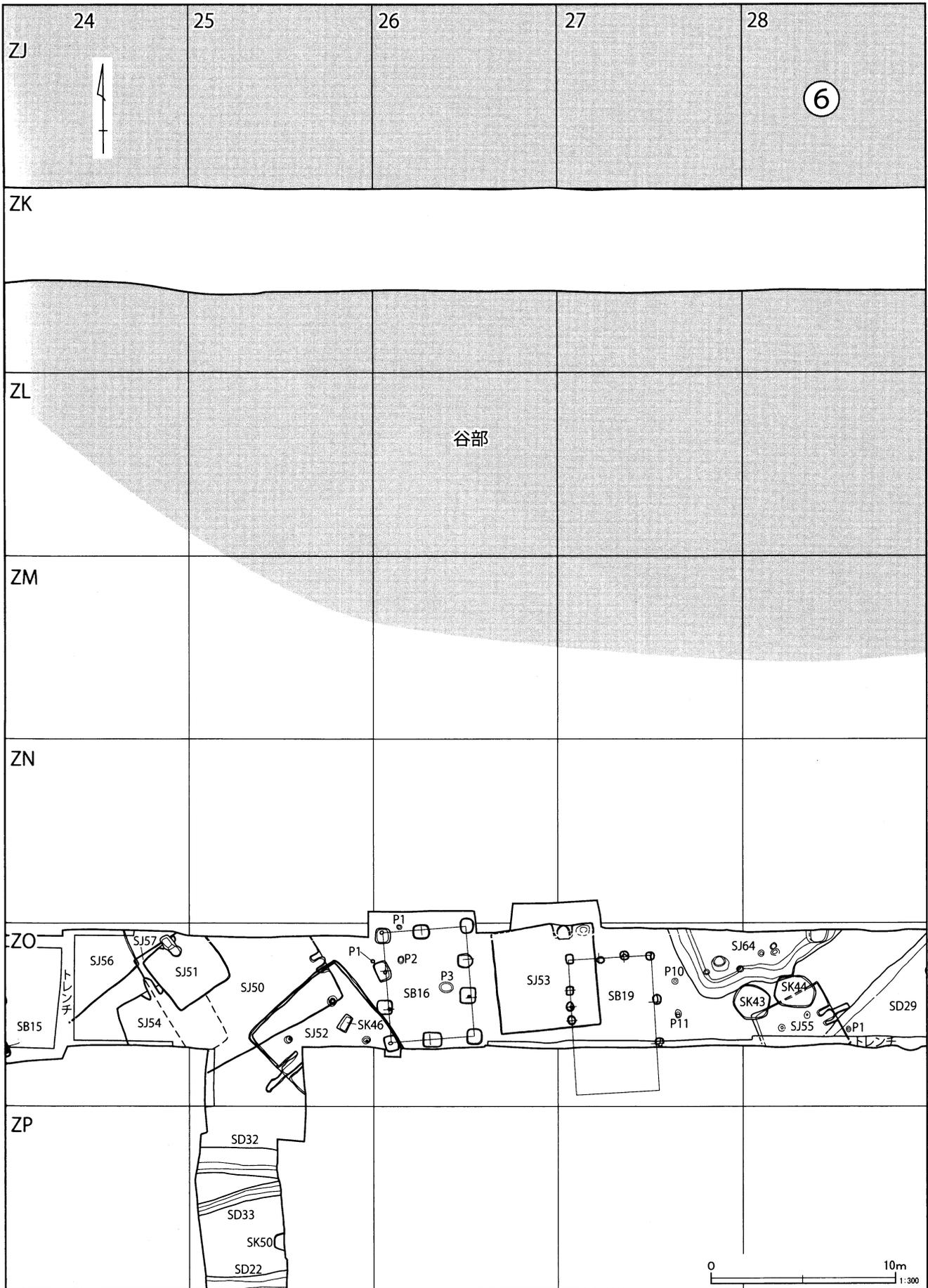
第14図 銭塚遺跡全測図(2) (1/300)



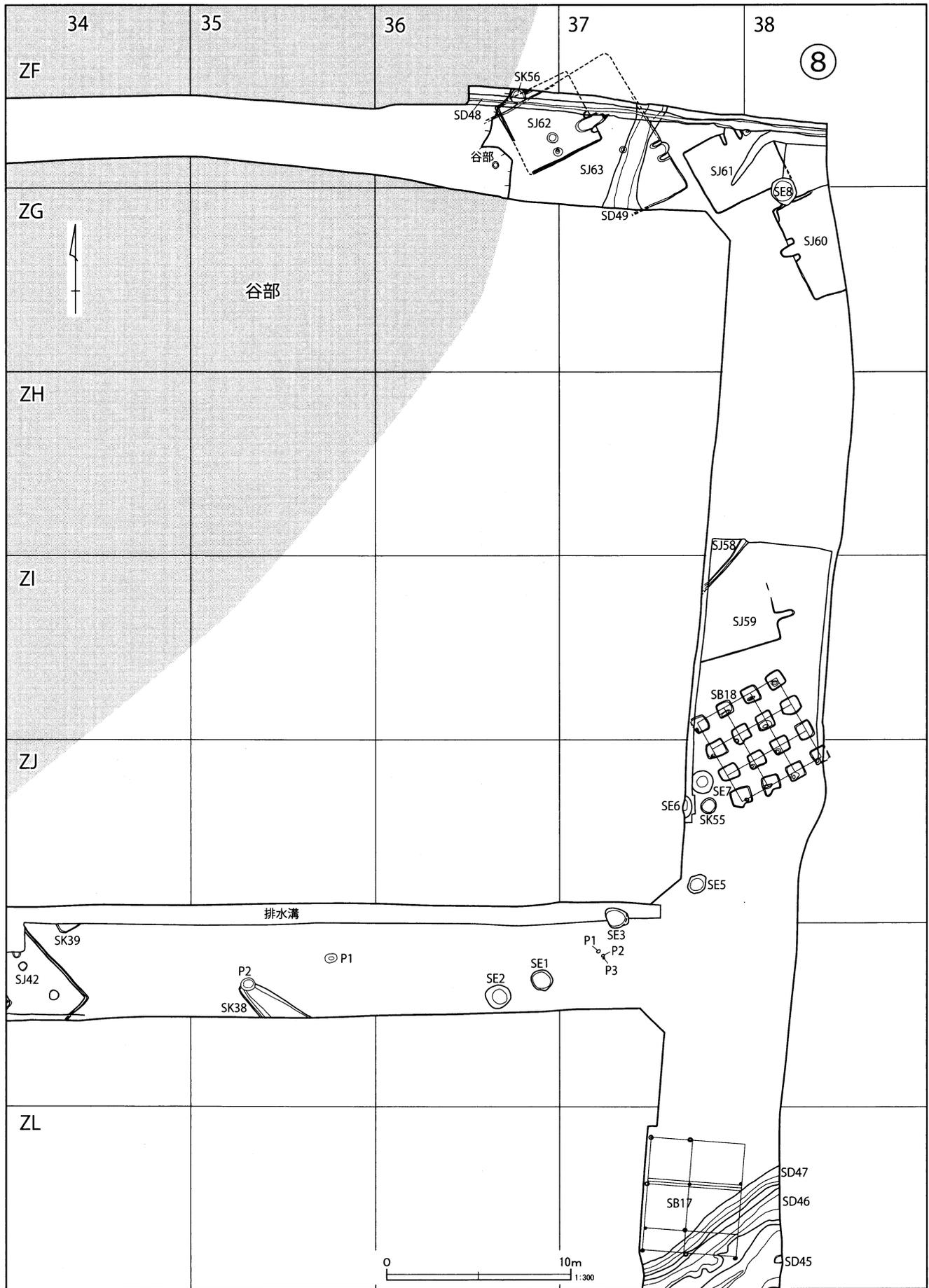
第16図 錢塚遺跡全測図(4) (1/300)



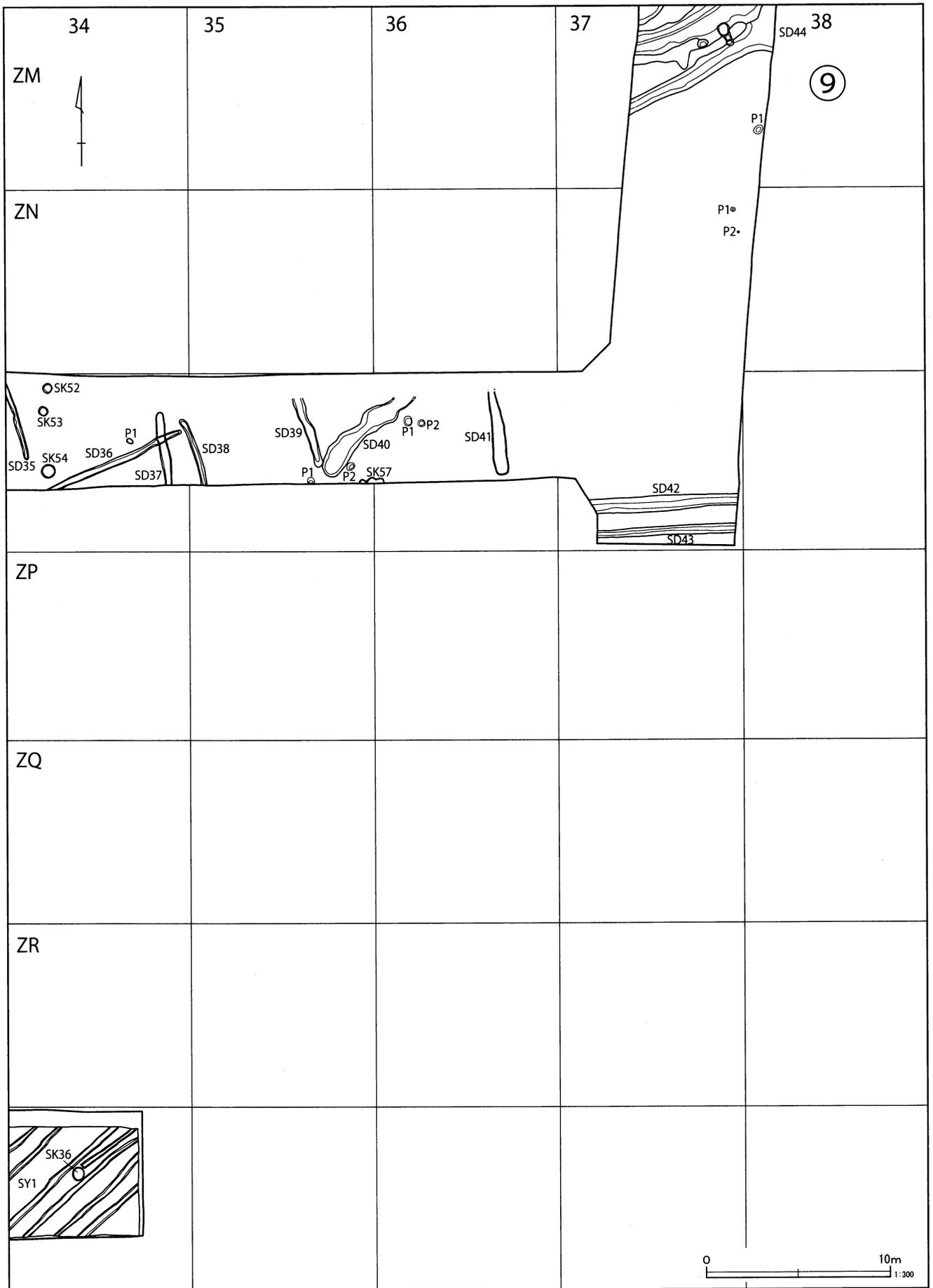
第17図 錢塚遺跡全測図 (5) (1/300)



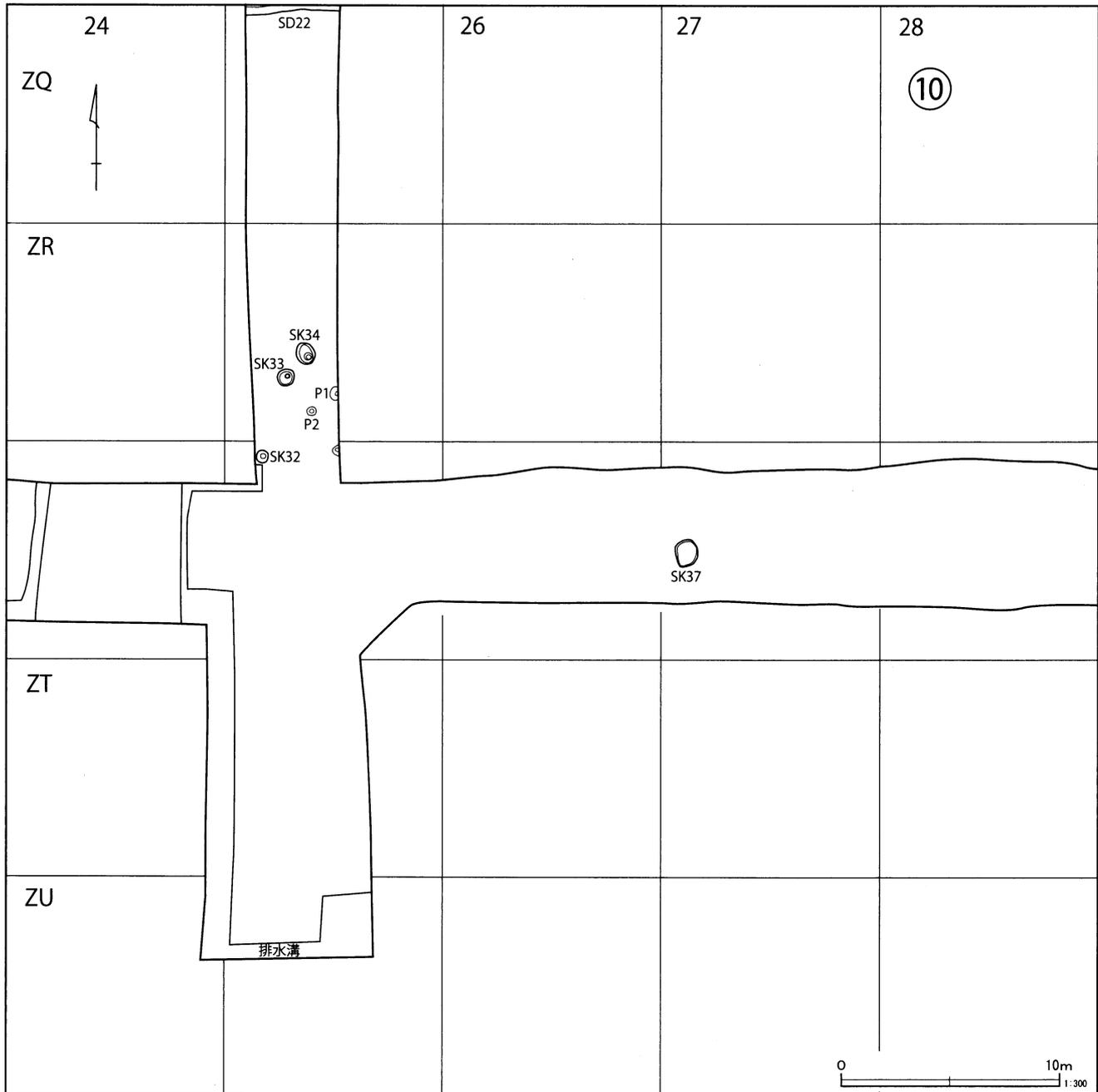
第18図 錢塚遺跡全測図 (6) (1/300)



第20図 銭塚遺跡全測図 (8) (1/300)



第21図 銭塚遺跡全測図 (9) (1/300)



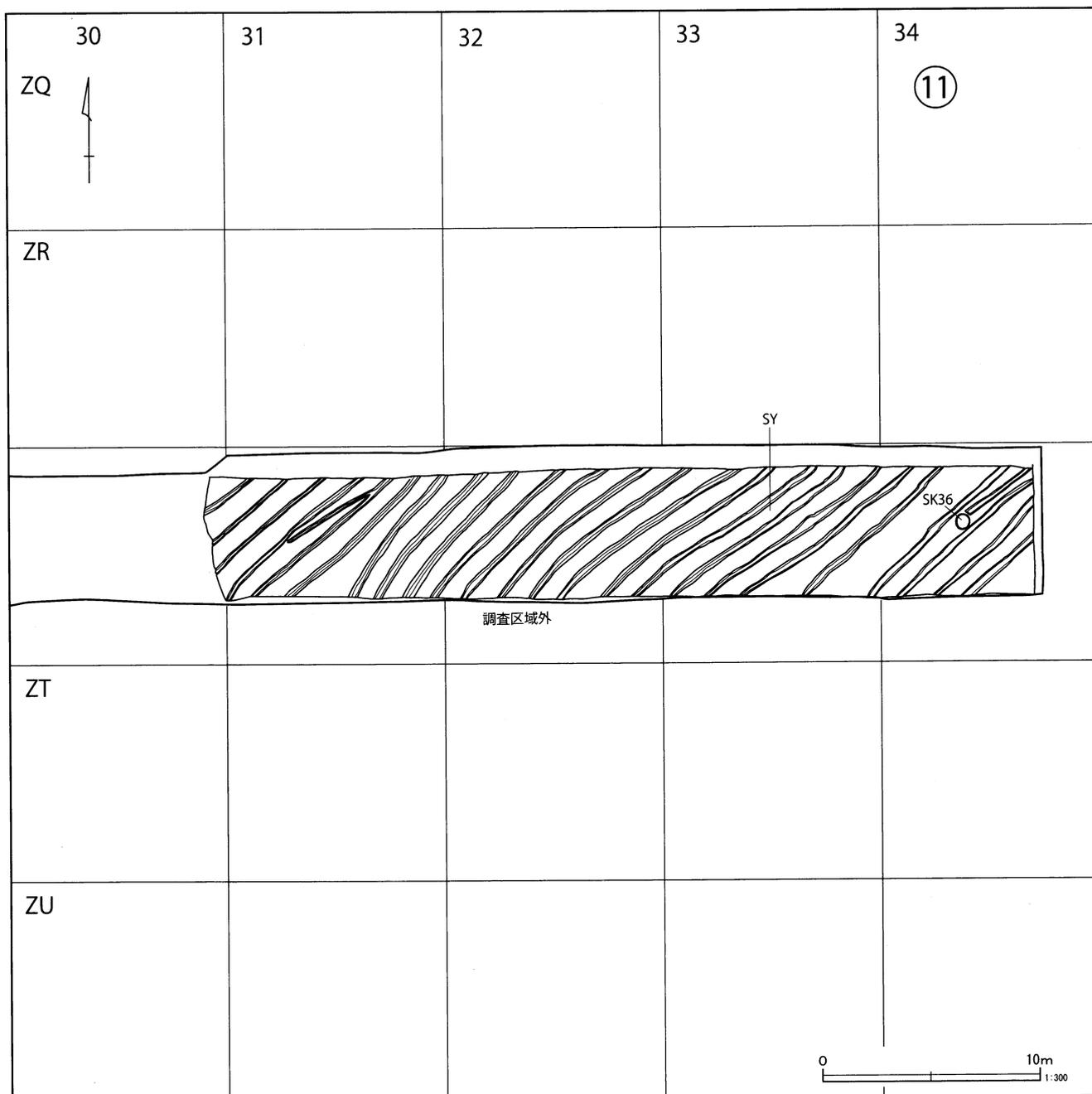
第22図 銭塚遺跡全測図 (10) (1/300)

以上に複雑な微地形と堆積環境であったと思われる。

最も古い遺構はZQ-14・15グリッドで検出された弥生時代後期前半の土器棺墓 (SK31) である。櫛描文を施文した大型の岩鼻式土器 (壺) の胴部に穴を開けて、小児の遺骸を入れ、別の土器で蓋をしたうえで埋葬していた。骨は殆ど分解していたが、歯のエナメル質が辛うじて遺存していた。分析不能とのことで残念ながら性別・年齢等詳細な情報を知る手掛かりはないが、反町遺跡や坂戸

市柵遺跡例などから、周囲に方形周溝墓を伴う可能性がある。

竪穴住居跡は62軒ある。最も古いものは第42号住居跡である。古墳時代中期末葉に位置付けられ、坏類は既に多出するが、典型的な模倣坏は伴わないようだ。把手付の大型甑が伴出している。住居跡にはカマドが設置され、当地域でも最も早くカマドを導入した遺跡のひとつとなろう。その直後の時期と思われる第46号住居跡には模倣坏が伴っている。また、第4号住居跡からは初期須恵器の



第23図 銭塚遺跡全測図 (11) (1/300)

壘が出土した。大阪府陶邑古窯跡群産と考えられる。

5世紀後半から6世紀初頭、長く見積もっても6世紀前半までの住居跡は数軒存在し、銭塚遺跡の初期集落を形成していたことは間違いない。第8号掘立柱建物跡、第9号掘立柱建物跡は第46号住居跡とほぼ主軸を揃えて隣接する。柱穴径の小振りな2×2間の総柱と側柱建物で、城敷遺跡の状況から、古墳時代後期初頭の集落に伴う建物と考えている。建物西側に隣接する第42

号土壙からは住居跡と同時期の土器が出土しており、住居跡、掘立柱建物跡（高床倉庫と物置的建物）、土壙がセットとして存在したことを物語っている。調査区の南東部から検出された畠跡は時期不明であるが、古墳時代に遡る可能性が高いと考えている。

その後は第55号住居跡が作られる7世紀前半～中頃まで住居跡を見出すことはできない。この空白期間を如何に理解するかは、城敷遺跡の整理終了段階で総合的に検討することとし、7世紀後半

以降は安定した集落域として機能したようだ。特に7世紀後半～8世紀初頭の遺構と遺物は特筆できるものが多い。第18号住居跡、第14号溝跡(第30号住居跡)、第18号溝跡等の資料が充実している。これらの遺構出土の須恵器は南比企産とともに、末野窯跡群産須恵器、東海産(特に湖西産)須恵器が定量で伴出している。遺跡西側に広がる南比企丘陵は古代須恵器の一大産地である。その一支群である鳩山窯跡群では8世紀前半から大規模操業が開始され、武蔵国を中心とした地域に広域供給されたことが知られている。その膝下の地である本遺跡に、湖西産・末野産須恵器が定量で供給されている点は非常に興味深い。南比企窯跡群の大規模操業開始以前、郡家等の官衙的遺跡に対応したであろう須恵器供給システムが本遺跡にも認められる点は注目される。また、同一段階のヘラミガキ調整される須恵器蓋(上野産か)やロクロ土師器の存在、畿内産土師器が2点出土している等、一般集落からは出土例の少ない土器が存在する点も注目される点である。

掘立柱建物跡の中で、第18号掘立柱建物跡が特異である。3×3間、総柱建物で、柱穴掘り方は方形で大きく、底に栗石を一面に敷いていた。一般的な高床倉庫にしては作りが丁寧で規模が大き

3. 城敷遺跡の概要

城敷遺跡は、3次に亘る発掘調査が実施されてきた。反町遺跡群のなかでは、最も西側に位置し、高坂台地が目前に広がる。遺跡北側には銭塚遺跡が接するが、事実上、同一の遺跡である。東方約500mには反町遺跡が所在する。この遺跡も有機的に関連する遺跡である。

竪穴住居跡の総数は115軒、掘立柱建物跡は17棟に及ぶ。今回の報告ではAグリッドライン以北を対象とした。竪穴住居跡31軒、掘立柱建物跡3棟、土壙9基、大溝跡1条(3地点)、溝跡21条が該当する。

い。また、第14号掘立柱建物跡は現状で3×2間の総柱建物である。柱穴底面に割り材を礎板に敷いていた。高床倉庫の荷重を支える工法であろう。

銭塚遺跡第2次・3次調査区では9世紀中頃～後半が最も新しい住居跡である。銭塚遺跡第1次調査区からは9世紀末葉～10世紀に掛かる段階の住居跡が1軒検出され、そのころまでは古代集落が存続していたと考えられる。

銭塚遺跡からは城敷遺跡、反町遺跡で検出された集落内を流れた河川跡(大溝跡)は検出されなかった。しかし、集落北端に遺跡を挟むように谷が入っていた。航空写真をもとに微地形を復元した菊地真によれば埋没河川であるという。近世以降の旧都幾川の流路跡であろうが、古代においてもその原形となる河川が存在していたのかもしれない。この埋没河川がそれであるか否かは不明であるが、いずれにせよ、銭塚古代集落に伴う河川跡が周辺に存在したと予想しておきたい。

古代末の様相は不明である。その後、中世後期になると、銭塚第2次・3次調査区東端部とその東に位置する銭塚遺跡第1次調査区から井戸跡、区画溝などが検出され、再び集落域として機能したと考えられる。

城敷遺跡では、古墳時代前期(五領期)から集落が開始される。今回の報告では、第82号住居跡と第95号住居跡が古墳時代前期の五領期に属する。第82号住居跡からは小型の壺が出土した。胴部刷毛目調整、底部は窪み底である。第95号住居跡からは赤彩された鉢や小型器台、壺と口縁部が「く」の字状に屈曲した台付甕が出土している。これらの住居跡を嚆矢として、古墳時代中期(和泉期)には第80号住居跡が造られている。火処としては炉跡をもつ。器高の高い大型の高坏が主体となり、坏類が欠落することから、和泉期でも前半に位置

付けることができる。

和泉期後半～末葉の住居跡は、第81号住居跡と第91号住居跡がある。第81号住居跡の火処には炉跡が設けられている。土師器坏類を組成に含むが、模倣坏は認められない。高坏は短脚化している。第91号住居跡も坏類を含むものの、模倣坏が欠落する。甕の胴部は丸く長胴化が進んでいない。この住居跡はカマドをもち、滑石製模造品の未成品、剥片が900点以上出土し、石製模造品の製作工房であったことが判明した。この段階からは集落規模は拡大するようだ。第92号住居跡からは比企型坏が定量で出土し、模倣坏は出土しなかった。比企型坏初現期の住居跡と思われる。カマドは設置されている。

続く鬼高期に至ると、ほとんどの住居跡がカマドを設置するようになる。第88号住居跡では比企型坏と模倣坏が定量で出土し、土師器甕もカマドに掛けやすいように長胴化が進行する。

城敷遺跡を特徴付けるのは大溝跡(第4号溝跡)である。第4号溝跡はZZ-3グリッド西側から遺跡内に入り込み、一端北東に向かった後、ZT-14グリッドで大きく「S」字状に屈曲し、南にむかう。その後、ゆるやかに蛇行しつつ調査区南端部で西側に抜けていた。

城敷遺跡を縫うように流れたこの大溝跡は、本来は自然河川と思われる。しかし、集落と一体となり機能したことは確実に、城敷集落の母なる川といえる。

大溝跡からは、多量の遺物と関連施設が検出された。今回の報告分では、まずZW-8グリッド周辺(SD4第2地点)ら、大溝跡に出入りするための階段状遺構(昇降施設)が検出された。その東からは流れに直行する横木列が、その下流には流れに平行する木列が作られていた。それぞれ、堰状施設、護岸施設と思われる。生活用水に利用するために堰によって水位をコントロールし、あるいは居住域を水害から守るための施設だった

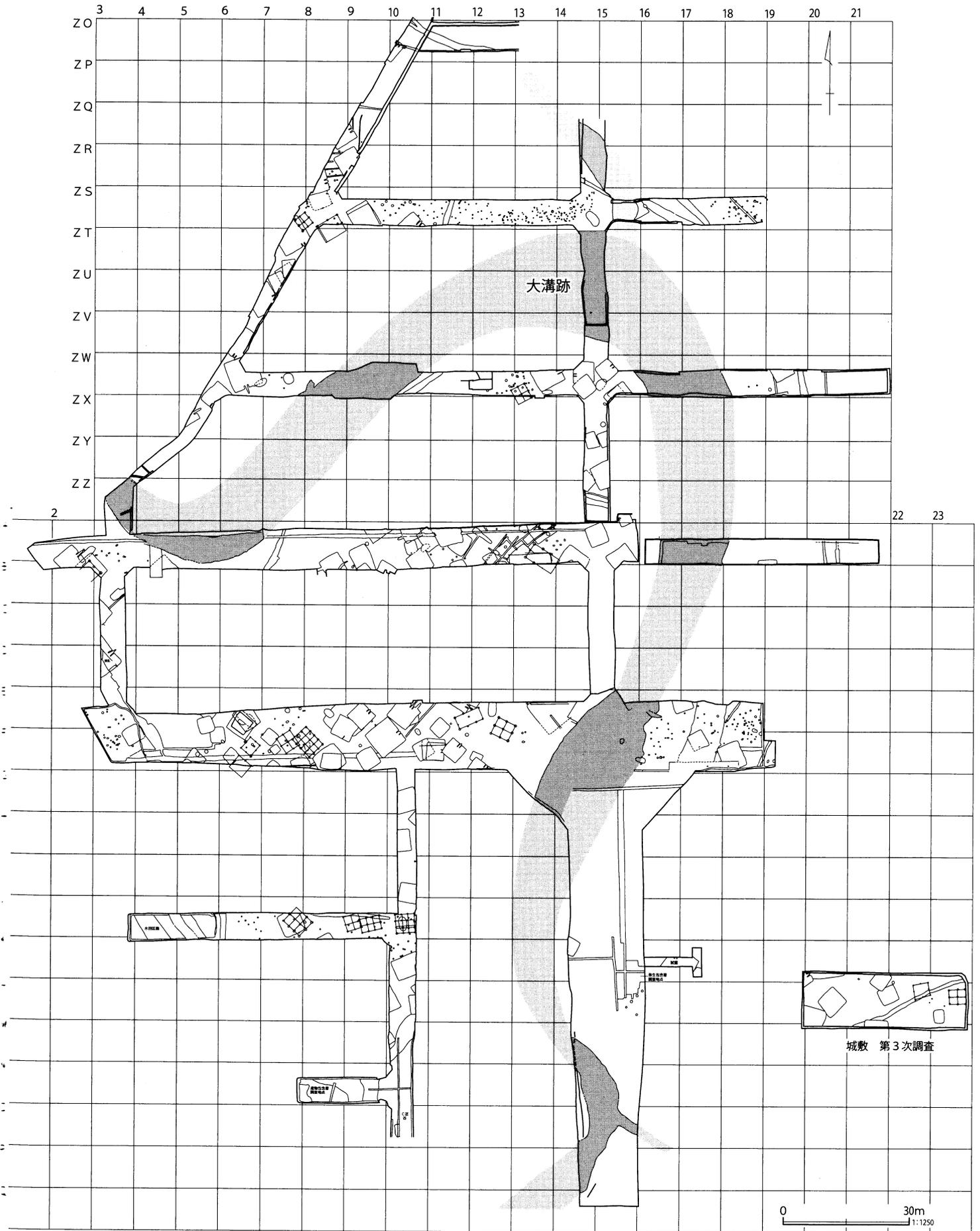
のであろう。五領期の壺や吉ヶ谷系甕、鬼高期の模倣坏、須恵器坏H身等とともに、多量の木製品が出土した。槽、木製輪鏡の他、楣や垂木等の建築部材が出土した。

ZT-14グリッド周辺(SD4第1地点)からは、大溝跡がほぼ埋没した段階の遺物として須恵器長頸瓶や須恵器蓋、土師器北武蔵型暗文坏などがあり、凡そ7世紀後半～8世紀初頭頃にはほぼ埋没したことが分かる。大溝跡には大木が横たわり、その下から長さ3mにも及ぶ、一本から削り出した梯子、漆掻き痕の残る漆原木、紡織具、建築部材などが出土した。

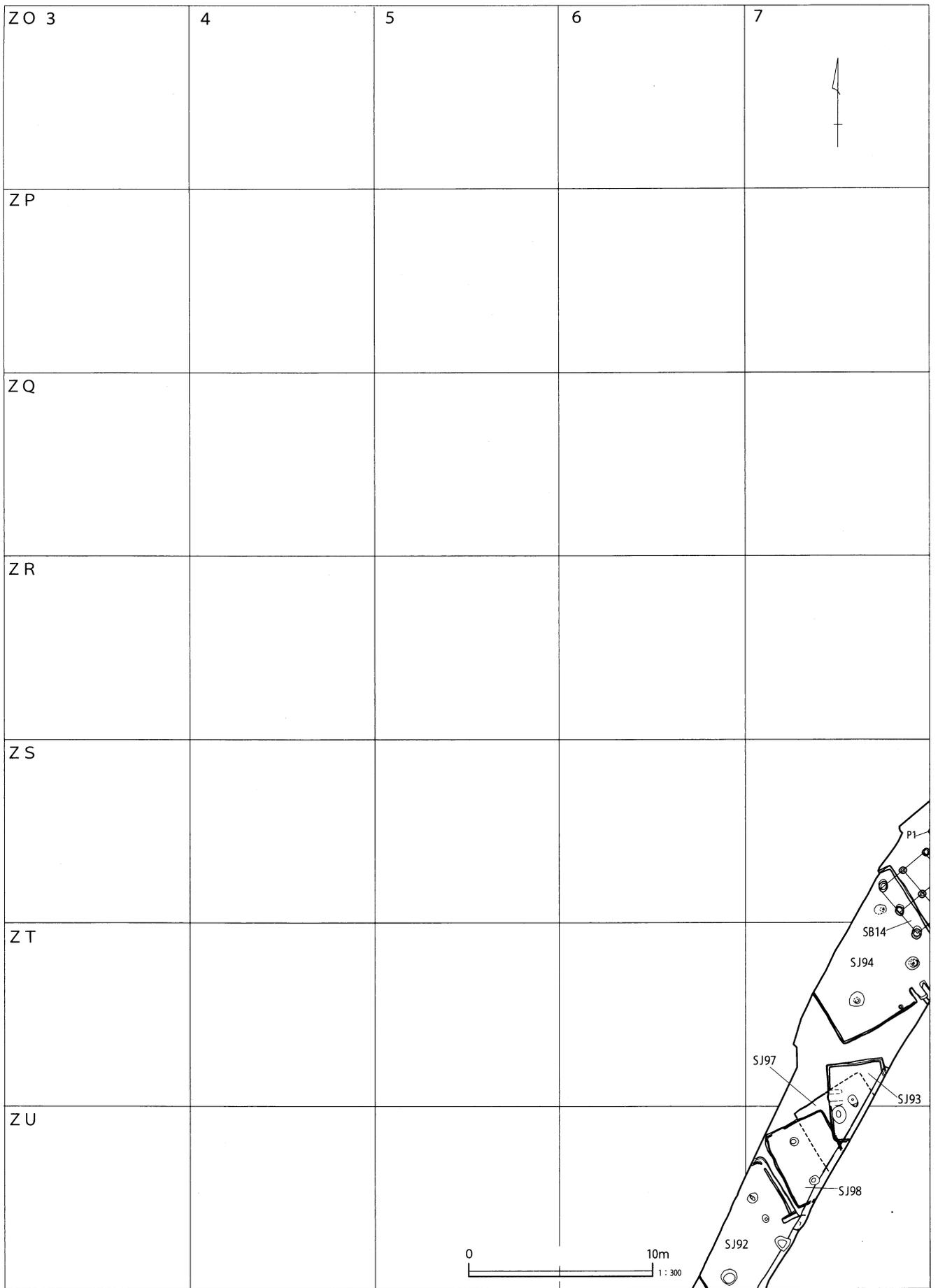
ZW-16・17グリッド(SD4第3地点)からは、完形品の土師器坏(模倣坏)5点が、西岸テラスから投げ込まれたような状況で出土した。その周囲からは須恵器樽形甕が細片になった状態で出土した。おそらく、故意に破碎したうえで、撒いたと思われる。樽形甕は陶邑産の、いわゆる初期須恵器(TK83=TK73併行段階)と思われる貴重な資料である。水に関わる何らかの祭祀儀礼が執り行われたと考えられる。

今年度報告する地域の概要は以上であるが、次回報告地域からも大溝跡(河川跡)から多量の遺物が出土している。竪杵・砧・田下駄等の農具、木鏃・弓等の武器、杭や建物の扉材2点をはじめとする建築部材など、多種多様な木製品が出土している。特に、扉材の出土は、周囲に特殊な建物が存在したことを物語る資料である。また、大溝跡のテラス部からは、袋状鉄斧と壺2点が並べて置かれていた状態で出土した。大溝跡に関わる祭祀の一形態であろうか。

集落域からは、掘立柱建物跡が多数検出されている。掘立柱建物跡は方形の総柱建物が主体である。最大規模は4×3間総柱、通常は3×2間、または2×2間程度である。建物の規模から、その多くは高床倉庫として機能したものと考えられる。集落の存続期間から、確実に古墳時代の後



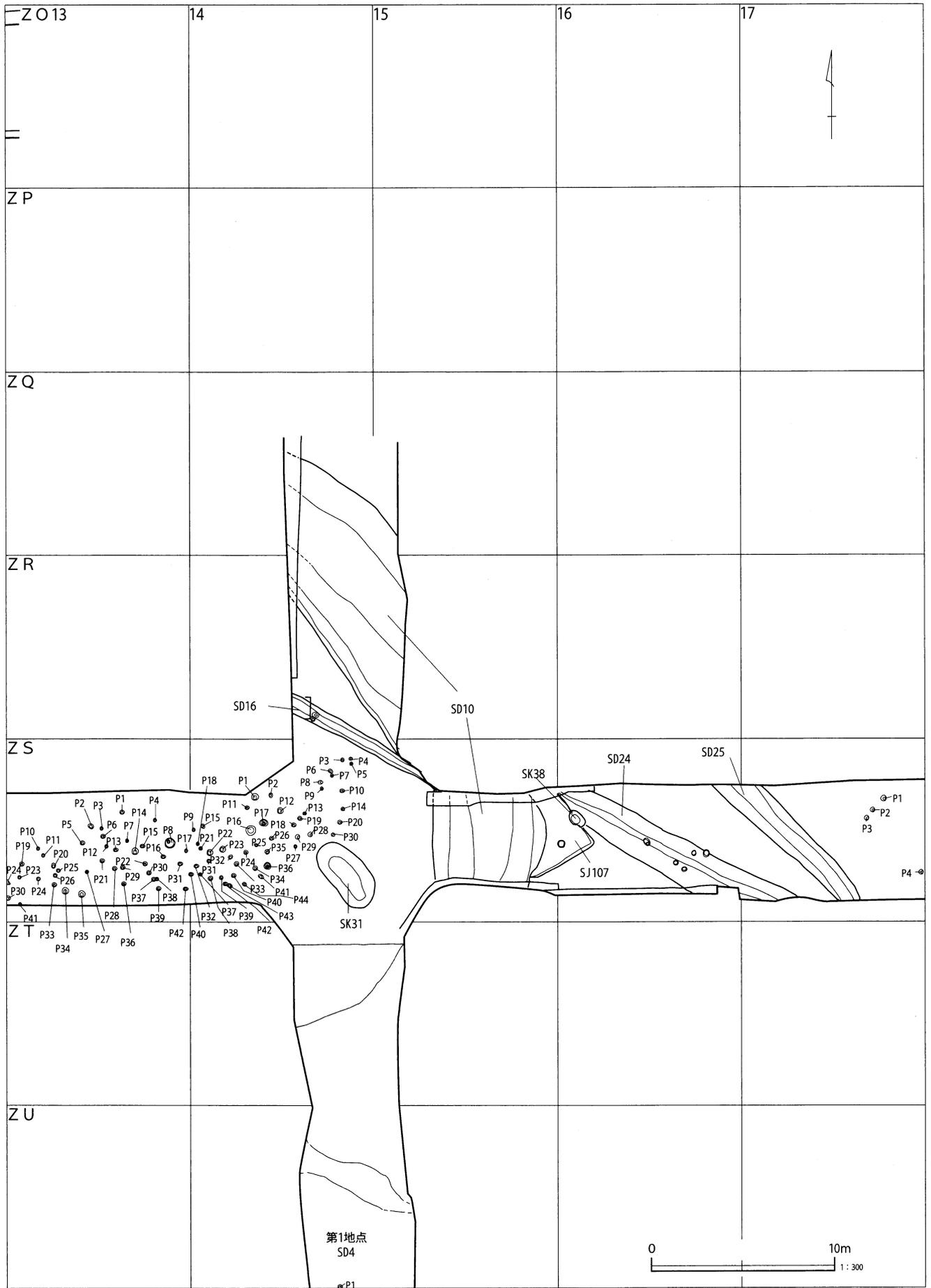
第24図 城敷遺跡全体図 (1/1250)



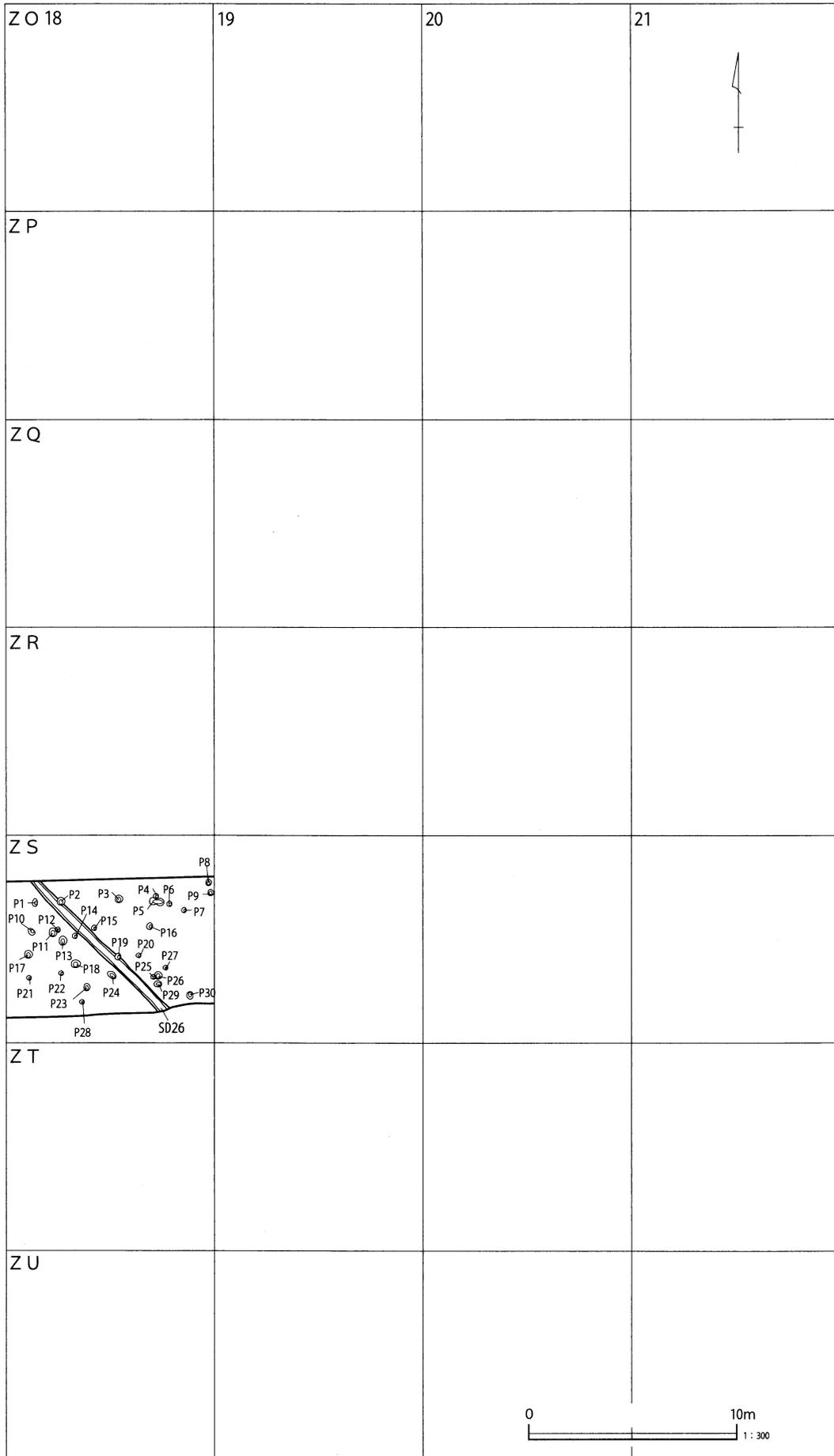
第25図 城敷遺跡全測図(1) (1/300)



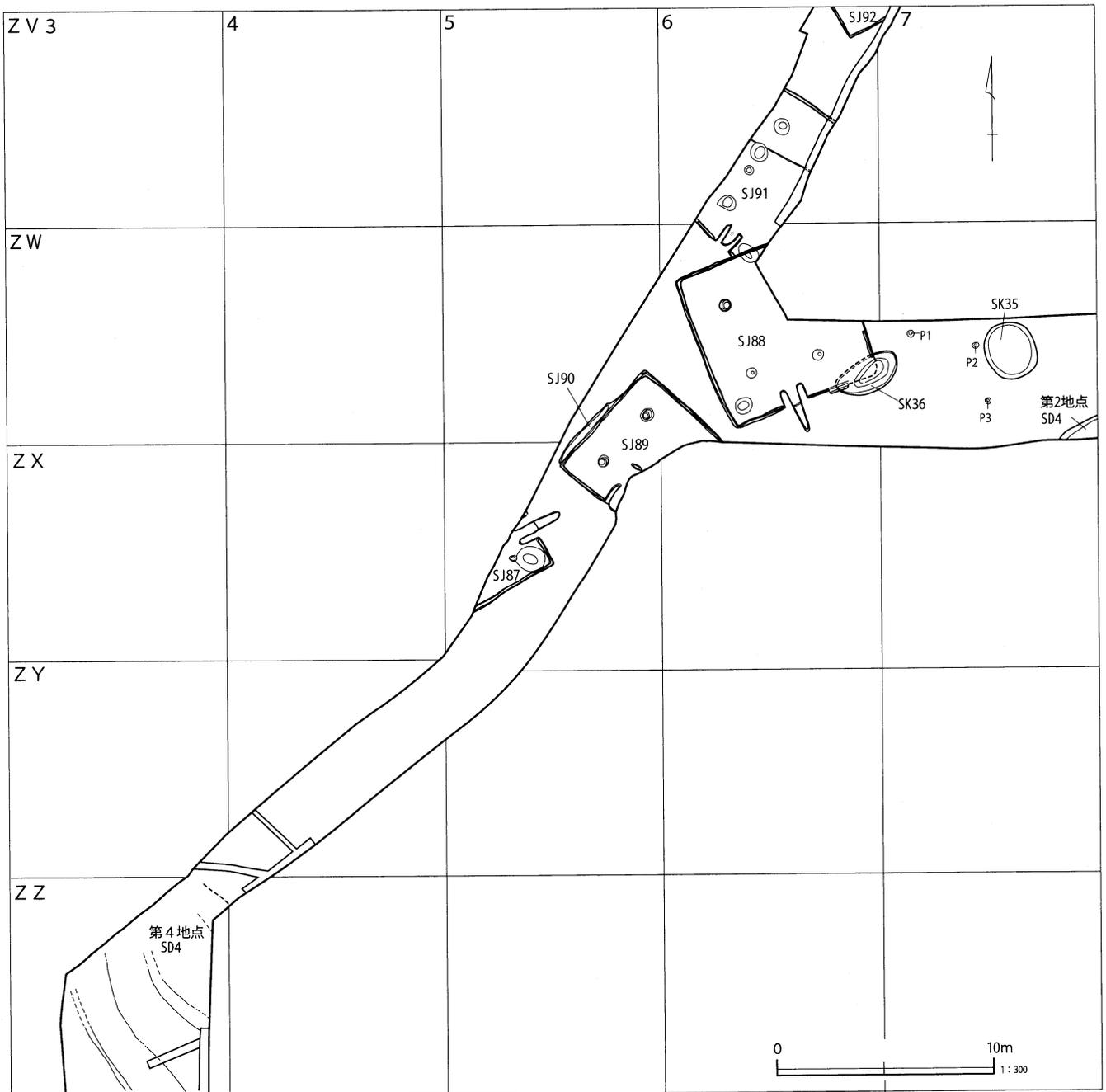
第26図 城敷遺跡全測図（2）（1/300）



第27図 城敷遺跡全測図 (3) (1/300)



第28図 城敷遺跡全測図（4）（1/300）



第29図 城敷遺跡全測図（5）（1/300）

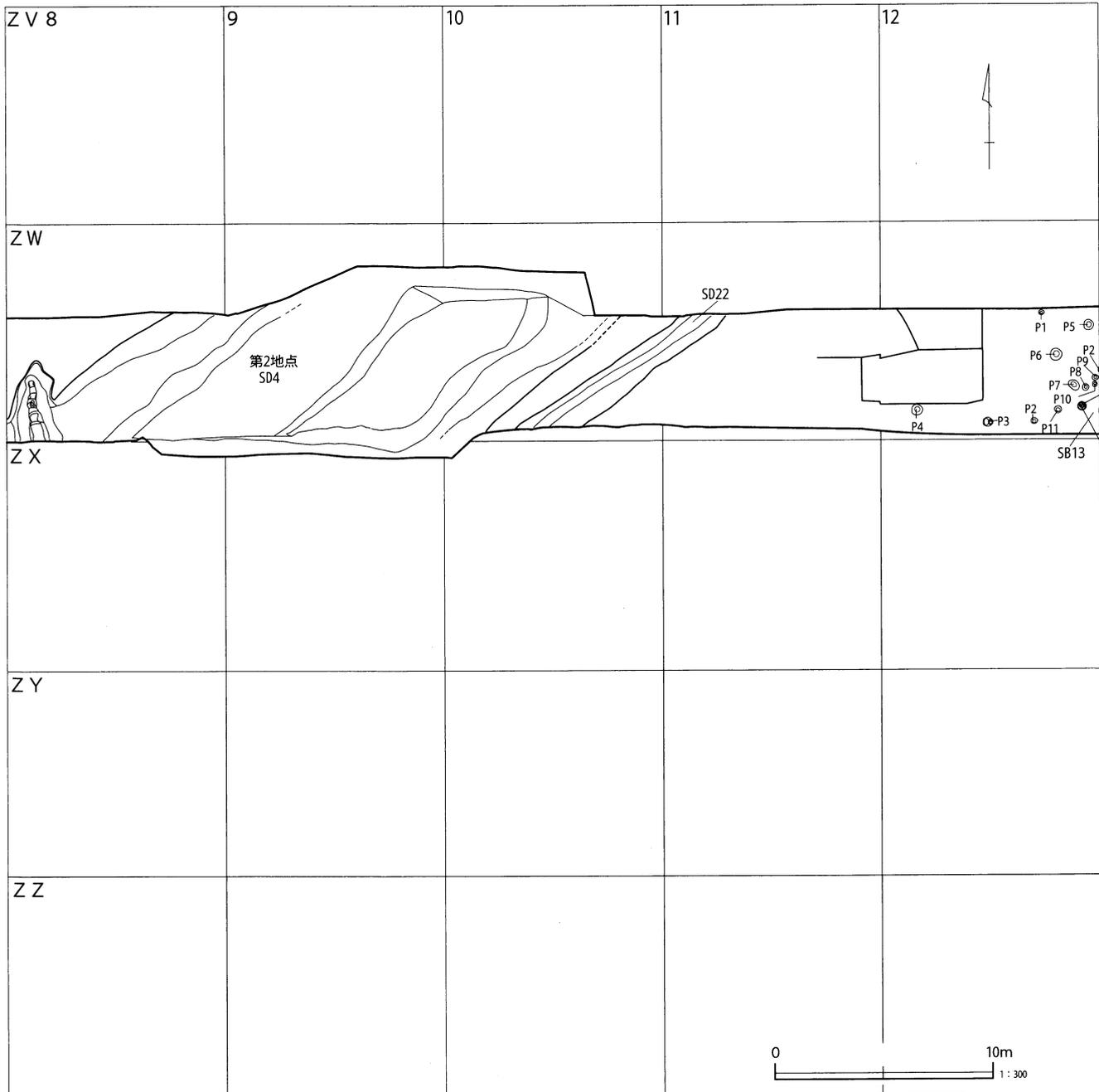
期初頭、またはそれ以前に限定されるものである。多数の高床倉庫の存在から、多量の動産蓄積が可能であった、富裕なムラをイメージできる。

掘立柱建物跡に接して石製模造品の集中域が検出され、また掘立柱建物跡と土器類の集中域が重なる場所がみついている。これらは、建物に伴う祭祀、或いは建物で執り行われていた祭祀の存在を予想させるものがある。

いずれにせよ、城敷遺跡は直接河川と共存した

集落遺跡で、遺跡背後に広大で肥沃な水田地帯を控えた拠点的な集落遺跡であったことは疑いない。その盛衰は、河川の埋没や堆積環境の変化に規定されたものと推定される。そればかりではなく、反町遺跡や銭塚遺跡の動向とも連動したことが予想される。

建物に接して石製模造品の集中域が検出された場所、掘立柱建物跡と土器類の集中域が重なる場所が検出され、建物に伴う祭祀、或いは建物で



第30図 城敷遺跡全測図（6）（1/300）

執り行う祭祀の存在を予想させるものがある。

いずれにせよ、城敷遺跡は直接河川と共存した集落遺跡であり、その盛衰は河川の埋没や堆積環境の変化に規定されたものと予想される。さらに

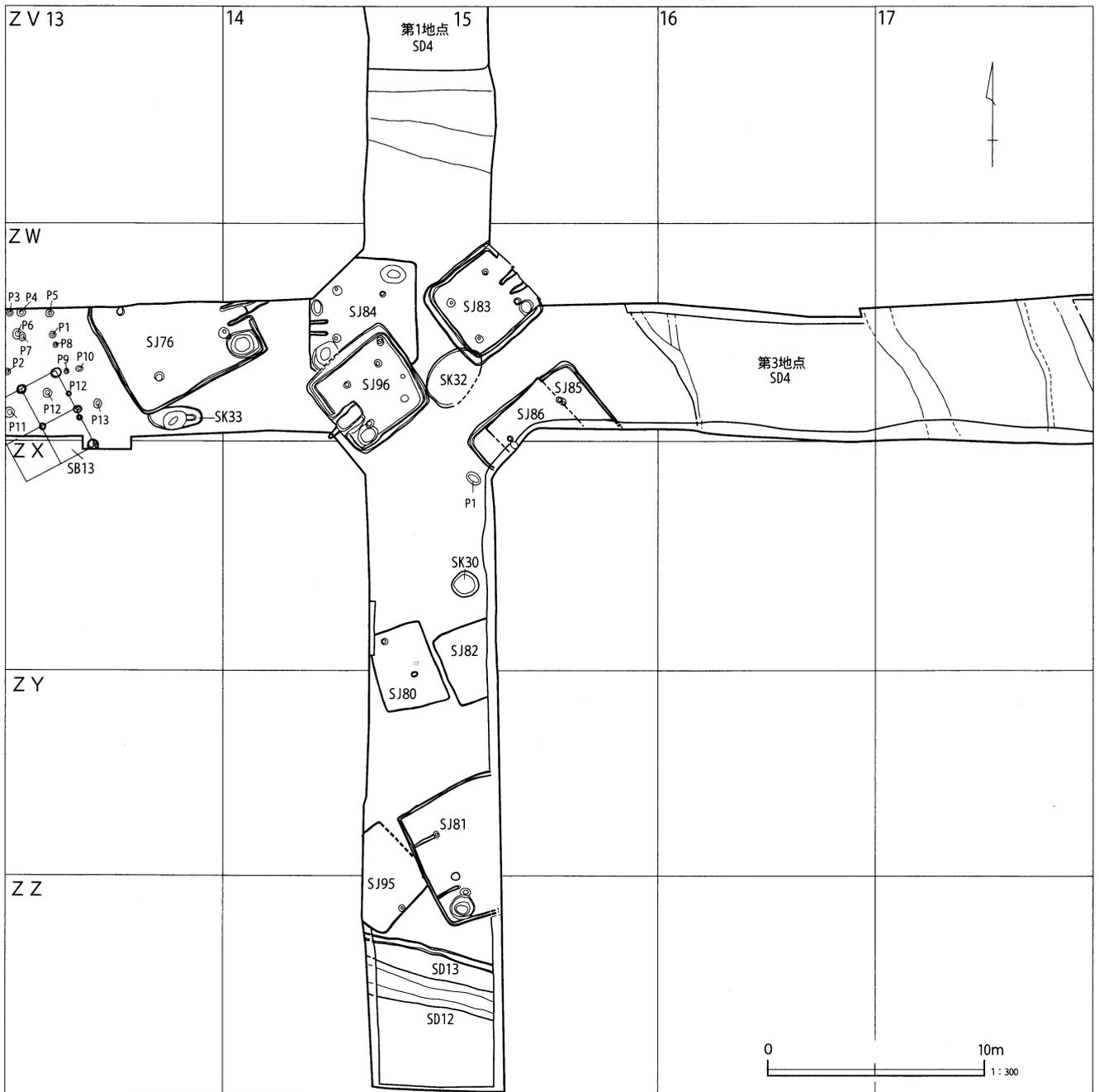
反町遺跡や銭塚遺跡の動向とも連動したものであったろう。遺跡背後に広大で肥沃な水田地帯を控えた拠点的な集落遺跡であったことは疑いない。

4. 反町遺跡の概要

反町遺跡は現在までに5次に亘る調査が実施されてきた。

第1次・2次、4次、5次調査は、本区画整理

事業に伴う街路部分の調査である。第3次調査は区画整理事業地内に進出する大規模店舗開発に伴うもので、調査区は第1次・2次調査区と国道



第31図 城敷遺跡全測図（7）（1/300）

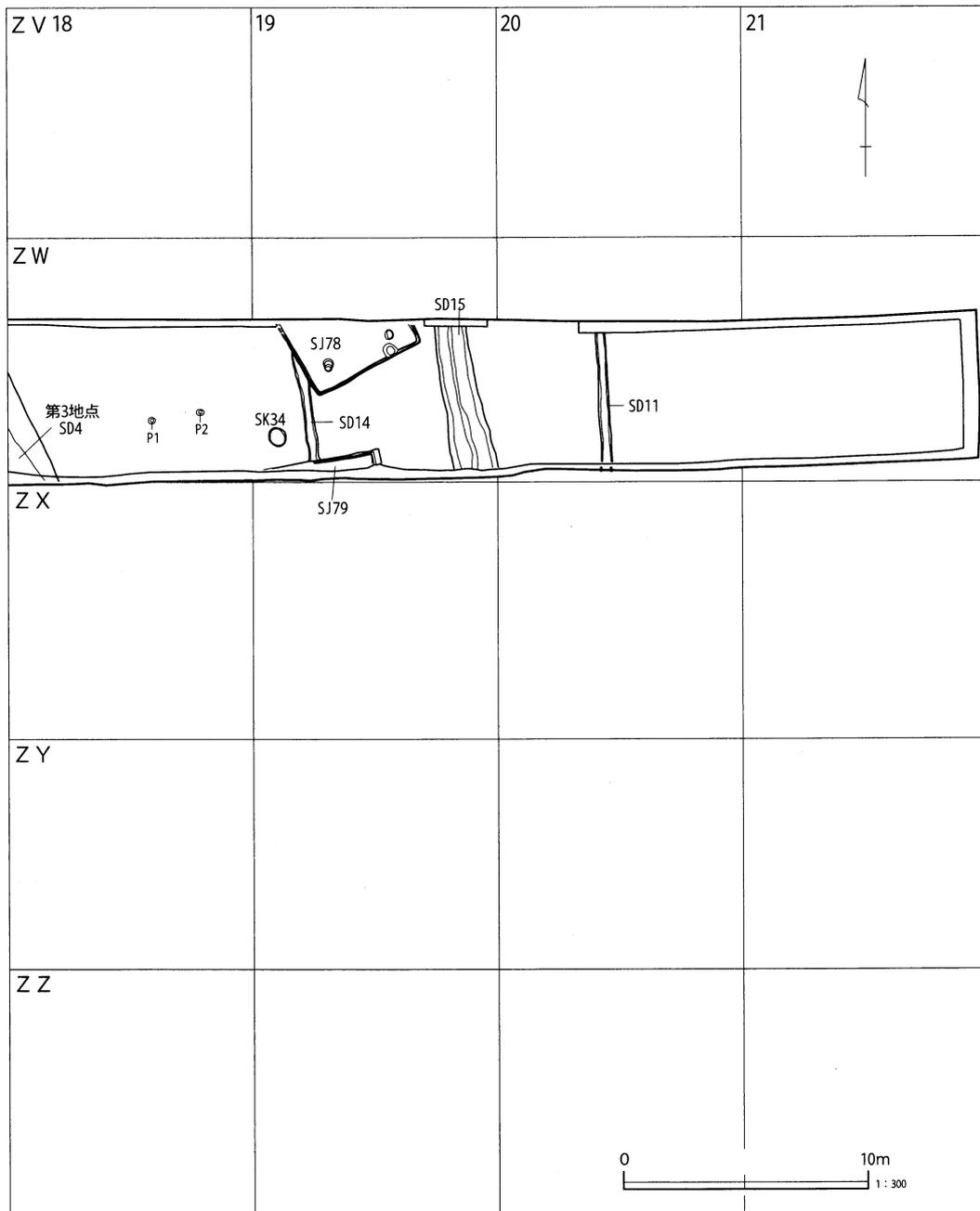
407号バイパスに挟まれた区画に位置する。

第1・2次調査は、A～D区にかけて15,395㎡の範囲で実施した。

遺跡全体では縄文時代後期から江戸時代にまでわたる遺構と多量の遺物を検出したが、中心となる時期は弥生時代中期から弥生時代後期前半、古墳時代前期～後期、平安時代である。第1次・2次調査で検出された遺構総数は竪穴住居跡117軒、方形周溝墓7基、土器棺墓2基、大溝跡（河

川跡）5条、溝跡68条、土壙61基である。現在、整理を続行しているが、その一部は昨年度事業団報告書第361集『反町遺跡Ⅰ』として刊行した。

遺跡の特徴を端的に述べれば、河川(大溝)と共存した集落とでも言えようか。これは銭塚・城敷遺跡にも共通することであるが、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代から中世に至るまで、河川の存続期間に合わせて生活や生産、祭祀等様々な「場」に利用していたようだ。



第32図 城敷遺跡全測図(8) (1/300)

弥生時代中期から後期前半の遺構はA区では
 竪穴住居跡8軒、方形周溝墓4基、溝跡3条、土
 器棺墓2基を検出した。遺構の分布の中心はB区
 を除く、A区からC区にかけてである。

中期段階(宮ノ台式)では、A・C区双方に集
 落が展開している。C区の第107号住居跡は12m
 ×9.5mを測る大型住居跡である。またA区の南
 側からは大規模な宮ノ台期の溝跡を検出した。

後期段階(岩鼻式)には土地利用が一変し、A

区が墓域、C区が集落域を形成する。A区の墓域
 は方形周溝墓と土器棺墓で構成されている。出土
 遺物は岩鼻式土器が中心である。埼玉県域では後
 期前半の様相がほとんど明らかでないが、当地域
 はその様相を伝える数少ないものといえよう。

後期後半の吉ヶ谷式の遺構は検出されていない。

古墳時代前期(五領式)は最盛期を迎える。A
 区では方形周溝墓3基が検出された。B・C区か
 らは数十軒の竪穴住居跡が検出されている。D区、

並びに後述する第4次調査ではこの時期の方形周溝墓を検出した。B・C区が集落域、その南側のA区からD区にかけて墓域となっている。

また、B区からは古墳時代前期の水晶製勾玉と緑色凝灰岩製管玉の玉作り工房を検出した。水晶製品の玉作り工房は関東地方では初例となる。古墳時代中期から後期の遺構は、竪穴住居跡がB区で2軒、掘立柱建物跡がC区で1棟検出された。古墳は前方後円墳1基、円墳11基を検出した。前方後円墳前方部からは粘土槨を検出し、鉄剣一振りが出土した。

奈良・平安時代の遺構はA区から溝跡2条が、B区から竪穴住居跡2軒、溝跡4条を検出した。

大溝（河川跡）は調査区内の4箇所から検出された。第3・48・36号溝跡は本来蛇行した一つの流路跡の可能性はある。

第36号溝跡の上層、最上層の川岸に、平安時代の「神矢」「弓」と書かれた墨書土器を中心とした須恵器坏、土師器甕が配列された状態で出土した。流路の中からは雁股鎌が3点出土し、時期的にも合致することから流路を舞台とした祭祀が行われた可能性が高い。径1.5mにも及ぶ大型の籠が出土したが、中世段階のものである可能性が高い。第3号溝跡からは奈良時代の「三田万呂」や「飯万呂」と記した墨書土器がやはり岸辺から出土し、同様に祭祀跡の可能性を考えた。

古代末から中世では、調査区内に明瞭な遺構は認められないが、河川跡（SD36）の中からは漆椀と金銅製花瓶、曲物が出土している。

第3次調査は平成19年10月から平成20年9月にかけて、大規模小売店舗建設に伴い実施された。第1・2次調査のA・C区を補完する内容で、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の大規模な集落跡、古墳群、大溝（河川跡）が面的に広がっていた。

古墳時代前期の住居跡は調査区全体に分布しており、第1・2次調査と合わせて250軒を上回

る軒数がある。古墳時代前期の集落としては県内屈指の規模である。住居跡の中には碧玉の剥片、原石が出土しているものがあり、玉作り工房が存在する可能性がある。また、仿製の内行花文鏡が出土している。古墳群はC区で調査されたものと一連のものである。河川跡は2箇所を確認されている。『反町I』で報告した大溝（第48号溝跡）に連続するもので、第48号溝跡から分岐する第79号溝跡は大規模な堰によって分水されている。堰は古墳時代前期のものと考えられ、2列の杭列と支保工によって構成された所謂合掌形の構造である。土器とともに木製品が多く出土している。鋤・鍬等の農具をはじめ、その未成品、建築部材が出土している。中でも古墳時代前期の白は完成品で、関東地方では唯一のものである。

第4次調査は平成20年4月から9月にかけて、一連の第二土地区画整理事業の一環として実施された。第1・2次調査のD区に接する南北の調査区で、面積は1,840㎡である。古墳時代前期の竪穴住居跡5軒、方形周溝墓3基などが検出された。調査区中央に大溝（河川跡）1箇所が確認され、遺構の大半はその南側に位置する。方形周溝墓3基は近接（接続）して築造されていた。周溝から底部穿孔壺や赤色顔料が出土している。

大溝は河川跡である。幅40m、深さ4mで、土器、木製品が出土した。第1～3次調査の河川跡の延長になる可能性がある。

第5次調査は第1次・2次調査区B区北端から東に延びる街路予定地で、平成20年5月から8月にかけて調査した。調査面積は1,092㎡で、竪穴住居跡41軒、古墳1基等が検出された。

第1・2次調査B区集落の東側に隣接する。古墳時代前期の竪穴住居跡が40軒を占め、中には碧玉のチップが覆土中から出土した例があり、2次B区から検出された玉作り工房に関連するものと思われる。古墳は方形墳と思われるが、墳形・時期の検討が必要である。

並びに後述する第4次調査ではこの時期の方形周溝墓を検出した。B・C区が集落域、その南側のA区からD区にかけて墓域となっている。

また、B区からは古墳時代前期の水晶製勾玉と緑色凝灰岩製管玉の玉作り工房を検出した。水晶製品の玉作り工房は関東地方では初例となる。古墳時代中期から後期の遺構は、竪穴住居跡がB区で2軒、掘立柱建物跡がC区で1棟検出された。古墳は前方後円墳1基、円墳11基を検出した。前方後円墳前方部からは粘土槨を検出し、鉄剣一振りが出土した。

奈良・平安時代の遺構はA区から溝跡2条が、B区から竪穴住居跡2軒、溝跡4条を検出した。

大溝（河川跡）は調査区内の4箇所から検出された。第3・48・36号溝跡は本来蛇行した一つの流路跡の可能性はある。

第36号溝跡の上層、最上層の川岸に、平安時代の「神矢」「弓」と書かれた墨書土器を中心とした須恵器坏、土師器甕が配列された状態で出土した。流路の中からは雁股鍬が3点出土し、時期的にも合致することから流路を舞台とした祭祀が行われた可能性が高い。径1.5mにも及ぶ大型の籠が出土したが、中世段階のものである可能性が高い。第3号溝跡からは奈良時代の「三田万呂」や「飯万呂」と記した墨書土器がやはり岸辺から出土し、同様に祭祀跡の可能性を考えた。

古代末から中世では、調査区内に明瞭な遺構は認められないが、河川跡（SD36）の中からは漆椀と金銅製花瓶、曲物が出土している。

第3次調査は平成19年10月から平成20年9月にかけて、大規模小売店舗建設に伴い実施された。第1・2次調査のA・C区を補完する内容で、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の大規模な集落跡、古墳群、大溝（河川跡）が面的に広がっていた。

古墳時代前期の住居跡は調査区全体に分布しており、第1・2次調査と合わせて250軒を上回

る軒数がある。古墳時代前期の集落としては県内屈指の規模である。住居跡の中には碧玉の剥片、原石が出土しているものがあり、玉作り工房が存在する可能性がある。また、彷彿の内行花文鏡が出土している。古墳群はC区で調査されたものと一連のものである。河川跡は2箇所を確認されている。『反町I』で報告した大溝（第48号溝跡）に連続するもので、第48号溝跡から分岐する第79号溝跡は大規模な堰によって分水されている。堰は古墳時代前期のものと考えられ、2列の杭列と支保工によって構成された所謂合掌形の構造である。土器とともに木製品が多く出土している。鋤・鍬等の農具をはじめ、その未成品、建築部材が出土している。中でも古墳時代前期の白は完形品で、関東地方では唯一のものである。

第4次調査は平成20年4月から9月にかけて、一連の第二土地区画整理事業の一環として実施された。第1・2次調査のD区に接する南北の調査区で、面積は1,840㎡である。古墳時代前期の竪穴住居跡5軒、方形周溝墓3基などが検出された。調査区中央に大溝（河川跡）1箇所が確認され、遺構の大半はその南側に位置する。方形周溝墓3基は近接（接続）して築造されていた。周溝から底部穿孔壺や赤色顔料が出土している。

大溝は河川跡である。幅40m、深さ4mで、土器、木製品が出土した。第1～3次調査の河川跡の延長になる可能性がある。

第5次調査は第1次・2次調査区B区北端から東に延びる街路予定地で、平成20年5月から8月にかけて調査した。調査面積は1,092㎡で、竪穴住居跡41軒、古墳1基等が検出された。

第1・2次調査B区集落の東側に隣接する。古墳時代前期の竪穴住居跡が40軒を占め、中には碧玉のチップが覆土中から出土した例があり、2次B区から検出された玉作り工房に関連するものと思われる。古墳は方形墳と思われるが、墳形・時期の検討が必要である。

IV 銭塚遺跡の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

銭塚遺跡第2次調査で検出された竪穴住居跡は62軒である。第1号住居跡は、銭塚遺跡第1次調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第340集『西浦／野本氏館跡／山王裏／銭塚』）で報告されている。

第2号住居跡（第33図）

第2号住居跡はZN-10・11グリッドに位置する。住居北西部分は調査区外に延びている。北東壁には第20号土壌が重複し、第20号土壌が新しい。

平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長3.20m、短軸長2.58m、深さ0.36mである。主軸方位はN-41°-Wを指す。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、図示できたのは土師器坏1点（第34図1）のみで、調査区壁際から出土した。

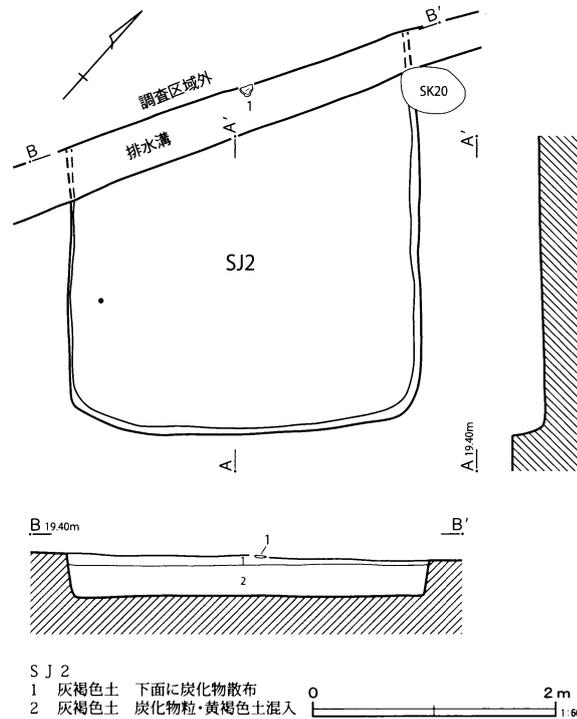
第34図1は土師器坏。推定口径14.0cm。残存高4.9cm。胎土に角閃石・赤色粒子・白色粒子含む。残存率15%。焼成は普通で色調は橙色。註記No.1。いわゆる北武蔵型坏と考えられる。口径は小片のため不安定で、もう少し大きくなる可能性がある。丸底形態であることから8世紀前半（本書Ⅶ期）頃に比定される。

第3号住居跡（第35図）

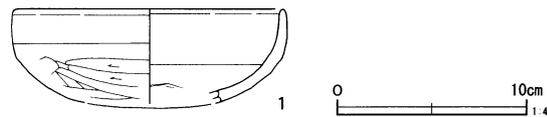
第3号住居跡はZK-12・13、ZL-12グリッドに位置する。住居跡北西部は調査区外に延びている。重複する第1号堤防状遺構を切っていた。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長6.52m、短軸長4.60m、深さ0.35mである。主軸方位はN-131°-Wを指す。

床面は掘り方上に淡褐色土の貼床が形成され、全体的に硬化していた。



第33図 第2号住居跡

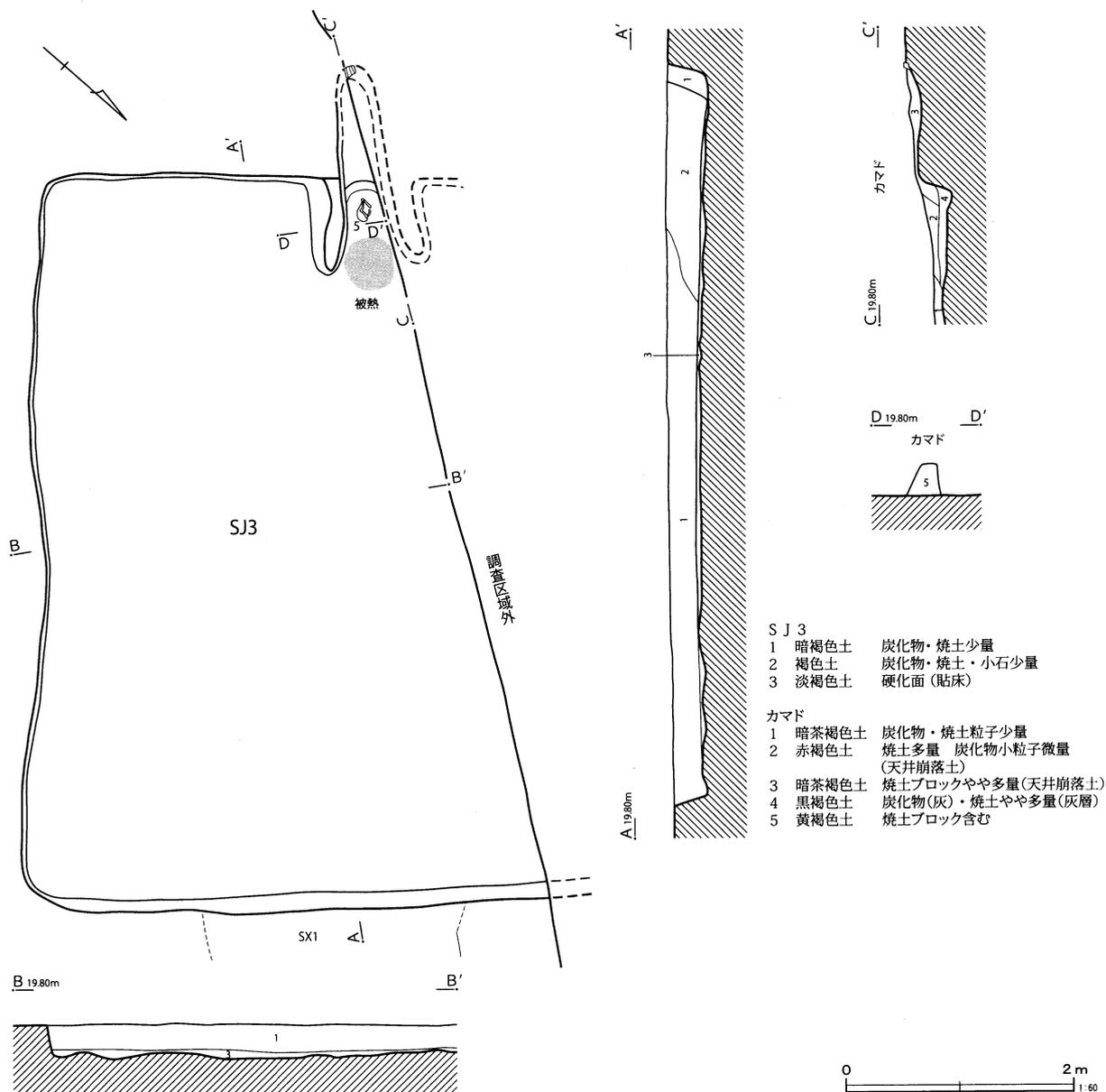


第34図 第2号住居跡出土遺物

カマドは南西壁に設けられていた。中心から右袖部にかけては調査区外に位置する。規模は、全長1.82m、残存幅0.67mである。煙道部は燃烧部奥壁から約27cm比高差で垂直に立ち上がった後、水平方向に95cm延びる。

燃烧部は概ね壁内に収まる。残存幅は27cm、底面は奥壁に向かってわずかに傾斜し、灰層が堆積していた。焚き口部の底面は被熱していた。袖は上部が崩落していたが、黄褐色の粘質土で構成され、焼土ブロックが多量に含まれていた。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。



第35図 第3号住居跡

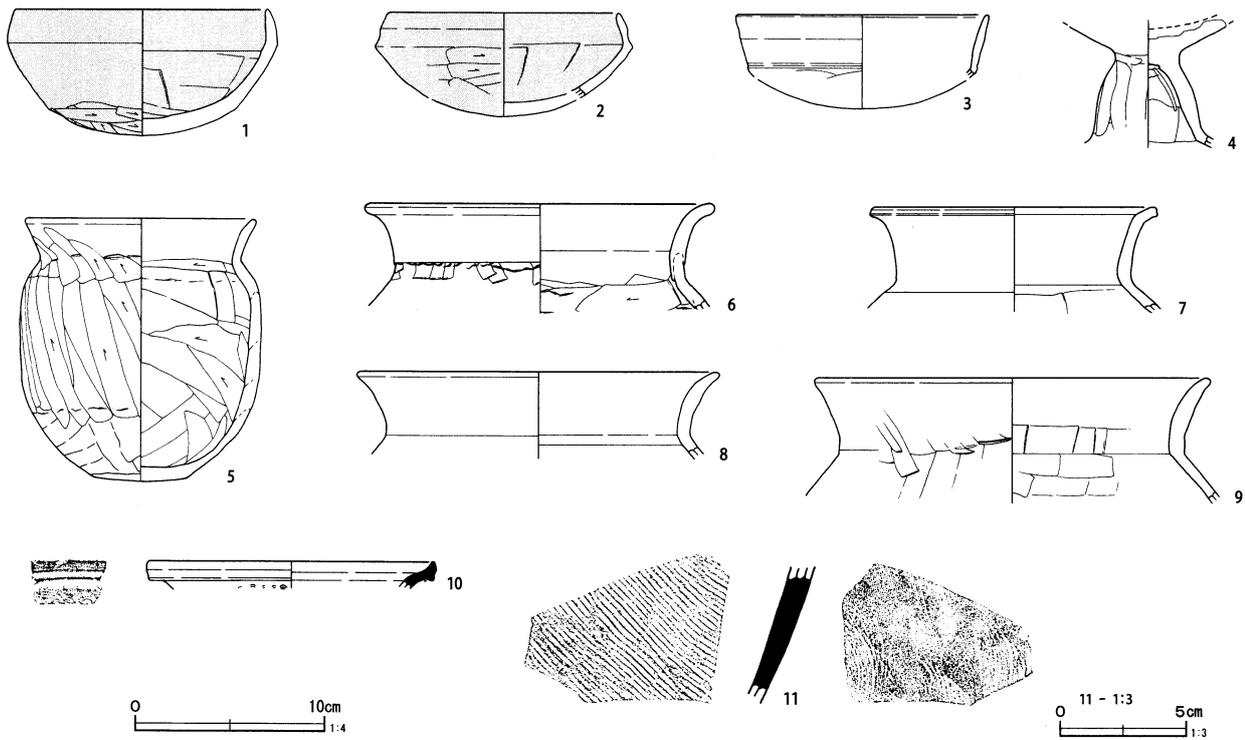
出土遺物は土師器と須恵器がある。覆土とカマドから出土したが、量的には少ない(第36図)。1は口縁部が内湾気味に立ち上がる深椀風の坏である。底部が不鮮明であるが、本来全面赤彩されたと思われる。2は比企型坏身模倣坏で、全面赤彩される。3は坏蓋模倣坏で、非赤彩。胎土から北武蔵からの搬入品と推定される。4は高坏。赤彩は不明であるが、脚部が短く中膨らみする。白色針状物質含む特徴は比企型(在地産)高坏である。5は小型甕でカマド燃焼部から出土した。6~8は甕。9は壺である。10・11は須恵器。10

は口縁部に櫛描波状文が施文される。東海産か。11の甕は内面細かい同心円文当具をナデ消す。湖西産で、混入品と考えられる。住居跡の時期は古墳時代後期初頭(本書Ⅳ期(古))と考えられる。

第4号住居跡(第37図)

第4号住居跡はZL-12グリッドに位置する。住居跡北西隅は攪乱を受けていた。平面形はやや歪んだ方形で、規模は長軸長3.40m、短軸長3.06m、深さ0.36mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、中央部付近を中心に薄い炭



第36図 第3号住居跡出土遺物

第2表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(132)	6.7	-	CEGL	35	普通	橙	全面赤彩 比企型		35-1
2	土師器	坏	(120)	4.5	-	EHI	20	良好	赤	全面赤彩 比企型坏身模倣		
3	土師器	坏	(132)	3.3	-	EHI	10	普通	明赤褐	無彩 北武蔵の土器		
4	土師器	高坏	-	6.8	-	EHIJ	70	普通	にぶい赤褐	赤彩不明 比企型 脚部ナデ 内面ケズリ		
5	土師器	小型甕	(118)	138	50	EG IJK	50	普通	橙	胴部ケズリ 内面ヘラナデ (ケズリ風) No.1		35-2
6	土師器	甕	(176)	5.9	-	DEHIK	30	普通	にぶい橙	肩部無調整とヘラナデ		
7	土師器	甕	(149)	5.5	-	ACEGHI	40	普通	橙	胴部ナデ		
8	土師器	甕	(185)	4.7	-	DHIJK	25	普通	橙	胴部ナデ		
9	土師器	壺	(202)	6.6	-	CHI J	10	普通	浅黄橙	外面ヘラナデか		
10	須恵器	壺?	(150)	1.5	-	IK	5	普通	灰	素地土:灰白色 精選 東海産か 口縁下に波状文		
11	須恵器	甕	-	5.5	-	G I K	5	良好	灰白	外:平行叩き 内:同心円文当具 湖西産		

化物層が形成されていたが、硬化面は認められなかった。

ピットは1本検出された(P1)。深さ58cmと深く、住居に伴う柱穴と判断した。掘り方から土師器坏が1点出土した。

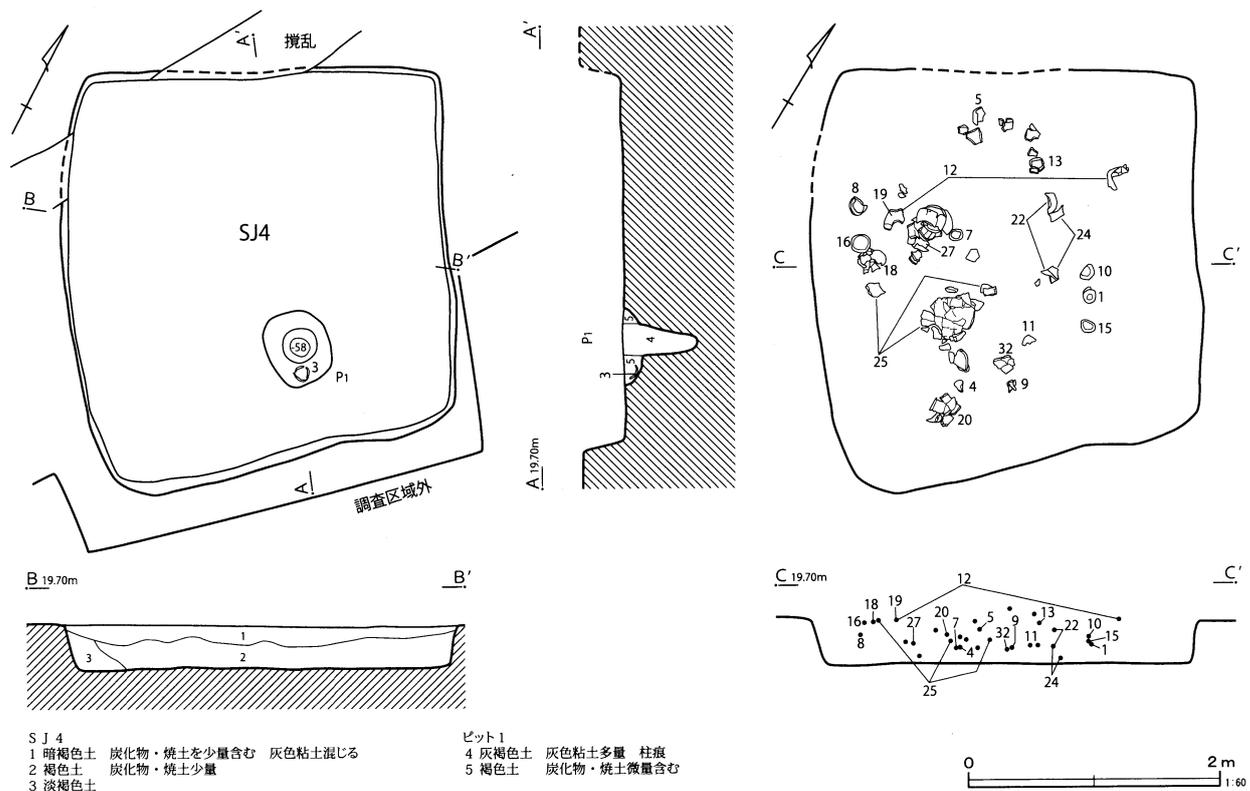
カマド、貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、床面から浮いた状況で多量に出土した(第38・39図)。壁際の遺物が高く、中央付近が低いことから、埋没過程で二次的に投棄された可能性が高い。

出土遺物は土師器坏・鉢・高坏・甕・小型甕・壺・

甑と須恵器甕がある。第38図1は須恵器甕で陶邑産か否かは不明であるが、シャープな作りで、口縁部と頸部に櫛描波状文、胴部に櫛歯状工具による列点文を施文する。2～4は口縁部が内湾する坏で、無彩。5～11は口縁部が内傾する坏で内面と底部を除く外面に赤彩が施される。坏身模倣の比企型模倣坏である。12の鉢、14～17の高坏も赤彩される。18・20は小型甕。19・21～25は甕である。26・27は壺か。32は甑である。

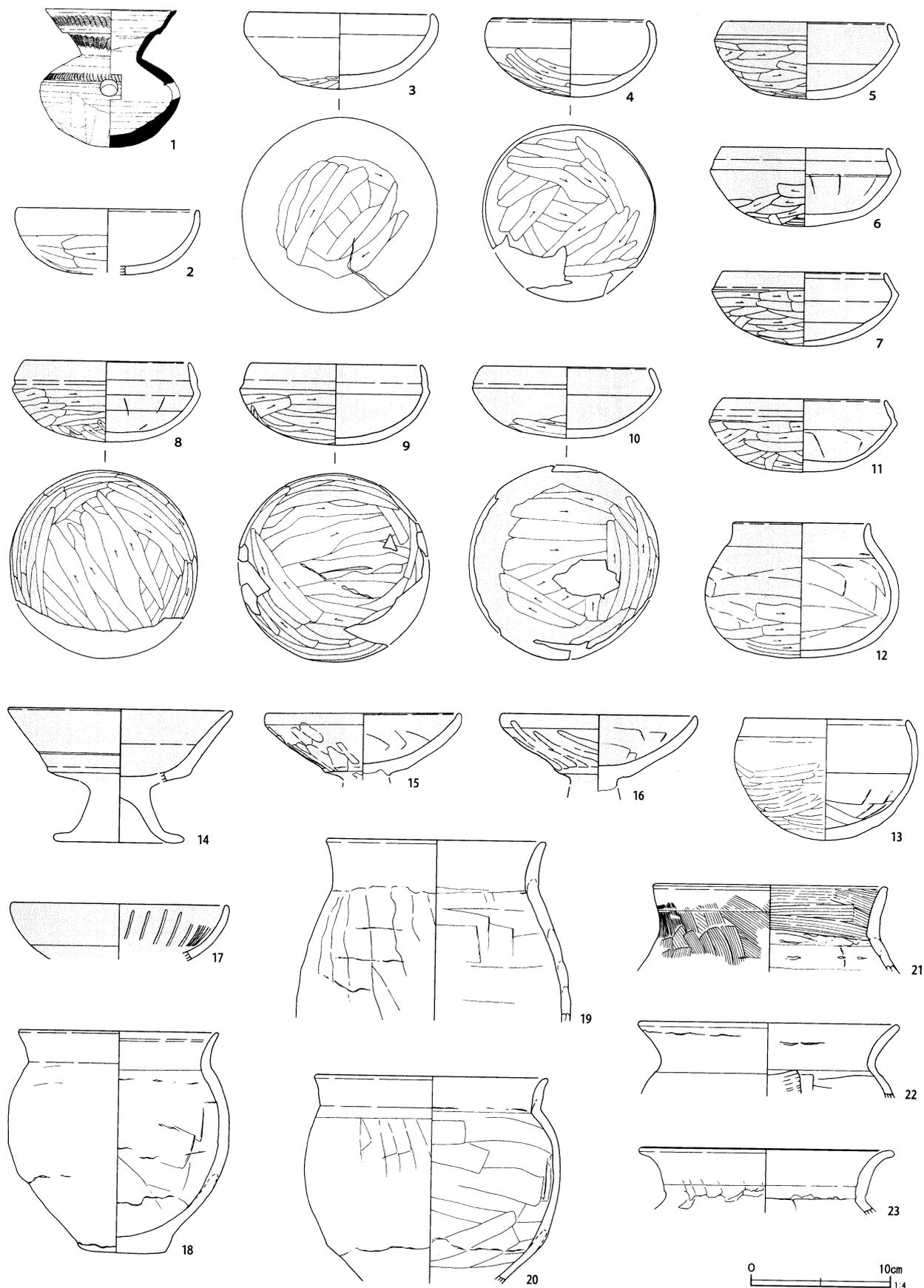
出土遺物の内、土師器甕は長胴化傾向にあり、坏身模倣坏の様相から概ね6世紀前半代に位置



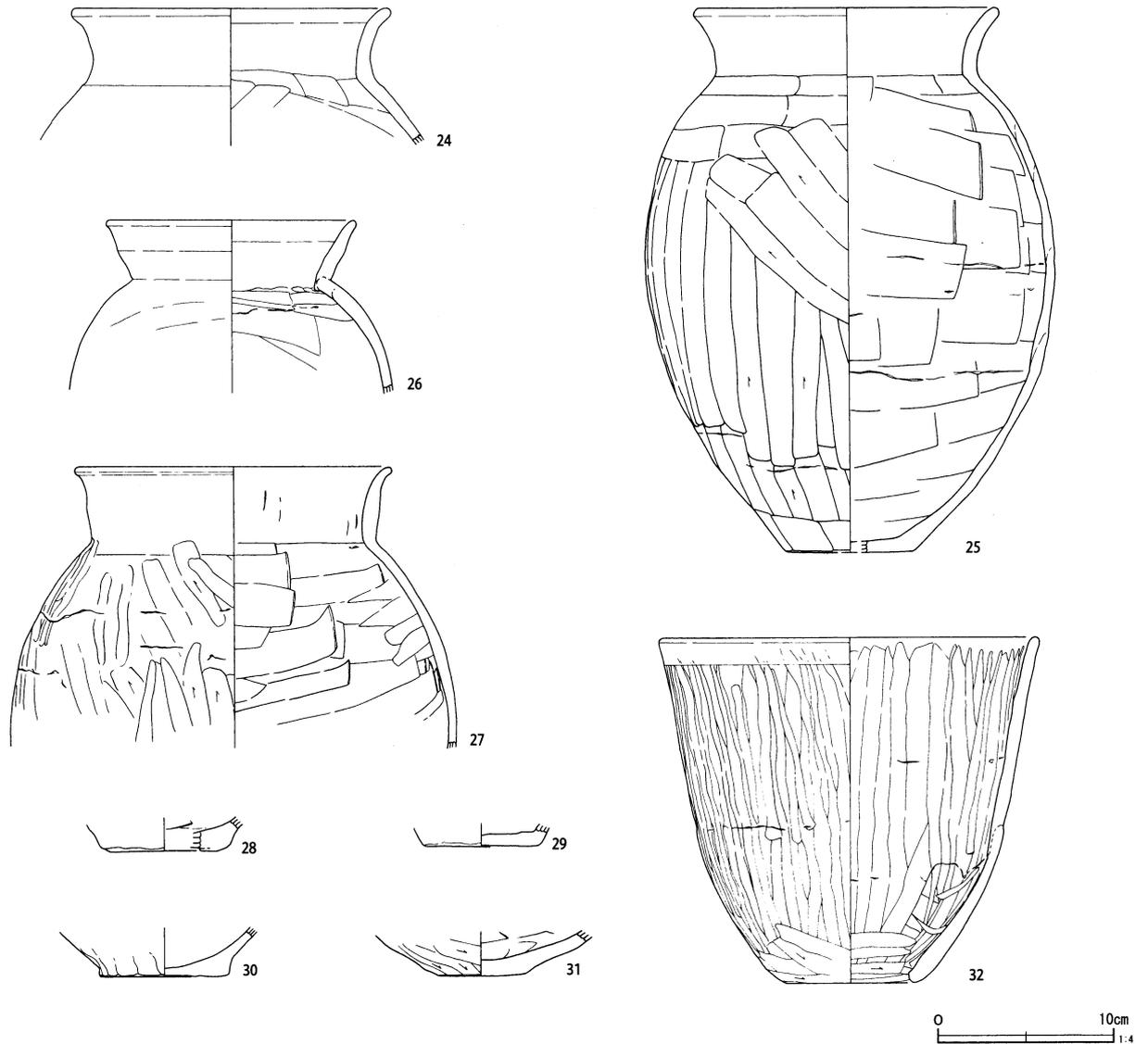
第37図 第4号住居跡

第3表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第38・39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	甗	(9.3)	9.9	-	I K L	80	良好	灰	堅緻 櫛描波状文と刺突文による加飾 シャープな作り 陶邑産TK23 No.1		35-5・6
2	土師器	坏	(14.0)	4.6	-	C E H I	25	普通	にぶい橙	無彩		35-3
3	土師器	坏	13.2	5.6	-	C E H K L	95	普通	橙	無彩 体部ナデ 底部ヘラケズリ 口唇部と見込み部摩滅 器面剥落 No.34		35-4
4	土師器	坏	11.4	5.6	-	C E H I K L	80	普通	赤褐	赤く焼いているが赤彩は無い 口唇部摩滅(使用によるもの か?) No.32		35-7
5	土師器	坏	11.7	5.5	-	E G I L	80	普通	にぶい橙	全面赤彩 比企型坏身模倣 No.11		35-8
6	土師器	坏	11.8	5.6	-	E G H I L	80	普通	橙	外底面除き赤彩 比企型坏身模倣		36-1
7	土師器	坏	11.6	5.2	-	C E G H I	95	良好	橙	比企型坏身模倣 外底面除き赤彩 No.23		36-2
8	土師器	坏	11.8	5.8	-	A I K	75	普通	橙	外底面除き赤彩 No.15		36-3
9	土師器	坏	12.2	5.8	-	D G H	80	普通	橙	比企型坏身模倣 外底面除き赤彩 No.30		36-4
10	土師器	坏	(12.0)	5.1	-	D E G H I L	85	普通	赤褐	比企型坏身模倣 外底面除き赤彩 径2~3mmの礫目立つ No.2		36-5
11	土師器	坏	(11.6)	5.3	-	E H I L	80	普通	にぶい赤褐	外底面除き赤彩 比企型坏身模倣 No.29		36-6
12	土師器	鉢	9.8	9.6	-	C E H I J L	70	普通	にぶい黄橙	赤彩 胴上位ナデ・下位ケズリ No.7・16		36-7
13	土師器	鉢	11.8	8.8	-	A B C H K	80	普通	橙	口縁部外面赤彩痕僅かに残るが大半は二次被熱を受け器面剥 落している 雲母状微粒子 体部ミガキ No.8		
14	土師器	高坏	(15.9)	5.2	-	B D H I	10	普通	橙	赤彩 外面弱い沈線1条 短脚高坏か?		
15	土師器	高坏	13.9	4.9	-	A C E I J	100	普通	にぶい橙	全面赤彩 比企産 No.31		
16	土師器	高坏	13.8	5.4	-	C E I J K	100	普通	にぶい橙	赤彩 赤彩部分は赤橙 比企(在地)産 No.20		
17	土師器	(高)坏	(15.4)	4.0	-	A C E H I J K L	20	普通	にぶい橙	内外面赤彩 内面放射暗文		
18	土師器	小型甕	14.5	16.0	6.5	A B E H I K	90	普通	赤褐	被熱著しく器面剥落し調整不明瞭 No.21		36-8
19	土師器	甕	(15.4)	13.0	-	C D E G H	20	普通	橙	胴部外面ヘラナデか 被熱により調整不明瞭 No.16		
20	土師器	小型甕	16.5	14.9	-	A B C E H I	80	普通	にぶい赤褐	外面被熱により器表剥離 No.33		37-1
21	土師器	甕	(16.2)	6.3	-	C D H	30	普通	橙	外面ハケ目後口縁部ヨコナデ 口縁部内部ハケ目		
22	土師器	甕	(18.2)	5.2	-	C E H I	25	普通	にぶい橙	胴部外面ナデ・内面ヘラナデ No.3・6		
23	土師器	甕	(17.6)	4.7	-	C H I J	15	普通	にぶい橙	口縁下位~胴部ヘラナデ		
24	土師器	甕	(17.4)	7.7	-	A C E H L	50	普通	橙	胴部外面ナデ・内面ヘラナデ No.3・5		



第38図 第4号住居跡出土遺物(1)



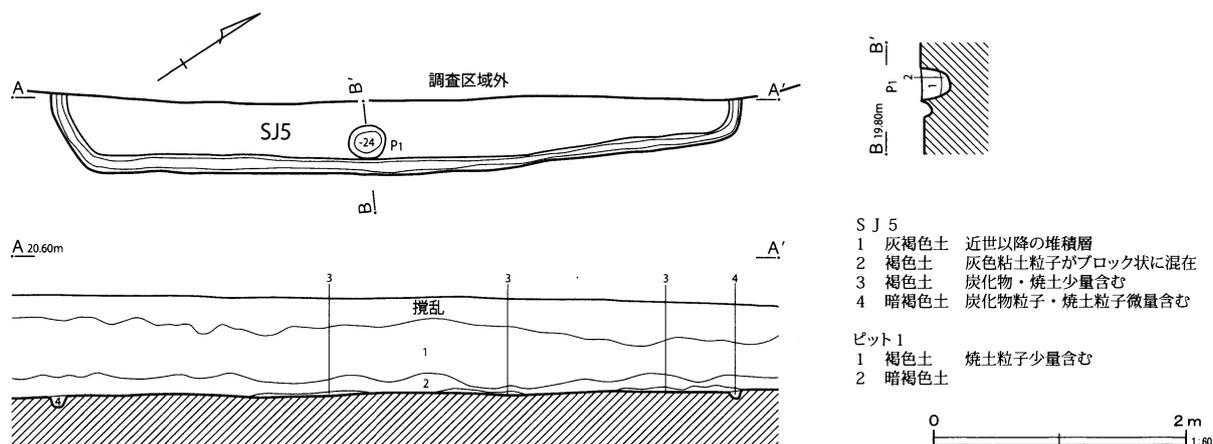
第39図 第4号住居跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
25	土師器	甕	16.8	31.0	(7.2)	CEHIJK	75	普通	にぶい赤褐	胴部ヘラケズリ後ナデ 肩部は丁寧なナデ 内面ヘラナデ	No22・25・26	37-2
26	土師器	壺	(13.8)	9.9	-	ABEH	40	普通	にぶい黄橙	雲母片岩状鉱物含む 胴部外面風化		
27	土師器	壺	(17.6)	16.0	-	BEHIK	35	普通	にぶい黄橙	絹雲母片岩と思われる 銀色の雲母状鉱物多量 脚ヘラナデ orナデ 脚中位ケズリ風 No19		
28	土師器	甕	-	1.9	(7.0)	ABCK	30	普通	灰褐	銀色の雲母状鉱物含む		
29	土師器	甕	-	1.3	(6.6)	CDEGH	30	普通	橙	内面にぶい黄橙		
30	土師器	甕	-	2.9	7.3	BCEHKL	50	普通	にぶい褐	外面ナデ 銀色の雲母状微粒子含む		
31	土師器	甕	-	2.8	5.0	ABCEHK	50	普通	にぶい赤褐	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ		
32	土師器	甕	(21.2)	19.5	(7.1)	ACEHIL	25	普通	橙	No28		

づけられる。一方須恵器甕は陶邑編年TK23併行と推定される。住居跡廃絶年代は古墳時代後期初頭である(Ⅳ期(古))。

第5号住居跡(第40図)

第5号住居跡はZL-12グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区外に位置し、住居跡南東壁と僅かに北西壁、北東隅が残存するのみであった。



第40図 第5号住居跡

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長5.42m、短軸長0.62mである。主軸方位はN-34°-Eを指す。

確認面がほぼ床面で、床面上に薄い炭化物層が形成されていた。ピットは1本検出された。住居跡南東壁を巡る壁溝と接している。深さ24cmと浅く、住居跡に伴うか否かは不明である。

壁溝は幅9~14cm、深さ8cmほどであった。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第6号住居跡 (第41図)

第6号住居跡はZJ・ZK-13グリッドに位置する。住居跡北西コーナー付近は調査区外に延びている。南壁側は壁溝が途切れており、住居跡平面形は明確にできなかった。

平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.50m (壁溝遺存部まで)、短軸長4.32m、深さ0.13mである。南西壁が点線推定範囲まで延びるとするならば5.93mになる。主軸方位はN-25°-Eを指す。

確認面がほぼ床面に達しており、部分的に薄い炭化物層が形成されていた。ピットは1本検出さ

れ、柱痕が残る。深さ35cmで住居跡に伴う支柱穴と考えてよからう。4本支柱穴を想定して他柱穴の確認に努めたが、検出できなかった。

カマドは検出されなかったが、北東壁に接するように検出された土壌 (SK1) は確認面と埋土上層に焼土と炭化物粒子が多量に含まれ、カマド燃焼部とその掘り方と考えるのが妥当と思われる。位置的にも壁内に収まっており齟齬はない。形態は楕円形で、規模は長径87cm、短径77cm、深さ25cmである。

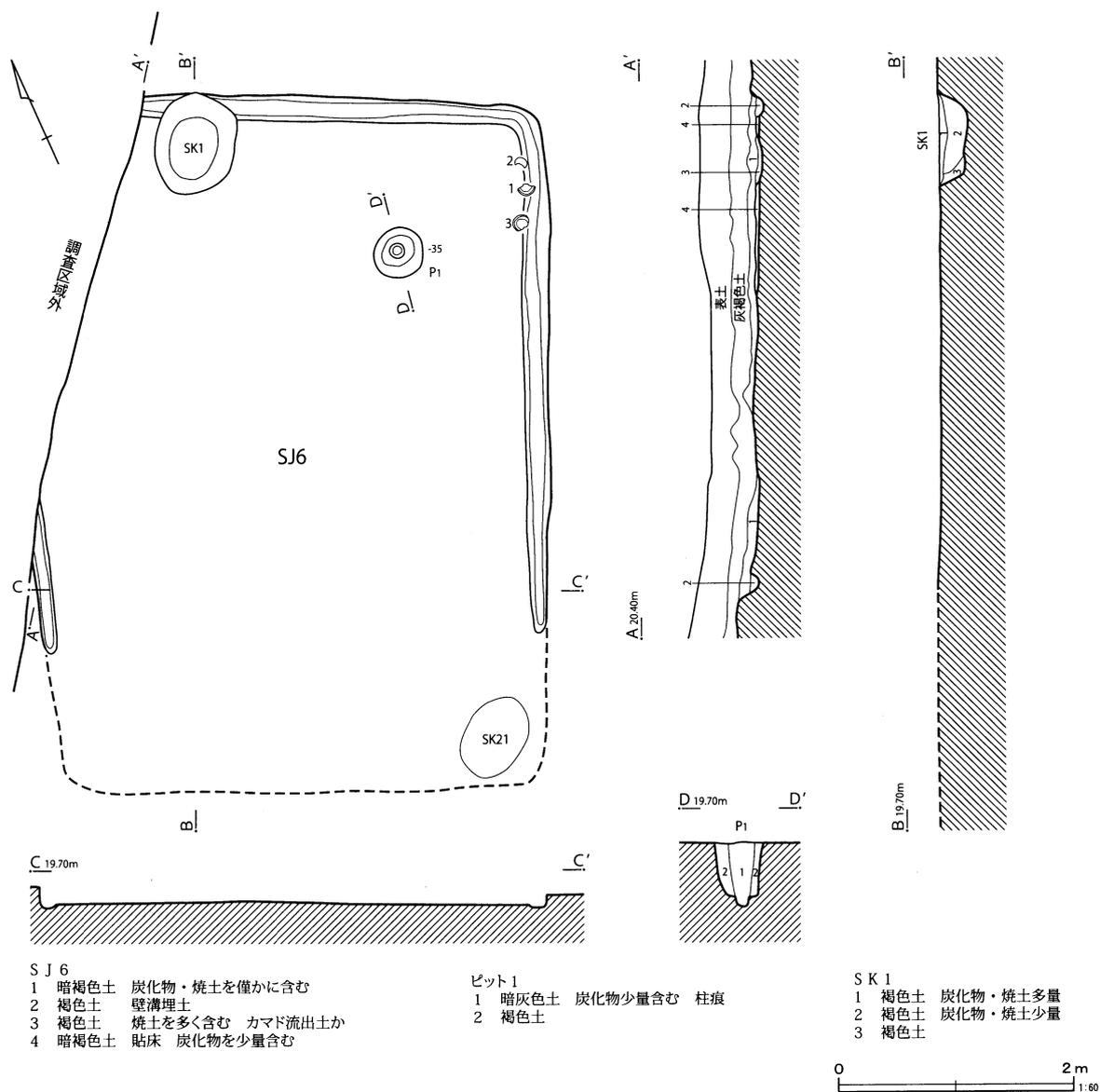
壁溝は幅15~22cm、深さ7cmほどである。貯蔵穴は検出されなかった。第21号土壌 (SK21) が貯蔵穴となることも想定したが、深さ18cmと浅く確証は得られなかった。

出土遺物は東コーナー部から土師器坏が3点、並んだ状態で出土した (第42図1~3)。

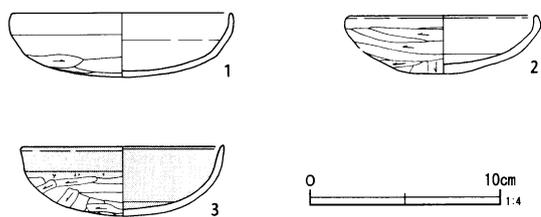
1・2は北武蔵型坏である。2は口縁部が小さく内屈し、ケズリが口縁直下まで及ぶ。1は口縁部が内湾気味で、口縁下に無調整部を持つ点で、やや新しい様相がある。3は内面と口縁部外面が赤彩される (続) 比企型坏である。土器年代は7世紀末葉~8世紀初頭頃に位置付けられる。

第4表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(114)	33	-	ACEI	40	普通	橙	北武蔵型坏 体部上位無調整	No.2	37-3
2	土師器	坏	(98)	30	-	BCHI	70	普通	橙	北武蔵型坏 口縁内屈し口縁直下までケズリが及ぶ	No.1	37-4
3	土師器	坏	105	37	-	EGHI	50	普通	橙	続比企型坏 口縁外面+内面赤彩	No.3	37-5



第41図 第6号住居跡



第42図 第6号住居跡出土遺物

第7号住居跡 (第43図)

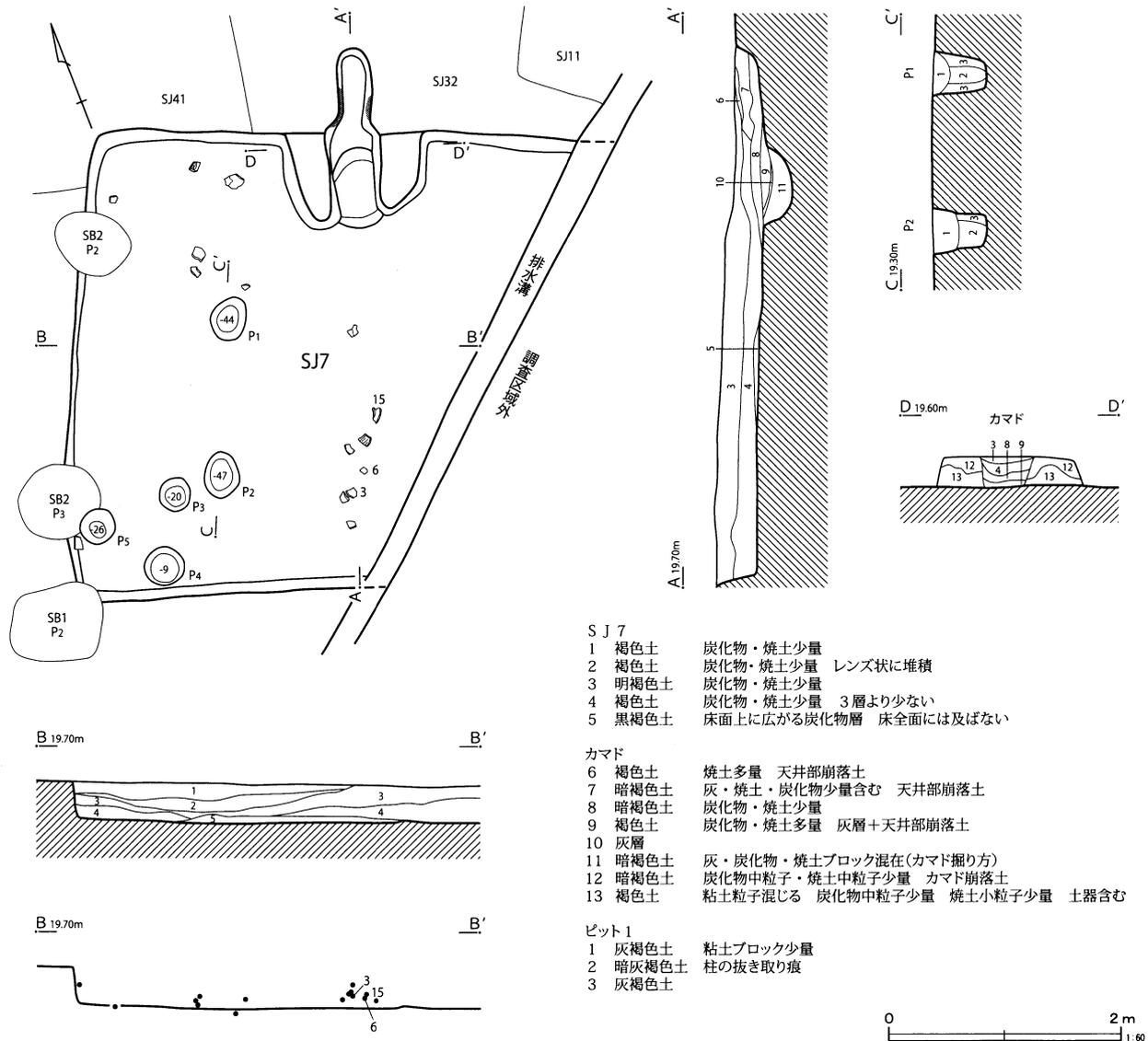
第7号住居跡はZ1・ZJ-14グリッドに位置する。住居跡東壁部は調査区外に延びている。第32・41号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建

物跡と重複し、新旧関係は第32・41号住居跡を切り、第1・2号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は長方形と推定されるが、南壁部が若干歪んでいる。残存規模は長軸長4.20m、短軸長4.02m、深さ0.32mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。床面上には中央部付近を中心に薄い炭化物層が形成されていた(第5層)。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部奥壁は僅かに壁を切り込み、煙道部とは明確な段差(高低差)をもたずに連続している。規模は全長1.53m、



第43図 第7号住居跡

袖幅1.22mである。

煙道部は長さ66cm、幅0.29mで、燃焼部に近い煙道部の内壁は強く被熱していた。燃焼部は長さ87cm、幅36cmで、底面は皿状に窪み、薄く灰層が広がっていた。灰層下には深さ18cmの掘り方をもっていた。

ピットは5本検出された。P1とP2は深さ45cm前後、柱抜き取り痕が断面観察で認められた。柱間距離は1.38mである。主柱穴となろうか。P3～P5は住居に伴う柱穴にはならない。

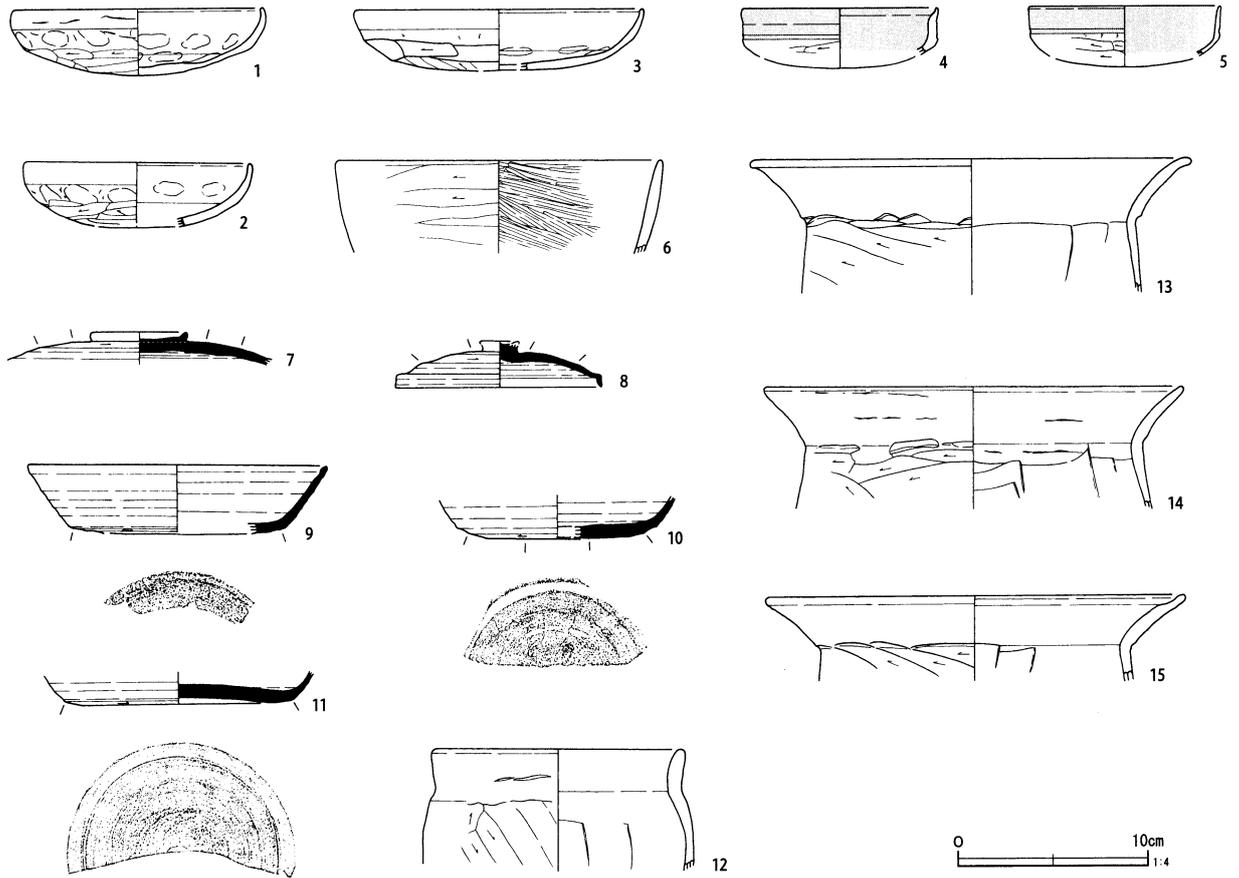
貯蔵穴、壁溝等の付属施設は検出されなかった。遺物は土師器・須恵器があり、カマド周辺、住

居跡中央部南壁寄りから主に出土した(第44図)。

第44図1～3は北武蔵型坏。扁平な丸底形態である。4・5は続比企型坏で、赤彩されている。6は土師器碗で、外面ケズリ、内面はヘラミガキ。在地産と思われる。7は環状つまみの蓋。坏蓋か。9は無台坏で、推定口径は15cmを超える。11は無台碗、底部分厚な作りで重量感がある。12は小型甕で在地産(白色針状物質を含む)。13～15は武蔵型甕、北武蔵の土である。

遺物の時期は本書Ⅶ期(古)を中心とした時期と考えられる。

第8号住居跡(第45図)



第44図 第7号住居跡出土遺物

第5表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(131)	35	-	ACHIK	50	普通	橙	北武蔵型坏 口縁下に無調整部残す		37-6
2	土師器	坏	(118)	33	-	ACHIK	25	普通	橙	北武蔵型坏 口縁下に無調整部あり	P2	
3	土師器	坏	(150)	31	-	ACIK	30	普通	橙	北武蔵型坏 口縁下に無調整部あり	No13	
4	土師器	坏	(102)	25	-	GHI	5	普通	橙	続比企型坏 内面+口縁部外面赤彩		
5	土師器	坏	(100)	27	-	HI	10	良好	淡褐	続比企型坏 内面+口縁部外面赤彩		
6	土師器	椀	(170)	49	-	EHIK	5	普通	橙	外面ケズリ 内面丁寧なミガキ	No12	
7	須恵器	蓋	-	17	-	DEJ	10	良好	灰	環状つまみ つまみ径5.0cm	南比企産	
8	須恵器	蓋	(108)	23	-	IJKL	20	良好	青灰	南比企産 内面自然軸		
9	須恵器	坏	(156)	36	(114)	EIJ	30	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ後ナデ	カマド	
10	須恵器	坏	-	23	(94)	DEGHJ	30	普通	赤褐	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		
11	須恵器	無台椀	-	17	103	DIJ	50	普通	紫灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ		
12	土師器	鉢	(128)	64	-	AGHIJ	20	普通	赤褐	鉢または小型甕 胴部外面二次被熱を受け器面剥落		
13	土師器	甕	(225)	51	-	ACHI	15	普通	橙	武蔵型甕		
14	土師器	甕	(218)	64	-	ACHI	10	普通	橙	武蔵型甕		
15	土師器	甕	(216)	45	-	ACHI	50	普通	橙	武蔵型甕 胴部ヘラケズリ	No9・カマド	

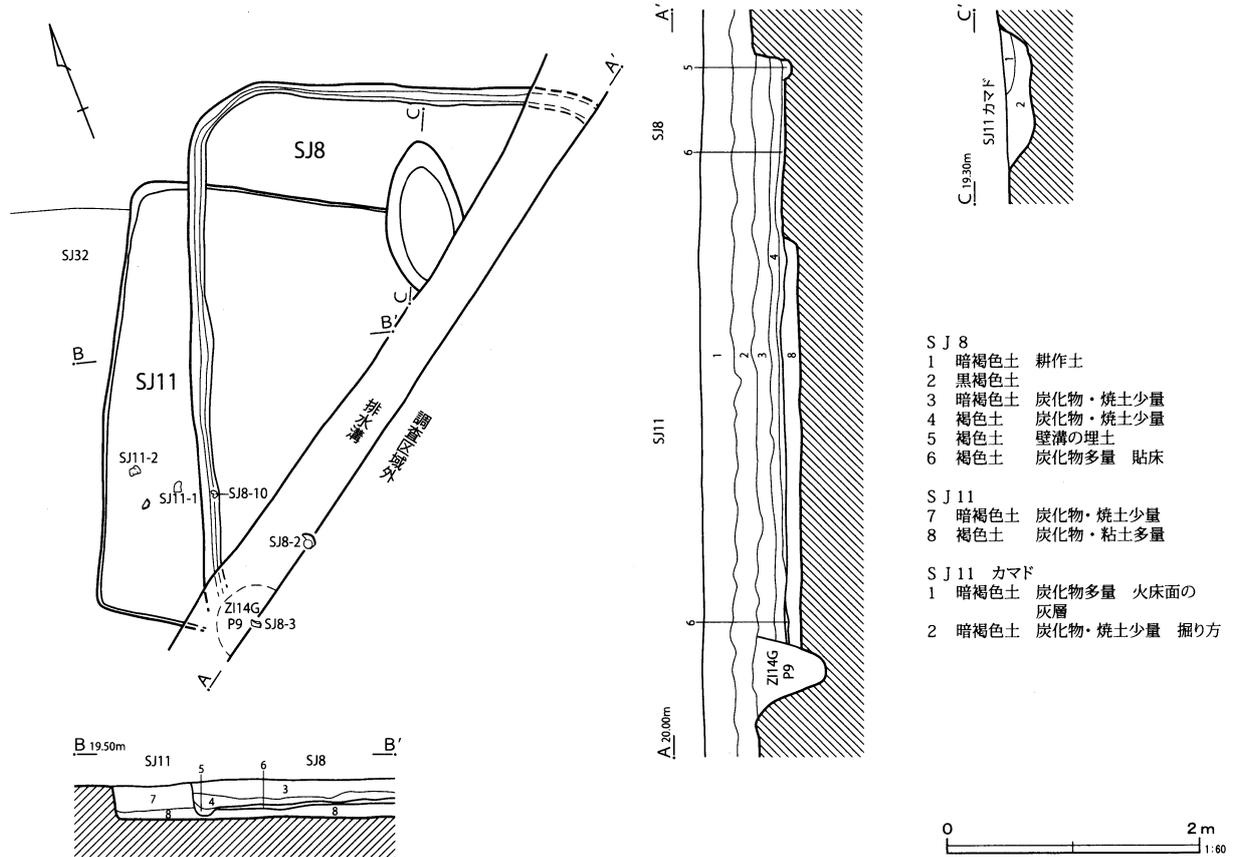
第8号住居跡はZI-14・15グリッドに位置する。住居跡の南東側半分は調査区外に延びている。重複する第11号住居跡の上面に構築されていた。

平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.02m、短軸長2.70m、深さ0.23mである。主軸方

位はN-23° - Eを指す。

壁溝は幅8~18cm、深さ7cmほどである。カマド、貯蔵穴、ピットは検出されなかった。

出土遺物は須恵器と土師器、土製品、紡錘車がある(第46図)が、量的には少ない。1は須恵器



第45図 第8・11号住居跡

第6表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(155)	1.9	-	I J	10	普通	灰	南比企産 重ね焼痕		
2	須恵器	無台椀	(146)	6.7	6.8	A J	50	普通	灰黄	南比企産 体部下端回転ヘラケズリ	No 2	37-7
3	須恵器	坏	(113)	-	6.0	A J	60	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No 3	37-8
4	須恵器	坏	-	-	6.0	E J	80	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り		
5	須恵器	台付長頸壺か	(101)	4.9	-	K	10	良好	灰白	東海産 胎土精選		
6	須恵器	甕	(222)	3.5	-	I J	10	普通	灰	南比企産		
7	土師器	甕	(184)	4.6	-	A C I	5	普通	橙	武蔵型甕		
8	土製品	不明土製品	-	3.0	-	H	5	良好	褐	三足土器脚部か 接地有り 斜方向面取りされている 胎土精選されている		110-11・12
9	土製品	土錘	-	-	-	I J	100	良好	淡褐	長さ39cm 最大径1.0cm 孔径0.25cm 重さ36g		38-1
10	須恵器	転用紡錘車	-	-	6.5	I J	50	普通	灰	須恵坏底部を転用した紡錘車 中央部に径約1cmの穿孔 側縁は擦って調整している	No 1	38-2・3

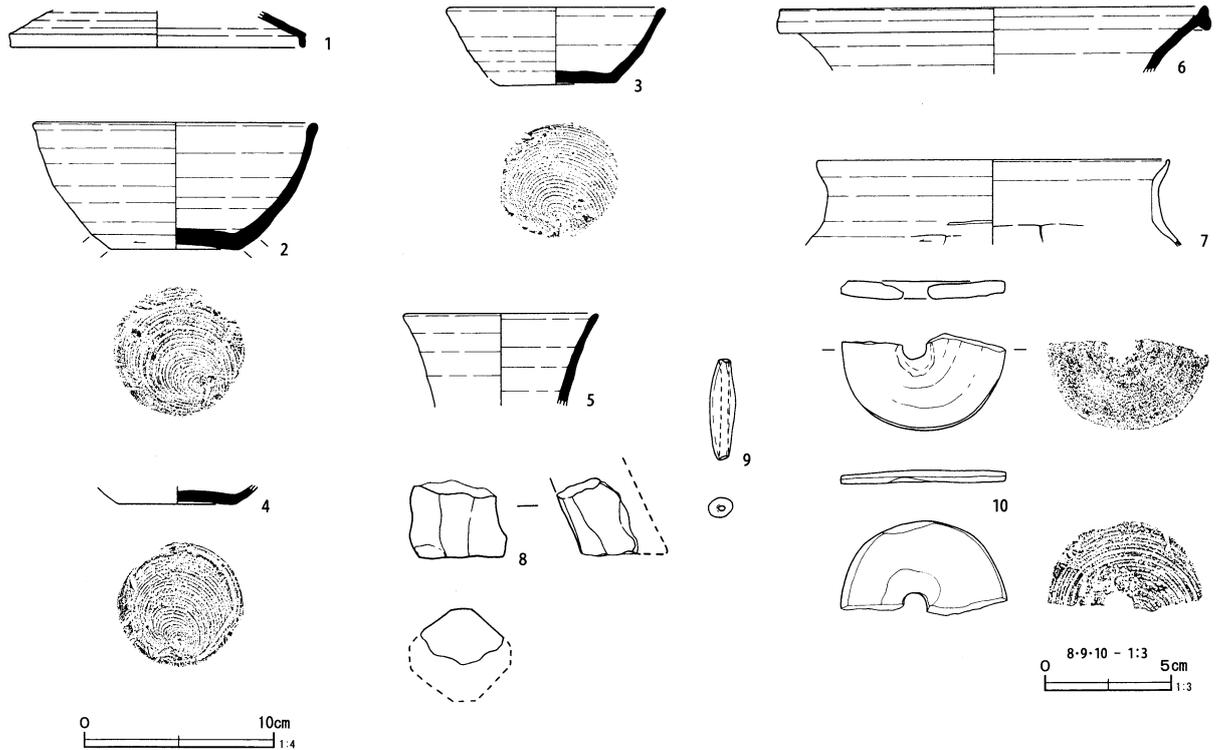
椀蓋。2は深みの無台椀。底部は回転糸切り、体部下端回転ヘラケズリ。3は坏で、深みの器形で底部は回転糸切り。鳩山編年HⅦ期相当であろう。5は台付長頸壺か。湖西産で混入資料と考えられる。7は武蔵型甕。いわゆる「コ」の字状口縁甕である。北武蔵の土と思われる。8は不明土製品であるが、側縁が面取りされ、斜めに立ち上がる。土師器三足土器（鍋）脚部の可能性がある。9は土錘で、白色針状物質が含まれる。10は須恵器坏

底部を転用した紡錘車である。遺物の時期は9世紀中頃、本書X期（古）と推定される。

第9号住居跡 (第47図)

第9号住居跡はZH・ZI-15グリッドに位置する。住居跡北西コーナー部は調査区外に延びている。重複する第33・43号住居跡を切っていた。

平面形は方形と推定され、規模は一辺4.05×4.02m、深さ0.40mである。主軸方位はN-69°-Wを指す。



第46図 第8号住居跡出土遺物

床面は平坦であった。住居跡埋土はロームブロックと炭化物を多量に含む土で、土層変化に乏しかった。人為的に埋め戻された可能性が高いと判断した。

カマドは西壁に設けられていた。右袖部が調査区外に掛かり、一部調査できなかった。全長1.65m、残存幅1.40mである。燃烧部と煙道部は明確な段差を持たずに連続している。燃烧部は壁を切り込んで構築され、長さ約1.10m、下幅0.60mを測る。内壁の、特に上部は強く被熱していた。

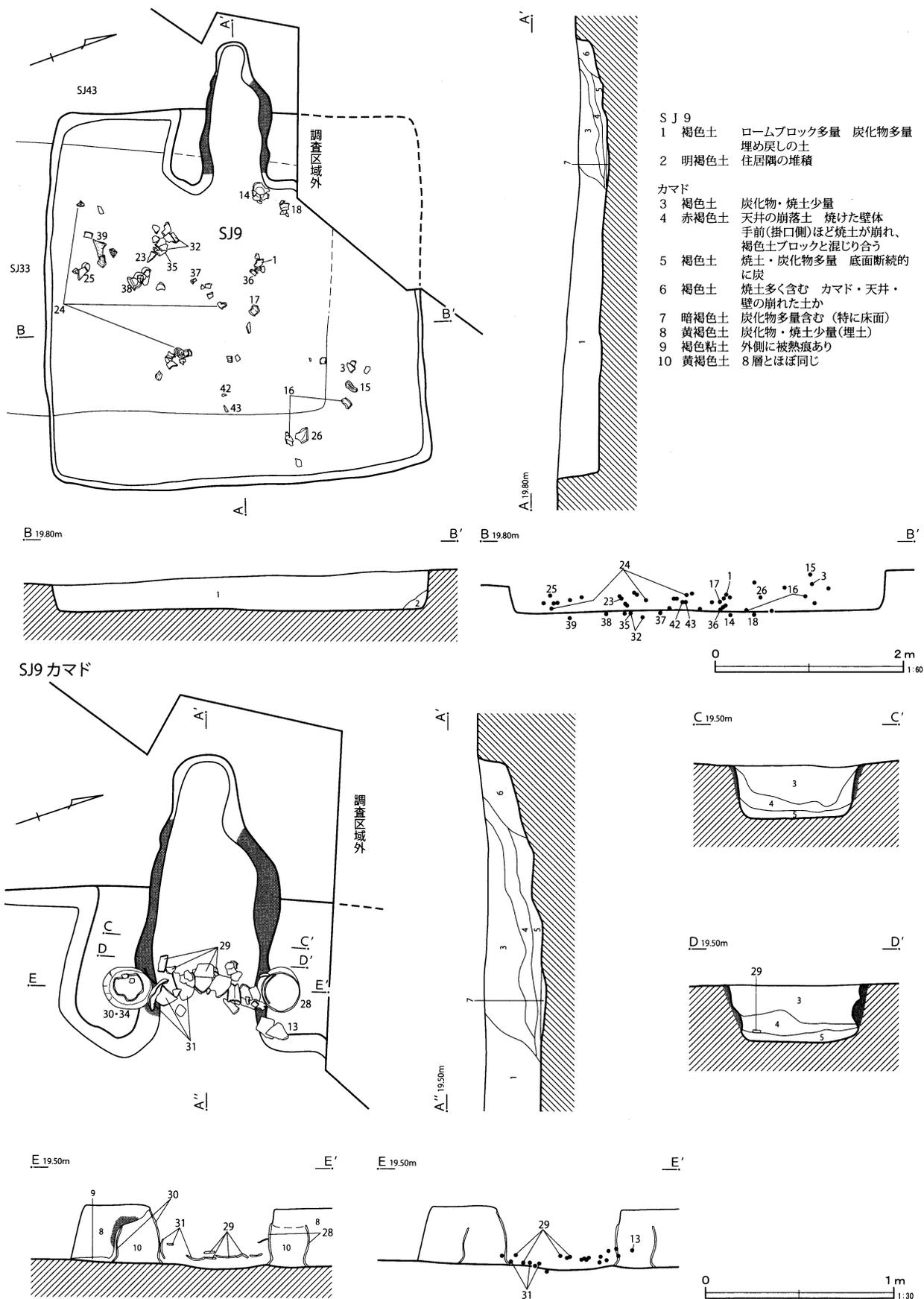
燃烧部底面には薄く灰層が形成されていた。その上部には炭化物と焼土を多量に含む天井部崩落土が被覆していた。

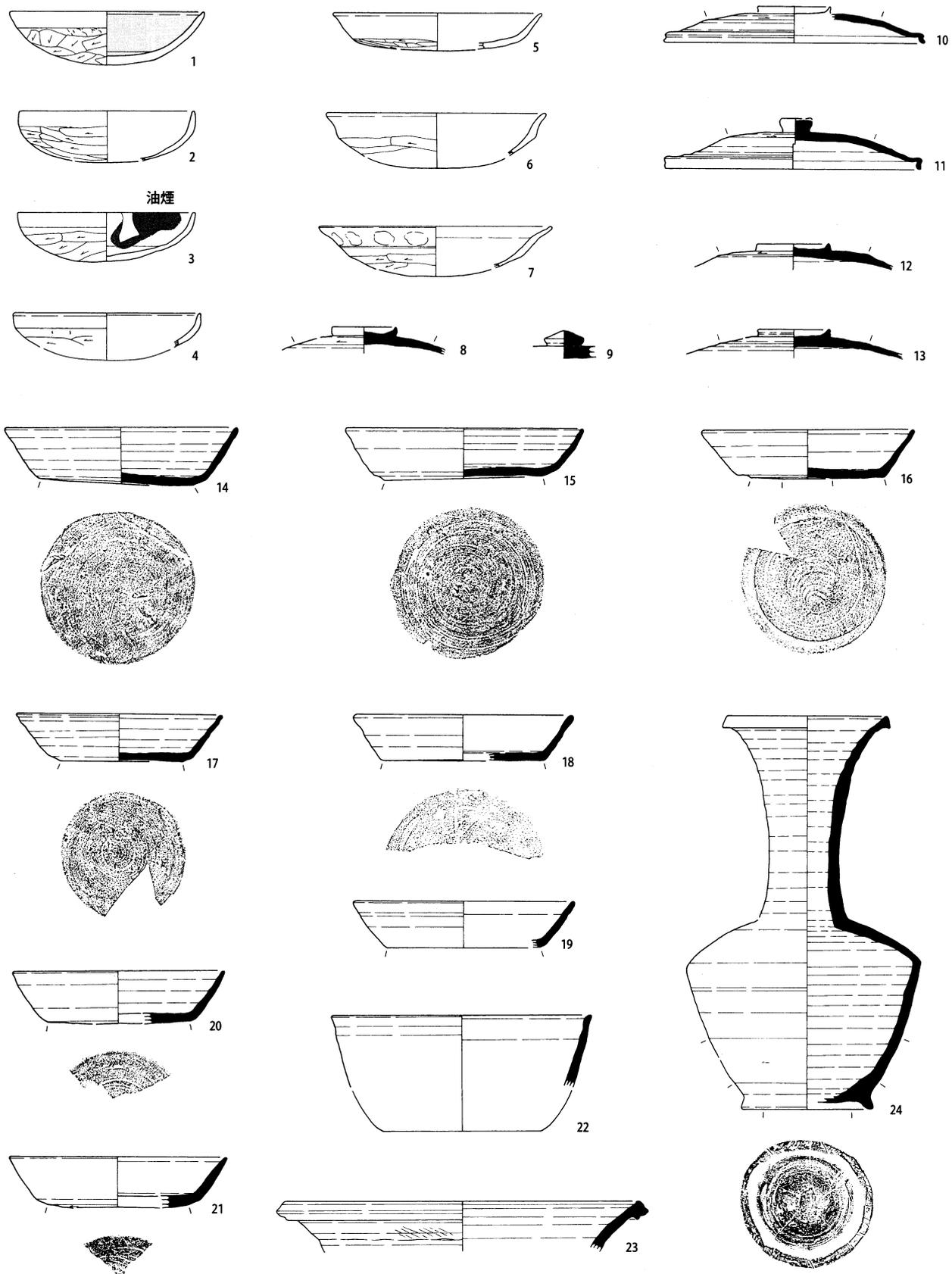
両袖は黄褐色から褐色粘土によって構成されていた。内部からは底部を欠いた土師器甕が左右各1個体ずつ逆位に据えられ、袖の芯材としていた。また、芯材を繋ぐように、焚口部付近から土師器甕が潰れた状態で出土した。天井部の架構材として使用されたと考えられる。貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、カマド内とカマド前面、覆土中から比較的まとまって出土している（第48～50図）。

1は土師器続比企型坏、内面のみ赤彩される。2～4は北武蔵型坏。5～7は北武蔵型皿である。北武蔵型坏は扁平な丸底タイプである。8は環状つまみで、南比企産。9は東海産か。14～21は須恵器坏。14・18はカマド前面の床面出土。15・16は覆土上層から出土した。坏はいずれも南比企産で、底部全面回転ヘラケズリ調整されるものと、回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されるものがある。15は口径16.3cmと大振りで、底部中央が臍状に突出する。底部全面回転ヘラケズリ。口径が16cm前後の大型品も含むが、口径14cm代の扁平な平底坏が主体を占めることからH I期～H II期、後者に主体を置く土器群であろう。24は東海産（湖西産であろう）の長頸瓶である。あばた状の剥離痕が顕著である。27は胴部のロクロ目が直行するため、横瓶と考えられる。南比企産か。

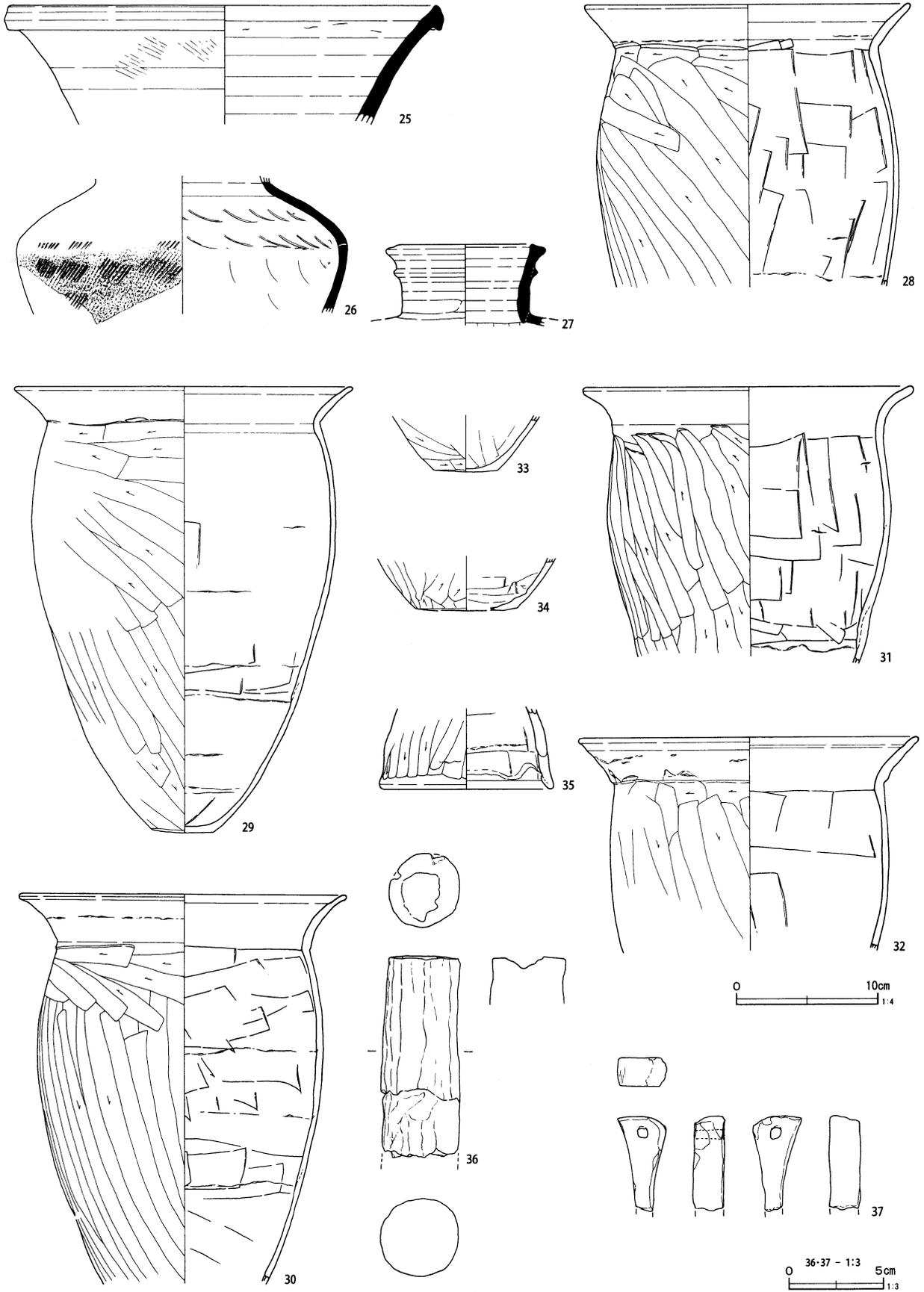
28・30はカマド袖の芯材に使用された武蔵型甕である。29・31は焚き口部天井の架構材に転用さ



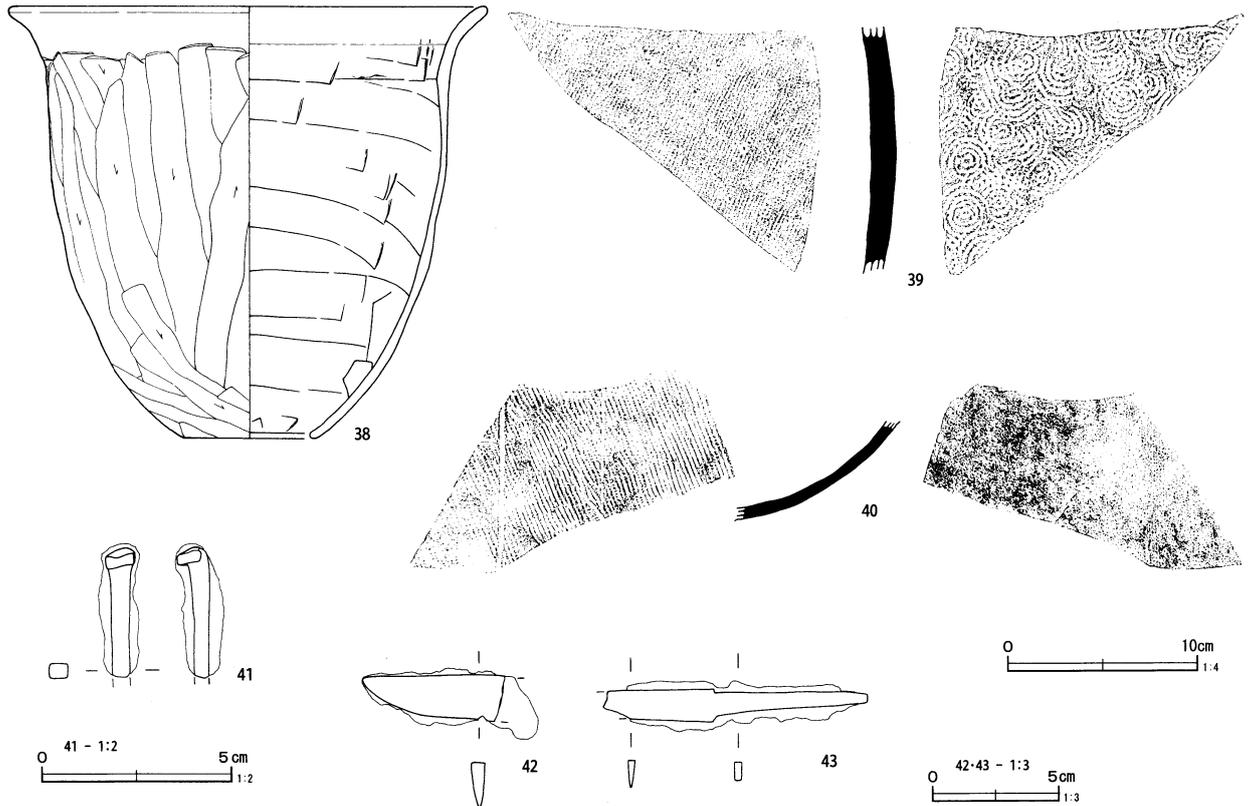


0 10cm
1:4

第48图 第9号住居跡出土遺物(1)



第49図 第9号住居跡出土遺物(2)



第50図 第9号住居跡出土遺物(3)

第7表 第9号住居跡出土遺物観察表(第48~50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	134	37	-	EGHI	50	普通	橙	続比企型坏 口唇部内面弱い沈線 内面のみ赤彩	No23	38-4
2	土師器	坏	(120)	35	-	ACEHI	20	普通	橙	北武蔵型坏		38-5
3	土師器	坏	(123)	35	-	ACHI	50	普通	橙	北武蔵型坏 内面油煙付着	No30	
4	土師器	坏	(130)	24	-	CEI	15	普通	橙	北武蔵型坏	カマド	
5	土師器	皿	(142)	25	-	ACEHI	20	普通	橙	北武蔵型皿 内面器面荒れている	カマド	
6	土師器	皿	(150)	32	-	CHI	20	普通	橙	北武蔵型皿	カマド	
7	土師器	皿	(169)	30	-	CI	20	普通	橙	北武蔵型皿		
8	須恵器	蓋	-	19	-	IJ	70	普通	灰	南比企産 環状鈕(径4.4cm) ロクロ左回転	カマド	38-6
9	須恵器	蓋	-	19	-	DI	80	普通	灰白	東海産か 胎土精選 外面淡緑色の自然釉 つまみ部分		
10	須恵器	蓋	(180)	20	-	IJK	50	良好	灰	南比企産 白色針状物質不明瞭 椀蓋と思われる	ロクロ右回転 外面自然釉	
11	須恵器	蓋	(178)	35	-	IJ	30	普通	灰	南比企産 椀蓋か		
12	須恵器	蓋	-	19	-	IJ	50	普通	淡黄橙	南比企産 環状鈕(径5.0cm)	カマド	
13	須恵器	蓋	-	20	-	IJ	30	普通	暗灰	南比企産 環状鈕(径5.0cm)	カマドNo2・袖	
14	須恵器	坏	160	40	10.7	CIJL	90	普通	橙	南比企産 底部回転+手持ちヘラケズリ Y6段階	No26	38-7
15	須恵器	坏	163	36	11.0	IJ	65	普通	灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ 中央にへそ状突出あり	ヘラ切りか No32	38-8
16	須恵器	坏	147	34	11.1	IJ	80	普通	暗灰	南比企産 ケズリ径9.4cm 底部糸切り後周辺回転ヘラケズリ	No33・36	39-1
17	須恵器	坏	141	33	8.5	EIJ	65	普通	灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ	No18・カマド	39-2
18	須恵器	坏	(150)	32	(11.2)	IJ	30	普通	紫灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ	ロクロ右回転 No25	
19	須恵器	坏	(150)	32	(10.6)	IJ	15	普通	紫灰	南比企産 底部全面手持ち(?)ヘラケズリ		
20	須恵器	坏	(145)	37	(9.8)	IJ	35	普通	紫灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	ロクロ右回転	
21	須恵器	坏	(150)	35	(9.8)	IJ	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
22	須恵器	無台椀	(180)	50	-	I J	5	普通	灰	南比企産 カマド		
23	須恵器	甕	(244)	35	-	I J	5	普通	黒灰	南比企産 No7		
24	須恵器	長頸瓶	(110)	274	88	E I K	80	普通	明灰	湖西産 肩部自然釉 胴部外面「あばた」状の小剥離痕が無数に穿たれる No1・17・41・カマド	38-9	
25	須恵器	甕	(298)	84	-	I J K L	10	普通	灰白	南比企産 平行叩き後ロクロナデ No5・カマド		
26	須恵器	壺	-	97	-	E J	10	良好	灰	南比企産 肩部自然釉厚く掛かる 平行叩き+無文当て具 No34		
27	須恵器	横瓶	(92)	57	-	D J K	20	良好	灰	南比企産か 胴部ロクロ目直交するため横瓶と思われる		
28	土師器	甕	226	200	-	C E G H I	100	普通	橙	武蔵型甕 カマドNo22	39-4	
29	土師器	甕	(233)	314	43	A C G I	30	普通	橙	武蔵型甕 カマドNo1・9・11・13	39-3	
30	土師器	甕	230	272	-	C E H I	90	普通	橙	武蔵型甕 カマドNo21	39-5	
31	土師器	甕	(228)	196	-	A C G H I	30	普通	にぶい赤褐	武蔵型甕 カマドNo16・17・18	39-6	
32	土師器	甕	(235)	151	-	A C E H I	35	普通	橙	武蔵型甕 No8・44・カマド	40-1	
33	土師器	甕	-	39	(45)	C H I	40	普通	褐灰	武蔵型甕 カマド・カマド袖		
34	土師器	甕	-	36	(74)	C H I	30	普通	にぶい橙	武蔵型甕 カマドNo21		
35	土師器	土製支脚	114	56	-	D G I J	50	普通	橙	外面軽いケズリ SJ-33No8	40-2	
36	土製品	土製支脚	-	-	-	I J	80	-	褐	残長106cm 直径4.1cm 重さ2143g 下半欠失 端面凹む 中実棒状 No20	40-4	
37	石製品	提碁	-	-	-	-	-	-	明灰	残長5.0cm 最大幅2.5cm 厚さ1.65cm 重さ263g 孔径0.5cm 凝灰岩製 No13	40-5	
38	土師器	甕	(244)	229	(69)	A H I J L	40	普通	橙	No6	40-3	
39	須恵器	甕	-	-	-	D H I J	5	普通	灰	南比企産 平行叩き+同心円文当て具 No45		
40	須恵器	横瓶	-	-	-	I J K	5	良好	灰	外面：平行叩き後平行沈線2条 内面：無文当て具後ロクロナデ+自然釉付着 27と同一個体か カマド		
41	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.4cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm	40-6	
42	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.7cm 幅1.2cm 背幅0.35cm No38	40-7	
43	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	長さ10.4cm 刃長4.3cm 茎長6.0cm 刃幅1.3~1.1cm 背幅0.3cm No37	40-8	

れた甕。同様に武蔵型甕である。35は土製支脚か。内面の接合痕を明瞭に残す。胎土・調整は比較的丁寧である。在地産で、白色針状物質を含む。36は中実の支脚である。37は提碁か。孔が貫通する。遺物の時期は8世紀・本書Ⅶ期と思われる。

第10号住居跡 (第52図)

第10号住居跡はZH-16・17グリッドに位置する。住居跡南側は調査区外に延び、西半は削平を受けていた。重複する第14号住居跡のカマドと重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.72m、短軸長2.46m、深さ0.22mである。主軸方位はN-103° - Eを指す。

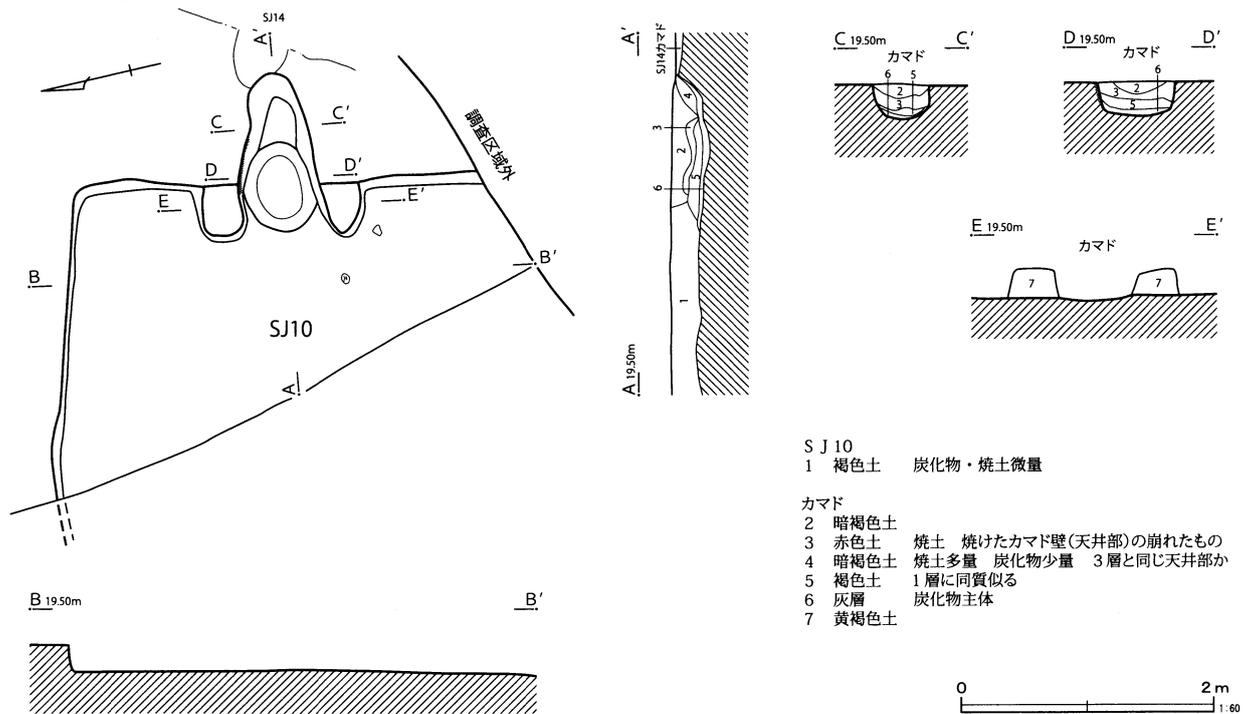
カマドは東壁に設けられていた。規模は全長1.32m、幅1.30m。燃焼部は壁を切り込んで構築され、煙道部は明確な段差を持たずに連続する。燃焼部底面は皿状に窪み、灰層が薄く堆積していた。内壁幅は0.60mで、壁面上部は被熱し、赤褐色に変色していた。袖部は黄褐色粘質土で構築されていた。貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されな



第51図 第10号住居跡出土遺物

第8表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	(127)	29	-	E I J	15	普通	灰	南比企産		
2	須恵器	坏	-	18	-	I J	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ		
3	須恵器	坏	-	12	(80)	D J	10	普通	灰	南比企産 底部回転系切り後周辺部回転ヘラケズリ		

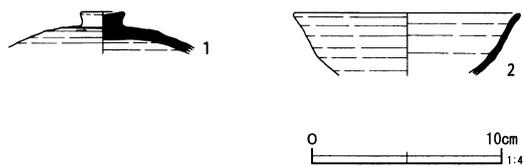


かった。

出土遺物は少ない。図示可能な遺物は須恵器坏が3点ある(第51図)。いずれも覆土から出土した。1は底部を欠く。2・3は底部を回転ヘラケズリで再調整する。2は丸底風、3は平底である。いずれも南比企産である。鳩山編年HIV期段階の土器と考えられる。本書Ⅷ期(新)、年代的には8世紀後半頃に位置付けられる。

第11号住居跡(第45図)

第11号住居跡はZI-14・15グリッドに位置する。住居跡の東側半分以上は調査区外に延びている。第8・32号住居跡と重複し、第8号住居跡に覆土



第53図 第11号住居跡出土遺物

第9表 第11号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	蓋	-	22	-	E I J K L	60	良好	灰	南比企産 No.3 IHSJ-34		
2	須恵器	坏	(118)	34	-	E H J K L	20	普通	灰	南比企産 No.1 IHSJ-34		

上面を削平され、第32号住居跡よりも新しいことが断面観察で判明した。

平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長348m、短軸長258m、深さ0.27mである。主軸方位はN-26°-Eを指す。

カマドは北壁に設けられていたが、上面を重複する第8号住居跡に削平されていたために、依存状態は悪い。土壌状の掘り込みは掘り方と考えられ、上部に灰層が乗る。灰層の位置からみて、燃焼部は壁外に掘り込まれていたのは確実である。袖の痕跡は見い出せず、壁内の袖部は存在しなかった可能性もある。全長0.92m、幅0.62m、深さ0.25mである。カマド方位はN-12°-Eを指し、住居跡の主軸方位と若干ずれていた。

貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は須恵器蓋と坏がある(第53図)。1は須恵器蓋。2は須恵器坏である。いずれも全体の器形は判明しないが、

いずれも南比企産で9世紀代の器形と思われる。重複する第8号住居跡が9世紀中頃であるので、それ以前（HⅧ期またはそれ以前）となる。いずれにせよ年代差は小さく、連続的な建て替えと考えるのが妥当と思われる。

第12号住居跡（第54図）

第12号住居跡はZG・ZH-17グリッドに位置する。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.95m、短軸長2.80m、深さ0.10~0.18mである。主軸方位はN-17° - Eを指す。

床面は凹凸が比較的顕著で、部分的に褐色土の貼床が形成されていた。

カマドは北壁に設けられていた。規模は全長1.15m、幅1.18mである。燃烧部は壁を切り込んで構築され、壁内面は強く被熱していた。幅0.60m。底面は僅かに窪む程度で床面からの深度差は少ない。掛け口部と思われる部分の底面からは粘土塊が出土した。土製支脚の一部と思われる。その周囲の底面は被熱していた。煙道部は削平され遺存しない。

埋土は第5・6層が天井部崩落土で、炭化物・

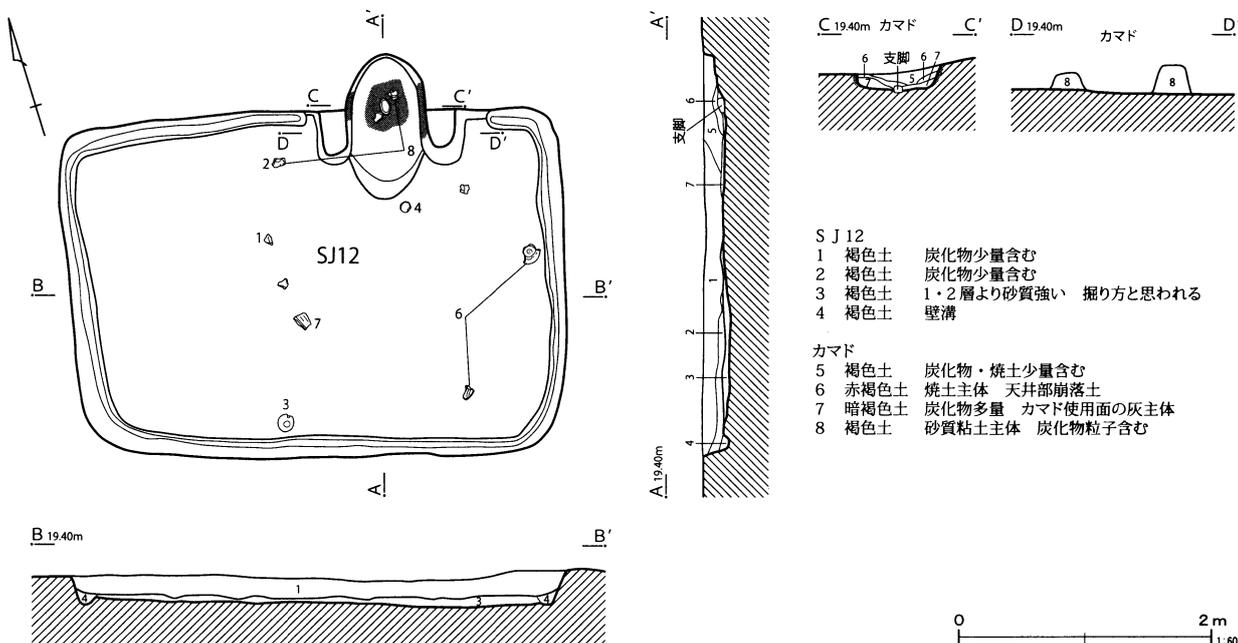
焼土ブロックを多量に含んでいた。第7層が灰層である。炭化物粒子を多量に含み、火床面上に薄く堆積していた。袖は褐色の砂質粘土を積み上げて構築されていた。

壁溝は幅12~21cm、深さ6cmほどで全周する。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

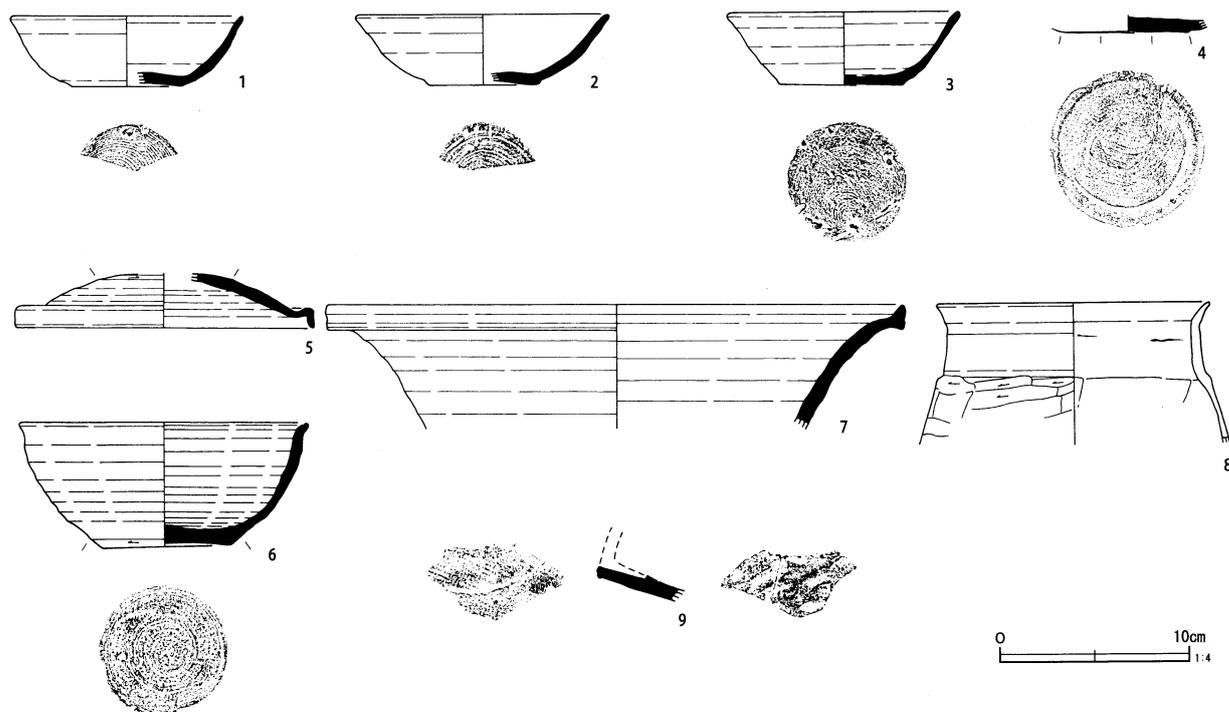
出土遺物は土師器・須恵器があるが量的には少ない（第55図）。1~4は須恵器坏。1~3は底部回転糸切り無調整である。1・2は底部が口径の1/2以下に縮小している。3は歪みが大きく頭上補正しているが、底径は口径の1/2を上回る。4は底部破片で、底部再調整されることから混入品である。5は椀蓋。6は無台椀である。口唇部の端面に鋭さがなく、底部も縮小しており、同種の中でも新しい様相が認められる。8は土師器武蔵型甕の小型台付甕である。9は東海産の薄甕か。肩部剥離面に平行叩きとヘラ傷が見える。内面は同心円文当て具痕残る。第29号住居跡と接合。混入品である。遺物の時期は本書X期に位置付けられる。9世紀中頃~後半と考えておきたい。

第13号住居跡（第56図）

第13号住居跡はZH-17グリッドに位置する。



第54図 第12号住居跡



第55図 第12号住居跡出土遺物

第10表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版	
1	須恵器	坏	(120)	37	(59)	I J	25	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	Na 2	41-1	
2	須恵器	坏	(130)	37	(57)	C E H J K	30	不良	黄橙	南比企産	Na 1		
3	須恵器	坏	120	39	64	E J	100	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	Na 5		
4	須恵器	坏	-	09	68	I J K	100	普通	灰	南比企産 内面やや磨滅し煤状の黑色被膜付着 側縁はきれいに剥落するが擦痕は無い	Na 7		
5	須恵器	蓋	(156)	29	-	C H J	25	普通	灰白	南比企産 内面煤付着		41-2	
6	須恵器	無台碗	151	66	68	E I J K L	70	良好	灰褐	南比企産 底部・体部下端回転ヘラケズリ	内外面煤付着		No 6・9
7	須恵器	甕	(260)	66	-	I J	5	良好	灰	南比企産 灰オリーブ(釉)	内外面自然釉付着する		Na 4
8	土師器	小型甕	(142)	74	-	C E H I J	30	良好	明赤褐	武蔵型甕 小型台付甕と思われる	外面二次被熱		Na 1・11・カマド
9	須恵器	甕	-	14	-	I J K	10	普通	灰	東海産か 器壁薄い 肩部剥離面に平行叩きとヘラによる刻みがある	白緑色の自然釉		SJ-29と接合

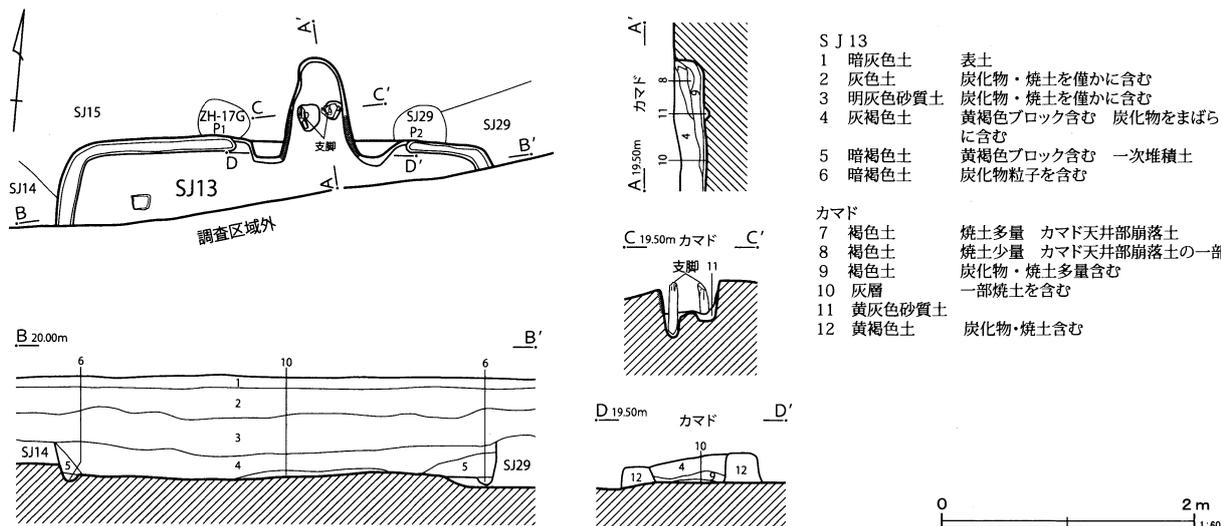
住居跡の大半は調査区外に延び残存部はカマド周辺に限定される。第14・29号住居跡、ZH-17グリッドピット1と重複し、本住居跡が最も新しい。第15号住居跡は削平されており、新旧関係は不明である。

平面形は方形系と推定されるが、詳細は不明。残存規模は長軸長3.42m、短軸長0.66m、深さ0.25~0.28mである。主軸方位はN-5°-W。

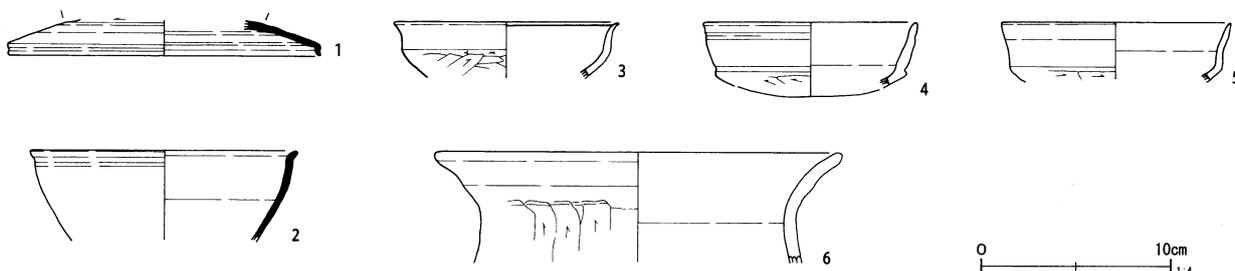
床面は全体的に緩やかな起伏がある。埋土には黄褐色土ブロックの混入が目立った。

カマドは北壁の中央から僅かに東に寄った位

置に設けられていた。全長0.85m、内壁幅0.34~0.45m、深さ0.24mである。燃焼部は壁を大きく切り込んで構築されていた。煙道部は削平され遺存していなかった。燃焼部中央(掛口部)には石製支脚が2本据えられた状態で残されていた。支脚は片岩を細長く割ったもので、粘土で固定されていた。焚口部から燃焼部の内壁は強く被熱していた。燃焼部底面には灰層が広がり、カマド前面には炭、焼土が散布していた。燃焼部の大半が壁外にあるため、袖部自体は発達していない。炭化物粒子を含む黄褐色土で構成されていた。



第56図 第13号住居跡



第57図 第13号住居跡出土遺物

第11表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(162)	1.9	-	I J	20	普通	灰	南比企産		
2	須恵器	椀	(139)	4.8	-	E I J K	10	普通	灰	南比企産 カマド		
3	土師器	坏	(117)	3.0	-	C D H J L	10	普通	にぶい褐	無彩 在地産模倣坏か		
4	土師器	坏	(110)	3.4	-	C H I	10	普通	明赤褐	有段口縁坏 小片のため口径不安定		
5	土師器	坏	(120)	3.1	-	H I J	15	普通	にぶい橙	白色針状物質含む		
6	土師器	甕	(21.0)	5.8	-	H I J K	10	普通	にぶい黄橙	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデか?		

壁溝は幅8~14cm、深さ6cmほどである。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

出土遺物は少なく、須恵器蓋・椀、土師器坏・甕がある(第57図)。すべて覆土から出土しており、時期的なまとまりがない。2の須恵器椀がカマド内出土。南比企産でHⅧ期相当か。燃烧部の突出するカマド構造からみても違和感はない。1の須恵器蓋は伴わない可能性がある。3~6の土師器は混入品と考えられる。年代的には9世紀後半で、本書X期に比定しておきたい。

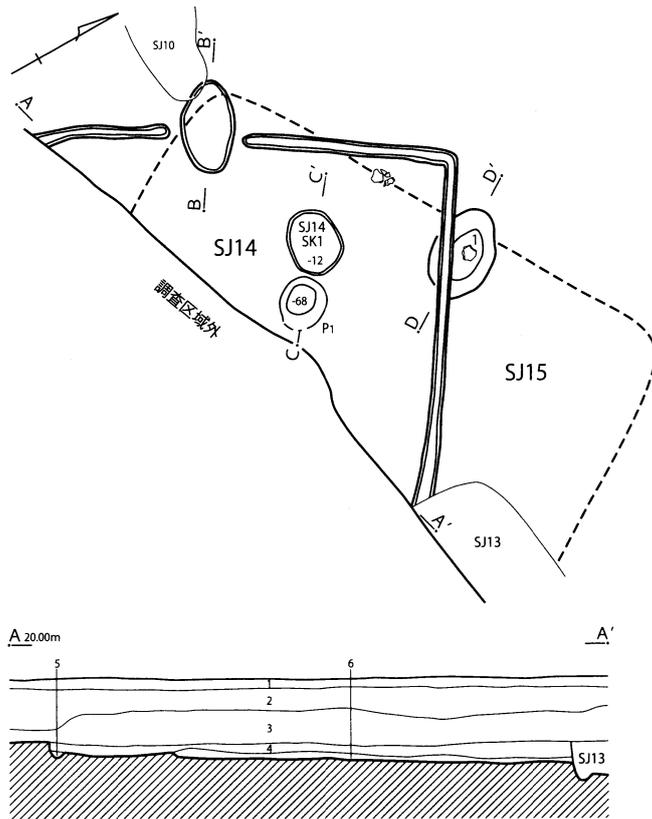
第14号住居跡 (第58図)

第14号住居跡はZH-17グリッドに位置する。住居跡南側ほぼ半分は調査区外に延びている。第13・15号住居跡と重複し、第13号住居跡よりも古く、第15号住居跡よりも新しい。

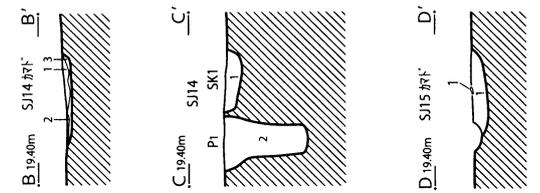
平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.20m、短軸長2.85m、深さ0.10mである。主軸方位はN-58°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏がある。埋土は暗黄褐色の砂質土が主体で、大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは北西壁に設けられていたが、上面は削



第58図 第14・15号住居跡



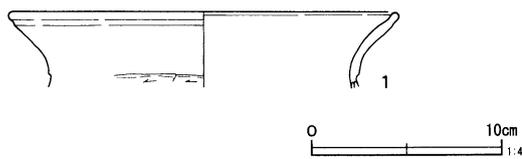
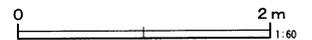
- S J 14・S J 15
- | | |
|----------|------------------------------|
| 1 暗灰色土 | 表土 |
| 2 灰色土 | 炭化物・焼土を僅かに含む |
| 3 明灰色砂質土 | 炭化物・焼土を僅かに含む |
| 4 暗黄色砂質土 | 炭化物を少量含む S J 14 覆土 |
| 5 暗褐色砂質土 | S J 14 壁溝覆土 |
| 6 黄褐色砂質土 | 炭化物・焼土を少量含む S J 15 覆土の可能性が高い |

- S J 14 カマド
- | | |
|--------|--------------------|
| 1 褐色土 | 炭化物・焼土多量 |
| 2 | 火床面か 焼土主体 赤く焼ける |
| 3 明褐色土 | 砂質 掘り方の一部か 焼土僅かに含む |

- S J 14 SK1
- | | |
|-------|------------|
| 1 褐色土 | 焼土多量 炭化物少量 |
|-------|------------|

- S J 14 ビット1
- | | |
|-------|-------------|
| 2 褐色土 | 炭化物少量 柱痕不明瞭 |
|-------|-------------|

- S J 15 カマド
- | | |
|-------|-------------------|
| 1 褐色土 | 焼土多量 砂質土 (カマド掘り方) |
|-------|-------------------|



第59図 第14号住居跡出土遺物

平されており、詳細は不明確である。辛うじて燃焼部底面が残存していた。全長0.75m、幅0.42m、深さ0.05mである。上面には、被熱した焼土薄層が認められ、火床面と考えられる。

ピットは1本検出されたが、柱痕は不明瞭であった。深さ68cmと十分であり、支柱穴を構成するピットと考えてもよい。壁溝は幅8~12cm、深さ5cmほどである。

土壙は1基検出された。楕円形で、規模は長径53cm、短径40cm、深さ12cmである。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、図示可能遺物は土師器の甕が1点あるのみである(第59図)。1はピッ

ト1から出土した土師器甕。推定口径20.0cm。残存高4.1cm。胎土に角閃石・赤色粒子・白色粒子を含む。焼成は普通、色調は橙色。残存率15%。胴部上端には横方向の段ケズリがみえる。武蔵型甕で、本書Ⅶ期頃に位置付けられよう。

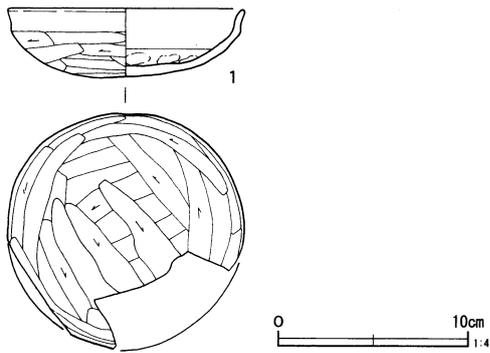
第15号住居跡 (第58図)

第15号住居跡はZH-17グリッドに位置する。第14号住居跡壁溝に切られた状態でカマドのみが検出された。カマド掘り方脇に若干焼土が散っていることから、住居跡のプランは北東東に延びていたと推定され、調査区壁の断面に床面が確認できるものの住居跡プランは不明確である。

床面及び埋土の状態は不明である。

カマドは北西壁に設けられていたが、燃焼部と思われる土壙状の掘り込みが検出されたのみである。楕円形で全長0.73m、幅0.50m、深さ0.12mである。カマド方位はN-31°-Wを指す。

袖部、煙道部は削平されていた。埋土には焼土



第60図 第15号住居跡出土遺物

が多量に含まれており、上面付近から土師器杯が1点出土した。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ない。図示可能遺物はカマドから出土した土師器杯（第60図）。1は口径12.2cm、器高36cm。胎土に角閃石・石英・白色粒子を含む。焼成は普通、色調は橙色。残存率は70%である。註記カマドNo.1。角閃石を含む胎土の特徴から、北武蔵由来の模倣杯である。口縁部の立ち上がりが短く、小型化が進行していることから、本書V期、7世紀中葉を中心とした年代と思われる。第13号住居跡から出土した土師器杯・甕類（第57図3～6）は本住居跡に伴う可能性もある。

第16号住居跡（第61図）

第16号住居跡はZG-17・18グリッドに位置する。床面直上まで耕作土が及び平面形態は不明瞭である。断面観察によっても東壁の範囲は不明であった。住居跡南東側は、重複する第17号住居跡に切られていた。

平面形は方形系と推定されるが詳細は不明。残存規模は長軸長3.66m、短軸長2.52m、深さ0.13mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。

確認面に辛うじて床面が残存していた。焼土や炭化物層が堆積し、火災で焼失した可能性がある。

カマド、貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、須恵器と石製品がある（第

62図）。1は須恵器杯。南壁際から出土した。南比企産で底部は丸底風。全面回転ヘラケズリが施される。2は鉢。3は壺である。いずれも南比企産。4は軽石。角閃石安山岩。被熱していた。用途は不明。時期は1の須恵器杯から鳩山Ⅱ期に位置付けられよう。本書Ⅶ期（新）の資料である。

第17号住居跡（第61図）

第17号住居跡はZG・ZH-17・18グリッドに位置する。住居跡南側は調査区外に延び、東壁は削平され、プランは不明であるが、南壁部の断面観察から推定線（点線）から大きく外れないと考えられる。重複する第16・29号住居跡を切っていた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長5.52m、短軸長5.22m、深さ0.20mである。主軸方位はN-13°-Eを指す。

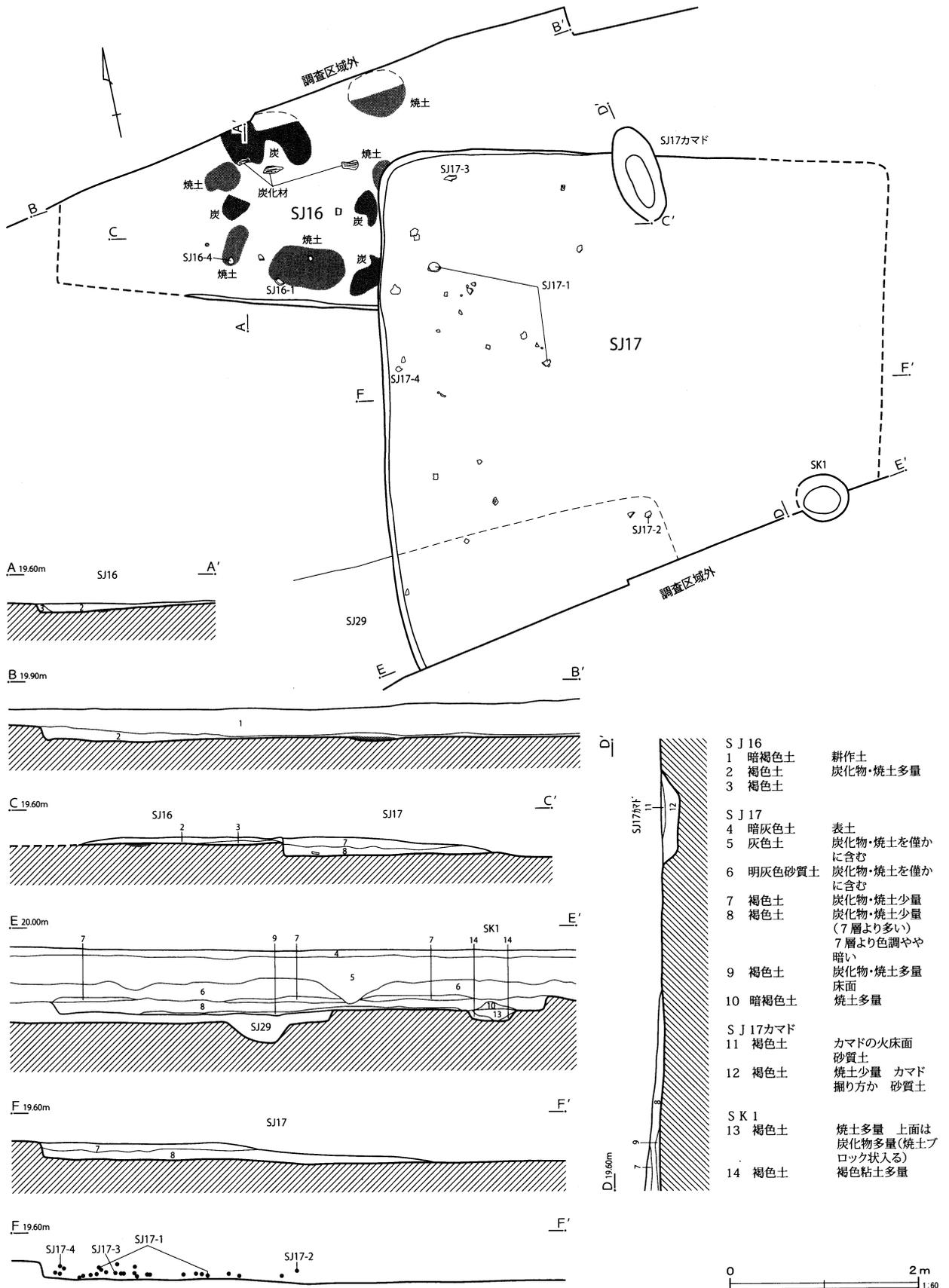
床面はやや凹凸があり一定しない。東壁部は削平されていた。

カマドは北壁に設けられていた。袖部、煙道部は削平され、楕円形の燃焼部掘り方のみが残存していた。全長1.05m、幅0.47m、深さ0.20mである。上面に薄い被熱層が堆積していた。カマド方位はN-12°-Wを指し、住居跡の主軸方位とずれていた。

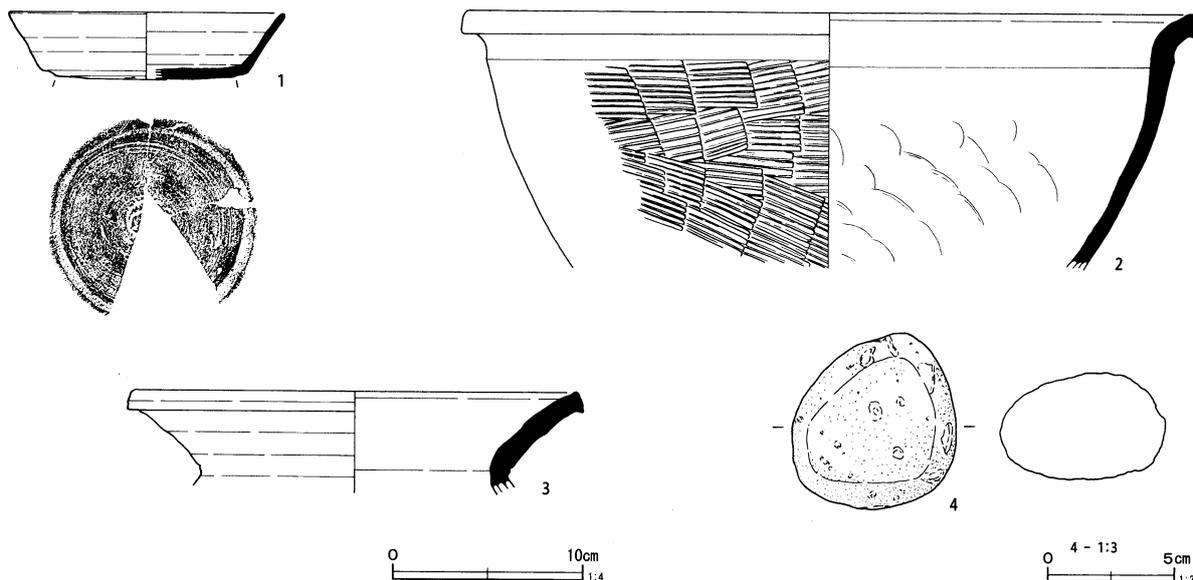
また、南壁部に掛かる位置から土壌が1基検出された（SK1）。規模は全長0.52m、幅0.50m、深さ0.13mである。床面下の土壌で、粘土と焼土が多量に含まれていた。

貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

遺物は住居跡北東部から散在的に出土している。土師器甕と須恵器杯がある（第63図）。1は高台付杯。底部は分厚で、内面は摩滅し平滑。底部は回転ヘラケズリ調整される。白色針状物質が確認できない。南比企産または東金子産と思われる。2は須恵器杯。底部は回転糸切り。底径は口径の1/2を超えている。3・4は土師器武蔵型甕である。3は口縁部「コ」の字状、4は弓状を呈



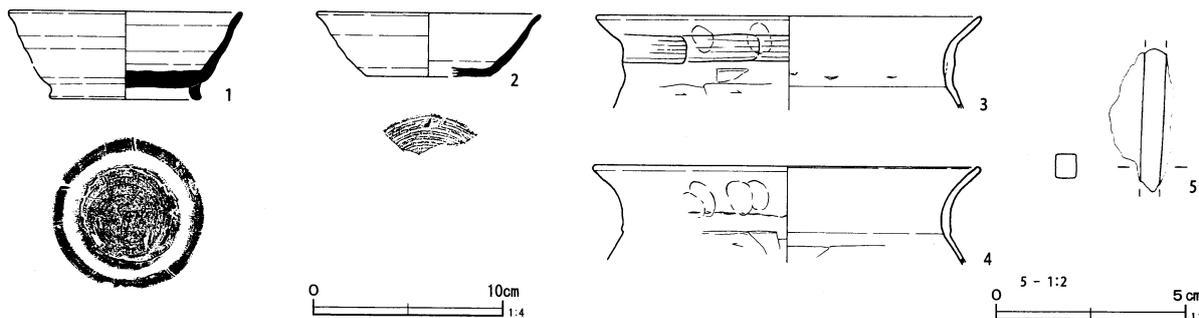
第61図 第16・17号住居跡



第62図 第16号住居跡出土遺物

第12表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	143	36	95	E G J	70	普通	灰白	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ (ロクロ左回転) No.4		41-4
2	須恵器	鉢	(380)	135	-	E I J	10	普通	灰	南比企産 胴部平行叩き+無文当て具		
3	須恵器	壺	(230)	53	-	E I J K	5	普通	灰	南比企産 内面自然釉		
4	石製品	軽石	-	-	-	-	-	-	-	長径72cm 短径64cm 厚さ42cm 重量131.27g 角閃石安山岩製 被熱し煤附着 No.2		41-5



第63図 第17号住居跡出土遺物

第13表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	高台付坏	(120)	56	7.6	E I L	60	良好	にぶい黄體	東金子産? 底部回転ヘラケズリ No.11・20		41-6
2	須恵器	坏	(116)	33	(64)	I J K	25	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り No.19		
3	土師器	甕	(200)	49	-	C H I K	20	普通	橙	武蔵型甕 No.10		
4	土師器	甕	(200)	52	-	C H I K	5	普通	橙	武蔵型甕 No.6		
5	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.3cm 幅0.55cm 厚さ0.65cm		41-7

している。須恵器坏はH B V期か。土師器甕も9世紀前半頃のものであろう。1の高台付坏はやや古い可能性もあるが、9世紀初頭～前半頃、本書IX期の土器様相とと考えておく。

第18号住居跡 (第64～69図)

第18号住居跡はZK-22・23グリッドに位置する。東側の深い谷地形に移行する肩部に位置する。谷部にかかる遺物包含層なのか、住居跡等の人為的

な掘り込みなのか判断が難しかった。平面形態は明確に捉えられなかった。遺物の出土状態が水平に堆積することから、ひとまず住居跡と判断して調査に臨んだ。

平面形は方形と予想されるが明確ではない。残存規模は長軸長6.00m、短軸長4.98m、深さ0.48～0.57mである。主軸方位はN-35°-Wを指す。

カマドの一部かと思われる白色粘土と焼土塊は調査区境に検出されたが、詳細は不明である。大半が調査区外で、残存する燃焼部のプランも半分がはっきりしない。

床面と考えた堆積層は第7層である。貼床状に全面に広がっていた。第8層は炭化物・焼土を僅かに含む砂質土で地山の可能性が高い。遺物が多量に含まれるのは第5層対応層である。第5層を切る第4層は谷に落ち込んでおり、谷部堆積層と考えられる。遺物は概ね第5層に沿って水平堆積していた。しかし、一部は谷に落ち込んだ第4層から検出されている。第4層には焼土ブロック・粘土が多量に含まれていた。第5層には灰が多量に含まれ、焼土・炭化物と褐色粘土が比較的少なく混在していた。両層とも自然堆積ではなく、人為的に投棄されたような堆積土である点は共通する。因みに谷部はかなりの深度があると予想されたが、周辺が砂質土で構成され、湧水による崩落が激しいことから調査は断念した。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設も検出されず、住居跡と判断することは難しいかもしれない。

遺物は、土師器・須恵器を中心に極めて多量に出土した(第70図～第77図)。また、想定した住居跡の外からも若干遺物が出土し、時期的にはほぼ同一時期と思われる点も住居説に対して否定的に作用している。

第70図1～3は続比企型坏である。口唇部内面に沈線、内面と口縁部外面に赤彩が施される。白色針状物質は含まれるものとなないものがある。

4～13は北武蔵型坏である。やや扁平化した丸

底坏で、口縁部は内湾気味に立ち上がるものが主体を占める。

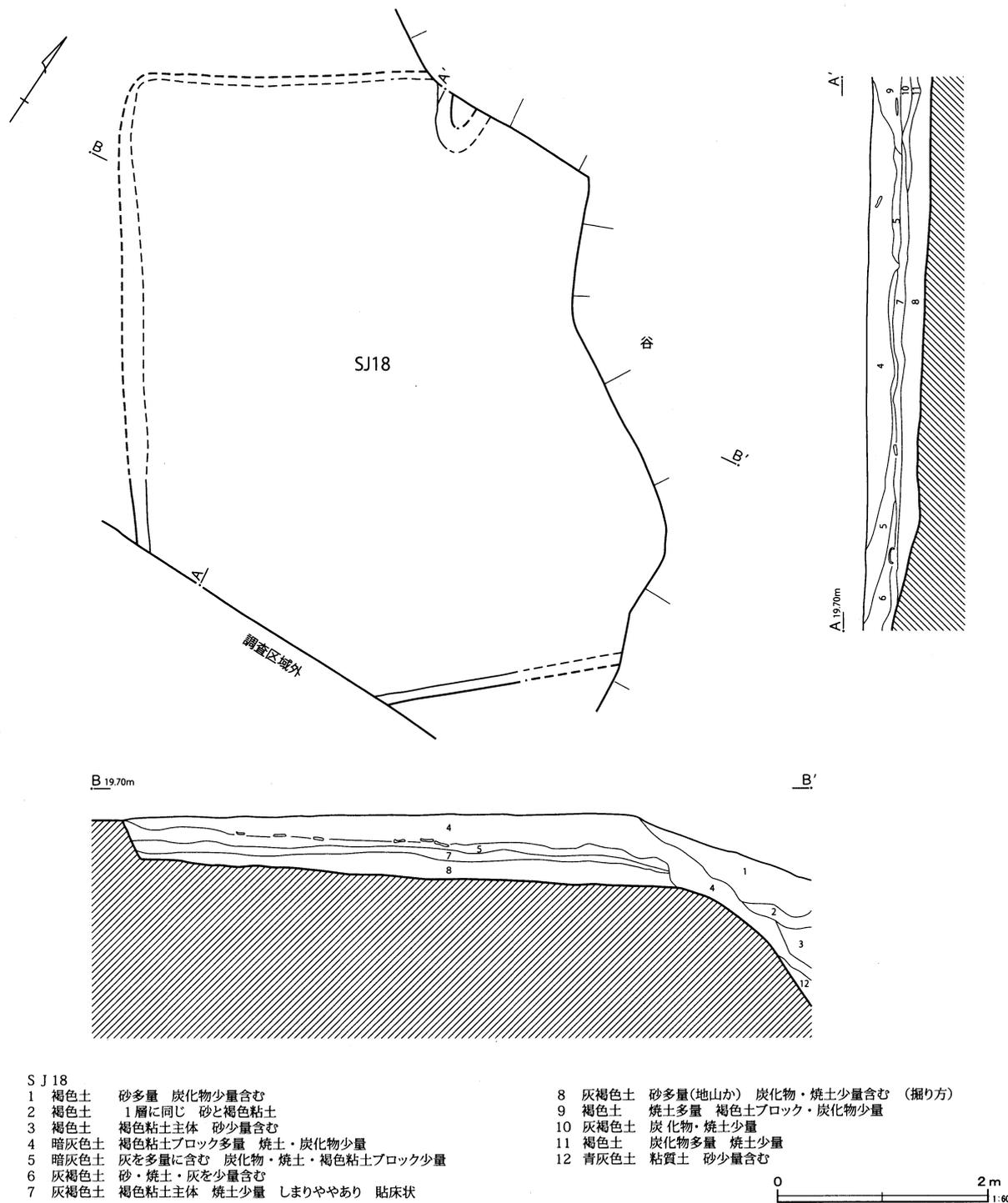
14～20は北武蔵型暗文坏である。底部丸底風で、内面に放射暗文、体部外面はヘラケズリ調整される。15は底部外面中央に糸切り痕が残る。16・20は底部が平底風に仕上げられている。21は北武蔵型坏の一種で大振りの丸椀器形である。外面はケズリ後ヘラミガキが施されている。

22～25は続比企型坏の一種で皿器形である。内面と口縁部外面が赤彩され、口唇部内面に沈線または凹みを入れる点に比企型坏の伝統を残している。26は口唇部内面に沈線を巡らせる椀である。続比企型に似るが白色針状物質は含まず、赤彩もないため、系譜が不明確である。体部側面に「×」状の線刻(ヘラ記号?)が刻まれている。

27～38は北武蔵型皿である。角閃石を含む粗い胎土が一般的であるが、27～33、37・38は粉っぽい土で、角閃石があまり含まれず、何よりも白色針状物質が含まれる点に特色がある。黒斑はない。比企型の土師器とは胎土が異なる。類北武蔵型皿と仮称しておく、群馬県藤岡市周辺の埴輪には白色針状物質が含まれることが知られており、あるいは藤岡市周辺で製作された可能性もあろう。

39は土師器蓋である。擬宝珠形の扁平なつまみが付く。天井部外面は一部ケズリ状の痕跡が見えるが、ヘラミガキ調整される。つまみもヘラミガキされているようだ。内面は風化しており不明確な部分があるが、ヘラミガキと思われる。螺旋暗文は確認できない。白色針状物質を含み、在地産と考えられるが、在地産土師器の系譜では追えない。畿内産土師器坏B蓋に最も類似するといえようか。近接する第18号溝跡から畿内産土師器坏に酷似した土器が出土しており(第244図14)、関連性が注目される資料である。

43～62は須恵器蓋である。43～56は南比企産の環状つまみをもつ蓋で、主体を占める。大型坏の蓋と考えられ、いずれも無かえり。つまみ径は5.0



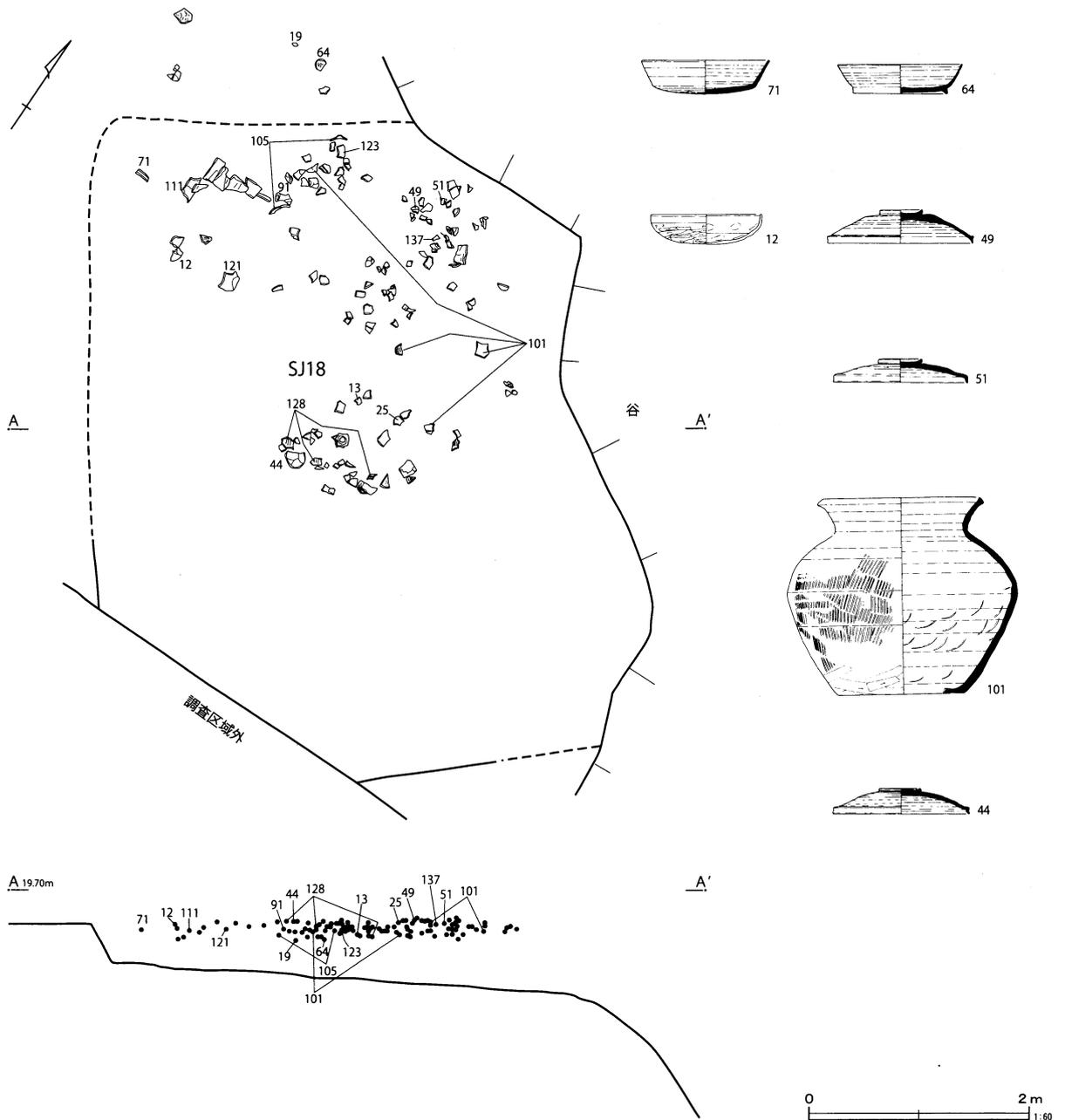
第64図 第18号住居跡(1)

cm前後である。44の内面には「×」状の線刻(ヘラ記号)が刻まれている。58・60は東海産と思われる。62はかえりが付く。産地不明。

63~67は須恵器高台付坏である。63・65は湖西産で、いわゆる「出尻底」となろう。南比企産は大型品(64)と小型品(66・67)の大小二種があ

る。68は高台付の盤である。南比企産で、底部は高台よりも若干突出する。

69~86は無台坏である。すべて南比企産、口径15.0cm~16.7cmの大型坏で占められている。底部は回転ヘラケズリ調整されるやや丸底風の形態である。69~72は口縁部が外反する深みの器形で



第65図 第18号住居跡(2)

ある。74は浅身で、中心部に僅かに糸切り痕（静止？）を残す。「サ」状の線刻（ヘラ記号か）。山下6号窯段階からHBI期段階に位置付けられる。

87は須恵器甕の口縁部で、東海産と思われる。88～93は須恵器長頸瓶。87・90は東海産、88・91は南比企産である。92・93は東海産（湖西産か）の長頸瓶で口縁部を縁帯風につくる。

94は須恵器円面硯で、脚部を欠く。硯面はよく

使用され、摩滅している。また、一部墨痕が遺存している。

95～102は須恵器壺類。99は横瓶の可能性もある。102は短頸壺か。103～113は須恵器甕である。107は湖西産の大甕で、口縁部に二段、頸部に一段、櫛歯状工具による列点文を綾杉状に施文する。108は南比企産の甕。頸部に櫛描波状文二段+平行沈線。胴部は細かい平行叩き後、丁寧なナデ。

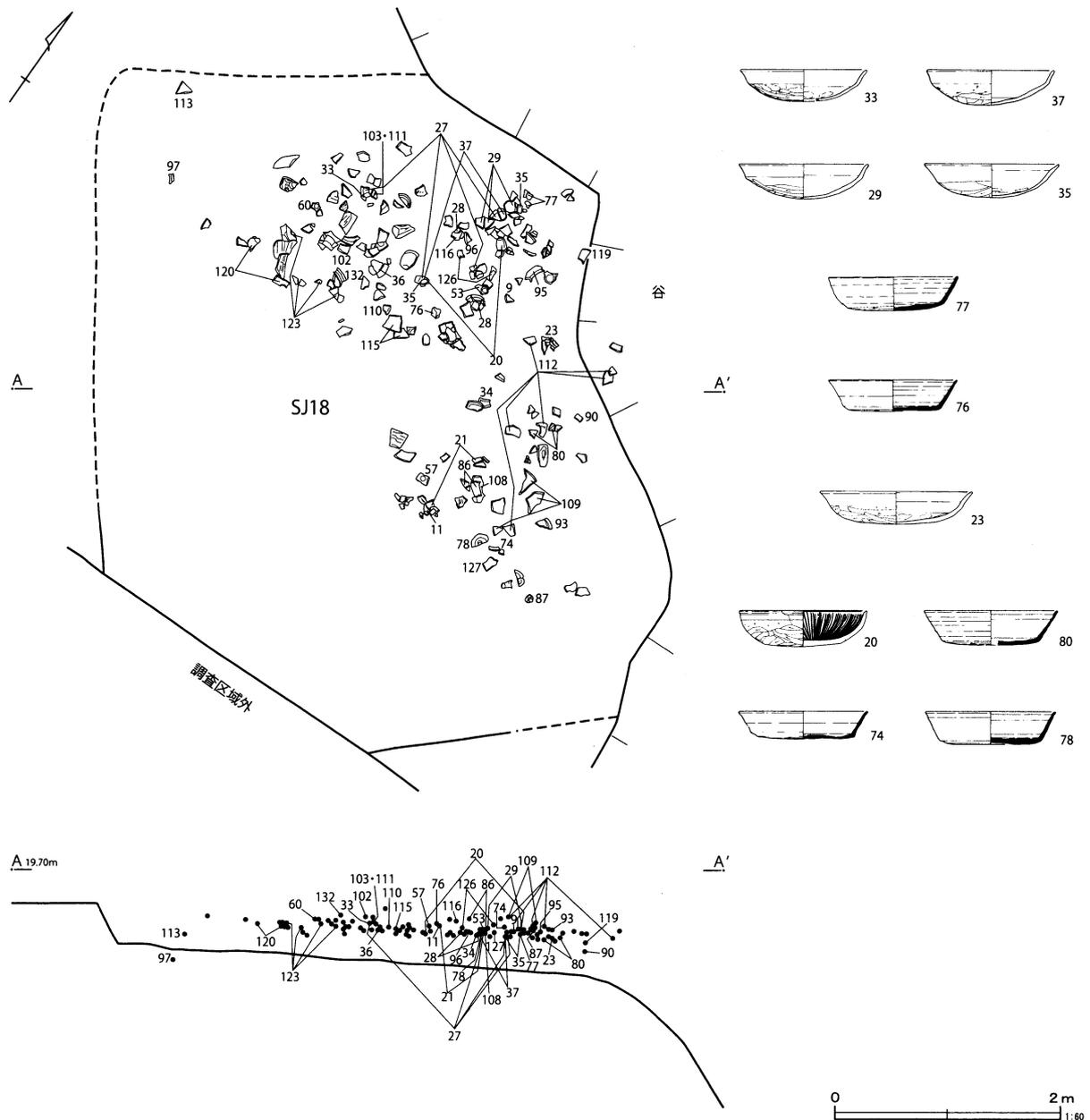


第66図 第18号住居跡(3)

内面同心円文当具。113も南比企産の大甕。頸部に櫛描波状文四段+平行沈線。114は環状把手が付く。器種は不明確であるが鉢か。115は甑。把手が2個あり、接合しない。それぞれ縦に穿孔され、一部貫通する。把手の付く位置に2+1条の平行沈線が巡る。116~118は甑。孔部は中心孔+周縁孔形式である。119~121は鉢。

122~126は土師器甕。胴部ケズリ調整の武蔵型

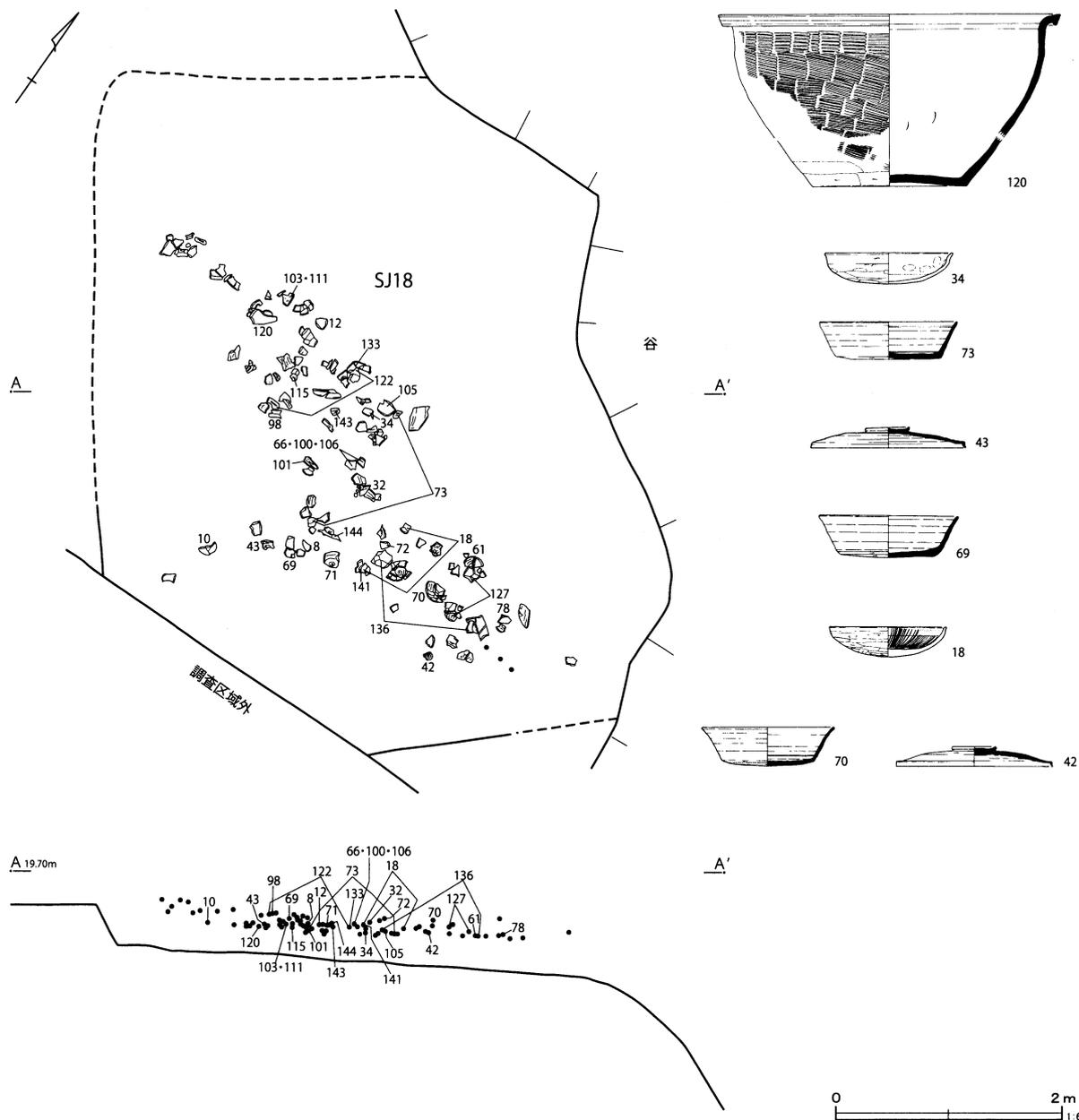
甕が主体を占めるが、124は胴部器壁が厚く、ナデ(ヘラナデ?)と指頭痕が残る。相模型甕となろうか。127~131は小型(台付)甕。127には白色針状物質が含まれる。132・133は土師器壺。134・135は小型壺である。134は胎土が精選され、胴部はナデ調整。非武蔵型といえようか。136は鉢。137・138は甑である。138はヘラナデ+ケズリ。片岩粒子が含まれ、梶川流域の土の可能性はある。



第67図 第18号住居跡（4）

142は軽石、143は砥石か。全面磨った痕跡がある。144～149は鉄製品。刀子と鉄鏝？などがある。150は白玉。混入品であろう。住居跡との確証は得られなかったが、出土遺物は時期的に非常に

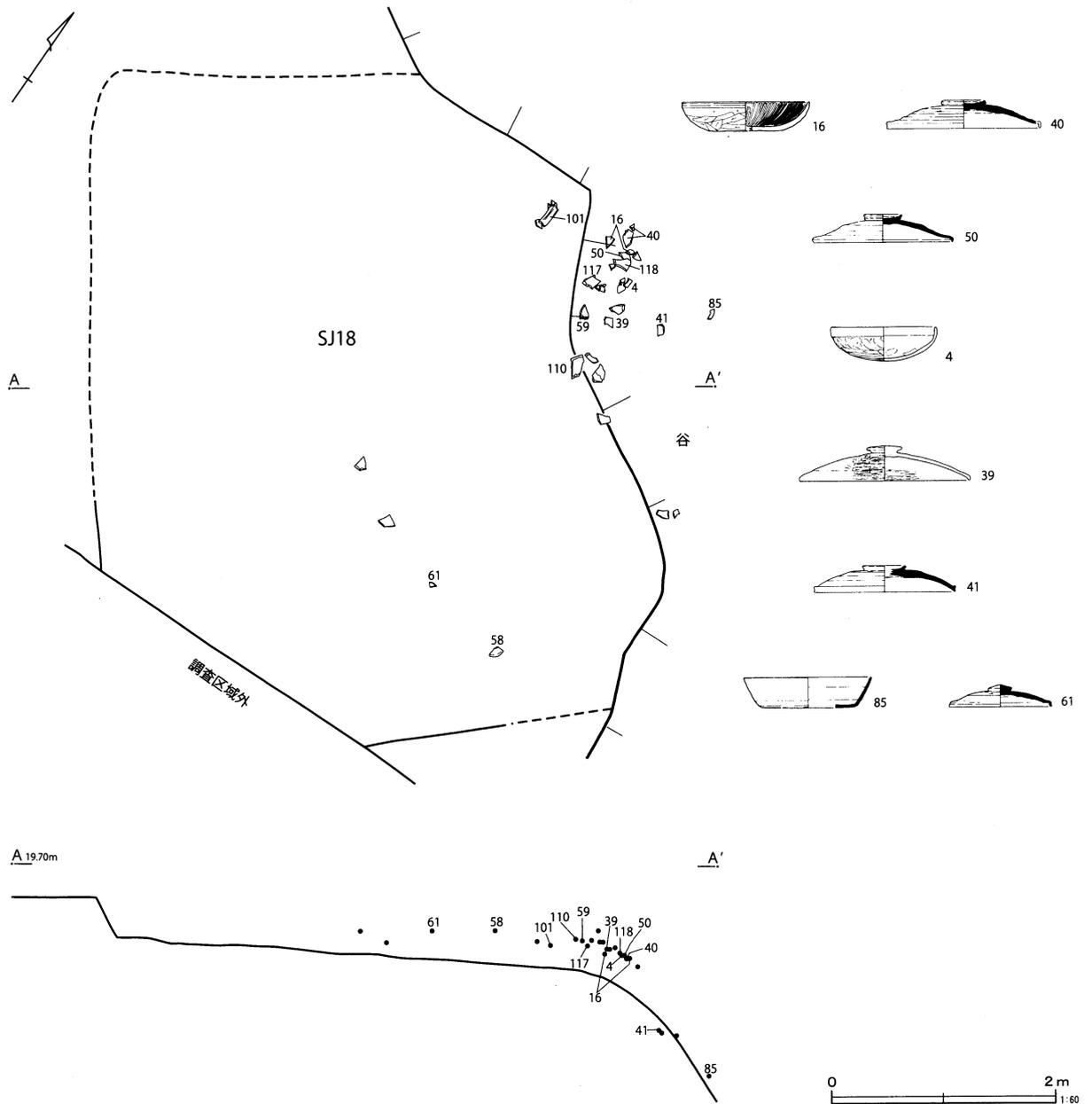
まとまった資料といえる。須恵器坏類は大型坏の単一法量で、鳩山窯跡群HB II期に降る資料はない。山下6号窯段階からHB I期頃、本書のⅦ期古段階に位置付けられる基準資料である。



第68図 第18号住居跡（5）

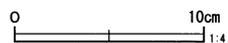
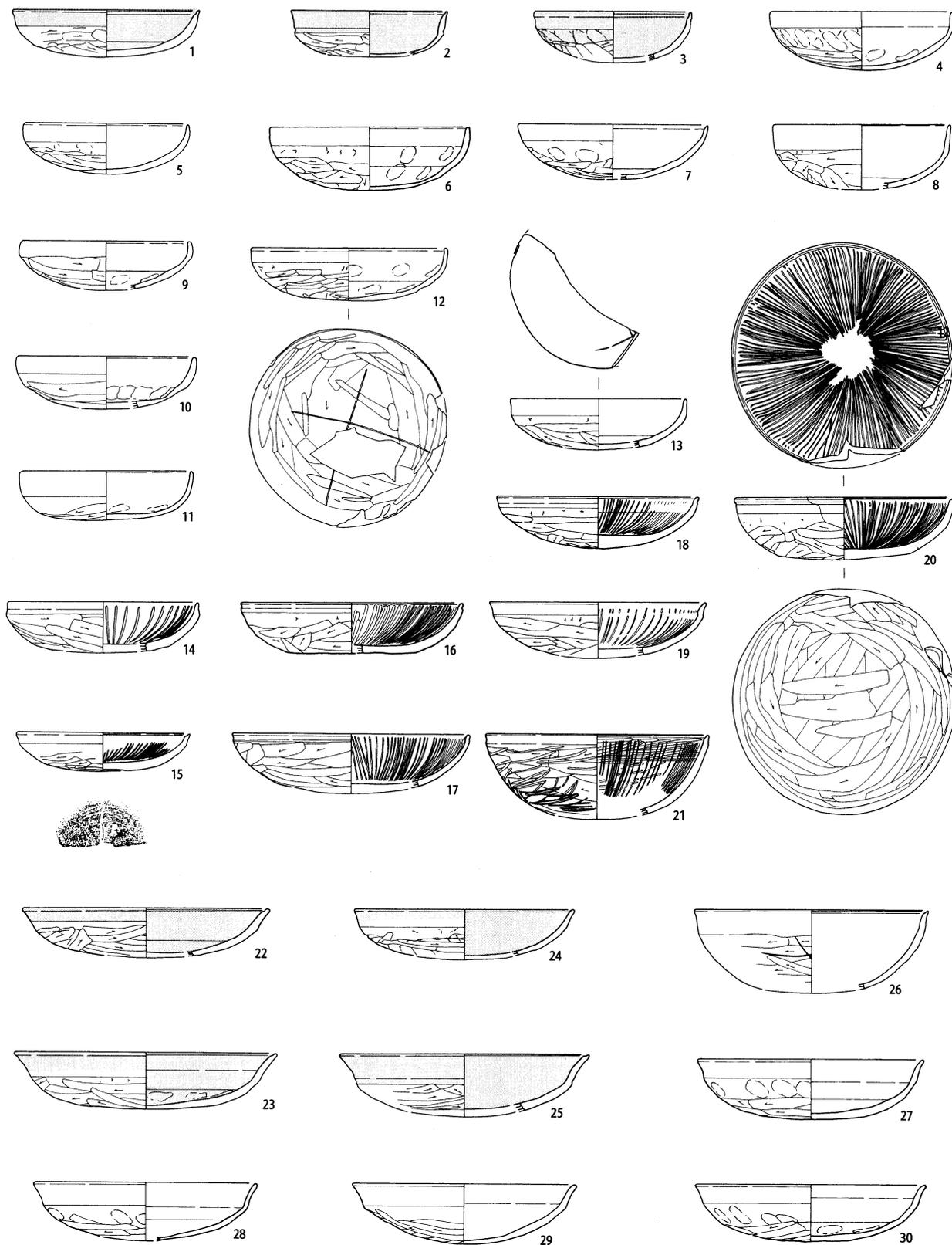
第14表 第18号住居跡出土遺物観察表（第70～77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(126)	32	-	EHIJ	25	良好	明赤褐	続比企型坏 口唇内面沈線 口縁外面+内面赤彩 白針入る		
2	土師器	坏	(106)	30	-	GHIJ	20	普通	にぶい橙	続比企型坏 口唇内面沈線 赤彩 白針入る		
3	土師器	坏	105	33	-	EIKL	30	良好	明赤褐	続比企型坏 赤彩 口唇内面沈線 白針含まない		41-8
4	土師器	坏	124	40	-	ACEHI	50	普通	橙	北武蔵型坏 No447		41-9
5	土師器	坏	(112)	34	-	ACHI	30	普通	橙	北武蔵型坏		
6	土師器	坏	(135)	43	-	AEHIL	30	普通	橙	北武蔵型坏 外面一部煤附着 No95		
7	土師器	坏	(130)	37	-	ACHI	25	普通	橙	北武蔵型坏か No56		
8	土師器	坏	(120)	44	-	CK	40	普通	橙	北武蔵型坏 No367		
9	土師器	坏	(115)	33	-	ACHI	30	普通	橙	北武蔵型坏 No322		
10	土師器	坏	121	34	-	CEHIL	35	普通	橙	北武蔵型坏 風化 No362		
11	土師器	坏	117	33	-	CDHIK	100	普通	橙	北武蔵型坏 風化著しく調整不明瞭 No428		41-10

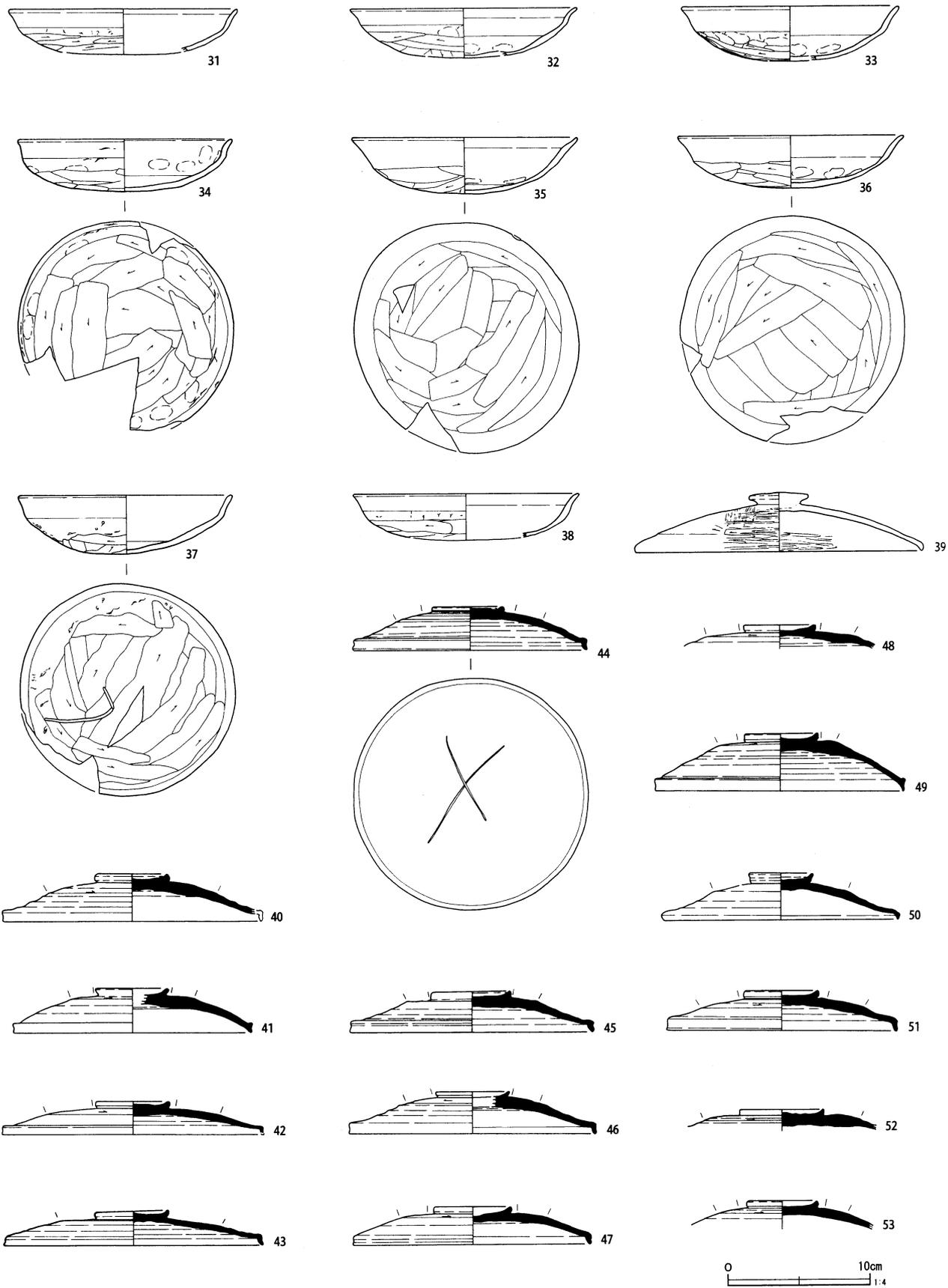


第69図 第18号住居跡(6)

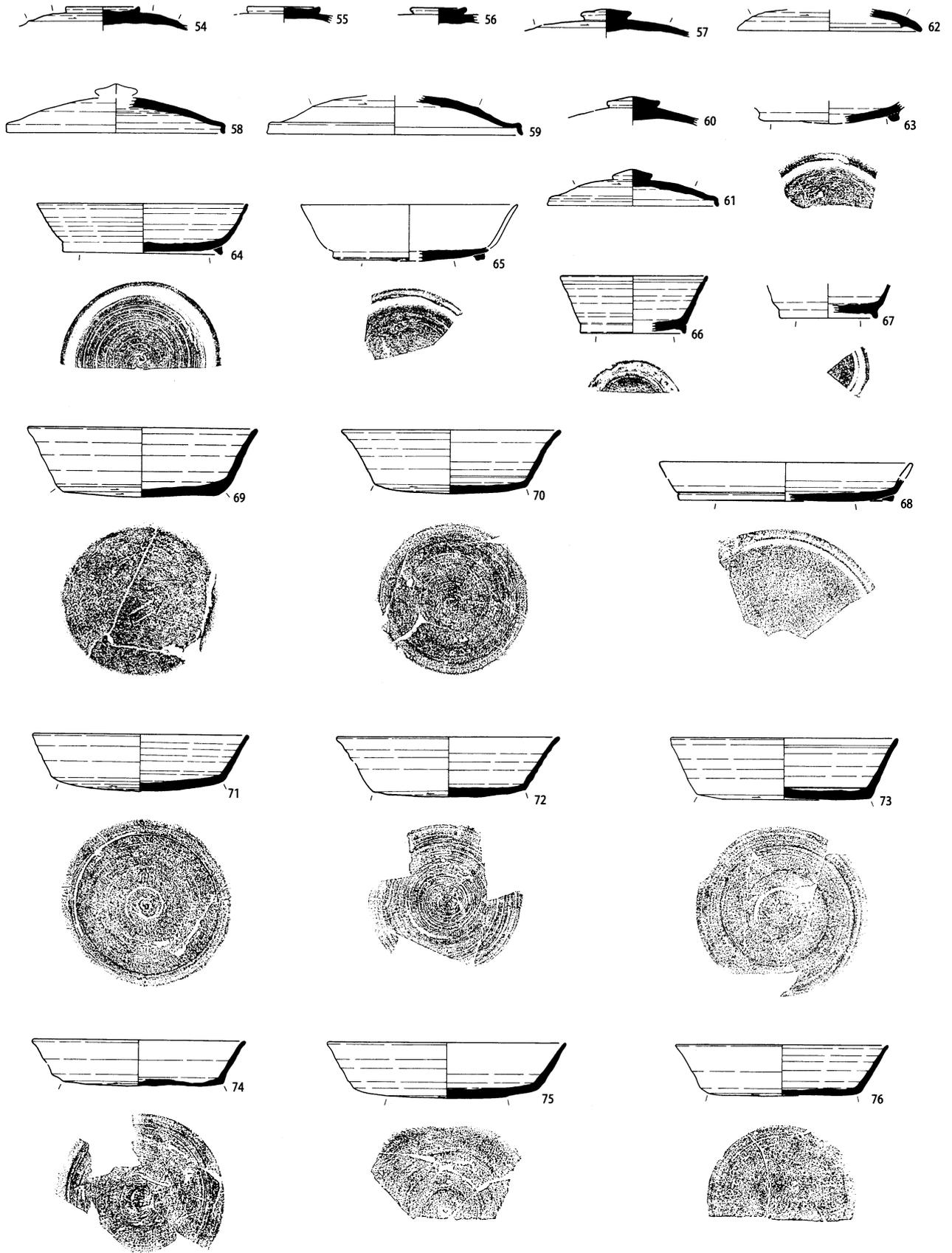
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
12	土師器	坏	132	36	-	ACH	85	普通	にぶい黄橙	北武蔵型坏 底部外面「×」状線刻 黒斑 No28・267		42-1・2
13	土師器	坏	(119)	34	-	CEHI	30	普通	橙	北武蔵型坏 内面線刻「×」 No142		42-3
14	土師器	坏	(130)	33	-	ACHI	30	普通	にぶい褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 外面黒斑あり 内面橙		
15	土師器	坏	(119)	26	-	ACEHIG	30	普通	浅黄橙	北武蔵型暗文坏 底部に糸切り痕残る 内面放射暗文 No186		42-5・6
16	土師器	坏	(151)	34	-	ACHI	50	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 底部平底風 No396・398		42-4
17	土師器	坏	(160)	36	-	CHI	35	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
18	土師器	坏	137	35	-	CEHI	70	良好	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 No359・371		42-7
19	土師器	坏	(147)	38	-	CEHI	20	良好	明赤褐	北武蔵型暗文坏 No4		
20	土師器	坏	150	42	90	CEGHI	90	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 底部平底風 No307・329		43-1・2



第70図 第18号住居跡出土遺物(1)

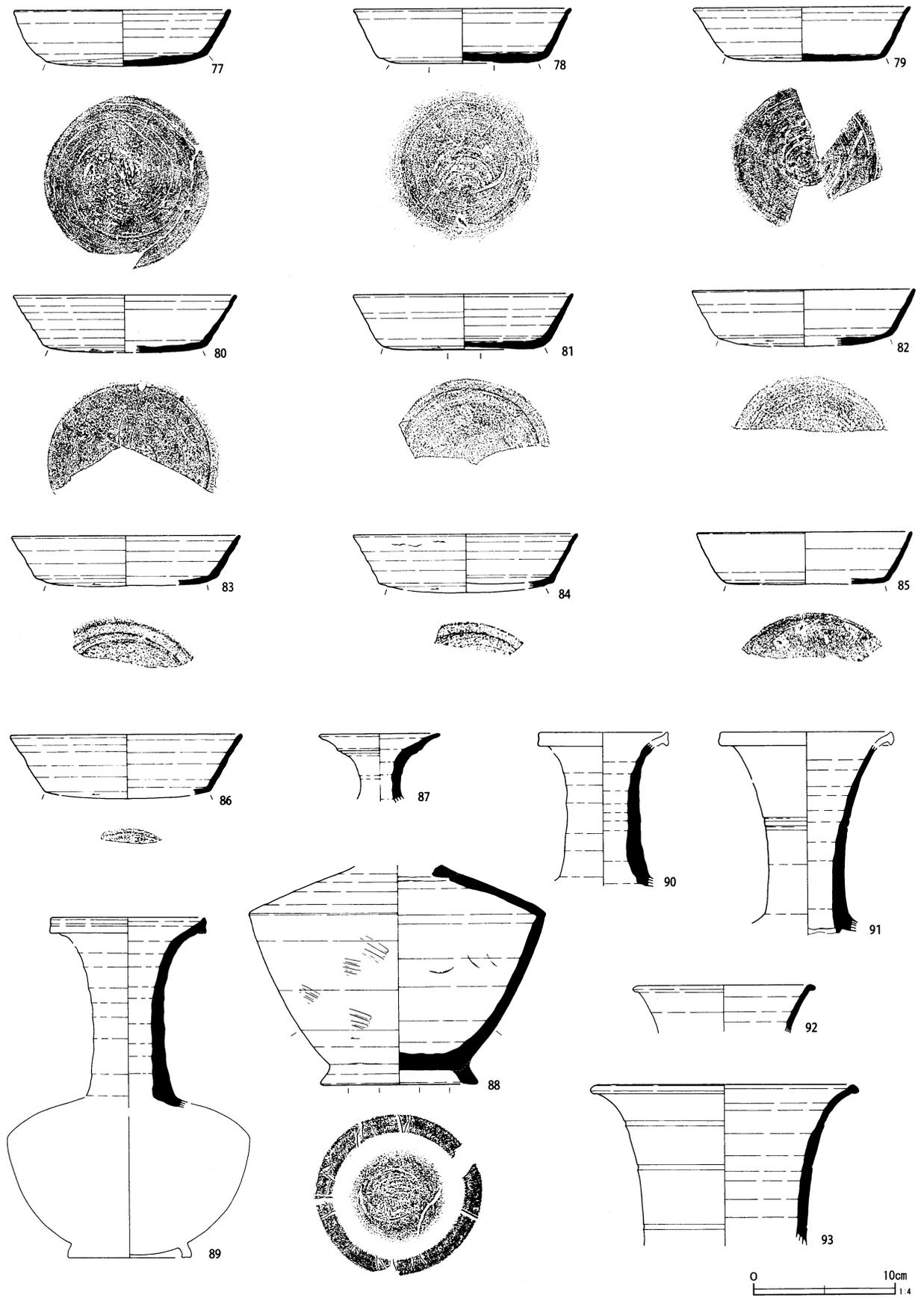


第71図 第18号住居跡出土遺物(2)

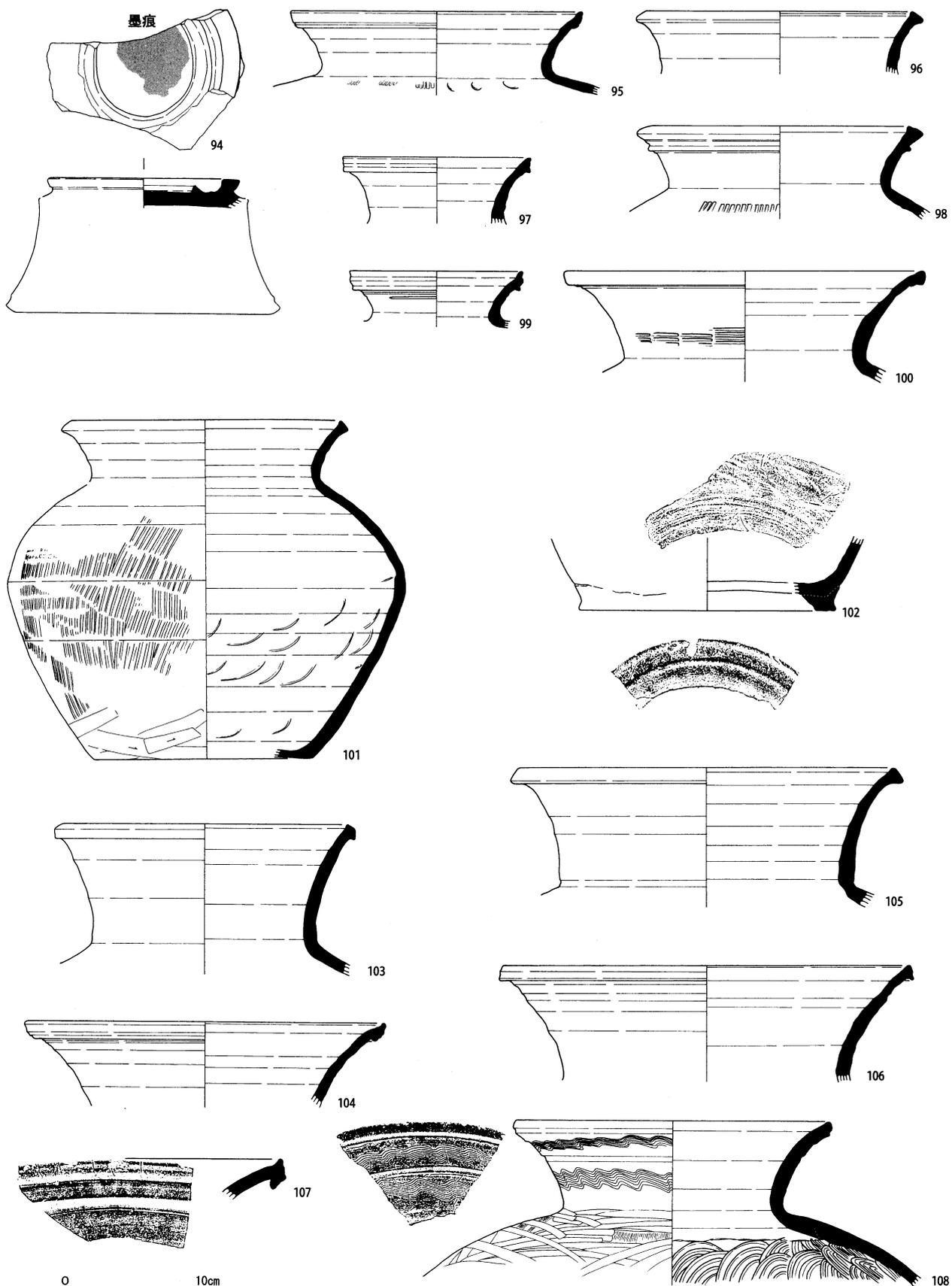


第72図 第18号住居跡出土遺物(3)

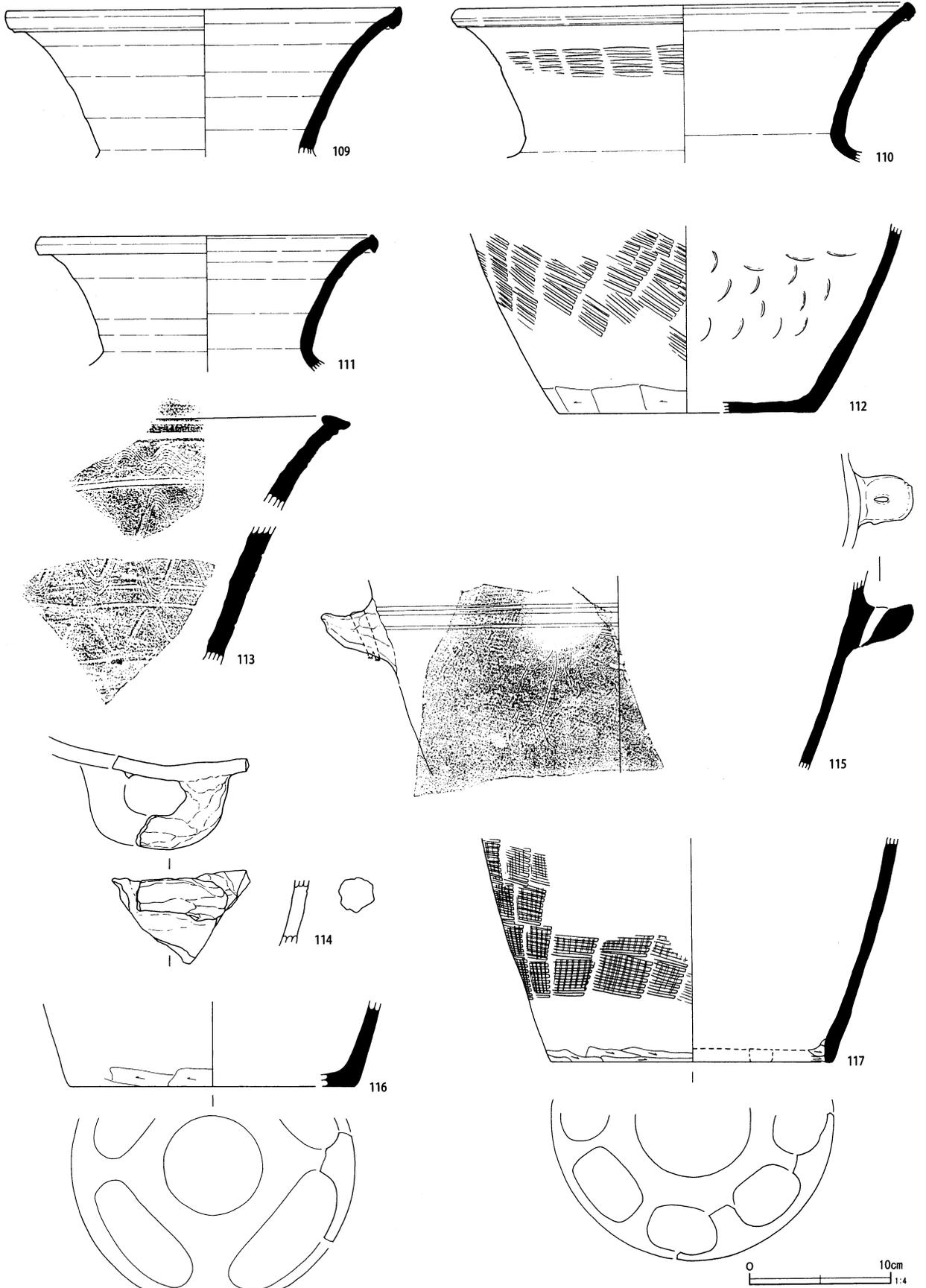
0 10cm 1:4



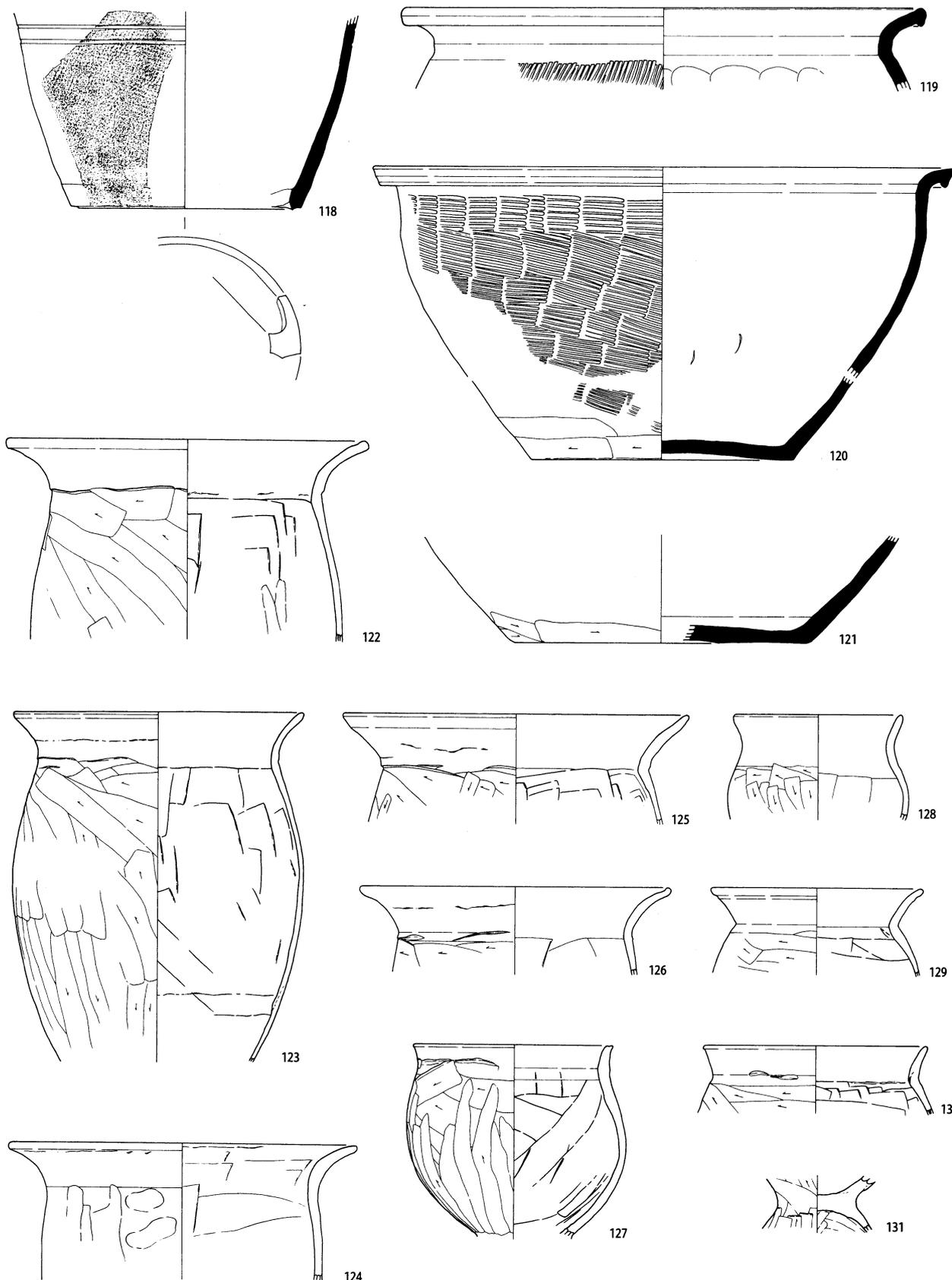
第73图 第18号住居跡出土遺物(4)



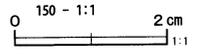
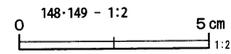
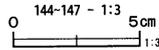
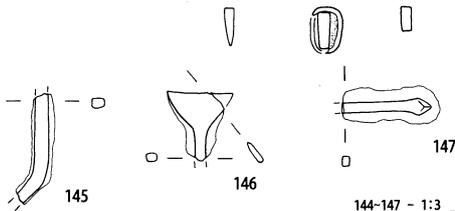
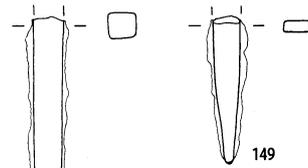
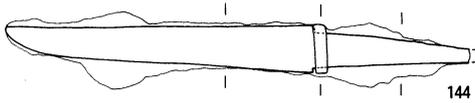
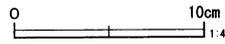
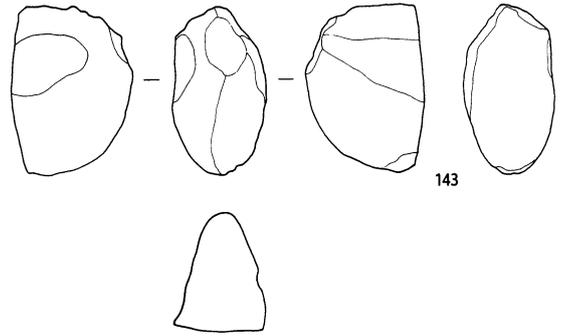
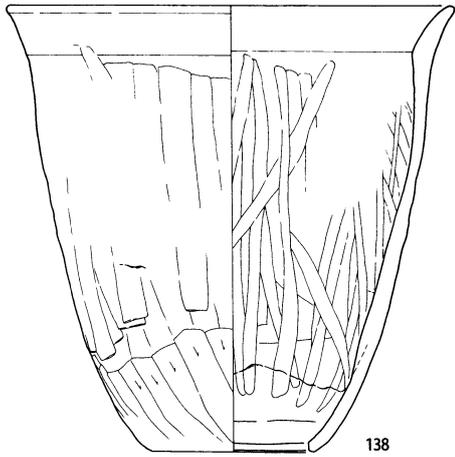
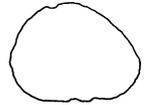
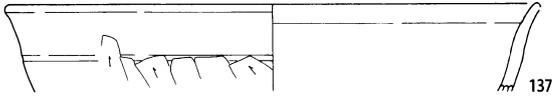
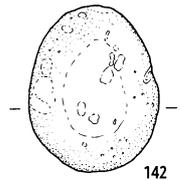
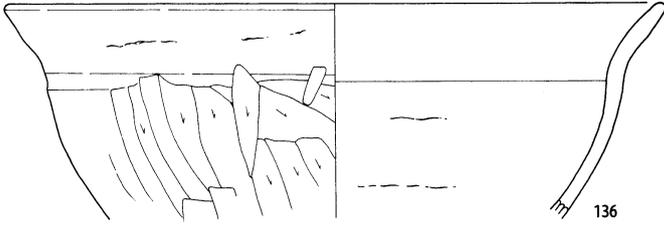
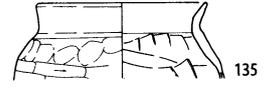
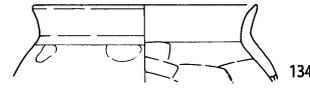
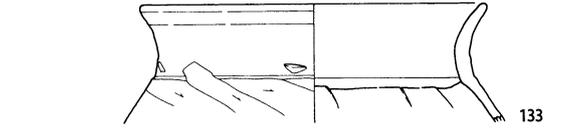
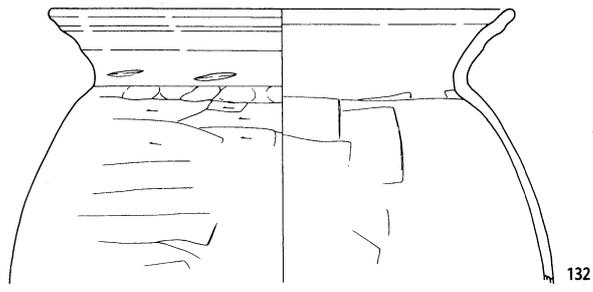
第74図 第18号住居跡出土遺物(5)



第75图 第18号住居跡出土遺物(6)



第76図 第18号住居跡出土遺物(7)



第77图 第18号住居跡出土遺物(8)

銭塚遺跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
21	土師器	坏	15.1	5.6	-	CH	70	良好	明赤褐	北武蔵型暗文坏 放射暗文+ミガキ	No422・428	42-8
22	土師器	皿	16.8	3.3	-	HIL	60	良好	赤褐	統比企型坏(皿) 内面+口縁外面赤彩		43-3
23	土師器	皿	(18.0)	3.9	-	ACEHIJ	50	普通	浅黄橙	統比企型坏(皿) 口唇部内面沈線 内面+口縁外面赤彩	白針含む No401	43-4
24	土師器	皿	15.0	3.1	-	A E H I	50	普通	明赤褐	統比企型坏(皿) 内面+口縁外面赤彩と思われる		43-5
25	土師器	皿	(16.8)	3.9	-	E H I J K	15	普通	にぶい橙	統比企型坏(皿) 口唇内面沈線 内面+口縁外面赤彩	白針入る No135	
26	土師器	椀	(15.8)	5.4	-	C E G H I	15	普通	橙	口唇部内面沈線 無彩 白針なし 系譜不明	No54	
27	土師器	皿	15.3	4.1	-	A E H I J	65	普通	橙	類北武蔵型皿 白針入る 無彩	No233・305・307・318	43-6
28	土師器	皿	15.1	3.9	-	ABDEHIL	75	普通	橙	類北武蔵型坏(皿) 粉っぽい胎土 角閃石含まない	No342・344	43-8
29	土師器	皿	15.0	4.2	-	A E H I J	70	普通	橙	類北武蔵型皿 粉っぽく角閃石含まない 無黒斑 高温焼成か	No304・306	43-7
30	土師器	皿	(15.6)	3.9	-	A E H I J	50	普通	にぶい橙	類北武蔵型坏(皿) 白針含むが角閃石含まない 無彩	No34と同類	43-9
31	土師器	皿	(15.8)	3.0	-	A H I J	25	普通	橙	類北武蔵型皿 白針入る 無彩	No61	
32	土師器	皿	(16.6)	3.5	-	A E H I J	30	普通	橙	素地土粉っぽく精選 白針入る 類北武蔵型皿	No357	
33	土師器	皿	(14.7)	3.7	-	A E H I J	30	普通	橙	類北武蔵型皿 雲母状微粒子・白針入る 粉っぽい胎土精選	No233	
34	土師器	皿	14.8	3.7	-	ACDEHIK	80	普通	橙	北武蔵型坏(皿) No294・404		43-10
35	土師器	皿	(15.7)	4.0	-	C E H I K	95	普通	橙	北武蔵型坏(皿) 歪み有り	No306・307	44-1
36	土師器	皿	15.7	3.7	-	CHI	85	普通	橙	北武蔵型坏(皿) No326		44-2
37	土師器	皿	14.9	4.1	-	A E H J K	90	普通	橙	類北武蔵型皿 粉っぽい胎土で白針含む	No305・307	44-3
38	土師器	皿	(15.8)	3.0	-	ADHI	20	普通	橙	北武蔵型皿に似る 粉っぽい胎土 白針不明		
39	土師器	蓋	20.0	4.1	-	H I J	15	普通	明褐	土師蓋 在地(南比企)産 畿内産を模倣した可能性もある	天井部ケズリ後ヘラミガキ 内面ミガキ No451	44-4
40	須恵器	蓋	-	2.3	-	I J	50	普通	明灰	南比企産 環状つまみ(径4.8cm)	No395	
41	須恵器	蓋	(16.6)	3.1	-	G I J	25	普通	灰白	南比企産 環状つまみ(径5.0cm)	No439	44-5
42	須恵器	蓋	-	2.3	-	J	20	普通	灰白	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) 口唇部欠失	No378	
43	須恵器	蓋	18.0	2.5	-	I J	75	普通	暗青灰	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) 薄手で軽量感あり	No364	44-6
44	須恵器	蓋	16.3	3.1	-	G I J K L	100	良好	青灰	南比企産 環状つまみ(径4.8cm) ロクロ左回転 内面「×」	ヘラ記号 内面自然釉 重ね焼き痕 No213	44-7
45	須恵器	蓋	(17.0)	2.9	-	I J	30	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.4cm)	No189	44-8
46	須恵器	蓋	(17.2)	3.0	-	A I J	30	普通	黄灰	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) ロクロ左回転	No165	
47	須恵器	蓋	(16.4)	2.7	-	E I J K	10	良好	青灰	南比企産 環状つまみ(径5.3cm) 内面中央部やや摩耗		
48	須恵器	蓋	-	1.7	-	E I J	20	良好	灰	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) ロクロ左回転		
49	須恵器	蓋	17.4	4.0	-	J	80	不良	灰白	南比企産 環状つまみ(径5.1cm)	No37	44-9
50	須恵器	蓋	(16.5)	3.3	-	I J K	40	良好	灰	南比企産 天井部淡緑色の自然釉 環状つまみ(径4.4cm)	No399	44-10
51	須恵器	蓋	16.0	2.8	-	I J	70	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.1cm)	No145	45-1
52	須恵器	蓋	-	1.5	-	I J	25	普通	明灰	南比企産 環状つまみ(推定径5.8cm)		
53	須恵器	蓋	-	2.0	-	E I J	30	良好	灰	南比企産 環状つまみ(径4.8cm)	No343	
54	須恵器	蓋	-	1.7	-	I J	40	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.2cm)		
55	須恵器	蓋	-	-	-	G J	50	良好	淡灰	南比企産 環状つまみ(径5.2cm) 内面やや摩耗		
56	須恵器	蓋	-	1.1	-	I J	70	良好	青灰	南比企産 つまみ完存(径4.0cm)		
57	須恵器	蓋	-	2.0	-	I J K	60	普通	明灰	南比企産 扁平なボタン状つまみ(径3.6cm)	No426	
58	須恵器	蓋	(15.3)	2.5	-	K	30	良好	灰白	湖西産 つまみ欠 外面自然釉 胎土精選 坏B蓋か	No445	
59	須恵器	蓋	(18.0)	2.8	-	I J	50	良好	明灰	南比企産 つまみ欠	No452	
60	須恵器	蓋	-	2.1	-	G I	80	良好	暗灰	東海産か 擬宝珠形つまみ 内面摩滅 外面自然釉 焼成堅緻	No301	
61	須恵器	蓋	12.0	2.7	-	I J	95	普通	灰	南比企産	No383	45-2
62	須恵器	蓋	(13.0)	1.5	-	I	5	普通	灰	南比企産か 白色針状物質不明瞭		
63	須恵器	高台付坏	-	1.4	(108)	AHK	20	普通	灰白	湖西産 二次被熱 底部回転ヘラケズリ 出尻底		
64	須恵器	高台付坏	(14.9)	3.7	11.2	I J K	50	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 形態整う	No5	45-3

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
65	須恵器	高台付坏	-	1.0	(108)	I K	25	良好	灰	湖西産 底部回転ヘラケズリ 出尻底 煤付着		
66	須恵器	高台付坏	(10.1)	4.0	(72)	E I J K	20	良好	灰	南比企産 口唇部内外面沈線 底部回転ヘラケズリ後ナデか精巧な作り No356	45-4	
67	須恵器	高台付坏	-	2.4	(70)	E I J K	20	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ		
68	須恵器	高台付盤	-	1.7	(152)	E I J K	25	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 高台は低くやや出尻		
69	須恵器	坏	16.4	5.0	108	A I J K	80	不良	橙	南比企産 底部風化 底部+体部下端回転ヘラケズリか 褐色系回転ヘラ ロクロ左回転 No365	45-5	
70	須恵器	坏	15.5	4.6	10.7	I J K L	80	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ Y6段階 No376	45-6	
71	須恵器	坏	15.2	4.1	12.1	G I J K L	100	良好	灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ No1・229・368	45-7	
72	須恵器	坏	(15.7)	4.3	108	I J	30	普通	明灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) Y6段階 No162・358	45-8	
73	須恵器	坏	(16.1)	4.4	12.2	E I J K	70	普通	灰	南比企産 口縁内面に沈線 底部全面回転ヘラケズリ Y6段階 No298・351	45-9	
74	須恵器	坏	(15.0)	3.3	11.4	I J	55	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 「サ」の線刻 (ヘラ記号か) 中心部静止糸切り痕? No431	45-10	
75	須恵器	坏	(16.7)	4.0	(130)	E G I J	25	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ		
76	須恵器	坏	(15.0)	3.7	11.5	E G I J	55	普通	灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ No340	46-1	
77	須恵器	坏	15.3	4.0	11.5	A C E H I J	90	普通	橙	南比企産 底部ヘラ切り後全面ヘラケズリ 褐色系回転ヘラケズリ ロクロ左回転 No306	46-2	
78	須恵器	坏	15.2	3.8	-	I J K	95	良好	黒灰	南比企産 底部静止糸切後周辺部回転ヘラケズリ Y6~H I期か No385・430	46-3	
79	須恵器	坏	(15.0)	3.8	11.7	I J	45	普通	暗灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	46-4	
80	須恵器	坏	(15.6)	4.0	(108)	G I J	60	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ後ロクロナデ Y6段階 No409・412	46-5	
81	須恵器	坏	(15.4)	3.9	(11.3)	E J K	20	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ (ロクロ左回転)		
82	須恵器	坏	(15.6)	3.9	(12.1)	G I J	25	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 大振りの坏		
83	須恵器	坏	(16.0)	3.5	(11.3)	E I J L	25	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) No169		
84	須恵器	坏	(15.5)	3.8	(12.2)	I J K L	20	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ左回転) No197		
85	須恵器	坏	(15.0)	3.7	(11.0)	E I J K	25	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) No438		
86	須恵器	坏	(16.2)	4.3	(11.6)	E I J K	20	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) Y6段階 No419・420		
87	須恵器	甗	(8.3)	4.9	-	G K	70	良好	灰	東海産 (湖西) 内外面緑灰色の自然釉 No435	46-6	
88	須恵器	長頸瓶	-	15.4	10.8	E G J L	30	普通	灰黄褐	内面: 浅黄 南比企産 胴部平行叩き後ロクロナデ 底部静止? 糸切後回転ヘラケズリ No172・184・187・196	46-7	
89	須恵器	長頸瓶	(10.8)	13.4	-	G K	75	良好	灰白	湖西産 白~黄緑色の自然釉 胎土精選 No185	46-8	
90	須恵器	長頸瓶	-	10.1	-	G K	80	良好	明灰	東海 (湖西か) 産 口縁欠失 黄緑色の自然釉かかる 胎土精選 No415		
91	須恵器	長頸瓶	-	13.3	-	I J	80	普通	暗灰	南比企産 頸部沈線2条 No18		
92	須恵器	長頸瓶	(12.2)	3.4	-	G I	15	良好	明灰	湖西産 口縁部縁帯風		
93	須恵器	長頸瓶	(18.0)	11.3	-	G I	25	良好	灰白	湖西産 (太頸長頸瓶) 頸部沈線3条 3片あり接合しない No437		
94	須恵器	円面硯	(13.2)	2.0	-	G I J	60	良好	青灰	南比企産 硯面磨滅著しい 墨痕残る 内面自然釉 No161	47-1	
95	須恵器	壺	20.0	5.8	-	G I J	20	良好	青灰	南比企産 胴部平行叩き 無文当て具後ロクロナデ No320		
96	須恵器	壺	(18.6)	4.4	-	J	10	普通	暗灰	南比企産 内面自然釉 No315		
97	須恵器	壺	(13.0)	4.6	-	I J	25	良好	淡紫灰	南比企産 外面自然降灰 No237		
98	須恵器	壺	(18.0)	6.5	-	E J	20	普通	暗青灰	南比企産 口縁部突帯 胴部平行叩き No282		
99	須恵器	横瓶か	(12.0)	3.9	-	I J	15	普通	暗灰	南比企産 頸部沈線2条 確認面		
100	須恵器	壺	(24.8)	7.8	-	I J	20	普通	灰	南比企産 頸部平行叩き後ロクロナデ No356		
101	須恵器	壺	(18.8)	23.9	(15.2)	J K	50	良好	灰	南比企産 胴部平行叩き+無文当て具 下端ケズリ No13・127・130・137・350・355・393	47-2	
102	須恵器	短頸壺	-	5.2	17.8	E I J	15	良好	青灰	南比企産 外面丁寧なロクロナデ 内面ヘラナデ(?) 後ナデ 内面自然降灰 No250		
103	須恵器	甗	(20.0)	10.5	-	D I J	25	良好	暗灰	南比企産 内外面自然釉 No234・260		
104	須恵器	甗	(25.0)	5.9	-	I J	10	普通	暗青灰	南比企産 No73		
105	須恵器	甗	26.0	9.8	-	I J	50	普通	暗灰	南比企産 2片あり 接合しない No7・19・297	47-3	
106	須恵器	甗	(28.2)	9.1	-	E I J	15	普通	明灰	南比企産 器面風化 No356		

銭塚遺跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
107	須恵器	大甕	(50.0)	29	-	G I	5	良好	明灰	湖西産 口縁2段・頸部1段櫛歯状工具による列点文を綾杉状に施文 確認面		47-4
108	須恵器	甕	21.7	11.0	-	E I J	35	良好	暗青灰	頸部櫛歯波状文(10本組)2段+沈線1条 胴部細かい平行叩き+同心円文当て具後ナデ No419		47-5・6
109	須恵器	甕	(27.4)	10.4	-	E G J K	70	良好	灰	南比企産 No192・416・417		47-7
110	須恵器	甕	(31.6)	11.3	-	I J K	20	良好	暗灰	南比企産 頸部平行叩き痕残る 内面自然降灰 No334・453		
111	須恵器	甕	(23.3)	9.6	-	E I K	40	良好	灰	南比企産 No26・234・260		
112	須恵器	甕	-	13.3	(180)	E G J	30	良好	灰	南比企産 外面:平行叩きナデ消す 内面:無文当て具 自然釉付着 No350・402・406・408・417		
113	須恵器	大甕	-	-	-	E I J	5	普通	灰	南比企産 11本組櫛歯波状文4(?)段+沈線区画 No217		
114	須恵器	鉢か	-	-	-	I J	5	普通	灰	南比企産 環状把手が付く鉢又は甌か 器面に横方向の沈線1条巡るようだ 確認面		
115	須恵器	甌	-	14.0	-	I J	15	普通	暗灰	南比企産 把手2ヶあり 接合しない 把手には上→下に楕円形の孔が穿たれ一部貫通する 外面擬斜格子叩き 内面ナデ 把手の付く位置に2+1条の平行沈線文巡る No274・335		47-8 48-1~5
116	須恵器	甌	-	6.0	(200)	I J	10	普通	青灰	南比企産 孔部は中心+周縁孔 単位は不明確 115と同一個体の可能性有 No314		
117	須恵器	甌	-	15.8	(200)	E I J	15	普通	暗灰	南比企産 孔部中心孔+周縁孔(7?) No449		48-6
118	須恵器	甌	-	13.5	(160)	I J	10	普通	暗灰	南比企産 外面擬斜格子叩き 沈線2条 下端ケズリ 内面ナデ 孔部構成不明瞭 No397		
119	須恵器	鉢	(36.0)	5.8	-	I J	5	良好	灰	南比企産 胴部平行叩き+無文当て具 No346		
120	須恵器	鉢	(40.0)	20.2	(180)	I J	20	普通	灰白	南比企産 外面平行叩き 胴部下端ヘラケズリ 内面当て具痕不明瞭 No239・242・262		
121	須恵器	鉢	-	7.5	(200)	E I J	25	良好	暗灰	南比企産 内底面摩滅あるため鉢と考えた No30		
122	土師器	甕	(24.4)	13.9	-	A C H I	30	普通	橙	武蔵型甕 No280・288		49-1
123	土師器	甕	(19.6)	24.4	-	C E H I	40	普通	橙	武蔵型甕 No.9・241・245・246・332		48-7
124	土師器	甕	(23.7)	9.4	-	A E H I	15	普通	にぶい黄橙	胴部ナデ又はヘラナデ+指頭痕でケズリはない 雲母状微粒子含む 相模型か 確認面		
125	土師器	甕	(23.7)	7.6	-	A C E H I	30	普通	橙	武蔵型甕		
126	土師器	甕	(21.3)	6.0	-	A C E H I K	25	普通	橙	武蔵型甕 No316		
127	土師器	小型甕	13.6	13.4	-	E H I J L	65	普通	橙	白色針状物質入る 台付甕と思われる 形態歪む No381・382・432		49-2
128	土師器	小型甕	(11.5)	7.2	-	C H I	30	普通	橙	武蔵型甕 胴部外面・口縁内面煤付着 No204・210・214		
129	土師器	小型甕	(14.3)	6.1	-	A C H I	20	普通	橙	武蔵型甕か 外面二次被熱		
130	土師器	小型甕	(15.2)	4.7	-	A C H I	30	普通	にぶい赤褐	武蔵型甕か 二次被熱により器面剥落		
131	土師器	台付甕	-	3.9	-	C G H I	70	普通	橙	武蔵型甕 外面ケズリ・内面ナデ No51		
132	土師器	壺	(24.0)	14.5	-	A C I	20	普通	橙	武蔵型壺 No247		
133	土師器	壺	(17.8)	6.3	-	A C E H I K	25	普通	橙	武蔵型壺 No288		
134	土師器	小型壺か	(11.8)	4.0	-	A H I J	45	不良	橙	胴部ナデ?+指頭痕 粉っぽい胎土で精選		
135	土師器	小型壺	8.8	4.0	-	A E H I	45	普通	灰黄褐	粉っぽい素地土		49-3
136	土師器	鉢	(34.8)	11.3	-	C E G H I	15	普通	明赤褐	武蔵型 No360・384		
137	土師器	甌か	(28.0)	4.6	-	A C K	5	普通	橙	武蔵型 No114		
138	土師器	甌	(23.2)	23.5	(8.7)	A B E L	25	普通	橙	胴部ヘラナデ 下位ケズリ 内面縦方向の粗いナデ 片岩粒多(槻川流域か) No170・176・177・183		
139	土師器	壺	-	3.0	9.4	C E I	30	普通	橙	武蔵型甕(壺) 外面ケズリ内面ヘラナデ		
140	土師器	甕	-	4.1	(4.8)	C E H I K	25	普通	橙	武蔵型		
141	土師器	甕	-	4.7	(5.6)	A D G H I	30	普通	橙	素地土細かく角閃石目立たない 雲母状微粒子 白・赤色粒含む No359		
142	石製品	軽石	-	-	-	-	-	-	灰白	長さ6.5cm 幅5.1cm 厚さ3.9cm 重量61.63g 角閃石安山岩製 図上の下面は平坦 全面磨っている		49-4
143	石製品	砥石か	-	-	-	-	-	-	白	長さ6.6cm 幅3.5cm 厚さ4.7cm 重量73.91g 凝灰岩製 全面磨った痕跡残る 方柱状ではないか No290		49-5
144	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	長さ18.3cm 刃長12.2cm 最大刃幅1.8cm 背幅0.5cm No369		49-10
145	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.2cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm		49-6
146	鉄製品	鉄鎌?	-	-	-	-	-	-	-	雁股か? 長さ2.7cm 幅1.9cm(最大) 厚さ0.2cm		49-7
147	鉄製品	鉄鎌	-	-	-	-	-	-	-	鎌身部(形状推定) 長さ3.4cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm 鎌幅0.65cm		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
148	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ5.1cm 幅0.75cm 厚さ0.8cm No311		49-9
149	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.8cm 幅0.7cm 厚さ0.3cm No99		49-8
150	石製品	白玉	-	-	-	-	-	-	灰	径0.85cm 高さ0.75cm 孔径0.15~0.2cm 重さ0.7g 滑石製		49-11・12

第19号住居跡 (第78図)

第19号住居跡はZJ-22グリッドに位置する。第23号住居跡、第38号住居跡、第4号掘立柱建物跡と重複し、第23号住居跡カマド、第4号掘立柱建物跡P1に切られ、第38号住居跡を切っていた。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長3.13m、短軸長2.57m、深さ0.12~0.16mである。主軸方位はN-90° - Eを指す。

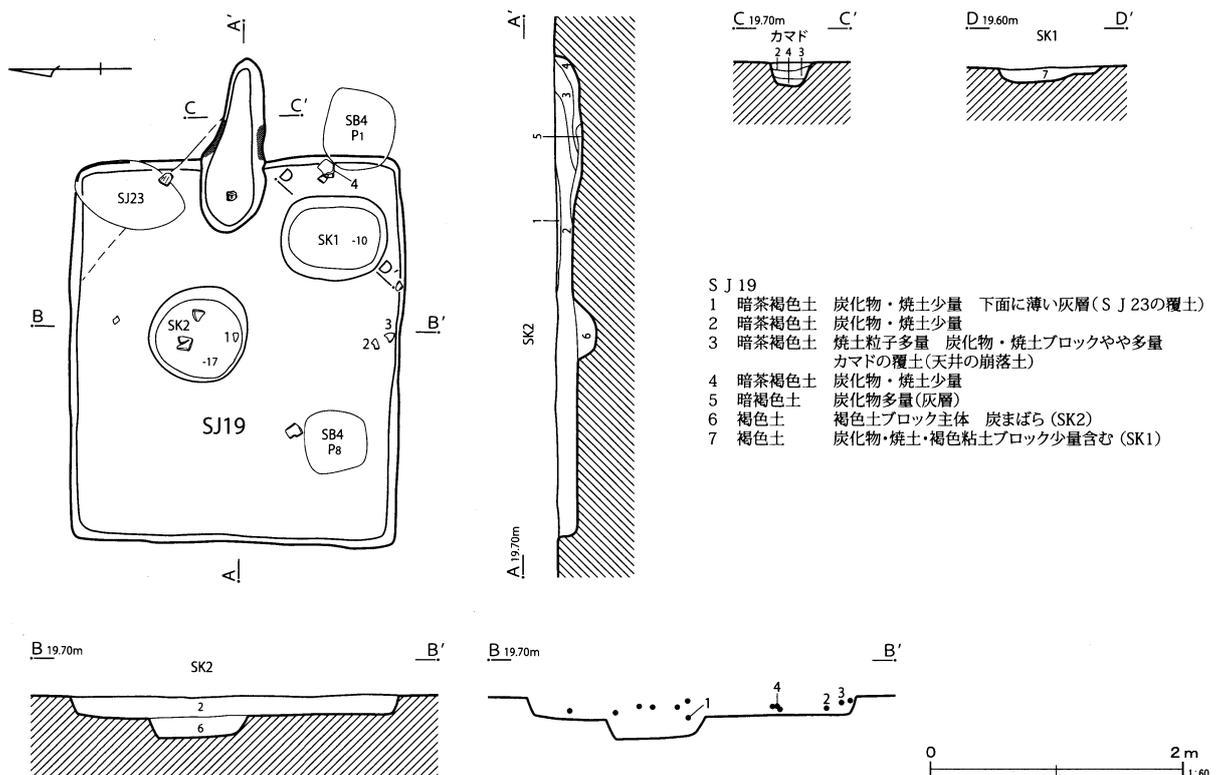
床面は平坦で、炭化物の薄い堆積層が部分的に観察された。埋土は暗茶褐色土の単層で構成され(第2層)大きな土層変化は認められなかった。人為的に埋め戻された可能性もある。

カマドは東壁中央に設けられていた。燃烧部は壁を切り込んで構築され、煙道部と段差を持たないで連続していた。全長1.40m、幅0.50m、深さ0.22

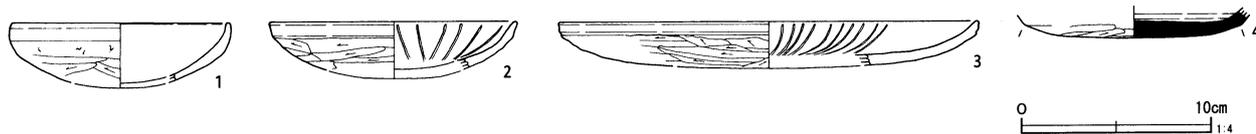
m、壁外の掘り込みは0.82mである。燃烧部底面は皿状に窪み、灰層が広がっていた。側壁は強く被熱し赤褐色に変色していた。左側壁から鎌が出土したが、壁上部に刺さった状態で検出されたため、重複する第23号住居跡に帰属すると判断した。カマドの袖部は検出されなかった。住居廃絶時に、人為的に取り外された可能性がある。

土壌は2基(SK1・SK2)検出された。SK1は楕円形で、規模は長径83cm、短径68cm、深さ6~10cmである。上面に貼床は観察されず、住居使用時には開口していたと考えられる。位置的に貯蔵穴の可能性があろう。SK2は円形で、長径78cm、短径75cm、深さ17cmである。同様に上面は床面が乗っており、床下土壌と考えられる。

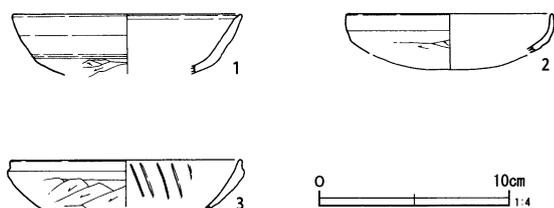
貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。



第78図 第19号住居跡



第79図 第19号住居跡出土遺物



第80図 第19・23号住居跡出土遺物

出土遺物は少なく土師器杯・皿と須恵器杯がある。第79図1は土師器北武蔵型杯である。口縁部は小さく内湾する。2・3は北武蔵型の暗文杯・皿である。内面に放射暗文が施される。4は須恵器杯。南比企産の大型杯で、分厚な底部は手持ちヘラケズリ調整されていた。そのほか、第19・23号住居跡の帰属不確定遺物がある(第80図)。北武蔵型杯・有段口縁杯・北武蔵型暗文杯があり、少なくとも本住居跡と重複する第23号住居跡に帰属する可能性は低い。時期的には7世紀末葉から8世紀初頭頃の土器様相(Ⅶ期頃)と考えておきたい。

第20号住居跡(第81図)

第20号住居跡はZK-22グリッドに位置する。重複する第26・35・48号住居跡を切っていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.85m、

短軸長3.00m、深さ0.08~0.13mである。主軸方位はN-120°-Eを指す。

床面は平坦で、炭化物層が薄く堆積していた。埋土は炭化物粒子混じりの褐色土をベースに構成されていた。特に人為的な埋没状況は観察されなかった。

カマドは南東壁に設けられていた。燃烧部は大きく壁を切り込んで構築され煙道部は一段段差をもって移行する。規模は全長0.90m、幅0.70m、深さ0.20mである。燃烧部側壁と底面中央部は被熱していた。火床面の燃烧部底面は皿状に窪み、灰層が薄く堆積していた。カマド埋土は黄灰色粘土ブロックが多量に堆積しており、袖部及び天井部の崩落土と考えられる。煙道は長さ0.24mで、左側壁は被熱していた。

貯蔵穴は、カマドに向かって右脇のコーナーから1基検出された。ほぼ円形で、規模は長径50cm、短径40cm、深さ34cmである。上層と下層の間に炭化物層が挟在していた。

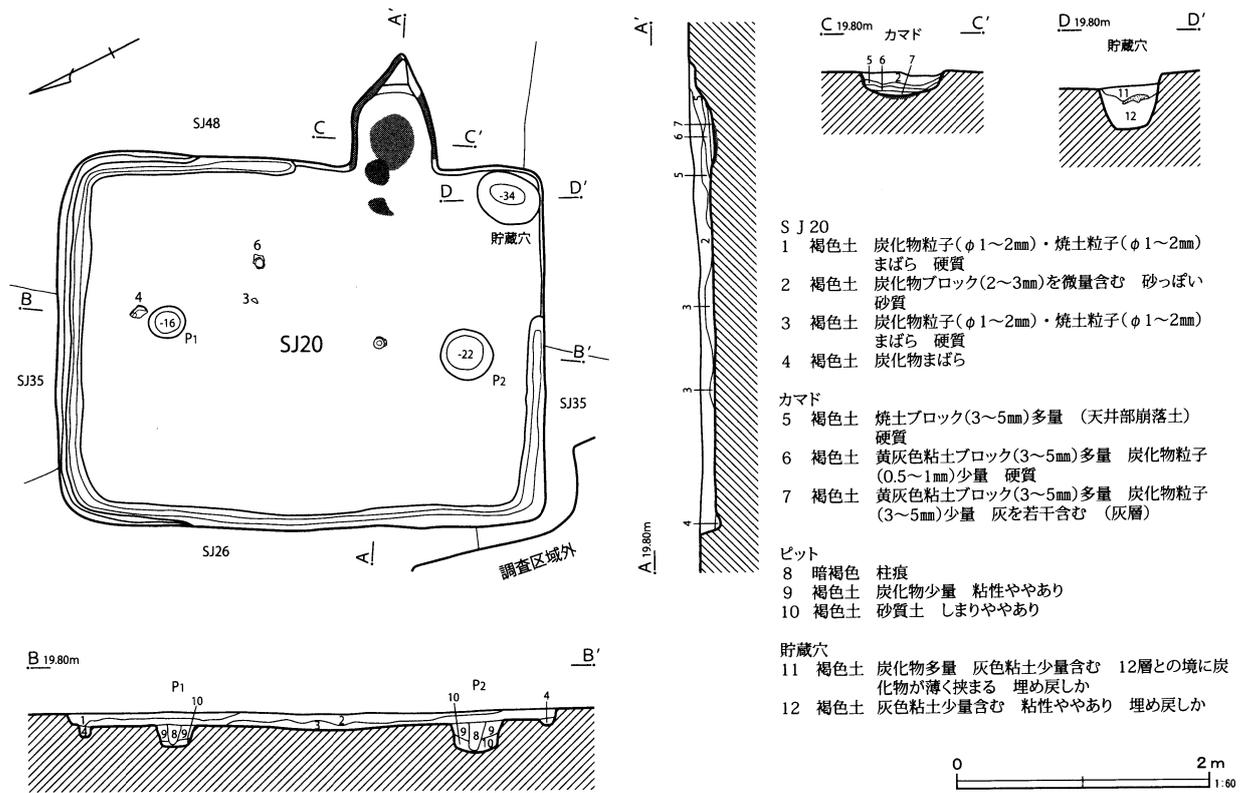
ピットは2本検出された。P1・2ともに柱痕と思われる土層が観察されたが、柱穴そのものの深度が浅い。

第15表 第19号住居跡出土遺物観察表(第79図)

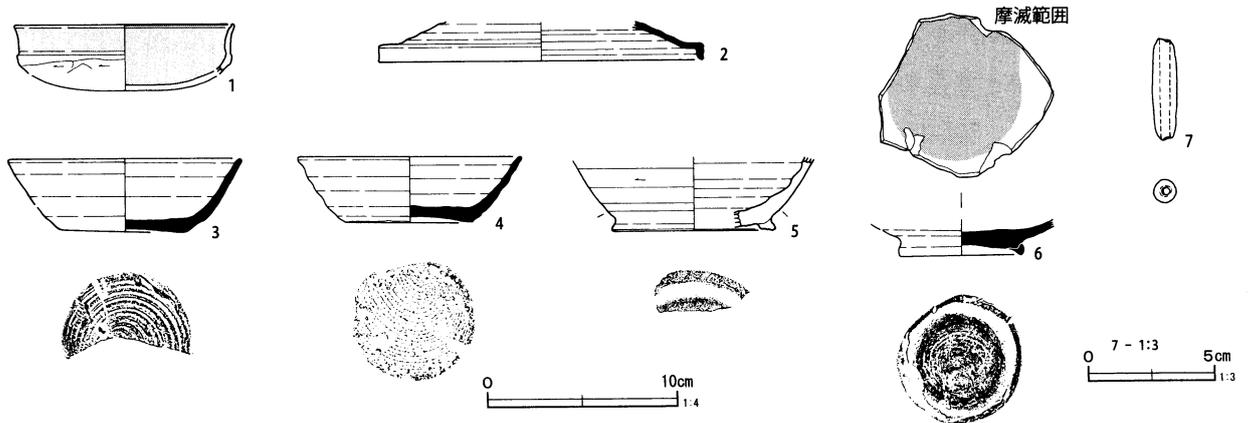
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	杯	(113)	32	-	A C H I	15	普通	橙	北武蔵型杯 No12		
2	土師器	杯	(128)	25	-	C E H	15	普通	橙	北武蔵型暗文杯 内面放射暗文 No2		
3	土師器	皿	(218)	23	-	C H I	10	普通	にぶい橙	北武蔵型暗文杯(皿) 内面放射暗文 No1		
4	須恵器	杯	-	17	(114)	G I J	40	普通	灰白	南比企産 底部手持ちヘラケズリ No4		

第16表 第19・23号住居跡出土遺物観察表(第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	杯	(120)	32	-	C E H I K	5	普通	橙	小片 口径不安定 有段口縁杯系か		
2	土師器	杯	(108)	21	-	C E I	15	普通	橙	北武蔵型杯		
3	土師器	杯	(120)	25	-	C I K	10	普通	橙	北武蔵型暗文杯 内面放射暗文(不明瞭)		



第81図 第20号住居跡



第82図 第20号住居跡出土遺物

壁溝は幅12~26cm、深さ4cmほどで、南東壁中央から北東壁、北西壁、南西壁中央までのほぼカマド周辺を除き巡っていた。

出土遺物は少ない。土師器杯、須恵器杯・蓋・高台付皿、灰釉陶器、長頸瓶、土錘がある(第82図)。1は重複する第48号住居跡と接合し、混入資料である。3・4の須恵器杯は南比企産で、底部は回転糸切り後無調整。底径は口径の1/2を超える。鳩山編年V期~VI期に相当すると思われる。

5は灰釉陶器長頸瓶。胴部は回転ヘラケズリ調整が施される。東海産。6は須恵器高台付皿。底部回転糸切り痕を残す。東金子産か。周辺を故意に打ち欠いている。底部内面は良く磨滅し、平滑。転用硯と考えられる。灰釉陶器長頸瓶は、底径が小さくK-90号窯式古段階に比定される。時期的には9世紀前半~中頃、本書IX期に位置付けておきたい。

第17表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(11.3)	2.6	-	H I K	20	普通	橙	統比企型坏 赤彩 口唇部内面沈線	SJ-48と接合	
2	須恵器	蓋	(16.8)	2.0	-	J K	15	普通	灰	南比企産		
3	須恵器	坏	(12.1)	3.9	6.6	E J	40	普通	灰黄褐	南比企産 底部回転糸切り	No 2	50-1
4	須恵器	坏	11.5	3.5	6.5	E H I J K L	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No 1	50-2
5	灰釉陶器	長頸瓶	-	3.9	(8.6)	I K	20	良好	灰白	胴部回転ヘラケズリ	東海産	
6	須恵器	高台付皿	-	1.9	6.3	E I J	85	良好	灰	東金子産か 底部回転糸切り	内面磨減 転用碗と思われる	50-3
7	土製品	土錘	-	-	-	H I	100	普通	橙	長さ4.0cm 最大径0.9×0.9cm 孔径0.3cm 重量3.58g	No 3	50-4

第21号住居跡 (第83図)

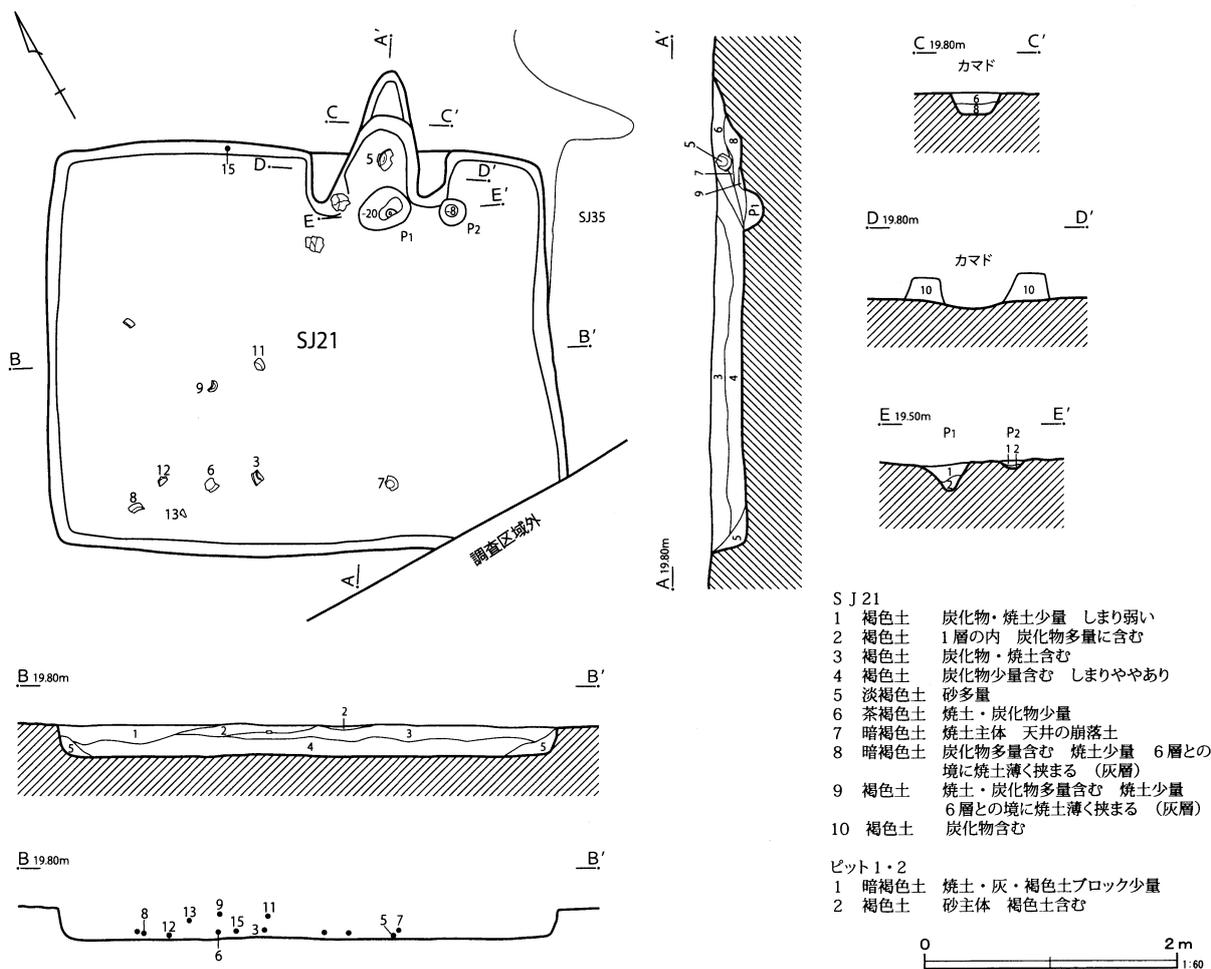
第21号住居跡はZK-21グリッドに位置する。住居跡南隅が調査区外に延びている。第35号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

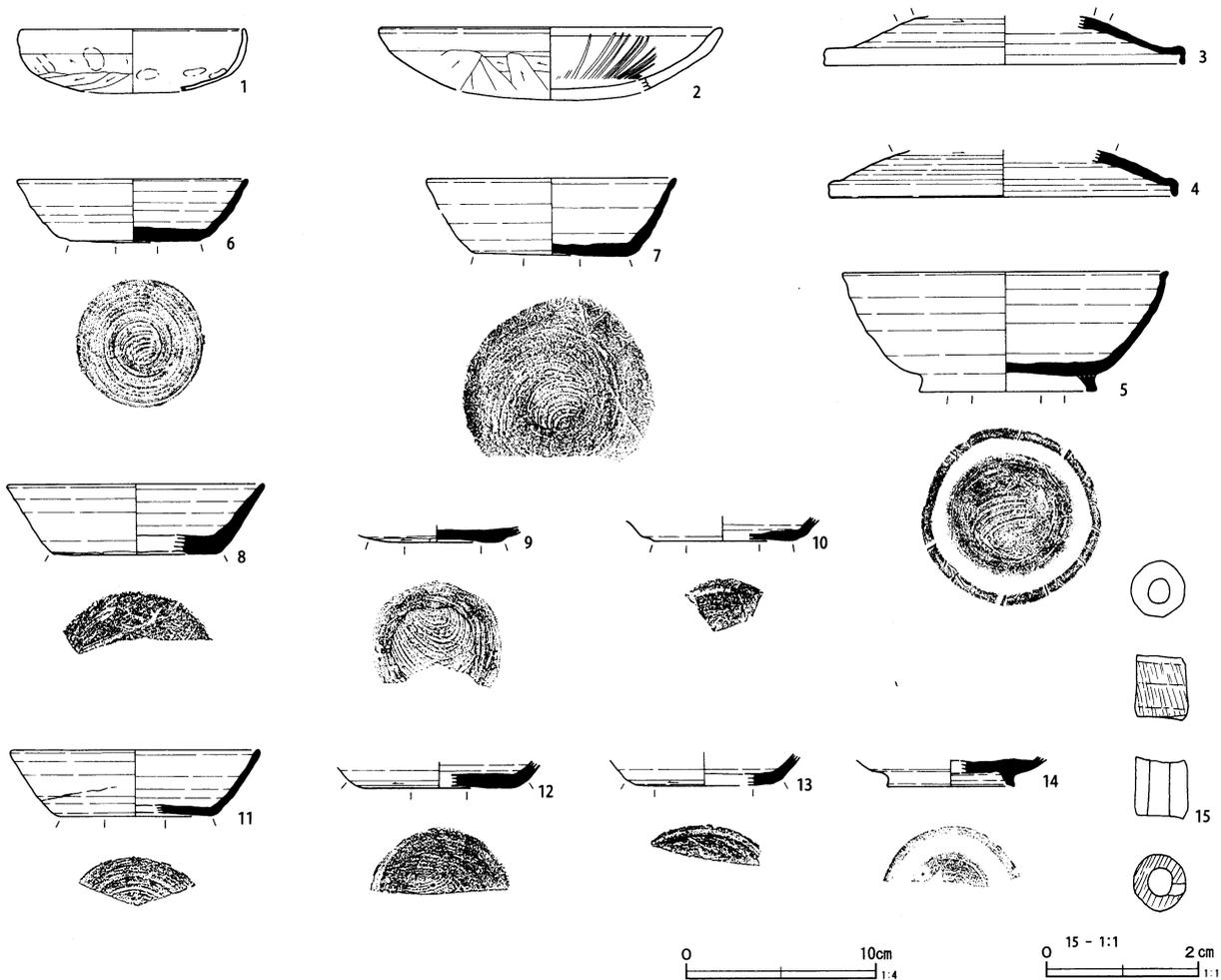
平面形はやや横長の方形で、規模は長軸長4.00m、短軸長3.27m、深さ0.21~0.35mである。主軸方位はN-29° - Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は褐色土ベースで自然堆積を思わせるものであった。

カマドは北東壁中央から東に寄った位置に設けられていた。規模は全長1.13m、袖部の外幅1.15mである。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。長さは0.72m、底面幅は0.45m、煙道部は燃焼部から斜め上方に立ち上がる。袖部は褐色土で構築され、第5~7層が天井の崩落土に相当しよう。第8・9層が灰層と考えられる。

ピットは2本検出されたが、第1層の覆土が灰主体であることから、カマド手前の灰溜め状の小





第84図 第21号住居跡出土遺物

第18表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(11.6)	3.3	-	CHI	25	普通	橙	北武蔵型坏 風化している		
2	土師器	皿	(17.7)	3.3	-	ACEHI	10	普通	橙	北武蔵型暗文坏 (皿) 内面放射暗文 混入か	No.6	
3	須恵器	蓋	(18.8)	2.5	-	EIJL	20	普通	灰	南比企産	No.12	
4	須恵器	蓋	(18.0)	2.5	-	EIJKL	25	普通	灰	南比企産		
5	須恵器	高台付椀	16.9	6.3	9.2	GIJL	70	良好	黒灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ	見込み部	50-5
6	須恵器	坏	12.0	3.3	6.9	DIJKL	75	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ	No.11	50-6
7	須恵器	坏	(13.0)	4.1	8.0	CEHIJKL	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ	見込み部	50-7
8	須恵器	坏	(13.4)	3.7	(8.5)	IK	25	普通	灰	産地不明 (末野or藤岡産か) 底部手持ちヘラケズリ	No.9	50-8
9	須恵器	坏	-	0.9	7.0	EGJ	70	普通	にぶい黄褐色	南比企産 底部回転糸切り後周辺部手持ちヘラケズリ	No.7	
10	須恵器	坏	-	1.3	(7.3)	EHJ	15	普通	褐	南比企産 底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ		
11	須恵器	坏	(12.8)	3.5	(8.0)	HIJ	25	普通	明灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺部ヘラケズリ	No.6	
12	須恵器	坏	-	1.4	(7.6)	EHIJK	30	普通	灰	南比企産 底部周辺・体部下端回転ヘラケズリ	No.8	
13	須恵器	坏	-	1.7	(7.2)	EIJ	25	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	No.10	
14	須恵器	高台付椀	-	1.9	(6.6)	EHIJ	50	良好	灰	南比企産 底部調整不明 外面降灰		
15	石製品	白玉	-	-	-	-	-	-	灰白	径0.8cm 高さ0.8cm 孔径0.25~0.3cm 重さ0.6g 滑石製	No.4	50-9・10

穴とも考えられる。

貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、床面から僅かに浮いた状況で出土している。須恵器高台付椀がカマド内から出土した。

土師器坏・皿、須恵器坏・高台椀・蓋と白玉が出土している（第84図）。

第84図1は土師器坏。北武蔵型坏である。2は北武蔵型暗文皿、混入品と考えられる。3・4は須恵器椀蓋。5は高台付椀である。カマド内から出土した。底部は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されている。6～13は須恵器坏。坏は回転糸切り後、周辺部に再調整が施されている。8を除いて南比企産。8は底部が分厚く、口縁部が先細りする。底部調整は手持ちヘラケズリで、胎土に白色針状物質が含まれない。末野または藤岡産の可能性もあるうか。9は手持ちヘラケズリ調整。15は滑石製の白玉。直径0.8cm、高さ0.8cm。混入品か。須恵器坏は新旧の様相はあるが、鳩山編年HBIV期の時期幅の中に収まるものと考えられる。本書Ⅷ期（新）に位置付けられる。

第22号住居跡（第85図）

第22号住居跡はZJ・ZK-21・22グリッドに位置する。住居跡北西部の大半が調査区外に延びている。第25・38号住居跡、第4号掘立柱建物跡と重複し、第25・38号住居跡を切り、第4号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は方形系と推定されるが、確認が非常に難しい土質であったために、壁ラインがもっと直線的であった可能性が高い。南東壁の中央部に長さ1.50m、幅0.80mの方形張り出し部が敷設されていた。残存規模は長軸長6.22m、短軸長4.08m、深さ0.17mである。主軸方位はN-54°-Wを指す。

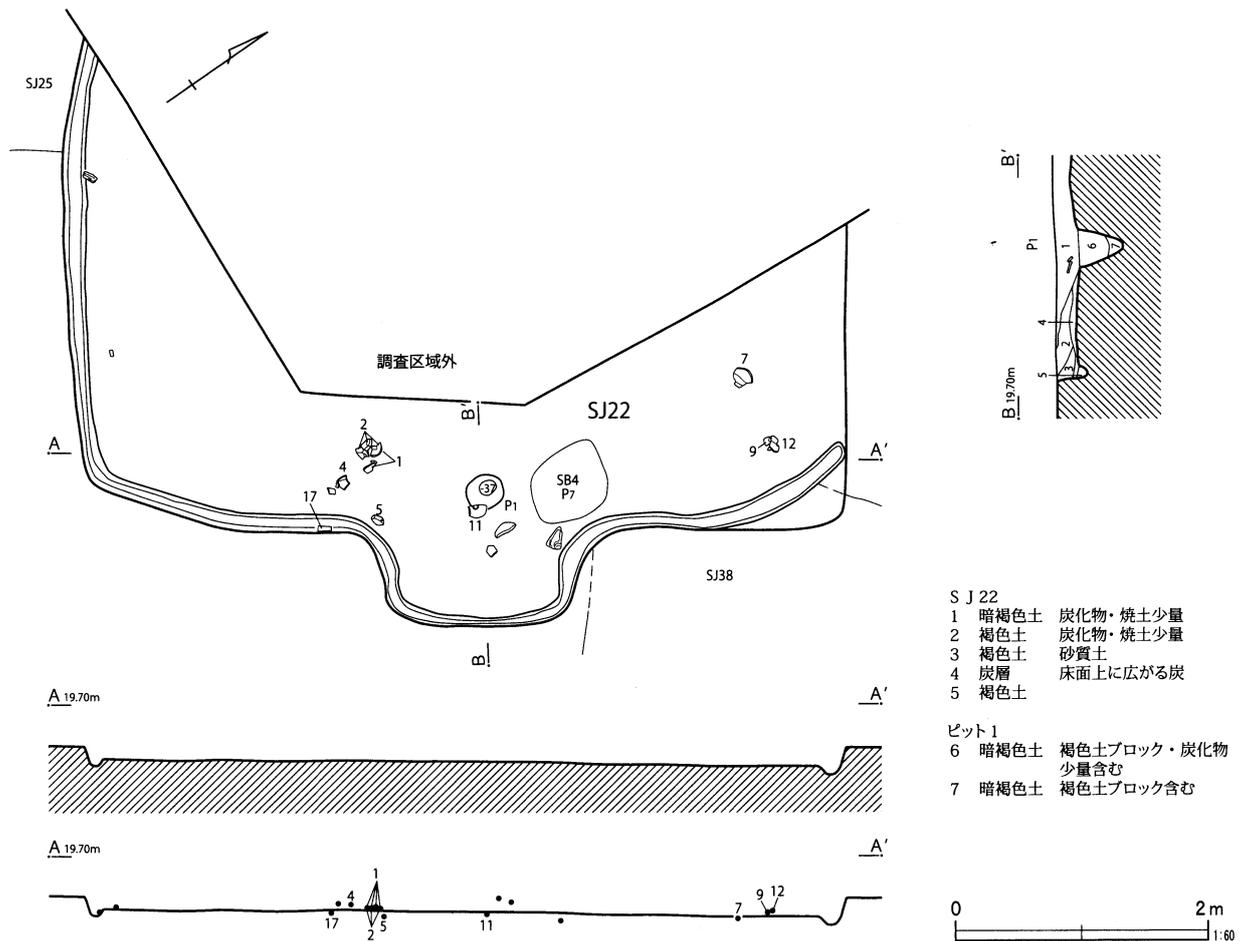
床面は平坦で薄い炭化物層が堆積していた。埋土は暗褐色土を基調としていた。ピットは1本検出された。張り出し部の内側に位置することから、いわゆる出入口ピットとして機能していた可能性がある。但し、明確に斜行して掘り込まれた痕跡は認められなかった。張り出し部は貯蔵穴となる場合が多いが、壁溝が張り出しに沿って巡り、掘り込みは検出されなかった。

壁溝は幅10～20cm、深さ8cmほどで、東壁から北西壁にかけて巡っていた。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、大半が床面直上あるいは僅かに浮いた状況で出土した。土師器坏、須恵器高台付坏・蓋・高坏・壺・甕が出土している（第86図）が、時期幅のある土器群が含まれるようだ。

第86図1～4は土師器北武蔵型坏である。口縁部が小さく内湾する丸底坏である。5は続比企型坏。口唇部内面に沈線が巡り、内面と口縁部外面を赤彩。6・7は北武蔵型暗文坏である。内面放射暗文を施し、丸底形態を呈する。7の底部外面には「×」の線刻がある。8は内面に放射暗文を施す。平底風（弱い丸底）の底部から腰を持って外傾気味に立ち上がる器形である。丸底形態の北武蔵型暗文坏消滅後に現れる新出タイプと考えられる。9の土師器坏は内面ミガキ、外面は底部から体部中位以下がヘラケズリ、一部ミガキが加わる。底部外面に「×」状の線刻がある。系譜は不明確であるが、角閃石が多量に含まれ、北武蔵の土で製作された可能性が高い。底部がやや平底風（弱い丸底）となり、腰を持って立ち上がるやや厚手の器形は丸底形態の北武蔵型坏の後出形態といえ、8との類似性が窺える。

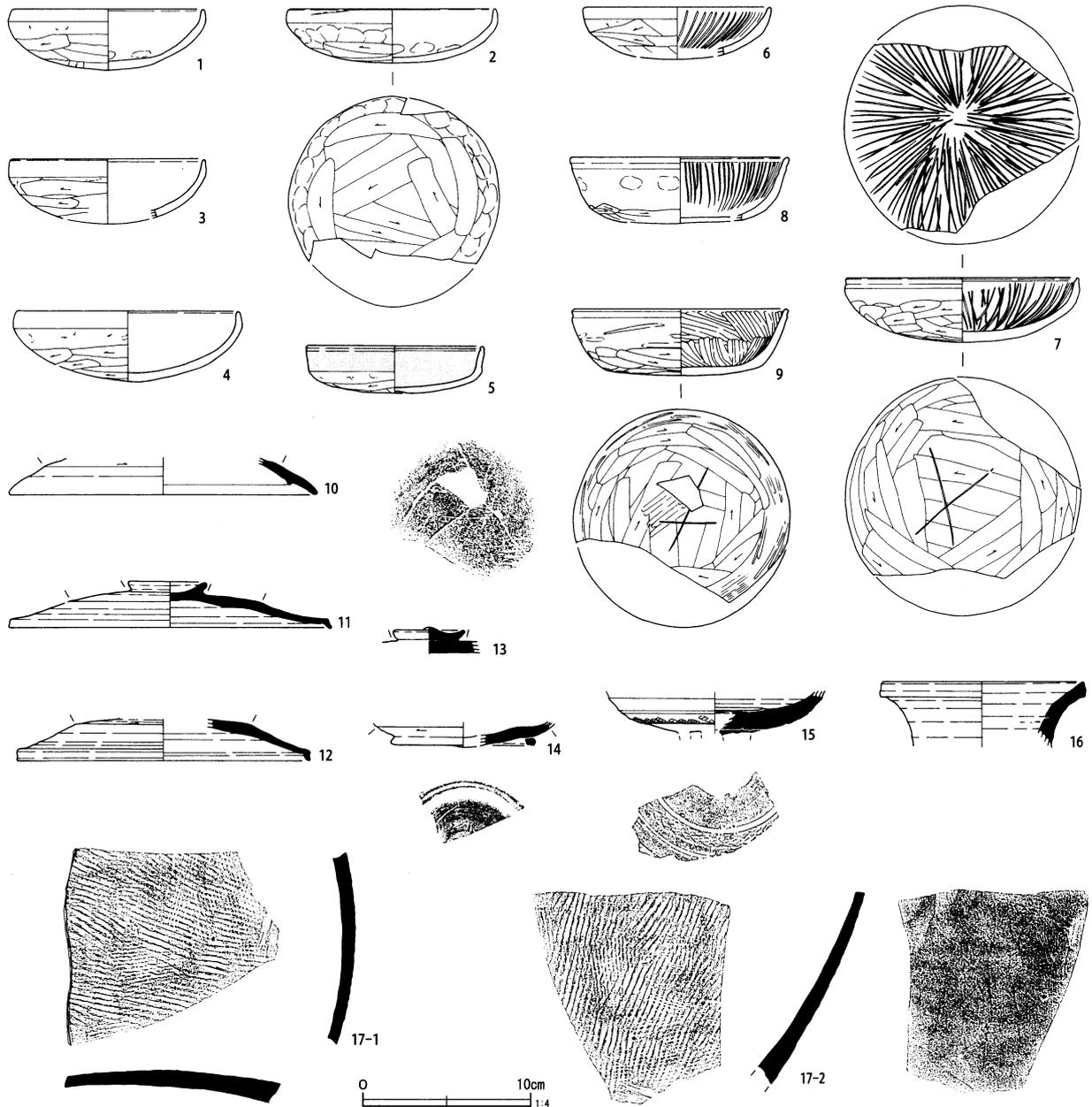
10～13は須恵器蓋。10は末野産の大型蓋。内面にかえりが付く。11はやや胎土が粗いが白色針状物質が少量含まれ、環状つまみであることから南比企産と考えておく。12は南比企産の無かえり蓋。13は末野産の蓋、擬宝珠つまみである。14は湖西産の高台付坏。底部はいわゆる出尻底で、回転ヘラケズリ調整される。胎土は精選されている。15は須恵器高坏。坏部下端の2条の平行線で区画された中に櫛描列点文を施文する。脚部には透孔が付くが、単位は不明。白色針状物質が含まれ南比企産である。住居には直接伴わない資料であろう。17-2は湖西産の甕胴部片である。外面平行叩き、内面細かい同心円文当具の後、縦方向のヘラケズ



第85図 第22号住居跡

第19表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	114	36	-	ACHIK	60	普通	橙	北武蔵型坏 No.9・10		50-11
2	土師器	坏	122	32	-	ACHI	80	普通	橙	北武蔵型坏 No.10		51-1
3	土師器	坏	(114)	35	-	CHI	20	普通	橙	北武蔵型坏		
4	土師器	坏	(130)	42	-	CI	50	普通	橙	北武蔵型坏 No.11		51-2
5	土師器	坏	(103)	28	-	EGHIL	40	普通	橙	続比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針不明 No.8		51-3
6	土師器	坏	(110)	29	-	CEHI	20	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
7	土師器	坏	137	38	-	CEHI	60	良好	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 外面「×」線刻 No.3		
8	土師器	坏	(127)	38	-	CHI	25	普通	橙	内面放射暗文 体部下位~底部ケズリ 平底タイプ 北武蔵型暗文坏と思われる		51-4
9	土師器	坏	126	39	93	CHI	70	普通	橙	北武蔵の土か 底部外面「×」の線刻 内面・体部外面ミガキ 底部+体部下半ケズリ 平底風 No.2		51-5
10	須恵器	蓋	(180)	15	-	EHI	5	普通	灰	末野産 内面にかえり 口径不安定		
11	須恵器	蓋	(190)	28	-	ACEIK	50	普通	灰	南比企産 白針少量含む つまみ径4.6cm 内面:黄灰色 No.7		51-6
12	須恵器	蓋	(173)	25	-	BDJ	10	普通	灰	南比企産 No.1		
13	須恵器	蓋	-	15	-	BEIK	55	普通	灰	末野産 つまみ		
14	須恵器	高台付坏	-	14	(84)	EI	20	良好	灰白	湖西産 胎土精選 出尻底 底部回転ヘラケズリ		
15	須恵器	高坏	-	26	-	EIJK	25	普通	灰	南比企産 坏部沈線区画中に列点文 脚部透孔あり 単位不明瞭		51-7
16	須恵器	壺	(118)	39	-	EIJ	10	良好	青灰	南比企産		
17-1	須恵器	甕	-	-	-	HIK	5	良好	灰	湖西産 図左側面二次的に擦った痕跡あり 17-2と同一 No.13		
17-2	須恵器	甕	-	-	-	HIK	5	良好	灰	湖西産 外面:平行叩き下端ヘラケズリ 内面:細かい同心円文当て具後縦方向のヘラケズリ 17-1と同一 No.13		



第86図 第22号住居跡出土遺物

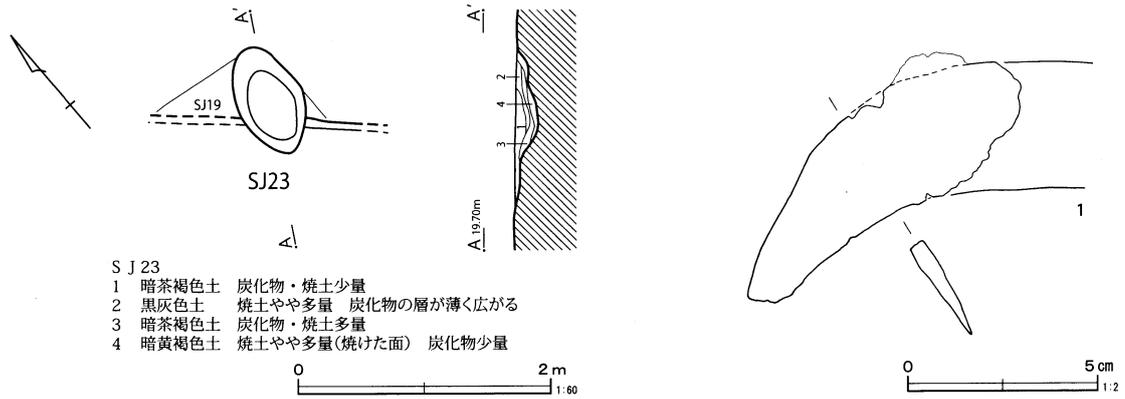
り。器壁は薄い。17-1は17-2と同一個体である。左側縁（破面）を二次的に磨った痕跡があり、砥石等に転用されたと推定される。

出土土器はかなりの時期幅を持つようだ。主体となる丸底の北武蔵型杯・北武蔵型暗文杯は7世紀末葉～8世紀初頭頃の年代とみてよい。湖西産須恵器や末野産の須恵器蓋の時期は大きな齟齬がない。続比企型杯は7世紀中葉から後半に措いた方が収まりは良い。須恵器高坏も7世紀末葉ま

では降らない。平底風の北武蔵型暗文杯（8）と土師器杯（9）は8世紀中葉頃に降る資料であろう。重複遺構の遺物が混入した可能性もある。主体となる遺物群から本書Ⅵ期（新）～Ⅶ期（古）、7世紀末葉～8世紀初頭頃の住居跡と考えておく。

第23号住居跡（第87図）

第23号住居跡はZJ-22グリッドに位置する。重複する第19号住居跡上面に構築され、カマドとそ



第87図 第23号住居跡・出土遺物

の周囲が辛うじて検出されたにとどまる。遺存状態は悪い。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部底面が残存していた。楕円形で、全長0.91m、幅0.42～0.52m、深さ0.10～0.18mである。カマド方位はN-19°-Eを指す。底面は皿状に掘り込まれ、被熱した焼土層が形成されていた。埋土には焼土ブロックや炭化物が多量に含まれ、天井部崩落土が堆積したものと考えられる。

袖部は検出されなかった。燃焼部が壁面を大きく切り込んでいるため、袖部自体の発達が悪かった可能性も高い。

床面はカマド前面の一部が検出されたのみである。床面には炭化物層が薄く堆積していた。

出土遺物は第19号住居跡カマドに重複する位置から鉄鎌が1点検出されたのみである。

第87図1は鉄鎌である。残存長9.0cm、幅3.0cm。重量30.72g。基部を欠損する。刃部先端は大きく屈曲する。いわゆる曲刃鎌である。

住居跡の時期は不明である。曲刃鎌が一般化する9世紀以降と推定しておく。

第24号住居跡（第88図）

第24号住居跡はZJ・ZK-20・21グリッドに位置する。住居跡北壁部は調査区外に延びている。重複する第30号住居跡を切っていた。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.36m、短軸長2.36m、深さ0.12mである。主軸方

位はN-113°-Eを指す。

床面は平坦である。埋土は褐色土をベースに、焼土と炭化物粒子が混入していた。

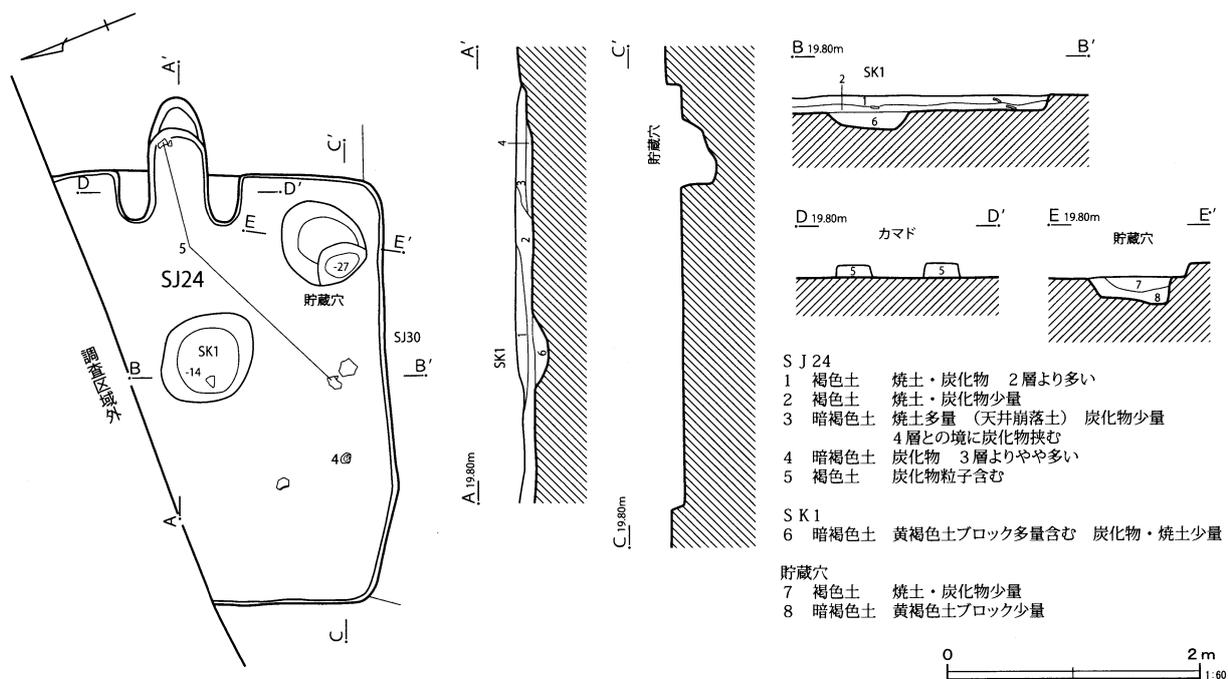
カマドは東壁に設けられていた。燃焼部からわずかな段差を持ち煙道部が続いている。全長1.00m、カマド袖幅1.00m、深さ0.10m。燃焼部は長さ0.70m、底面幅0.40mで壁を切り込んで構築されていた。煙道部は0.30m遺存していた。燃焼部底面は平坦で床面と高低差なく連続する。底面には炭化物混じりの暗褐色土が堆積し、その上面に炭化物の薄い堆積層が認められた。第3層が天井部崩落土で焼土が多量に含まれていた。袖部は褐色土で構築されていた。燃焼部側壁の被熱層は観察されなかった。

貯蔵穴は住居跡の東南隅から1基検出された。ほぼ円形で、規模は長径70cm、短径60cm、深さ27cmである。

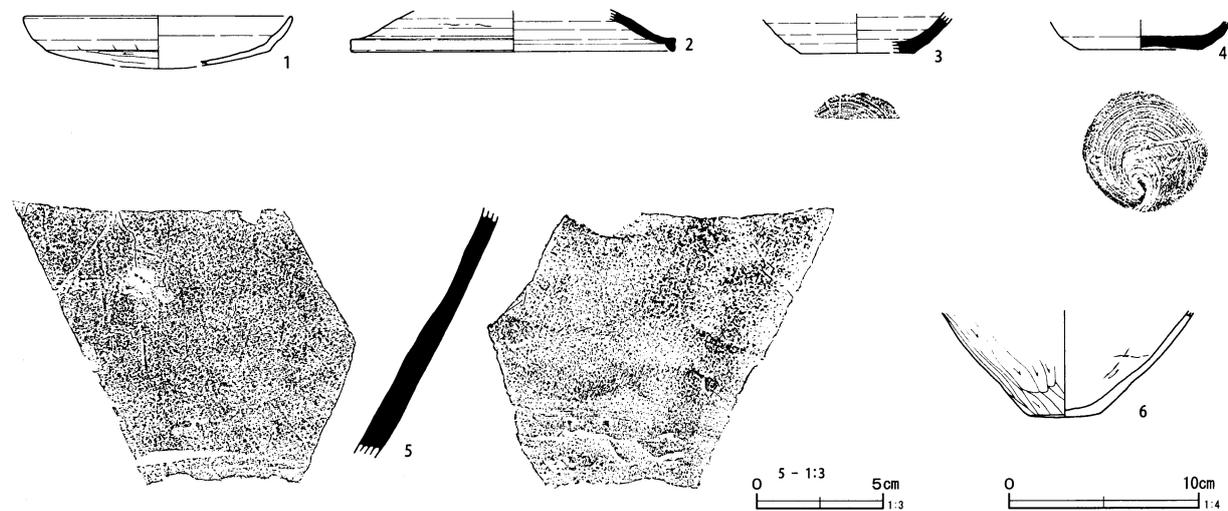
土壇は1基検出された。楕円形で、規模は長径、短径ともに70cm、深さ14cmである。埋土は黄褐色土ブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された土である。上面は床面が乗っており、いわゆる床下土壇と考えられる。

ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器皿・甕、須恵器杯・甕がある（第89図）。1は土師器皿。貯蔵穴から出土したが混入の可能性が高い。2は須恵器蓋。3・4は須恵器杯。いずれも底部回転糸切り後無



第88図 第24号住居跡



第89図 第24号住居跡出土遺物

第20表 第24号住居跡出土遺物観察表（第89図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	皿	(140)	2.6	-	A C H I K	15	普通	橙	在地産か 混入	貯蔵穴	
2	須恵器	蓋	(167)	2.2	-	E J K	5	普通	灰黄	南比企産	貯蔵穴	
3	須恵器	坏	-	2.1	(60)	I J K	20	不良	にぶい褐	南比企産	焼き悪い	
4	須恵器	坏	-	1.6	6.4	I J	70	普通	灰	南比企産	底部ヘラ記号 白針多量に含む No.2	
5	須恵器	甕	-	-	-	E I J K	5	普通	灰	南比企産	外面平行叩き 内面無文当て具後ナデ No.3・7	
6	土師器	甕	-	6.6	3.8	C E H I K	40	普通	橙	武蔵型甕	外面煤付着 貯蔵穴	

調整、南比企産である。5は須恵器甕。カマド内と住居内遺物が接合した。6は土師器武蔵型甕である。胴部の開きが大きい。時期は不明確ではあ

るが、底部糸切り後無調整の坏と武蔵型甕などから鳩山編年HBⅦ期～Ⅷ期、本書X期（9世紀中～後半）と推定される。

第25号住居跡 (第90図)

第25号住居跡はZJ・ZK-21グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区外に延びている。重複する第22号住居跡に切られていた。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長4.50m、短軸長2.10m、深さ0.20~0.24mである。主軸方位はN-60°-Wを指す。

第3層、4層が貼床面である。第3層上面が最終床面で、薄い炭化物層が形成されていた。第3層中に炭化物層が2枚認められ、第4層上面にも炭化物層が存在することから、床面は最低4枚形成されたと推定される。埋土は炭化物粒子・焼土粒子混じりの暗褐色土で構成され、大きな土層変化は観察されなかった。

ピットは南東コーナーから1本検出された。直径50cm、深さ40cmで、中心部が1段深くなるが、柱痕は観察されなかった。

壁溝は幅12~16cm、深さ5cmほどである。

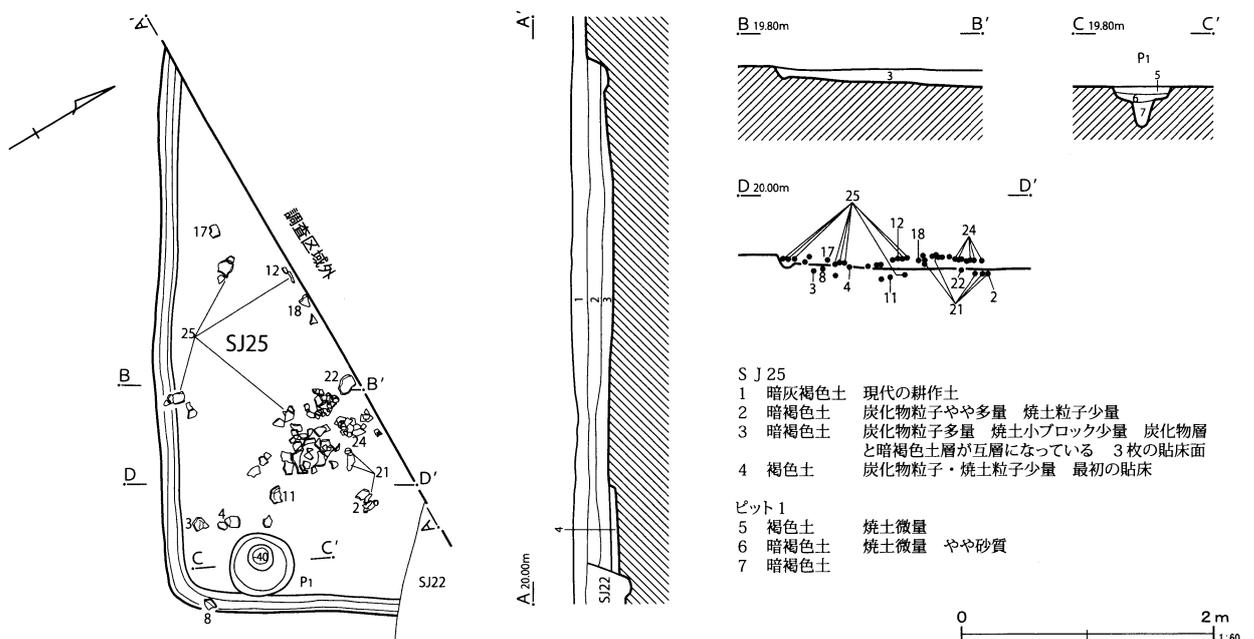
カマド、貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

遺物は比較的まとまっている。大半は住居の覆土下層から床面からの出土である。一部は貼床面

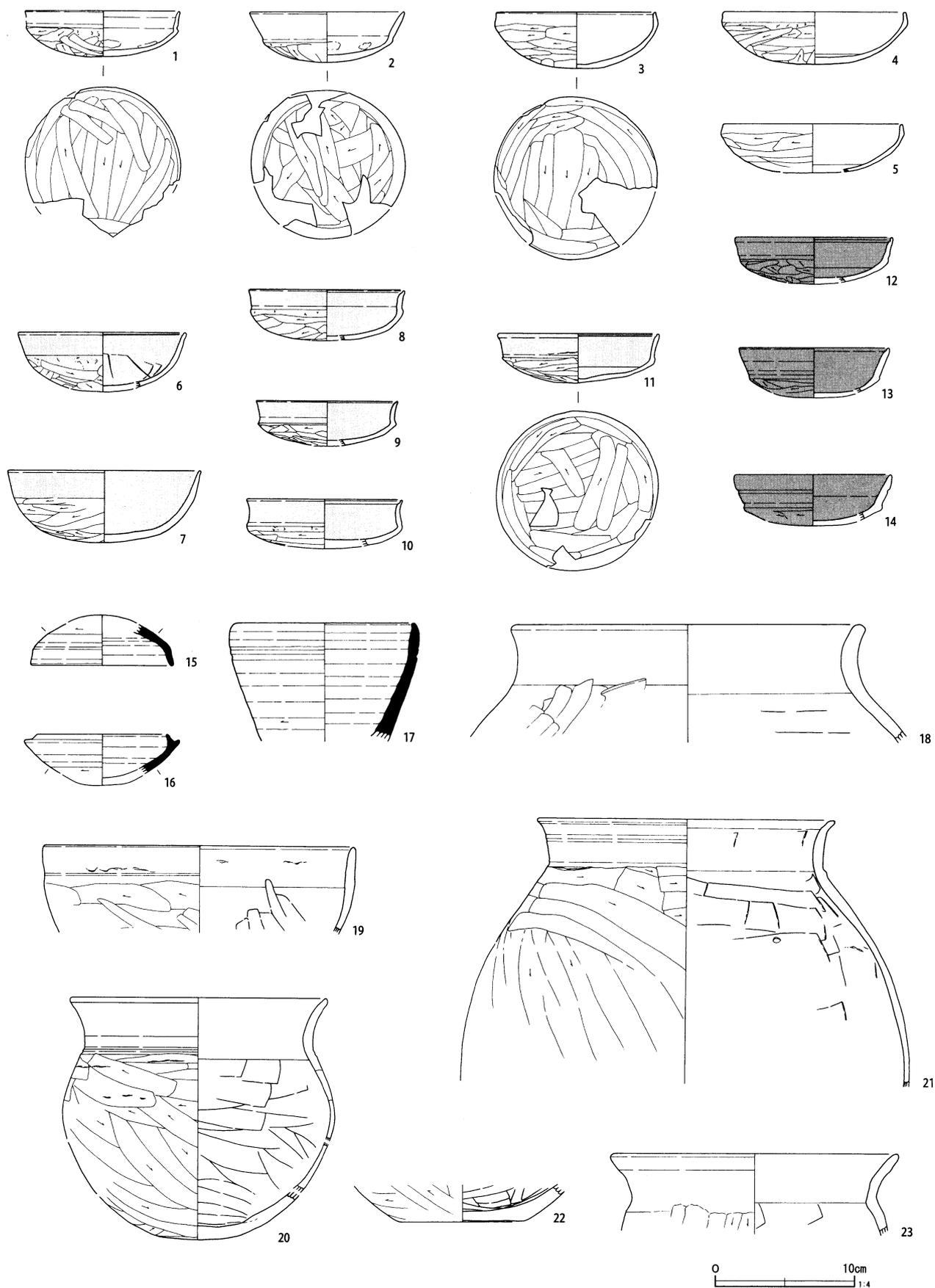
からも出土している。出土遺物は土師器杯・甕・壺・鉢、須恵器杯・蓋・捏鉢などがある(第91・92図)。

第91図1・2は土師器杯蓋模倣杯である。同種の杯の中でも口径が縮小し、新しい様相を呈する。北武蔵の土と考えられる。2は貼床内から出土した。3~5は北武蔵型杯である。口縁部が短く内湾し、底部は丸底形態である。6・7は続比企型杯。丸碗形態で赤彩が施される。8・9・11は比企型杯B類(続比企型模倣杯)、10は口縁部が内傾する本来の比企型杯の系統下にある。いずれも赤彩される。12は形態的には比企型杯B類で白色針状物質も含むが、赤彩はなく、内外面黒色処理されるようだ。13・14は有段口縁杯と思われる。黒色処理される。北武蔵の土(北武蔵からの搬入品)と思われる。

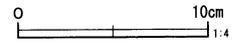
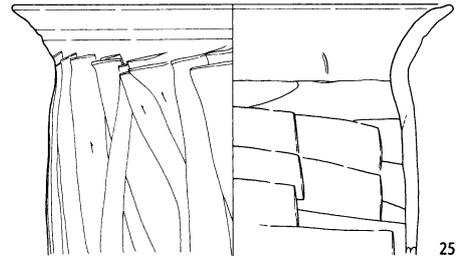
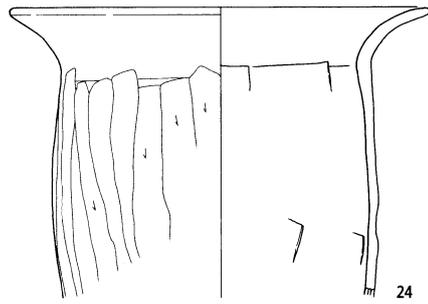
15・16は須恵器杯H蓋(15)と杯H身(16)である。いずれも湖西産と推定される。破片資料ではあるが口径は小さく、杯身の立ち上がりも低い。新しい様相を示す。17は須恵器磨鉢または、大型の壺口縁部と思われる。頸部に平行沈線が2条巡る。在地産と思われるが、胎土に白色針状物質も



第90図 第25号住居跡



第91図 第25号住居跡出土遺物（1）



第92図 第25号住居跡出土遺物（2）

第21表 第25号住居跡出土遺物観察表（第91・92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.3	-	ACEIK	80	普通	橙	模倣坏 北武蔵の土		52-1
2	土師器	坏	10.9	3.6	-	CEHI	70	普通	橙	模倣坏 北武蔵の土 No19		51-9
3	土師器	坏	11.3	4.0	-	CHK	75	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 外面円形黒斑あり No5		52-2
4	土師器	坏	(12.9)	3.7	-	CEHIK	20	良好	橙	北武蔵型坏 No7		
5	土師器	坏	(12.6)	3.4	-	ACHIK	15	普通	橙	北武蔵型坏 上層		
6	土師器	坏	(12.0)	4.0	-	AEHI	50	普通	にぶい黄褐	統比企型坏 内面・口縁外面赤彩		52-3
7	土師器	椀	(13.7)	5.2	-	ACEH	20	普通	橙	統比企型坏 赤彩（内面・口縁部外面）白針なし		
8	土師器	坏	(10.9)	3.6	-	AHIL	40	普通	褐灰	統比企型坏 内面・口縁外面赤彩 白針不明 No8・上層		52-4
9	土師器	坏	(10.1)	3.2	-	EGHIK	20	普通	赤褐	統比企型坏 内面・口縁外面赤彩		
10	土師器	坏	(11.0)	3.3	-	CHJK	25	普通	橙	比企型坏 内面・口縁外面赤彩 白針あり		
11	土師器	坏	11.4	3.5	-	EGHIK	90	普通	浅黄橙	統比企型坏 内面・口縁外面赤彩 No10		52-5
12	土師器	坏	(11.0)	3.2	-	ACEHJ	25	普通	黒褐	統比企型だが黒色処理（内外面）白針あり No24		
13	土師器	坏	(10.7)	3.2	-	ACHI	35	普通	橙	模倣（有段口縁？）坏 黒色処理 北武蔵の土		
14	土師器	坏	(11.0)	3.3	-	AC	15	普通	黒褐	有段口縁坏 内外面黒色処理		
15	須恵器	蓋	(10.0)	2.9	-	IK	10	良好	灰	湖西産 坏H蓋 胎土精良		
16	須恵器	坏身	9.2	2.8	-	IK	10	良好	灰	湖西産 坏H身 受部径11.0cm		
17	須恵器	磨鉢	(12.6)	8.5	-	CIK	20	普通	灰	白針含まない 在地産か 沈線2条 No1		
18	土師器	壺	(24.5)	8.4	-	ACEIJL	20	普通	橙	在地産 白針あり No22		
19	土師器	鉢	(21.8)	6.2	-	AEIJK	15	普通	にぶい橙	在地産 白針多い 上層		
20	土師器	小型甕	(18.2)	17.3	6.4	CDEJ	60	普通	浅黄橙	外面二次被熱 内面煤付着 上層		52-6
21	土師器	壺	(21.0)	19.0	-	EHI	80	普通	橙	北武蔵の土か No18・19		52-7
22	土師器	甕	-	2.6	8.8	CEHIJK	40	普通	橙	外面被熱 白針多い No16		
23	土師器	甕	(20.0)	5.8	-	CEHI	15	普通	にぶい黄橙	鬼高系 白っぽい色調		
24	土師器	甕	21.7	15.3	-	ACEGHI	45	普通	橙	北武蔵の土か No17		52-8
25	土師器	甕	(22.7)	13.2	-	EGHIJ	70	普通	橙	在地産鬼高系 器壁厚い 白針あり No2・3・14・23		53-1

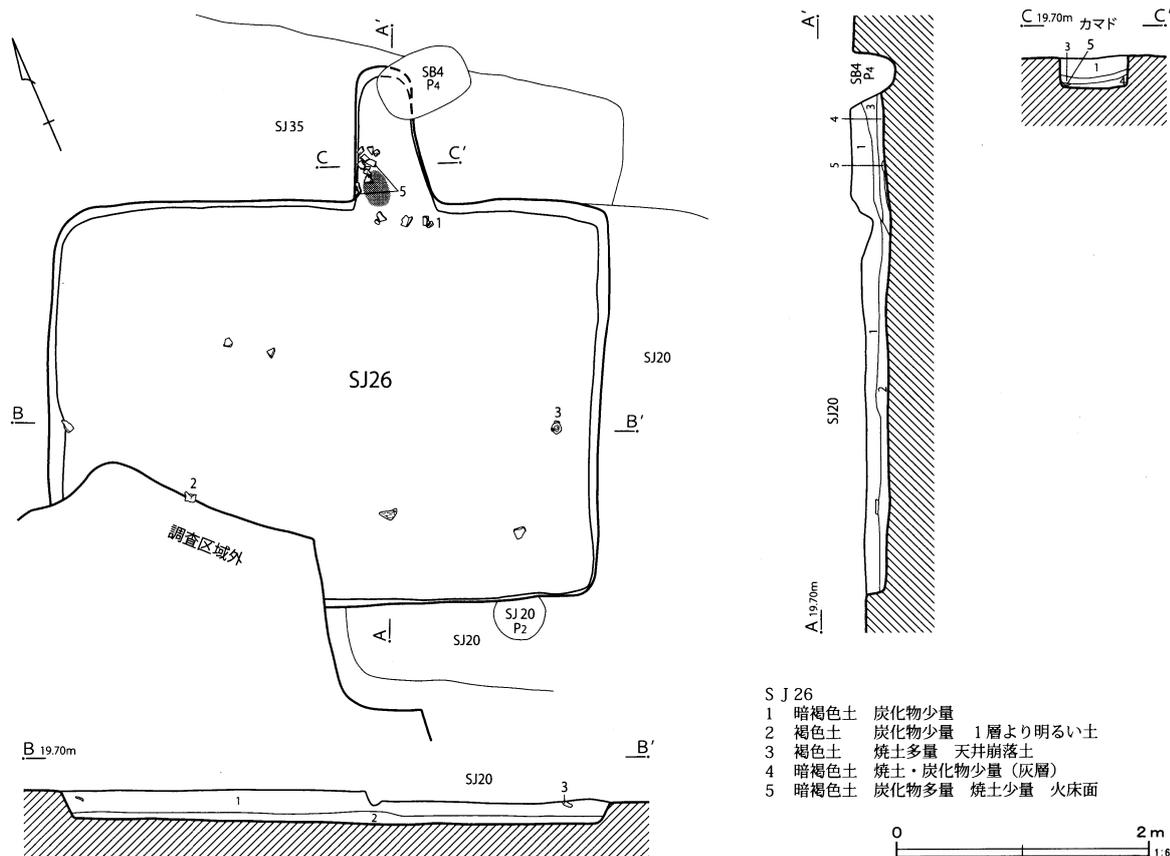
片岩も含まれない。

18・21は土師器壺。19は鉢である。20は小型甕、22～25は甕である。胎土の特徴から白色針状物質を含む在地産と、角閃石を多く含む北武蔵の土かと思われる製品があるようだ。24は北武蔵からの搬入品、25は白色針状物質を多く含み、狭義の在地産と考えられる。土師器坏類の組成や湖西産須恵器の様相から本書Ⅶ期、7世紀中葉～後半の土器群と思われる。

第26号住居跡（第93図）

第26号住居跡はZK-21・22グリッドに位置する。住居跡南西隅が調査区外に延びている。第20・35・48号住居跡、第4号掘立柱建物跡と重複し、第20号住居跡、第4号掘立柱建物跡に切られ、第35・48号住居跡を切っていた。

平面形は横長の長方形で、残存規模は長軸長4.40m、短軸長3.18m、深さ0.26mである。主軸方位はN-24°-Eを指す。



床面は概ね平坦である。埋土は炭化物混じりの褐色土・暗褐色土で構成されていた。人為的に埋められたような痕跡は見出せなかった。

カマドは北壁に設けられ、壁を大きく切り込んで構築されていた。カマドの先端を第4号掘立柱建物跡の柱穴に切られていた。全長1.15m、幅0.47~0.60m、深さ0.25mである。当初、壁内の袖部を想定して調査したが、断面観察の結果存在しないことが判明した。燃烧部全体が壁外に位置する構造である。被熱した火床面も壁外に認められる。底面はほぼフラットで段差なく床面に連続する。燃烧部底面には焼土と炭化物混じりの灰層が薄く堆積していた。

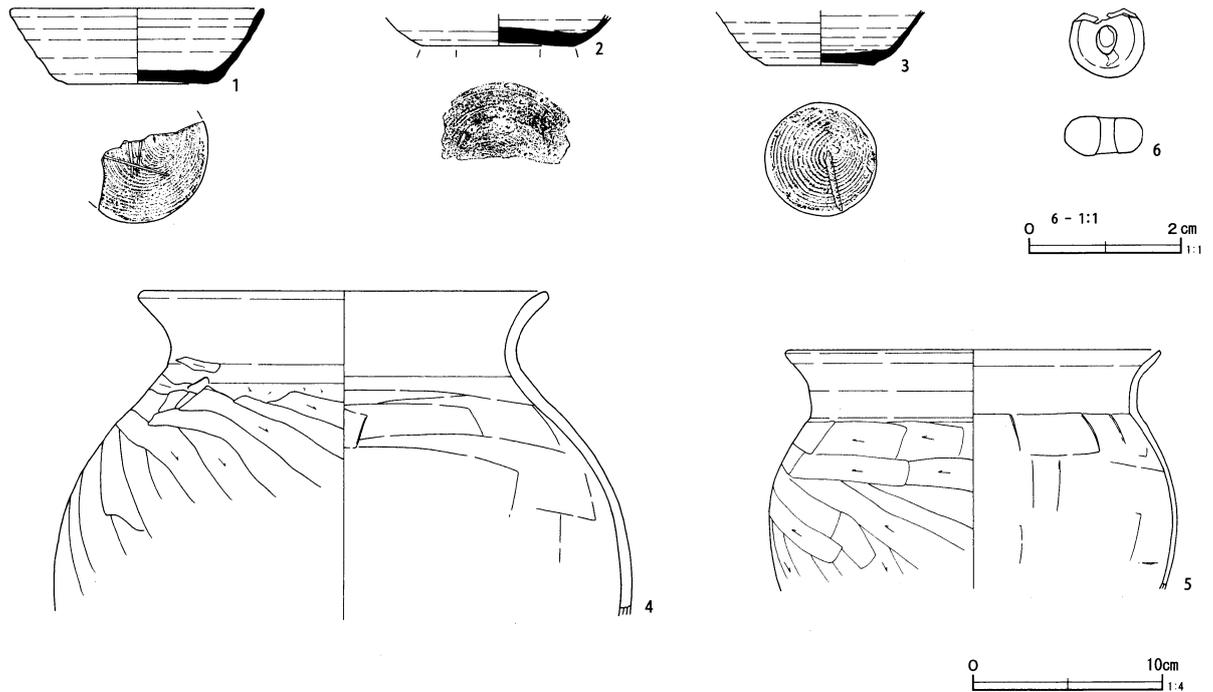
貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器甕・壺、須恵器坏がある(第94図)。

第94図1は須恵器坏、口径は13cmを越えるが、

底部は回転糸切り後無調整である。底部外面には「サ」状の線刻(ヘラ記号)がある。南比企産である。2は須恵器坏。無台碗の可能性もあろうか。底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ調整される。3は底径5.8cmと底部が縮小した坏で、回転糸切り後無調整である。覆土上層から出土し、重複する第20号住居跡に伴う遺物と考えた方が妥当であろう。底部に「一」状の線刻がある。南比企産。4は土師器壺である。武蔵型にしては器壁が厚く、肌理細かい胎土である。混入であろう。5は武蔵型甕。口縁部が弓状に外反し、器壁は薄い。カマドから出土した。

6は覆土から出土したガラス玉である。直径10cmで一部欠損する。表面は黄白色から浅黄色の被膜で覆われた状態である。二次的に被熱を受け、発泡したような印象を受ける。破面をみると内部はエメラルドグリーンに発色している。いずれにせよ、弥生~古墳時代に属する資料が混入したも



第94図 第26号住居跡出土遺物

第22表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	(13.1)	40	(7.4)	GHJ	30	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り「サ」状の線刻(ヘラ記号) カマドNo.5		
2	須恵器	坏	-	17	(8.0)	E I J K	30	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ	No.6	
3	須恵器	坏	-	29	5.8	H I J	50	普通	褐灰	南比企産 底部ヘラ記号「一」	No.1	
4	土師器	壺	(21.0)	17.2	-	ACE I K L	30	普通	浅黄橙	入間の土か? 掘り方		
5	土師器	甕	19.4	12.6	-	CE H I K	70	普通	橙	武蔵型甕 カマドNo.1・2		53-2
6	ガラス	ガラス玉	-	-	-	-	-	-	浅黄	径1.0cm 高さ0.5cm 孔径0.2~0.25cm 重さ0.8g		53-3・4

のと思われる。

遺物の時期は1の須恵器坏は大振りではあるが、底部無調整である点から本書Ⅸ期(鳩山編年HBV期~Ⅵ期)頃と考えておきたい。8世紀中頃から後半に位置付けられる。5の土師器甕もほぼ同時期とみて違和感はない。

第27号住居跡 (第95図)

第27号住居跡はZL-22グリッドに位置する。住居跡東半は調査区外に延びている。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.72m、短軸長2.64m、深さ0.09~0.24mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

砂質が強い土質のために、覆土と床面の区別が難しく、結果的に掘り方まで掘削してしまった。

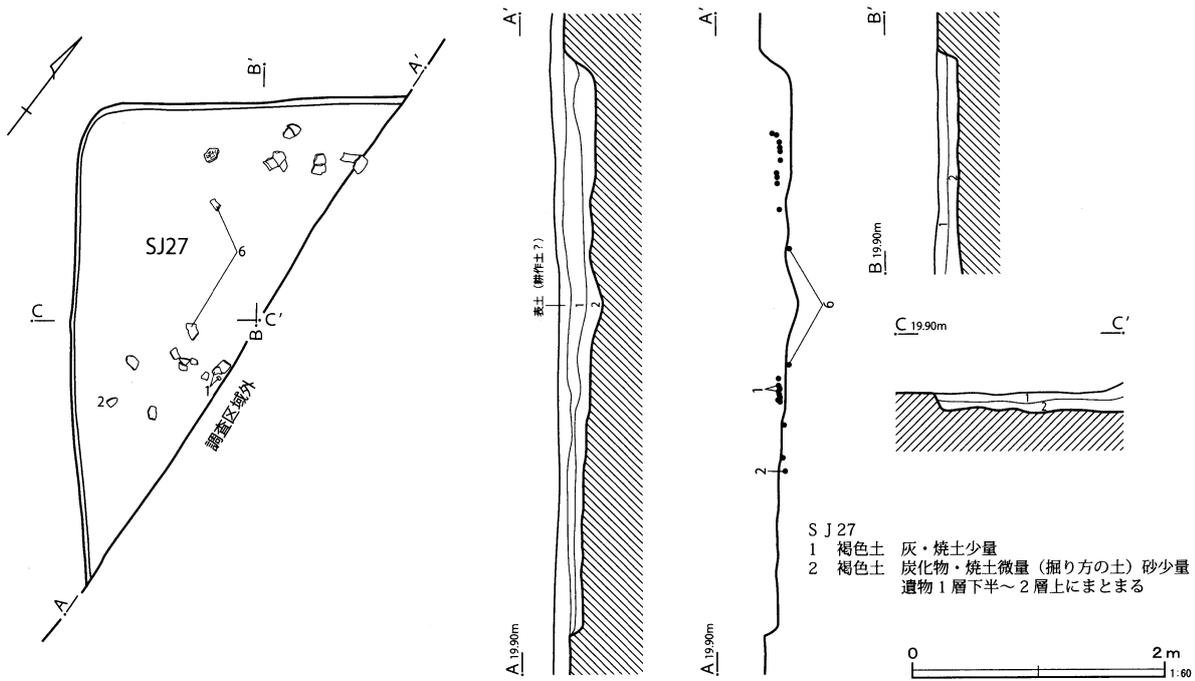
断面観察でも床面の起伏は顕著であった。第1

層下面が床面である。第2層は掘り方埋土である。

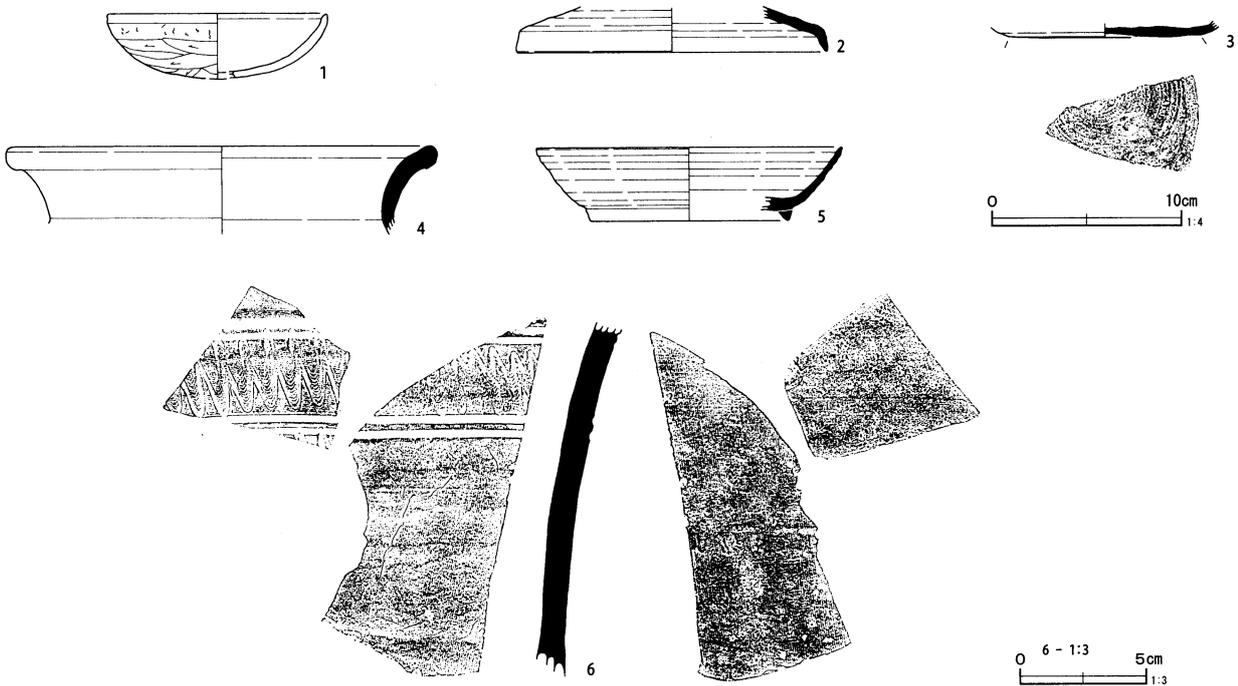
カマド、貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は、第2層下面(床面)付近に多く、一部は掘り方面(第3層)から検出された。土師器坏・高台付坏と須恵器坏・蓋・壺・甕等がある(第96図)。

1は北武蔵型暗文坏であるが、内面器面が風化しており、放射暗文はよく見えない。2は南比企産の須恵器蓋。3は大型の無台坏。底部回転ヘラケズリ調整される。南比企産。5は高台付坏で、ロクロ目が目立つ。一見湖西産に似るが胎土に白色針状物質が含まれ、南比企産である。小片のため口径と傾きは不安定である。6は須恵器大甕頸部片である。2条1単位の平行沈線区画後、織細



第95図 第27号住居跡



第96図 第27号住居跡出土遺物

でシャープな櫛描波状文（12本組？）が、2段施文される。胎土は精選され、焼成堅緻。湖西産と思われる。遺物の時期は須恵器の様相から本書Ⅶ期（古）8世紀初頭頃と推定される。

第28号住居跡（第97図）

第28号住居跡はZK-16・17グリッドに位置する。

住居跡南西部のほぼ半分は調査区外に延びている。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長2.45m、短軸長1.43m、深さ0.13～0.16mである。非常に小型の住居跡で主軸方位はN-116°-Eを指す。

第23表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(115)	34	-	A C I	25	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 器面荒れて放射暗文不明瞭	No10	
2	須恵器	蓋	(162)	24	-	I J K	20	良好	灰	南比企産	No14	
3	須恵器	坏	-	08	(100)	J K L	20	良好	灰白	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ		
4	須恵器	壺	(220)	46	-	E H I	5	良好	灰	南比企産か 厚く自然袖掛かる		
5	須恵器	高台付坏	(158)	39	(103)	I J K	10	普通	灰白	南比企産 白針含む 口径不安定		
6	須恵器	甕	-	-	-	I K	5	良好	灰	湖西産 頸部に2条一単位の沈線区画内に櫛描波状文 精緻胎土精良	No6・7	

床面は概ね平坦である。埋土は炭化物・焼土混じりの暗褐色土をベースとしていたが、堆積環境は不明確である。

カマドは北壁に設けられていた。燃烧部は壁を切り込んで構築されていた。袖部は存在せず、壁ラインが焚口に相当すると考えられる。煙道部は燃烧部と段差なく連続し、緩傾斜で立ち上がる。規模は全長1.15m、幅0.35~0.45m、深さ0.13mで

ある。

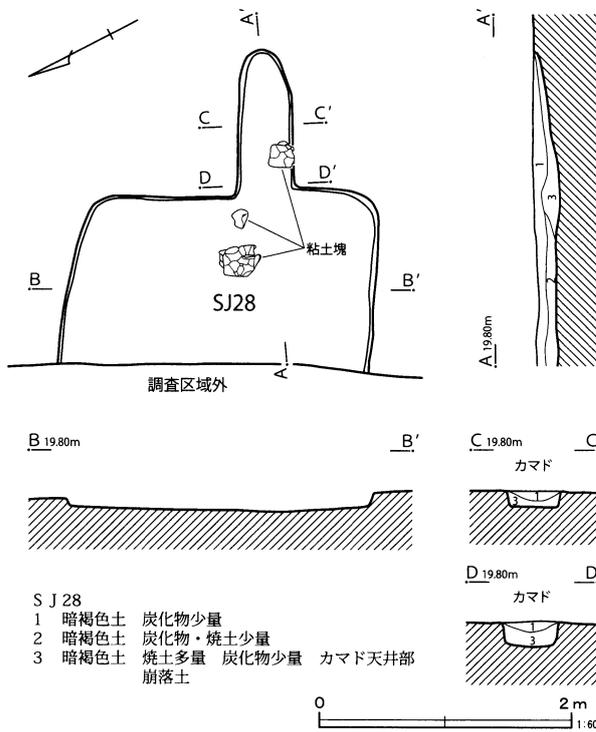
燃烧部底面はほぼ平坦で、床面に連続する。燃烧部右側壁際とカマド前面から3か所、弱く被熱した粘土塊が出土した。粘土塊は厚さ数cmで面取りされ板状をなしていた。胎土には白色針状物質が含まれているが、他の挟雑物は含まれていない。カマド天井部に使用されたものであろうか。カマド方位はN-114°-Eを指す。貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。須恵器坏・碗・高台付坏・蓋がある(第98図)。1・2は須恵器坏口縁部片。3は無台碗か。底部回転糸切り後周辺部と体部下端を回転ヘラケズリ調整する。5は碗蓋と思われる。時期は不明確である。遺物様相は8世紀後半以降、9世紀中頃までであろう。超小型住居であることや燃烧部が壁外に突出するカマド構造から9世紀代以降の可能性があると思われる。

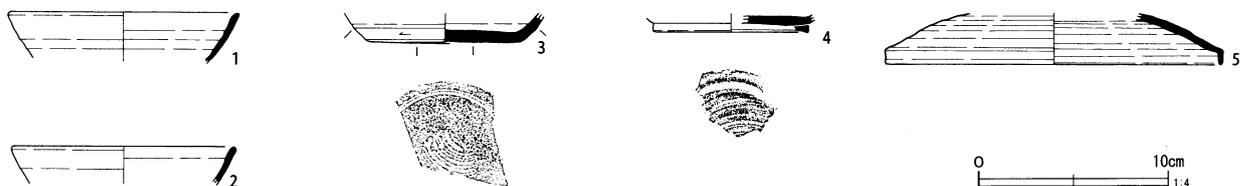
第29号住居跡 (第99図)

第29号住居跡はZH-17・18グリッドに位置する。住居跡南側の半分以上は調査区外に延びている。重複する第13・17号住居跡に切られていた。

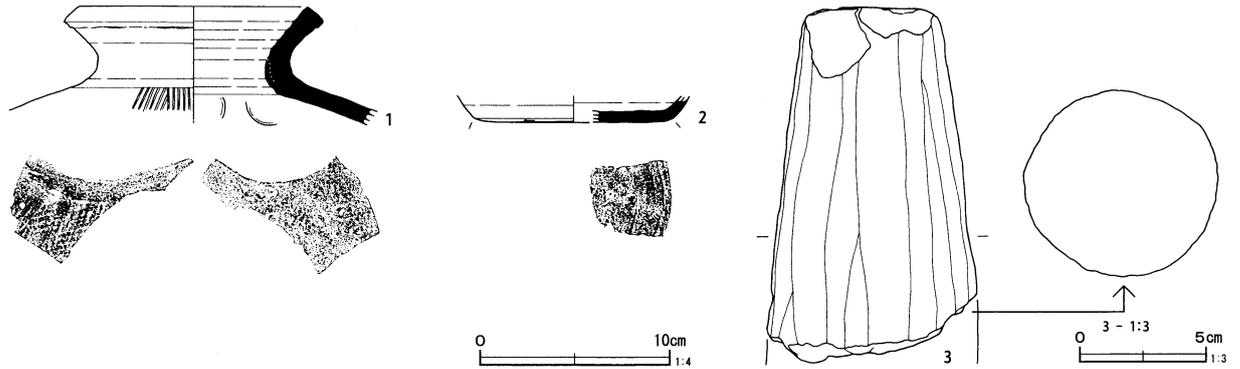
平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長4.82m、短軸長1.80m、深さ0.11~0.32mである。主軸方位はN-93°-Wを指す。



第97図 第28号住居跡



第98図 第28号住居跡出土遺物



第100図 第29号住居跡出土遺物

第25表 第29号住居跡出土遺物観察表 (第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	壺	(120)	62	-	E H I	25	普通	灰	末野産か No.3		
2	須恵器	坏	-	14	(94)	E I J	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.5		
3	土製品	支脚	-	-	-	A I K	80	不良	橙	長さ14.0cm 最大径8.0cm 重量562.66g 中実の支脚 下端欠 上面平坦 側面面取り No.1	53-5	

口していた可能性がある。

貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。須恵器坏と壺、土製支脚がある (第100図)。

1は須恵器壺。胴部平行叩き、内面無文当具。末野産と思われる。2は南比企産坏。底部回転ヘラケズリ調整される。3は土製支脚基部を欠く。側面は面取りされる。時期は不明確であるが、須恵器坏と重複関係から本書Ⅶ期新～Ⅷ期 (8世紀前半～中頃) と考えておきたい。

第30号住居跡 (第101・102図)

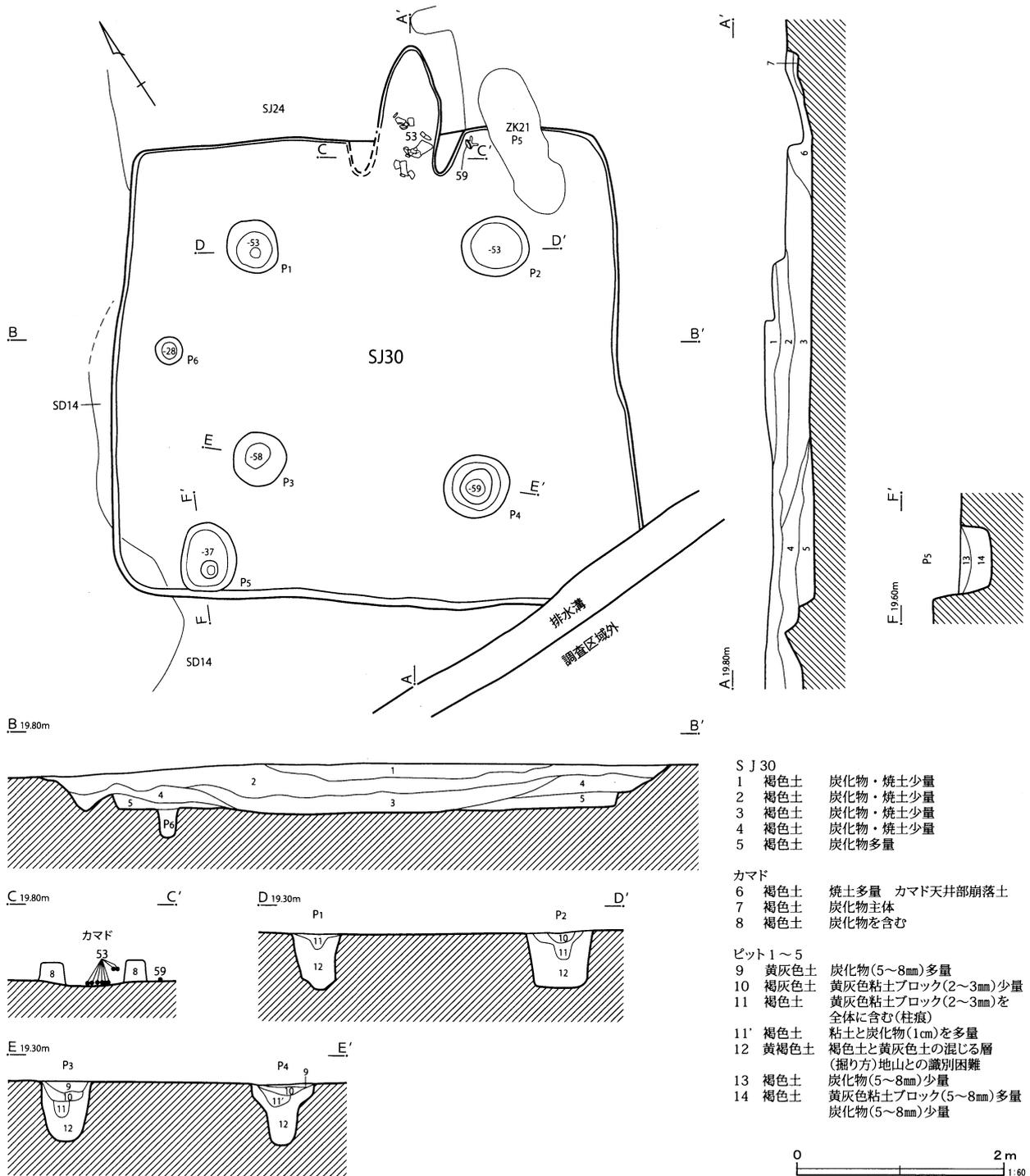
第30号住居跡はZK-20・21グリッドに位置する。第24号住居跡、第14号溝跡、ZK-21グリッドピット5と重複し、最終的に本住居跡が最も古いことが判明した。調査時には第14号溝跡との新旧関係の把握が難しく、住居跡内から出土した遺物は本住居跡出土遺物として取り上げたが、断面観察や遺物の検討から大半が第14号溝跡に帰属する可能性が高いと思われる。ここでは分離が難しいため、ひとまず住居出土遺物として報告する。

平面形はほぼ方形で、長軸長5.07m、短軸長4.67m、深さ0.47mである。主軸方位はN-33°-Eを指す。

床面は概ね平坦であるが、中央部は第14号溝跡の底面とほぼ一致する。第1層～第4層は住居の上面を被覆しており、第14号溝跡の堆積土と考えられる。

カマドは北東壁ほぼ中央に設けられていた。規模は全長1.08m、袖の外幅 (推定) 1.08mである。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。底面は緩やかな傾斜で斜め上方に延び、煙道部に連続する。燃焼部幅は0.58mである。燃焼部堆積層は焼土を多量に含む褐色土で構成されていた。天井部崩落土と考えられる。第7層に炭化物粒子が多量に含まれていたが、明確な灰層は認められなかった。袖部は褐色粘土を用いて構築されていた。左袖部はトレンチを設定したために明確に検出できなかった。

ピットは6本検出された。主柱穴はP1～P4と考えられ、4本とも柱痕と思われる痕跡が残るが、砂質の強い土質のためか、下層では掘り方との識別が困難であった。柱間距離はP1-P2間は2.34m、P1-P3間は1.98m、P2-P4間は2.34m、P3-P4間は2.10mである。深さはいずれも50cmを超え十分な深度がある。P5は貯蔵穴となるか確定はできなかった。楕円形で長径0.67m、短径0.51m、床



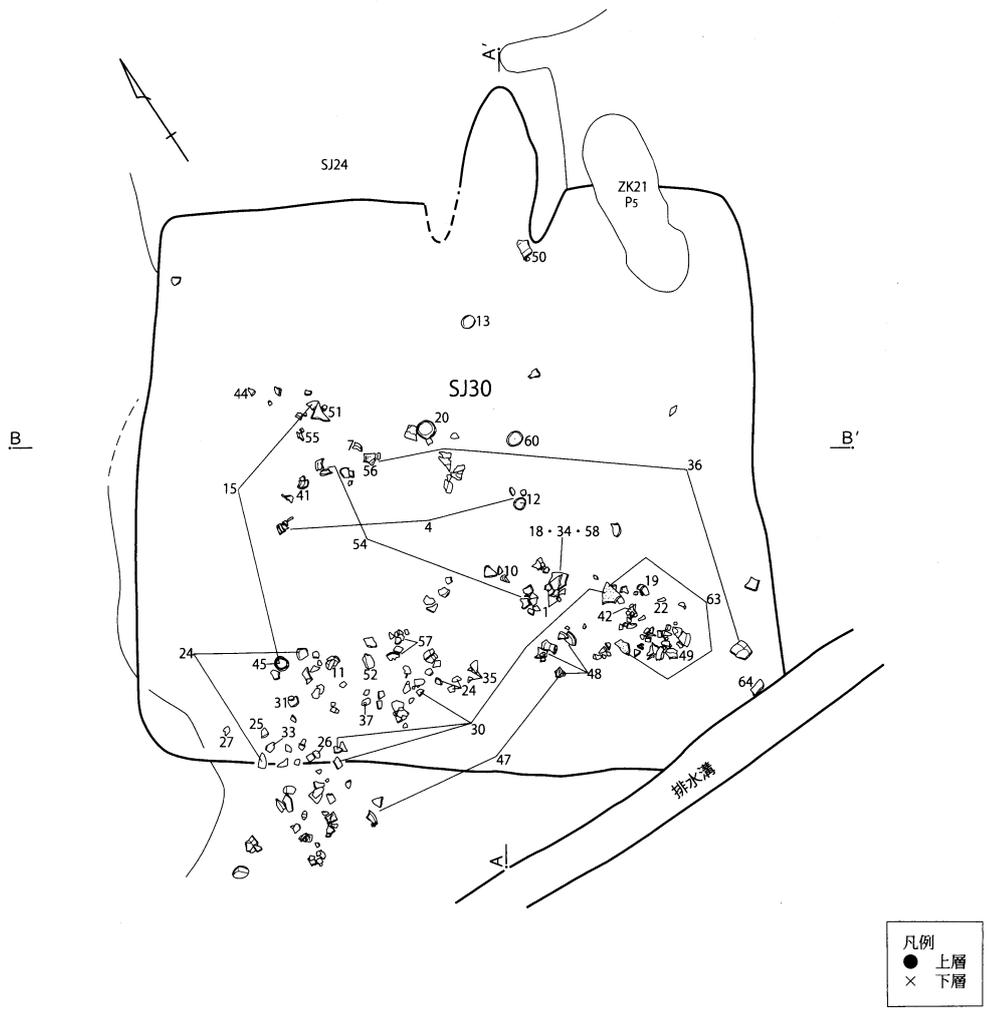
第101図 第30号住居跡(1)

面からの深さ0.37mである。壁溝は検出されなかった。

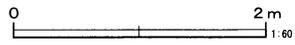
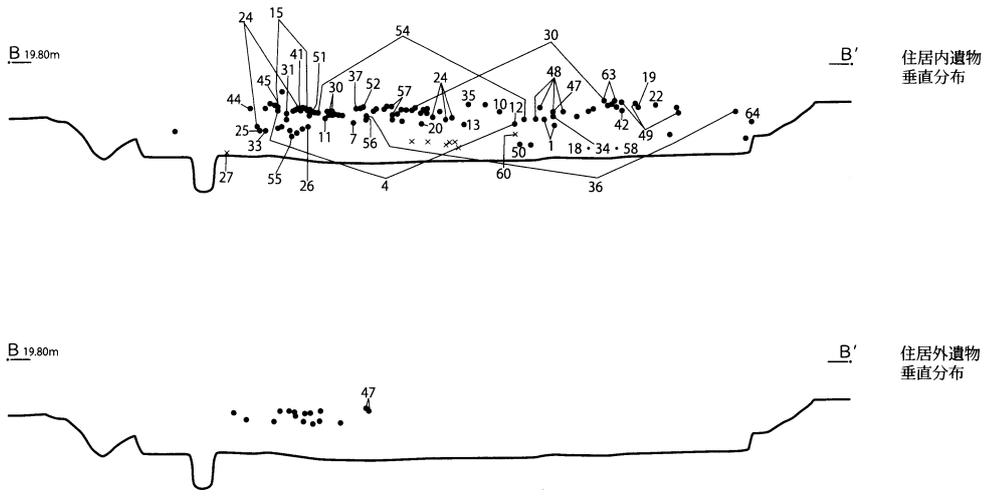
遺物は、住居跡南西側にまとまっている。主として第1・2層対応層から多量に出土した。第1～4層が第14号溝跡堆積層と考えられることから、遺物の大半は本住居跡に伴わないと推定される。

遺物は土師器坏・皿・甕・壺、須恵器坏・蓋・甕・長頸瓶等がある(第103～106図)。

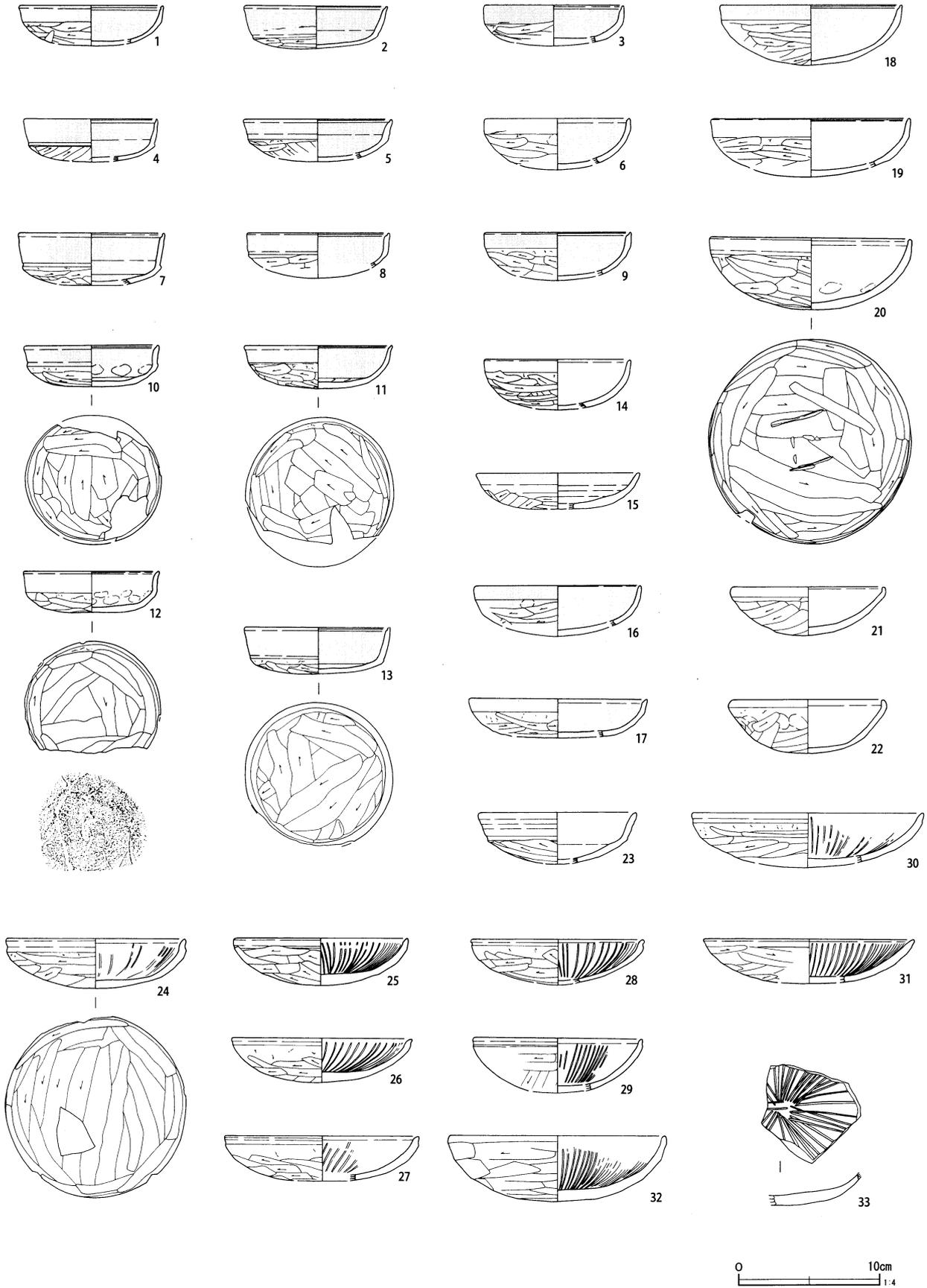
第103図1～19は(続)比企型坏である。基本的に内面と口縁部外面に赤彩が施されるが、外面の赤彩がないもの(6・17)や、赤彩が不明確なものがある(14・19)。また、白色針状物質が明



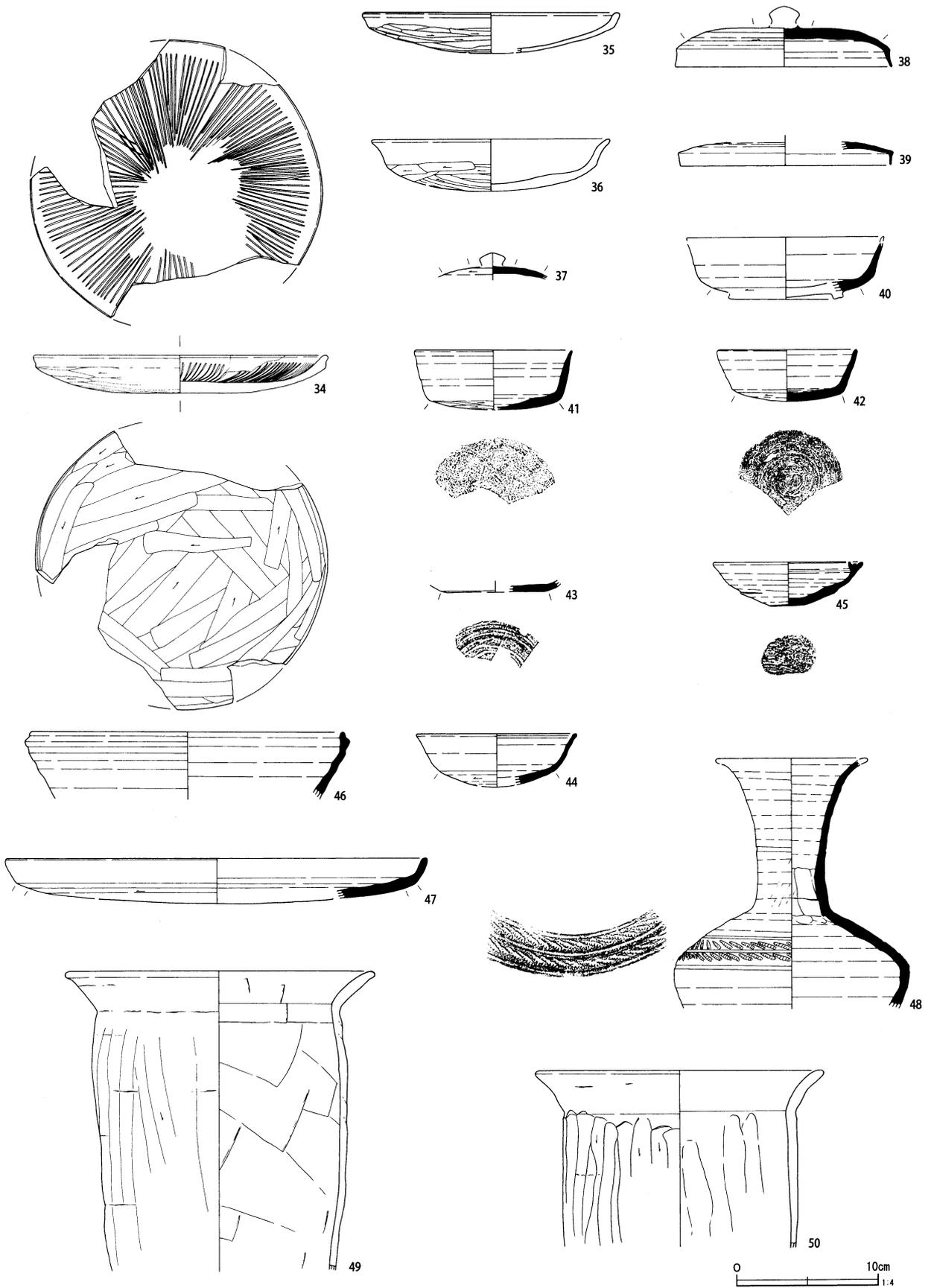
凡例
 ● 上層
 × 下層



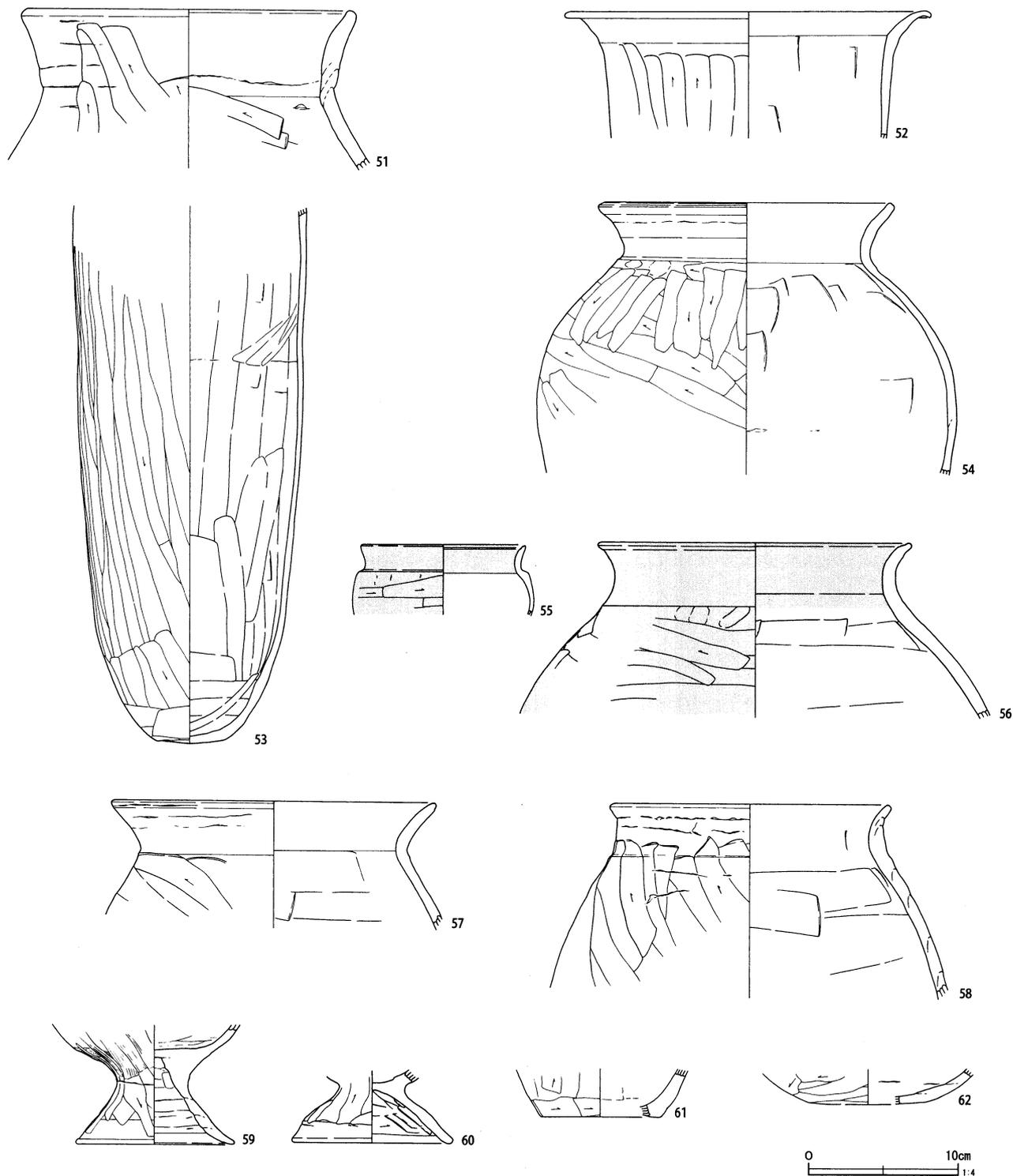
第102図 第30号住居跡 (2)



第103図 第30号住居跡出土遺物(1)



第104図 第30号住居跡出土遺物（2）



第105図 第30号住居跡出土遺物（3）

確に含まれるものと確認できないものがある。15はロクロナデ風の調整が施されるが、12・20は底部に木葉痕かと思われる圧痕が観察された。底部木葉痕は比企型坏の伝統的な製作手法である。

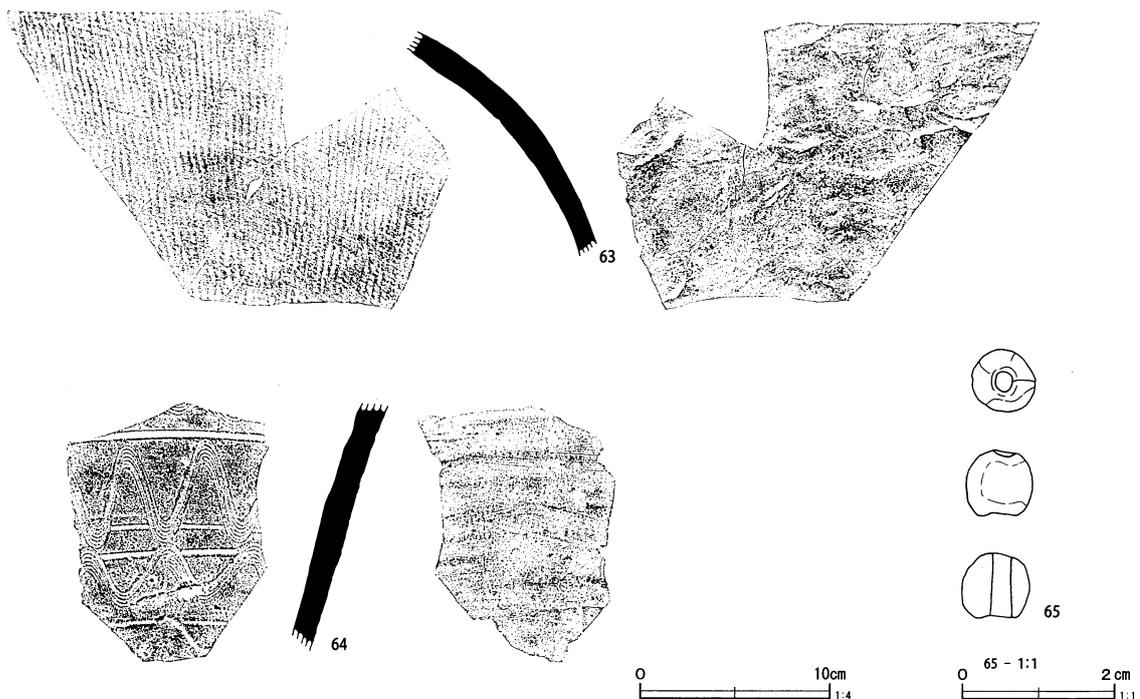
21・22は北武蔵型坏である。口唇部が小さく内

屈する丸底形態である。23は有段口縁坏。北武蔵の製品と考えられる。

24～33は北武蔵型暗文坏、34・35は北武蔵型暗文皿。内面に放射暗文が施文される。35は風化しており暗文不明瞭。36は北武蔵型皿である。

第26表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第103~106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(102)	26	-	H I K L	25	普通	にぶい橙	(統) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針なし	上層No46	53-6
2	土師器	坏	101	30	-	E H I	50	普通	にぶい黄褐	(統) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	上層	
3	土師器	坏	(97)	26	-	I K	20	良好	にぶい赤褐	(統) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	上層	
4	土師器	坏	(94)	30	-	E H I J	40	普通	橙	(統) 比企型坏 模倣坏B 白針入る 内面+口縁外面赤彩	上層No8・43	
5	土師器	坏	(106)	27	-	H I	20	普通	赤褐	(統) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩		
6	土師器	坏	(103)	32	-	E H I L	25	普通	明赤褐	(統) 比企型坏 内面赤彩外面無彩か		
7	土師器	坏	(102)	36	-	A C I J	25	普通	赤褐	(統) 比企型坏 模倣坏A 白針入る 内面+口縁外面赤彩	上層No36	
8	土師器	坏	(101)	25	-	A H I	25	普通	赤褐	(統) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針なし		
9	土師器	坏	(103)	30	-	H I	20	普通	橙	(統) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩		
10	土師器	坏	94	29	-	C E G H I J	85	良好	橙	(統) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針入る	上層No49	53-7
11	土師器	坏	104	31	-	E H I J	80	普通	明赤褐	(統) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針あり	上層No76	53-8
12	土師器	坏	(96)	28	-	C H K	75	普通	橙	(統) 比企型坏か 二次被熱を受け器壁もろい 赤彩不明確	木葉痕か 上層No8	54-1
13	土師器	坏	102	33	-	A G H I J	95	普通	橙	(統) 比企型坏 模倣坏A 赤彩 底部黒斑	上層No4	54-2
14	土師器	坏	(104)	34	-	C E H I J L	20	普通	赤褐	(統) 比企型坏 白針あり 赤彩不明確		
15	土師器	坏	(114)	30	-	E H I	15	普通	明赤褐	(統) 比企型坏 回転台使用か ロクロナデ風 赤彩	上層No3・33	
16	土師器	坏	(117)	28	-	H I	20	普通	明赤褐	(統) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩		
17	土師器	坏	(125)	26	-	E H I K	20	普通	橙	(統) 比企型坏 内面赤彩外面無彩か		
18	土師器	坏	(129)	43	-	C H I J	25	普通	橙	(統) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針あり	上層No45 ZK-20・21G	
19	土師器	坏	(140)	35	-	E H I K	20	普通	橙	(統) 比企型坏 内面赤彩 外面赤彩不明確	上層No19	
20	土師器	坏	141	50	-	C G H I	95	普通	明赤褐	(統) 比企型か 内外面煤付着 赤彩不明	上層No9	54-3
21	土師器	坏	107	34	-	A C D E H I	65	良好	橙	北武蔵型坏 風化により調整不明瞭	下層	54-4
22	土師器	坏	(106)	38	-	C H I	35	良好	橙	北武蔵型坏	上層No20	
23	土師器	坏	(111)	36	-	A C H I	25	普通	橙	有段口縁坏 北武蔵から搬入品 無彩	下層 P-5	
24	土師器	坏	126	35	-	C H I K	90	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文磨滅により不鮮明	上層No79・91~93・97	54-6
25	土師器	坏	(120)	33	-	C H I	40	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	上層No95 P-5	
26	土師器	坏	127	31	-	C D H	50	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	上層No103	54-7
27	土師器	坏	(137)	31	-	C H I	20	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文不鮮明	下層No8	
28	土師器	坏	120	31	-	C H I	90	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文やや不鮮明	上層	54-5
29	土師器	坏	(119)	37	-	C E I	10	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
30	土師器	坏	163	35	-	C H I	55	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文風化で不明瞭	上層No14・70・105・107	54-10
31	土師器	皿	(148)	38	-	C H I	15	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 (皿) 内面放射暗文	上層No82	
32	土師器	坏	(152)	46	-	C E H I	40	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文磨滅によりやや不鮮明	器壁厚い 上層	
33	土師器	坏	-	24	-	C E H I	25	普通	黒	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 外面ケズリ 内面: 橙色	上層No96	
34	土師器	皿	204	27	-	C E I	75	普通	にぶい橙	北武蔵型暗文皿 内面放射暗文	上層No45	54-8・9
35	土師器	皿	(180)	28	-	C E H I	30	普通	にぶい橙	北武蔵型暗文坏 (皿) と思われるが内面風化のため暗文不明	外面黒斑 上層No115	
36	土師器	皿	(164)	36	-	C E G I	70	普通	橙	北武蔵型坏 (皿) 器面風化	上層No11・37	55-1
37	須恵器	蓋	-	-	-	E I K	10	普通	灰	末野産 つまみ欠失 天井部回転ヘラケズリ	上層No88	
38	須恵器	蓋	(153)	28	-	I J	40	良好	灰	南比企産 短頸壺蓋か 天井部回転ヘラケズリ	上層	55-2
39	須恵器	蓋	(149)	17	-	I J	5	普通	灰褐	南比企産 壺蓋		
40	須恵器	高台付坏	-	-	-	I	10	良好	灰	湖西産か 体部下端回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)	高台剥落	
41	須恵器	坏	111	42	90	I J	40	普通	灰	南比企産 坏G 底部手持ちヘラケズリ	上層No40	55-3
42	須恵器	坏	(98)	36	(7.4)	B E K	50	良好	灰	末野産 坏G 底部回転ヘラケズリ	上層No16	55-4
43	須恵器	坏	-	-	(7.6)	E	10	普通	暗灰	末野産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)		
44	須恵器	坏	(113)	36	-	I	10	良好	灰白	湖西産 胎土緻密 湖西分類「碗」 口縁部の突出なし	上層No29	
45	須恵器	坏身	86	31	-	I K	100	良好	灰	坏H身 湖西産 受部径10.5cm	上層No3	55-5



第106図 第30号住居跡出土遺物（4）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
46	須恵器	鉄鉢形	(20.7)	4.4	-	GK	10	普通	淡灰	東海産 猿投産か? 黒色粒子吹き出しあり 胎土精選	上層	
47	須恵器	盤	(30.0)	3.1	-	EI	10	良好	暗灰	末野産か 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)	上層No2・7	
48	須恵器	長頸瓶	-	17.6	-	IJK	95	良好	灰	南比企産 肩部沈線区画内を櫛描列点文	No.5~7 上層	55-6・7
49	土師器	甕	21.2	21.3	-	AEGHI	75	普通	にぶい橙	外面風化 胴部タテケズリ後ナデか 絹雲母片岩?多量 角閃石不明瞭	上層No15	55-8
50	土師器	甕	20.0	12.5	-	EGHI	20	普通	橙	胴部タテケズリ	上層No24	
51	土師器	甕	(21.7)	10.6	-	BEHL	20	普通	橙	緑泥片岩入る 器壁厚い 混入? 槻川流域の土か	上層No44	
52	土師器	甕	(24.5)	8.5	-	ACEGH	20	普通	橙	胴部弱いタテケズリ	上層No75	
53	土師器	甕	-	36.0	(5.0)	BGIJ	40	普通	にぶい褐	緑泥片岩と白色針状物質入る	カマド下層No.2	
54	土師器	壺	19.4	18.1	-	ACHI	50	普通	にぶい橙	北武蔵の土	No.39・47 上層	56-1
55	土師器	小型壺	(10.9)	4.6	-	EHIL	40	普通	暗赤褐	比企産 外面+口縁内面赤彩 白針入る	上層No35	
56	土師器	壺	(20.6)	11.7	-	HI	25	普通	橙	比企産 外面+口縁内面赤彩	上層No37	
57	土師器	壺	(21.4)	8.5	-	AEHI	30	普通	橙	雲母状粒子入り角閃石目立たない 接合しない胴部片あり	上層No61・63	
58	土師器	壺	(18.2)	12.9	-	EHIL	30	普通	橙		上層No45	
59	土師器	台付甕	-	8.1	10.3	ACEJ	80	普通	橙	外面二次被熱	カマド下層No.1	
60	土師器	台付甕	-	4.9	10.6	ACEIKL	90	普通	明赤褐	北武蔵の土 二次被熱 内底面剥離	下層No.3	56-2
61	土師器	甕	-	3.2	8.0	BCEK	70	普通	にぶい褐	二次被熱 緑泥片岩入る	上層	
62	土師器	壺	-	2.3	(8.0)	HIKL	40	普通	橙	人間の土か?	上層	
63	須恵器	甕	-	-	-	EIJK	5	普通	灰	南比企産 大甕胴部	上層No13・14	
64	須恵器	大甕	-	-	-	EIK	5	普通	灰	末野産か 白針なし 頸部片 沈線+櫛描波状文4段	上層No10	
65	石製品	丸玉	-	-	-	-	-	-	オリブ黒	径0.9cm 高さ0.85cm 孔径0.25cm 重さ0.6g 石材滑石と思われる		56-3

37~39は須恵器蓋である。37は須恵器坏G蓋と思われる。末野産。38・39は南比企産の壺蓋か。40は高台付坏。高台部は剥落している。湖西産の可能性はある。41~44は坏G身である。41は南比

企産で、底部手持ちヘラケズリ調整される。42・43は末野産。底部は回転ヘラケズリ調整。44は湖西産と思われる。湖西分類「碗」に相当するタイプであろうか。45は湖西産の坏H身である。口縁

部が受部と同高になり、坏Hの変遷の中でも最新の様相である。46は須恵器鉄鉢形か。器種は不明確である。胎土は緻密で猿投産の可能性がある。47は須恵器盤で末野産と思われる。48は南比企産の須恵器長頸瓶である。口唇部を僅かに欠く。肩部の平行沈線区画の中に櫛描列点文を2段施文する。

49~53・61は土師器甕、54~58・62は土師器壺、59・60は土師器台付甕である。49・51は胎土に緑泥片岩と思しき鉱物が含まれる例があり、槻川流域で生産された可能性がある。

63・64は須恵器大甕。65は丸玉。表面は黒味を帯びており、石材鑑定の結果、滑石であることが判明した。

土器様相としては、湖西産の坏Hと坏Gが共存、南比企産と末野産坏Gが伴出、南比企山下6号窯段階の大型坏が組成に含まれないことなどから本書Ⅵ期（7世紀後半代）の土器様相とみてよい。住居跡の時期はそれ以前となるが、特に古い土器は認められないことから、7世紀後半からさほど遡らないかもしれない。

第31号住居跡（第107図）

第31号住居跡はZK-20グリッドに位置する。住居跡北側は調査区外に延びている。

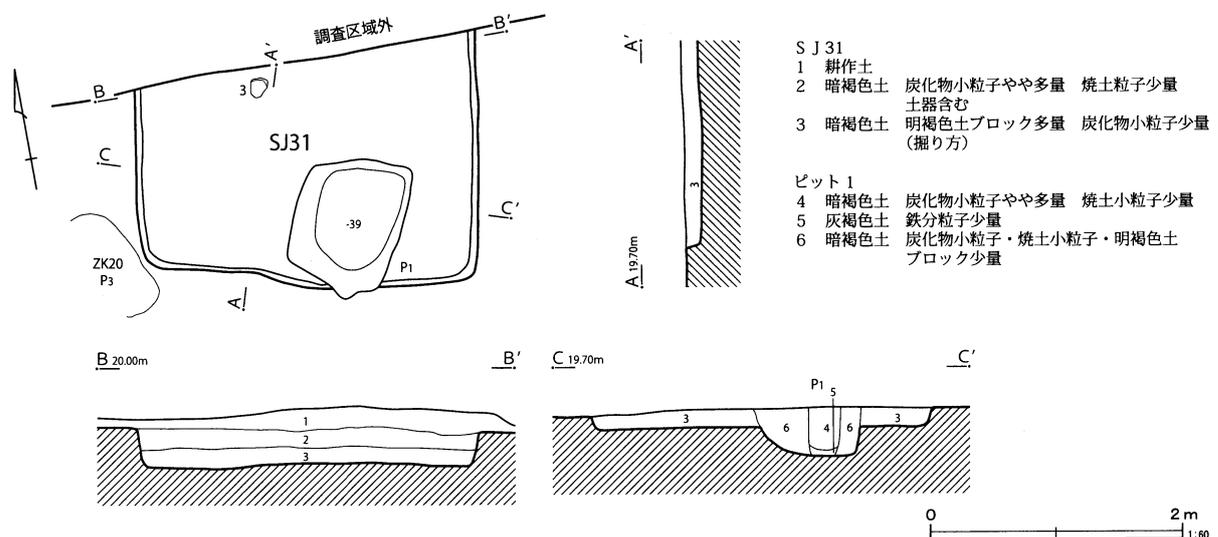
平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長

271m、短軸長1.97m、深さ0.14mである。主軸方位はN-11°-Eを指す。

床面は平坦で貼床されていた。確認面がほぼ床面に達していた。ピットは1本検出された。掘立柱建物跡掘り方に思えたが、対応する柱穴が発見できなかった。住居跡掘り方を切っており、住居跡より新しい時期の所産である。不整形形で、1.12×0.85m、深さ0.38mである。第4・5層は柱痕の可能性ある。カマド、貯蔵穴、壁溝等の施設は検出されなかった。

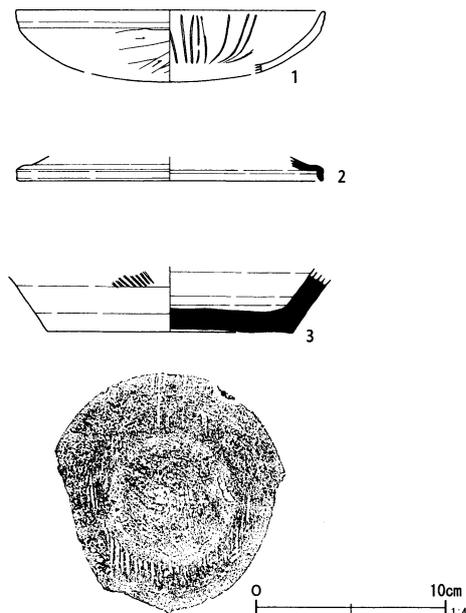
出土遺物は少ない。土師器坏と須恵器蓋・甕がある（第108図）。1は土師器北武蔵型暗文坏である。推定口径16.2cm。残存高3.3cm。胎土に角閃石赤色粒子・白色粒子・黒色粒子含む。焼成は普通、橙色。5%残。内面に放射暗文が施されている。2は須恵器蓋である。推定口径16.0cm、残存高1.2cm。白色粒子・白色針状物質・黒色粒子含む。焼成は普通で、灰色。5%残。南比企産の無かえり蓋。薄手で軽量感がある。3は須恵器甕底部片。推定底径13.0cm、残存高3.4cm。胎土に石英・白色針状物質含む。焼成は普通で、灰色。70%残。取り上げNo.1。南比企産で、底部中心部がやや上げ底を呈する。

1・2は小片で時期限定が難しい。3の甕も時期限定が難しい。広く8~9世紀代という時間幅



第107図 第31号住居跡

で捉えておく以外にない。



第108図 第31号住居跡出土遺物

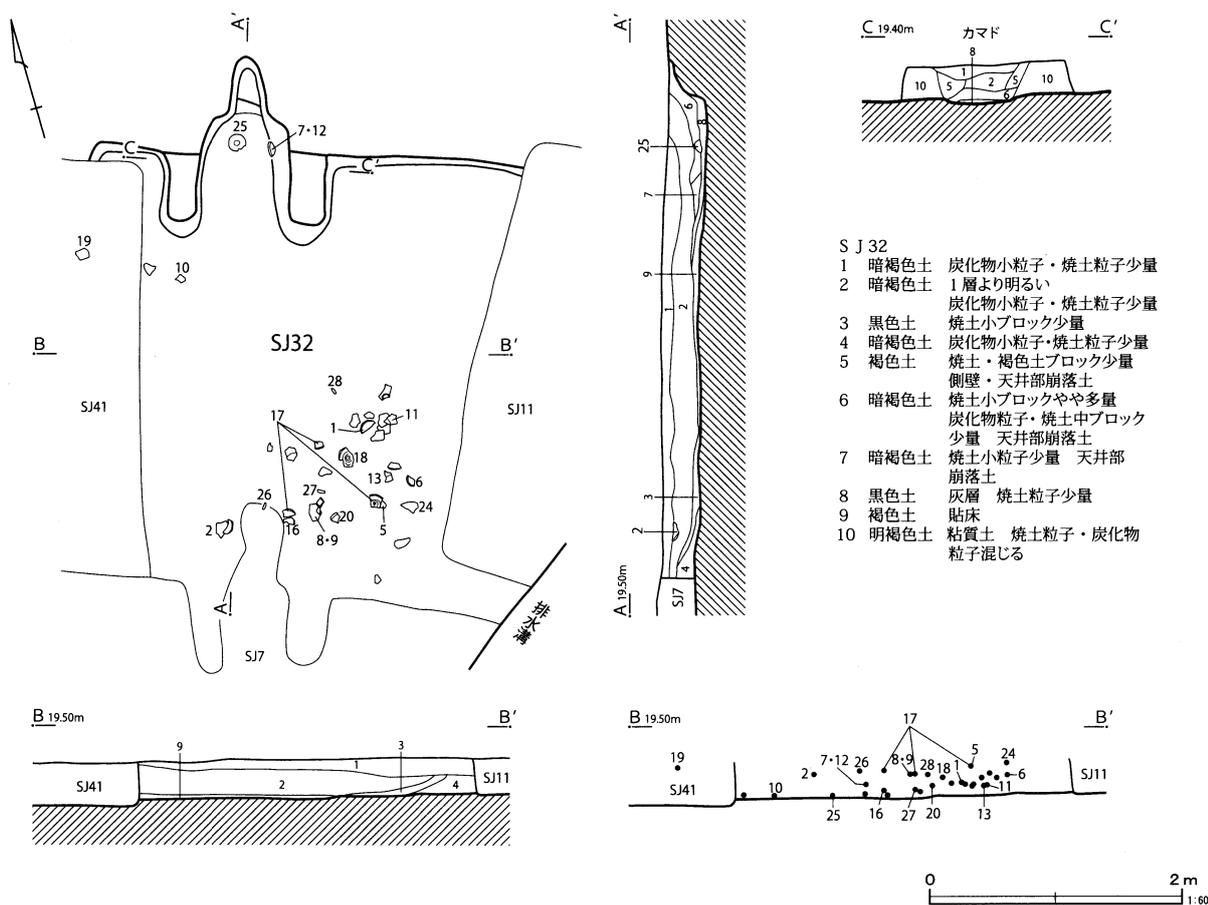
第32号住居跡 (第109図)

第32号住居跡はZI-14グリッドに位置する。重複する第7・11・41号住居跡に切られていた。

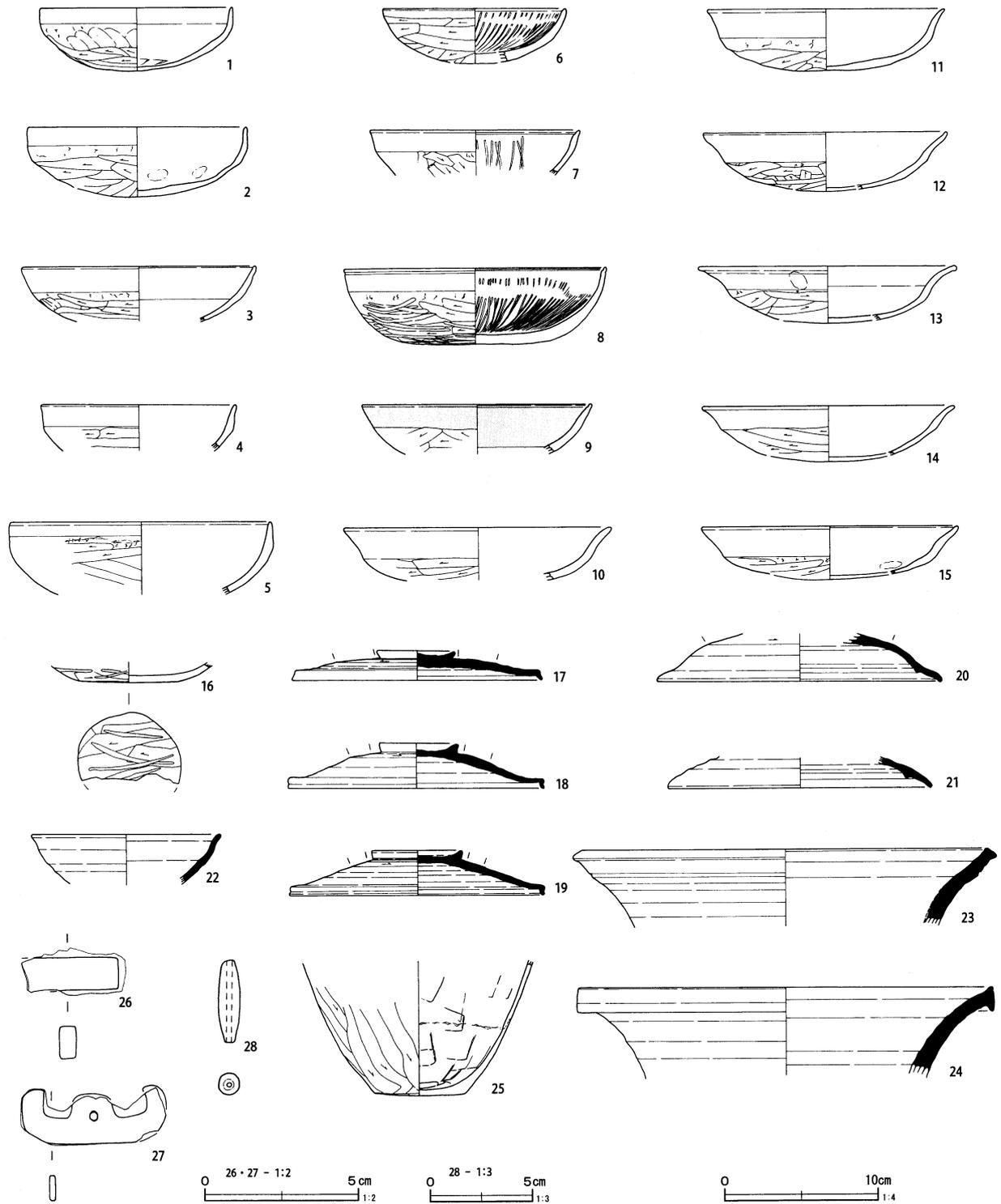
平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.58m、短軸長3.40m、深さ0.28mである。主軸方位はN-18° - Eを指す。

床面は平坦である。貼床され、部分的に薄い炭化物層が形成されていた。埋土は炭化物粒子・焼土粒子混じりの暗褐色土をベースとしていた。

カマドは北壁に設けられていた。燃烧部は壁を約30cm切り込んで構築されていた。煙道部は燃烧部とは明確な段差を持って斜め上方に立ち上がる。全長1.46m、袖部外幅1.34m、煙道の幅0.26m。燃烧部は幅0.60mで内壁上部は赤褐色に被熱していた。底面は黒色の灰層が薄く堆積していた。燃烧部奥壁寄りの位置から、土師器甕胴部下半から底部にかけての破片が倒立して据えられた状態



第109図 第32号住居跡



第110図 第32号住居跡出土遺物

で出土した。支脚に転用されたものと考えられる。第5～8層が天井部崩落土である。焼土ブロックの混入が目立った。袖部は焼土・炭化物粒子混じりの明褐色土で構築されていた。

貯蔵穴、柱穴、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、住居跡のほぼ中央付近の床面から浮いた状態で出土したものが多い。おそらく住居廃絶後、一定程度堆積が進んだ状態で、投棄された土器群と思われる。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕と鉄器、土錘がある（第110図）。

第27表 第32号住居跡出土遺物観察表 (第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	126	41	-	ACH I	55	普通	橙	北武蔵型坏 No22		56-4
2	土師器	坏	(142)	45	-	CEHI	50	普通	橙	北武蔵型坏 外面煤附着 No1		56-5
3	土師器	坏	(152)	36	-	BHIJ	20	普通	にぶい橙	北武蔵型坏か 緑泥片岩+白針入る		
4	土師器	坏	(126)	30	-	CK	10	普通	にぶい橙	北武蔵型か		
5	土師器	坏	(170)	47	-	ACH I	10	普通	橙	北武蔵型坏 内面風化 No13		
6	土師器	坏	(118)	35	-	CDHI	30	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 No17		
7	土師器	坏	(136)	29	-	CHIK	10	普通	橙	北武蔵型暗文坏 No33		
8	土師器	坏	(170)	50	-	ACEHIJ	30	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 口縁沈線 外面ケズリ+ヘラミガキ No5		56-6
9	土師器	皿	(150)	32	-	EHIJ	10	普通	明赤褐	(続)比企型坏(皿) 内面+口縁外面赤彩 白針有り No5		
10	土師器	皿	(172)	34	-	DGHJ	10	普通	赤褐	白針有り 北武蔵型類似(模倣)か No30		
11	土師器	皿	(154)	40	-	CHK	30	普通	橙	北武蔵型坏(皿) 内外面煤附着 No21		
12	土師器	皿	(158)	37	-	CEI	30	普通	橙	北武蔵型坏(皿) No33		
13	土師器	皿	166	35	-	CHI	75	普通	にぶい橙	北武蔵型坏(皿) No18		56-7
14	土師器	皿	(162)	32	-	CEI	10	普通	橙	北武蔵型坏(皿)		
15	土師器	皿	(166)	31	-	CEI	15	普通	橙	北武蔵型坏(皿)		
16	土師器	坏?	-	13	6.7	ACI	50	普通	灰黄褐	体部+底部ケズリ後ヘラミガキ No4		
17	須恵器	蓋	163	1.9	-	EIJ	70	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) No3・11・13		56-9
18	須恵器	蓋	165	2.9	-	EJKL	60	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) No12		56-8
19	須恵器	蓋	(165)	2.9	-	EIJ	50	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.6cm) 天井部粘土付着したまま焼成 No32		57-1・2
20	須恵器	蓋	(185)	31	-	ABEHK	15	普通	褐灰	末野産 No6		
21	須恵器	蓋	170	20	-	BCEK	15	普通	灰黄	末野産		
22	須恵器	坏	(122)	33	-	EHJ	10	良好	にぶい黄橙	南比企産 混入		
23	須恵器	鉢	(263)	50	-	CIL	5	普通	灰黄	器種産地不明 内面風化		
24	須恵器	甕	(270)	59	-	EGJ	10	普通	灰	南比企産 No16		
25	土師器	甕	-	86	59	CEFHIK	70	普通	にぶい橙	武蔵型甕 No34カマド		
26	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ31cm 幅1.05cm 厚さ0.55cm 重さ6.6g No2		57-5
27	鉄製品	火打ち金	-	-	-	-	-	-	-	長さ47cm 幅1.75cm 厚さ0.2cm 重さ6.7g No7		57-4
28	土製品	土錘	-	-	-	ACHIK	100	普通	にぶい橙	長さ40cm 最大径10cm 厚さ1.0cm 孔径0.2cm 重量440g No25		57-3

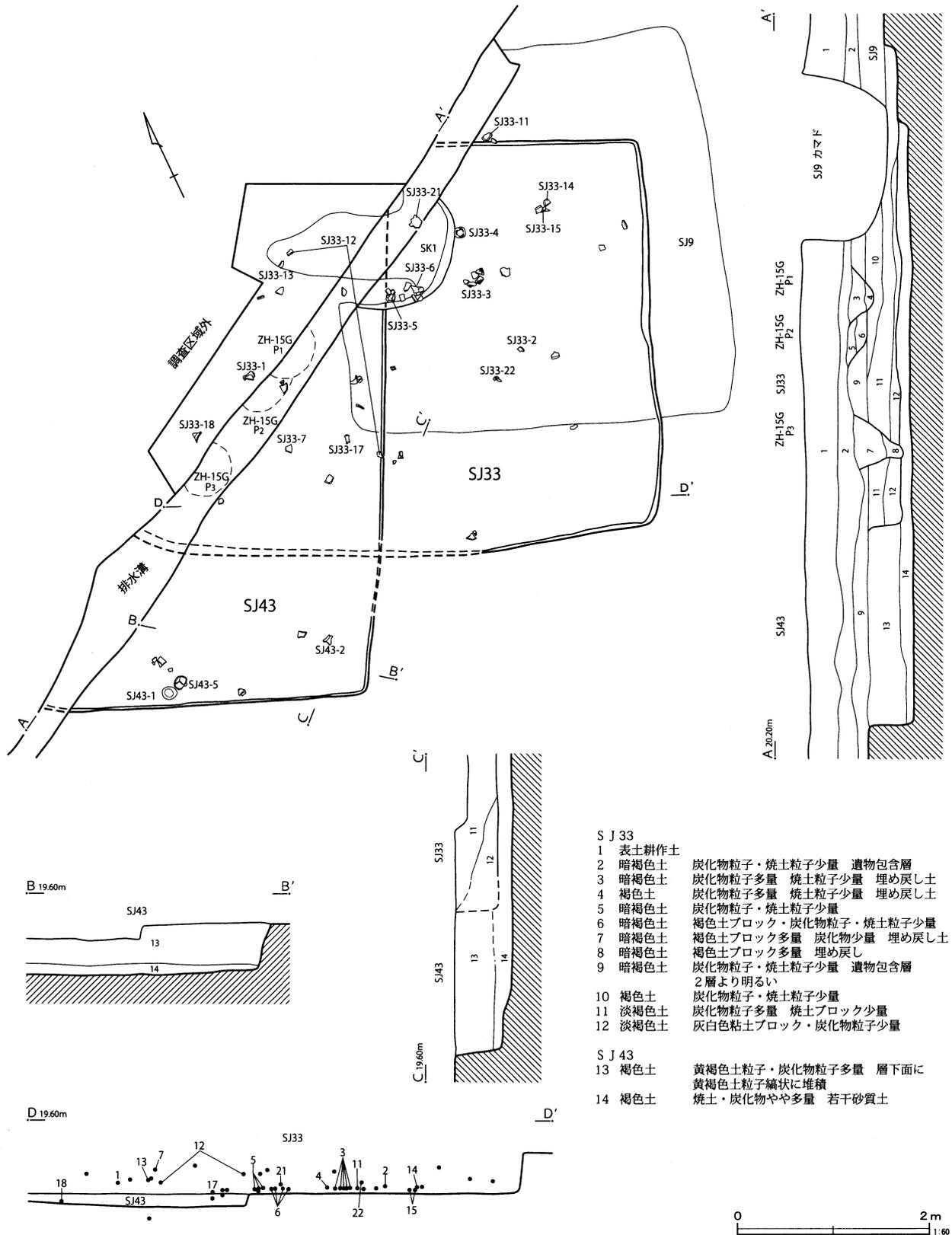
第110図1～3・5は丸底形態の北武蔵型坏。3は片岩と白色針状物質が入る。藤岡地域で生産されたものか。4は模倣坏か。6～8は丸底形態の北武蔵型暗文坏で、内面に放射暗文が施される。8は大振り、外面ケズリの後部分的にヘラミガキされていた。9は(続)比企型の皿(坏)。赤彩と口唇部内面沈線が特徴的である。10～15は北武蔵型皿である。10は3と同様、白色針状物質が確認できる。16は器形がよくわからない。ケズリ後、ヘラミガキが加わる。

17～19は環状つまみの須恵器蓋。南比企産である。17は天井部粘土が付着したまま焼成している。20・21は末野産の蓋。内面にかえりが付く。22は須恵器坏で、重複住居に帰属するものか。混入資料と考えられる。23は鉢?器種と産地不明。

26・27は鉄製品。26は断面長方形の角柱状製品残欠。27は火打ち金である。長さ47cm。「山」形をなし、中央の突起に穿孔。孔径2mm。重量67g。須恵器蓋とセットとなる坏が組成から欠落するが、大型坏が存在する筈である。北武蔵型皿が多出する点も特徴である。坏Gがなく、(続)比企型坏が非常に少ない等から、山下6号窯からHB I期の土器様相、本書Ⅶ期(古)に位置付けられる。

第33号住居跡 (第111図)

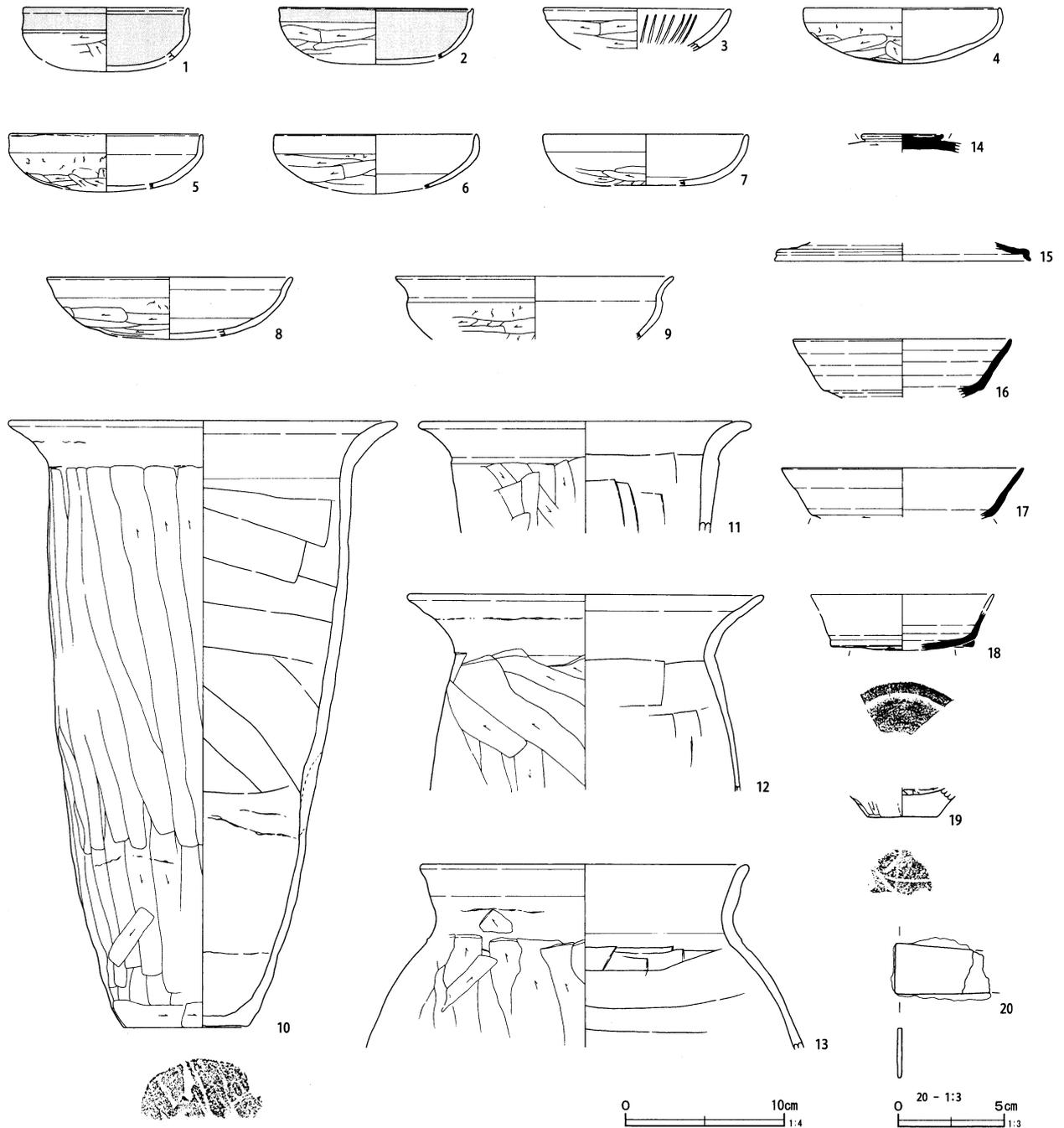
第33号住居跡はZH・ZI-15グリッドに位置する。住居跡北西部は調査区外に延びている。第9・43号住居跡と重複していた。非常に判別の困難な土質で、新旧関係やプラン確認に手間取った。トレンチや断面観察により、第43号住居跡を切り、第9号住居跡に上部を削平されていることが判明



第111図 第33・43号住居跡

したが、主軸が近似すること、遺物の時期幅は少ないことなどから、第43号→第33号→第9号住居

跡の順に連続的に建て替えられたと想定するのが妥当かもしれない。



第113図 第33・43号住居跡出土遺物

平面形は横長の長方形と考えられる。残存規模は長軸長5.40m、短軸長4.27m、深さ0.43mである。主軸方位はN-27° - Eを指す。

床面は概ね平坦であるが、砂質が強いためか、硬く踏み固められた床面は検出されなかった。

カマド、貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、住居跡全体に散在する。覆土からも出

土するが、多くは床面付近の高さから出土した。また、第43号住居跡は本住居の下部に一部重なるため、明確に分離できない遺物がある（第112・113図）。

第112図は第33号住居跡から出土した遺物である。1～6は北武蔵型坏である。1は丸椀形態、他は扁平な丸底タイプである。7・8は北武蔵型暗文坏。内面に放射暗文が施文される。9・10は

第28表 第33号住居跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(100)	35	-	CK	65	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 外面黒斑	No.7	57-6
2	土師器	坏	(126)	30	-	CIK	20	普通	橙	北武蔵型坏	No.16	
3	土師器	坏	(128)	37	-	ACI	75	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 底部黒斑	No.10	57-7
4	土師器	坏	116	37	-	CEI	100	良好	橙	北武蔵型坏 内面「#」状の線刻あり	No.2	57-8・9
5	土師器	坏	(138)	39	-	CHI	25	普通	橙	北武蔵型坏	No.12	
6	土師器	皿	(142)	38	-	ACGH	40	普通	橙	北武蔵型坏(皿)	No.11 SJ-33・43	
7	土師器	坏	(144)	27	-	CEHI	10	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
8	土師器	坏	-	-	-	ACEHI	破片	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
9	土師器	坏	(128)	30	-	AHI	10	普通	にぶい橙	(続)比企型坏 内面+口縁外面赤彩		
10	土師器	坏	117	31	-	EGHIJ	95	良好	橙	(続)比企型坏 不明瞭だが内面+口縁外面赤彩と思われる 底部外面木葉痕・黒斑あり		58-1
11	土師器	皿	(168)	43	-	ACEHI	25	普通	橙	北武蔵型坏(皿)	No.3	
12	土師器	皿	(160)	35	-	ACHI	20	普通	橙	北武蔵型坏(皿)	No.4・15	
13	土師器	皿	(160)	28	-	CEHI	20	普通	橙	北武蔵型坏(皿)	No.3	
14	土師器	皿	(158)	35	-	ACEI	10	普通	橙	北武蔵型坏(皿)	No.5	
15	須恵器	坏	(150)	34	(99)	JK	10	良好	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ	No.6	
16	須恵器	坏	(106)	35	-	IJK	15	良好	灰	南比企産 底部調整不明瞭		
17	土師器	高坏?	-	59	(50)	AEHJ	25	普通	橙	ミニチュアか? 器種不明確	No.13	
18	土師器	壺	(224)	98	-	EHIJK	15	普通	にぶい橙	在地産 白針多い 無彩	No.17	
19	須恵器	甕	-	-	-	DEIK	破片	普通	灰	南比企産 櫛描波状文2段+沈線区画		
20	須恵器	甕	-	-	-	E	破片	普通	灰	南比企産か 外面平行叩き 内面無文当て具		
21	須恵器	甕	-	-	-	EI	破片	普通	灰	丸底甕底部片 南比企産? 外面平行叩き 内面同心円文当て具	No.1	
22	鉄製品	鉄鏃	-	-	-	-	-	-	-	長頸(長三角形)鏃 平造り? 長さ7.1cm 幅最大0.9cm 厚さ最大0.5cm 鏃身長2.4cm 鏃幅最大2.7cm	No.15	58-3

第29表 第33・43号住居跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(103)	33	-	A E H I	10	普通	橙	(続)比企型坏 内面+口縁外面赤彩		
2	土師器	坏	(120)	30	-	H I J	20	普通	橙	(続)比企型坏 内面+口縁外面赤彩		
3	土師器	坏	(116)	26	-	C H I	10	普通	橙	北武蔵型暗文坏		
4	土師器	坏	122	35	-	A C H I	50	普通	橙	北武蔵型坏		58-4
5	土師器	坏	(120)	34	-	E H I	30	良好	橙	北武蔵の土と思われる 無黒斑土器か 角閃石高温で消滅か		
6	土師器	坏	(127)	34	-	C H I	15	普通	にぶい黄橙	北武蔵型坏		
7	土師器	坏	(127)	32	-	A C E H I J	10	普通	橙	在地産 白針含む 無彩		
8	土師器	皿	(154)	37	-	A C E H I	20	良好	にぶい橙	北武蔵型坏(皿) 高温焼成により角閃石消失か		
9	土師器	鉢か	(173)	40	-	C E I	20	普通	にぶい橙	北武蔵型		
10	土師器	甕	240	38.1	(78)	A B C E H I	75	普通	橙	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ 底部木葉痕 緑泥片岩? 入る		58-2
11	土師器	甕	(200)	7.0	-	G H I	10	良好	橙	北武蔵の土?		
12	土師器	甕	(220)	12.3	-	C H I	20	普通	橙	武蔵型甕		
13	土師器	壺	(204)	11.5	-	A C E H I J L	20	普通	にぶい黄橙	在地産壺 白針含む 無彩		
14	須恵器	蓋	-	12	-	E I J K L	90	普通	灰白	南比企産 環状つまみ(径5.0cm)		
15	須恵器	蓋	(160)	11	-	I J K	10	普通	灰	南比企産		
16	須恵器	坏	(136)	37	-	E I J L	15	普通	灰	南比企産 体部下端に強い稜有り 内面降灰		
17	須恵器	坏	(151)	32	-	E I J	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ		
18	須恵器	高台付坏	-	21	(88)	I K	25	良好	灰	産地不明(在地系) 底部突出 回転ヘラケズリ		
19	土師器	壺	-	18	4.3	E G H I K	50	普通	橙	外面ヘラケズリ 内面ナデ 底部木葉痕		
20	鉄製品	板状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ45cm 幅2.4cm 厚さ0.2cm		58-5

(続)比企型坏である。内面と口縁部外面赤彩。
10は底部外面中心部付近に木葉痕を僅かに残し、
伝統的な比企型坏の製作手法を継承している。11

～14は北武蔵型皿である。15は南比企産の坏。大
きさはやや不安定であるが、15cm前後にはなると
推定される。口唇部に沈線が2条巡る。底部は回

転ヘラケズリ調整。16は坏Gか。底部を欠く。南比企産である。22は長三角形鏃と思われる。

第113図は第33・43号住居跡から出土し、帰属を明らかにできない遺物である。基本的な組成は第33号住居跡と同じである。1・2は(続)比企型坏である。3は北武蔵型暗文坏、4～6は北武蔵型坏である。7は白色針状物質が含まれ、比企型の胎土に近い。無彩である。8・9は北武蔵型皿か。10は鬼高系の長胴甕である。器壁は厚い。緑泥片岩を含む胎土で、白色針状物質は入らない。槻川流域の土であろうか。12は武蔵型甕である。胴部器壁は薄く削り込まれる。14・15は南比企産の須恵器蓋。16・17は南比企産の須恵器坏。16は強く腰が張る。18は高台付坏。高台は底部外縁に付く。底部は突出気味となろうか。在地系と思われるが、白色針状物質は確認できない。

遺物の時期は大型の須恵器坏類が多出せずに、小型の坏Gと坏Aを含むこと、鬼高系の甕を残すことなどから重複する第9号住居跡よりも古い様相が認められる。本書Ⅵ期～Ⅶ期(古)、7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられよう。

第34号住居跡(欠番)

第35号住居跡(第114図)

第35号住居跡はZK-21・22グリッドに位置する。住居跡南側は調査区外に延びている。第20・21・26・48号住居跡、第4号掘立柱建物跡、ZK-21グリッドP4等多数の遺構と重複しており、遺存状態はあまり良くない。第20・21・26号住居跡、第4号掘立柱建物跡、ZK-21グリッドP4に切られ、第48号住居跡を切っていた。

平面形は歪んだ方形と考えられ、残存規模は長軸長5.75m、短軸長5.43m、深さ0.12～0.18mである。主軸方位はN-47°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。カマドは北西壁に設けられていた。燃烧部は壁を切り込んで構築され、全長1.06m、袖部外幅1.38mである。燃烧部幅は0.65m、側壁は弱く被熱していた。煙道部は遺存しな

い。袖部は明褐色土で構築され、焼土を含んでいた。

貯蔵穴、柱穴、壁溝等の付属施設は検出されなかった。ZK-21グリッドP4は確認段階で検出されており、遺構に伴うものではない。

遺物は、カマドに向かって住居跡右側に集中して出土した。出土位置は床面から覆土にかけて満遍なく分布していた。

土師器坏と甕・壺・甑がある(第115図)。1～5は(続)比企型坏である。口唇部内面に沈線、内面と口縁部外面に赤彩が施される。5は赤彩の有無が不明瞭であるが、形態や胎土から比企型と考えてよい。底部外面中心部付近に木葉痕と思われる痕跡がある。6・7は比企型の壺である。赤彩痕跡が確認できる。8は甑で、礫を多く含む。内面ナデの後、縦方向のヘラミガキ調整。9は壺で、6と同一個体の可能性がある。

遺物の時期は丸椀タイプの続比企型坏が含まれること(1・2)、須恵器坏類が出土していないこと等から本書Ⅵ期、7世紀末葉を中心とした時期と推定しておきたい。

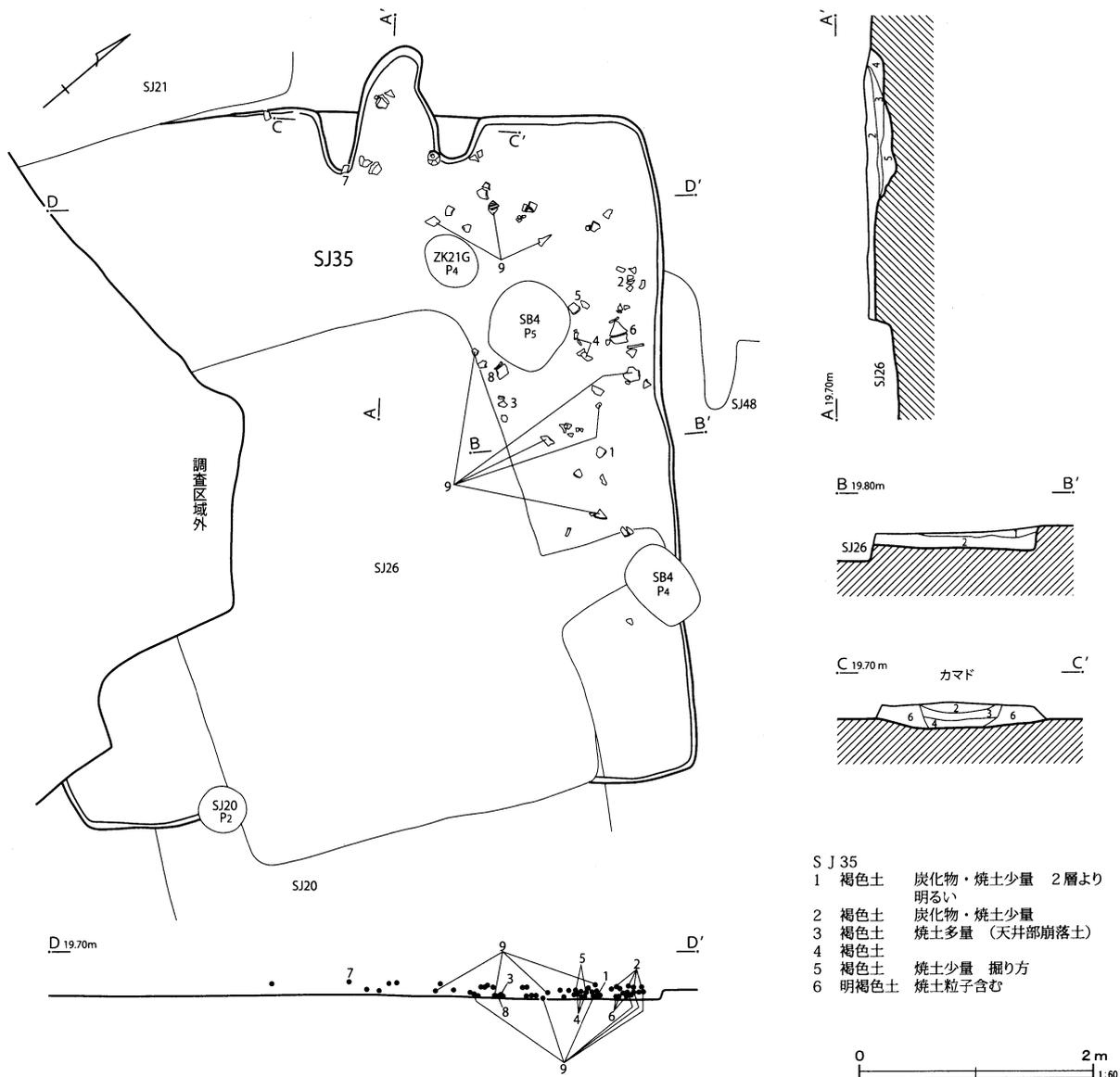
第36号住居跡(第116図)

第36号住居跡はZM-15・16グリッドに位置する。住居跡東隅は攪乱を受けている。第40号住居跡、第29号土壙、第5号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は第40号住居跡よりも新しく、第29号土壙、第5号掘立柱建物跡よりも古いことが判明した。

平面形は横長の台形で、残存規模は長軸長4.13m、短軸長3.40m、深さ0.10mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面からピット周辺にかけての床面は硬化していた。

カマドは北壁に設けられ、燃烧部は壁を切り込んで構築されていた。規模は全長0.78m、袖部外幅0.93mである。煙道部は削平され遺存していなかった。燃烧部底面は皿状に浅く窪み、両袖部に



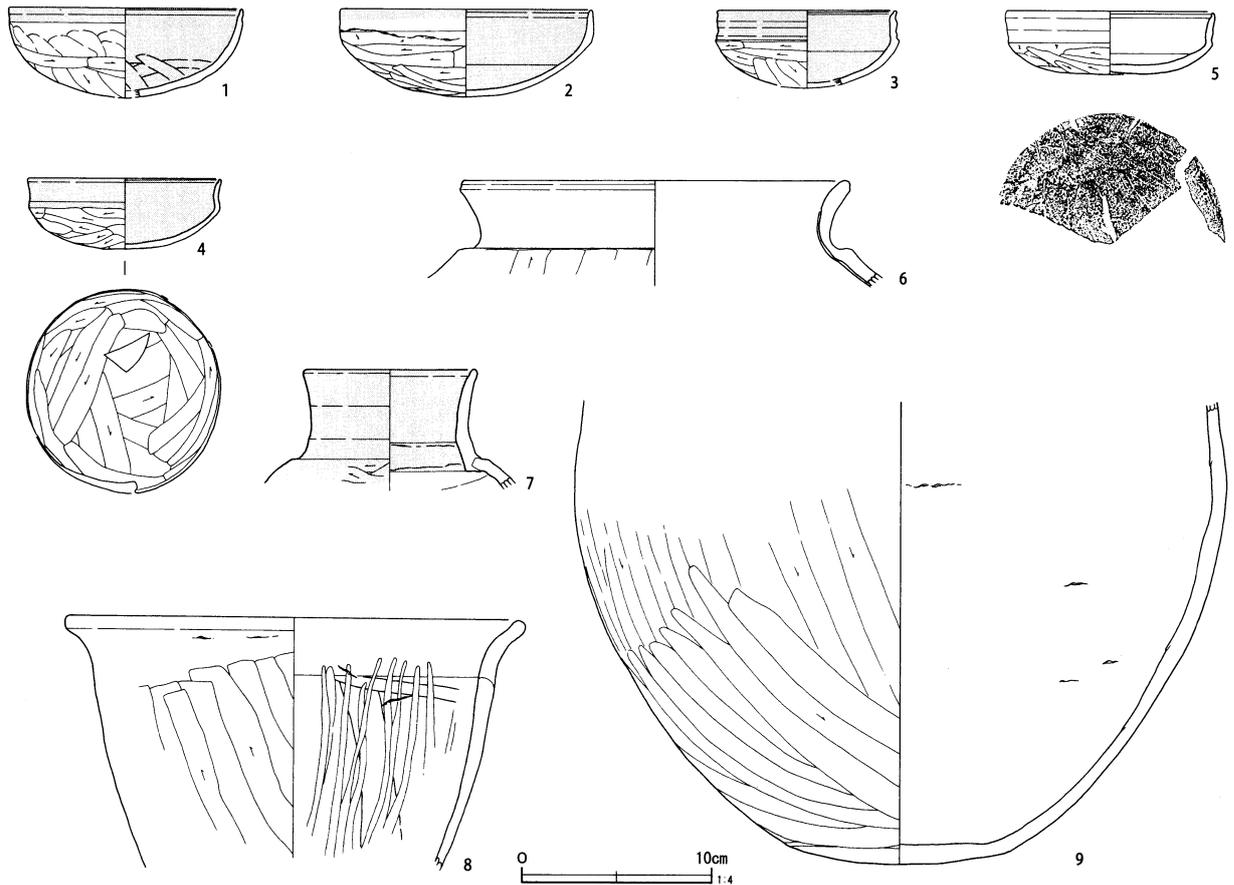
第114図 第35号住居跡

第30表 第35号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(122)	4.7	-	EGHI	40	普通	橙	(続) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	No.8	
2	土師器	坏	13.1	4.6	-	HIL	70	普通	にぶい橙	(続) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	No.24	58-6
3	土師器	坏	(92)	4.0	-	CGHIJ	20	普通	橙	(続) 比企型坏 白針含む 内面+口縁外面赤彩	No.12	
4	土師器	坏	10.1	3.7	-	EHIJKL	90	普通	橙	(続) 比企型坏 白針含む 内面+口縁外面赤彩	No.17・18	58-7
5	土師器	坏	(108)	3.3	-	GHIJL	40	良好	橙	(続) 比企型坏 白針含む 赤彩不明瞭 底部木葉痕	No.19	
6	土師器	壺	(200)	5.6	-	EHIJL	20	普通	橙	比企型壺 白針含む 器面剥落するが口縁部に赤彩痕残る	No.23	
7	土師器	壺	(90)	6.4	-	EHIK	20	普通	橙	比企型 白針なし 外面+口縁内面赤彩	No.38	
8	土師器	甑	(234)	13.2	-	CEGHIL	10	普通	橙	礫多 内面ヘラミガキ(タテ)	No.13	
9	土師器	壺	-	24.2	11.7	EHIJL	25	普通	橙	器面剥離 No.6と同一か No.3・10・15・16・20・27・30・33		

は底部を欠いた土師器甕が逆位に据えられていた。袖の芯材として使用されたと考えられる。また、焚口部付近からは土師器甕3個体がソケット

状に連結した状態で出土した。カマド焚口天井部の架構材として使用されたと考えられる。第3層が天井部崩落土、第4層が灰層で厚く堆積してい



第115図 第35号住居跡出土遺物

た。袖部は褐色土で構築されていた（第5層）。

ピットは1本検出されたが、直接遺構に伴うものではない。

壁溝は深さ10cmほどで、カマド部分以外を全周すると推定される。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、カマドとその周辺から出土した。土師器杯・甕・台付甕、須恵器杯、鉄製品、石製品がある（第117図）。

1は北武蔵型杯である。やや扁平化した丸底形態で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。2は北武蔵型暗文杯。内面に放射暗文が施文される。3は須恵器杯G。小片のため口径は不安定である。底部回転ヘラケズリ調整。南比企産である。4・5は土師器台付甕で、同一個体かもしれない。6～8は土師器長甕で、焚き口天井部の架構材として使用された。カマドに向かって左から7・6・8の順にソケット状に挿し込まれていた。6・8は

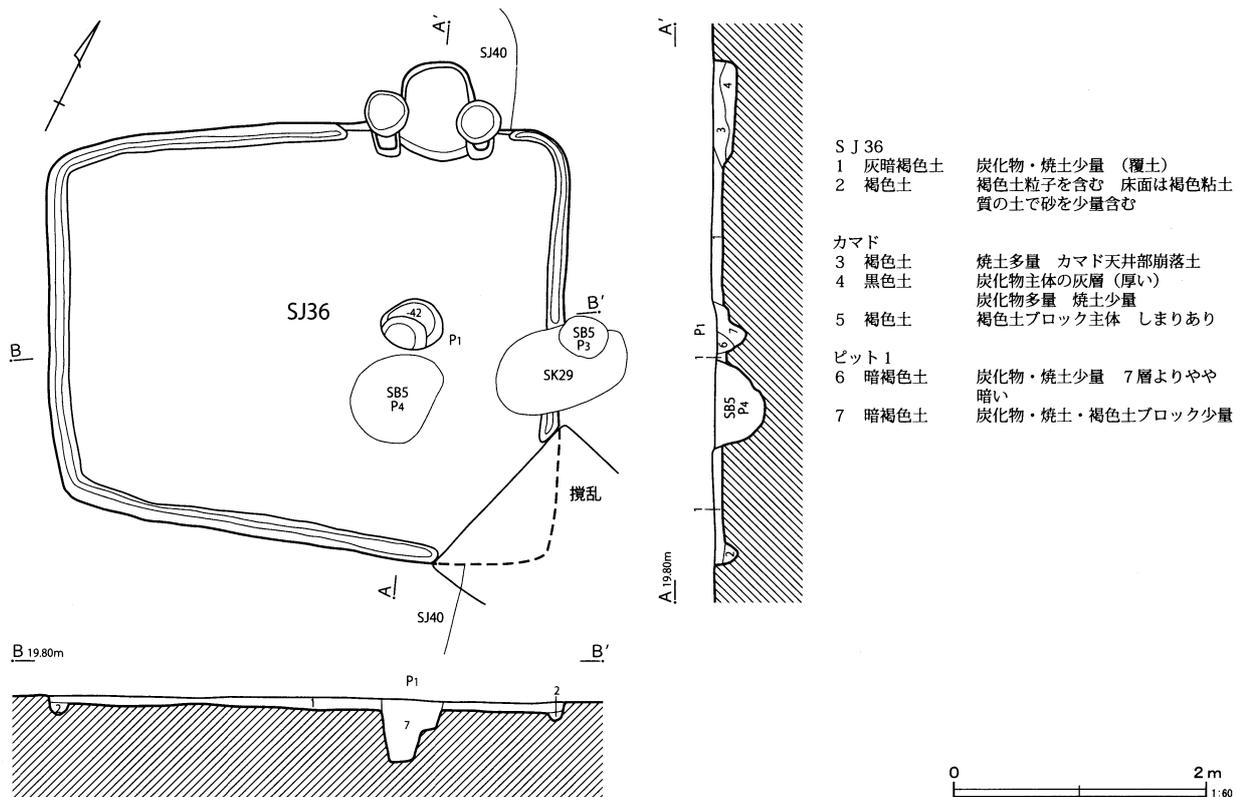
片岩が多量に含まれていた。9はカマド左袖、10はカマド右袖出土。9は武蔵型甕のプロトタイプ、北武蔵の土である。10は片岩が多量に含まれ、6・8とともに槻川流域の土で製作された可能性がある。11は角閃石安山岩製の磨石か。12は鉄製の折頭釘。断面は方形である。

遺物の時期は鬼高系の長甕が主体となり、杯Gを含むこと等から、本書VI期、7世紀後半～末葉頃と推定される。

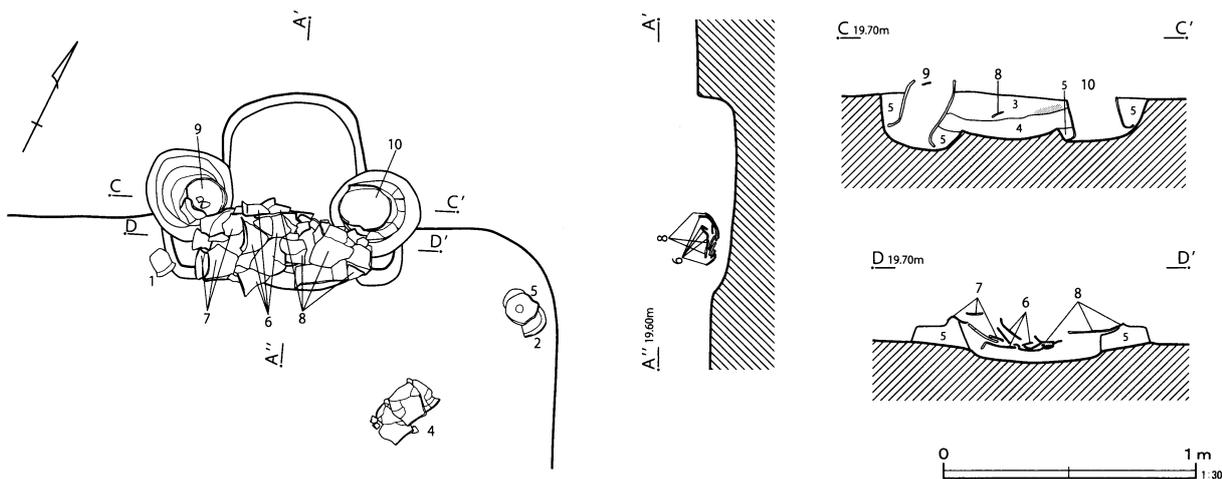
第37号住居跡（第118図）

第37号住居跡はZM-16グリッドに位置する。住居跡南東部のほぼ半分は調査区外に延びている。また、住居跡中央付近は攪乱を受け遺存状態は悪い。第40号住居跡、ZM-16グリッドP6・P7と重複し、第40号住居跡を切り、ZM-16グリッドのピット2本に切られていた。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長



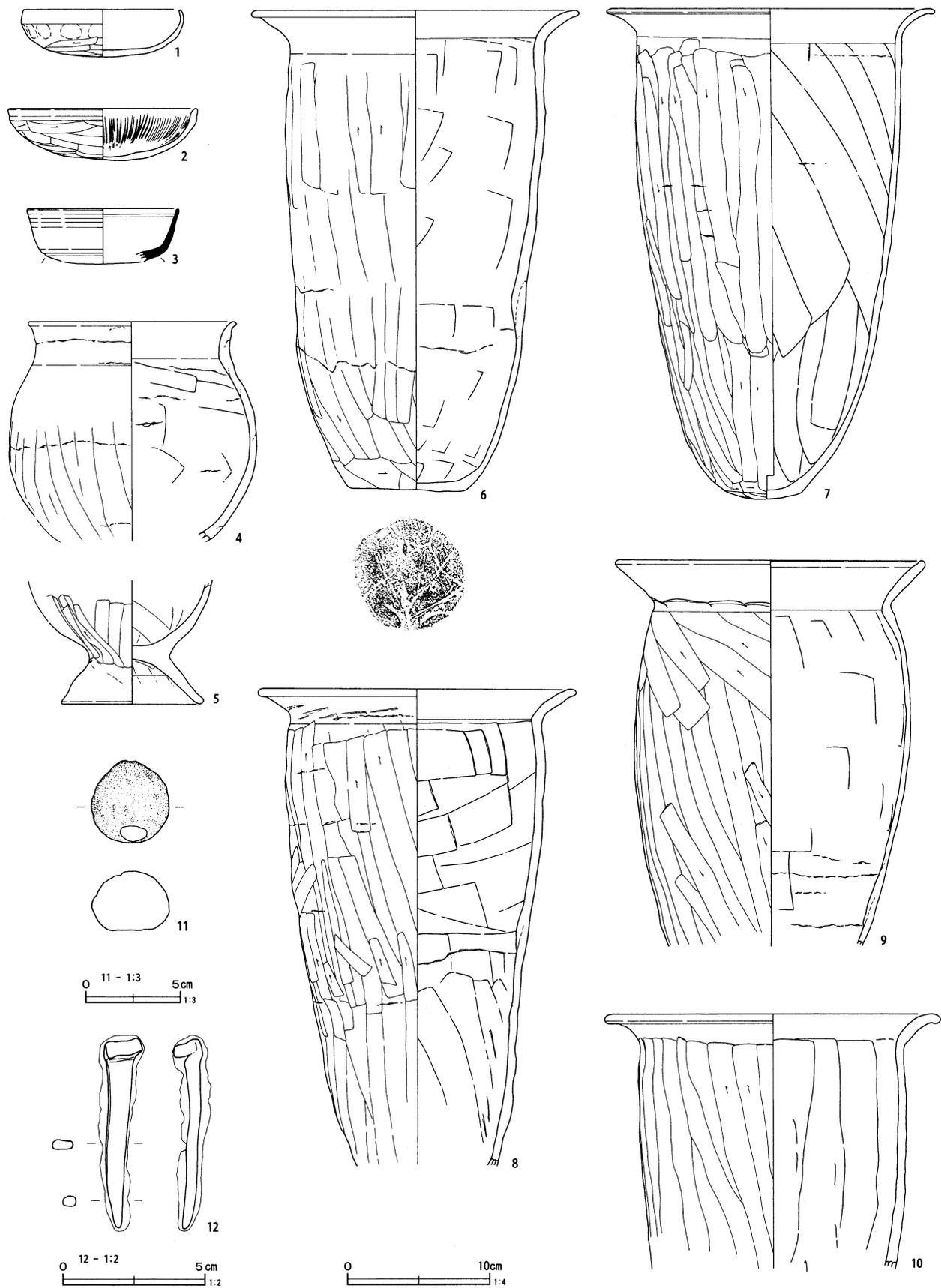
カマド



第116図 第36号住居跡・カマド

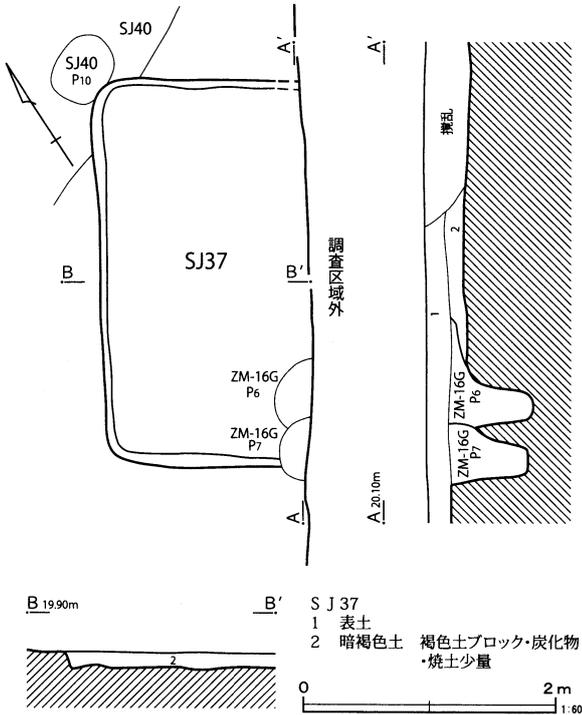
第31表 第36号住居跡出土遺物観察表 (第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(110)	33	-	CEFIK	40	普通	橙	北武蔵型坏 風化 No.3		
2	土師器	坏	132	37	-	CEFH IK	60	不良	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 中心部摩耗 No.2		58-8
3	須恵器	坏	(104)	37	-	I J	5	良好	灰	南比企産 坏G 口径不安定 内面沈線 底部回転ヘラケズリ		
4	土師器	小型甕	144	155	-	ADHI	80	不良	灰黄褐	台付甕か 外面二次被熱 調整不明瞭 No.4		59-1
5	土師器	台付甕	-	87	95	ABDEL	80	普通	明赤褐	片岩多 外面二次被熱 No.1		59-2
6	土師器	甕	224	342	79	ABDGHIL	90	普通	橙	片岩多量 底部木葉痕 カマドNo.2		59-4
7	土師器	甕	223	346	55	CEGHI	95	普通	にぶい橙	赤粒多量 外面黒斑 カマドNo.1・2		59-5
8	土師器	甕	216	340	-	ABCEHIK	80	普通	橙	雲母(片岩)多 カマドNo.2・3 カマド右袖		59-3
9	土師器	甕	214	273	-	ACDGIK	80	普通	にぶい黄橙	武蔵型甕 カマドNo.4		60-1



第117图 第36号住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
10	土師器	甕	235	182	-	ABDHIKL	80	普通	ぶい橙	絹雲母片岩または緑泥片岩多 D№5	ケズリ弱くヘラナデ風 カマ	60-2
11	石製品	磨石か?	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.3cm 幅4.1cm 厚さ3.1cm 重量30.9g	角閃石安山岩製	60-4
12	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-	長さ6.7cm 最大幅1.3cm 最大厚0.5cm		60-3



第118図 第37号住居跡

3.09m、短軸長1.67m、深さ0.13mである。主軸方位はN-33° - Eを指す。

床面は緩やかな起伏がある。

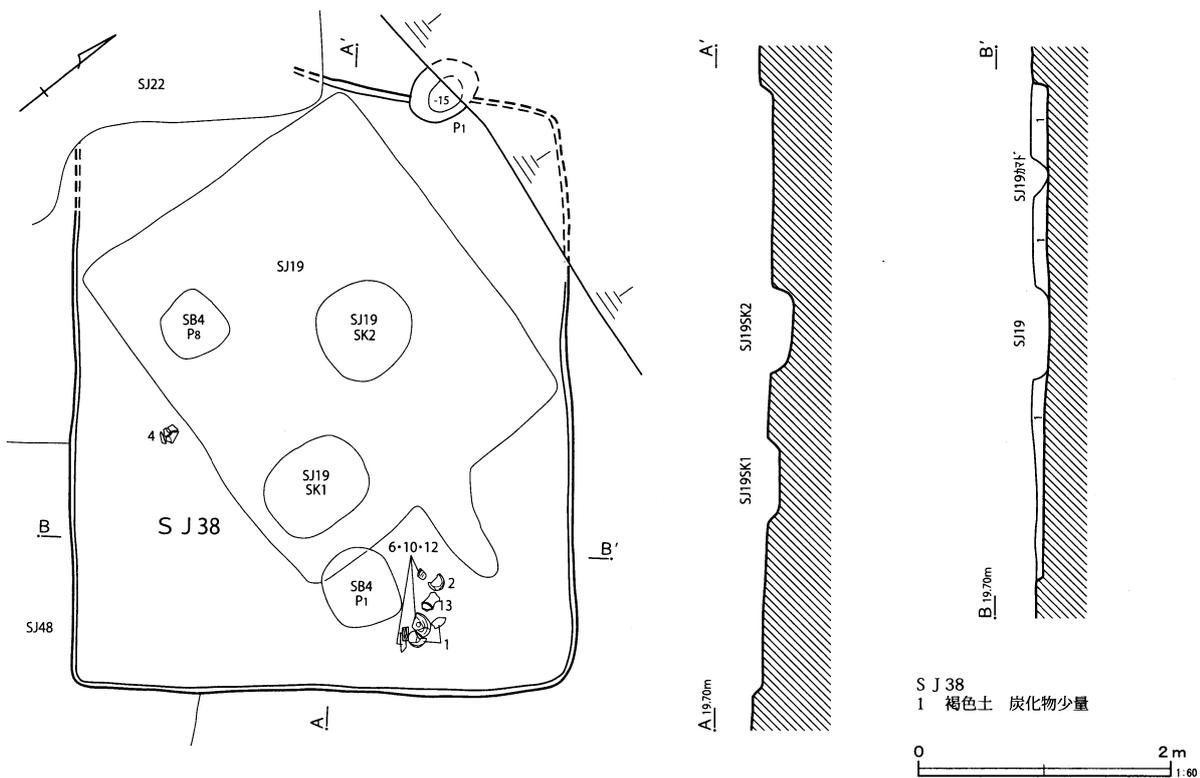
カマド、貯蔵穴、柱、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は検出されなかった。時期は第40号住居跡との関係から8世紀初頭以降という限定しかできない。

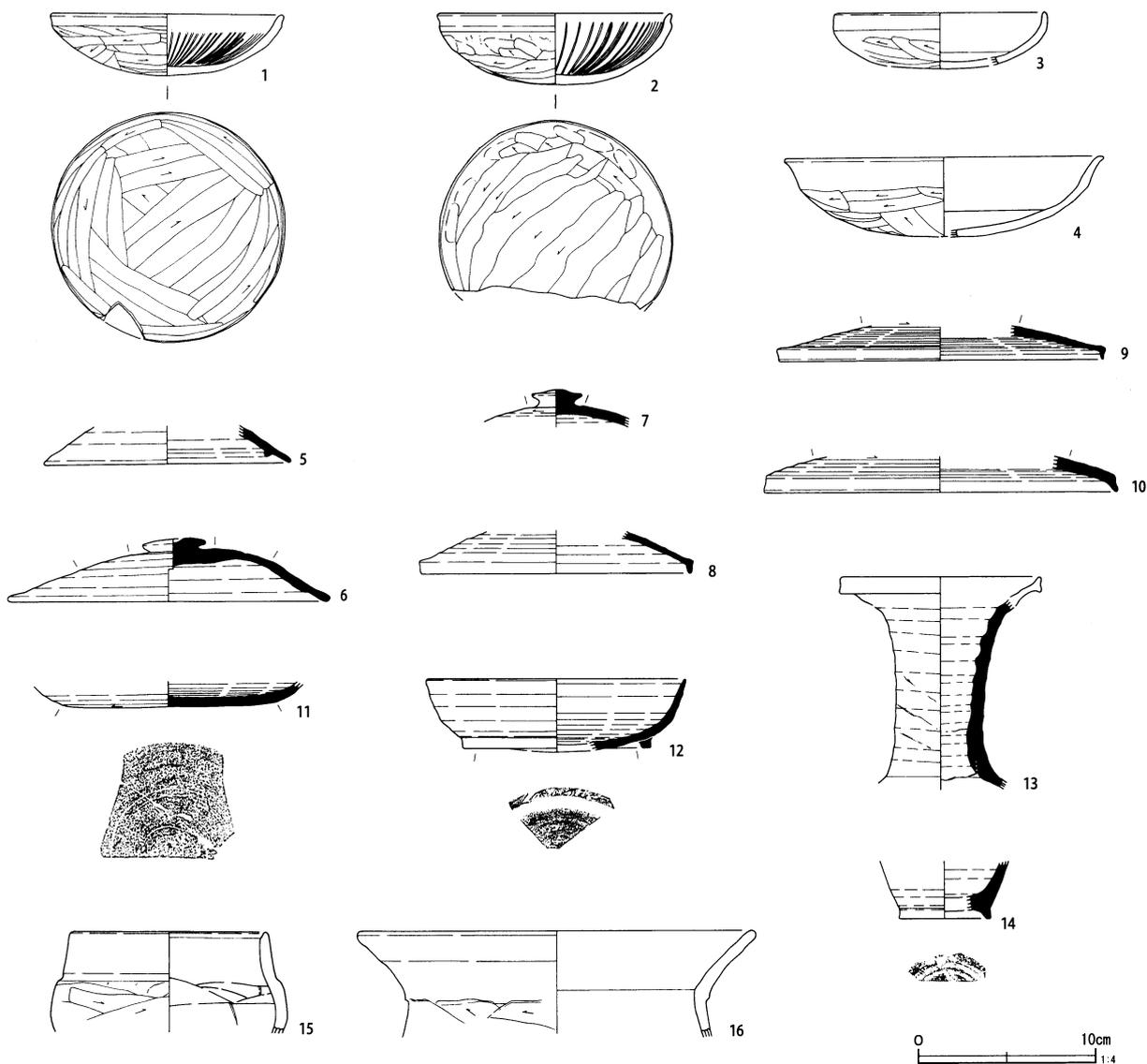
第38号住居跡 (第119図)

第38号住居跡はZJ・ZK-22グリッドに位置する。堆積土の変化が少ないうえに遺構の重複が激しく、確認は困難を極めた。住居跡北隅は谷状地形で削平されていた。重複する第19・22号住居跡、第4号掘立柱建物跡に切られ、第48号住居跡を切っていた。

平面形は縦長の長方形と考えられ、残存規模は



第119図 第38号住居跡



第120図 第38号住居跡出土遺物

第32表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版	
1	土師器	坏	130	35	-	ACEHI	95	良好	明赤褐	北武蔵型暗文坏	内面放射暗文 口唇部風化	No.3	60-5
2	土師器	坏	130	40	-	CHI	80	良好	橙	北武蔵型暗文坏	内面放射暗文	No.5	60-6
3	土師器	坏	(116)	30	-	CEHI	15	普通	橙	北武蔵型坏			
4	土師器	皿	(176)	45	-	ACEHI	35	普通	橙	北武蔵型坏(皿)		No.6	60-7
5	須恵器	蓋	(137)	21	-	BEI	5	普通	灰	末野産			
6	須恵器	蓋	(176)	36	-	IJK	70	普通	灰	南比企産 「かえり蓋」	つまみ径3.6cm 歪みあり	No.1	60-8
7	須恵器	蓋	-	21	-	EIJ	25	普通	灰	南比企産			
8	須恵器	蓋	(150)	29	-	IK	10	良好	灰白	湖西産	天井部自然釉	SJ-19と接合	
9	須恵器	蓋	(184)	19	-	CHIJK	15	普通	灰白	南比企産			
10	須恵器	蓋	(198)	20	-	EIJK	20	普通	灰	南比企産	器肉厚い	No.1	
11	須恵器	坏	-	14	(120)	EHIK	25	普通	灰	在地産(末野?)	外面回転ヘラケズリ 内面「のた目」		
12	須恵器	高台付坏	(145)	40	(106)	HIK	20	普通	灰白	湖西産	底部突出 回転ヘラケズリ	No.1	
13	須恵器	長頸瓶	-	10.7	-	IK	90	良好	灰	東海産(湖西産か)	ロクロ目きつい	No.4	61-1
14	須恵器	長頸瓶か	-	32	(52)	EIJ	30	普通	灰	南比企産	小型の長頸壺と思われる		
15	土師器	鉢	(109)	5.7	-	CHIK	20	普通	赤褐	胴部外面ヘラケズリ	内面ヘラナデ		
16	土師器	甕	(220)	6.0	-	ACEHIK	15	良好	橙	武蔵型甕			

長軸長4.87m、短軸長4.00m、深さ0.05～0.12mである。主軸方位はN-50°-Wを指す。

床面は平坦で、住居跡東側の床面に薄い炭化物層が検出された。カマド、貯蔵穴、壁溝等は検出されず、積極的に住居跡とする根拠に乏しいことは否めない。北西壁に掛かってピットが1基検出されたが、遺構に伴うものではない。

遺物は、住居跡東隅付近からまとまって出土した。土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・長頸瓶がある（第120図）。

1・2は土師器北武蔵型暗文杯。内面に放射暗文が施される。遺存度は高い。3は弱い丸底形態の北武蔵型杯。4は北武蔵型皿である。

5は末野産のかえり蓋。中・小型の杯Aとセットとなろうか。6・9・10は南比企産の蓋。6は南比企産の須恵器かえり蓋である。かえりは口縁部を強く摘むことにより、つくり出している。8は湖西産の蓋。重複する第19号住居跡の遺物と接合している。11は大型の無台杯。内面に同心円状の細かい口縁目が付く。末野産か。12は湖西産の高台付杯である。底部中央は高台よりも突出気味となる。13は東海産、おそらく湖西産の長頸瓶口縁部片である。14は小型の長頸壺か。器種不明

確。底部調整もよくわからない。

遺物の時期は本書Ⅵ期～Ⅶ期（古）で、8世紀初頭を前後する時期と思われる。重複遺構、特に第19・22号住居跡との時間差は少なく、近接時期の中での建て替えを想定せざるを得ない。

第39号住居跡（第121図）

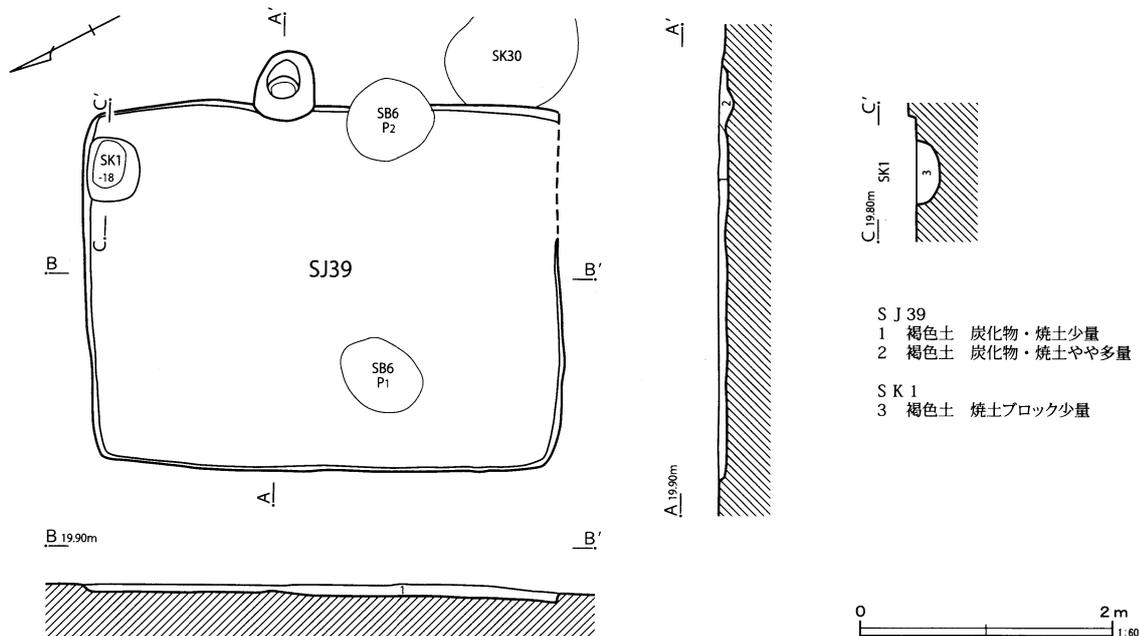
第39号住居跡はZM・ZN-15グリッドに位置する。重複する第30号土壇を切り、第6号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.73m、短軸長2.96m、深さ0.10mである。主軸方位はN-118°-Eを指す。

確認面が既に掘り方まで達していたために、明確な床面は検出できなかった。カマドは南東壁のほぼ中央に設けられていた。袖部、煙道部は削平され、燃焼部掘り方のみが残存していた。規模は長径0.54m、短径0.48mである。燃焼部は壁を切り込んで構築され、大部分は壁外にある。底面は皿状に窪んでいた。火床面は確認できなかった。

土壇は1基検出された。隅丸長方形で、規模は長径51cm、短径40cm、深さ18cmである。壁内に収まるが、帰属は不明確である。

貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。



第121図 第39号住居跡

時期は、第30号土壙との関係から8世紀初頭以降である。カマド構造からみて9世紀以降の可能性があるが、詳細は不明とせざるを得ない。

第40号住居跡（第122図）

第40号住居跡はZM-15・16グリッドに位置する。住居跡北西コーナー部は調査区外に延びる。第36・37・45号住居跡と重複し、第36・37号住居跡に切られ、第45号住居跡を切っていた。

平面形は方形で、残存規模は長軸長5.50m、短軸長5.47m、深さ0.09mである。主軸方位はN-23°-Wを指す。

床面は平坦である。埋土は褐色土を基調としていたが、堆積状況は不明確であった。

カマドは北壁に設けられていた。先端は調査区外に延びており、不明である。また、右袖部はピットの削平を受けており、全体像は不明である。全長は1.20m、袖部の外幅1.32mである。燃烧部幅は推定で0.60m前後と思われる。第3層が天井部崩落土で、焼土ブロックと粘土ブロックが多量に含まれていた。燃烧部底面は皿状に窪み、火床面は部分的に被熱していた。袖は焼土混じりの明褐色土で構築されていた。

貯蔵穴は、住居跡北東隅に位置する。隅丸長方形で、規模は長径73cm、短径50cm、深さ40cmである。内部から土師器坏が1点出土した。

ピットは、11本検出された。主柱穴はP1~P4のセットとP1・P2・P5・P6の4本セットが想定され、建て替えられたと推定される。柱間距離はP1-P2間は2.85m、P3-P4間は2.40m、P1-P4間は2.40m、P2-P3間は2.82mである。また、P5-P6間は3.03m、P1-P6間は2.91m、P2-P5間は3.33mである。P2には柱痕下に柱材の一部が、P5には柱痕が残っていた。

壁溝は幅9~15cm、深さ6cmほどで、住居跡北西壁から北壁にかけてL字状に巡っていた。

出土遺物は少ない。土師器坏・台付甕、須恵器坏・高台付坏がある（第123図）。

1は丸底の北武蔵型暗文坏である。内面に放射暗文が施文される。2は北武蔵の胎土と思われる。口縁部内面が摩耗しているが、北武蔵型暗文坏または同系無文坏の可能性はある。3は北武蔵型暗文皿。内面は放射暗文が施文されている。4はカマドから出土した須恵器高台付坏。南比企産である。口唇部内面に沈線、底部は回転ヘラケズリ調整される。5は口径15.8cmを測る大型の無文坏。口唇部外面沈線状のくぼみが巡る。南比企産。6~8も須恵器無台坏。6は混入か。7はやや小型の坏。8は大型坏である。8の底部は静止糸切り後回転ヘラケズリ調整されている。

5・8は山下6号窯段階と思われる。北武蔵型暗文坏（皿）と須恵器高台付坏も同段階とみて齟齬はないと思われる。本書Ⅶ期（古）相当の土器群と考えておきたい。

第41号住居跡（第124図）

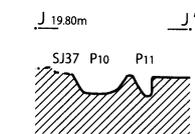
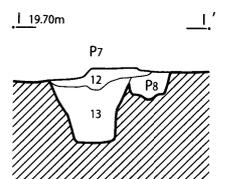
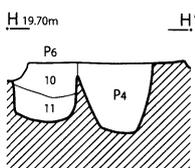
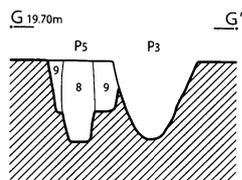
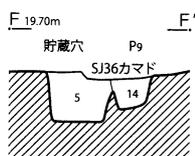
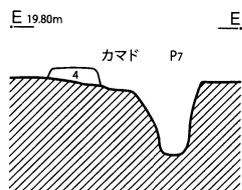
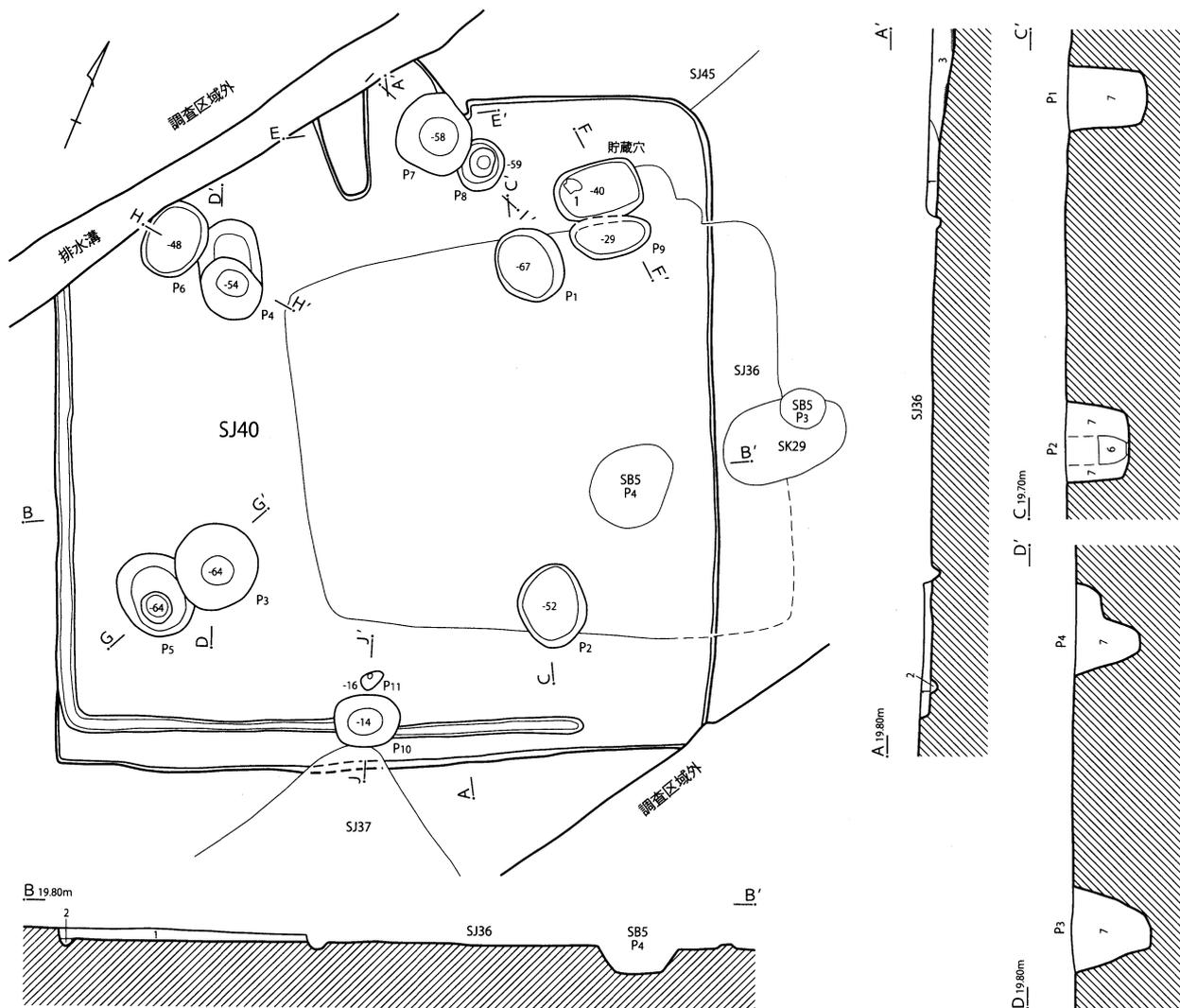
第41号住居跡はZI-14グリッドに位置する。住居跡北西側は調査区外に延びている。第7・32号住居跡、第2号掘立柱建物跡、第25号土壙と重複し、第32号住居跡よりも新しく、他の遺構よりも古いことが判明した。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.55m、短軸長3.31m、深さ0.42mである。主軸方位はN-14°-Eを指す。

床面は平坦である。埋土は焼土・粘土粒子を含む暗茶褐色土を基調に構成され、大きく上下2層に分層された。

カマドは北壁に設けられていた。カマドは燃烧部と右袖部が一部残存するのみで、煙道部の状況は不明である。残存規模は袖部の長さ1.00m、幅0.38~0.47mである。燃烧部底面は灰層が形成され、埋土は焼土ブロック混じりの天井部崩落土が堆積していた。袖部は焼土混じりの褐色土を積み上げて構築されていた。

ピットは3本検出されたが、柱痕が観察されたものはなく、規則的な配置も認められない。貯蔵



S J 40
 1 褐色土 炭化物・焼土少量含む
 2 褐色土

カマド
 3 褐色土 炭化物・焼土・粘土ブロック多量
 4 明褐色土 焼土ブロック含む

貯蔵穴
 5 暗褐色土 炭化物少量

ピット1～4
 6 灰色粘土
 7 灰褐色土 褐色土・炭化物少量 掘り方

ピット5
 8 暗褐色土 炭化物・褐色土少量 柱痕
 9 褐色土 炭化物少量

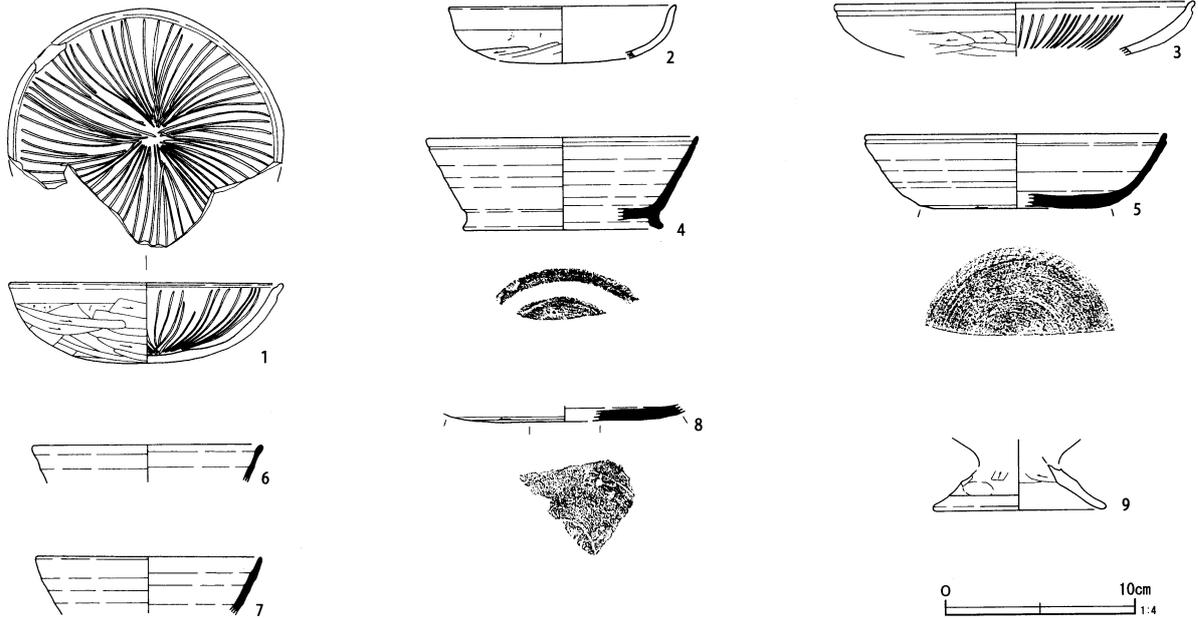
ピット6
 10 灰褐色土 炭化物・焼土少量
 11 灰褐色土 褐色土多量 炭化物少量 底面に炭化物層堆積

ピット7
 12 暗褐色土 炭化物・焼土少量
 13 灰褐色土 灰色粘土多量 炭化物・焼土少量

ピット9
 14 暗褐色土 炭化物・焼土少量 小礫少量



第122図 第40号住居跡



第123図 第40号住居跡出土遺物

第33表 第40号住居跡出土遺物観察表 (第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	145	42	-	A C H I	70	良好	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	貯蔵穴No.1	61-2
2	土師器	坏	(118)	26	-	C E I K	15	普通	明赤褐	北武蔵の土		
3	土師器	皿	(190)	28	-	C I K	10	普通	明赤褐	北武蔵型暗文皿 内面放射暗文		
4	須恵器	高台付坏	(142)	49	(103)	A E G H I J	20	普通	橙	南比企産 底部回転ヘラケズリ 口縁内外面沈線各1条巡るカマド		
5	須恵器	坏	(158)	39	(102)	E I J K	45	良好	灰	南比企産 白針含む 底部回転ヘラケズリ P1		
6	須恵器	坏	(119)	20	-	I J K	15	普通	灰	南比企産		
7	須恵器	坏	(118)	30	-	I J K	10	良好	灰	南比企産 カマド		
8	須恵器	坏	-	08	(120)	E I J K	20	普通	灰	南比企産 底部静止糸切り後回転ヘラケズリ		
9	土師器	小型台付甕	-	24	(90)	C I K	20	普通	明赤褐	北武蔵の土 台部外面雑なナデ	貯蔵穴	

穴、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少なく、破片が覆土中から出土したのみである。土師器坏、須恵器坏、常滑焼壺がある(第125図)。

1は扁平化した平底風の北武蔵型坏。体部は丸みがある。2は比企型坏。口縁部が「S」字状に屈曲し、赤彩が施される。3～5は南比企産の須恵器坏。底部は回転ヘラケズリされる。6は常滑焼の壺か。赤褐色から紫灰色で、黄褐色の自然釉が被っている。2の比企型坏は6世紀後半頃のもの、6の常滑焼は中世の所産であり、明らかな混入品。1の北武蔵型坏と須恵器坏3～5は本書Ⅷ期(古)を中心とした時期と考えておきたい。

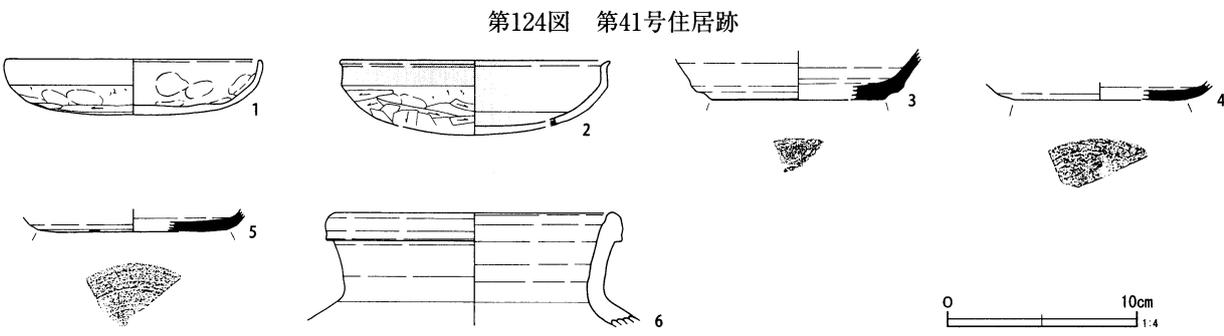
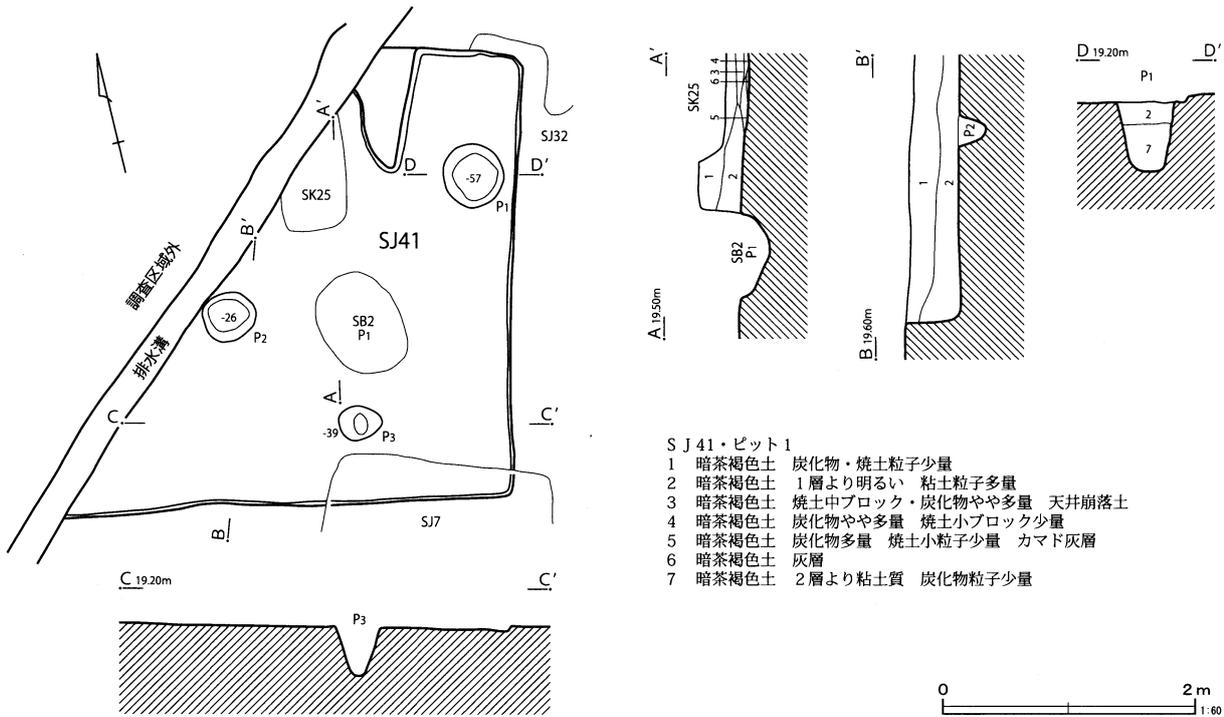
第42号住居跡 (第126図)

第42号住居跡はZK-33・34グリッドに位置する。住居跡南北のコーナー部は調査区外に延びている。

平面形は横長の長方形で、残存規模は長軸長5.58m、短軸長4.11m、深さ0.33mである。主軸方位はN-132°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。床面には薄い炭化物層が形成されていた。埋土は大きく黄灰色土と褐灰色土の上下2層に分かれていた。

カマドは南西壁に設けられていた。燃烧部はほぼ壁内に収まる。規模は全長0.87m、袖部外幅1.08mである。燃烧部内壁幅は0.50mで、底面は僅か



第34表 第41号住居跡出土遺物観察表（第125図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(135)	29	-	ACH I	30	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 内面風化		
2	土師器	坏	(141)	34	-	CG J	30	普通	橙	比企型坏 白針含む 内面+口縁外面赤彩 SJ-32と接合		
3	須恵器	坏?	-	27	(90)	EG H I J	10	普通	灰	器種不明確 南比企産 底部回転ヘラケズリ		
4	須恵器	坏	-	10	(90)	E H I J K	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ		
5	須恵器	坏	-	12	(100)	DE J	15	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ		
6	陶器	壺	(145)	60	-	I	20	良好	赤褐	常滑焼		

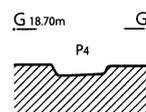
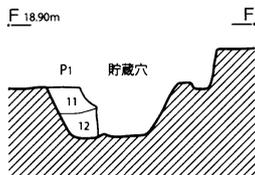
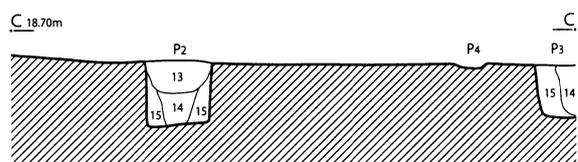
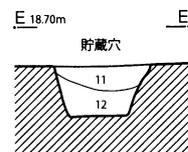
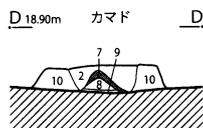
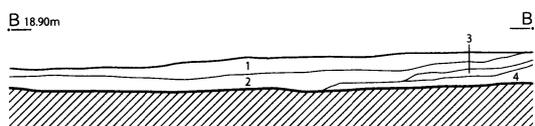
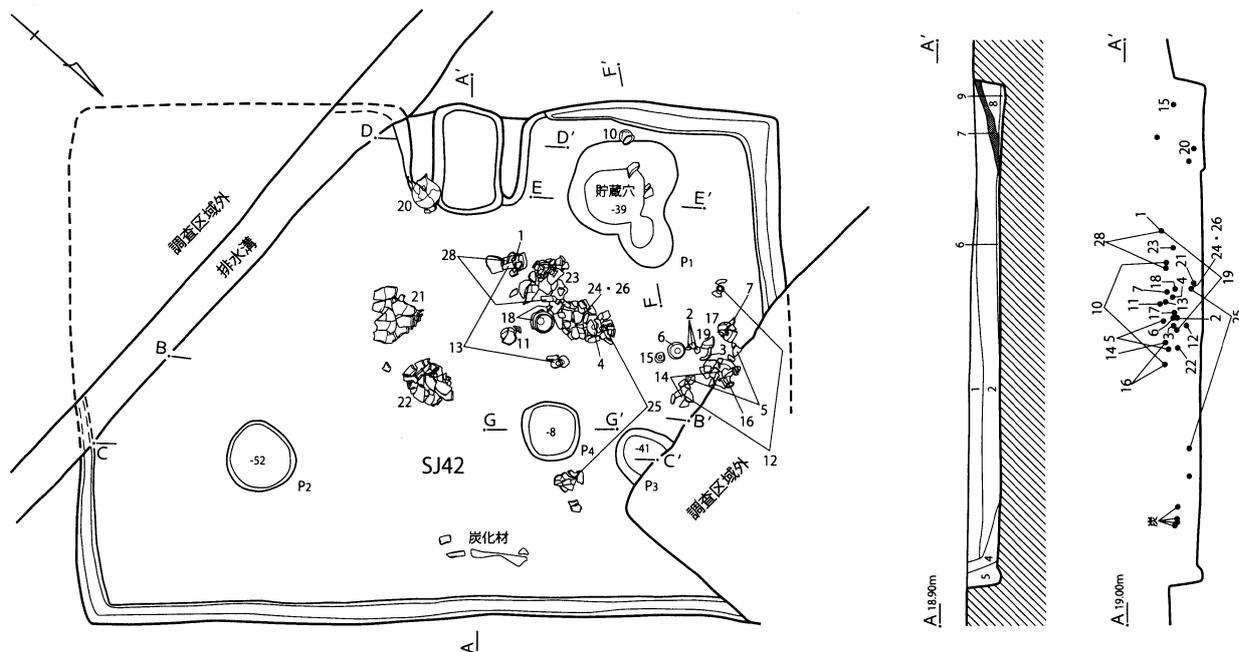
に窪み、薄い灰層が堆積していた。焼土ブロックを多量に含む第6・7層が天井部崩落土である。袖は白色粘土を積み上げて構築されていた。燃焼部側壁と奥壁は弱く被熱していた。

土師器甕1個体が左袖部に寄り掛かるような状態で出土した。壁外に延びる煙道部は検出されなかった。削平されたものか、トンネル状に潜っ

ていたために検出されなかった可能性もある。

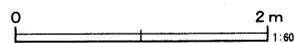
貯蔵穴は、カマドに向かって右脇から1基検出された。ほぼ円形で、規模は長径82cm、短径75cm、深さ39cmである。遺物は、土師器破片が出土した。

ピットは4本検出された。P1～P3は支柱穴と考えられる。柱間距離はP1-P3間は1.80m、P2-P3間は3.03mである。



- S J 42
- 1 黄灰色土 褐灰色砂・黄灰色粘土多量 炭化物 (2~3mm) 少量
 - 2 褐灰色土 黄灰色粘土多量 炭化物 (2~3mm) を全体に含む
 - 3 褐灰色土 炭化物 (5~8mm)・黄灰色粒子多量
 - 4 黄褐色土 黄灰色粘土 (1cm) 多量 炭化物 (5~8mm) 少量 壁崩落土
 - 5 黄褐色土 黄褐色粘土 (1cm) 多量 炭化物 (2~3mm) 少量 褐色砂を若干含む 壁崩落土
 - 6 黒色土 炭化物層
 - 7 赤褐色土 焼土多量 黄褐色粘土ブロック (2~3mm) 少量 天井部崩落土
 - 8 黄褐色粘質土 赤色焼土ブロック・炭化物 (φ1cm) が全体に混じる
 - 9 灰層
 - 10 灰白色粘土 袖

- 貯蔵穴・ビット 1
- 11 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック・炭化物少量
 - 12 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (3~5mm) 少量
- ビット 2・3
- 13 黄灰色土 炭化物少量
 - 14 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (3~5mm) 少量
 - 15 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (5~8mm) 少量 砂混じる



第126図 第42号住居跡

壁溝は幅11~27cm、深さ5cmほどで、カマド部分以外を全周すると推定される。

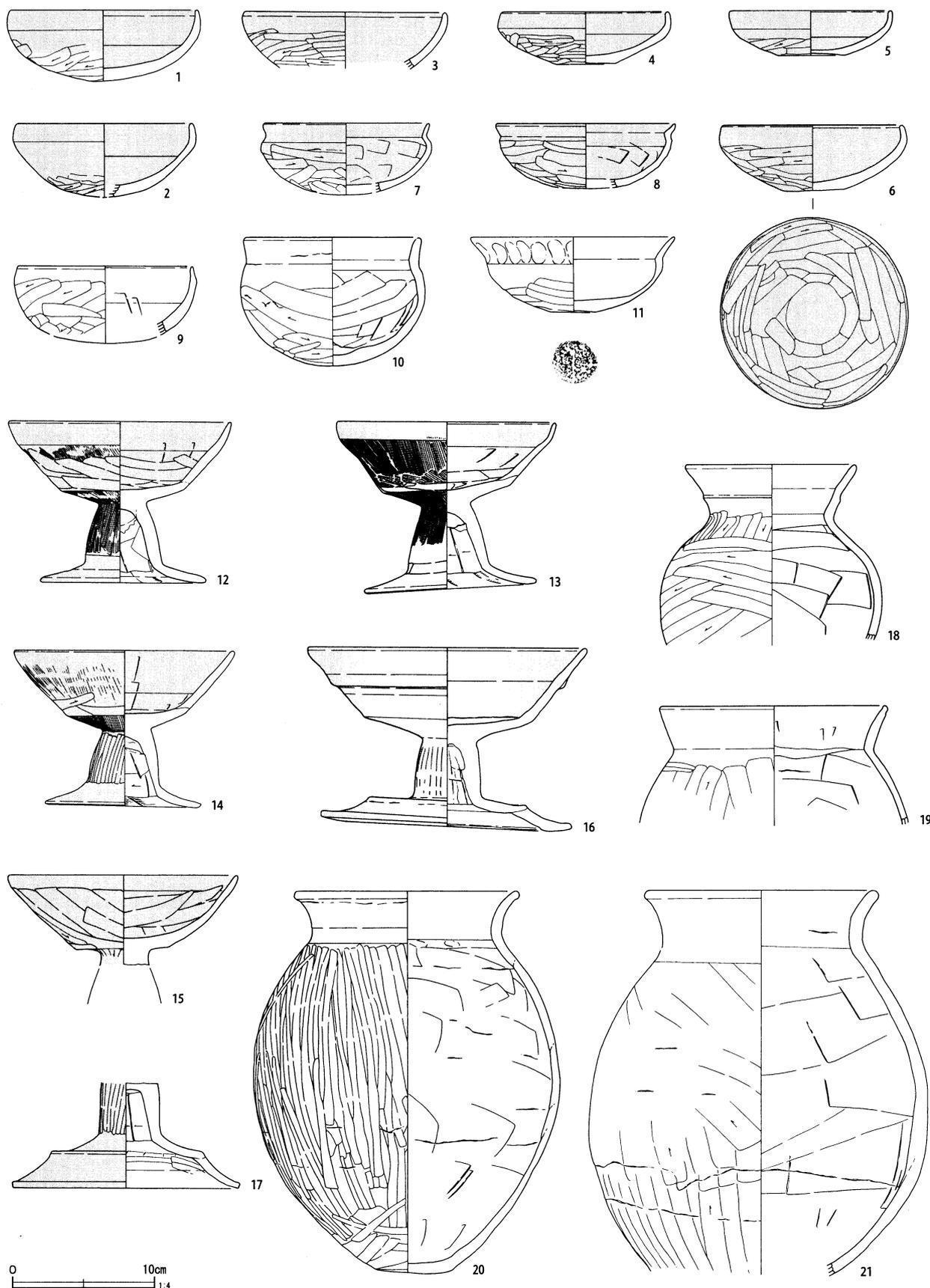
遺物は、多量に出土した。住居跡中央から北側にかけてまとまり、覆土上層から出土した一群と、床面付近から出土した一群がある。また、北東壁際からは炭化材が出土した。

出土土器は土師器・碗・鉢・壺・甕・甑がある (第127・128図)。

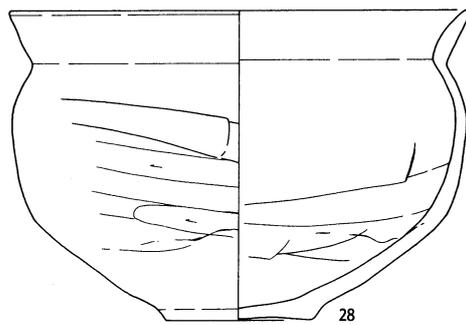
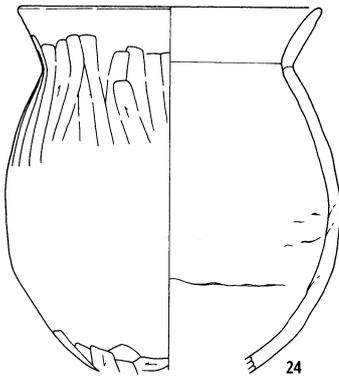
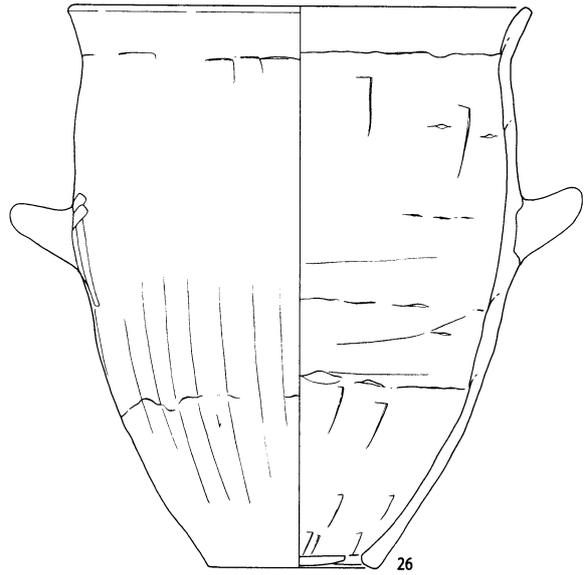
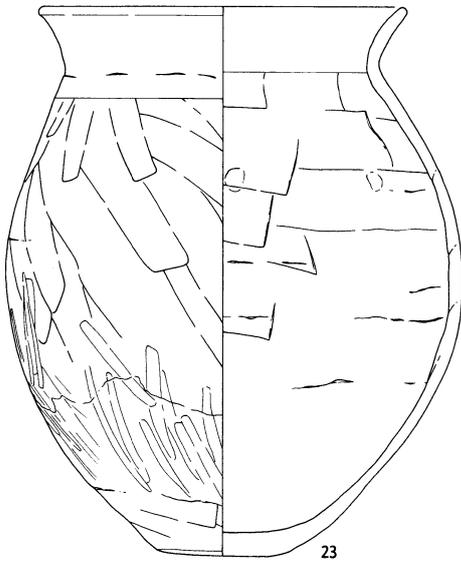
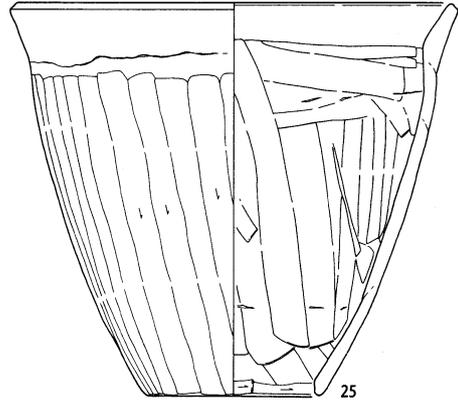
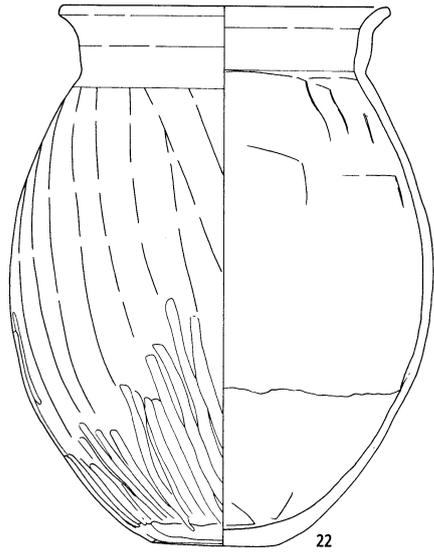
1~8は土師器でいずれも赤彩が施される。

1・2は丸底坏で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。4~6は底部平底のやや扁平な坏で全面赤彩される。底部はナデか。7・8は口縁部が短く外反する丸底坏である。8は口縁部内面が内削ぎ状に外反する。9は器高が深く、丸椀タイプである。赤彩された可能性がある。10・11は鉢である。11は底部平底で木葉痕が残る。

12~17は高坏で、いずれも赤彩されている。小型化・短脚化が進行しているが、1~14は刷毛目



第127図 第42号住居跡出土遺物（1）



第128図 第42号住居跡出土遺物（2）

第35表 第42号住居跡出土遺物観察表 (第127・128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	13.1	50	-	AHK	60	普通	橙	全面赤彩 No21		61-6
2	土師器	坏	(12.3)	51	-	EHI	25	普通	橙	全面赤彩 体部下位ヘラケズリ 白針なし No7		
3	土師器	坏	(14.0)	40	-	HI	40	普通	にぶい橙	赤彩(外面下位不明確だが全面赤彩か) No5		
4	土師器	坏	11.6	37	4.1	A E H I	95	普通	橙	全面赤彩か No16		61-7
5	土師器	坏	(11.6)	32	(5.5)	HI	25	普通	浅黄橙	赤彩 No12・14		
6	土師器	坏	12.7	46	4.2	A E H I	95	普通	にぶい橙	内外面赤彩 体部外面ケズリ 底部ナデ 平底 No8		61-5
7	土師器	坏	(11.6)	47	-	E I J	40	普通	橙	口縁外反 白針含む 内面+口縁~体部上位赤彩 No11		61-3
8	土師器	坏	(12.6)	45	-	C H J K	25	普通	にぶい褐	口縁内削ぎ状 白針多 全面赤彩 比型坏祖型か		61-4
9	土師器	碗	(12.4)	47	-	C E J L	20	普通	明赤褐	白針含む 在地産 赤彩の可能性有り		
10	土師器	鉢	12.2	90	-	B C D E H	95	普通	にぶい黄橙	緑泥片岩?含む 外面黒斑 No1		64-2
11	土師器	鉢	14.4	5.3	3.1	C H I	65	普通	橙	風化著しく調整不明瞭 底部木葉痕か 北武蔵の土か No23		64-1
12	土師器	高坏	15.7	11.4	(11.7)	A E H I J	60	普通	にぶい橙	在地産 白針含む 外面+坏部内面赤彩 No4・15		
13	土師器	高坏	15.3	12.1	12.0	H I J K	80	良好	橙	在地産 白針含む 外面+坏部内面赤彩 外面ハケ目調整 No21・22		62-2
14	土師器	高坏	15.4	11.0	11.0	H J	70	普通	にぶい褐	在地産 白針含む 赤彩(外面+坏部内面) 坏部外面ハケ目 後ヨコナデ 脚部外面粗いヘラミガキ No13		62-1
15	土師器	高坏	16.0	6.3	-	C E G H I J	60	普通	にぶい赤褐	在地産 白針含む 赤彩 坏部ヘラナデ No9		
16	土師器	高坏	19.6	12.5	17.7	A C G I J	80	良好	にぶい橙	在地産 有段高坏 白針含む 外面+坏部内面赤彩 器面剥落し調整不明瞭 No13・15		62-3
17	土師器	高坏	-	7.4	15.8	E H I J L	90	普通	橙	在地産 有段高坏 白針含む 外面赤彩 脚部ヘラナデ No10		
18	土師器	壺	11.9	12.7	-	D H I	100	普通	浅黄橙	赤色粒子多量に含む 胴部黒斑 No17		61-8
19	土師器	小型甕	(15.8)	8.4	-	C H K	15	普通	にぶい黄橙	胴部弱いケズリ No6		
20	土師器	甕	15.4	26.9	5.4	A B E H I K	90	普通	にぶい橙	緑泥片岩多 外面粗いミガキ(又はヘラナデ) No28		62-4
21	土師器	甕	(15.8)	27.4	-	A B C E G H I	70	普通	にぶい橙	雲母(片岩)多 胴部ケズリ ナデ No25		62-5
22	土師器	甕	17.0	28.7	6.5	B C E H I J	90	普通	にぶい橙	外面ヘラナデ 下位粗いミガキ風 No24		63-1
23	土師器	甕	(19.0)	29.0	7.0	C E H I	70	普通	にぶい褐	北武蔵の土 外面(ヘラ)ナデ 下位粗いミガキ風 No20		63-2
24	土師器	甕	15.8	19.3	-	C E H I J	95	普通	にぶい黄橙	在地産 白針含む 胴部外面ヘラナデ+ナデ 内面ナデ(平滑) No19		63-3
25	土師器	小型甌	(23.0)	20.8	(9.0)	C E H I J	30	普通	橙	在地産 白針含む 外面ケズリ 内面ヘラナデ No19・26		
26	土師器	把手付甌	(24.0)	29.7	9.0	B C E G I	70	普通	橙	緑泥片岩?入る 槻川流域の土か 外面風化 ケズリか 把手欠失 No19		63-4
27	土師器	甌か	(21.0)	5.7	-	C E J	15	普通	橙	白針含む 在地産 折り返し口縁指頭押え 胴部ヘラナデ+ナデ		
28	土師器	大型鉢	(24.0)	16.5	7.9	C E H I	60	普通	橙	北武蔵の土か 二次被熱を受け器面剥落 No18・21		64-3

調整が残る。16・17は有段高坏で、脚部に段がある。18は壺(埴)。口縁部に弱い段が付く。

19~24は甕である。胴部は長胴化の兆しはあるがまだ丸みが強い。20はカマド左袖に寄り掛かるように出土した。21・22も中央部の床面付近から潰れた状態で出土した。23はカマド前面の覆土上層から出土した。24・26は床面付近出土。25・26は甌でいずれも床面付近から出土した。27は甌か。器種は良く分からない。28は大型鉢である。

床面から出土した土器と覆土上層から出土した土器は明確な様相差は認められない。土師器供膳器が多出するものの、明確な模倣坏が含まれてはいない。高坏は小型化してはいるがまだ、組成

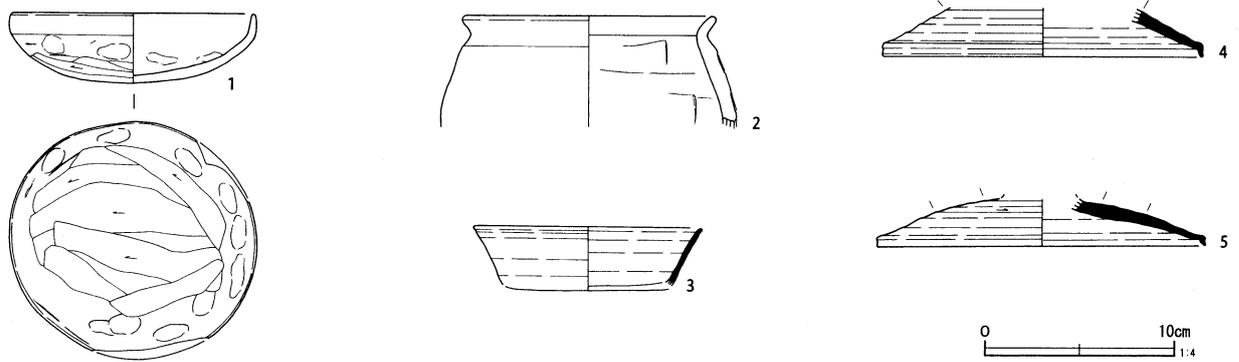
に加わっている。和泉期後半の土器様相と考えられる。本書Ⅲ期(新)に位置付けられよう。

第43号住居跡(第111図)

第43号住居跡はZH・ZI-14・15グリッドに位置する。住居跡北西部は調査区外に延びている。また重複する第9・33号住居跡に上面を削平されていた。遺存状態は悪い。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長4.75m、短軸長3.12m、深さ0.50mである。主軸方位はN-24°-Eを指す。

第14層は掘り方と推定され、上面が床面に相当するものと思われる。埋土は褐色土を基調としていた(第13層)。層下面には黄褐色土粒子が縞状



第129図 第43号住居跡出土遺物

第36表 第43号住居跡出土遺物観察表 (第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	128	36	-	CEHIK	90	普通	橙	北武蔵型坏 No.4		64-4
2	土師器	小型甕	(130)	59	-	CEIK	10	普通	橙	北武蔵の土 外面風化 調整不明 No.8		
3	須恵器	坏	(118)	31	-	IJK	10	良好	灰	南比企産 口径不安定		
4	須恵器	蓋	(168)	26	-	EIJ	10	良好	灰	南比企産		
5	須恵器	蓋	174	25	-	EHIJ	75	普通	灰	南比企産 つまみ欠 No.5		64-5

に堆積しており、人為的な堆積と考えられる。カマド、貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

遺物は、住居跡南東部から少量出土した。土師器坏・小型甕、須恵器坏・蓋がある(第129図)。

1は土師器北武蔵型坏である。やや扁平化した丸底形態である。2は小型台付甕であろうか。外面調整は不明確。3は南比企産の須恵器坏である。小片のため口径は不安定であるが、中・小型の坏となろう。4・5は南比企産の須恵器蓋である。

遺物の時期は7世紀末葉から8世紀初頭頃に収まる土器群と思われる。重複する第9・33号住居跡と大きな時間差は見込めない。軸方位が近似することから、連続的に建て替えられた可能性があるだろう。

第44号住居跡 (第130図)

第44号住居跡はZL・ZM-16グリッドに位置する。重複する第5号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は僅かに歪んだ長方形で、規模は長軸長4.08m、短軸長3.62m、深さ0.06mである。主軸方位はN-46° - Eを指す。

床面は削平されており、掘り方が辛うじて残存

するにすぎなかった。

カマドは北東壁に設けられていた。燃烧部掘り方が残存していた。楕円形で、規模は全長0.72m、幅0.50m、深さ0.13mである。底面は皿状に掘り込まれ、焼土が多量に含まれていた。

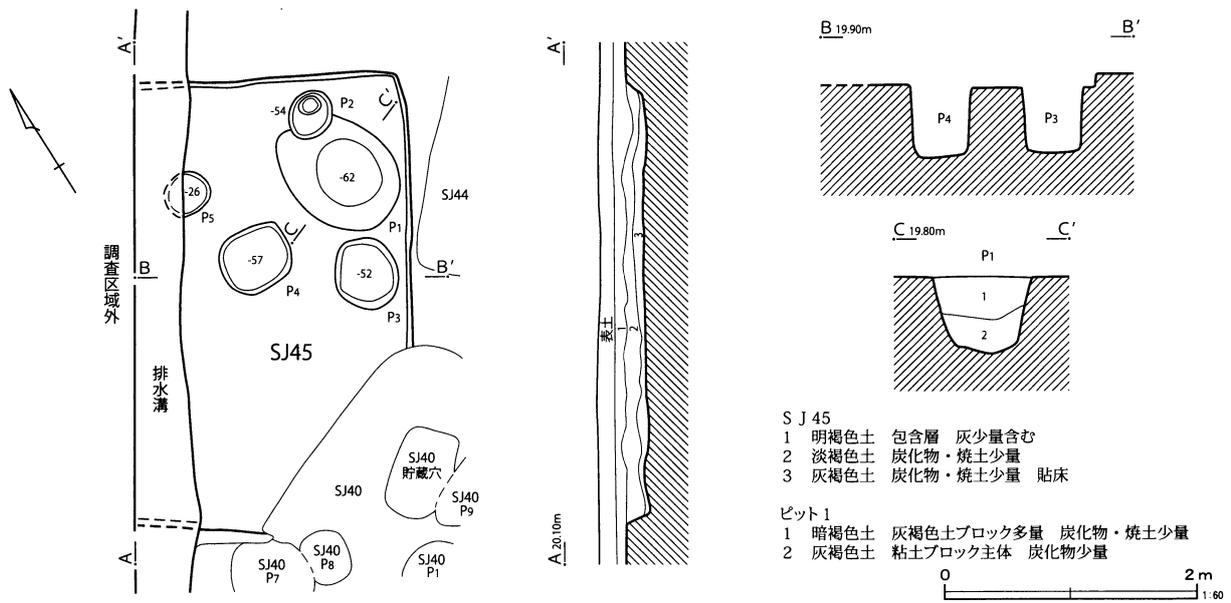
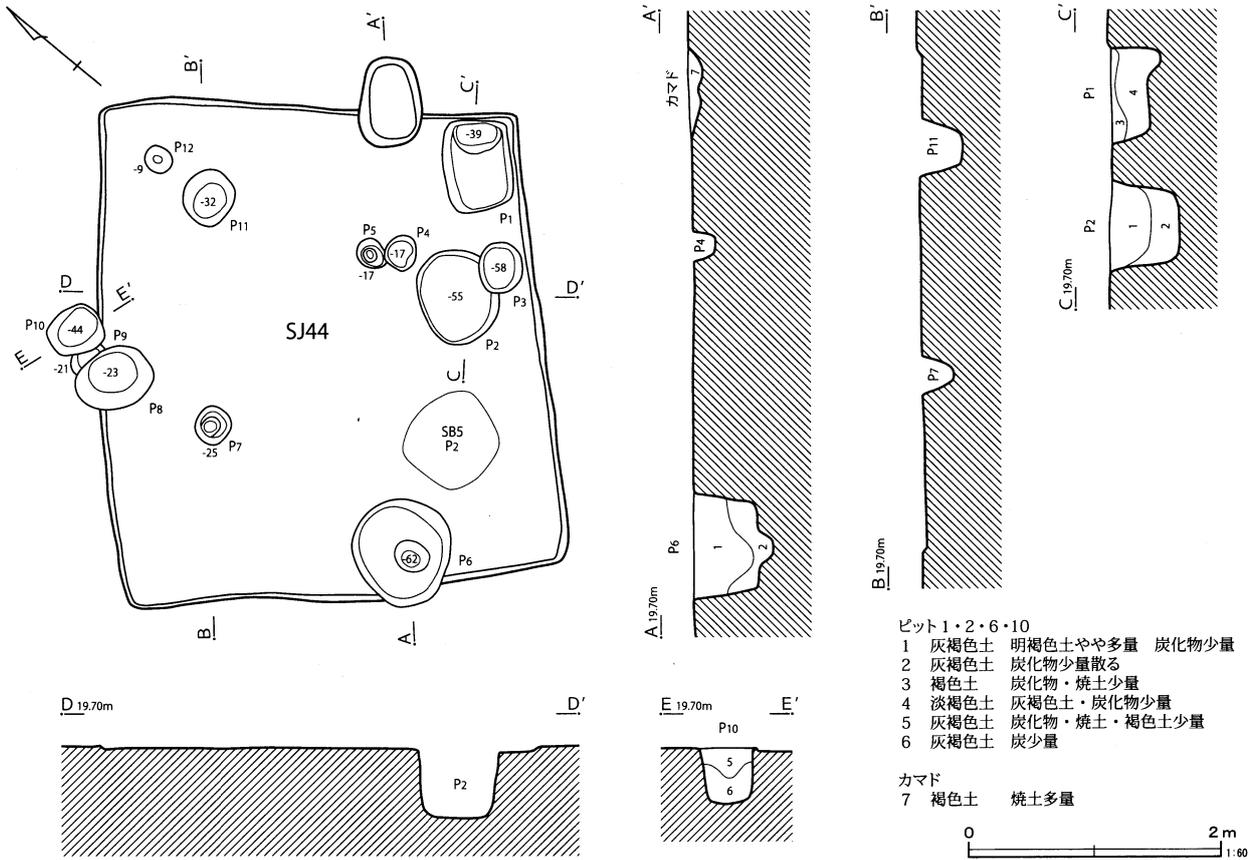
ピットは12本検出された。P1はカマド脇のコーナー部に位置することから貯蔵穴の可能性はある。長方形で、0.72×0.55m、深さ0.39mである。P6・8~10は住居跡に伴うものではない。その他のピットについても配置に規則性がなく、住居跡の柱穴となるか否か明確にできなかった。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は検出されなかった。詳細な時期は不明とせざるを得ない。

第45号住居跡 (第131図)

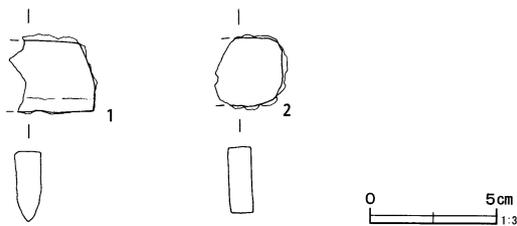
第45号住居跡はZL-16、ZM-15・16グリッドに位置する。住居跡北西側ほぼ半分は調査区外に延びている。また、南コーナー付近は重複する第40号住居跡に切られており、遺存状態は悪い。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.70m、短軸長2.20m、深さ0.12mである。主軸方位はN-32° - Eを指す。



床面は貼床され、凹凸が比較的顕著である。埋土は炭化物粒子・焼土粒子混じりの淡褐色土で、大きな土層変化は観察されなかった。ピットは5本検出された。P1は楕円形で、規模は0.75×0.50m、

深さ0.62m。東コーナー内側にある。形状と位置から貯蔵穴の可能性はある。P2～P4は深さ50cmを超えるが、柱痕が認められず、配置に規則性がないため、住居跡に伴う柱穴とみることは難しい。



第132図 第45号住居跡出土遺物

カマド、貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は非常に少ない。図示可能な遺物はP1から出土した鉄製品残欠が2点ある（第132図）。接合はしないが同一個体と思われる。遺存状態が悪く、外形線も本来の形状を保っているかどうか不明確である。

1は残長3.3cm、幅2.8cm、厚さ1.1cm、重量18.7g。図の下端部が尖り気味になる板状製品である。2は残長2.7cm、幅2.7cm、厚さ0.9cm、重量16.3g。断面長方形の板状製品である。いずれも鋳造品の可能性がある。

遺構の時期は遺物から特定は難しい。重複する第40号住居跡との関係から7世紀代またはそれ以前に遡ると推定される。

第46号住居跡（第133・134図）

第46号住居跡はZO-19グリッドに位置する。住居跡南側は調査区外に延びている。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長7.38m、短軸長5.92m、深さ0.30mである。一辺8m前後の大型住居跡となる可能性がある。主軸方位はN-38°-Eを指す。

床面は中心部に向かって僅かに傾斜し、貼床が施されていた（第3層）。住居跡埋土は焼土・炭化物混じりの褐色土を基調に堆積していた。

カマドは北東壁に設けられていた。燃烧部はほぼ壁内に収まる。規模は全長1.55m、袖部外幅1.14mである。燃烧部は長さ1.20m、幅0.54mで、底面は皿状に窪む。燃烧部側壁と火床面は強く被熱していた。燃烧部中央からやや左に寄った位置に倒立された状態の高坏が据えられていた。支脚に

転用されたと考えられる。煙道部は燃烧部奥壁から15cmほどの段差を持って立ち上がり、約30cm壁外に延びる。袖部の基部は地山を掘り残して設計されており、その上に黄褐色土を積み上げて構築されていた（第14層）。燃烧部奥の天井崩落土からは土師器甕が出土した。焚口部付近からは土師器甕などがまとまって出土した。第10層が被熱火床面、第12・13層が灰層である。第8・9層が天井部崩落土と考えられる。

貯蔵穴は、カマド右脇から1基検出された。隅丸長方形で、規模は長径88cm、短径60cm、深さ47cmである。煤の付着した土師器甕、高坏・坏などが貯蔵穴内に流れ込んだ状態で出土した。これらは貯蔵穴周囲に置かれていたものと考えられる。

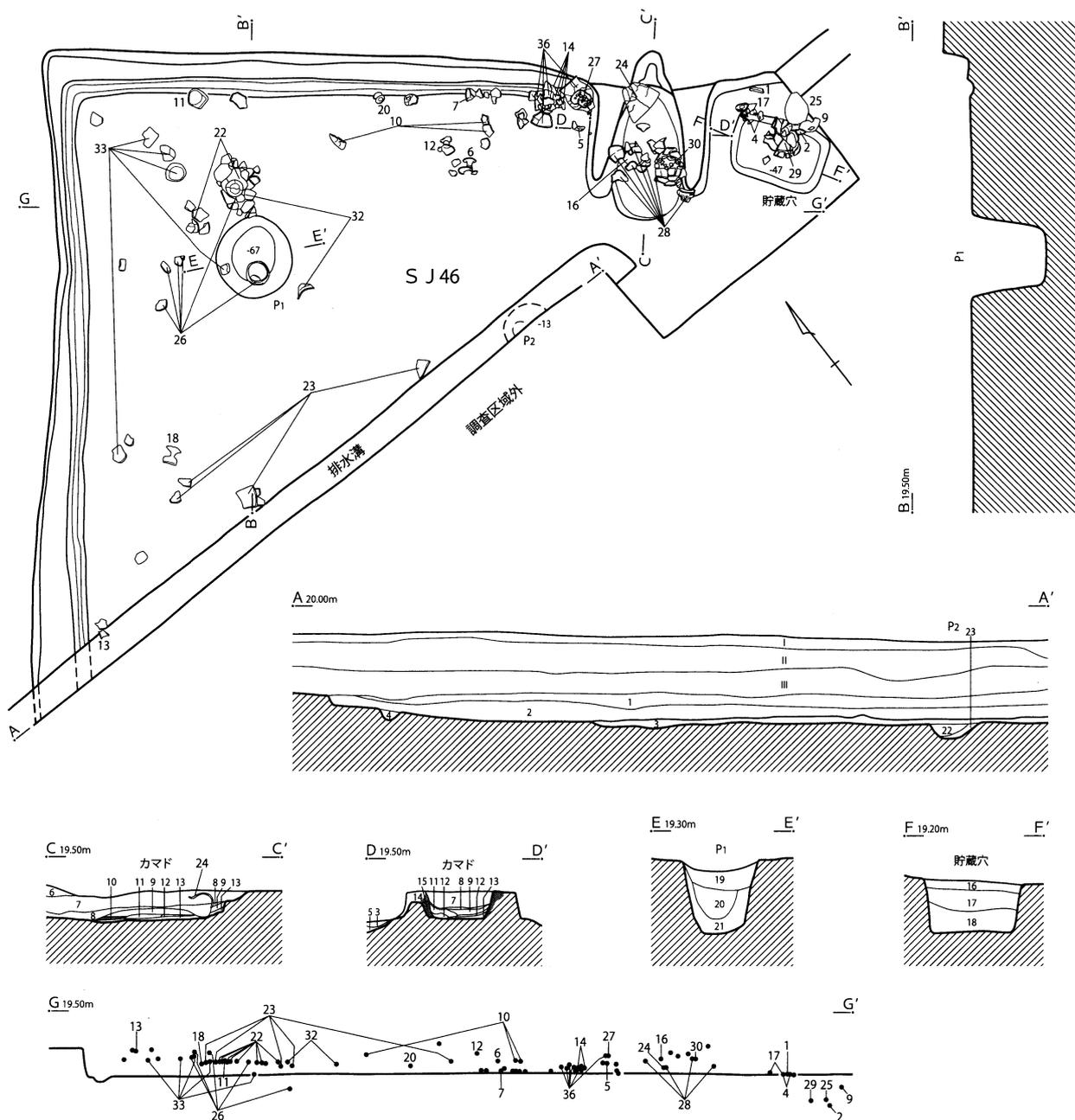
ピットは2本検出された。P1は住居跡に伴う支柱穴と考えられる。深さ67cmと深く、第21層が柱抜き痕の可能性はある。土師器甕がピット内に落ち込むような状態で出土した。P2は柱穴とはならない。

壁溝は幅12~18cm、深さ8cmほどで、カマド左袖部と接する壁際から北西壁にかけて「L」字状に巡っていた。

出土遺物は非常に多い。住居跡全体から出土したが、カマド・貯蔵穴周辺と住居跡北東隅からは特にまとまっている。カマド周辺からは床面直上からの出土が多く、北東隅からは床面から少し浮いた状態で出土したものが多い。カマド内からは土師器甕2点と甕1点が出土した。また、左袖部に接する壁際からは獣骨と思われる骨片が床面直上から3点出土した。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・小型壺（埴）・壺・甕・甕がある（第135~138図）。

1~5は坏である。1・2・4は口縁部が内傾する坏で、内外面赤彩が施される。比企型の須恵器坏身模倣坏と考えられる。3は口縁部が長く直立する。内外面赤彩され、胎土に白色針状物質を含む。比企型の須恵器坏蓋模倣坏であろう。5は



S J 46

- I 灰褐色土 現水田
- II 褐色土 砂多量
- III 褐灰色土 黄灰色粘土多量
- 1 褐灰色土 黄灰色粘土 (3~5 mm) 多量 焼土・炭化物ブロック (3~5 mm) 少量
- 2 褐色土 黄灰色粘土 (3~5 mm) 少量 焼土・炭化物ブロック (3~5 mm) 全体に含む
- 3 黄褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多量 層面に炭化物多量 (貼床)
- 4 黄褐色土 黄灰色粘土ブロック多量

カマド

- 5 黄褐色土 炭化物・灰を含む (掘り方覆土)
- 6 灰褐色土 炭化物少量
- 7 灰褐色土 褐色土粘土ブロック主体 炭・焼土少量 天井部崩落土
- 8 灰褐色土 炭化物多量 灰褐色土少量
- 9 黄褐色土 焼土 (5~8 mm) 多量
- 10 赤褐色土 黄褐色粘土層 焼土化 (被熱) している
- 11 黄褐色土 焼土 (5~8 mm) を殆ど含まない
- 12 黒褐色土 灰・炭化物多量 灰層
- 13 黒褐色土 炭化物多量 灰層
- 14 黄褐色土 焼土・炭化物を含む

- 15 赤褐色土 炭化物・灰を含む 黄褐色粘土が被熱されている

貯蔵穴

- 16 褐色土 黄灰色粘土ブロック (3~5 mm) 少量
- 17 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (3~5 mm) 炭化物 (3~5 mm) を含む
- 18 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 多量

ピット 1

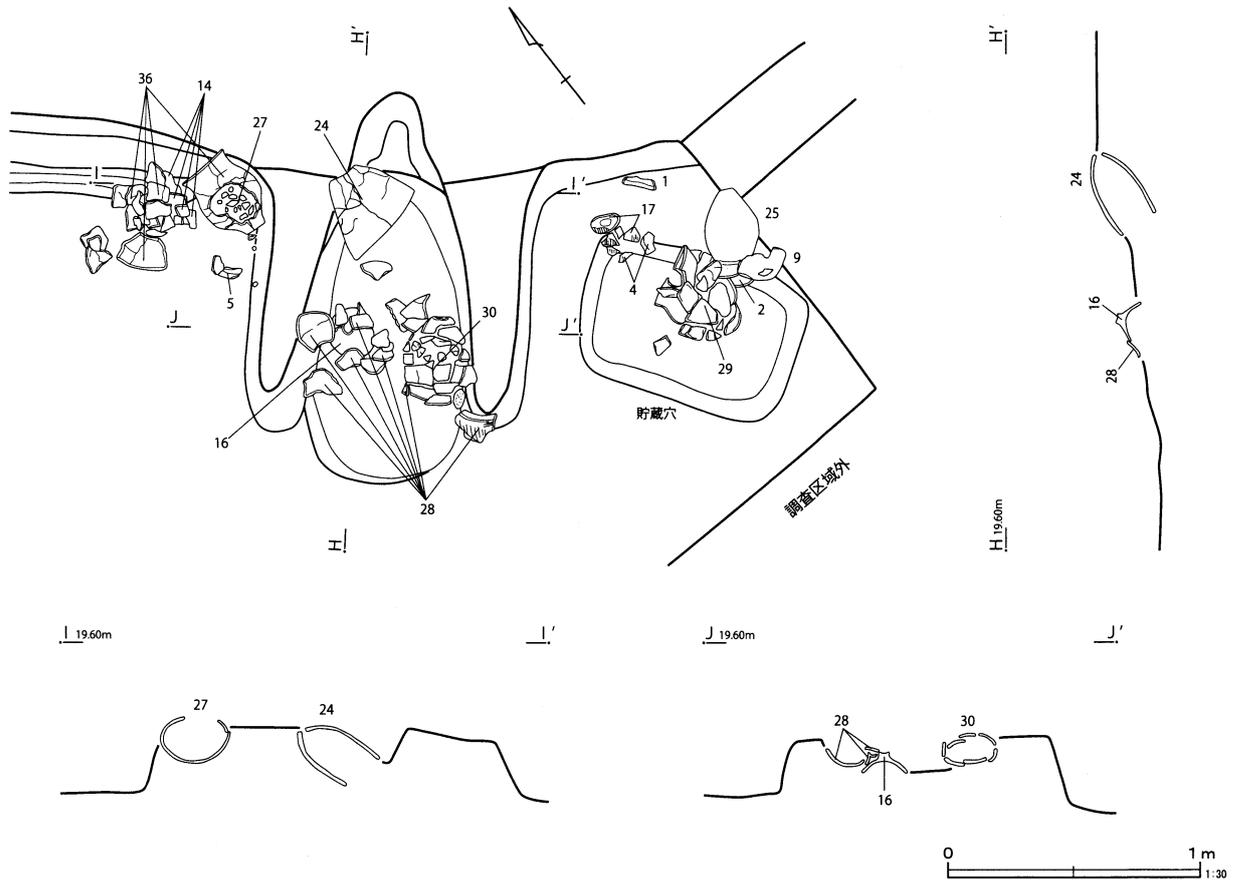
- 19 黄灰色土 粘土質 炭化物少量
- 20 黒灰色土 粘土質 炭化物少量
- 21 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 多量

ピット 2

- 22 褐色土 焼土・炭化物 (1 cm) 多量
- 23 褐色土 炭化物少量



第133図 第46号住居跡



第134図 第46号住居跡カマド

口縁部が直立する坏である。坏蓋模倣坏に似るが、系譜が不明確である。赤彩はない。

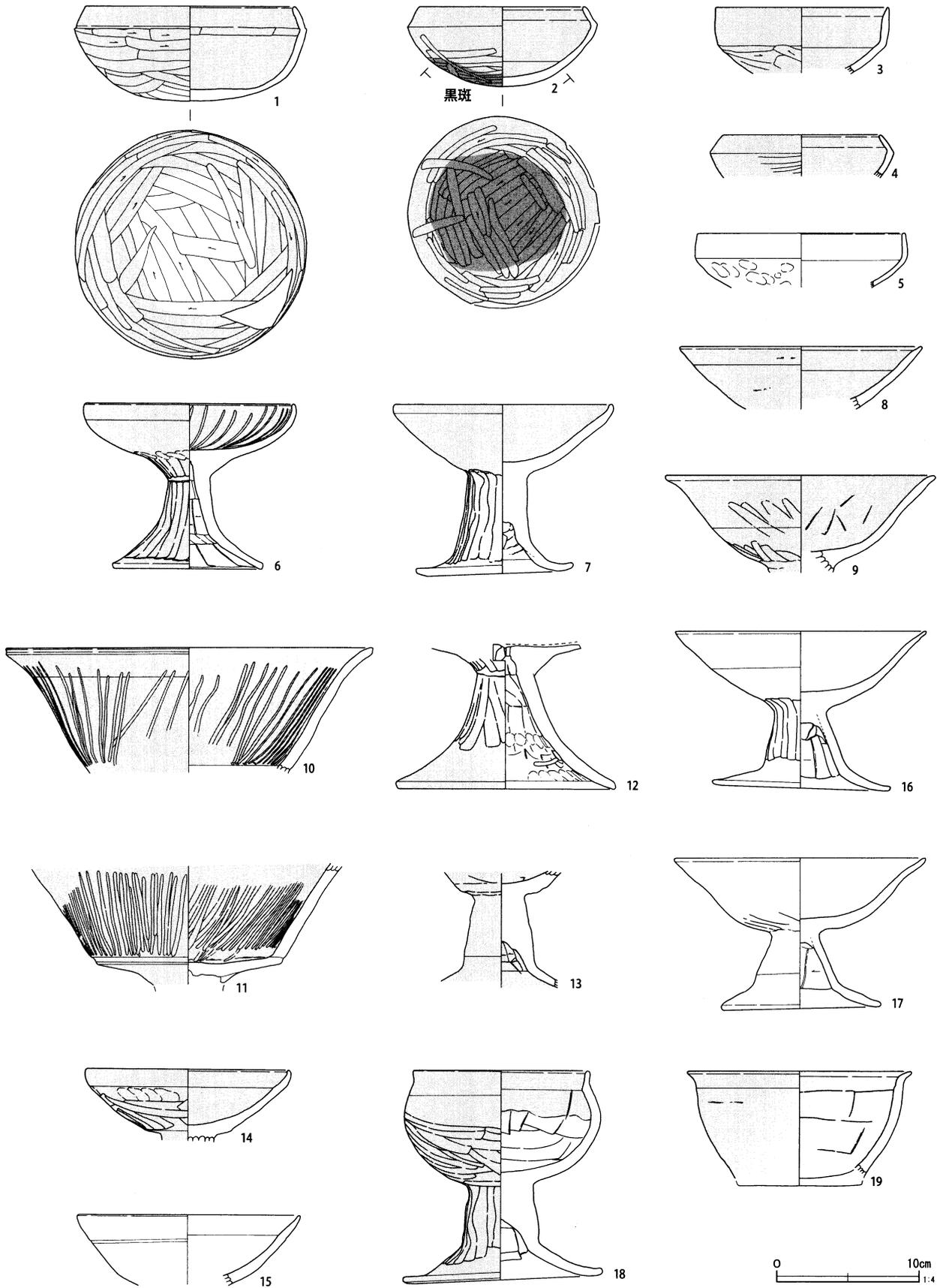
6～18は土師器高坏である。6～14・18は赤彩されている。15もその可能性があり、比企型と等号となるかどうかは別として在地産と思われる。6は坏部内面に粗い暗文風のミガキが施される。7は柱状の脚部、10・11は坏部の深い大型高坏で同一個体の可能性がある。坏部内外面に暗文風のミガキが加わる。16・17は赤彩がなく、胎土の特徴から北武蔵産の高坏かもしれない。16はカマド燃烧部に逆位で設置されており、支脚に転用されたと推定される。18は高坏の一種で、脚付の椀形態である。19は鉢で、赤彩される。20は小型壺(埴)。丸底形態で口唇部が受口状に立ち上がる。須恵器甕を模倣したものか。21は赤彩された小型壺。肩部内面に絞り目が残る。

22は大型壺。胴部は球形で、底部中央が小さく

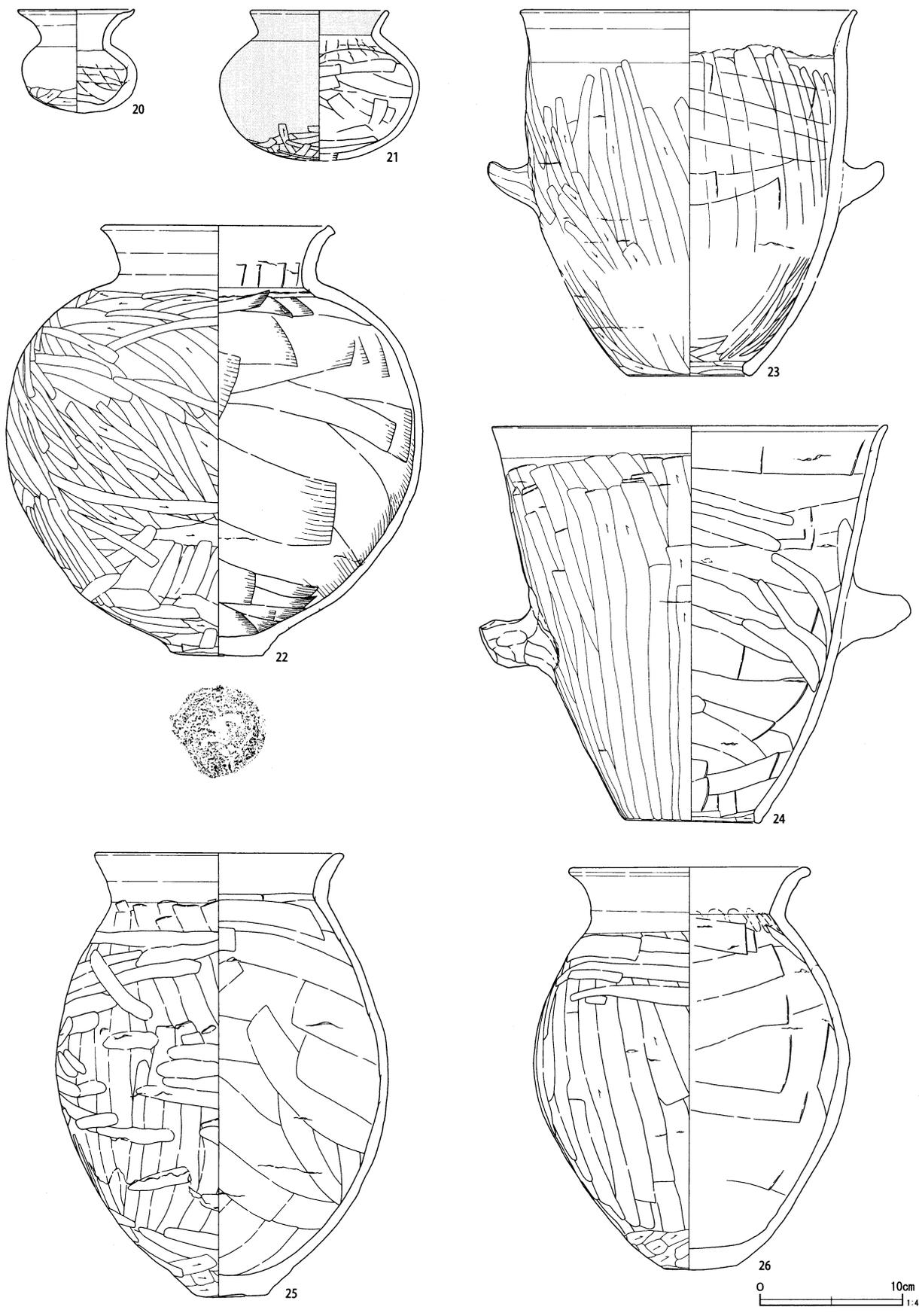
窪む。胴部ケズリは乾燥状態で行っており、ミガキ風となる。内面は木口ナデ調整。23・24は把手付の大型甑。24はカマド内燃烧部上面から出土した。カマド天井部の上に置かれたものが天井部の崩落とともに潰れたような状態である。

25～37は土師器甕である。25～30は70%以上と遺存率の高い土器で、胴部が長胴化傾向が表れた土器である。25は完形品で、貯蔵穴に口縁部が落ち込んだ状態で出土した。28はカマド内出土。高坏(支脚)の上面に潰れた状態で出土した。カマドに掛けられていた土器と思われる。30はカマド内燃烧部、28の東側に隣接して出土した。横2つ掛けカマドの可能性もある。27はカマド袖上に保管されていた土器が横倒しになったような出土状態である。

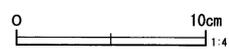
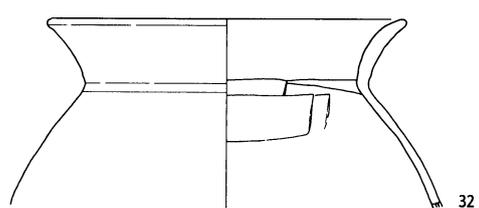
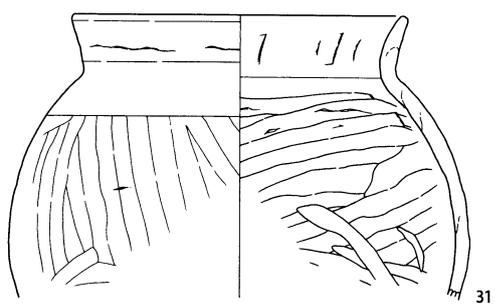
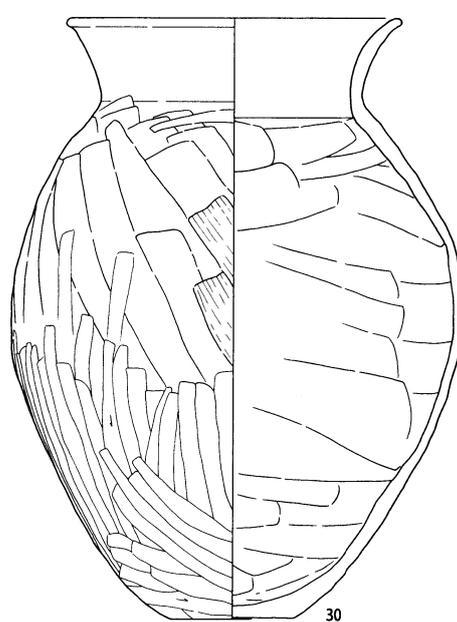
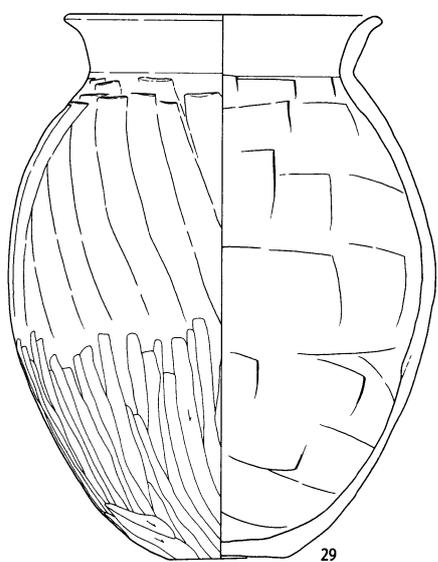
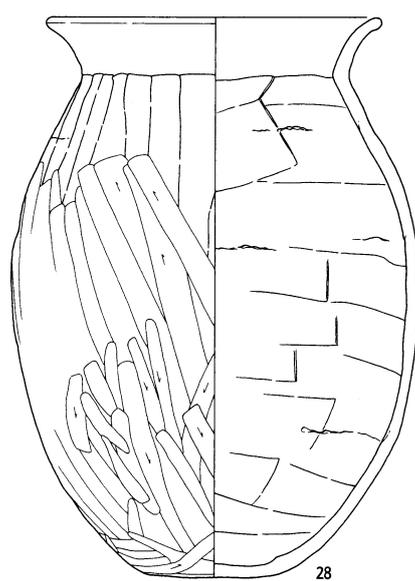
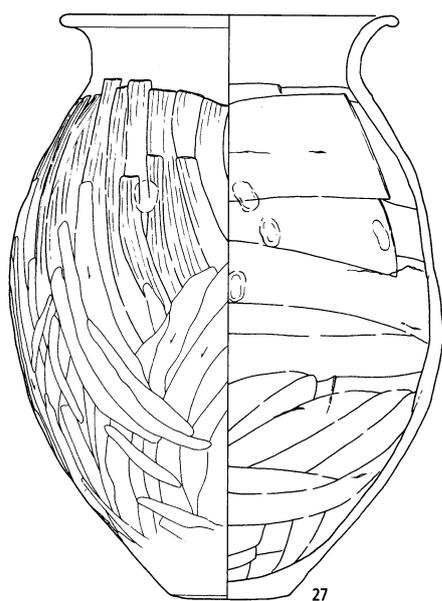
遺物の時期は坏身・坏蓋模倣坏が出現しており、鬼高期の土器様相である。本書IV期古段階、5世



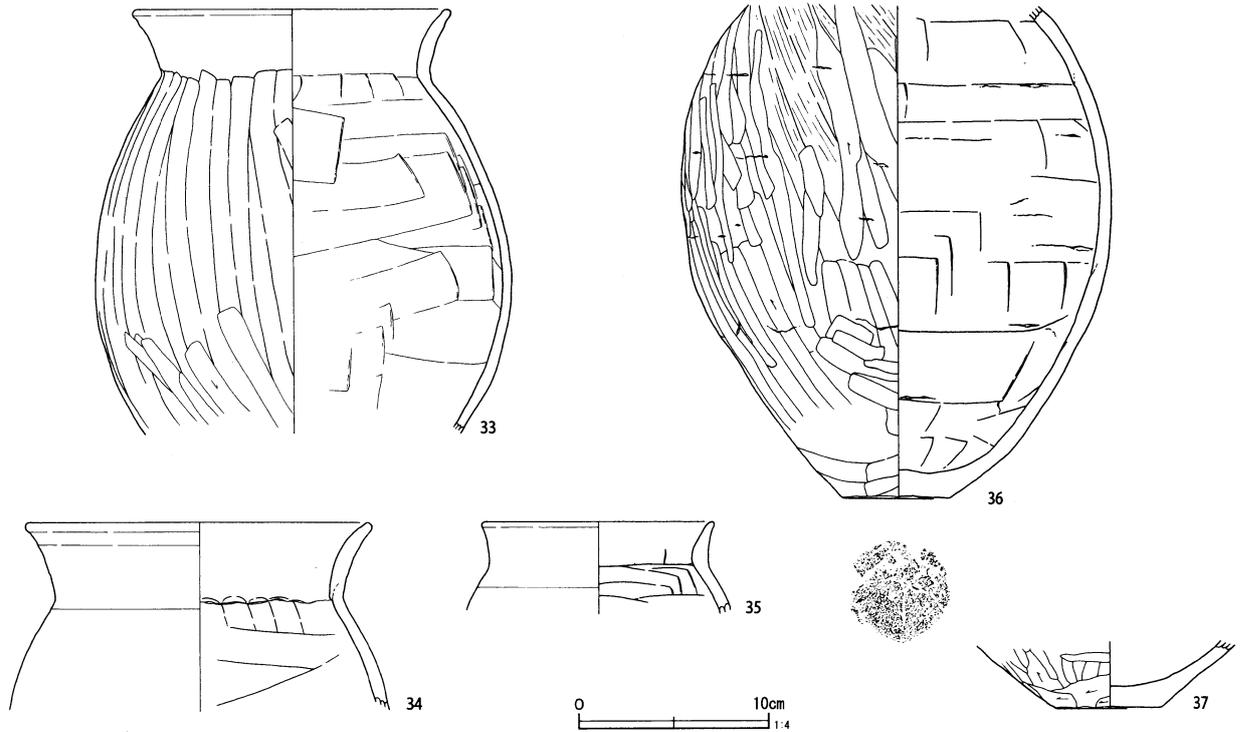
第135図 第46号住居跡出土遺物 (1)



第136图 第46号住居跡出土遺物 (2)



第137図 第46号住居跡出土遺物（3）



第138図 第46号住居跡出土遺物(4)

第37表 第46号住居跡出土遺物観察表(第135~138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	145	67	-	EGHIJ	90	普通	にぶい橙	比企型模倣坏(坏身模倣) 底部を除き赤彩 白針少含む No41		65-1
2	土師器	坏	116	56	-	EHIKL	85	普通	橙	比企型坏身模倣坏 全面赤彩 黒斑 白針なし No51		65-2
3	土師器	坏	(120)	47	-	AIIJK	15	普通	橙	比企型坏蓋模倣坏 白針含む 全面赤彩か カマド		
4	土師器	坏	(111)	30	-	EHIJ	10	普通	橙	比企型坏身模倣坏 白針含む 全面赤彩 No43		
5	土師器	坏	(146)	34	-	ACIK	25	普通	橙	在地産か 白針なし 体部指押え 類模倣坏? No40		
6	土師器	高坏	(146)	116	(105)	CEIK	75	普通	にぶい橙	在地産か 白針なし 坏内面暗文 脚部ヘラナデ 坏内面+外面赤彩 No29		64-8
7	土師器	高坏	152	11.9	11.1	ACEIJ	90	普通	橙	在地産 白針含む 坏部ナデ 脚部ヘラナデ 赤彩 No33		65-3
8	土師器	高坏	(168)	44	-	EHIK	20	普通	橙	在地産 赤彩 白針なし		
9	土師器	高坏	188	67	-	ACHIJ	95	普通	橙	比企型高坏 白針含む 赤彩 No49		
10	土師器	高坏	(256)	89	-	ACEHIJK	25	普通	橙	大型高坏 在地産 白針含む 赤彩 坏部内外面疎らな暗文 No24・32		
11	土師器	高坏	-	85	-	BCEHIJ	60	普通	にぶい橙	在地産 白針含む 赤彩 坏部ヘラミガキ No20		
12	土師器	高坏	-	101	(153)	ACEHIJ	50	普通	橙	比企型高坏 赤彩 白針含む 坏部見込み部に穿孔(2ヶ) No27		66-1・2・3
13	土師器	高坏	-	80	-	CEGIK	70	普通	にぶい赤褐	比企型高坏 白針なし 赤彩 No1		
14	土師器	高坏	(140)	51	-	EHIJK	55	普通	橙	比企型高坏 白針含む 赤彩 No38		
15	土師器	高坏	156	49	-	AHI	50	普通	にぶい黄橙	在地産か 白針なし 坏部外面ナデ 赤彩不明 カマド		
16	土師器	高坏	175	11.3	125	CEHI	90	普通	橙	北武蔵の土か 白針なし 赤彩不明確 カマドNo1		65-4
17	土師器	高坏	174	106	110	CEGHI	75	普通	橙	北武蔵の土か 坏部風化著しい No42・43・貯蔵穴・カマド		65-5
18	土師器	脚付碗	122	150	140	ACEHIJ	100	良好	橙	在地産 白針含む 坏部下半~脚部ヘラナデ 内面口縁部+外面赤彩 No8		65-6
19	土師器	鉢	(156)	75	-	CEHIJL	20	普通	橙	在地産 赤彩 白針含む P1		
20	土師器	小型壺	81	72	-	BHIK	95	普通	にぶい橙	片岩含む 槻川流域の土か 白針なし 胴部黒斑 No25		66-4
21	土師器	壺	(94)	105	-	EHIK	30	普通	橙	比企産 白針なし 赤彩 P1		
22	土師器	壺	156	30.1	67	BEGHIL	95	普通	橙	緑泥片岩?含む 槻川流域の土か 外面ケズリ 内面木口ナデ No15・16		66-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
23	土師器	把手付甗	232	257	(89)	EFGHIJ	35	良好	橙	在地産 白針含む 外面弱いケズリ 内面ヘラナデ後ナデ		67-1
24	土師器	把手付甗	276	277	90	GHI	95	普通	淡橙	孔部は接合しない 推定復元 No.3~5・13 川越の土か 白針なし 赤色粒多 外面軽いケズリ 内面ヘラナデ+ナデ カマドNo.9		67-2
25	土師器	甗	170	31.3	52	CEHI	100	良好	橙	北武蔵の土か No.50		66-7
26	土師器	甗	162	28.3	52	CEHIL	90	普通	橙	北武蔵の土か 胴部ケズリ後ナデ 下端ケズリ No.9・11・14・16・22・P1		66-6
27	土師器	甗	170	300	62	EGHIJ	80	普通	橙	在地産か 胴部木口ナデ・下半はケズリ後粗いミガキ・下端は二次被熱を受け器面荒れる カマドNo.8		67-3
28	土師器	甗	172	29.8	73	EI	70	普通	橙	北武蔵の土? 角閃石目立たない 白針と赤粒子なし 胴部上位ヘラナデ・中位ケズリ・下位乾燥状態のケズリ(ミガキ風の光沢有り) カマドNo.2・6・9・10		67-4
29	土師器	甗	160	290	63	DEGHIJK	80	普通	にぶい赤褐	在地産 白針含む 外面ヘラナデ・下半ミガキ風ケズリ 内面ヘラナデ 貯蔵穴No.1		68-1
30	土師器	甗	173	32.1	66	DEHIJK	80	普通	明赤褐	在地産 白針含む 胴部木口ナデ+ヘラナデ 下半はミガキ風ケズリ カマドNo.6		68-2
31	土師器	甗	(176)	150	-	AHIJL	20	普通	にぶい橙	在地産 白針含む 胴部ヘラナデ		
32	土師器	甗	(184)	10.1	-	BDEH	40	普通	橙	緑泥片岩?含む 槻川流域の土か 胴部ナデ No.12・16		
33	土師器	甗	(163)	22.6	-	CEGHJ	70	普通	明赤褐	在地産 白針含む 外面ヘラナデ+胴下半ミガキ風ケズリ No.6・14・17~19		68-3
34	土師器	甗	(180)	9.9	-	HI	15	普通	褐	胴部ナデか 在地産か 白針なし		
35	土師器	小型甗?	(120)	4.9	-	ACH	25	普通	橙	北武蔵の土か 外面風化		
36	土師器	甗	-	26.1	5.6	EHI	70	普通	にぶい橙	在地産? 白針なし 外面木口ナデ後ヘラナデ(ミガキ風) 底部木葉痕 二次被熱 No.36・37・カマドNo.8		68-4
37	土師器	甗	-	3.5	5.6	ACEHI	85	普通	灰黄褐	北武蔵の土か P1		

紀末葉を中心とした年代と思われる。

第47号住居跡 (第139図)

第47号住居跡はZK-16グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区外に延びている。重複する第10・12号掘立柱建物跡柱穴に切られていた。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長2.87m、短軸長1.47m、深さ0.05mである。主軸方位はN-154° - Eを指す。

床面は貼床されていたが、大半は削平されており、掘り方が露出していた。カマドの有無は明確にできなかった。南壁に僅かな壁面の突出が認められ、カマド燃焼部の可能性を考慮して調査したが、焼土は含まれていたものの灰層や被熱面は認められず、確証は得られなかった。

土壙は、住居跡南壁付近から1基検出された。第12号掘立柱建物跡柱穴に一部壊されていた。形態は楕円形で、規模は長径90cm、短径61cm、深さ7cmである。貯蔵穴として調査したが、深度が浅すぎること、もし隣接する壁面にカマドが設置されたとすると位置的に近すぎることから、性格的には異なる土壙と思われる。

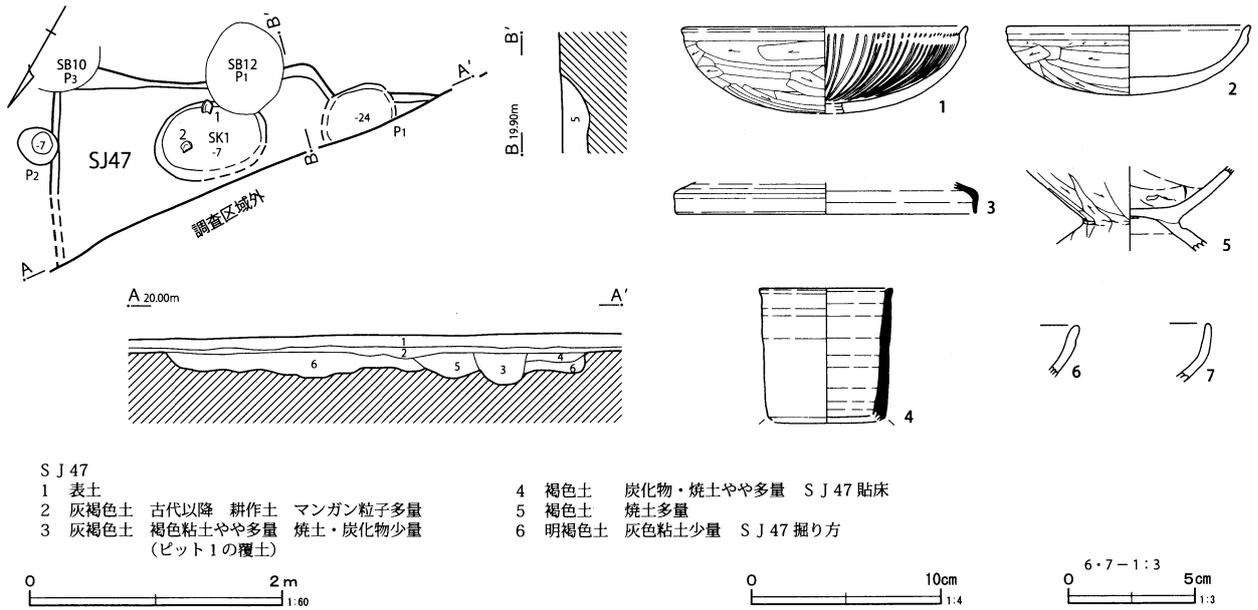
ピットは2本検出されたが、いずれも住居跡に伴うものではない。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器坏・台付甗、須恵器蓋・コップ形土器がある(第139図)。1は北武蔵型暗文坏である。丸底形態で、内面に放射暗文が施文される。2も北武蔵型暗文坏であるが、風化が著しく、暗文が見えない。いずれも第1号土壙出土。3は須恵器蓋。口縁部が直角に折れることから壺蓋の可能性もある。南比企産。4は須恵器コップ形、5は台付甗、6は北武蔵型暗文坏、7は北武蔵型坏である。4~6はP2から出土しており、直接伴う資料ではない。時期は不明確であるが、北武蔵型暗文坏と、須恵器蓋の特徴から本書VI期~VII期、7世紀末葉~8世紀前半頃までの時間幅に含まれるであろう。

第48号住居跡 (第140・141図)

第48号住居跡はZK・ZL-22・23グリッドに位置する。住居跡東隅は調査区外に延び、西側は重複する第20・26・35号住居跡、第4号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長



- S J 47
 1 表土
 2 灰褐色土 古代以降 耕作土 マンガン粒子多量
 3 灰褐色土 褐色粘土やや多量 焼土・炭化物少量 (ピット1の覆土)
 4 褐色土 炭化物・焼土やや多量 S J 47 貼床
 5 褐色土 焼土多量
 6 明褐色土 灰色粘土少量 S J 47 掘り方

第139図 第47号住居跡・出土遺物

第38表 第47号住居跡出土遺物観察表 (第139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(152)	4.6	-	C E G H I	30	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 底部外面黒斑	SK1No 1	69-1
2	土師器	坏	128	3.6	-	CHI	80	普通	赤褐	北武蔵型暗文坏 内面風化著しく暗文みえない	SK1No 2	
3	須恵器	蓋	(158)	1.7	-	C I J K	15	普通	灰	南比企産 壺蓋と思われる		
4	須恵器	コップ形	(69)	7.0	-	E J K	20	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	P2	
5	土師器	台付甕	-	4.4	-	A C E I	50	普通	暗褐	北武蔵の土	P2	
6	土師器	坏	-	2.1	-	CHI	5	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 外面ヘラケズリ	P2	
7	土師器	坏	-	2.3	-	CHI	5	普通	橙	北武蔵型坏 体部外面無調整 8C前半頃か	P2	

8.28m、短軸長7.98m、深さ0.10mである。主軸方位はN-49° -Wを指す。

床面は概ね平坦であった。埋土は炭化物混じりの褐色砂質土をベースに構成されていたが、覆土が薄く、堆積環境の詳細は明確にできなかった。

カマドは北西壁に設けられていた。向かって左半分を第35号住居跡に削平され、遺存状態は悪い。残存規模は全長1.44m、幅0.72m、深さ0.20mである。燃焼部は壁を切り込んで構築され、側壁は被熱していた。第2・3層は焼土ブロックを多量に含む褐色から白色粘土で、天井部崩落土と考えられる。煙道部は削平され遺存していなかった。

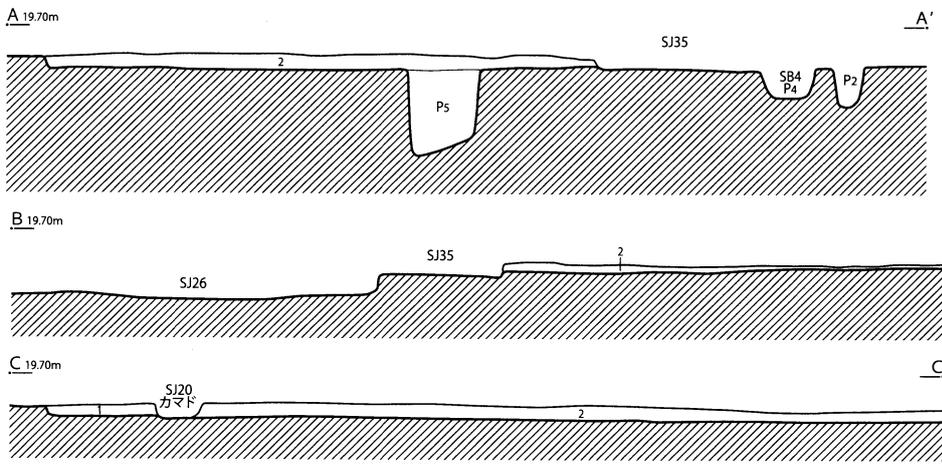
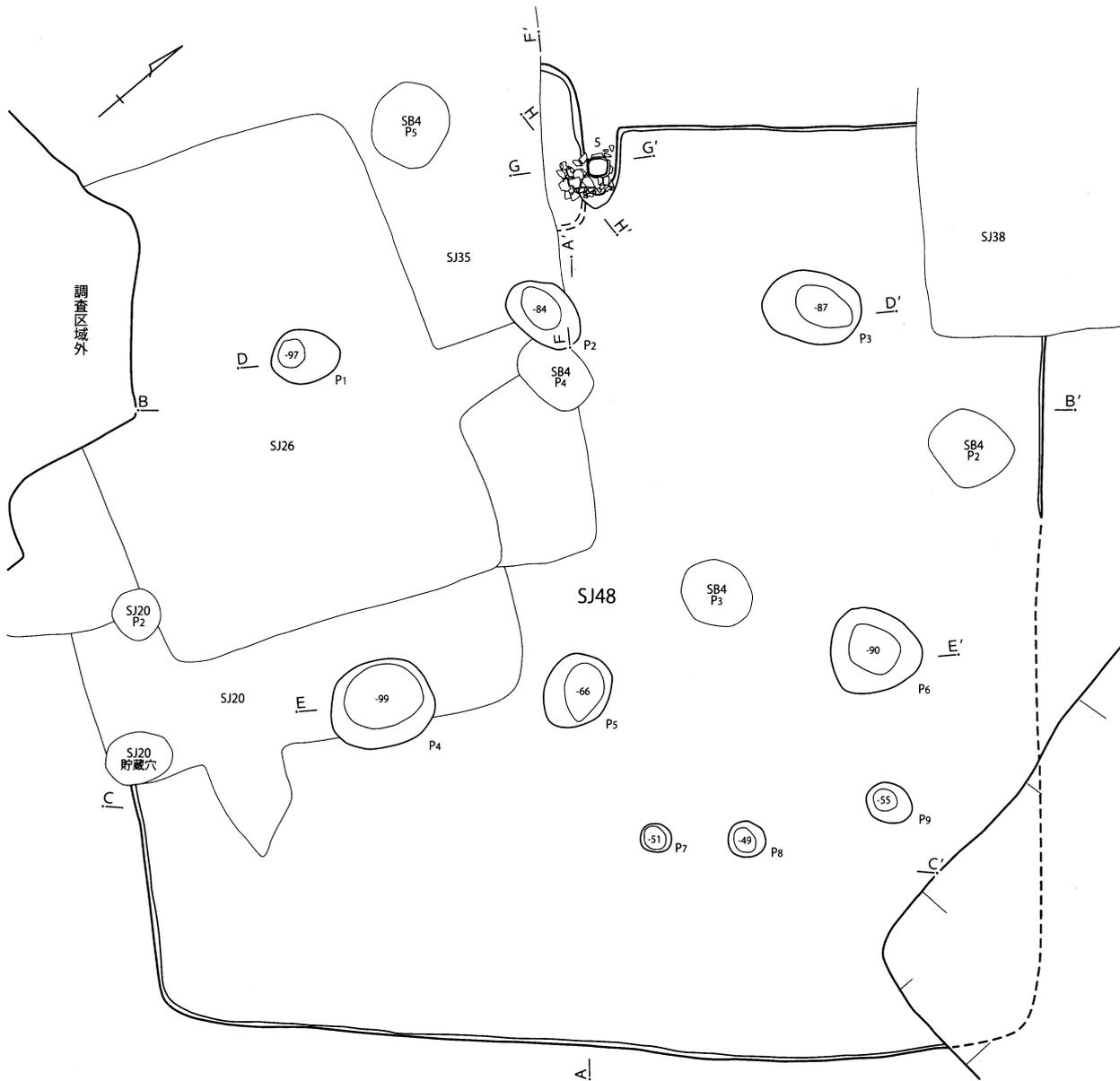
右袖部には底部を欠いた土師器甕が逆位に据えられ、芯材としていた。芯材とした甕に接するように、土師器甕が出土した。焚口部天井部の補強材の一部と思われる。

ピットは9本検出された。主柱穴はP1~P6を充て、6本主柱穴と考えたが、掘り方が大きく掘立柱建物跡、またはその一部の可能性も捨てきれない。砂質の強い土質のため、柱穴の検出そのものが難しかったが、柱痕の確認はより困難であった。P1・P3底面には硬化層が認められ柱の「あたり」痕と判断された。柱間距離はP1-P3間は4.59m、P4-P6間は4.62m、P1-P4間は3.18m、P3-P6間は3.12mである。P1-P2間は2.19m、P2-P3間は2.40m、P4-P5間は1.68m、P5-P6間は2.61m、P2-P5間は3.39mである。

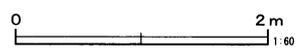
貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器坏・甕、須恵器碗?がある(第142図)。

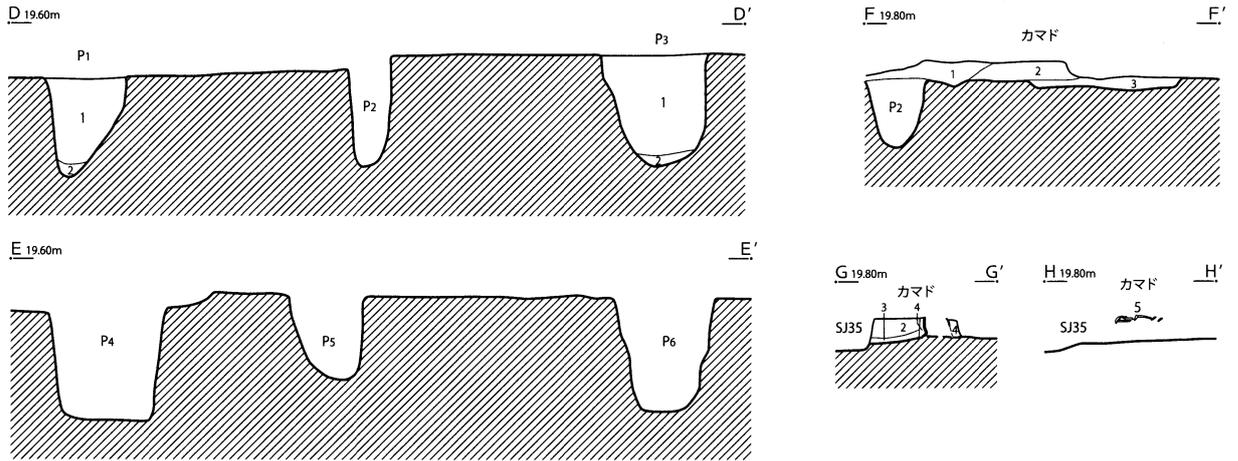
1・2は続比企型坏。模倣坏形態で、口唇部内面沈線、赤彩される。3は同一形態であるが、無



- S J 48
- 1 褐色土 炭化物・焼土少量
 - 2 褐色土 炭化物微量 砂質土



第140図 第48号住居跡 (1)



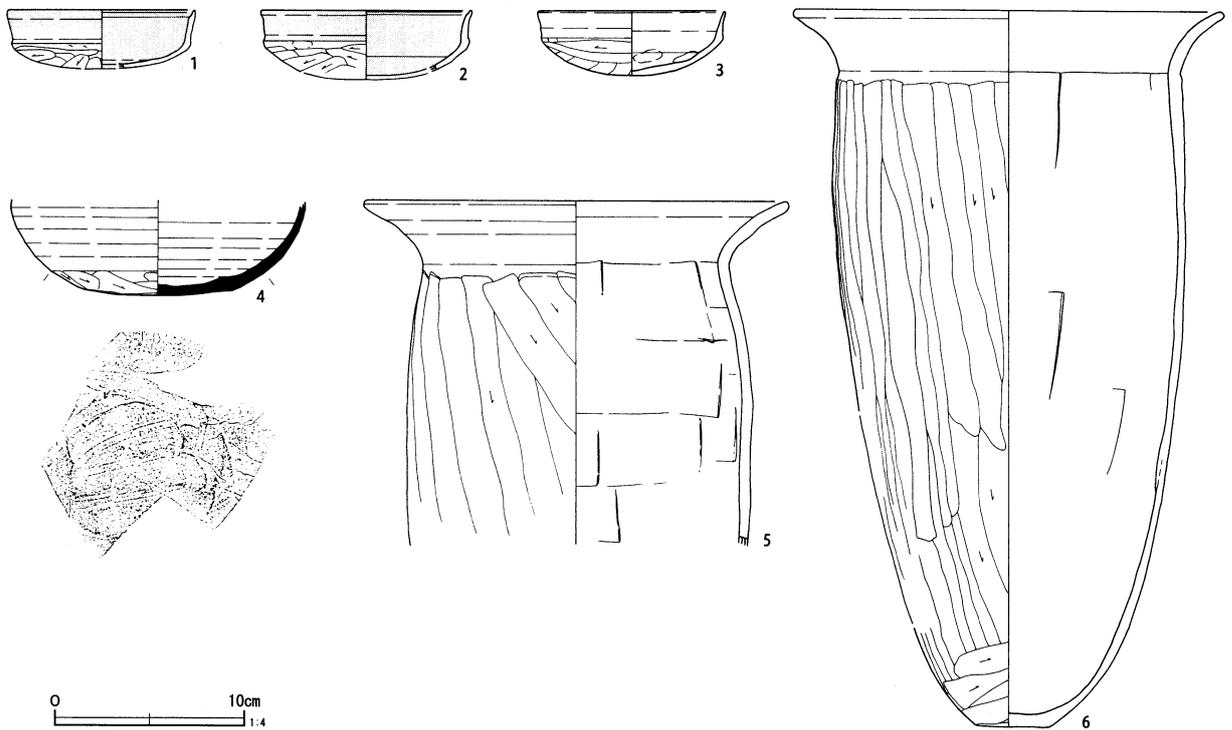
S J 48 カマド

- 1 茶褐色土 炭化物・焼土やや多量
- 2 褐色土 焼土ブロック多量 天井部崩落土
- 3 褐色土 焼土多量 (火床面)
- 4 白色粘土

ビット

- 1 茶褐色土 褐色粘土ブロックやや多量 褐色砂・灰色粘土少量
埋め戻し土
- 2 灰褐色土 灰色粘土多量 柱のあたり痕

第141図 第48号住居跡 (2)



第142図 第48号住居跡出土遺物

第39表 第48号住居跡出土遺物観察表 (第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(9.7)	3.1	-	EHIL	30	良好	橙	(続) 比企型坏 白針なし	内面+口縁外面赤彩	
2	土師器	坏	(11.0)	3.3	-	EHI	25	普通	橙	(続) 比企型坏 白針なし	内面+口縁外面赤彩	
3	土師器	坏	(9.9)	3.4	-	ACI	40	普通	明黄褐	模倣坏 北武蔵の土		
4	須恵器	碗?	-	5.0	-	AEIKL	60	普通	灰白	白針なし	南比企産? 底部手持ちヘラケズリ	
5	土師器	甕	22.2	18.2	-	CEHIL	80	普通	浅黄橙	武蔵型甕	カマドNo.1	69-2
6	土師器	甕	22.4	37.9	4.0	CDEGHK	70	良好	にぶい橙	武蔵型甕	器壁薄い 内面風化 ヘラナデ カマド	69-3

彩の模倣坏である。角閃石を含むことから、北武蔵産である。4は須恵器碗か。ロクロ整形で、底部が手持ちヘラケズリ調整されている。底部内面が摩滅しており、袋物にはならないであろう。白色針状物質はないが、南比企産に似た胎土である。器種も不明確である。5はカマド袖の芯材に使用された土師器甕、6はカマド天井部補強材に使用されたと思われる土師器甕。どちらも北武蔵の土で作られている。時期は土師器の様相から7世紀後半代に収まる土器群であろう。8世紀には降らないと考える。本書VI期に位置付けられる。

第49号住居跡 (第143図)

第49号住居跡はZL・ZM-22グリッドに位置する。住居跡東半は調査区外に延びている。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長4.89m、短軸長2.95m、深さ0.24mである。主軸方位はN-89°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は炭化物粒子を僅

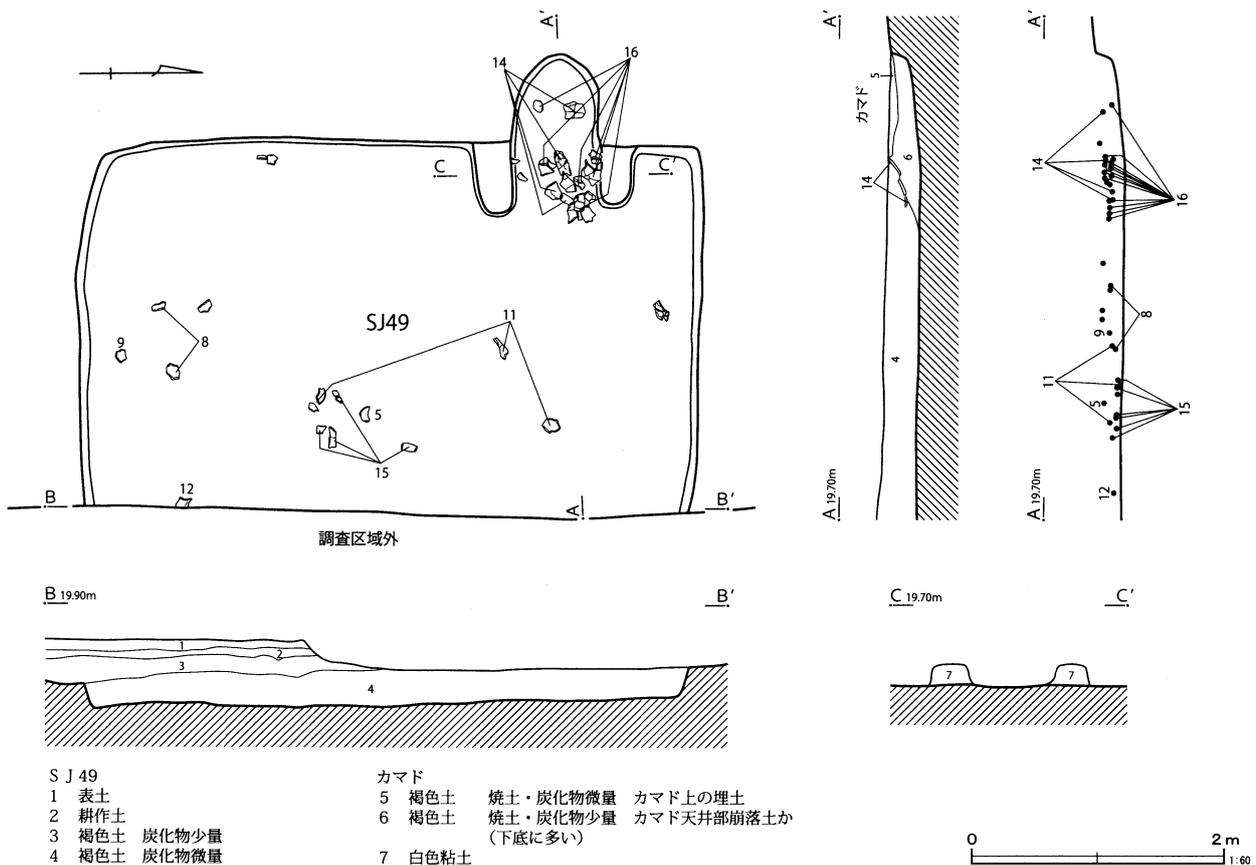
かに含む褐色土が堆積しており、大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは住居跡西壁に設けられていた。燃烧部は壁を0.80m切り込んで構築されていた。規模は全長1.25m、袖部外幅1.26m、深さ0.24mである。燃烧部はほぼ平坦で、段差なく床面に連続する。燃烧部幅は0.72m、側壁の被熱状況は不明。埋土は焼土・炭化物粒子を少量含む褐色土で、第6層は天井部崩落土と思われる。底面の灰層は形成されていなかった。袖は白色粘土を積み上げて構築されていた。焚き口部付近から、土師器小型甕が割れた状態で出土した。また、燃烧部内から土師器大型壺の口縁部片が出土した。

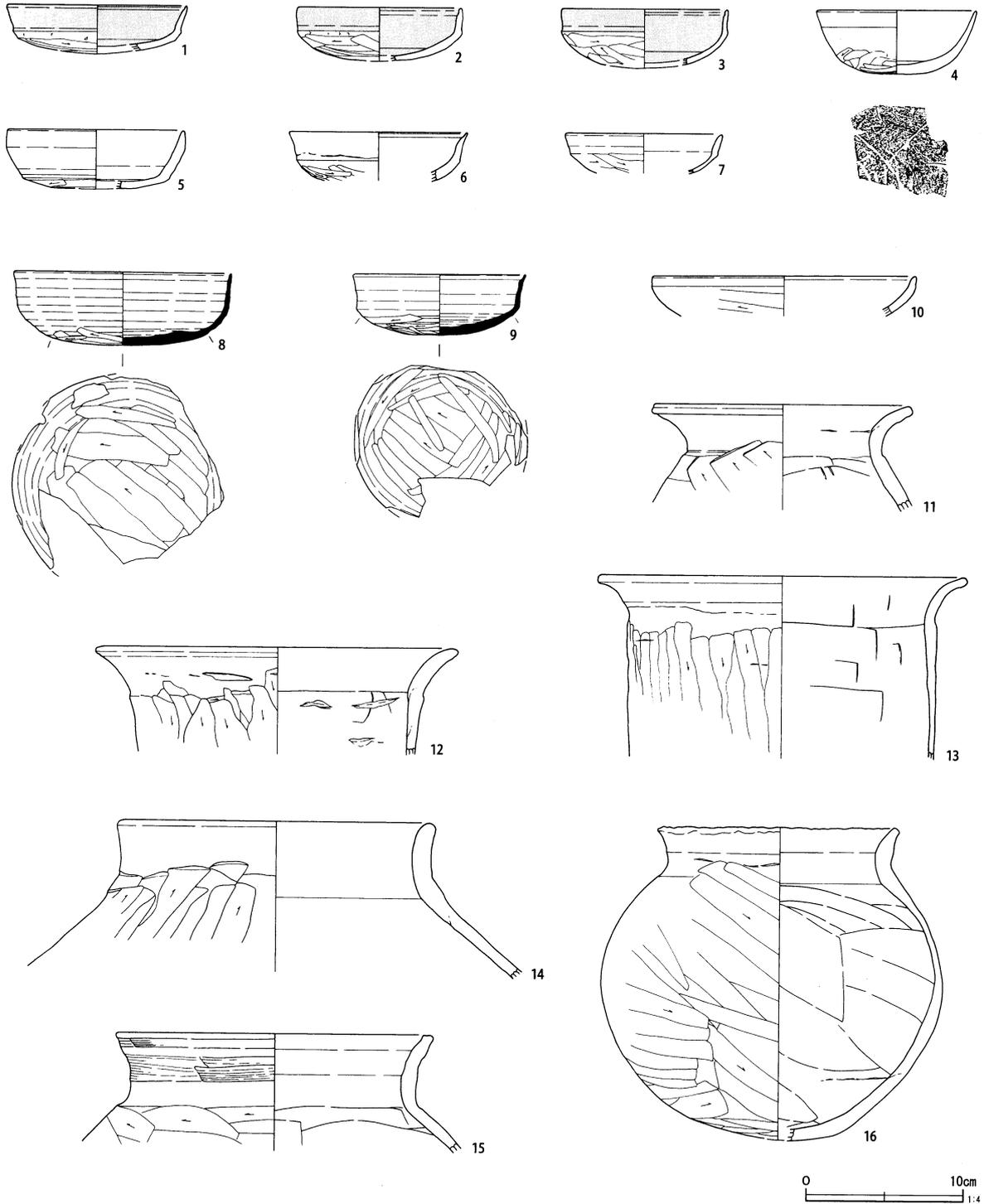
貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は比較的少ない。カマド内と覆土から主に出土している。土師器坏・皿・壺・甕・小型甕、須恵器坏がある (第144図)。

1~3・6は (続) 比企型坏である。1~3は



第143図 第49号住居跡



第144図 第49号住居跡出土遺物

口唇部内面沈線と赤彩が施される。6は赤彩が認められない。4は定型外（非比企型坏）の在産坏で、底部外面に木葉痕を残す。白色針状物質が含まれる。5は有段口縁坏である。段は退化している。7は坏蓋模倣坏。いずれも北武蔵の土である。

8は須恵器坏と思われる。口径13.8cmで、底部は手持ちヘラケズリ調整される。一見、坏H蓋に似るが、時期的に合致しないことから坏と考えた。9は形態的には須恵器坏H蓋とすべきであるが、対応する坏H身が想定できず、（続）比企型坏と同一形態である。土師器坏を逆模倣した可能性が

第40表 第49号住居跡出土遺物観察表 (第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(114)	29	-	EGHIL	20	普通	明赤褐	(統)比企型坏 白針なし 赤彩		
2	土師器	坏	(103)	34	-	BEHIK	30	普通	橙	(統)比企型坏 白針なし 赤彩		
3	土師器	坏	(105)	35	-	EHIJ	20	普通	橙	(統)比企型坏 白針含む 赤彩		
4	土師器	坏	(100)	40	-	ACHIJ	25	普通	橙	在地産 白針含む 非比企型坏 底部木葉痕残す		
5	土師器	坏	(112)	37	-	CEGHI	40	普通	橙	有段口縁坏 無彩 北武蔵の土か No10		
6	土師器	坏	(112)	31	-	EGHI	15	普通	橙	(統)比企型坏 白針含む 無彩		
7	土師器	坏	(99)	25	-	ACHI	10	普通	橙	北武蔵の土 模倣坏		
8	須恵器	坏	(138)	47	-	CEGHJ	70	普通	橙	南比企産 坏口蓋に似る 底部手持ちヘラケズリ ロクロ整形 No.2・3	69-4	
9	須恵器	坏	109	39	-	AEHIJ	60	普通	橙	南比企産 白針含む 坏Gとと考えておく 底部手持ちヘラケズリ ロクロ整形 No.1	69-5	
10	土師器	皿	(166)	25	-	CEHI	10	普通	にぶ黄橙	内面風化 北武蔵型暗文皿か		
11	土師器	小型甕	160	68	-	EGHIJ	70	普通	明赤褐	在地産 全体に風化 No.8・14・15		
12	土師器	甕	(222)	68	-	ACEGI	15	普通	橙	北武蔵の土 No.17		
13	土師器	甕	(230)	11.6	-	EIJK	20	普通	橙	在地産 白針含む カマド		
14	土師器	壺	(194)	8.3	-	EGHJ	40	普通	にぶ黄橙	胎土中に白色の粘土塊?を混入している 在地産か 白針少含む 大型品 赤彩の可能性あり カマドNo.21・24・29		
15	土師器	壺	201	75	-	BCGHI	70	普通	橙	緑泥片岩?含む 口縁木口ナデ No.5・6・9・12		
16	土師器	小型甕	148	19.9	9.3	BGHI	65	普通	橙	緑泥片岩?含む 口唇部と胴部風化 カマドNo.20・22・25~28	69-6	

あり、須恵器坏とした。口唇部は内面に沈線、底部は手持ちヘラケズリ調整。坏Gとすべきであろう。8・9は南壁近くの覆土下層から出土した。

10は土師器皿。内面は風化しており、暗文の有無は不明であるが、胎土に角閃石を含み、北武蔵型暗文皿の可能性はある。

11・16は小型甕。16はカマド内から出土した。口縁部内外面と胴部外面の器面が剥落している。被熱の影響であれば、カマド火床面に設置して使用されたものか。12・13は甕である。14の壺はカマド内から出土した。

時期は7世紀後半代である。8の須恵器坏や10の皿の出土から、7世紀後半でも末葉に軸足を置くものと思われる。本書VI期に対応する。

第50・57号住居跡 (第145・146図)

第50号住居跡はZO-25グリッドに位置する。住居跡北側は調査区外に延びている。第51・52・54号住居跡と重複し、第52号住居跡を切り、第51・54号住居跡に切られていた。調査時点では南西壁と北西壁は第51・54号住居跡に削平されたと考えていたが、第57号住居跡が同一住居跡の一部と想定し、大型住居跡と考えた方が妥当であるこ

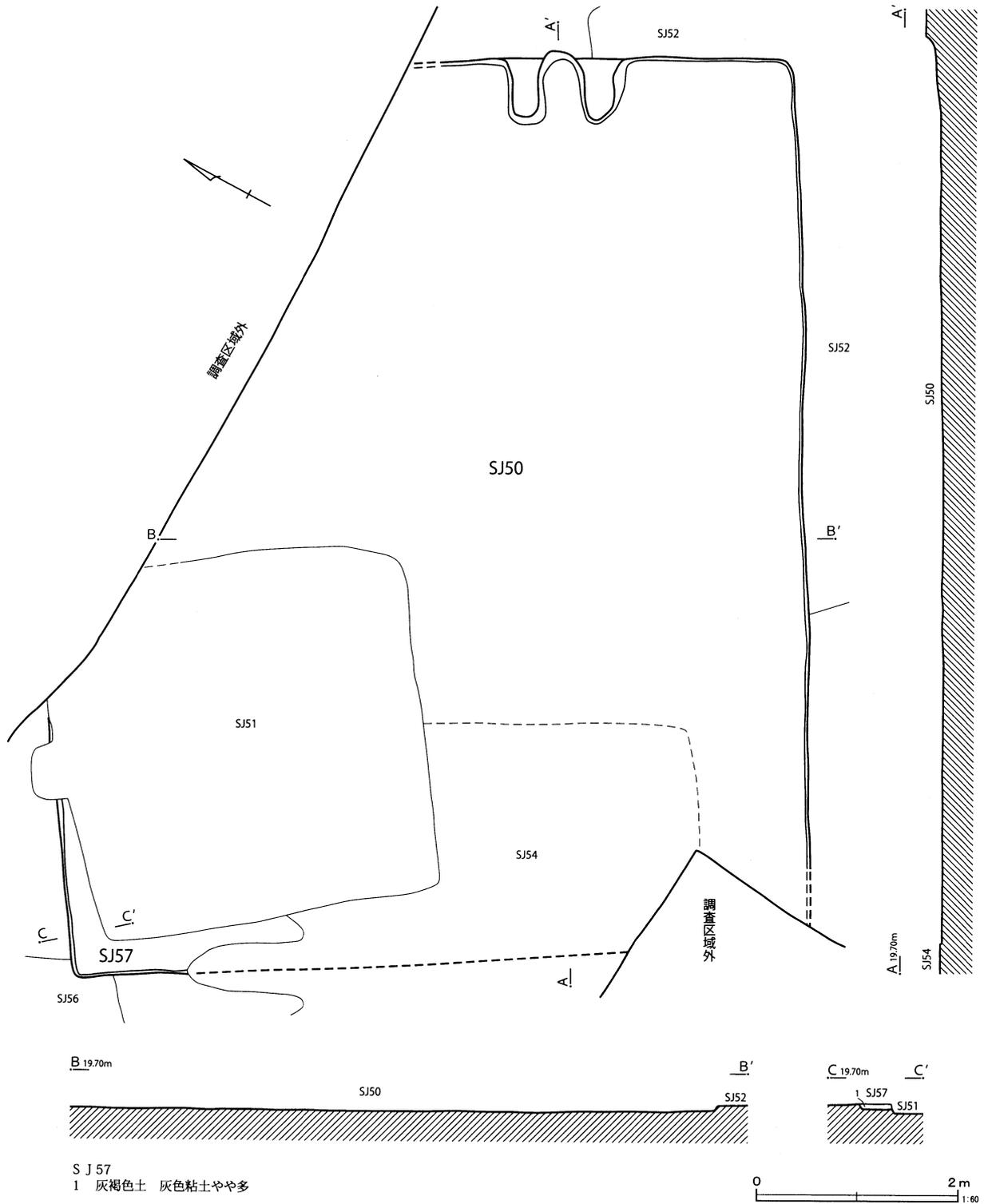
とが判明した。ここでは第50・57号住居跡を一軒と考えると報告する。

平面形は長方形と考えられ、規模は長軸長8.94m、短軸長7.50m、深さ0.05mの大型住居跡である。主軸方位はN-61°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。部分的に炭化物層が薄く堆積していた。埋土は灰色粘土混じりの灰褐色土が堆積していたが、埋没状況は不明確である。

カマドは北東壁に設けられていた。燃烧部はほぼ壁内に収まる。煙道部は壁外に延びると考えられるが、削平されている。規模は全長0.74m、袖部外幅1.13m、深さ0.14mである。側壁は強く被熱していた。底面は段差なく床面に連続する。埋土は第2~5層が天井部崩落土と考えられる。

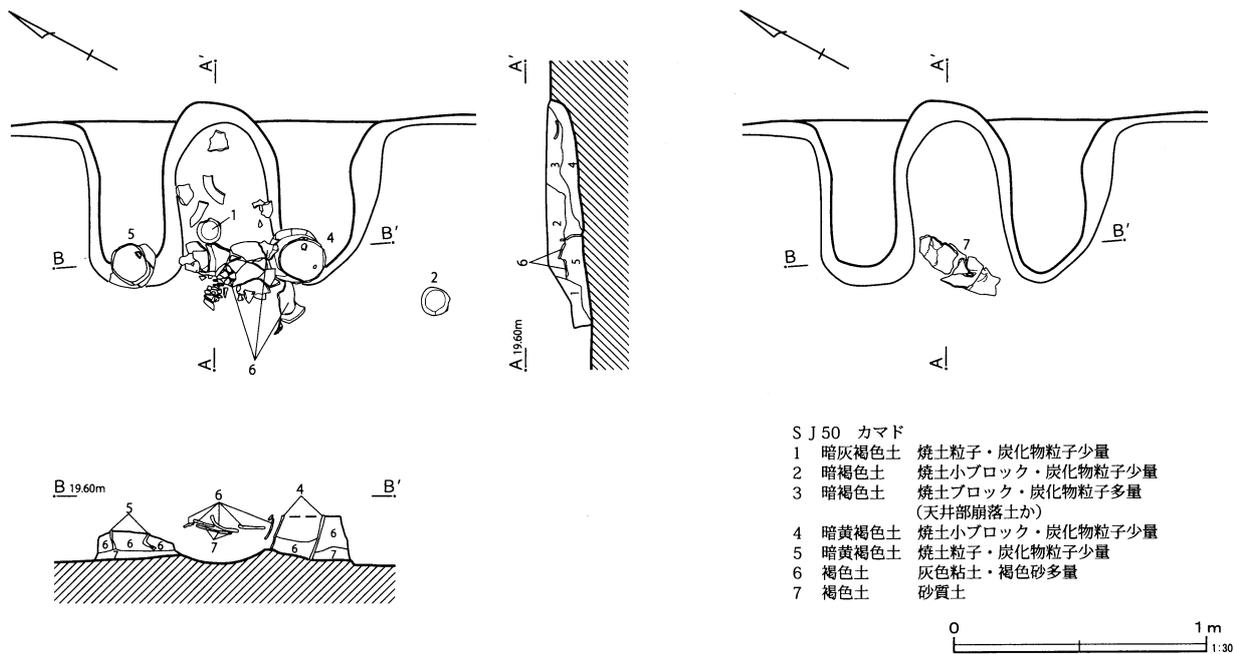
袖部は灰色粘土混じりの褐色土を積み上げて構築されていた。焚き口部の両袖には底部を欠いた土師器甕を逆位に据え芯材としていた。また、両袖の甕を繋ぐように土師器甕が2個体出土した。おそらくソケット状に連結して、天井部の架構材として使用されたと考えられる。燃烧部中央付近からは土師器坏が1点出土した。性格は不明である。貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。



第145図 第50・57号住居跡

出土遺物は少ないが、カマド内とその周辺には比較的まとまっていた。土師器坏・甕がある（第147図）。1～3は比企型坏である。口唇部内面に沈線、内面+口縁部外面に赤彩が施される。3はやや小振りとなる。

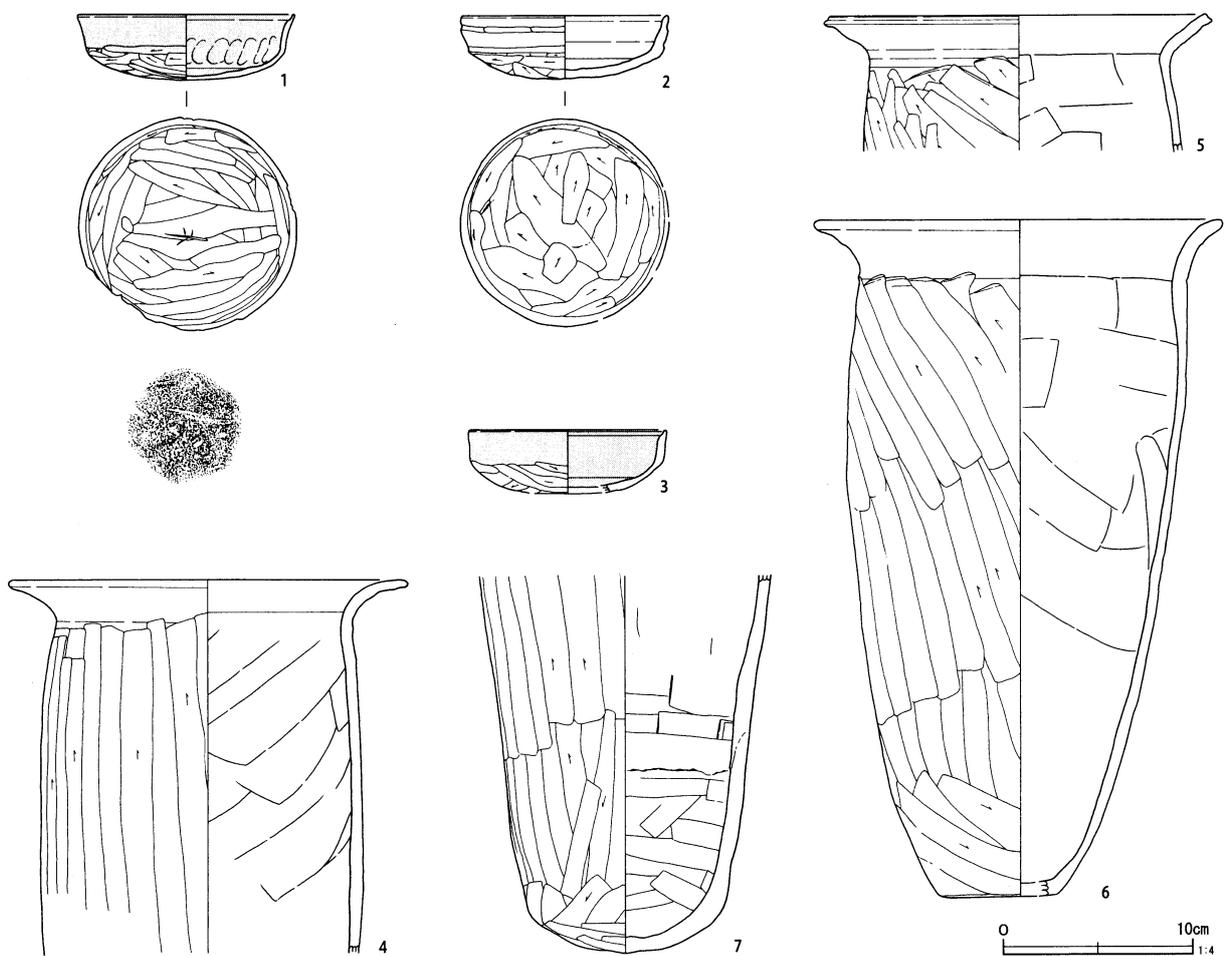
4～7は土師器甕である。鬼高系の長甕で、胴部器壁は厚い。7は在地（比企地域）の甕である。口縁部を欠く。胴部は縦方向のケズリ。器壁は厚い。4～6は北武蔵の土と思われる。胴部は縦ケズリと斜めケズリを施すものがある。器壁は在地



- S J 50 カマド
- 1 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 2 暗褐色土 焼土小ブロック・炭化物粒子少量
 - 3 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子多量
(天井部崩落土か)
 - 4 暗黄褐色土 焼土小ブロック・炭化物粒子少量
 - 5 暗黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 6 褐色土 灰色粘土・褐色砂多量
 - 7 褐色土 砂質土

0 1m
1:30

第146図 第50号住居跡カマド



第147図 第50号住居跡出土遺物

第41表 第50号住居跡出土遺物観察表 (第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	114	35	-	A E H I J K	90	普通	明赤褐	比企型坏 内面+口縁部外面赤彩 底部外面中央木葉痕	カマドNo3	70-2
2	土師器	坏	108	34	-	A C E H K	95	良好	橙	有段口縁坏 北武蔵の土 2条の沈線で段を表現	カマドNo12	70-3
3	土師器	坏	(103)	33	-	H K	30	普通	橙	比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	カマド	
4	土師器	甕	205	197	-	C D E G H	80	普通	橙	北武蔵の土か	カマドNo10	69-7
5	土師器	甕	196	72	-	C G H I	70	普通	橙	北武蔵の土か 白針なし	カマドNo1	
6	土師器	甕	212	35.9	(64)	B C E G H I L	70	普通	橙	武蔵型甕 北武蔵の土	カマドNo2・9・11	70-1
7	土師器	甕	-	200	-	A C E H I J L	50	普通	橙	在地産 白針少含む	カマドNo2	

のものより薄いようだ。武蔵型甕のプロトタイプであろう。

遺物の時期は比企型坏の口径や特徴から7世紀中葉頃に位置付けられよう。土師器甕は胴部斜めケズリをもつ例(5・7)があり、若干新しい様相がうかがえる。7世紀中葉～後半頃の土器群と考える。本書V期～VI期古相に対応する。

第51号住居跡 (第148図)

第51号住居跡はZO-24・25グリッドに位置する。住居跡北隅は調査区外に延びている。重複する第50・54・57号住居跡を切っていた。

平面形は方形で、規模は一辺3.65×3.62m、深さ0.07mである。主軸方位はN-35°-Wを指す。

床面は平坦で、カマド前面から中央部付近は硬化面が形成されていた。周辺部は軟質で、床面下に方形周溝墓状の掘り方を持っていた。覆土は砂質の強い明褐色土で構成されていた。

カマドは北西壁中央部に設けられている。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。規模は全長1.38m、袖部外幅1.00m、深さ0.33mである。燃焼部は長さ0.78m、内壁幅0.50mで、底面は皿状に窪む。第5層は掘り方で、その上層の第3層が灰層である。煙道部は削平されていた。

燃焼部手前には深さ10cm前後の焚口部掘り方が検出された。埋土は赤褐色焼土が二次的に敷き詰められており、硬くしまっていた。袖部は白色粘土を積み上げて構築されていた。

貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。図示可能な遺物は土師器坏が1点あるのみである(第149図)。1は土師器坏

である。底部を欠くが、丸底の北武蔵型坏と考えられる。口縁部は直立し、口縁下に無調整部を残す。体部はヘラケズリ調整である。推定口径14.3cm、残存高35cm。胎土に角閃石・白色粒子・黒色粒子を含む。20%残。焼成は普通で、橙色。覆土から出土した。住居跡の時期を特定することは難しいが、第50号住居跡との関係から7世紀中葉以降となることは間違いない。出土した土師器坏は8世紀初頭～前半頃に位置付けられる。重複関係とも整合的である。8世紀前半(本書VII期)を中心とした時期と考えておきたい。

第52号住居跡 (第150・151図)

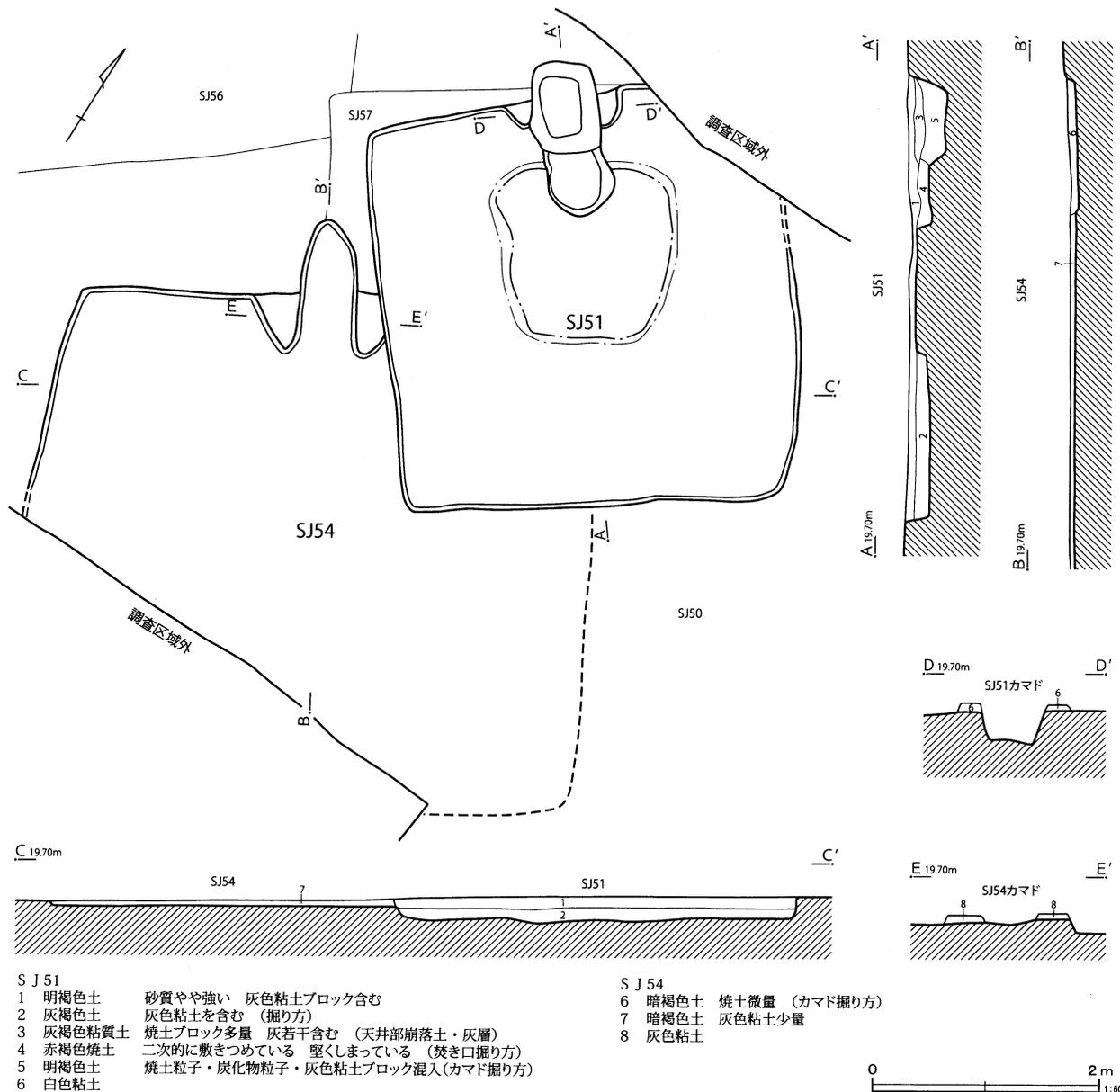
第52号住居跡はZO-25・26グリッドに位置する。住居跡南東部は調査区外に延びている。重複する第50号住居跡、第16号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長6.42m、短軸長6.30m、深さ0.50mである。主軸方位はN-131°-Wを指す。

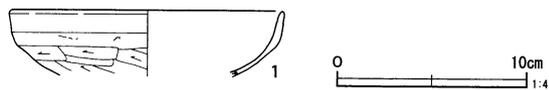
床面は中央部が硬く締まっていたが、壁際は軟弱であった。埋土は6層に分層された。故意に埋め戻された痕跡は見出せなかった。

カマドは南西壁に設けられていた。燃焼部は壁内に収まり、煙道部は壁外に長く延びていた。規模は全長2.68m、袖部外幅0.95m、深さ0.72mである。燃焼部は長さ1.38m、内壁幅約0.80mである。側壁、火床面ともに強く被熱し、燃焼部から続く煙道部のほぼ半分も強く被熱していた。

煙道部は燃焼部から20cmほどの段差をもって立ち上がり、水平方向に1.30mに延びる。煙道部幅



第148図 第51・54号住居跡



第149図 第51号住居跡出土遺物

は30~40cmである。

袖部は灰白色粘土（第7層）と明褐色粘土（第5層）を積んで構築されていた。左袖では薄い炭化物層（第6層）を間層に挟んでいた。埋土は第1~3層が天井部崩落土で、第3層には焼土ブロックが多量に含まれていた。第4層が灰層で、

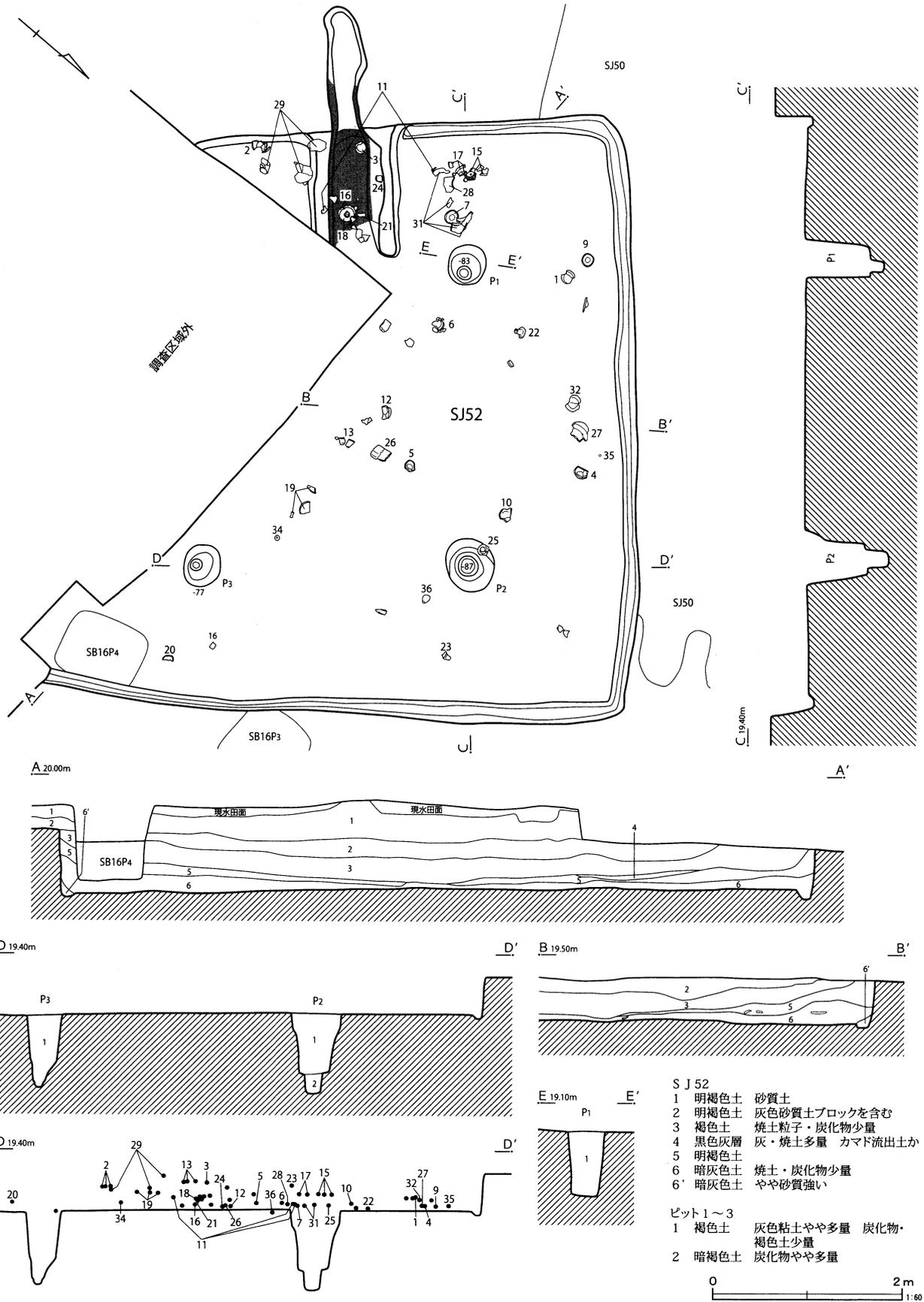
火床面に堆積していた。

焼き口部の奥約50cmの燃焼部中央付近、中心線から左に寄った位置から、口縁部を下にした土師器高坏が2点上下に重なった状態で出土した。支脚に転用したものと考えられる。

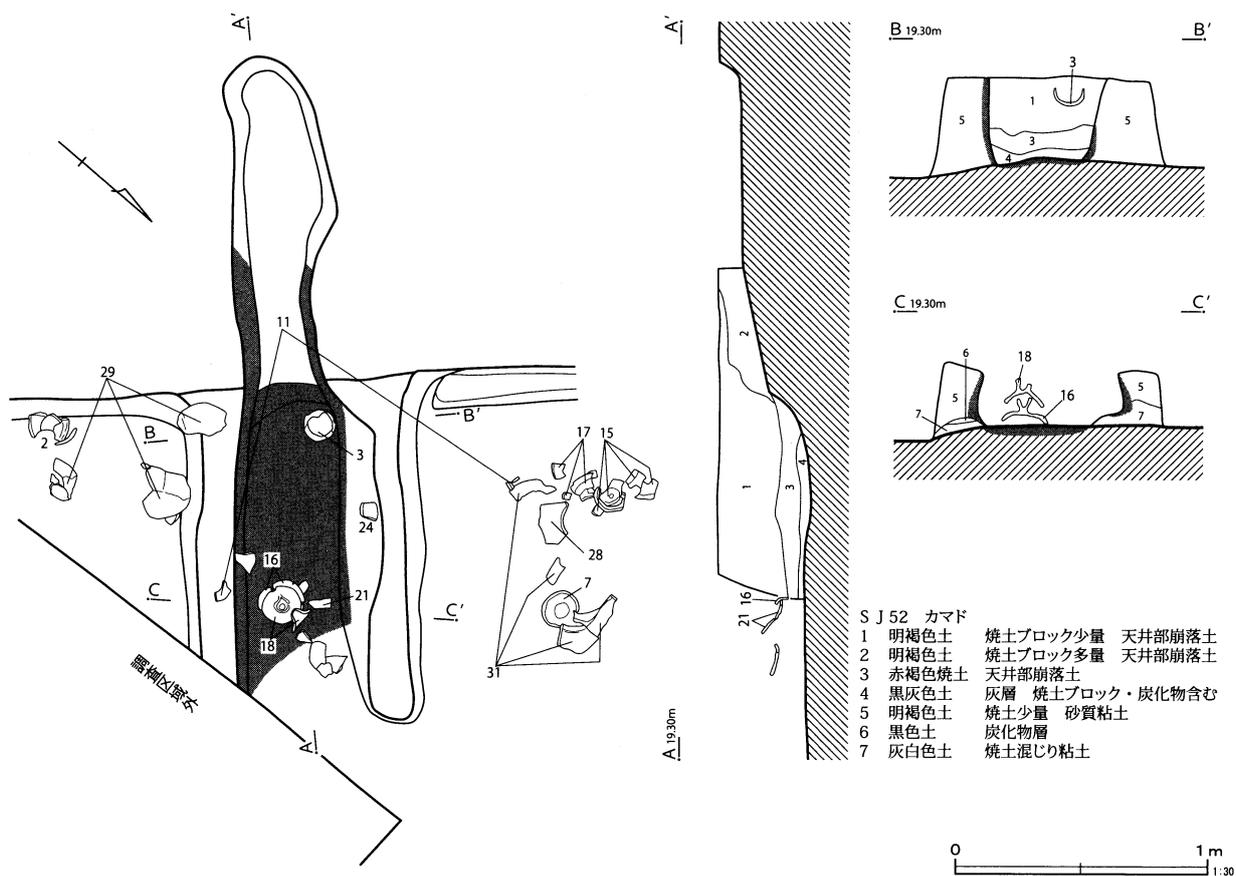
ピットは3本検出された。P1~P3は規則的に配置され、支柱穴と考えられる。柱間距離はP1-P2間は3.12m、P2-P3間は2.82mである。

壁溝は幅12~22cm、深さ9cmほどで、カマド右袖部に接する壁際から北東壁を巡っていた。

貯蔵穴は検出されなかった。



第150図 第52号住居跡



第151図 第52号住居跡カマド

遺物は住居跡全体から満遍なく出土している。特にカマド周辺からは、ほぼ完形品や一個体になるとと思われる破片がまとまって出土した。器種としては土師器坏・椀・鉢・高坏・甕・壺、石製紡錘車等がある（第152・153図）。

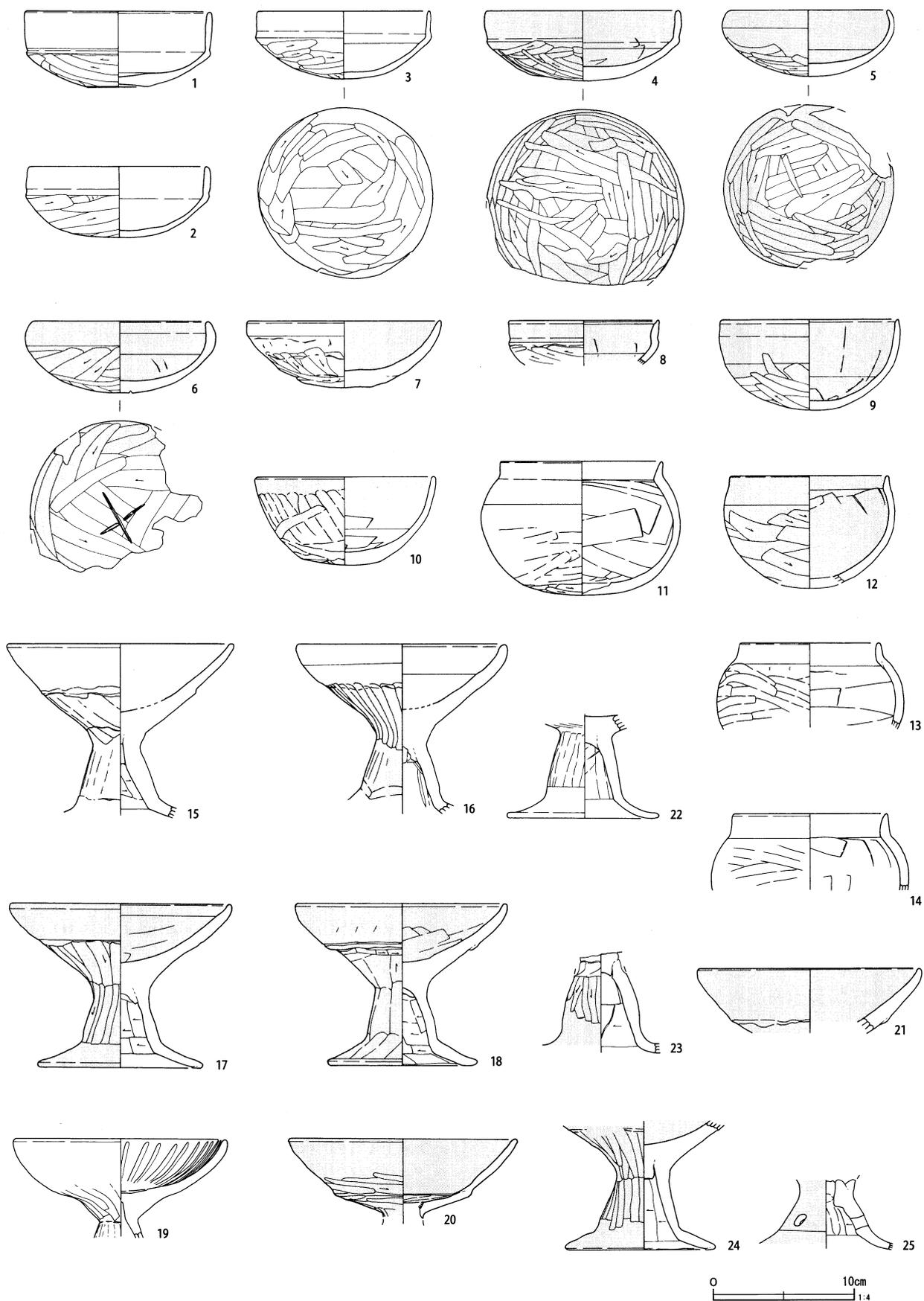
1～4は坏蓋模倣坏で、口縁部が直立する。1～3には赤彩はなく、北武蔵産と思われる。1は白色針状物質が含まれるが、北武蔵の土に似る。上野（藤岡周辺）でつくられた可能性もある。2はカマド左脇の壁際上層から出土した。壁上または棚状施設から滑り落ちたかのような状況である。3はカマド燃焼部奥壁近くの上層から出土した。出土状況は2の坏と類似している。2・3は北武蔵の土と思われる。無彩。4は比企型の模倣坏である。底部外面を除いて赤彩される。5～7は口縁部が内彎する坏。赤彩されている。8は（続）比企型坏で、混入品である。9・10は深椀で赤彩

される。11～14は鉢。口縁部が小さく屈曲して立ち上がる。11・12は赤彩が施される。

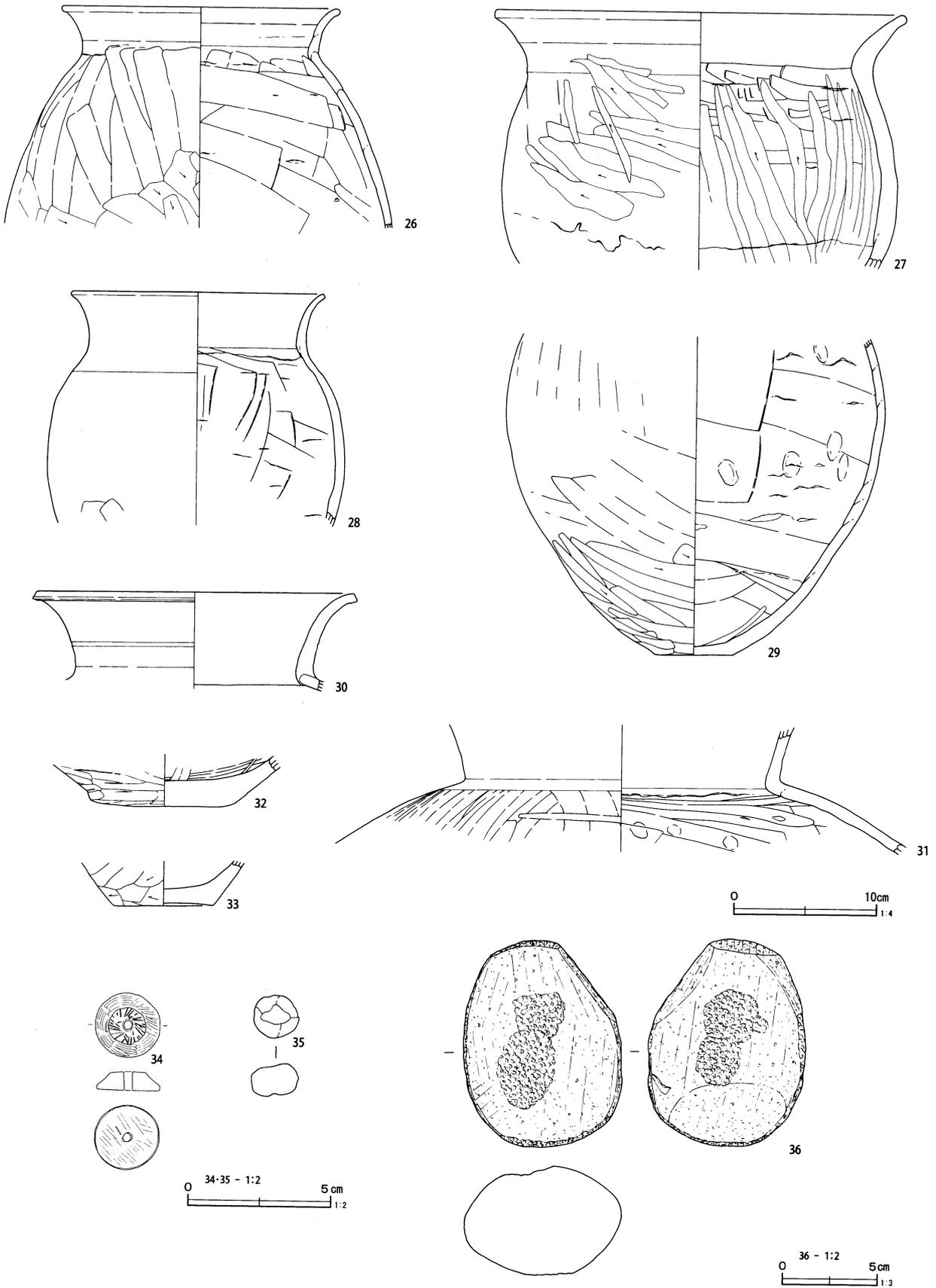
15～25は高坏である。15～18は同一タイプで坏部下端の稜は痕跡的である。赤彩される。16・18はカマド燃焼部出土。支脚に転用されたものである。19は坏部内面に粗い暗文が施文される。赤彩痕がなく、非在地産（北武蔵産か）の可能性はある。22も無彩である。25の脚部上端は栓がしてある。脚部透穴2孔残る。本来は3孔透と思われる。

26～29は土師器甕である。全体の形状がわかる資料はない。27は系譜がよくわからない。26はもう少し口径が縮小するかもしれない。長胴化しつつあるが、まだ胴部の丸みが強い。30・31は壺である。34は滑石製紡錘車である。完形品。住居跡中央から北東に寄った覆土下層から出土した。

遺物の時期は直立口縁の坏蓋模倣坏が出土しており、鬼高I期段階と捉えられる。本書IV期



第152図 第52号住居跡出土遺物 (1)



第153図 第52号住居跡出土遺物 (2)

第42表 第52号住居跡出土遺物観察表 (第152・153図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	132	54	43	AEHIJK	85	普通	橙	坏蓋模倣坏 在地産? 藤岡産かも	No12	70-4
2	土師器	坏	125	50	-	ACEHI	95	普通	橙	北武蔵の土 坏蓋模倣坏 無彩	No32	70-5
3	土師器	坏	122	48	-	ACEHI	70	良好	橙	北武蔵の土か	No31	70-6
4	土師器	坏	(136)	50	-	AHEIJ	75	普通	橙	比企型 模倣坏 白針含む 赤彩	No6	70-7
5	土師器	椀	112	47	-	EI	85	普通	橙	在地産か 白針なし 赤彩	No15	70-8
6	土師器	坏	(121)	50	-	CEIJ	60	普通	にぶい橙	在地産 白針含む 赤彩 底部外面「+」状のヘラ記号	No27	71-1・2
7	土師器	坏	135	47	-	GHIL	80	普通	橙	在地の土か 内面：僅かに赤彩痕 外面：赤彩不明 底部突出しケズリ残している	No28	71-5
8	土師器	坏	(105)	31	-	AHEI	20	普通	橙	比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩		
9	土師器	椀	125	64	-	CEI	90	普通	橙	在地産 白針含まない 赤彩	No11	71-6
10	土師器	椀	(126)	62	55	DEFHIJ	60	普通	橙	在地産 白針含む 煤付着し不明瞭か 全面赤彩か	No5	71-7
11	土師器	鉢	114	94	-	EHI	70	普通	橙	在地産か 白針なし 外面+口縁内面赤彩	No29・31・43	71-3
12	土師器	鉢	(111)	76	-	ACDEHIJ	45	普通	にぶい橙	在地産 白針含む 全面赤彩	No24	
13	土師器	鉢	(98)	61	-	ACEHIJ	30	普通	橙	在地産 白針含む 無彩 胴部(ヘラ)ナデ	No22	
14	土師器	鉢	(109)	53	-	ACHI	20	普通	にぶい赤褐	在地産 白針なし 胴部ナデか 器面剥落 外面煤付着 赤彩か(不明瞭)		
15	土師器	高坏	(158)	123	-	ACEHIJL	65	普通	橙	在地産 白針あり 坏部内面+外面赤彩	No30	
16	土師器	高坏	147	120	-	EHIJ	95	普通	橙	雑なつくり 在地産 白針含む 赤彩 カマド	No41	71-4
17	土師器	高坏	156	116	(105)	ACEIJL	65	普通	にぶい赤褐	在地産 白針あり 赤彩	No30	
18	土師器	高坏	148	115	(106)	ACDEHIJ	85	普通	橙	在地産 白針含む 赤彩 カマド	No36	71-8
19	土師器	高坏	148	70	-	CEGH	50	普通	橙	北武蔵の土か 白針なし 無彩	No19・20	
20	土師器	高坏	160	56	-	CEHK	45	普通	橙	在地産 白針なし 赤彩	No17	
21	土師器	高坏	(156)	45	-	CEG	25	普通	橙	在地産? 赤彩	No36	
22	土師器	高坏	-	78	(100)	CHI	70	普通	橙	北武蔵の土か 無彩	No13	
23	土師器	高坏	-	70	-	ACHK	80	普通	橙	在地産 白針なし 外面赤彩	No2	
24	土師器	高坏	-	91	(100)	CEJK	70	普通	橙	在地産 白針含む 赤彩	No42	
25	土師器	高坏	-	49	-	ACEHIJ	95	普通	橙	在地産 白針含む 赤彩	No4	
26	土師器	甕	(190)	154	-	CEHI	25	普通	にぶい赤褐	胴部ヘラナデ+ケズリ 内面ヘラナデ 在地産? 白針なし	No21	
27	土師器	甕	(310)	180	-	CEHI	20	普通	橙	No32と同一個体か 白針なし	No8	
28	土師器	甕	(174)	163	-	CIK	20	普通	褐	北武蔵の土か 胴部ナデ一部ケズリ	No29	
29	土師器	甕	-	224	(55)	CEIL	30	普通	にぶい褐	外面ヘラナデ+ケズリ 内面指押え+ヘラナデ 在地産? 白針なし カマド	No40・No33・34・カマド袖	
30	土師器	壺	(220)	69	-	AHIK	30	普通	橙	在地産か 白針なし		
31	土師器	壺	-	90	-	ACEHIL	20	普通	橙	大型壺 白針なし 胴部ナデ 内面ヘラナデ	No29	
32	土師器	甕	-	36	103	CEGIL	80	普通	明赤褐	No27と同一個体か 白針なし	No9	
33	土師器	甕	-	28	69	EI	75	普通	明赤褐	底部+胴部ケズリ 白針なし カマド		
34	石製品	紡錘車	-	-	-	-	-	-	-	径46cm(上1.5 下4.6) 厚さ1.3cm 孔径0.5cm 重量37.3g 滑石製 色調：灰	No18	72-1
35	土製品	粘土塊	-	-	-	ACI	100	普通	橙	焼成粘土塊 長径24cm 短径22cm 最大厚1.5cm 重量7.63g 性格不明	No7	
36	石製品	敲石	長さ10.8cm 幅8.35cm 厚さ5.65cm 重さ796.0g				緑色岩製	上端と下端に敲打面	表裏面中央に敲打による凹部2ヶ所	No39		72-2

(古)、5世紀末葉を中心とした年代と考えておく。

第53号住居跡 (第154図)

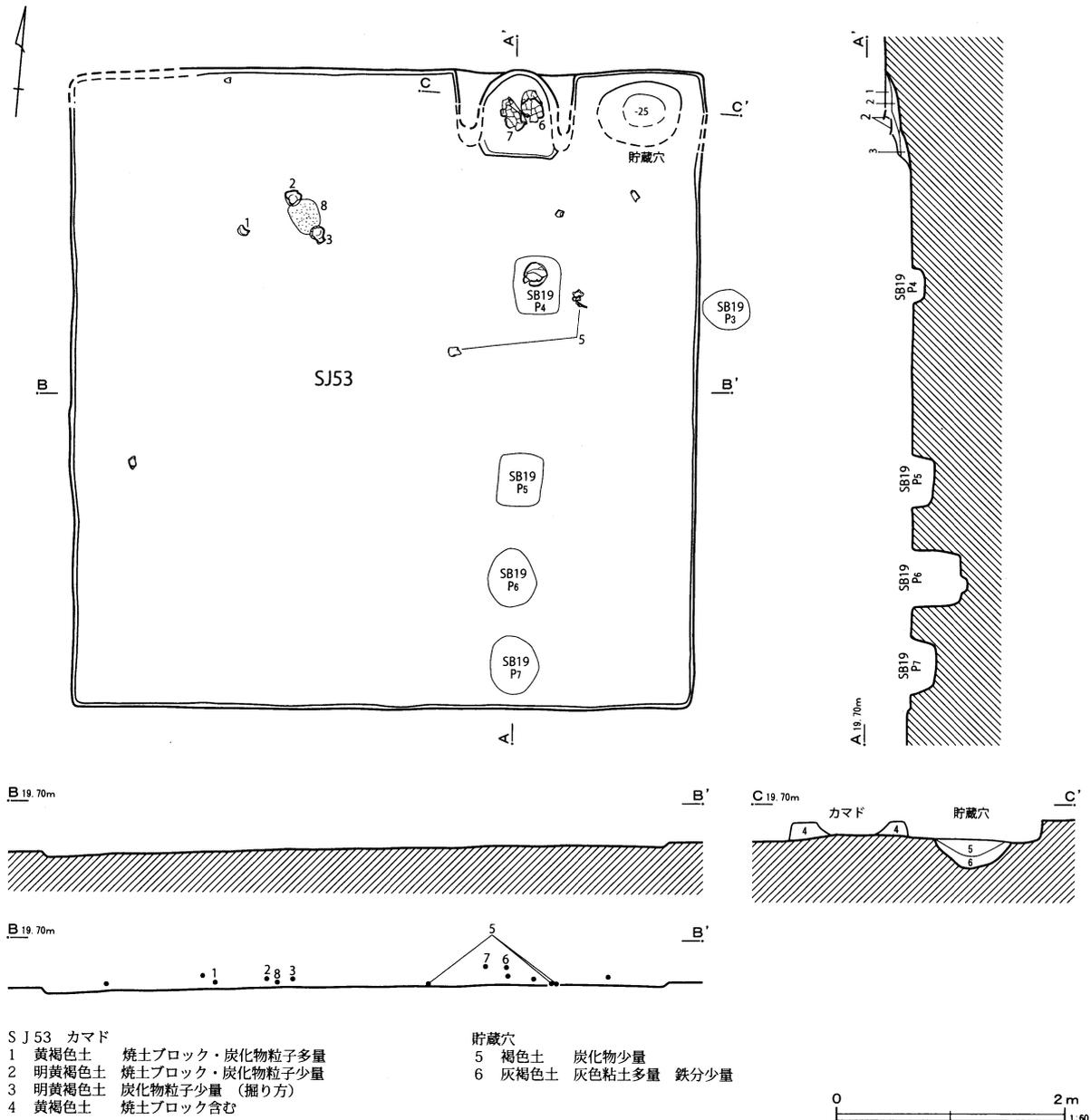
第53号住居跡はZO-26・27グリッドに位置する。住居跡北壁付近にトレンチが入っている。重複する第19号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は比較的整った方形である。調査時にはカマドの左右で壁ラインがずれると認識したが、左側の壁ラインは掘り過ぎであることが判明し

た(図上で補正した)。規模は5.58×5.47m、深さ0.03mである。主軸方位はN-4°-Wを指す。

地山と覆土の差が少なく、プランの確定は困難であったが、床面も明確に把握することはできなかった。結果的に掘り方まで掘削が及んでしまった。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部はほぼ壁内に収まる。煙道部は検出されなかった。燃焼

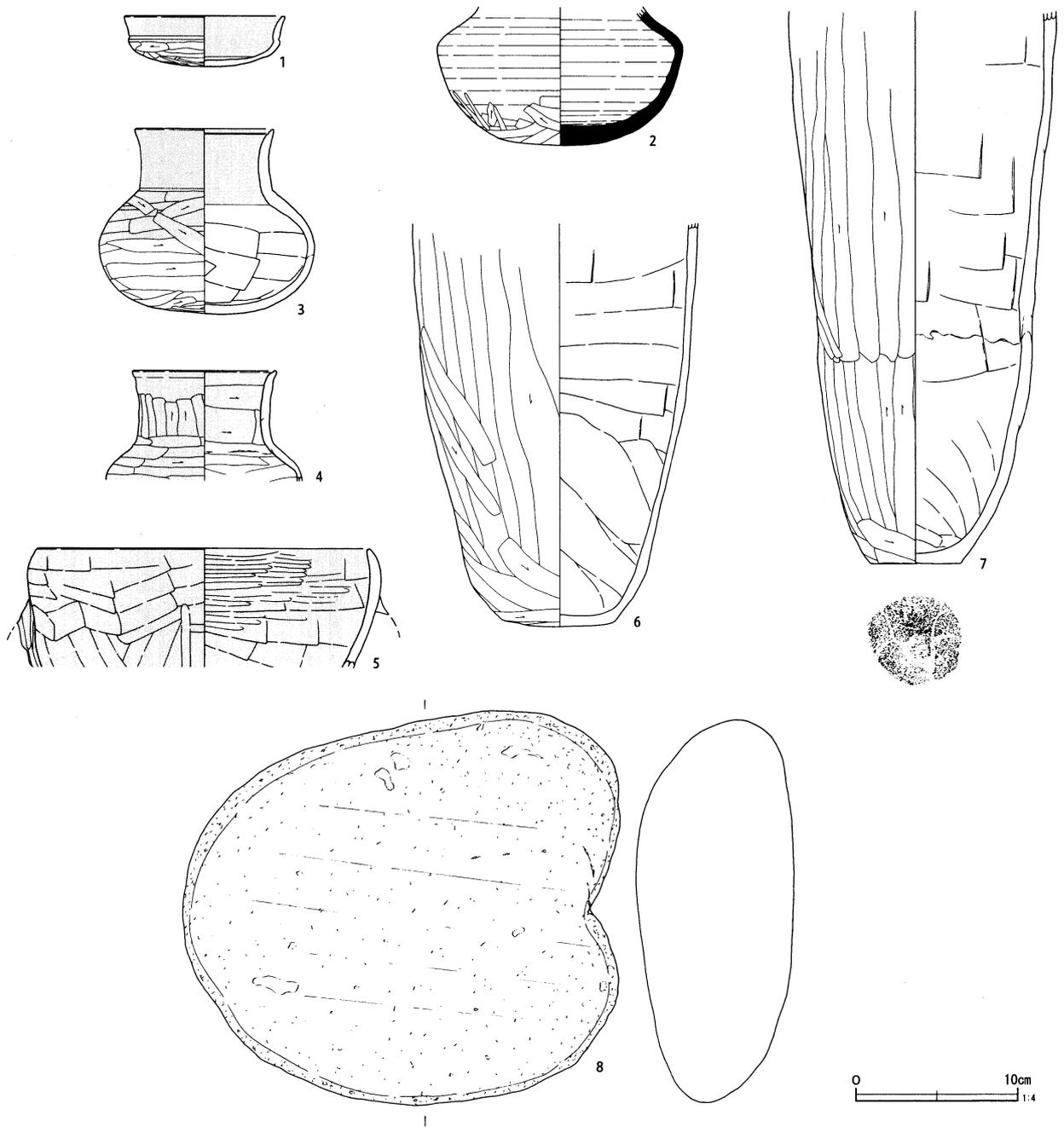


第154図 第53号住居跡

部焚口部寄りにはトレンチにより残存しない。規模は残存長0.77m、袖部外幅1.05mである。燃烧部底面は皿状に窪み、弱く被熱していた。灰層は残存していなかった。第1・2層が天井部崩落土、第3層が掘り方埋土と考えられる。袖部は黄褐色土で構成され、焼土ブロックと焼土粒子が混在していた。焚き口部付近は削平されていた。燃烧部中央からは土師器甕の胴部が2个体横に並んだ状態で出土した。横二連掛けカマドとなる可能性がある。

貯蔵穴は、カマドに向って右脇の住居跡北東隅から1基検出された。北側半分はトレンチによって切られているため、全体の形態は不明であるが、楕円形と考えられ、残存規模は長径72cm、短径57cm、深さ25cmである。上層から土師器破片が出土した。ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。住居跡中央部北西の床面から、被熱した平石に接する状態で須恵器丸底壺と土師器埴が出土した。土師器坏・甕・埴・鉢・須恵器壺がある (第155図)。



第155図 第53号住居跡出土遺物

第43表 第53号住居跡出土遺物観察表 (第155図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	(98)	32	-	AHI	50	普通	橙	(続) 比企型坏 白針なし 赤彩	No8	72-3
2	須恵器	壺	-	85	-	EHIJK	80	普通	灰	南比企産 底部手持ちヘラケズリ	No9	72-5
3	土師器	埴	(84)	115	-	CDEHI	75	普通	橙	在地産か 白針なし 赤彩	No10	72-4
4	土師器	小型壺	(88)	68	-	GHI	30	良好	橙	在地産か 白針なし 赤彩	貯蔵穴	
5	土師器	把手付鉢	(208)	75	-	HIJK	30	良好	にぶい赤褐	把手付鉢 内外面赤彩 同一個体の胴部破片と思われるもの有り 類例不明	No5・6	
6	土師器	甕	-	248	6.7	CEGHI	70	普通	灰褐	北武蔵の土 白針なし	カマドNo1	
7	土師器	甕	-	343	5.5	BCEHIL	50	普通	橙	北武蔵の土 白針なし 胴部ケズリ 内面ヘラナデ 底部木葉痕	カマドNo2	
8	石製品	台石	-	-	-	-	-	-	-	長さ27.20cm 幅24.60cm 厚さ9.75cm 重さ9300g 砂岩製 表面は滑らかで磨ったような痕跡がある 両面ともに赤化した部分があり被熱した可能性がある	No11	72-6

1は(続)比企型坏である。口径9.8cmと小振りであり内面と口縁部外面赤彩が施される。2は須恵器丸底壺。南比企産で底部はロクロ整形後、手持ちヘラケズリ調整される。3は土師器埴。外面と口縁部内面赤彩。5は把手付の鉢?内外面赤彩される。内面上位はミガキ。把手は剥落している。あまり類例を見ない。位置的には第19号掘立柱建物跡ピット上にある。掘立柱建物跡に伴う遺物とした方がよい。6・7は土師器長胴甕。カマド内から出土したものでいずれも口縁部を欠く。胴部は非常に長い。7は底部木葉痕を残す。いずれも北武蔵の土と思われる。8は被熱した扁平な円礫である。性格は不明である。

遺物の時期は小型の(続)比企型坏と長胴甕が伴うことから、7世紀中頃、本書V期～VI期に位置付けられよう。

第54号住居跡 (第148図)

第54号住居跡はZO-24・25グリッドに位置する。住居跡南側は調査区外に延びている。第50・51・57号住居跡と重複し、第50・57号住居跡を切り、第51号住居跡に切られていた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長3.23m、短軸長3.10m、深さ0.05mである。深さが浅いことから削平されていると考えられる。主軸方位はN-30°-Wを指す。

床面は既に削平されていた。掘り方底面には部分的に薄い炭化物層が堆積していた。

カマドは北西壁に設けられていた。燃烧部は壁を切り込んで構築されていた。全長1.20m、袖部外幅1.07m、深さ0.08mである。火床面は削平され掘り方のみが認められた。詳細は不明である。袖部相当位置には灰色粘土が認められ、袖部構築材と推定された。

貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

図示可能な出土遺物はなく、遺構の時期は不明確である。重複住居跡との関係から、7世紀中葉以降、8世紀前半までの間には限定できる。

第55号住居跡 (第156・157図)

第55号住居跡はZO-28グリッドに位置する。住居跡南側は調査区外に延びている。重複する第43・44号土壙・第29号溝跡に削平されていた。

平面形は方形と考えられ、残存規模は長軸長4.22m、短軸長3.76m、深さ0.24mである。主軸方位はN-62°-Eを指す。

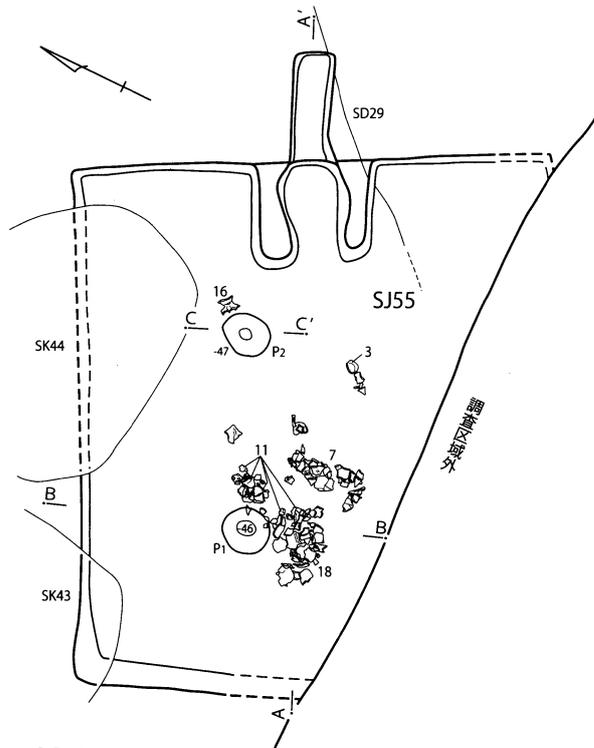
床面は概ね平坦で、部分的に薄い炭化物層が形成されていた。埋土は灰色粘土と炭化物混じりの褐色土で構成され、大きく上下2層に分層された。出土遺物は下層から多量に出土している。

カマドは北東壁に設けられていた。燃烧部は概ね壁内に収まり、煙道部は壁を大きく切り込んで構築されていた。煙道部は燃烧部から緩やかな段差をもってほぼ水平方向に延びる。全長1.70m、袖部外幅0.95m、燃烧部長0.90m、燃烧部幅0.45m、煙道部長0.80m、幅0.28～0.33mである。

燃烧部底面は僅かに窪み側壁は強く被熱していた。燃烧部中央部、中心線から向かって右に寄った位置には土製支脚が据えられていた。燃烧部底面には薄い灰層が形成されていた。埋土は焼土を多量に含む褐色土が厚く堆積していた。天井部崩落土と考えられる。煙道部には先端から流入したと思われる土層が観察された。また、土師器甕片が煙道部先端から出土し、煙突に転用された可能性があろう。左右の袖部には底部を欠いた土師器長甕が逆位に据えられ、袖の芯材に転用されていた。また、焚き口部、両袖の土器を繋ぐように、土師器長甕が2個体ソケット状に連結した状態で出土した。天井部の架構材であろう。

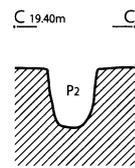
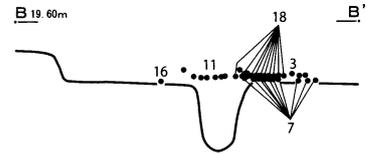
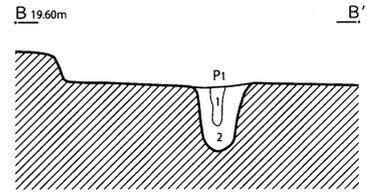
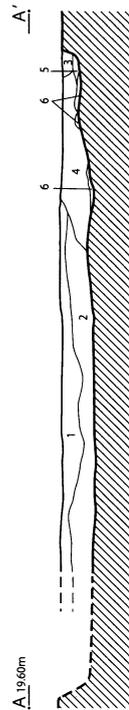
支脚脇から土師器長甕が転落したような状態で出土した。カマド上に置かれていたものか、カマドに掛かっていた甕が転落した可能性もある。カマド焚き口部左手前からはほぼ完形の土師器坏が出土した。左袖部脇からは砥石と鉄製品が接して出土した。

ピットは2本検出されいずれも住居跡に伴う



- S J 55
- 1 褐色土 灰色粘土・炭化物少量
 - 2 褐色土 炭化物やや多量 焼土・灰色粘土少量
 - カマド
 - 3 褐色土 灰色粘土多量 炭化物少量
 - 4 褐色土 焼土多量 炭化物やや多量 (天井部崩落土)

- 5 褐色土 炭化物・焼土少量 流入土
- 6 灰層
- 7 褐色土 褐色砂・灰色粘土粒多量
- 8 褐色土 灰色粘土主体



- ピット 1
- 1 灰褐色土 柱痕
 - 2 暗褐色土 炭化物少量含む



第156図 第55号住居跡

柱穴と考えられる。P1には柱痕が残る。P1-P2の柱間距離は1.56mである。

貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

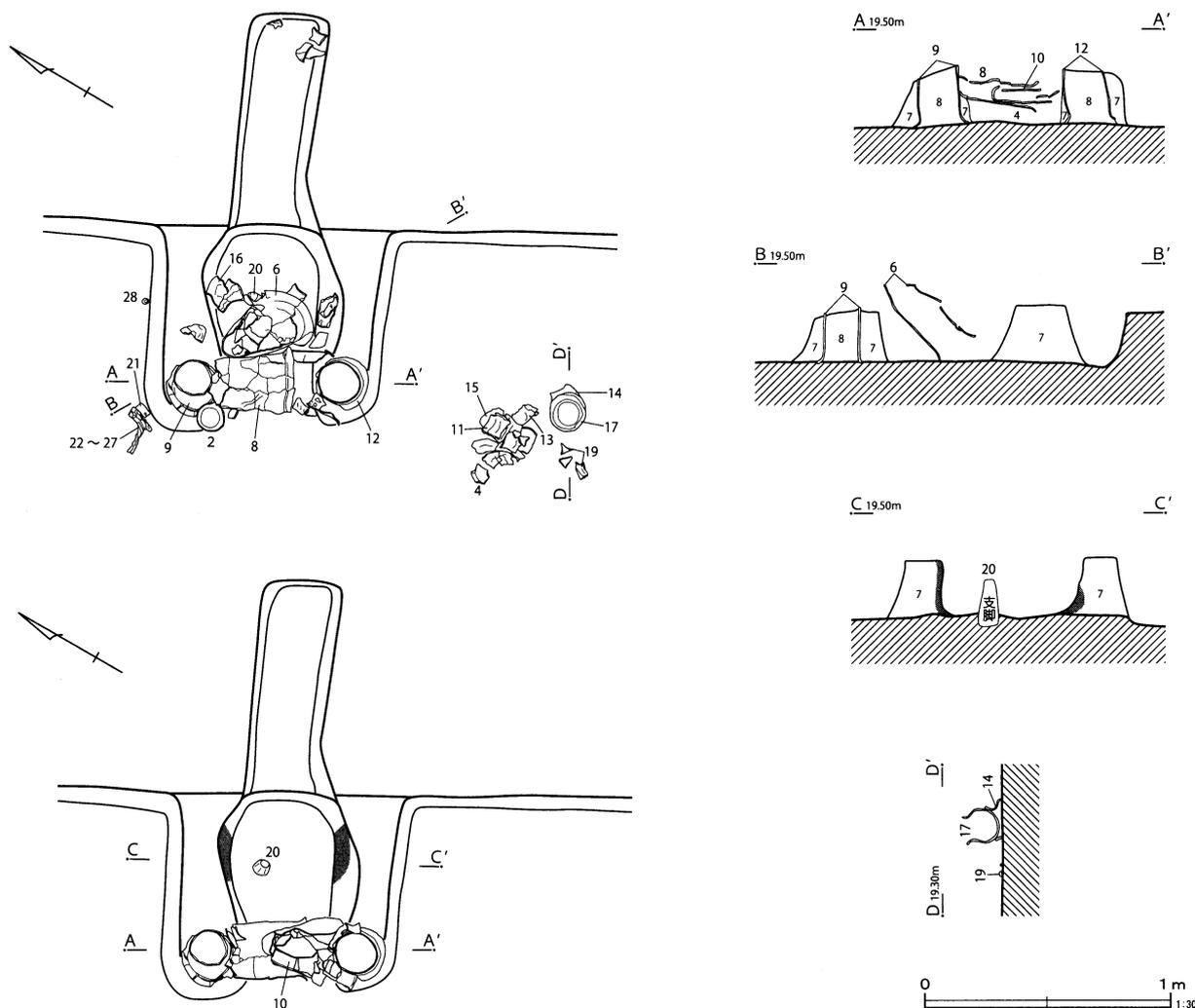
出土遺物は、住居跡中央部からカマド周辺に集中している。P1周辺の床面からは土師器長甕2個体、壺1個体が潰れた状態で出土した。カマドの右側の床面には、土師器壺の口縁部片を器台に転用し、その上部に小型甕が載った状態で出土した。転用器台に隣接して小型甕、小型台付甕が出土している。また、P2東側からは小型台付甕が出土した。カマド左袖外側覆土上層からは青銅製耳環が出土した。本来金銅製と思われるが、鍍金は確認できない。

出土遺物は土師器坏・甕・壺・小型台付甕・小型甕・小型甕、土製支脚、石製砥石、鉄製品（鎌・刀子・棒状製品）、青銅製耳環がある（第158～160図）。第158図1～5は土師器坏である。1～4は口径10cm大と小振りの坏蓋模倣坏である。胎

土から北武蔵の製品と推定される。5は内面沈線と赤彩が施される比企型坏（B類）である。2はカマド焼き口部床面出土。3は覆土下層出土である。6～12は土師器長甕である。胴部の膨らみはなく、長胴化が進行している。大きいものでは器高40cmにも達する。6はカマド燃烧部から逆位に出土。7・11は住居中央部床面出土。9・12はカマド袖の芯材、8・10はカマド天井部構材に転用された。13・17は小型甕。14は壺口縁部片である。器台に転用され、上部に17の小型甕が載せられていた。15・16は小型台付甕である。18は大型壺で中央部の床面から出土した。19は小型の甕、孔部単孔形態である。

20は中実の土製支脚。長さ13.1cmで、カマド燃烧部に下部が埋め込まれていた。21は小型の砥石で穴が貫通する。提げ砥として使用されたと考えられる。凝灰岩製である。

22～27は鉄製品。提げ砥とともにカマド脇から



第157図 第55号住居跡カマド

まとめて出土した。銹化が進み、製品同士がうまく分離できなかった。鎌と刀子、棒状製品がある。28は青銅製耳環である。直径20～22cm。鍍金は剥がれている。

出土遺物の時期は土師器模倣坏と長甕の特徴から7世紀前半～中葉、本書V期に位置付けられよう。

第56号住居跡 (第161図)

第56号住居跡はZO-24グリッドに位置する。住居跡北側及び西側は調査区外に延びている。重複する第57号住居跡に切られていた。

平面形態は方形系と推定されるが、南壁部が大きく歪んでいる。残存規模は長軸長4.63m、短軸長4.20m、深さ0.42～0.45mである。主軸方位はN

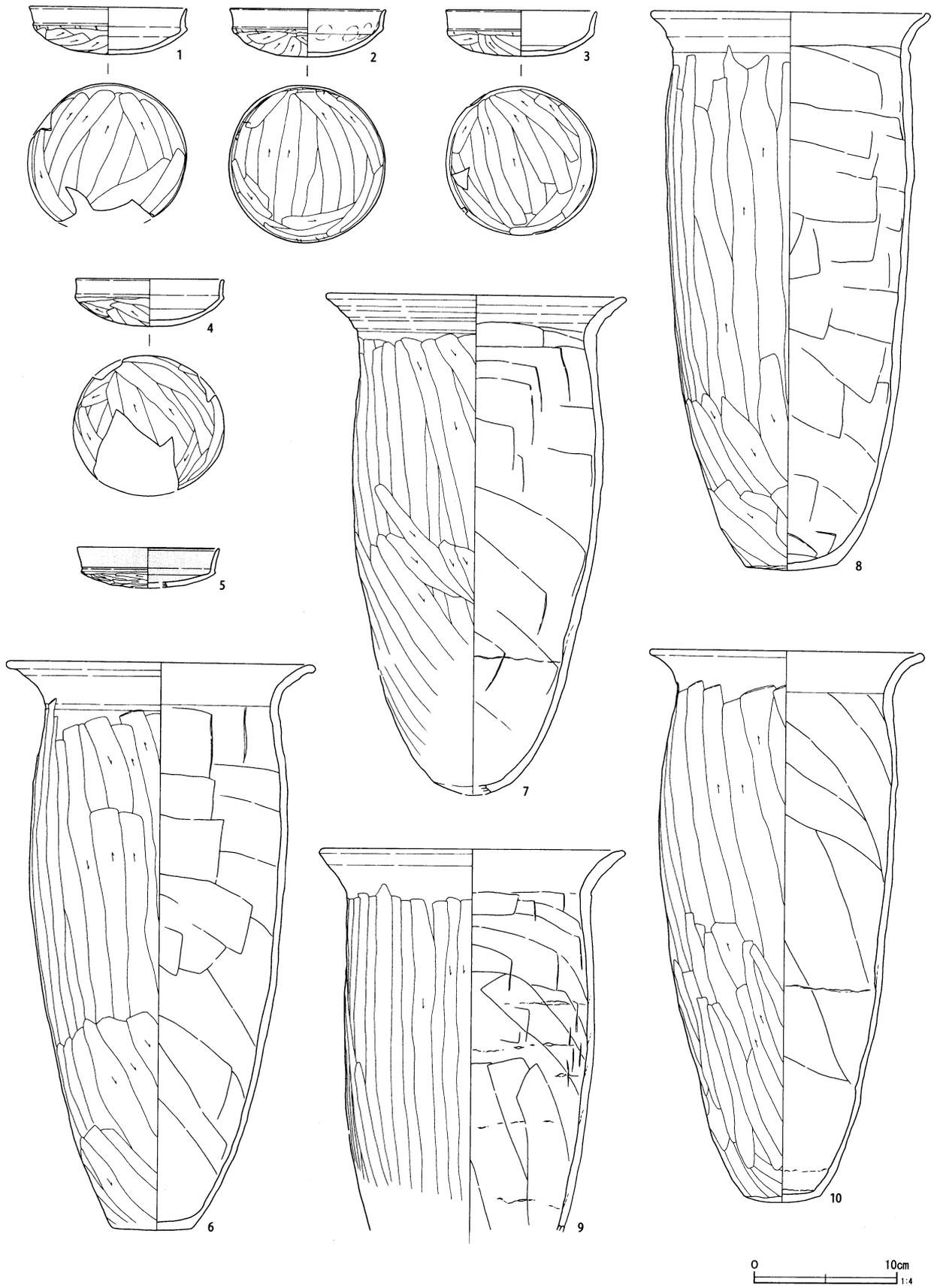
-53° - Eを指す。

床面は概ね平坦で、貼床が施されていた(第3層)。埋土は炭化物粒子・焼土粒子混じりの褐色土で構成され、明確な土層変化は観察されなかった。

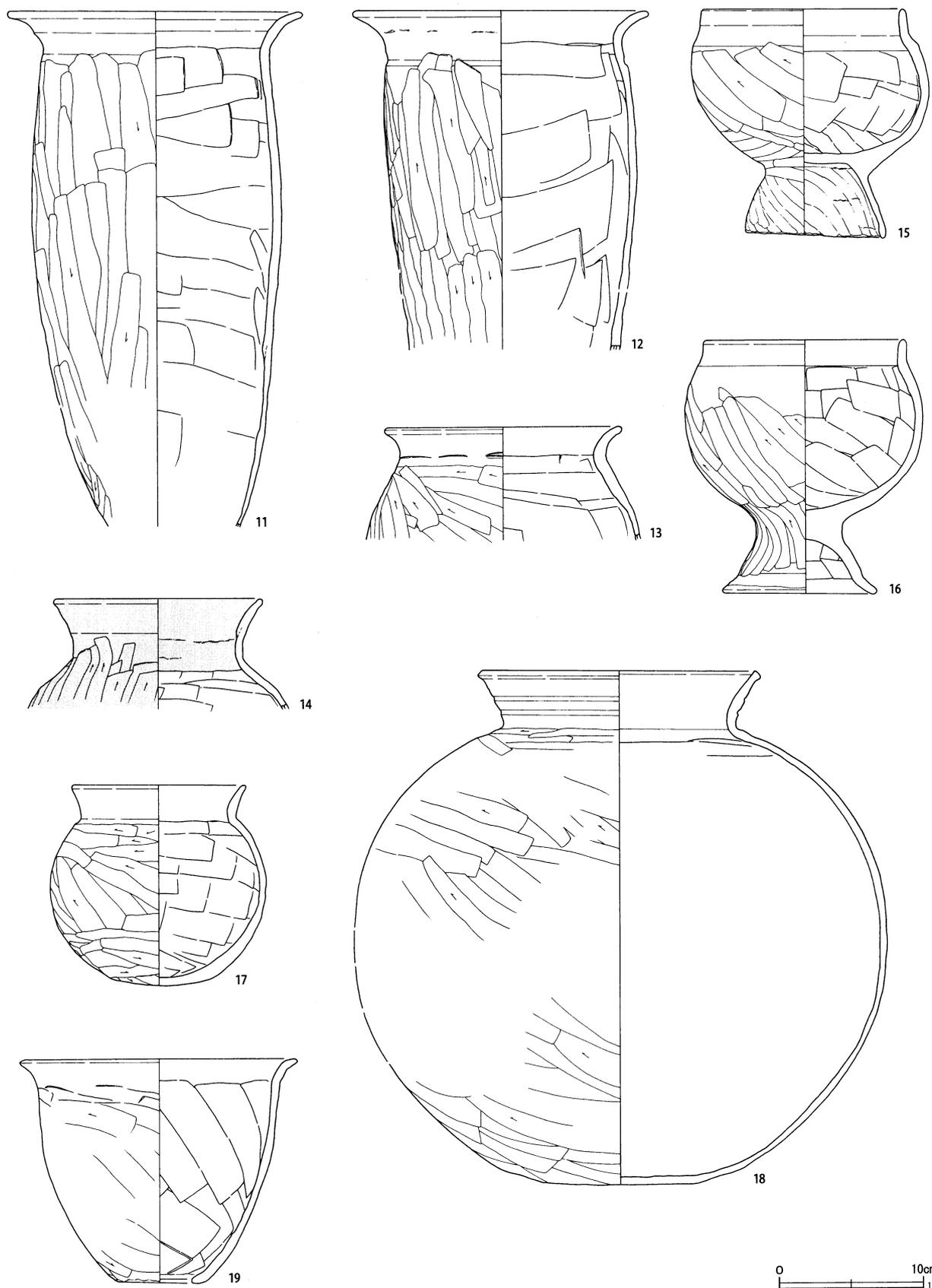
カマド、貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は、床面直上あるいは床面から僅かに浮いた状態で散在していた。土師器の坏と甕がある(第161図)。

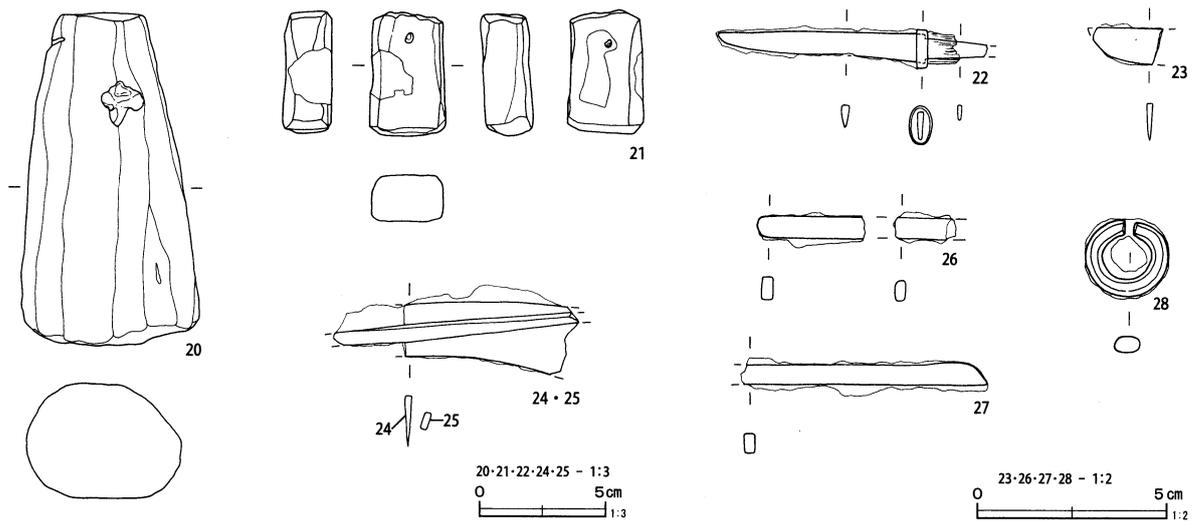
1・2は土師器坏である。いずれも丸椀形態の(続)比企型坏で、口縁部内面に沈線、内面と口縁部外面に赤彩が施される。3は土師器甕。武蔵型甕に連なる形態である。胴部上端は横方向のへ



第158图 第55号住居跡出土遺物 (1)



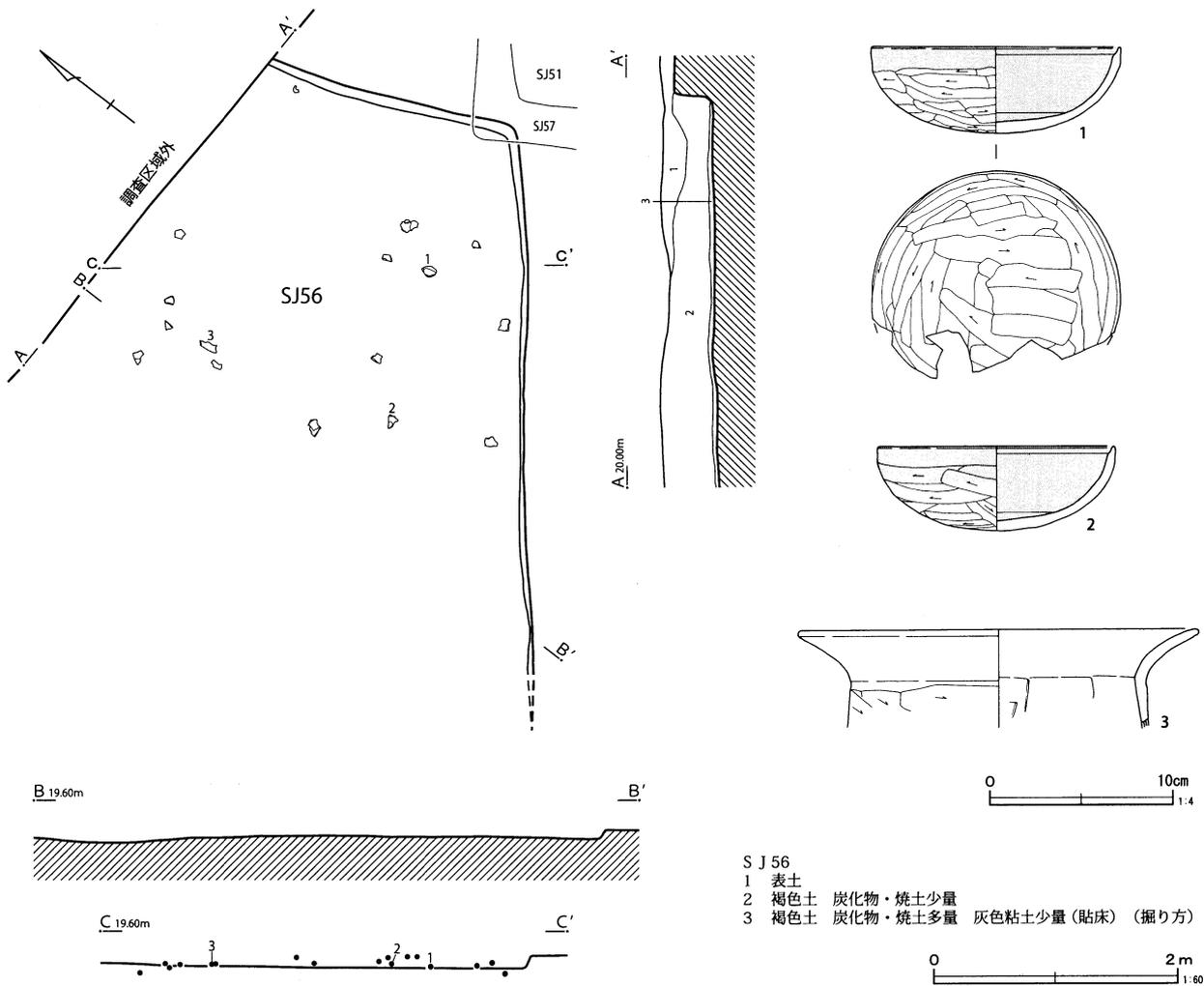
第159図 第55号住居跡出土遺物 (2)



第160図 第55号住居跡出土遺物 (3)

第44表 第55号住居跡出土遺物観察表 (第158~160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	109	33	-	ACEHI	80	普通	橙	北武蔵型 坏蓋模倣坏		72-7
2	土師器	坏	109	34	-	ACDEHI	100	普通	橙	北武蔵の土 坏蓋模倣坏 No4		72-8
3	土師器	坏	104	32	-	CIK	95	普通	橙	北武蔵型 坏蓋模倣坏 No9		73-1
4	土師器	坏	103	33	-	CEHI	70	普通	橙	北武蔵型 坏蓋模倣坏 No5		73-2
5	土師器	坏	(99)	28	-	HIL	30	普通	橙	比企型坏 白針なし 赤彩		
6	土師器	甕	212	400	57	CDEGHIKL	80	普通	浅黄橙	北武蔵の土か 白針なし カマドNo32		73-3
7	土師器	甕	217	35.3	(54)	CDHIJK	70	普通	灰褐	在地産か 白針少量含む 底部丸みあり No15・16・SK43		74-1
8	土師器	甕	192	39.4	64	CDEGHIJ	90	普通	にぶい赤褐	在地産 白針含む カマドNo33・35		73-4
9	土師器	甕	210	27.1	-	CDEHIJK	80	普通	にぶい褐	在地産 白針含む カマドNo35		73-5
10	土師器	甕	189	38.9	5.4	CDEGHIK	90	普通	灰黄褐	北武蔵の土か 白針なし カマドNo34・36		74-3
11	土師器	甕	200	36.0	-	CDEGHIKL	70	良好	にぶい黄橙	在地産か 白針なし 胴下半被熱 No6・18・20		74-2
12	土師器	甕	198	23.7	-	CDEHIJK	70	普通	暗灰黄	在地産 白針含む No33・カマドNo36		74-4
13	土師器	小型甕	(160)	7.9	-	CIKL	25	良好	にぶい橙	硬質感のある焼き 在地産? 白針なし No6		
14	土師器	壺	142	7.6	-	ABCEI	75	普通	橙	在地産 白針なし 赤彩 No30・カマド		
15	土師器	小型台付甕	138	15.9	9.6	CEHIK	90	普通	にぶい橙	北武蔵の土か 白針なし 歪む 脚部指ナデ No22		75-1
16	土師器	小型台付甕	136	17.6	10.2	CEIK	85	普通	赤褐	北武蔵の土か 白針なし 外面二次被熱 No8・24		75-2
17	土師器	小型甕	117	13.9	7.0	CEIJK	95	普通	橙	在地産 白針含む 二次被熱なし No29		75-3
18	土師器	壺	190	35.7	(11.0)	ACHIJK	40	普通	にぶい橙	北武蔵の土? 大型壺 器壁薄い 底部若干平底風 No20・21・SK43		75-4
19	土師器	甗	18.4	15.5	5.4	CEHIK	75	普通	橙	北武蔵の土か 白針なし 孔径5.4cm No7		75-5
20	土製品	支脚	-	-	-	I	100	普通	浅黄橙	長さ13.1cm 幅7.0cm 厚さ4.5cm 重量329.28g 混和材少ない 粉っぽい 側面取り カマドNo37		75-6
21	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.9cm 幅3.0cm 厚さ1.9cm 重さ50.3g 凝灰岩製 カマドNo2		76-1
22	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	長さ10.6cm 刃長8.2cm 最大刃幅1.1cm 背幅0.3cm		76-5
23	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	長さ1.8cm 最大幅1.0cm 背幅0.1cm		76-2
24	鉄製品	鎌	-	-	-	-	-	-	-	長さ6.8cm 幅2.7~2.0cm 背幅0.2cm		76-3
25	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ9.5cm 幅0.7cm 厚さ0.3cm		76-3
26	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.4cm 幅0.6cm 厚さ0.3cm		76-6
27	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ6.5cm 幅0.5cm 厚さ0.3cm 鎌身長1.3cm 鎌幅0.6cm		76-7
28	銅製品	耳環	-	-	-	-	-	-	-	鍍金と思われるが金は確認出来ない 大きさ20×2.2cm 厚さ0.4×0.65cm 重さ7.65g カマドNo1		76-4



第161図 第56号住居跡・出土遺物

第45表 第56号住居跡出土遺物観察表 (第161図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	134	4.7	-	HK	75	良好	橙	(統)比企型坏 白針なし 赤彩 No13		77-1
2	土師器	坏	(128)	4.6	-	EGHI	40	普通	橙	赤色粒子多く含む (統)比企型坏 赤彩 白針なし No9		77-2
3	土師器	甕	(21.6)	5.4	-	CEGHI	20	普通	橙	北武蔵の土 白針なし No5		

ラケズリが施される。北武蔵の土である。

遺物の時期は、(統)比企型坏の形態から本書VI期、7世紀末葉～8世紀初頭頃に位置付けられよう。土師器甕も齟齬はない。重複住居跡との関係から7世紀末葉を中心とした年代と考えておきたい。

第57号住居跡→第50号住居跡 (第145図)

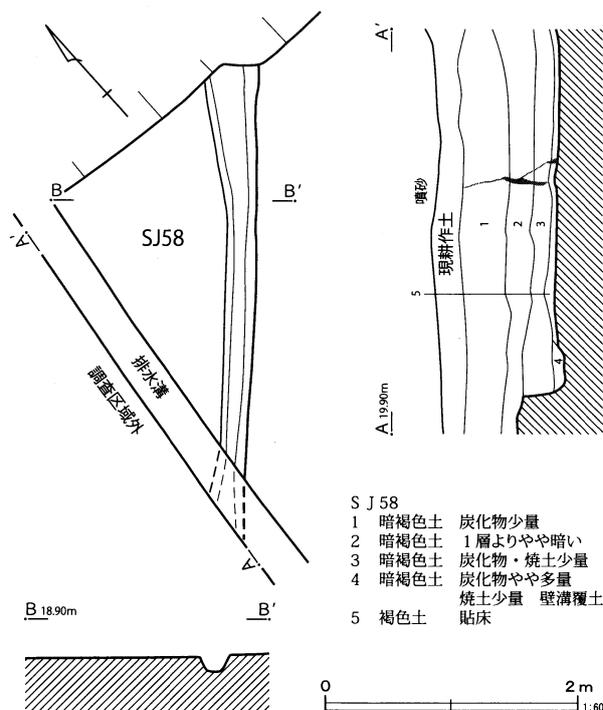
第58号住居跡 (第162図)

第58号住居跡はZH-37・38・ZI-37グリッドに位置する。住居跡西側は調査区外に延びており、

北側はトレンチで削平され、詳細は不明である。

平面形は方形系と推定されるが不明である。南東壁の一部が検出され、残存規模は長軸長3.32m、短軸長1.60m、深さ0.22～0.26mである。主軸方位はN-40°-Eを指す。壁溝は幅22～40cm、深さ12cmほどである。

床面は貼床され、やや凹凸が目立つ。埋土は炭化物粒子・焼土粒子混じりの暗褐色土で、構成されていた。また、住居覆土を切る形で噴砂の痕跡が観察された。カマド、貯蔵穴、ピット等の付属



第162図 第58号住居跡

施設は検出されなかった。

出土遺物はないが、北側の削平された部分から土師器碗が1点出土している（第276図7）。本住居跡に伴う可能性がある。和泉期末葉から鬼高期初頭頃の遺物と思われる。時期の詳細は不明ではあるが本書Ⅲ期（新）～Ⅳ期（古）の可能性を考慮しておきたい。

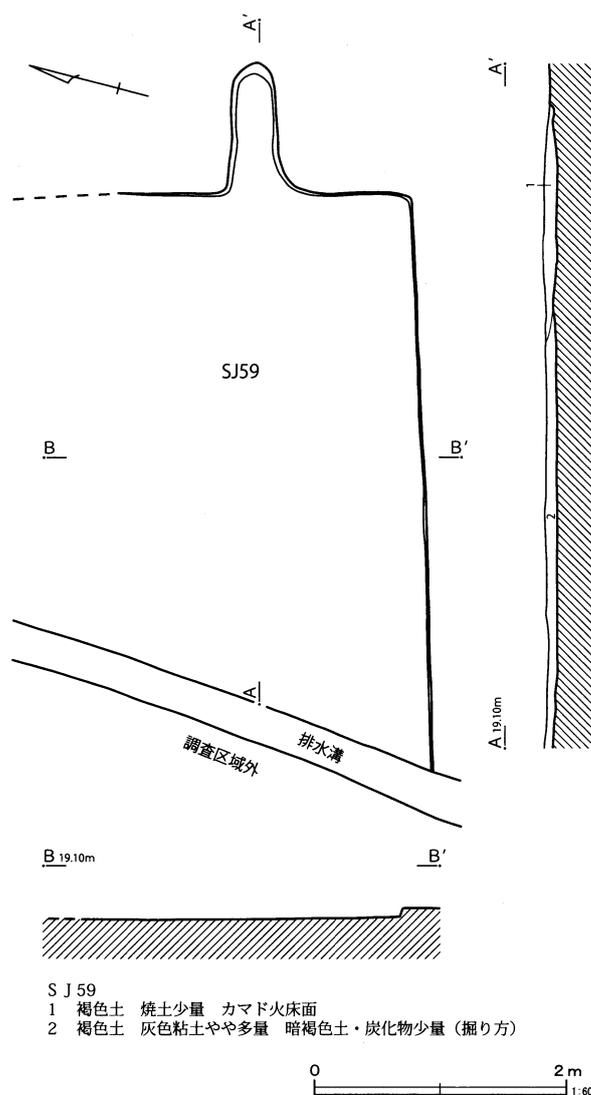
第59号住居跡（第163図）

第59号住居跡はZI-37・38グリッドに位置する。住居跡西壁側は調査区外及び排水溝に切られている。住居跡カマド以北は削平されておりプランは不明である。第58号住居跡とも重複する筈であるが、直接の切り合いが見られない。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長4.38m、短軸長2.32m、深さ0.07mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面は削平されている。掘り方は灰色粘土の混じる褐色土であった。

カマドは東壁に設けられていた。壁外の煙道部のみ検出された。燃焼部は壁内に位置したと思われるが、削平され全容は不明である。煙道部全長



第163図 第59号住居跡

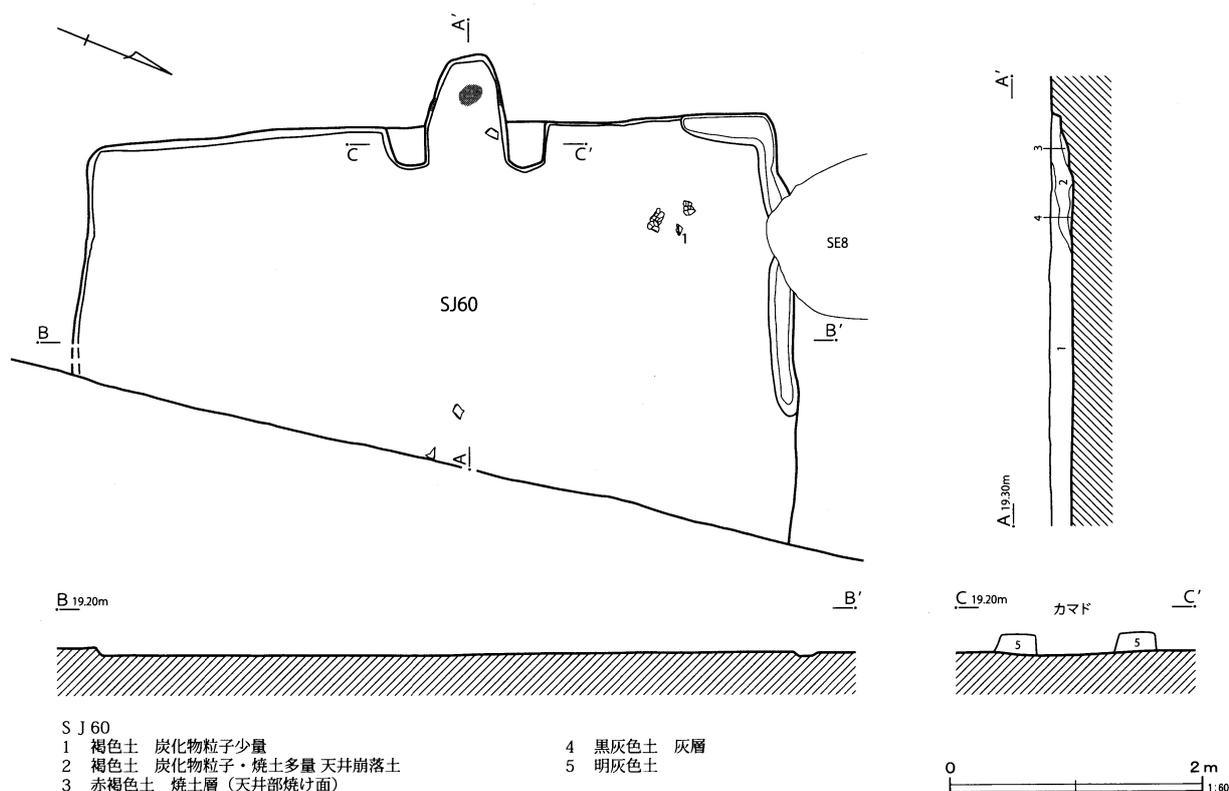
1.06m、幅0.35～0.40mである。煙道部は燃焼部から段差なく連続する。貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

遺物は検出されなかった。時期は不明とせざるを得ないが、カマドの形態からみて、古墳時代の後期の住居跡と考えて誤りなからう。

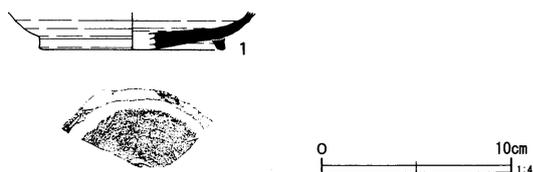
第60号住居跡（第164図）

第60号住居跡はZF・ZG-38グリッドに位置する。住居跡東壁部は調査区外に延びている。重複する第8号井戸跡に北壁部を切られていた。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長5.45m、短軸長3.33m、深さ0.17mである。主軸方位はN-114°-Wを指す。



第164図 第60号住居跡



第165図 第60号住居跡出土遺物

床面は平坦で、部分的に薄い炭化物層が形成されていた。埋土は炭化物粒子混じりの褐色土で構成され、明確な土層変化は観察されなかった。

カマドは西壁中央部に設けられていた。燃烧部は壁を0.60m切り込んで構築されていた。全長0.92m、袖部外幅1.28mである。燃烧部底面は床面と段差なく連続する。煙道部は削平され遺存しない。燃烧部と段差を持って立ち上がり壁外に延びるものと推定される。燃烧部中央付近のやや奥壁寄りの底面は強く被熱していた。被熱面手前には灰層が薄く堆積していた。また、燃烧部側壁にも被熱面が観察された。埋土には焼土ブロックを多量に含む褐色土が堆積していた。天井部の崩落土と考えられる。袖部は焼土混じりの明灰色粘質を積

み上げて構築されていた。

壁溝は幅18~24cm、深さ1~3cmほどで、北西隅に部分的に検出された。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

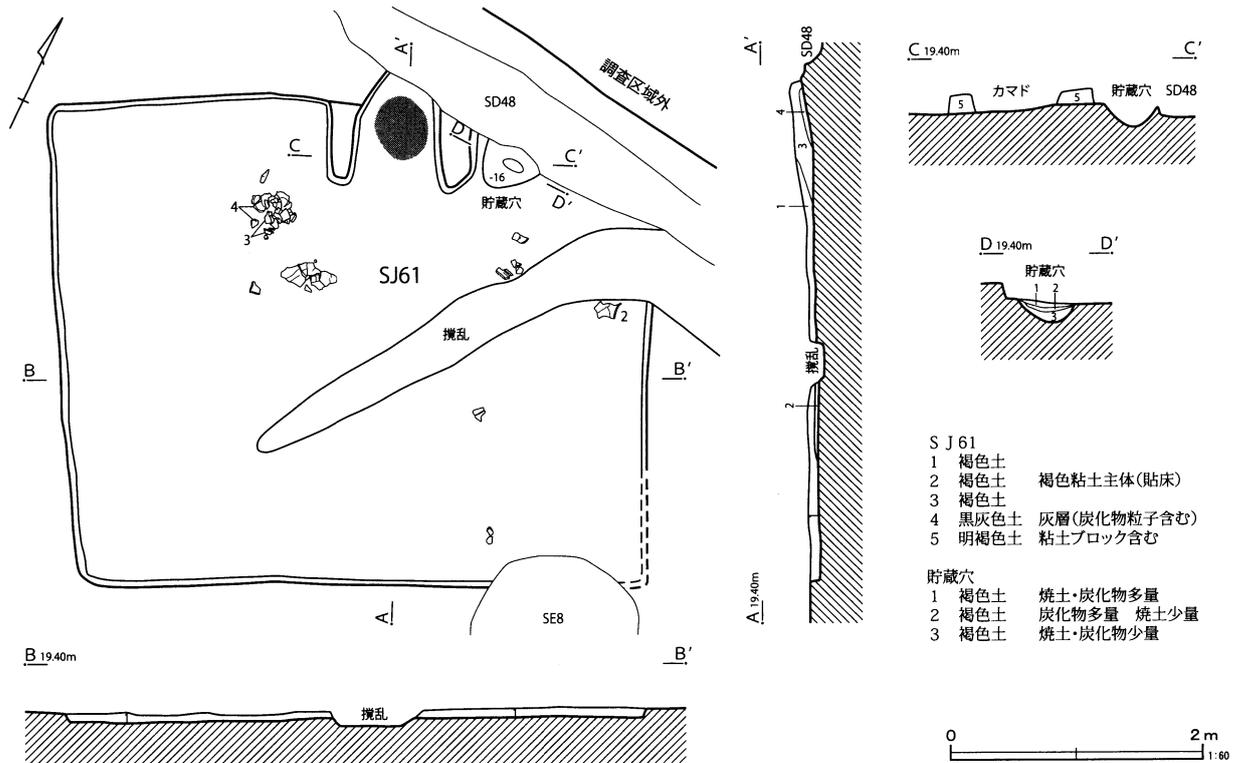
出土遺物は少なく、土師器甕と須恵器の破片が覆土から検出された。図示可能な遺物は須恵器高台付坏がある(第165図1)。

1は須恵器高台付坏である。底部の破片で、推定高台径9.5cm。残存高20cm。胎土に白色粒子と黒色微粒子を含む。胎土は緻密である。焼成は堅緻。色調は灰色で、図示部の25%残存。底部は中心部が突出気味で出尻になる可能性がある。東海産、湖西産の可能性が高いと推定される。底部は回転ヘラケズリ調整されている。註記No.5。

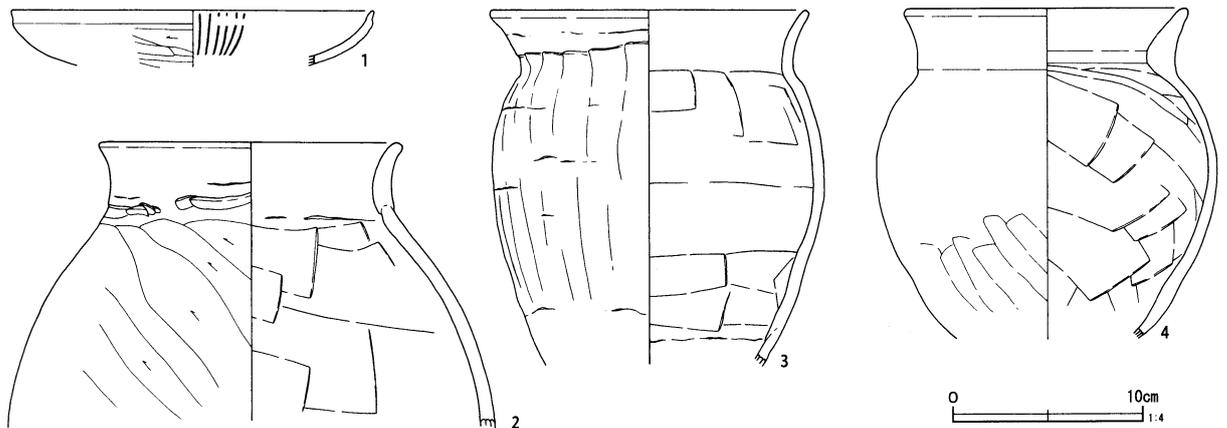
時期は本書Ⅵ期~Ⅶ期(古)、7世紀末葉~8世紀初頭頃に位置付けられよう。

第61号住居跡 (第166図)

第61号住居跡はZF・ZG-37・38グリッドに位置する。住居跡北東コーナー付近は第48号溝跡・



第166図 第61号住居跡



第167図 第61号住居跡出土遺物

第46表 第61号住居跡出土遺物観察表 (第167図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	皿	(190)	29	-	CEHI	5	普通	明赤褐	北武蔵型暗文皿 内面放射暗文		
2	土師器	甕	(154)	146	-	CEGHJL	20	普通	にぶい黄橙	在地産 白針多 No3		
3	土師器	甕	(165)	187	-	ABCEHIL	80	普通	にぶい橙	胴部ケズリ 二次被熱により調整不明瞭 槻川流域の土か 緑泥片岩入る No9		77-3
4	土師器	甕	(145)	175	-	BCDEIKL	30	普通	橙	槻川流域の土か 緑泥片岩?入る 胴部外面ナデ+ケズリか 器面荒れている No9		

第8号井戸跡、トレンチなどに切られ、遺存状態はあまり良くない。

平面形は横長の長方形で、残存規模は長軸長4.74m、短軸長3.88m、深さ0.07mである。主軸方

位はN-26°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。住居跡中央部を中心に薄く貼床され、硬化面が形成されていた。埋土は褐色土が堆積していたが、堆積環境は不明である。

カマドは北壁のほぼ中央と推定される位置に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。第48号溝跡に切られているため、燃焼部扇端から煙道部は不明である。残存規模は全長0.96m、袖部外幅1.26m、深さ0.13mである。壁外の掘り込みは約0.30mである。燃焼部と床面は明確な段差を持たずに連続している。燃焼部底面は強く被熱し、灰層が堆積していた。燃焼部内壁幅は0.60mと比較的広く、被熱痕跡は確認できなかった。袖部は明褐色粘質土で構成されていた。

貯蔵穴と思われるピットは、カマドの右脇から1基検出された。48号溝跡に切られているため、平面形態は不明だが、残存規模は長径47cm、短径38cm、深さ16cmで、焼土と炭化物が多量に堆積していた。

ピット、壁溝等は検出されなかった。

遺物は散在的に出土した。カマド周辺から比較的まとまって出土している。土師器皿・甕がある(第167図)。

1は土師器皿。北武蔵型暗文坏(皿)である。覆土出土で、混入の可能性が高い。2は土師器甕である。床面出土。胴部の膨らみが強い特徴がある。3・4は土師器甕である。いずれも胎土に緑泥片岩と思われる鉱物が含まれ、槻川流域で生産された可能性がある。

遺物の時期は不明確であるが、カマドが出現しており、甕胴部の長胴化があまり進んでいないことから、和泉期末葉(本書Ⅲ期新段階)と推定しておきたい。

第62号住居跡(第168図)

第62号住居跡はZF-36・37グリッドに位置する。住居跡北側と南西隅は調査区外に延びている。第63号住居跡、第48号溝跡、第56号土壇と重複し、第63号住居跡を切り、第48号溝跡、第56号土壇に切られていた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長4.26m、短軸長4.20m、深さ0.13~0.17mである。

主軸方位はN-63°-Eを指す。

床面は凹凸が激しく、カマド前面を中心に硬化面が形成されていた。床面は貼床が施され、部分的に薄い炭化物層が堆積していた。埋土は褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土を基調としていた。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部は壁を大きく切り込んで構築されていた。煙道部は燃焼部から明確な段差を持って斜め上方に立ち上がるが、先端を第48号溝跡に切られていた。

残存規模は全長1.26m、袖部外幅1.30m、深さ0.36mである。燃焼部は長さ0.72mで、底面は緩やかに窪み、焚き口部手前まで連続する。内壁幅は0.60mで、強く被熱していた。袖部は壁内に30cmほど入り込んでいる。明灰色土で構築されていた。

埋土は第4層が天井部崩落土、第6層が掘り方埋土である。第6層上面が火床面であり、灰層が薄く堆積していた。

壁溝は幅8~18cm、深さ5cmほどで、住居跡南壁から北壁にかけて巡っていた。

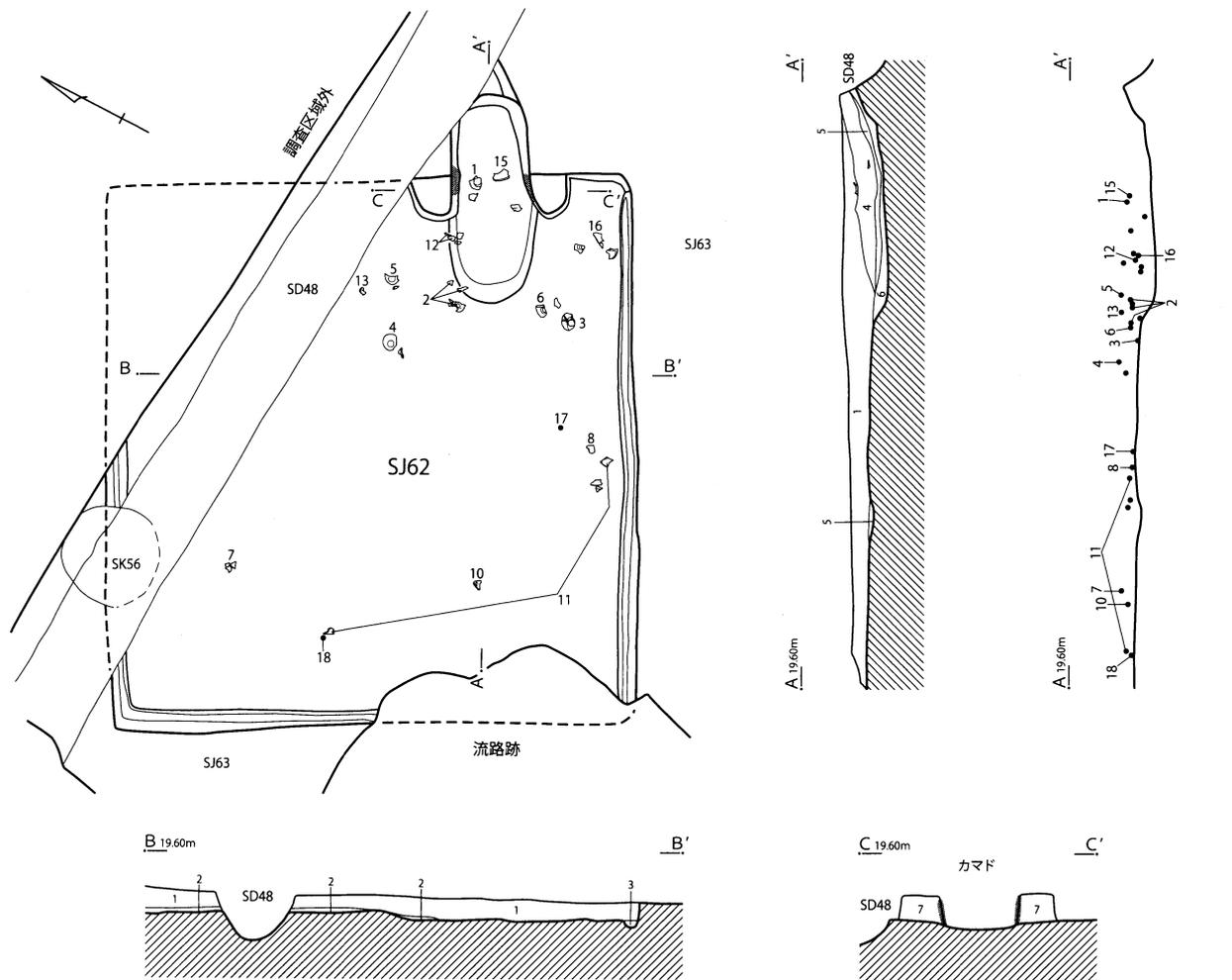
貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物はカマド周辺に比較的まとまっていたが、大半は覆土出土である。須恵器坏・高台付坏・椀・蓋・鉢、土師器甕、鉄製品がある(第169図)。

1~8は須恵器坏である。口径12cm前後、底径5.6cm前後、底部は回転糸切り後無調整、すべて南比企産である。口底指数は7を除いて50を切る。底径の縮小化が進んでいる。口高指数は30を超え、深身の器形が主体となっている。9は椀蓋か。10は特殊かえり蓋で混入品である。11は無台椀で、口唇部の内傾面は失われ、丸みを帯びている。12・13の坏と14の高台付坏は底部回転ヘラケズリが施され、混入品と考えられる。

15は須恵器鉢。胴部平行叩き、内面無文当て具である。16は土師器武蔵型甕。いわゆる「コ」の字状口縁甕である。

17~19は鉄製品。17は板状製品。18は棒状製品、

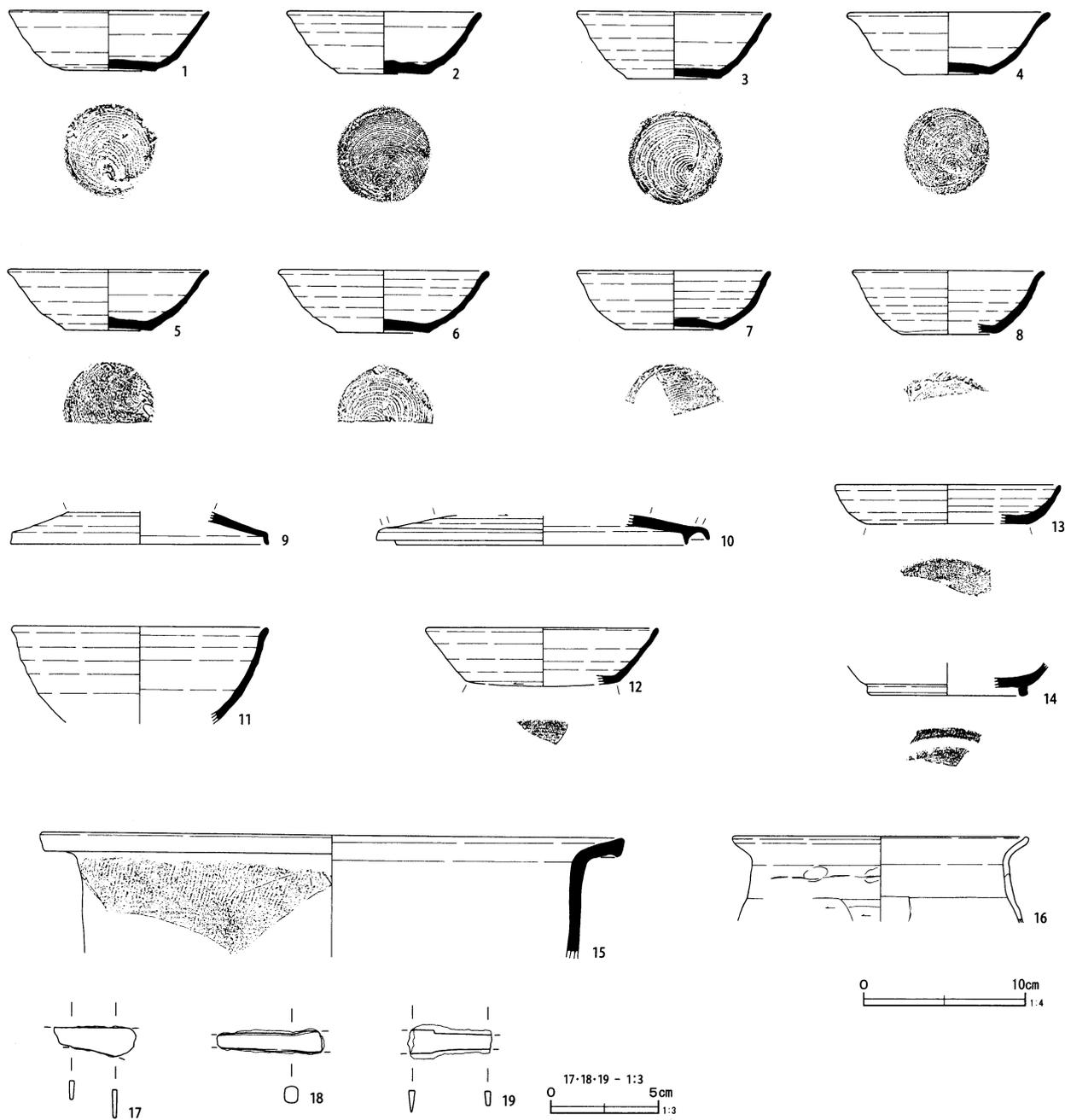


- S J 62
- | | | | | | | |
|--------|----------------------|--------|------------|------------------------------------|------------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | 褐色土ブロックやや多量 焼土・炭化物少量 | カマド | 4 暗褐色土 | 焼土ブロック・褐色土ブロック多量 炭化物少量 (カマド天井部崩落土) | 6 暗褐色土 | 炭化物・焼土・褐色土ブロック多量 (カマドの掘り方) |
| 2 褐色土 | 褐色粘土主体 (貼床) | 5 黒灰色土 | 灰層 炭化物粒子含む | 7 明灰色土 | 焼土・炭化物粒子含む | |
| 3 暗褐色土 | 褐色土粒多量 炭化物少量 (壁溝) | | | | | |
- 0 2m
1:60

第168図 第62号住居跡

第47表 第62号住居跡出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	124	3.7	5.6	E I J	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No2カマド 口底指数452	77-8
2	須恵器	坏	119	3.9	5.6	E I J	80	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No8~10 口底指数47.1	77-7
3	須恵器	坏	118	4.1	5.7	E I J	85	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り	No21 カマド 口底指数48.3	77-4
4	須恵器	坏	122	3.9	5.4	E J	95	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No14 口底指数44.3	77-5
5	須恵器	坏	(122)	3.7	5.4	I J	60	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No11 口底指数44.3	77-6
6	須恵器	坏	(127)	3.9	5.8	I J K	30	普通	黄灰	南比企産 底部回転糸切り	No19 口底指数45.7	
7	須恵器	坏	(118)	3.6	(6.0)	E I J K	30	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No30 口底指数50.8	
8	須恵器	坏	(118)	3.9	(5.8)	E I J K	25	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	No23 口底指数49.2	
9	須恵器	蓋	(15.9)	2.0	-	G H J	10	普通	灰	南比企産		
10	須恵器	蓋	206	1.8	-	E I	10	良好	紫灰	南比企産 特殊かえり蓋	No27	
11	須恵器	無台椀	(15.8)	6.0	-	J K	25	良好	灰白	南比企産 内面煤付着	No24・28・SJ-63	



第169図 第62号住居跡出土遺物

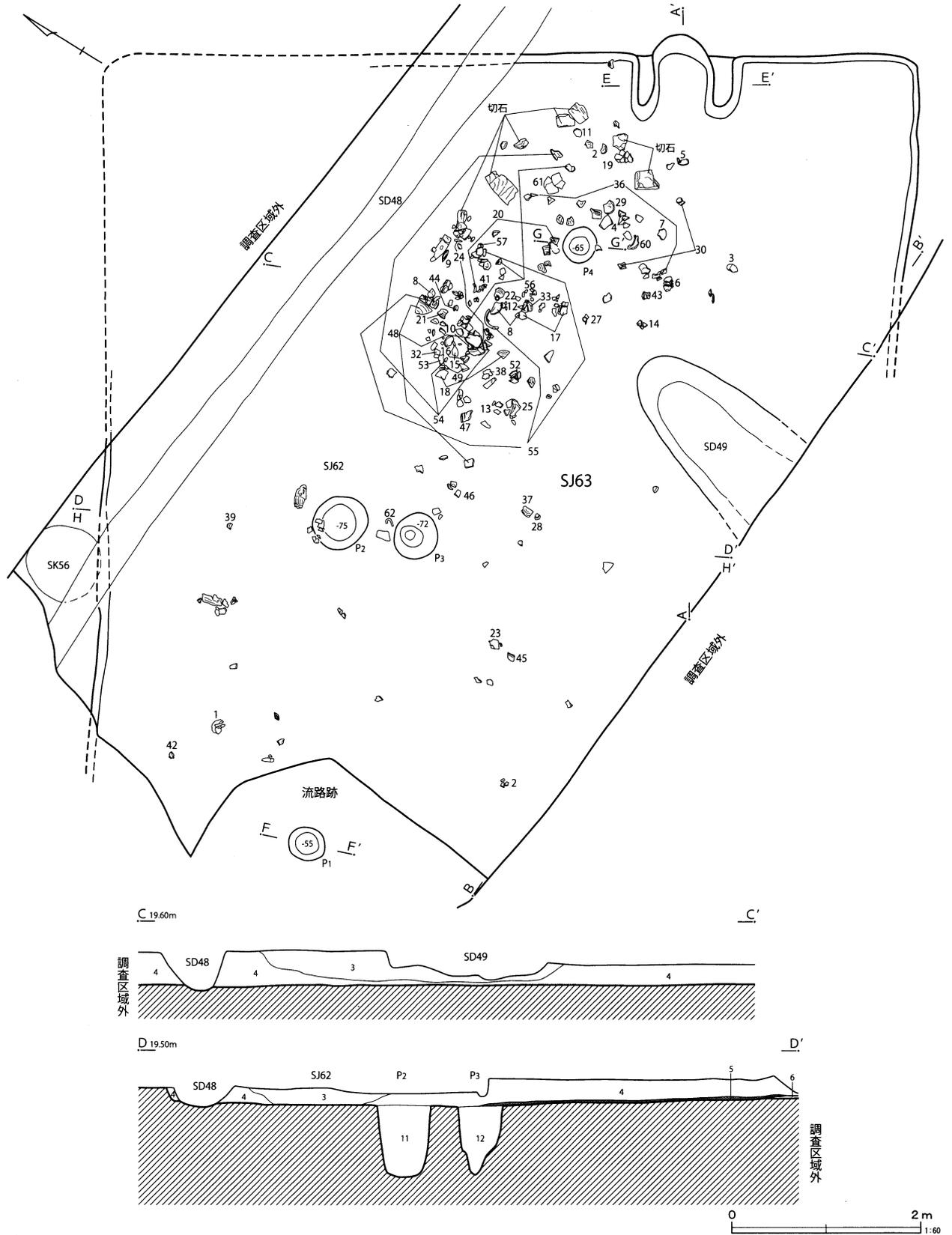
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
12	須恵器	坏	(140)	35	(92)	G I	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 混入か No5カマド		
13	須恵器	坏	(138)	24	(100)	E I J	20	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 混入か No13		
14	須恵器	高台付坏	-	21	(110)	A I J K	10	普通	灰黄	南比企産 底部回転ヘラケズリ ロクロ左回転 混入か カマド		
15	須恵器	鉢	(360)	75	-	I J K	15	良好	灰	南比企産 胴部外面平行叩き 内面無文当て具後ナデ カマド		No1
16	土師器	甕	(181)	53	-	C H I	20	普通	にぶい橙	「コ」の字状口縁甕 北武蔵の土		No16
17	鉄製品	板状製品	-	-	-	-	-	-	-	残存長33cm 幅1.3~0.75cm 厚さ0.15~0.25cm No22 刃は付いていない 不明製品		77-9
18	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	残存長48cm 幅0.8cm 厚さ0.6cm No29 角棒状製品の一部		78-1
19	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	残存長37cm 刃幅1.0cm 厚さ0.4cm 刀子柄部から刃部の破片 段状の棟関と緩やかな刃関が付くようだ		78-2

19は鉄製刀子である。

遺物の時期は、須恵器坏の特徴から鳩山編年Ⅷ

期に比定される。本書Ⅹ期新段階（9世紀後半）

に対応する。



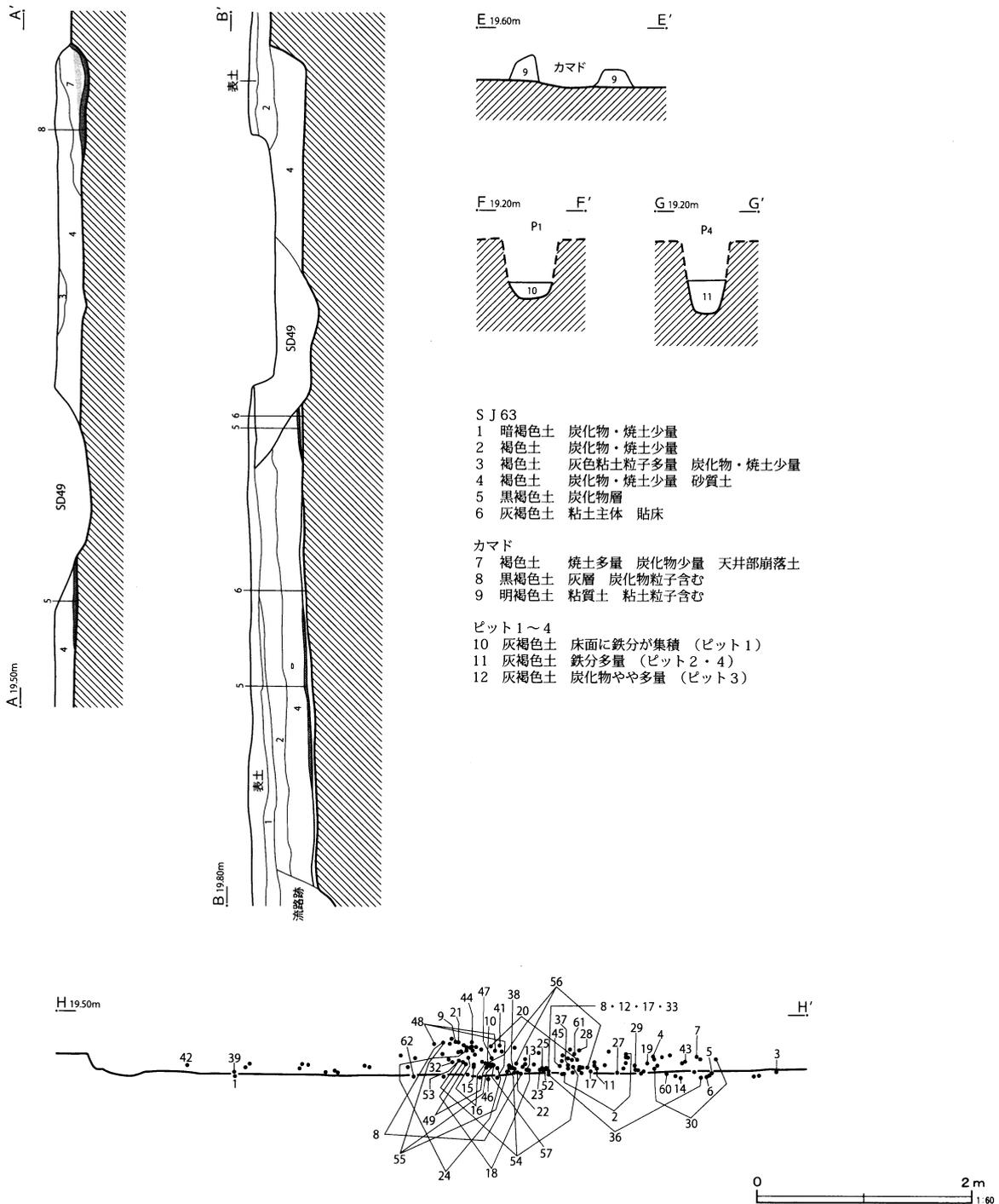
第170図 第63号住居跡 (1)

第63号住居跡 (第170・171図)

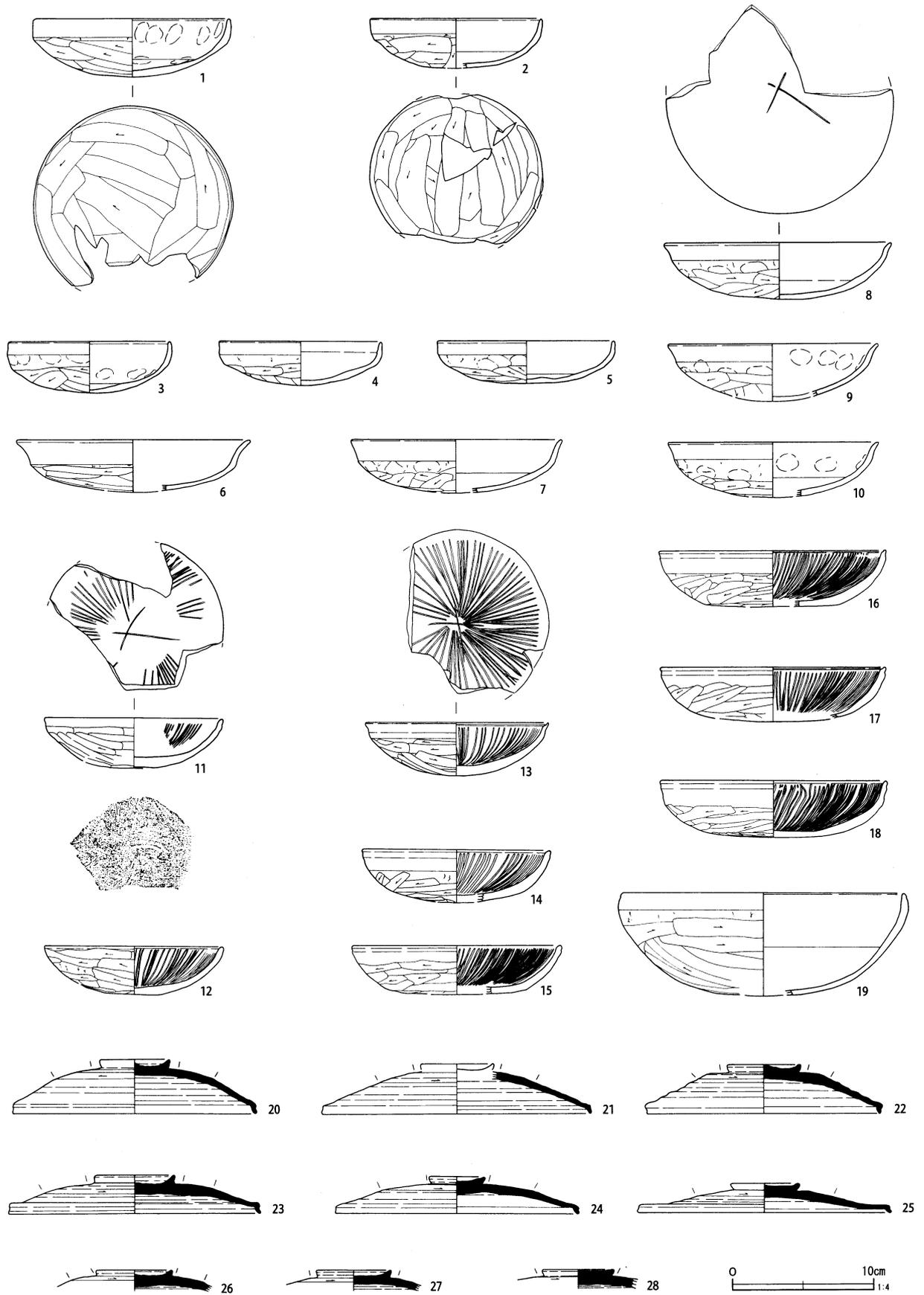
第63号住居跡はZF・ZG-36・37グリッドに位置する。住居跡北側と南側は調査区外に延びている。南西壁部は谷部(流路跡)の削平を受けており、遺存しない。また重複する第62号住居跡、第48・49号溝跡に切られていたが、第62号住居跡、

第49号溝跡は覆土上面にあるため、床面は残存していた。

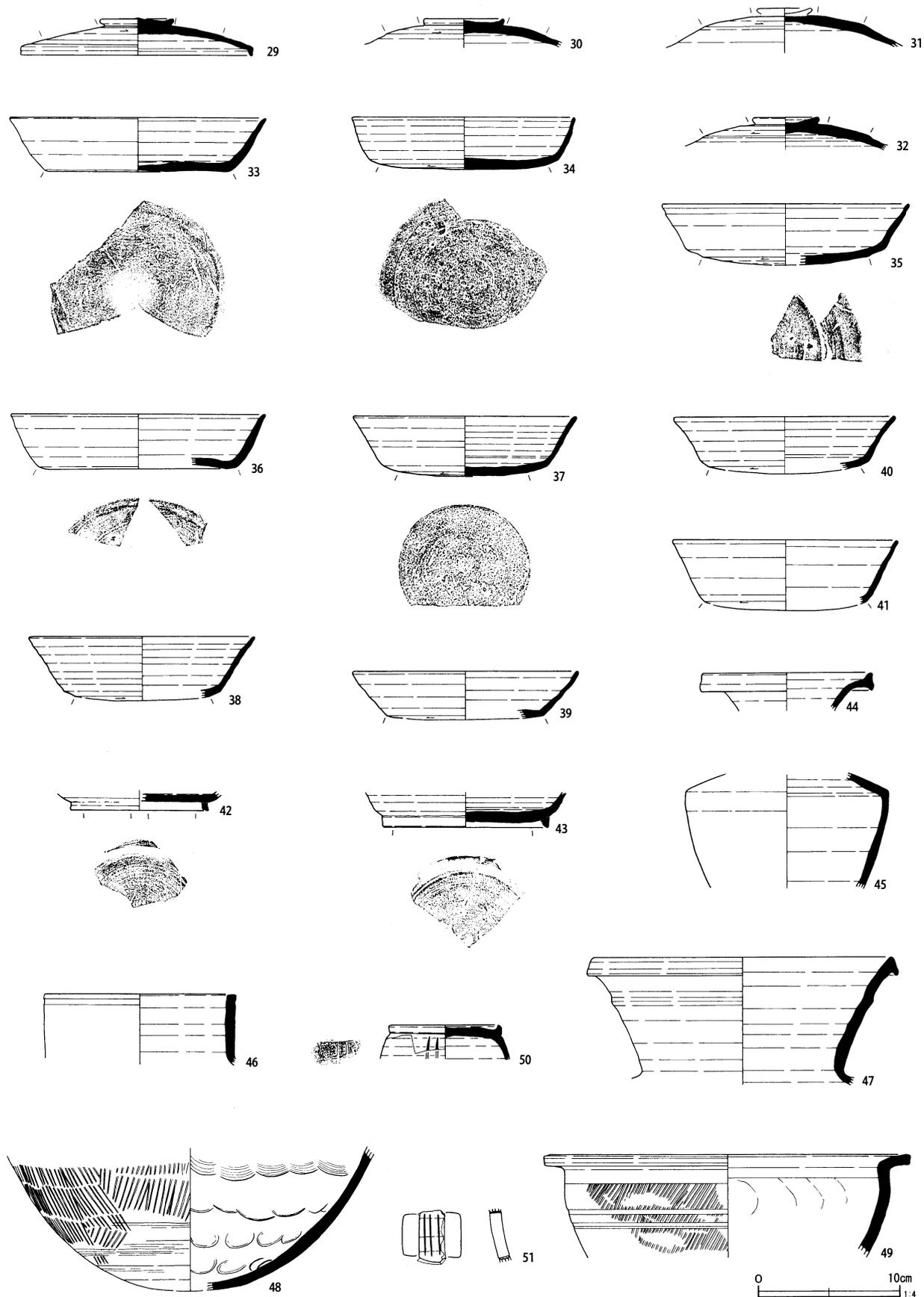
平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長8.70m、短軸長8.40mの大型住居跡と考えられ、深さは0.25mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。



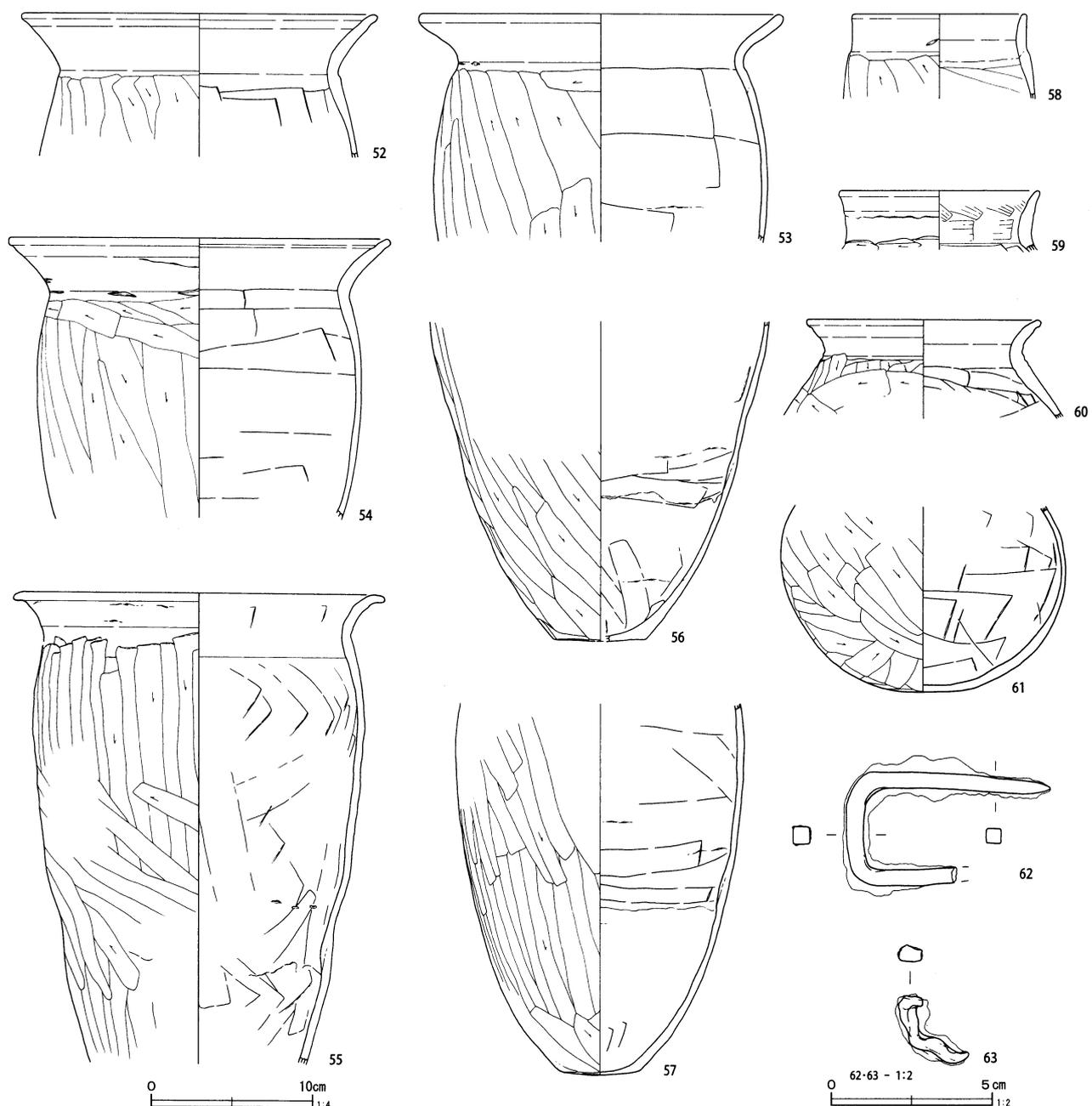
第171図 第63号住居跡 (2)



第172图 第63号住居跡出土遺物 (1)



第173図 第63号住居跡出土遺物 (2)



第174図 第63号住居跡出土遺物 (3)

床面は貼床層（第6層）が確認され、その上部に薄い炭化物層が広がっていた。地山が褐色の砂質土であり、炭化物層が検出されなかった部分は床面の検出が非常に難しかった。埋土は褐色砂質土をベースとしており、2層に分層（第3・4層）できたが、あまり大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは北東壁に設けられていた。燃焼部はほぼ壁内に収まる。煙道部は段差を持って移行する

と考えられるが、削平されており不明である。カマドの規模は全長0.88m、袖部外幅1.17mである。燃焼部底面は僅かに窪み、底面から燃焼部奥壁にかけて灰層が薄く堆積していた（第8層）。第7層が天井部崩落土で、焼土ブロックが多量に含まれていた。燃焼部側壁にも被熱面が確認された。袖部は明褐色粘質土で構成され、焼土粒子が含まれていた。

砂質の強い土質に因るためか、床面では柱穴・

第48表 第63号住居跡出土遺物観察表 (第172~174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	138	4.1	-	CEI	85	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 No2		78-3
2	土師器	坏	120	3.5	-	ACIL	75	普通	橙	北武蔵型坏 No11・129		78-4
3	土師器	坏	114	3.6	-	CDI	60	普通	橙	北武蔵型坏 No117		78-5
4	土師器	坏	114	3.1	-	CHK	60	普通	橙	北武蔵型坏 No122		78-6
5	土師器	坏	(124)	3.0	-	CHI	40	普通	橙	北武蔵型坏 No125		78-7
6	土師器	皿	(164)	3.6	-	ACK	40	普通	橙	北武蔵型皿 No114		
7	土師器	皿	(149)	3.7	-	AHEI	25	普通	にぶい黄橙	北武蔵型皿 No118		
8	土師器	皿	148	3.7	-	AEI	70	普通	橙	北武蔵型皿 内面見込み部弱い線刻「×」 No63・65・75		78-8
9	土師器	皿	(148)	3.7	-	AHIK	25	良好	橙	北武蔵型皿 No88		
10	土師器	皿	(148)	3.8	-	CEI	25	普通	橙	北武蔵型皿 No145		
11	土師器	坏	(126)	3.3	-	ACHI	50	普通	にぶい橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 見込部に線刻「×」 底部外面「静止」糸切り痕残す 内面：橙 No133		79-1・2
12	土師器	坏	(127)	3.5	-	CHI	50	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 No63		79-3・4
13	土師器	坏	(128)	3.8	-	CGHI	60	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 見込部へラ描「×」 No37		78-9
14	土師器	坏	(132)	3.6	-	CHI	25	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 丸底 器壁厚い No108		
15	土師器	坏	(147)	3.4	-	ACK	25	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 底部平底風 No47		
16	土師器	坏	(160)	3.9	(9.8)	ACEHI	40	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 底部平底風 No46・70		78-10
17	土師器	坏	(160)	3.5	-	ACHI	20	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 No60・63		
18	土師器	坏	(160)	4.0	-	ACHI	50	良好	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 No48・58		
19	土師器	鉢	(200)	7.2	-	CI	40	普通	橙	北武蔵型 No128		
20	須恵器	蓋	(172)	3.9	-	EJK	20	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径4.9cm) No79・101		
21	須恵器	蓋	(190)	3.0	-	G I J K	20	良好	灰	南比企産 つまみ欠失 環状つまみと思われる No71		
22	須恵器	蓋	(165)	3.5	-	E I J	40	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径5.1cm) 内面外縁部自然釉 No81		
23	須恵器	蓋	(178)	2.7	-	E I J K L	50	普通	灰白	南比企産 環状つまみ (径5.6cm) No16		79-5
24	須恵器	蓋	(172)	3.6	-	I J K L	50	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径3.8cm) No87・146		79-6
25	須恵器	蓋	178	2.0	-	DEJ	70	普通	灰	南比企産 環状つまみ (径4.7cm) No36		79-7
26	須恵器	蓋	-	1.5	-	E I J K	40	普通	灰	南比企産 環状つまみ (径5.3cm) 掘り方		
27	須恵器	蓋	-	1.4	-	E I J K	70	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径5.1cm) No59		
28	須恵器	蓋	-	1.3	-	I J L	70	普通	灰	南比企産 環状つまみ (径4.9cm) No30		
29	須恵器	蓋	164	2.6	-	E I J K L	80	普通	灰	南比企産 環状つまみ (径5.1cm) No124		79-8
30	須恵器	蓋	-	2.0	-	E G I J K	50	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径5.5cm) No110・119		
31	須恵器	蓋	-	2.2	-	E I J K	10	普通	灰	南比企産 つまみ欠失		
32	須恵器	蓋	-	2.3	-	E I J K L	40	良好	灰白	南比企産 環状つまみ (径4.5cm) ロクロ左回転 No51		
33	須恵器	坏	(180)	3.8	(13.2)	BEHIK	50	普通	橙	酸化焙焼成 産地不明 (未野産か) 底部手持ちヘラケズリ ロクロ土師器か? No63		79-9
34	須恵器	坏	(155)	3.7	(13.4)	G J L	30	良好	灰	南比企産 ケズリ径120cm 底部回転ヘラケズリ ZF・36・37G 確認面		80-1
35	須恵器	坏	(174)	4.3	(12.0)	BEGK	10	不良	灰	未野産 底部回転ヘラケズリ		
36	須恵器	坏	(178)	3.8	(12.6)	AEI	20	普通	橙	ロクロ土師器か? 底部回転ヘラケズリ 産地不明 白針なし No93・113		
37	須恵器	坏	156	4.2	11.6	I J K L	50	普通	灰白	南比企産 Y6段階 底部回転ヘラケズリ 中心部静止糸切りか No29		80-2
38	須恵器	坏	(160)	4.3	(11.0)	E G J	20	良好	灰	南比企産 ケズリ径9.0cm No42		
39	須恵器	坏	(158)	3.3	(11.2)	E I J	10	普通	灰	南比企産 口径不安定 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) No22		
40	須恵器	坏	(150)	3.6	(11.6)	E I J	10	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) ケズリ径10.4cm		
41	須恵器	坏	(158)	4.5	(11.5)	G J	10	普通	灰	南比企産 Y6段階 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) No80		
42	須恵器	高台付碗	-	1.4	(9.8)	E H I J	20	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ 中心部僅かに糸切り痕か No1		
43	須恵器	高台付坏	-	2.5	(11.6)	G H I J	20	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) 中心部ヘラ切り痕か No109		
44	須恵器	長頸瓶	(11.9)	3.7	-	I K	10	普通	灰	湖西産か 胎土精良 内面自然釉 No78		
45	須恵器	長頸瓶	-	-	-	E J K	20	良好	灰	外面自然釉厚く掛かる 南比企産 No14		
46	須恵器	短頸壺	(13.6)	4.9	-	E I J	20	良好	青灰	南比企産 口縁外面沈線1条 No27		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
47	須恵器	甕	(209)	90	-	I J K L	20	良好	灰	南比企産 自然釉掛かる No39		
48	須恵器	甕	-	-	-	E J	50	良好	灰	南比企産 丸底甕 底部磨滅 平行叩き後カキ目 内面青海波文+ナデ No28・67・74		
49	須恵器	鉢	(252)	72	-	G I J L	10	普通	灰	南比企産 胴部平行叩き+無文当て具 No45・49		
50	須恵器	円面硯	79	24	-	E I J K	50	良好	灰白	南比企産 硯面磨滅 墨痕僅かに残る 内面も磨滅 脚部線刻2条		80-3
51	須恵器	円面硯	-	-	-	I J	5	良好	暗灰	南比企産 脚部片 線刻3条 両側縁方形透かし		
52	土師器	甕	(218)	89	-	A C E H I	20	普通	橙	武蔵型甕 No57		
53	土師器	甕	(220)	141	-	C G I	20	普通	橙	武蔵型甕 No50		
54	土師器	甕	(234)	174	-	A C H I	30	普通	にぶい橙	武蔵型甕 No50・69・134		
55	土師器	甕	220	292	-	C G H I	30	良好	にぶい橙	武蔵型か 土は南武蔵か No66・75・85 SD49		80-4
56	土師器	甕	-	197	(57)	A C H I	35	普通	にぶい橙	武蔵型甕 No68・83・132		
57	土師器	甕	-	230	(49)	C H I	30	普通	橙	武蔵型甕 No85 SD49		
58	土師器	小型甕?	(108)	53	-	A E H I J	25	普通	橙	在地産 白針含む 外面二次被熱		
59	土師器	小型甕	(122)	36	-	C H I	25	普通	橙	北武蔵の土か		
60	土師器	小型甕	(142)	60	-	C E H I	40	普通	にぶい褐	北武蔵の土 No120		
61	土師器	壺	-	115	-	A C E H I	60	普通	橙	北武蔵の土 No95		
62	鉄製品	門金具?	-	-	-	-	-	-	-	長さ6.5cm 幅0.5~0.6cm 厚さ0.5~0.6cm No18		80-9
63	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.0cm 幅0.8×0.4cm		

貯蔵穴等の付属施設は全く確認できなかった。床面全体を掘り下げて確認に努めた。その結果、ピットは4本検出されたが、規則的な配置は見られず柱穴との確証は得られなかった。貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は、カマド前面から住居跡中央部にかけてまとまって出土した。床面から出土した例もあるが、覆土中からの出土が多く、住居跡廃絶後に投棄された遺物が主体であったと推定される。土師器・皿・鉢・甕・小型甕・壺、須恵器・蓋・高台付・長頸瓶・短頸壺・円面硯・甕・鉢、鉄製品が検出されている（第172図～174図）。

そのほか、図示した遺物以外に、長さ26cm以上、幅18cm、厚さ10cm程度に切断されたブロック状の凝灰岩が数点出土した。表面は一面に弱く被熱した痕跡が認められた。用途は不明である。

第172図1～5は土師器北武蔵型坏である。扁平な丸底形態で、法量は大振りのもの（1）と小振りのもの（2～5）の二種がある。1・3・5は床面出土。6～10は北武蔵型皿である。8の内面見込み部には「×」状の弱い線刻がある。6は床面出土、8は覆土と床面の破片が接合している。

11～18は北武蔵型暗文坏である。内面に放射暗文が施文される丸底形態が基本となるが、15・16は底部が平底風となっている。11の底部外面中心部には、静止糸切り痕が僅かに残る。11・13の内面見込み部には「×」状の線刻が施されている。19の鉢は北武蔵型坏の大型品である。胎土も北武蔵の土である。

20～32は須恵器蓋、南比企産である。つまみの残るものはすべて「環状つまみ」である。33～41は須恵器無台坏である。33・36は口径が18cm前後と大きく、酸化焰焼成である。白色針状物質は含まれず非南比企産である。須恵器であれば末野産か。ロクロ土師器の可能性もある。33は底部手持ちヘラケズリ調整、36は回転ヘラケズリ調整される。34は推定口径15.5cm、底部回転ヘラケズリ調整される。南比企産。35は推定口径17.4cmの大型坏。胎土から末野産と考えられる。口縁部外面沈線状に窪む。37は口径15.6cmと大きく、底部は回転ヘラケズリ。中心部に僅かに糸切り痕が残る。静止糸切りか。南比企産で山下6号窯段階に比定できよう。38・41も山下6号窯段階となるかもしれない。38は口径がもう少し大きいかもしれない。40

は口径15cm、丸底風の坏で鳩山編年HI期平行か。42・43は須恵器高台付坏。底部は回転ヘラケズリ調整される。

44は東海産（湖西産か）の須恵器長頸瓶。45は南比企産の長頸瓶である。46は短頸壺か。器種がよくわからない。47・48は須恵器甕。49は須恵器鉢である。

50・51は円面硯である。50は小型の円面硯で、硯面は磨滅しており、墨痕が残る。脚部は2条の沈線加飾がある。南比企産。51は円面硯脚部片。3条の沈線加飾と両側側縁に方形透孔が開けられている。南比企産である。

52～57は土師器甕。55以外は武蔵型甕である。55はやや厚手の器壁で、古墳時代的な長胴甕。土も北武蔵の土とは異なるように見受けられる。58～60は小型甕。61は小型壺か。62は鉄器。門金具か。63は釘と思われる。

遺物の時期は須恵器坏類が丸底風の大型坏で構成されること、蓋が環状つまみで占められること、続比企型坏が姿を消すことから、7世紀の様相は払拭された段階と考えられる。8世紀初頭中心（概ねY6段階からHI期平行期）であろう。土師器坏・甕も概ね整合的である。北武蔵型暗文坏の一部に平底化がみられる点はやや新しい要素といえようか。8世紀1/4期終り頃までの時間幅は見込んでおくべきであろう。本書Ⅶ期（古）に対応する。

第64号住居跡（第175図）

第64号住居跡はZO-27・28グリッドに位置する。住居跡北側半分以上は調査区外に延びている。重複する第43号土壌と接し、第44号土壌を切っていた。

平面形は方形と推定され、南壁中央部に張出部がある。残存規模は長軸長8.05m、短軸長4.80mの大型住居跡となろう。深さは0.27mである。主軸方位はN-69° - Eを指す。

床面は貼床されていた。壁際は方形周溝墓状の

掘り方をもち、軟弱であった。埋土は灰色粘土を多量に含む褐色土を基調としていた。

南壁中央部には長さ1.20m、幅0.60mにわたって壁が崩れた台形状に壁外に突出していた。掘り方も張出に合わせて屈曲しており、住居跡に伴う張出部と判断した。張出部底面には土壌状の施設（貯蔵穴）は検出されなかった。

貯蔵穴と思われる土壌は、南壁東端付近から1基検出された。当初第45号土壌として調査したが、断面観察から本住居跡に伴うことが判明したため、貯蔵穴とした。北側半分は調査区外に延びているが、平面形態は隅丸方形あるいは隅丸長方形と考えられる。残存規模は長径122cm、短径68cm、深さ63cmである。周囲にはテラス状の段が確認される。埋土は灰褐色土を基調とする。遺物は第6層中から多く出土した。

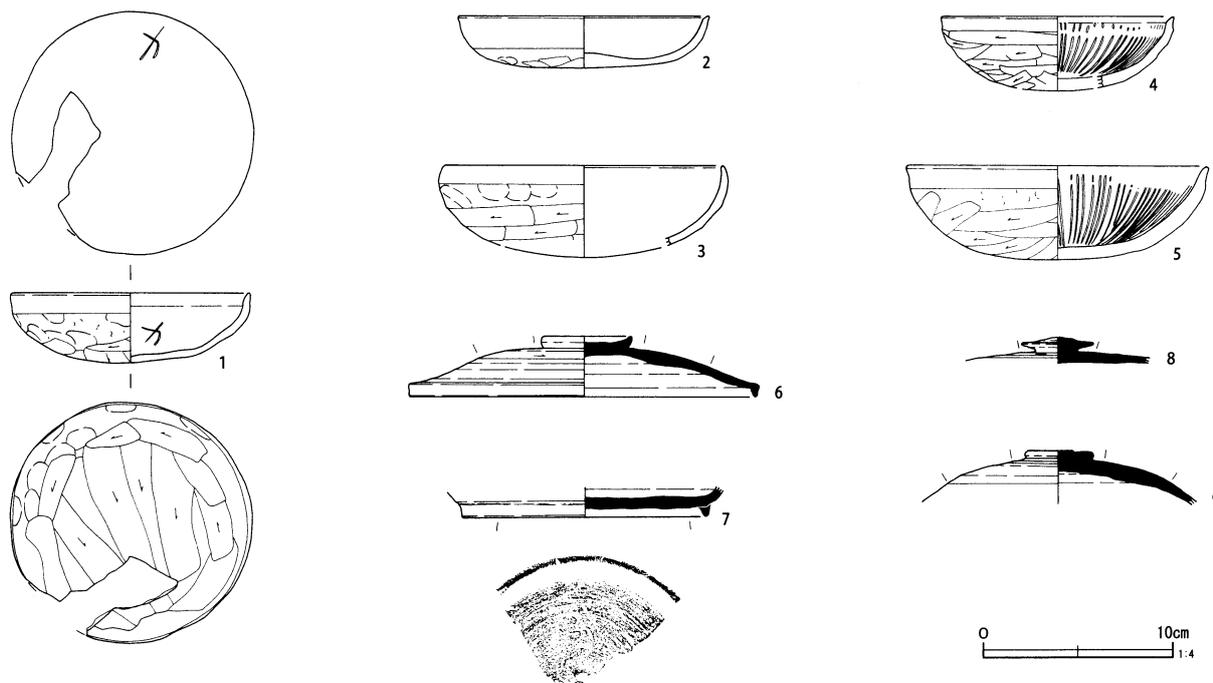
ピットは6本検出された。P1は91cmの深さがあり、住居に伴う柱穴と考えられるが、柱痕は観察されなかった。P2～P6は柱穴に想定することはできない。

掘り方は方形周溝状に掘削されていた。幅0.62～1.12m、深さ0.16mである。埋土は灰色粘土と炭化物が混じり、底面近くに鉄分が集積していた。

カマドは検出されなかった。

出土遺物は少ない。南壁付近の覆土上層から須恵器蓋、貯蔵穴内から土師器坏・暗文坏、須恵器高台付坏が出土した（第176図）。

1・3は北武蔵型坏と思われる。1は口縁部が模倣坏風に立ち上がる。内面に「カ」状に記された細かい線刻（ヘラ記号）がある。2は（続）比企型坏かとも思われるが、底部は指頭痕+軽いケズリ、無彩である点はその特徴を逸脱している。器面が荒れているので、赤彩が剥落した可能性もある。3は口縁部が内湾する北武蔵型坏である。4・5は北武蔵型暗文坏である。深い丸椀器形で、内面に放射暗文が施文される。6・8・9は須恵器蓋。6は環状つまみである。山下6号窯段階か。



第176図 第64号住居跡出土遺物

第49表 第64号住居跡出土遺物観察表 (第176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	125	37	-	A C H I	90	普通	橙	北武蔵型坏 内面線刻「カ」	ZO-28G貯蔵穴No4・5	80-5
2	土師器	坏	132	27	-	A E H I K	60	普通	橙	続比企型坏か 白針なし 無彩 底部指頭+軽いケズリ	ZO-28G貯蔵穴No10 SK-45下層	80-6
3	土師器	坏	(146)	42	-	C H I	20	普通	橙	北武蔵型坏	ZO-28G貯蔵穴No6	
4	土師器	坏	(123)	38	-	A C H I J	25	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	ZO-28G貯蔵穴No5	
5	土師器	坏	158	50	-	C E H I	70	良好	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	ZO-28G貯蔵穴No1・2・3 SK-45下層	80-7
6	須恵器	蓋	182	32	-	E H I J	95	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径4.7cm)	ZO-28GNo2・3	80-8
7	須恵器	高台付坏	-	1.6	(131)	E I J K	20	普通	灰	南比企産 白針少含 底部回転ヘラケズリ	SK-45下層	
8	須恵器	蓋	-	1.4	-	E K	25	普通	灰	末野産か 内面ナデ 擬宝珠つまみ 天井部回転ヘラケズリ		
9	須恵器	蓋	-	2.9	-	E H I J	85	普通	灰白	南比企産 つまみ最大径3.7cm	ZO-28GNo1	

2. 掘立柱建物跡

銭塚遺跡第2次調査で検出された掘立柱建物跡は19棟である。第2・17号掘立柱建物跡は南に廂を持つ2×2間の建物で、第2号掘立柱建物跡は側柱建物、第17号掘立柱建物跡は総柱建物である。第14号掘立柱建物跡と第15号掘立柱建物跡とは建て替えの関係にある。また、第14号掘立柱建物跡と第18号掘立柱建物跡は3×3間の総柱建物、第19号掘立柱建物跡は東辺2間以上、西辺3間以上と変則的な側柱建物である。

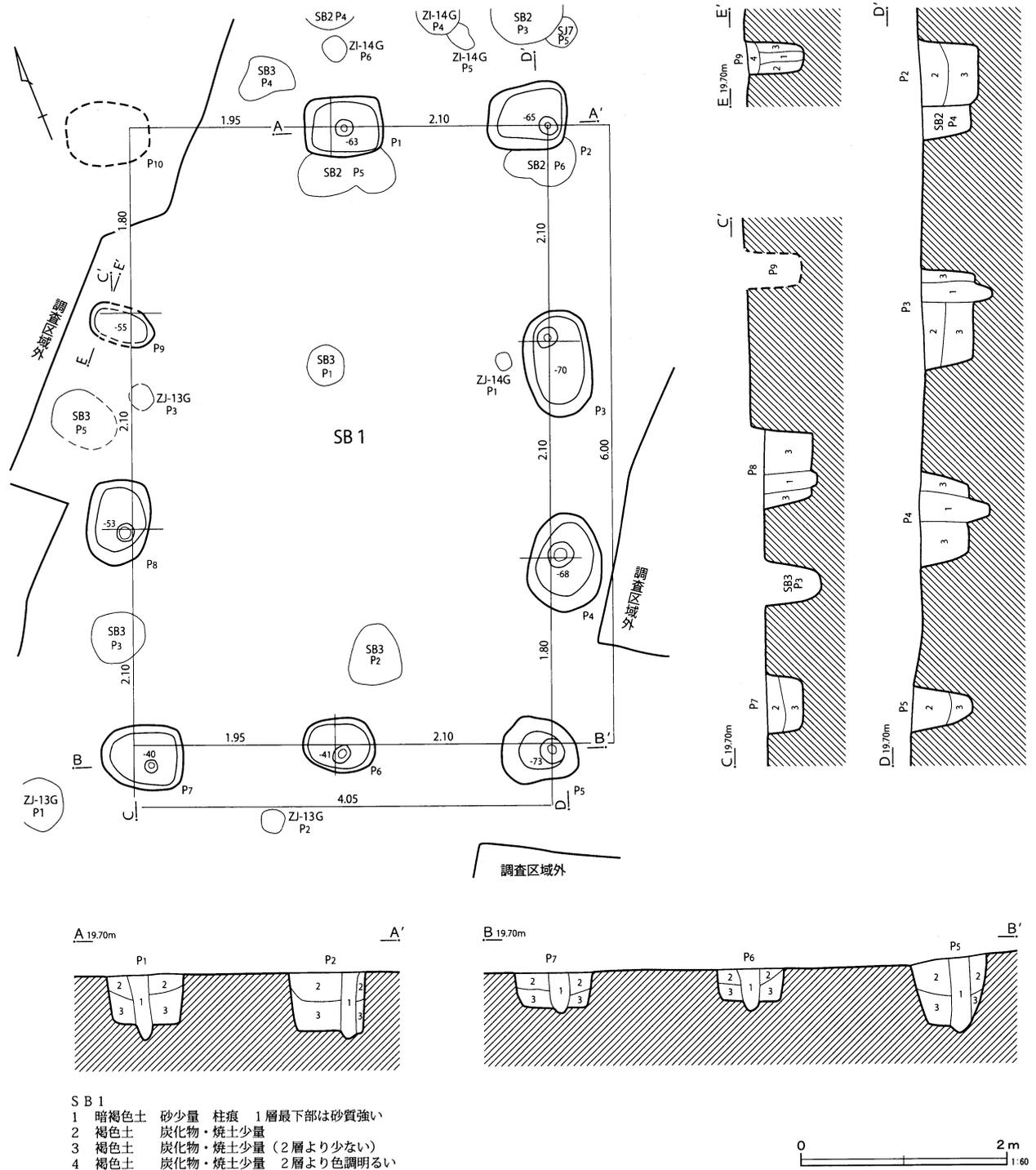
第1号掘立柱建物跡 (第177図)

第1号掘立柱建物跡はZI・ZJ-13・14グリッド

に位置する。建物北西隅柱は調査区外にある。重複する第7号住居跡を切り、柱穴相互の切り合いから第2号掘立柱建物跡を切っていた。また、第3号掘立柱建物跡とも重複するが、柱穴相互の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

3×2間の側柱建物で、規模は桁行長6.00m、梁行長4.05m、平面積は24.30㎡である。主軸方位はN-22°-Eを指す。

柱間距離は桁行北から2.10m、2.10m、1.80m、梁行は東から2.10m、1.95mとなり、等間に揃わない。柱穴は楕円形または隅丸方形で、長径65~

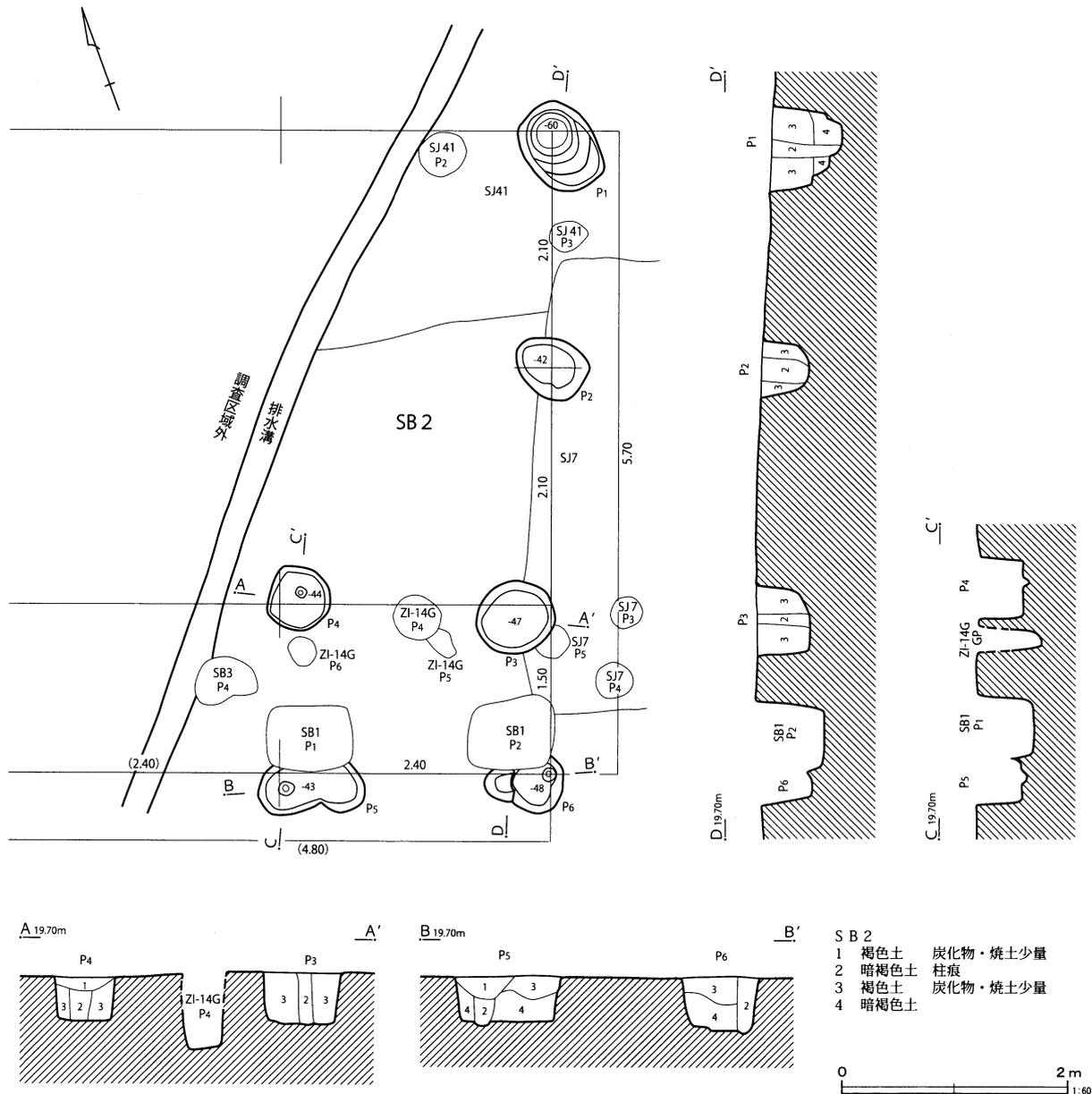


第177図 第1号掘立柱建物跡

102cm、短径37~69cm、深さ40~73cmと深めである。検出された柱穴9本全てに柱痕が認められ、P1~P8には柱あたりが認められた。P9は排水用の溝内に位置し、詳細は不明である。P1・P2は、第2号掘立柱建物跡P5・P6をわずかに南に移した位置で重複し、建物の軸が揃っていることから

連続的な建て替えの可能性が高いと推定される。

出土遺物は少なく、P4から外面に煤の付着した土師器甕の底部が出土した(第197図1)。第197図1は武蔵型甕である。胴部の膨らみが弱いことから、9世紀後半までは降らないものであろう。第2号掘立柱建物跡との関係からみると、混



第178図 第2号掘立柱建物跡

入の疑いがある。

建物の時期を特定することは難しいが、第2号掘立柱建物跡と同じか直後の時期と考えると9世紀前半～中頃と考えておきたい。

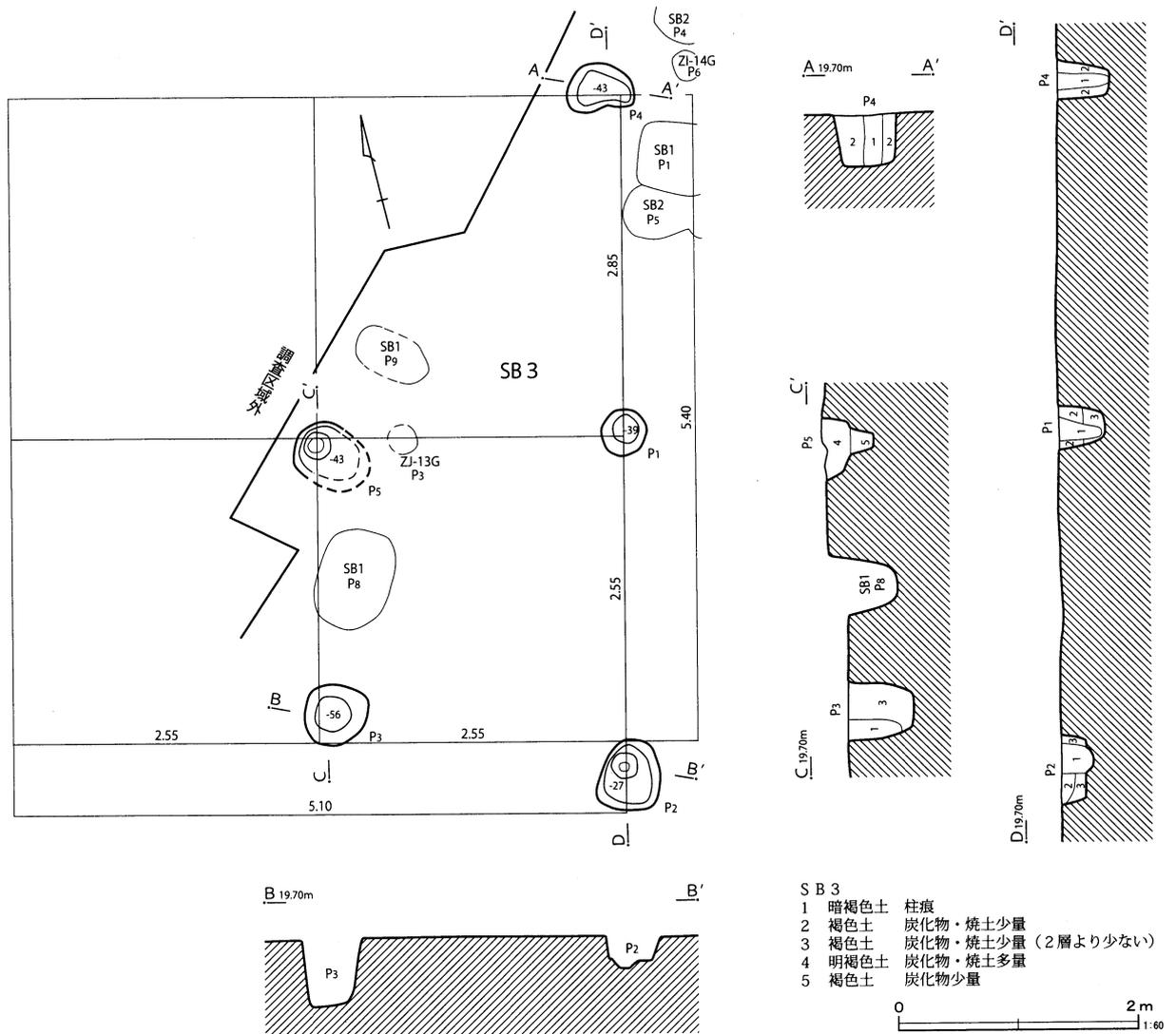
第2号掘立柱建物跡（第178図）

第2号掘立柱建物跡はZ1・ZJ-14グリッドに位置する。建物西側は調査区外に延びている。重複する第7・41号住居跡を切っていた。第1号掘立柱建物跡の北側にほぼ軸を揃えて隣接する。柱穴は南側廂柱が重複し、本建物跡の方が古いことが

判明した。また、第3号掘立柱建物跡とも重複するが、柱穴相互の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

建物西側が調査区外に延びているため明確な規模は不明であるが、梁行2間、桁行2間以上、片廂の東西棟側柱建物と推定される。梁行長5.70m、桁行長4.80m以上となる。主軸方位はN-19°-Eを指す。

柱間距離は、梁行2.10m等間、軒の出は1.50mである。桁行柱間は身舎、廂ともに2.40mである。



第179図 第3号掘立柱建物跡

柱穴は円形基調で、長径56~93cm、短径52~64cm、深さ42~60cmと、掘り込みが深くしっかりした掘り方を持つ。

P1・P4~P6には柱あたりが、6本全てに柱痕が認められた。柱径は20cm前後と思われる。P5・P6は、第1号掘立柱建物跡P1・P2と僅かにずれた位置で重複しており、連続的に建て替えられたと考えられる。

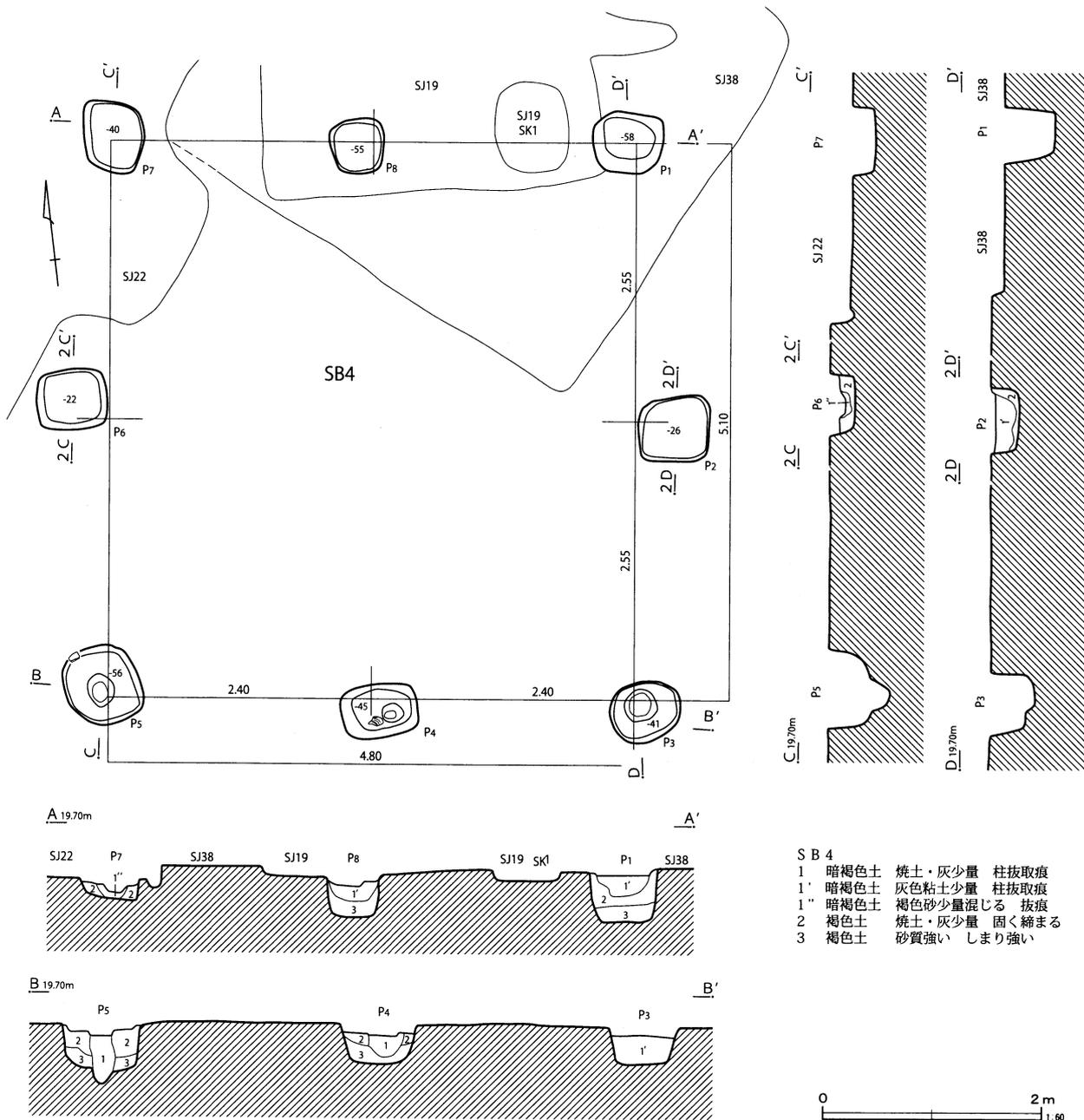
出土遺物は少ない。P1・P5から南比企産の須恵器坏破片が出土した(第197図2・3)。2は底部回転糸切り後、体部下端と底部周辺を回転ヘラケズリ調整する。8世紀後半の所産である。3は底部回転糸切り後無調整の坏で、9世紀前半~中

頃のものであろう。後者を採って9世紀前半~中頃の建物跡と推定しておきたい。

第3号掘立柱建物跡(第179図)

第3号掘立柱建物跡はZI・ZJ-13・14グリッドに位置する。建物西側は調査区外に延びている。第1・2号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切り合いはなく新旧関係は不明である。柱並びがやや悪いが、柱痕が観察されたため建物跡と考えた。

建物西側が調査区外に延びているため正確な規模は不明であるが、2×2間またはそれ以上の総柱建物と推定される。桁行長は5.40m、2×2間の建物と推定すると、梁行長は5.10mに復元で



第180図 第4号掘立柱建物跡

きる。推定平面積は27.54㎡である。主軸方位はN-12°-Eを指す。

柱間は桁行北から2.85m、2.55m、梁行東から2.55mとなり、柱並びは一定しない。柱穴はやや小型の円形または楕円形で、長径36~60cm、短径30~52cm、深さ27~56cmである。検出された柱穴5本の内、P1~P4に柱痕が認められた。また、2×2間の建物と推定すると、P3は柱筋からずれ、やや内側に位置している。P5は排水溝内から検

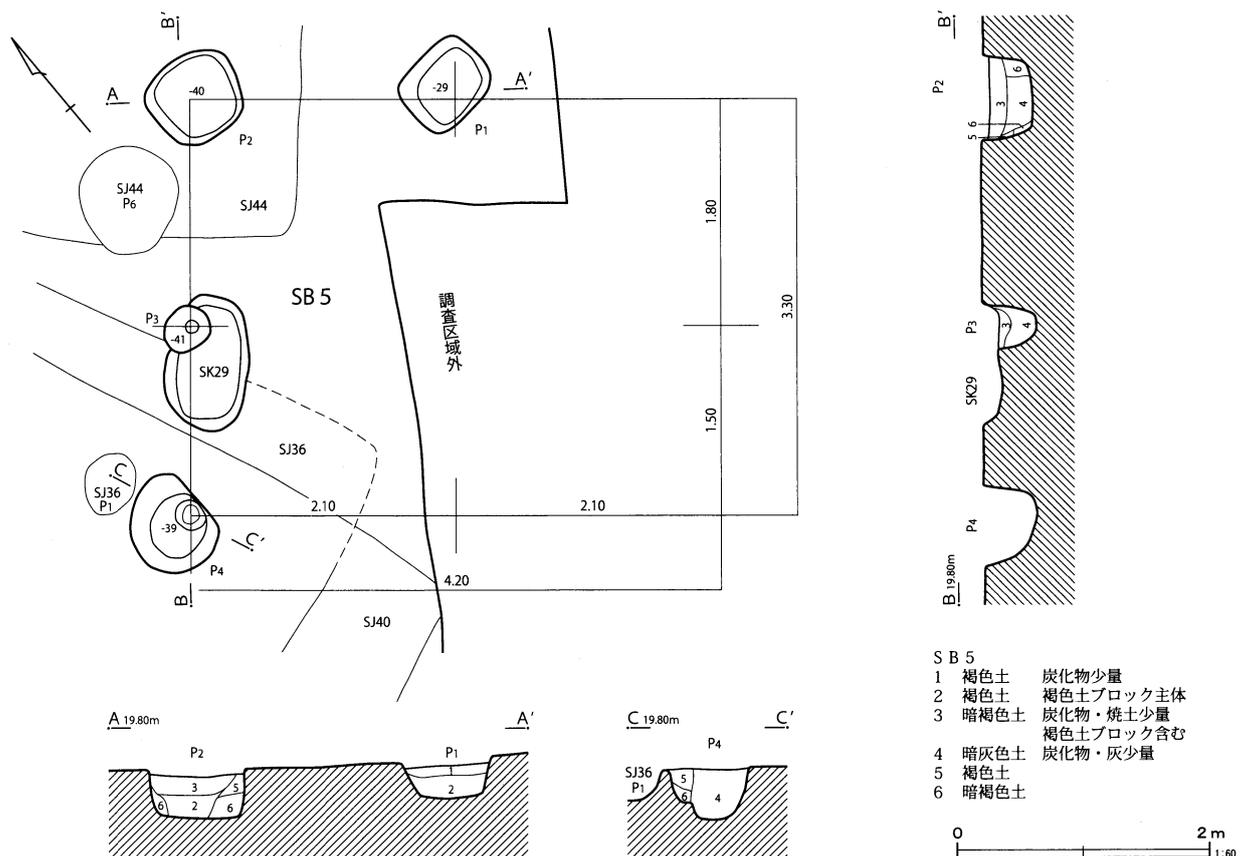
出された。

出土遺物はない。時期は不明であるが、第1・2号掘立柱建物跡とともに群を構成することから、近接時期の建物跡と考えておきたい。

第4号掘立柱建物跡 (第180図)

第4号掘立柱建物跡はZJ・ZK-22グリッドに位置する。住居跡集中地域の一角にあり、重複する第19・22・26・35・38・48号住居跡を切っていた。

2×2間の側柱建物で、規模は桁行長5.10m、



第181図 第5号掘立柱建物跡

梁行長4.80m、平面積は24.48㎡である。桁行・梁行の差が少なく、総柱建物に近い構造であるが、中間柱が存在しない。主軸方位はN-8°-Eを指す。

柱間は、桁行2.55m等間に揃うが、中間柱が外側に僅かに外れる。梁行は2.40m等間に揃う。柱筋も通っていた。

柱穴は隅丸方形基調で、長径48~73cm、短径48~69cm、深さ22~58cmである。P1~P8全てから柱を抜き取ったと思われる痕跡が確認された。

出土遺物は少ない。P1から須恵器坏、土師器続比企型皿・北武蔵型暗文皿、P4から須恵器壺が出土した(第197図4~7)。4は8世紀中頃~後半、6・7は8世紀初頭前後の遺物と思われる。直接重複関係を持つ遺構のなかでは第26号住居跡が最も新しく、8世紀中頃~後半と推定される。第23号住居跡は削平されていた。9世紀以降と推

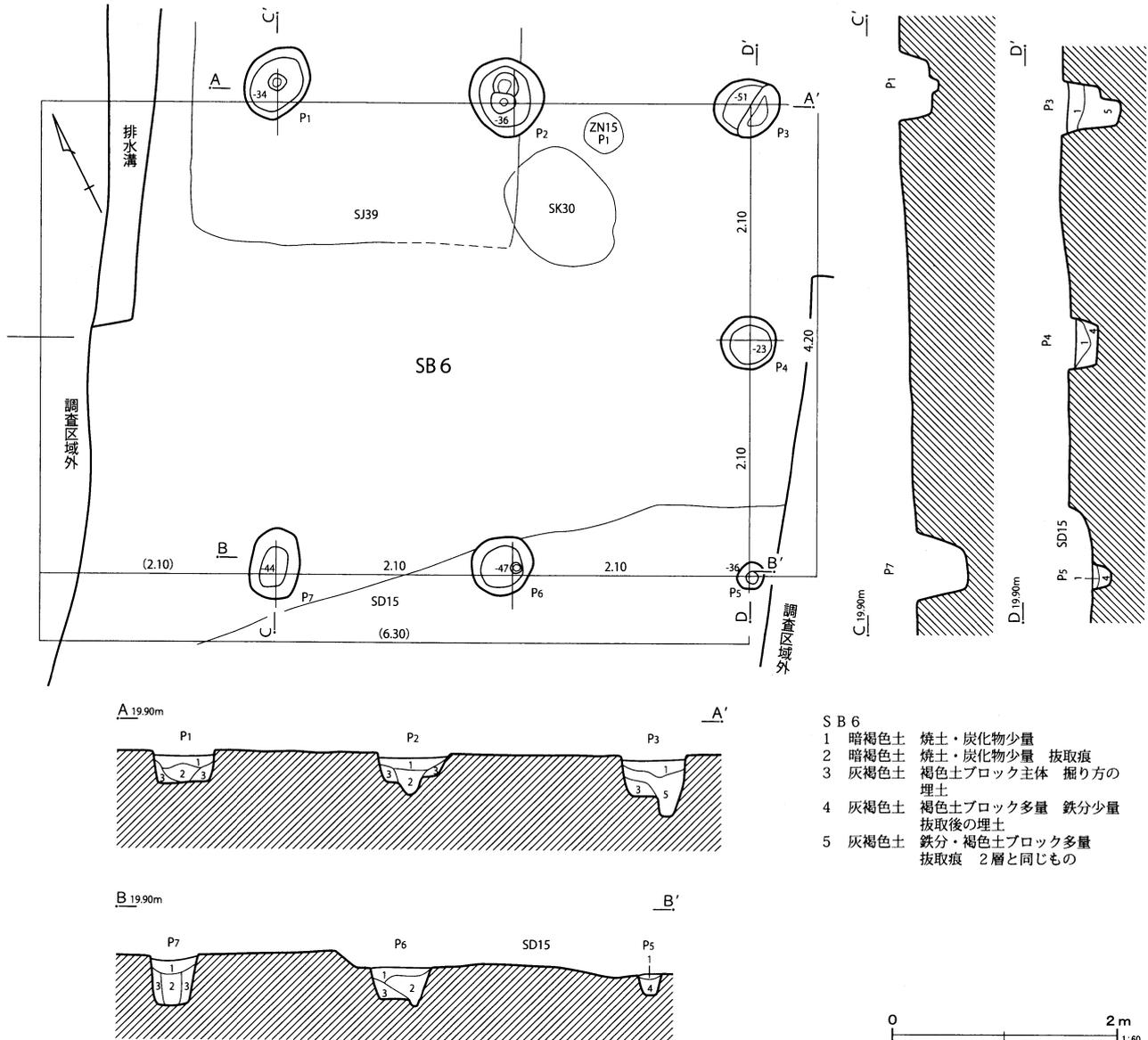
定したが時期限定は難しい。第26号住居跡との関係から8世紀後半以降と捉えるに留めたい。

第5号掘立柱建物跡(第181図)

第5号掘立柱建物跡はZM-16グリッドに位置する。建物南東側は調査区外に延びている。重複する第36・40・44号住居跡を切っていた。第29号土壌はP3柱穴掘り方の可能性もある。

建物南東側が調査区外に延びており、詳細は不明である。建物跡としてはやや疑問もあるが、可能性として提示しておく。梁行2間、桁行2間またはそれ以上の建物と考えておく。P1-P2間の柱間距離が2.10mと考えられる。梁行は3.30m、柱間距離はP2-P3間が1.80m、P3-P4間が1.50mとなる。主軸方位はN-38°-Eを指す。

柱穴は円形または隅丸方形で、長径40~73cm、短径32~70cm、深さ29~41cmである。土層観察により、P2~P4には柱を抜き取ったと思われる痕



第182図 第6号掘立柱建物跡

跡が観察された。

出土遺物はなく、時期を明らかにすることはできない。第36号住居跡との関係から7世紀後半～末葉以降という限定はできる。

第6号掘立柱建物跡 (第182図)

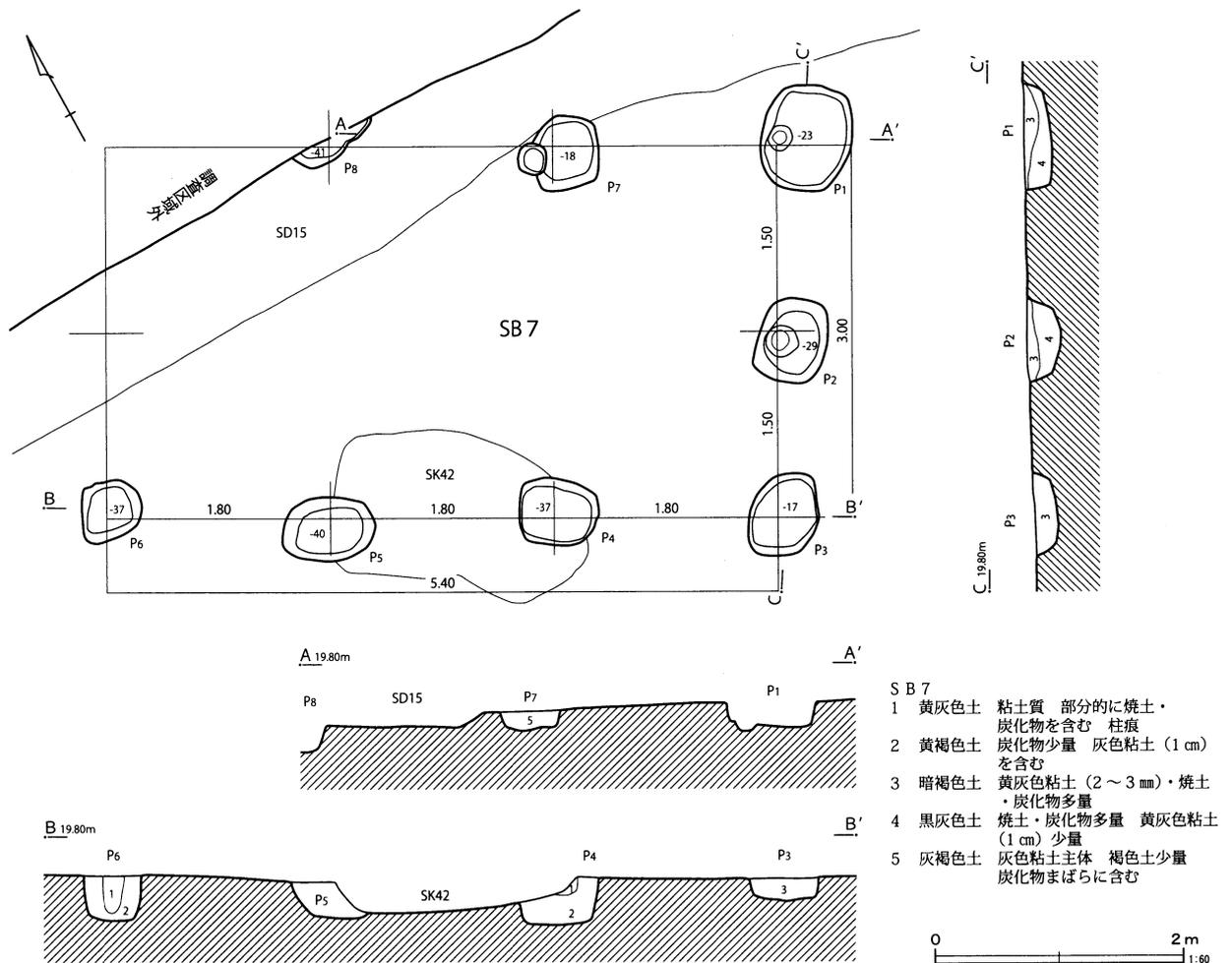
第6号掘立柱建物跡はZM-15、ZN-15・16グリッドに位置する。重複する第39号住居跡を切り、第15号溝跡に上面を削平されていた。南側約3mに第7号溝跡が位置している。

3×2間以上の側柱建物と推定され、推定規模は桁行長6.30m、梁行長4.20m、平面積は26.46㎡

である。主軸方位はN-27° - Eを指す。

柱間は桁行2.10m、梁行2.10m等間となる。柱穴は円形または楕円形で、長径24~70cm、短径24~65cm、深さ23~55cmである。P5・P6は第15号溝跡掘削後に検出されたため、上層が削平されている。検出された7本の柱穴の内、P7には柱痕が、P1・P2・P6には柱抜き取り痕と思われる痕跡が観察された。

出土遺物は少なく、P1第2層中から土器小片が出土したが、実測可能な遺物はない。重複する第39号住居跡の時期が確定できないため、9世紀



第183図 第7号掘立柱建物跡

以降と推定されるが、それ以上の限定は難しい。

第7号掘立柱建物跡 (第183図)

第7号掘立柱建物跡はZO-17・18グリッドに位置する。建物北隅は調査区外に延びている。重複する第42号土壌を切っていた。また、第15号溝跡と重複し、本建物跡の方が古い。東側約2mに第8号掘立柱建物跡が位置している。南西約2m前後には軸方向を揃えて第7号溝跡が位置している。

3×2間の側柱建物と推定され、規模は桁行長5.40m、梁行長3.00m、平面積は16.20㎡である。西側梁行中間柱は検出されなかった。第15号溝跡に削平されたと考えたが、桁行が更に延びる可能性もある。主軸方位はN-61°-Wを指す。

柱間距離は桁行1.80m、梁行1.50m等間となる。

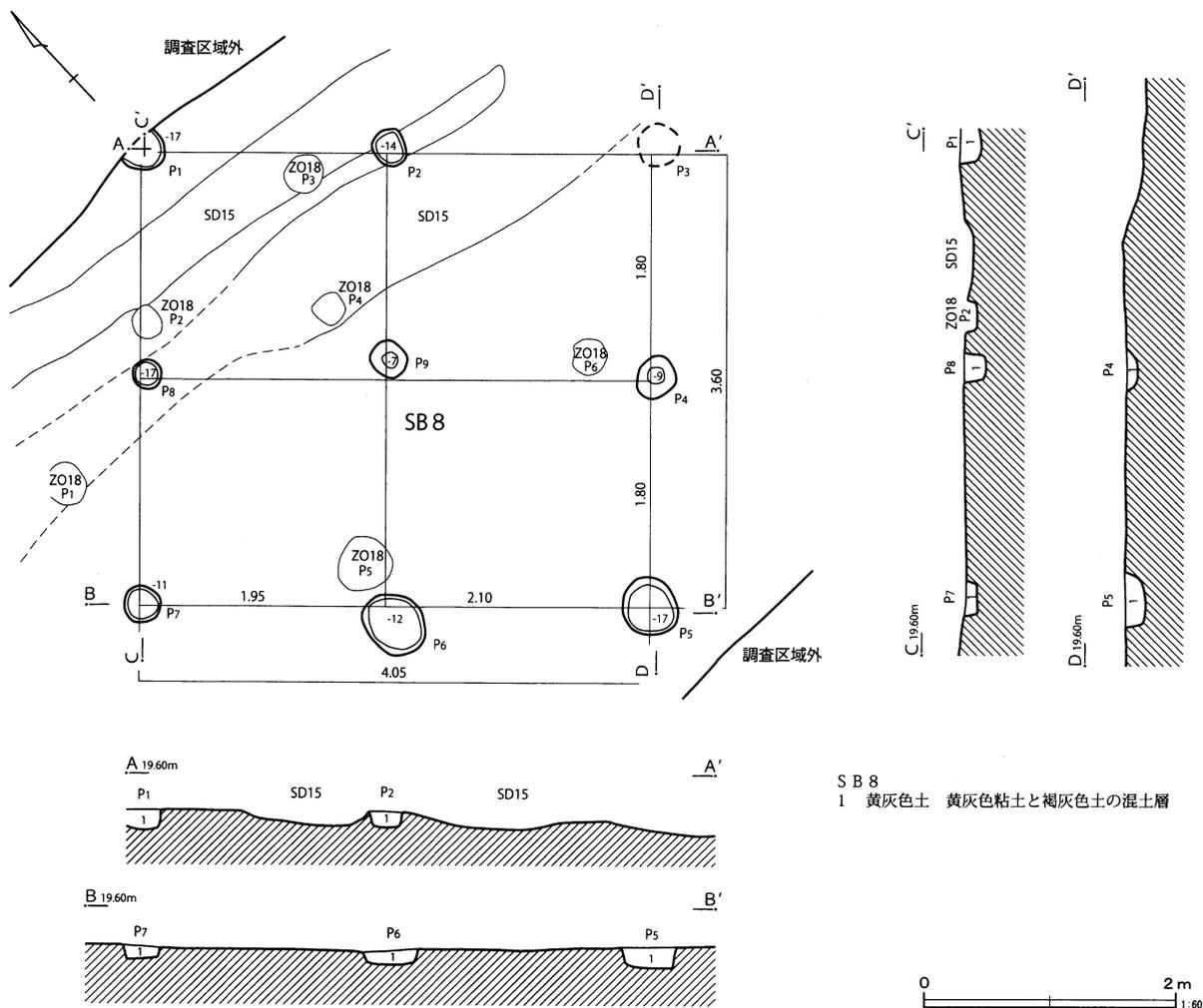
柱穴は楕円形または隅丸方形で、長径48~86cm、短径48~72cm、深さ17~41cmである。P6は柱痕が観察された。

遺物は、P1から須恵器蓋つまみ部分、P3から須恵器蓋破片が出土した(第197図8・9)。時期限定は難しいが、出土遺物と第42号土壌との関係から8世紀前半頃と推定しておきたい。

第8号掘立柱建物跡 (第184図)

第8号掘立柱建物跡はZO-18グリッドに位置する。重複する第15号溝跡に上面を削平されていた。西側約2mに第7号掘立柱建物跡、東側約10mには第9号掘立柱建物跡が位置している。

2×2間の総柱建物跡で、規模は桁行長4.05m、梁行長3.60m、平面積は14.58㎡である。主軸方位はN-49°-Wを指す。



第184図 第8号掘立柱建物跡

柱間距離は桁行東から2.10m、1.95m、梁行は1.80m等間である。柱穴は円形で、長径25～53cm、短径23～45cmと小型で、深さは7～17cmである。P3は第5号溝跡によって削平されていた。柱穴からは柱痕、柱抜き取り痕は観察されなかった。束柱を持つことから高床建物と考えられる。

出土遺物はないため、正確な時期は不明であるが、小型の柱穴を持つほぼ同一規格の建物跡が城敷遺跡で多数検出されている。时期的には鬼高期初頭前後のものであり、本例もほぼ同時期に収まる可能性が高いと考える。

本建物跡東側に隣接する第46号住居跡は軸が揃い、鬼高期初頭（本書Ⅳ期古段階）に位置付けられる。西側に隣接する第42号土壌も同時期であり、

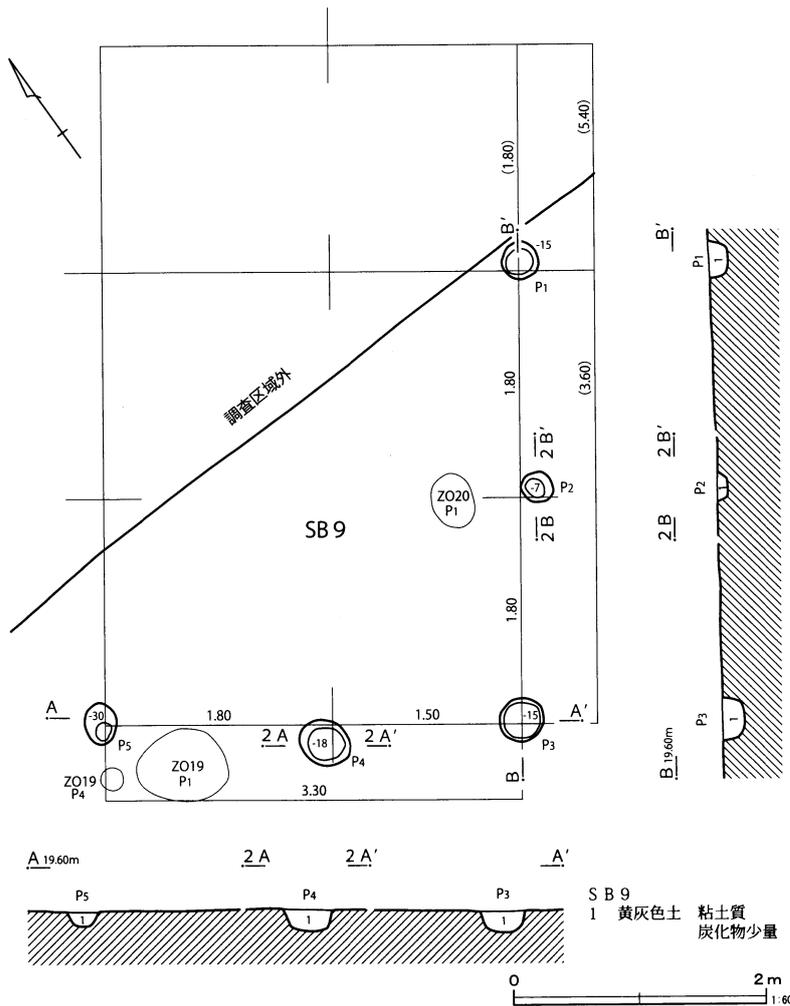
竪穴住居跡、土壌とセットとなり存在したと思われる。

第9号掘立柱建物跡（第185図）

第9号掘立柱建物跡はZO-19・20グリッドに位置する。第46号住居跡北東に隣接する。建物北側半分は調査区外に延びている。西側約10mには第8号掘立柱建物跡が位置している。

正確な規模は不明であるが、2×2間、または3×2間程度の側柱建物跡と推定される。2×2間の建物と推定すると、桁行の柱間距離が1.80m等間であることから桁行長3.60m、梁行長3.30m、平面積は11.88㎡である。主軸方位はN-35°-Eを指す。

柱間は桁行1.80m等間、梁行は東から1.50m、1.80



第185図 第9号掘立柱建物跡

mである。第8号掘立柱建物跡よりも一回り小さい建物跡である。柱穴は円形で、長径25~41cm、短径22~37cmと小型で、深さは7~30cmである。柱穴埋土は炭化物混じりの黄灰色粘質土で共通し、柱痕は不明確であった。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、第8号掘立柱建物跡と同様な小型柱穴を持つ小規模建物跡であり、鬼高期初頭前後に属するものと考えておきたい。第46号住居跡、第8号掘立柱建物跡、第42号土壇とほぼ同時期の遺構群であろう。

第10号掘立柱建物跡 (第186図)

第10号掘立柱建物跡はZK・ZL-16・17グリッドに位置する。建物東側は調査区外に延びている。重複する第47号住居跡と第11号掘立柱建物跡を切っていた。

建物東側が調査区外に延びており、正確な規模は不明であるが、3×2間、またはそれ以上の側柱建物跡と考えられる。3×2間の建物と仮定すると、桁行柱間距離が2.10m等間であることから、桁行長6.30m、梁行長4.50m、平面積は28.35㎡である。主軸方位はN-65°-Wを指す。

柱間距離は桁行2.10m、梁行2.25m等間となる。柱穴は楕円形または隅丸方形で、長径80~93cm、短径66~82cm、深さ44~78cmである。検出された6本の柱穴の内、P4・P6に柱痕と思われる土層が観察された。

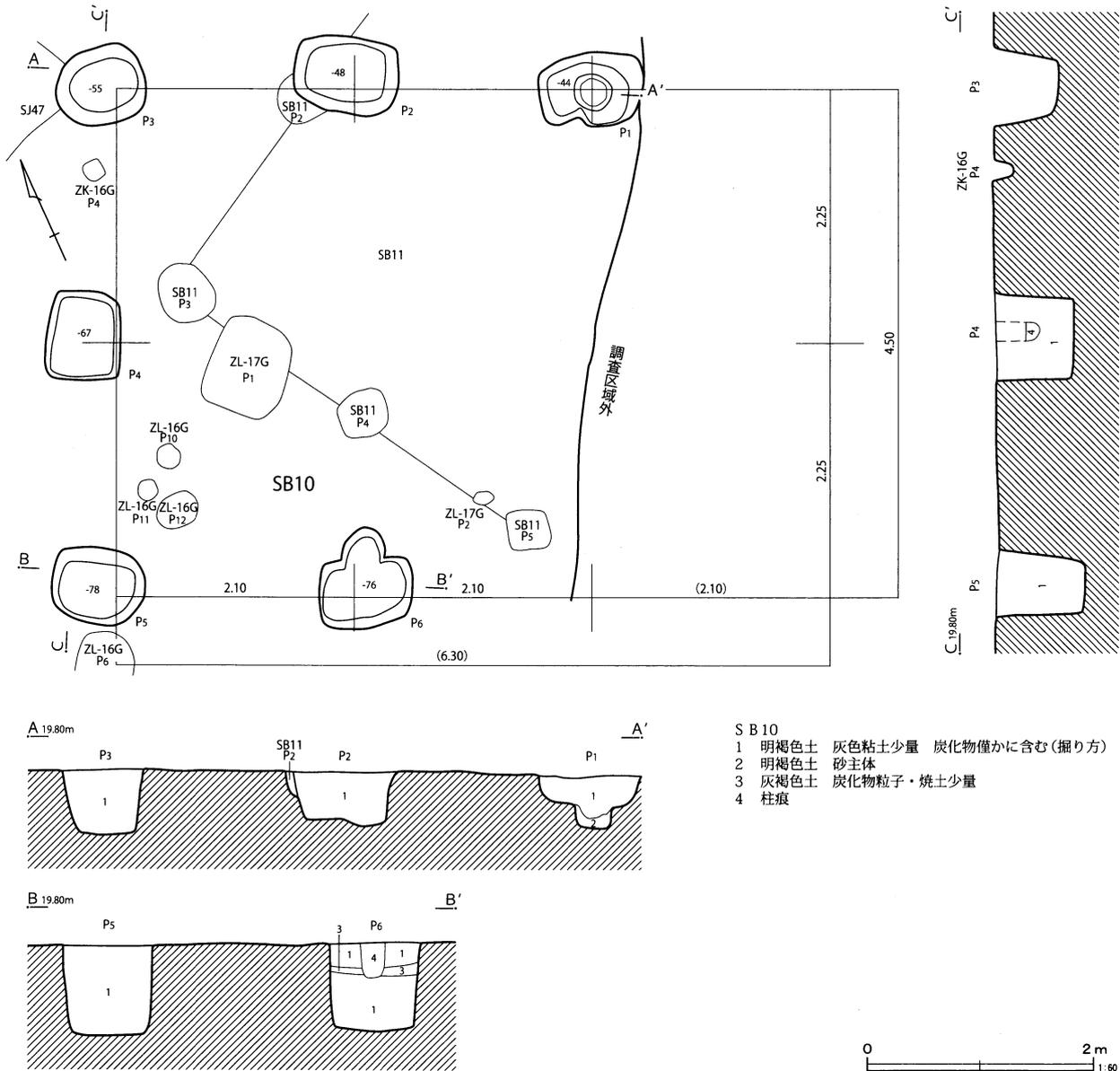
出土遺物はない。概ね7世紀後半~9世紀代には収まるが、正確な時期は不明である。

第11号掘立柱建物跡 (第187図)

第11号掘立柱建物跡はZK・ZL-16・17グリッドに位置する。建物東側は調査区外に延びている。重複する第10号掘立柱建物跡に切られていた。

正確な規模は不明であるが、2×2間、または3×2間の側柱建物跡と推定される。2×2間の側柱建物と仮定すると、桁行柱間距離が1.80m等間であることから桁行長5.40m、梁行長4.20m、平面積は22.68㎡である。主軸方位はN-33°-Wを指す。

柱間は南西側桁行1.80mとなるが、北東側桁行では、P4に対応する位置に柱穴はなく、等間とならないものと考えられる。梁行は2.10m等間となる。柱穴は円形または方形で、長径43~55cm、短径41~47cm、深さ18~32cmである。掘り方埋土は淡褐色土で構成され、P3~P5に柱痕が観察された。



第186図 第10号掘立柱建物跡

出土遺物はない。第10号掘立柱建物跡より古いことは确实であるが、詳細な時期比定はできない。

第12号掘立柱建物跡 (第188図)

第12号掘立柱建物跡はZK・ZL-16グリッドに位置する。第10・11号掘立柱建物跡とともに建物群を構成しているが、柱列が1列検出されたのみで、建物南西側は調査区外に位置する。重複する第47号住居跡を切っていた。

残存規模は南北長4.80m、東西長は不明、主軸方位はN-36°-Eを指す。

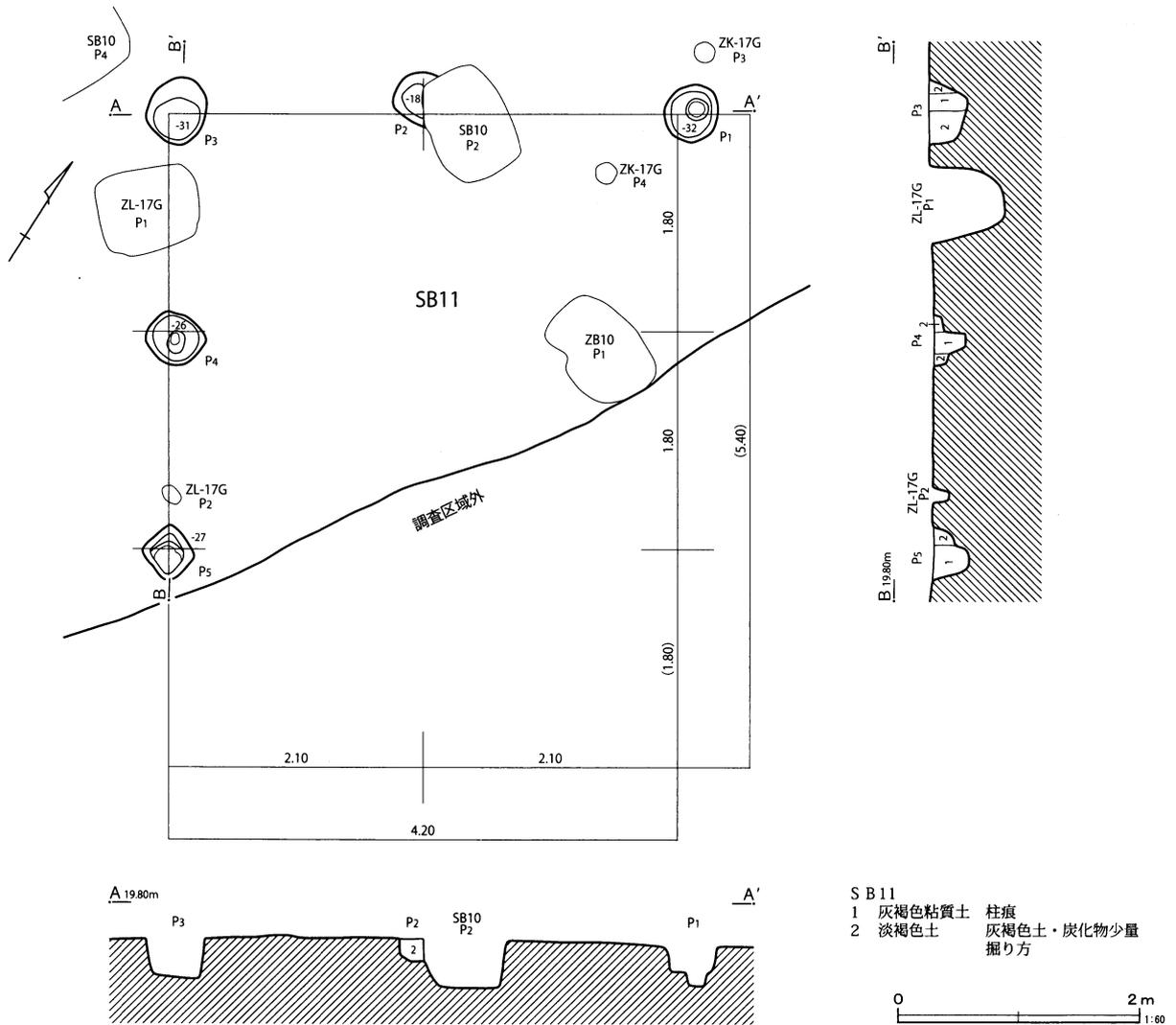
柱間は2.40m等間となる。柱穴は円形または楕

円形で、長径60~78cm、短径46~70cm、深さ23~30cmである。埋土は灰褐色土を基調としており、柱痕はP3下部(第2層)に可能性があるが、明確には観察されなかった。

出土遺物はなく、時期は不明である。第47号住居跡との関係から7世紀末葉~8世紀初頭以降という限定はできる。

第13号掘立柱建物跡 (第189図)

第13号掘立柱建物跡はZO-22グリッドに位置する。南東約3mに第14・15号掘立柱建物跡があり、3棟で建物群を形成している。



第187図 第11号掘立柱建物跡

2 × 2 間の総柱建物跡で、規模は桁行長3.90m、梁行長3.60m、平面積は14.04㎡である。主軸方位はN-14° -Wを指す。

柱間は桁行1.95m、梁行1.80m等間となる。柱穴は隅丸方形を基調としていた。P5は長楕円形で深度も浅かった。P5を除くと、柱穴規模は長径55~115cm、短径55~90cm、深さ19~55cmである。

検出された9本の柱穴の内、P4・P5・P6以外には柱痕、または柱を抜き取ったと思われる痕跡が観察された。柱痕埋土は灰褐色の粘質土が堆積していた。P8は抜き取り後の埋土から西側から抜き取られたかのような土層が観察された。P5は掘り込みが浅く、円形とならない（長径55cm、短径27cm、深さ19cm）ことから、厚みのある板状

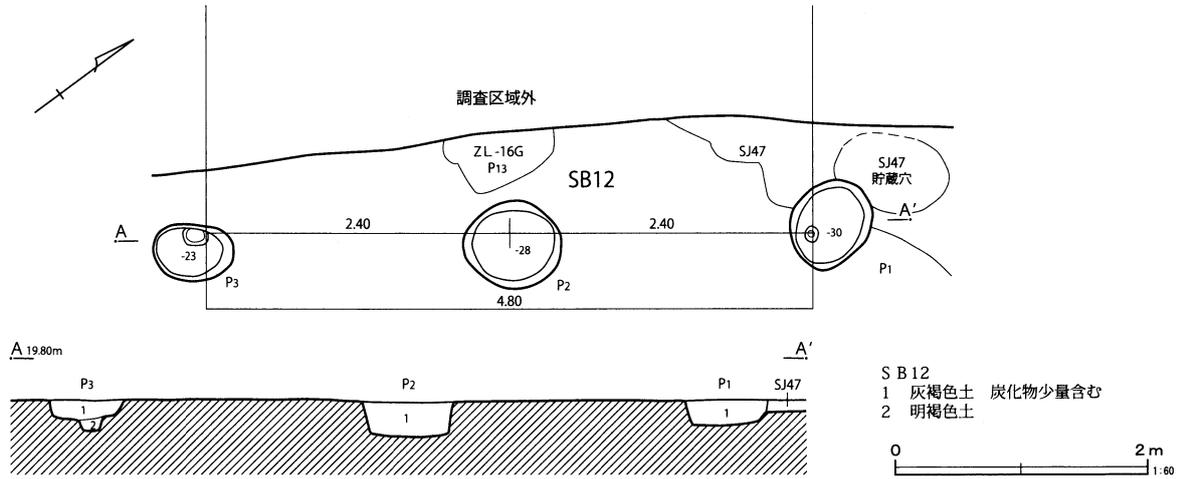
の材を柱材に使用した可能性がある。いずれにせよ、床束をもつ高床式建物跡と推定される。

出土遺物はない。古代の建物跡であるが、時期の特定はできない。

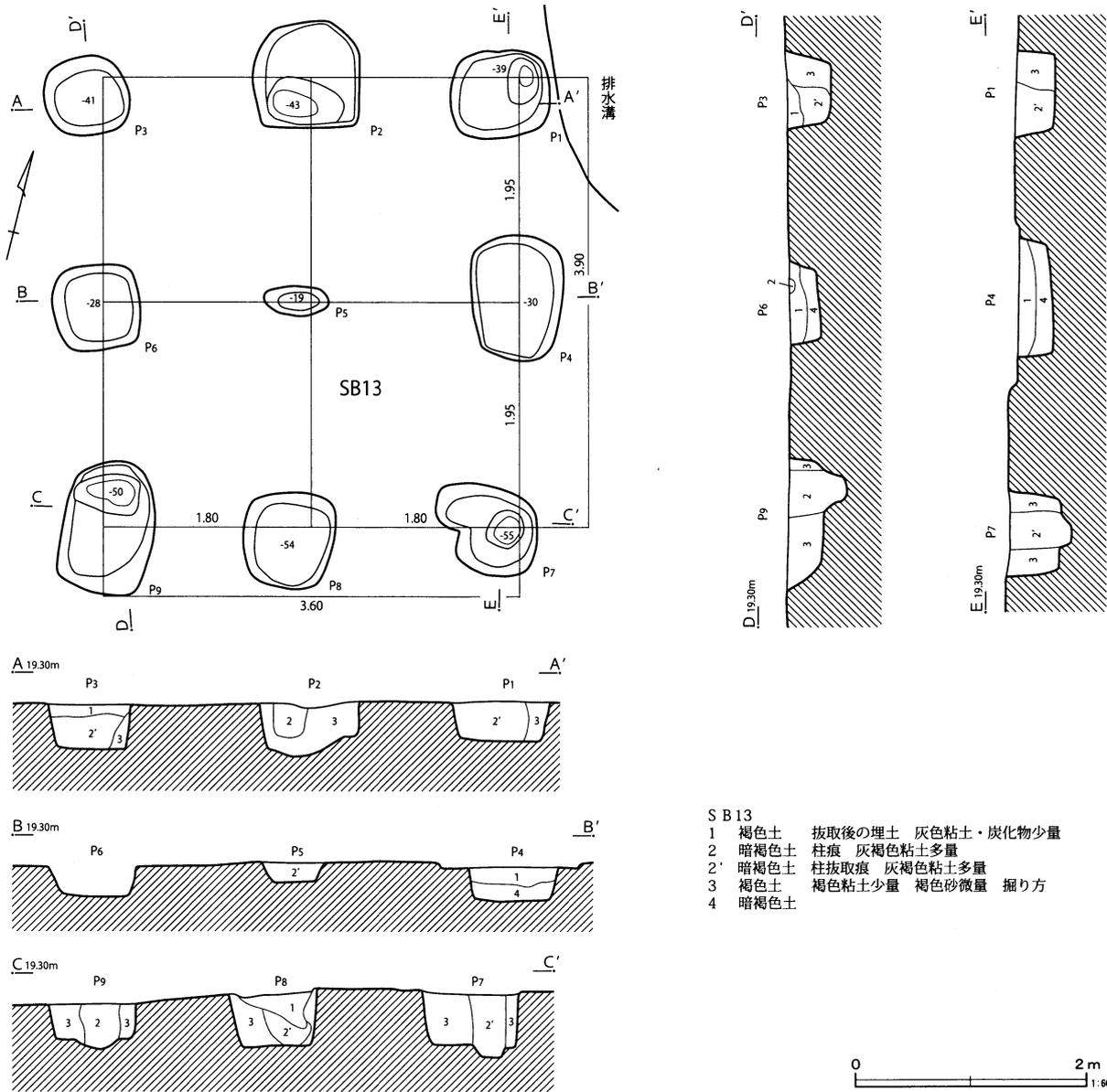
第14号掘立柱建物跡（第190図）

第14号掘立柱建物跡はZO-23・24グリッドに位置する。建物南側の一部は調査区外に延びている。第15号掘立柱建物跡とはほぼ軸を揃えて重複し、切り合い関係から第15号掘立柱建物跡から直接建て替えたと考えられる。P8は第15号掘立柱建物跡P6と同位置に建て替えたものと思われる。

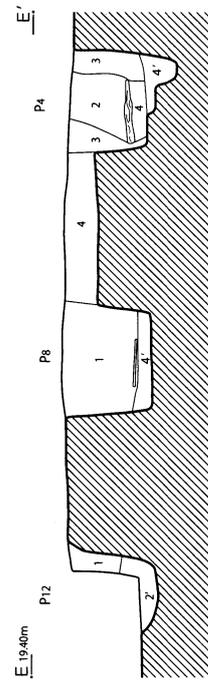
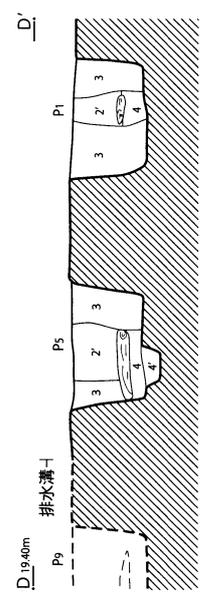
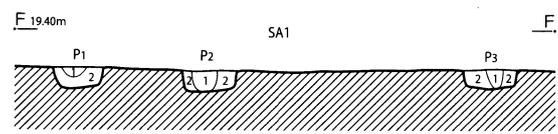
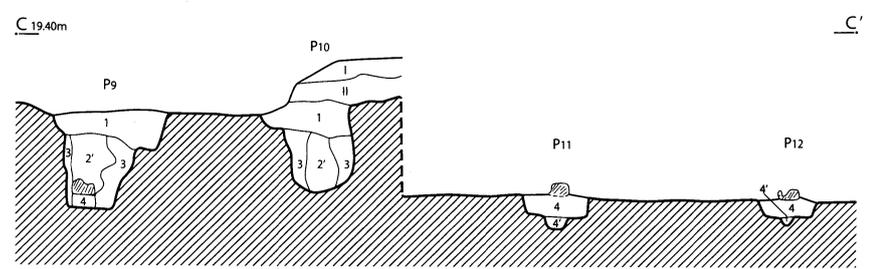
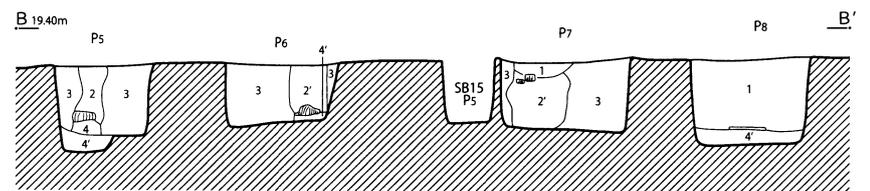
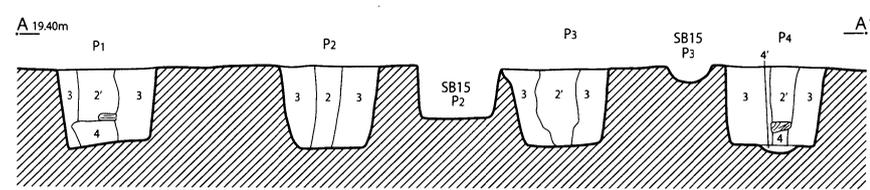
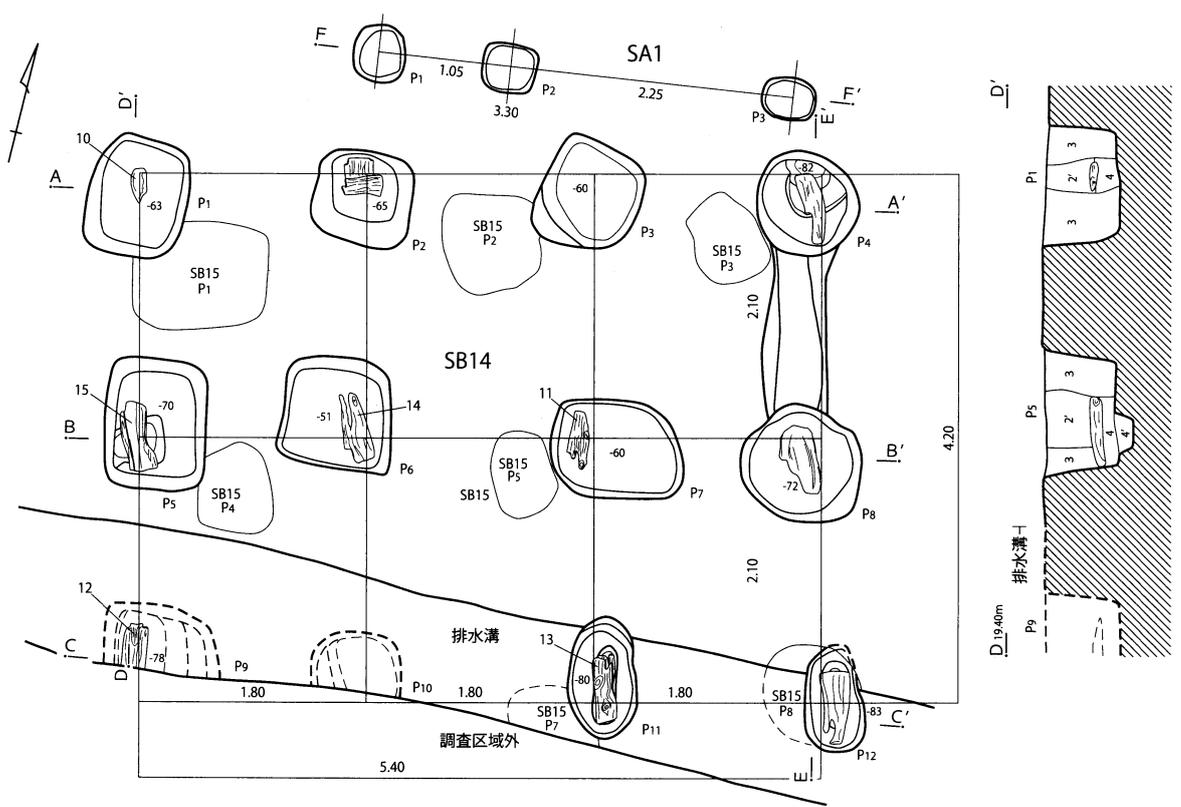
北西約3mに第13号掘立柱建物跡が位置している。また、北側1m前後に第1号ピット列が位置しており、主軸方位は一致しないものの近接して



第188図 第12号掘立柱建物跡



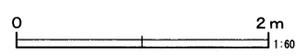
第189図 第13号掘立柱建物跡



- SB14
 I 表土 現耕作土
 II 褐色土 灰色粘土・鉄少量
 1 暗褐色土 柱抜き取り痕の埋没層 灰色粘土多量 炭化物少量
 2 褐色土 灰色粘土少量

- 2' 褐色土 柱の抜取痕
 3 褐色土 灰色粘土少量 炭化物粒子少量
 4 褐色土 粘土粒子多量
 4' 褐色土

- SA1
 1 灰褐色土 灰色粘土主体 暗褐色土少量 柱痕
 2 褐色土 灰色粘土・褐色砂少量



第190図 第14号掘立柱建物跡・第1号柱穴列

いることから、何らかの有機的な関係がある可能性がある。

3×2間、または3×3間の総柱建物跡、高床の倉庫と推定される。前者と仮定すると、規模は桁行長5.40m、梁行長4.20m、平面積は22.68㎡である。主軸方位はN-78°-Eを指す。第13号掘立柱建物跡とはほぼ直交する。

柱間は桁行1.80m、梁行2.10m等間となる。柱穴は楕円形または隅丸方形で、長径85~107cm、短径45~88cm、深さ51~83cmである。

P9・P10は南側半分が調査区外にある。P1・P3・P4・P6・P7・P9・P10には柱抜き取り痕と思われる土層が観察された。また、P1・P2・P4~P9・P11・P12から、分割材が横倒しの状態で出土した。長さは約20~50cmである。柱の沈下を防止するために埋置した礎板と考えられる。

すべての礎板は底面よりも約10cm浮いた位置に設置されていた。P7は上層から出土しており、原位置をとどめない可能性がある。P1・P4・P8出土の材は残存状態が悪かった。礎板下に堆積した第4層は粘質土である。また、東辺のP4-P8間は、部分的に柱穴の掘り方を連結させる「溝持ち」構造になっている。また、建て替えの際、P8は第15号掘立柱建物跡P6をそのまま再利用しているようだ。

出土遺物は礎板に使用された木材がある。礎板は9点出土しており、腐食が激しい3点を除き、6点を図示した(第197図10~15)。

10はP1出土。長さは19.7cm、幅11.1cm、厚さ5.0cm。分割材である。樹種同定の結果、ヒノキ科であることが判明した。11はP7出土。長さ24.9cm、幅7.5cm、厚さ4.8cm。樹種は鑑定不能。原材を分割した状態で使用している。風化が激しく、加工痕は見られない。12はP9出土の材。みかん割されている。長さ44.8cm、幅8.6cm、厚さ6.7cm。樹種は鑑定不能。

13はP11出土。柂目材である。長さ49.2cm、幅14.5cm、厚さ7.4cm。樹種は不明。14はP6出土。分

割材である。長さ52.2cm、幅16.3cm、厚さ11.3cm。樹種は不明である。15はP5出土。芯持材である。材の外側を両面剥がして使用している。長さ50.6cm、幅19.5cm、厚さ11.4cm。土器は出土せず、時期は不明である。材の年代測定の結果、12は暦年較正年代でcalAD434-539年、15はcalAD426-532年となった(第VI章参照)。5世紀~6世紀となるが、想定年代としては古過ぎる。古木効果によるためであろう。おそらくは古代、7世紀以降の建物跡と考えておく。

第15号掘立柱建物跡(第191図)

第15号掘立柱建物跡はZO-23・24グリッドに位置する。第14号掘立柱建物跡とはほぼ軸を揃えて重複する。柱穴の切り合い関係から第14号掘立柱建物跡に切られていることが判明した。北西約3mに第13号掘立柱建物跡が位置している。

2×2間の総柱建物跡と推定され、第14号掘立柱建物跡同様高床倉庫の可能性が高い。規模は桁行長4.20m、梁行長3.60m、平面積は15.12㎡である。主軸方位はN-16°-Wを指す。

柱間距離は桁行2.10m、梁行1.80m等間となる。柱穴は円形または隅丸方形で、長径68~107cm、短径49~86cm、深さ35~69cmである。

柱穴には柱痕が観察されたものではなく、すべて抜き取られたものと推定される。P6は同位置で第14号掘立柱建物跡P8に建て替えられていた。

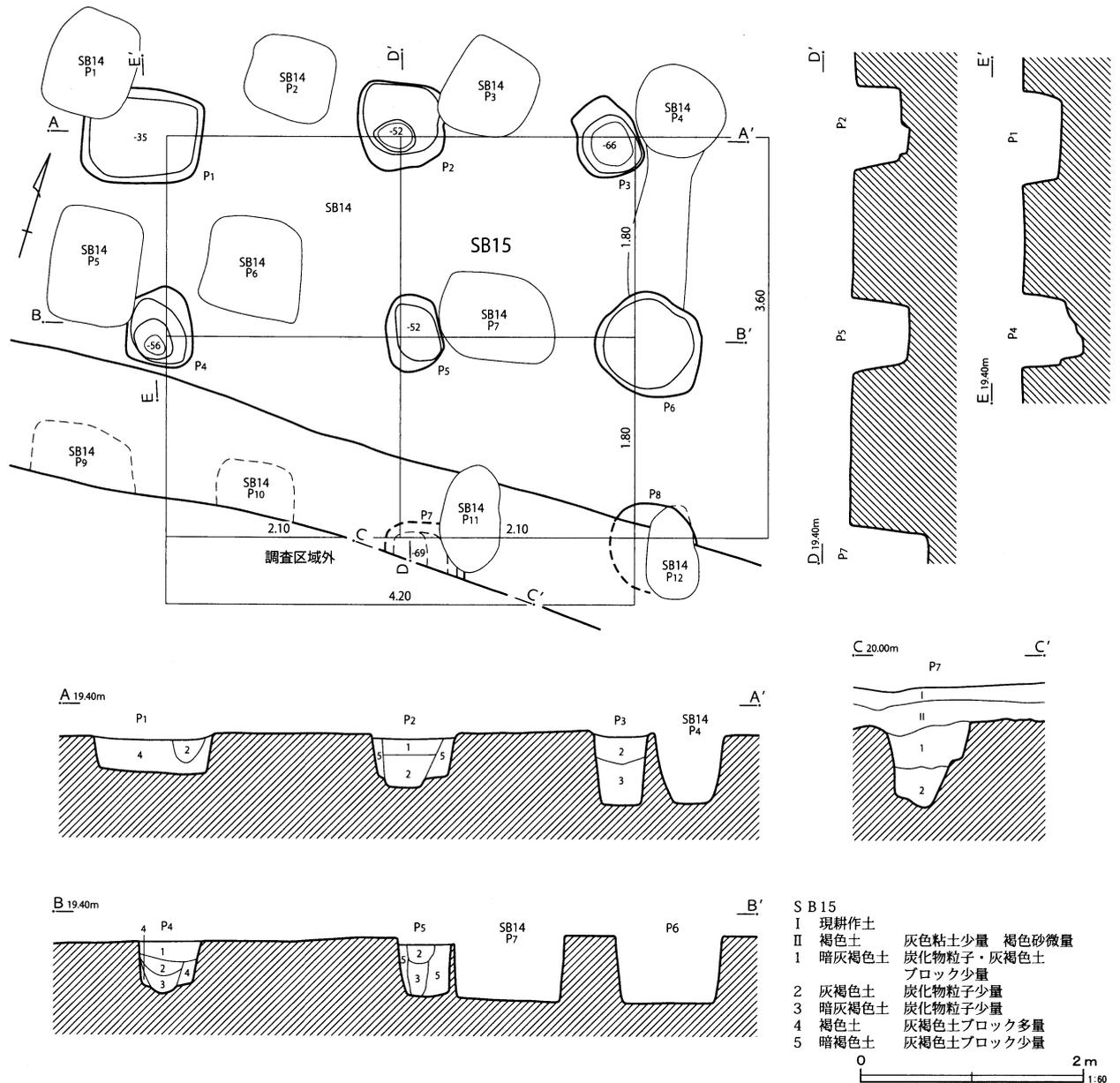
出土遺物はなく、時期は不明である。

第16号掘立柱建物跡(第192図)

第16号掘立柱建物跡はZN・ZO-26グリッドに位置する。重複する第52号住居跡を切っていた。東側約5mに第19号掘立柱建物跡が位置している。

3×2間の側柱建物跡で、規模は桁行長6.00m、梁行長4.50m、平面積は27.00㎡である。主軸方位はN-7°-Wを指す。

柱間距離は桁行東側柱では北から1.80m、2.10m、2.10m、西側柱では北から2.10m、2.10m、1.80mとなり、対応する柱穴同士、距離が不揃いである。



第191図 第15号掘立柱建物跡

梁行は2.25m等間となる。

柱穴は隅丸方形で、長径82~107cm、短径73~84cm、深さ31~47cmである。検出された10本の柱穴の内、P1~P4・P6・P7では柱痕または柱抜き取り痕が観察された。

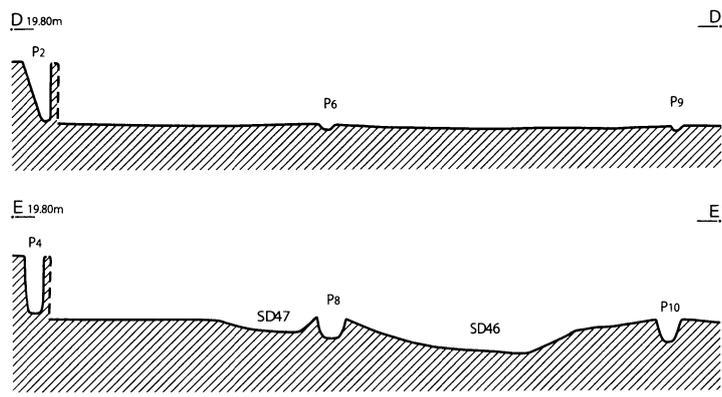
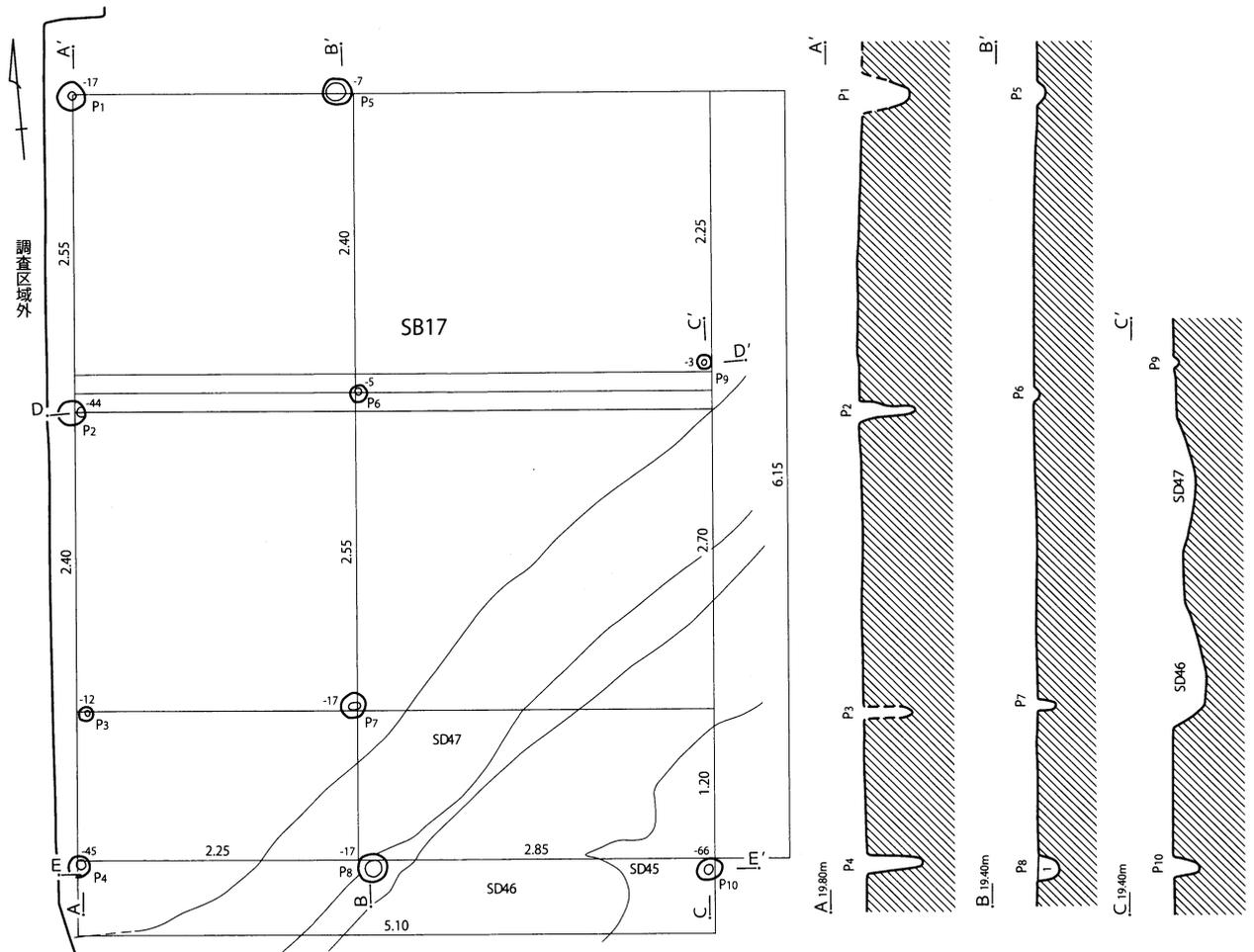
出土遺物は少なく、P9から土師器甕口縁部片、P3から鉄鏃が検出された(第197図16・17)。16は武蔵型甕で、口縁部が緩やかな「コ」の字状に屈曲する。肩部は横ケズリが施され、ノッキング痕が残る。17は三角形関籠被形式の鉄鏃である。

時期は第52号住居跡との関係から5世紀末葉以降となる。土師器甕は8世紀後半~9世紀前半には収まる遺物と考えられる。土師器甕に近い時期の建物と考えておきたい。

第17号掘立柱建物跡(第193図)

第17号掘立柱建物跡はZL-37グリッドに位置する。第45・46・47号溝跡と重複する。新旧関係は不明確であるが、本建物跡の方が新しいと推定される。

地形が傾斜する東側柱列では削平されている



SB17
1 灰暗褐色土 暗褐色土主体 灰色粘土少量



第193図 第17号掘立柱建物跡

降の所産と推定される。

第18号掘立柱建物跡 (第194・195図)

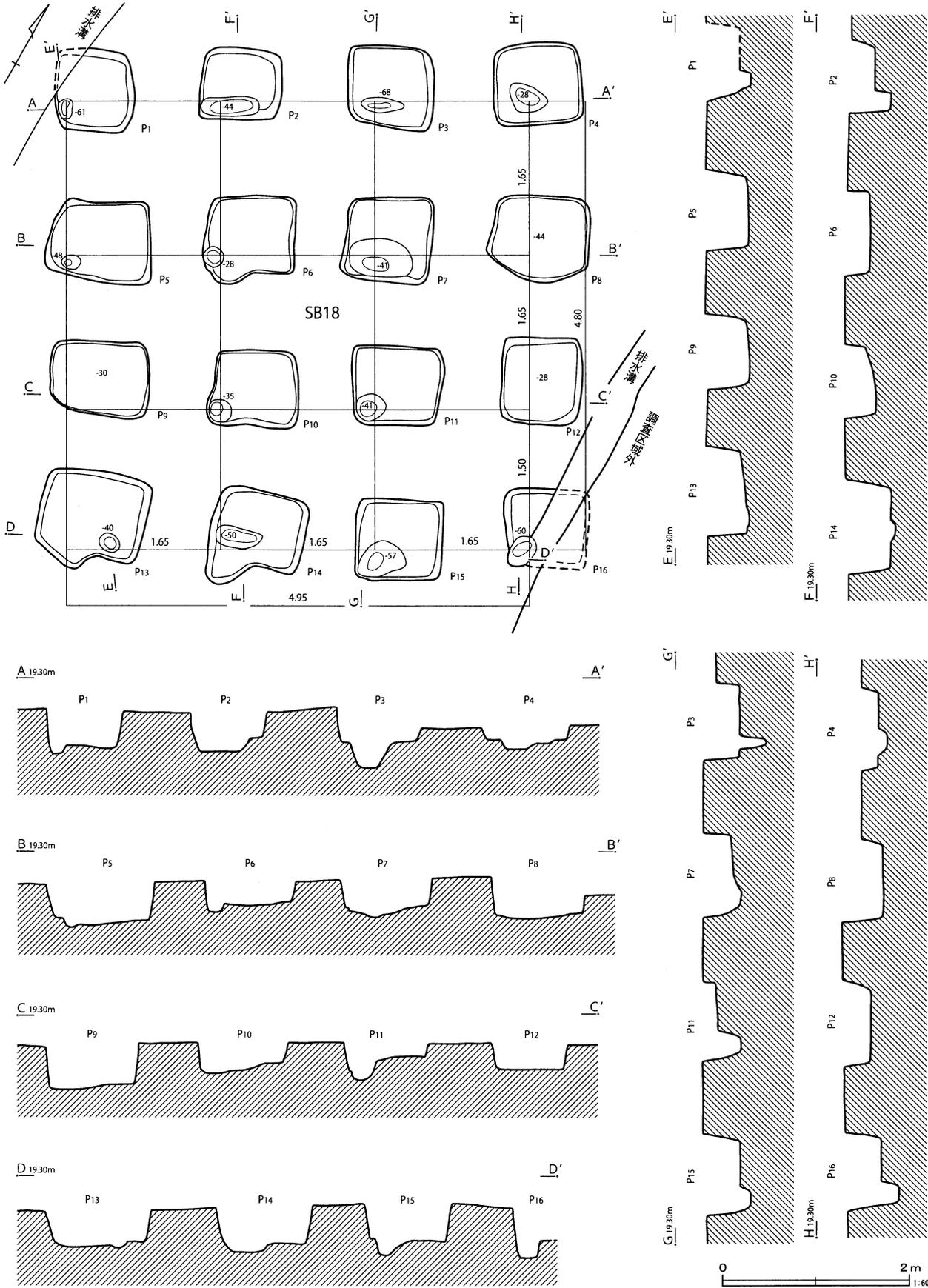
第18号掘立柱建物跡はZI・ZJ-37・38グリッドに位置する。西側には第6・7号井戸跡が近接し、南西約4mには第5号井戸跡が隣接して掘り込まれていた。

3×3間の総柱建物跡で、規模は桁行4.95m、

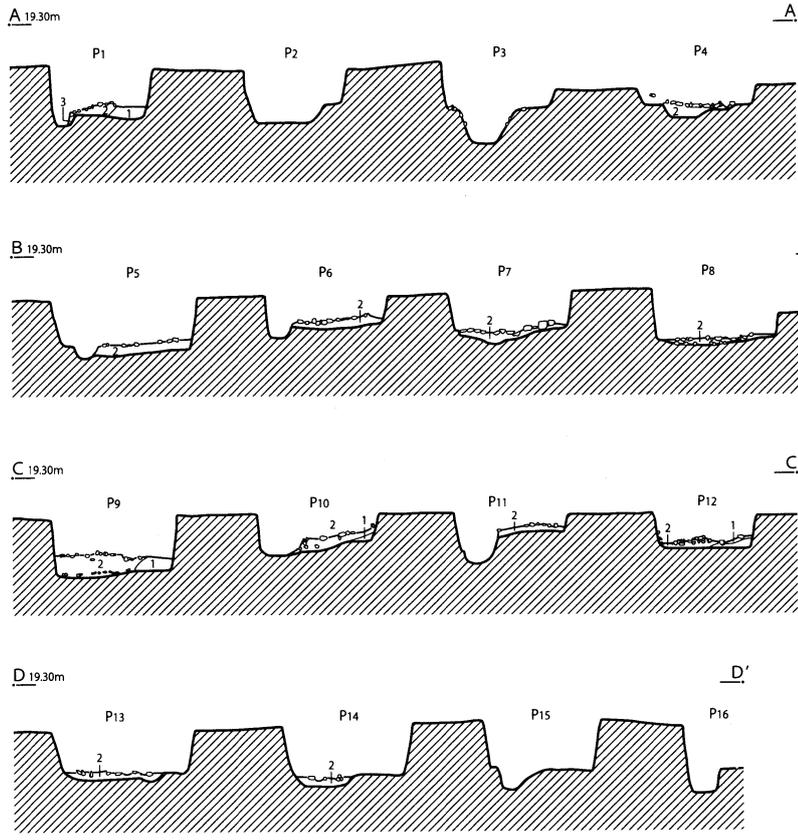
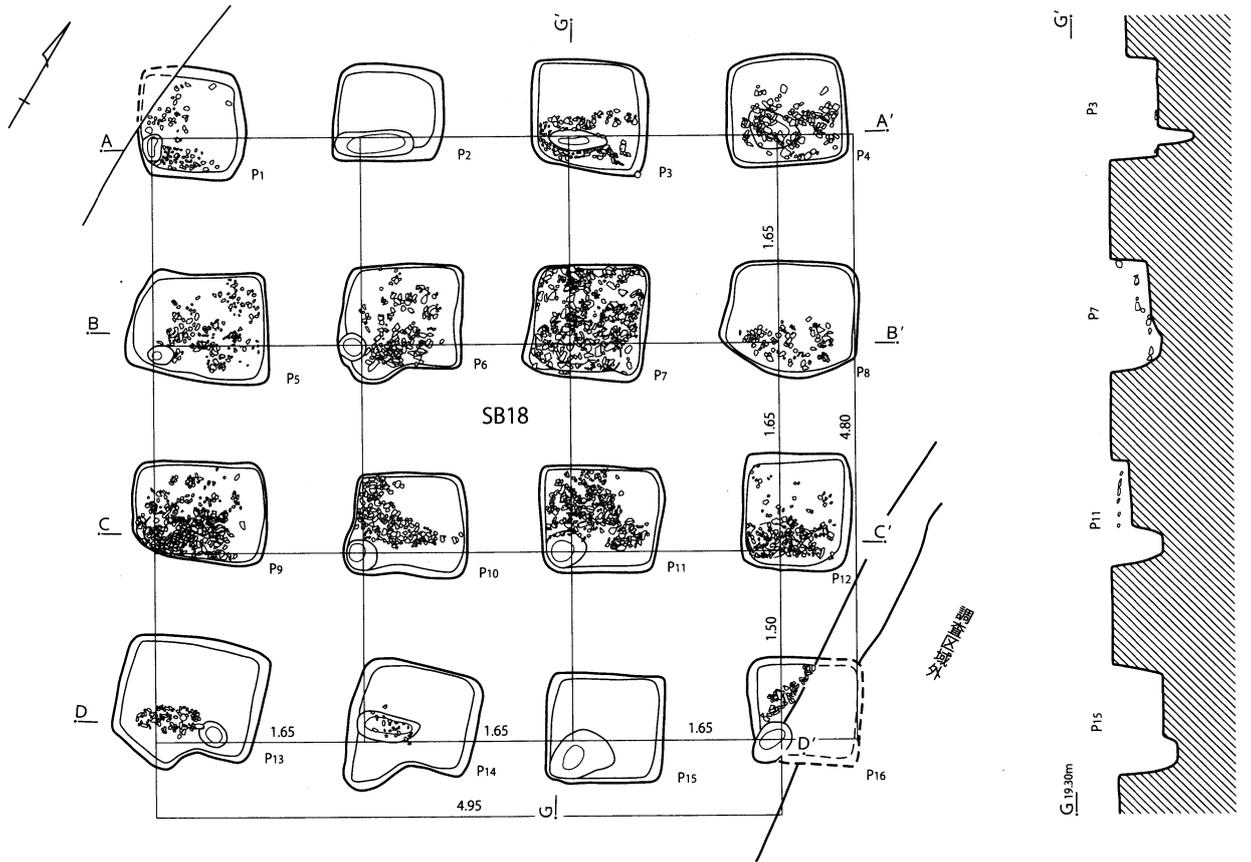
梁行4.80m、平面積は23.76㎡である。主軸方位はN-62°-Eを指す。

柱間距離は桁行1.65m等間、梁行は北から1.65m、1.65m、1.50mとなる。柱穴は方形で、長径83~110cm、短径78~98cmと大型で、深さは28~68cmである。

検出された柱穴はほぼ同じ大きさで、しっかり



第194図 第18号掘立柱建物跡 (1)



- SB18
- 1 褐色土 灰色粘土粒子少量 しまり強い
 - 2 褐色土 小石(栗石φ1~4cm)多量
 - 3 暗褐色土 褐色土粘土多量



第195図 第18号掘立柱建物跡 (2)

としたつくりである。P8・P9・P12を除く柱穴には柱当たりが認められた。P2・P15を除いた柱穴は、径1～4cm大の栗石が敷き詰められ、その下層には灰色粘土を含む粘質土が数cmの厚さで堆積していた。柱当たりは楕円形をしており、柱を抜き取った跡と思われる。P3・P16は柱抜き取り時に、抜き取り穴の中に栗石が流れ込んでいた。P5・P6・P11は掘り方全面に栗石を敷き詰めている。P10は柱周辺に栗石が詰められていた。P9は栗石が二層に分布しており、上層はまばらに広がり、下層は柱当たりにとまって出土した。

出土遺物はない。時期は不明であるが、古代に属することは確実である。集落の高床倉庫としては破格の規模といえる。

第19号掘立柱建物跡（第196図）

第19号掘立柱建物跡はZO-27グリッドに位置する。建物南側は調査区外に延びている。柱間距離が一定しないが、柱並びが通るため、建物跡の可能性を考えておく。重複する第53号住居跡を切っていた。西側約5mに第16号掘立柱建物跡が

位置している。

正確な規模は不明であるが、変則3間以上×3間の側柱建物と推定しておく。桁行3間と仮定すると桁行長7.35m、梁行長4.50m、平面積は33.08㎡となる。主軸方位はN-4°-Wを指す。

柱間距離は不揃いである。桁行東辺は2.55m等間である。西側柱では北から1.65m、0.90m、0.75mで、P8に対応する西側柱穴は検出されなかった。梁行は東から1.50m、1.35m、1.65mと不揃いである。

柱穴は円形または方形で、長径42～56cm、短径36～47cm、深さ13～50cmである。P6のみに柱当たりが認められた。

出土遺物はない。時期は不明であるが、第53号住居跡との関係から、7世紀中頃以降という限定はできる。

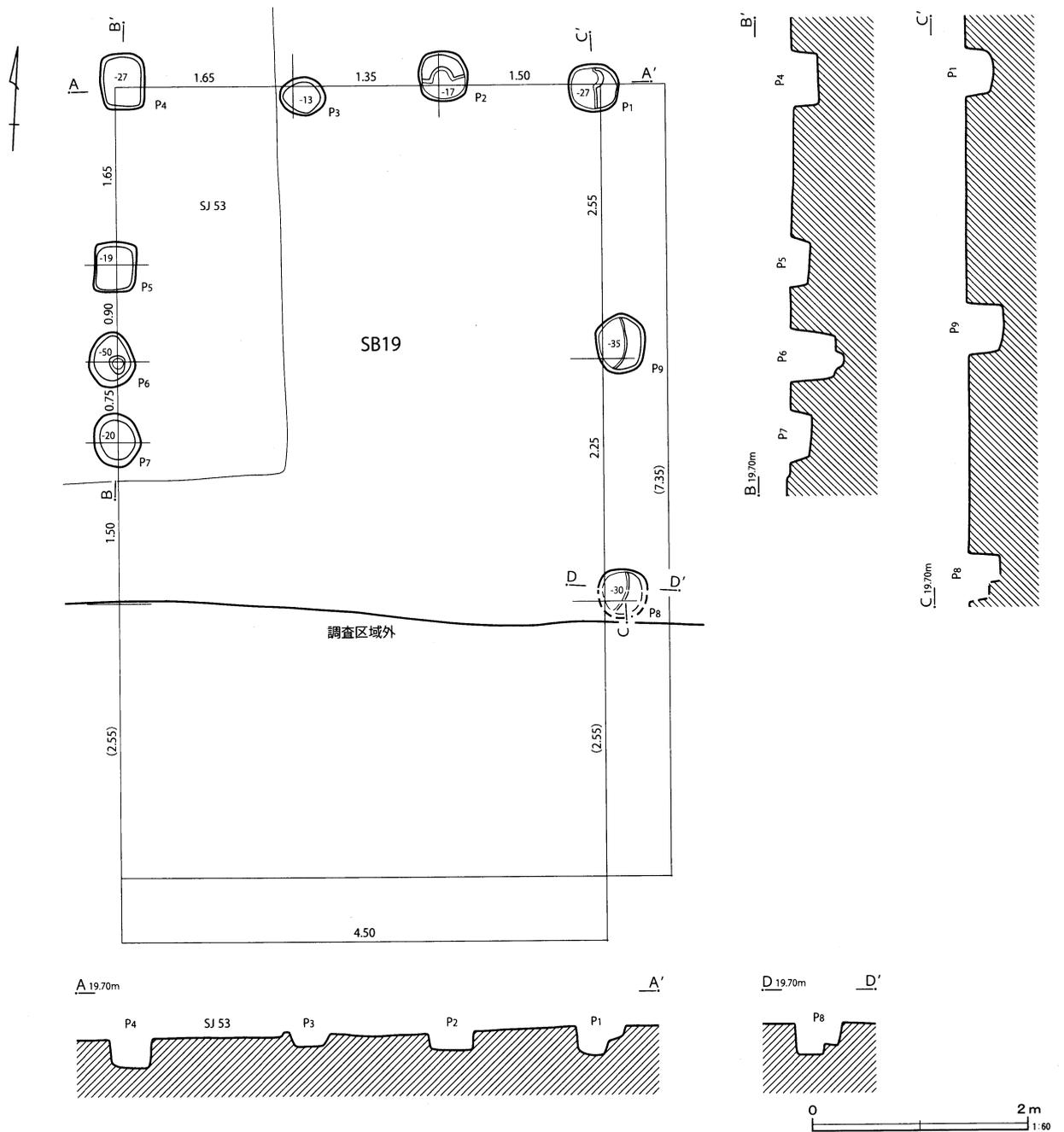
3. 柱穴列

第1号柱穴列（第190図）

第1号柱穴列はZO-23グリッドに位置する。第14・15号掘立柱建物跡の北側1mにほぼ平行し

第50表 掘立柱建物跡出土遺物観察表（第197図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	甕	-	62	50	ACEHI	65	普通	におい褐	SB1 武蔵型甕 胴部ケズリ 内面ヘラナデ 外面煤付着 内面：橙 P4		
2	須恵器	坏	-	22	71	EG I J K	70	普通	灰	SB2 南比企産 白針含む 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ 底部「×」状のヘラ記号有り P1		
3	須恵器	坏	(12.0)	37	(62)	E I J K	10	普通	灰	SB2 南比企産 白針含む 底部回転糸切り、体部下端糸が当たっている 口径は不安定 P5		
4	須恵器	坏	-	1.7	(83)	I J	20	普通	灰黄褐	SB4 南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ P1		
5	須恵器	壺	-	8.3	-	E I J K	15	良好	灰	SB4 南比企産 白針含む 高台が付くと思われる 肩部に浅い沈線 P4No1		
6	土師器	皿	(16.8)	2.7	-	HL	15	普通	におい橙	SB4 統比企型坏(皿) 内面+口縁外面赤彩 口唇部内面浅い凹線 白針なし 内面：橙 P1		
7	土師器	皿	(18.8)	2.3	-	CHI	15	良好	橙	SB4 北武蔵型暗文坏(皿) 内面放射状暗文 P1		
8	須恵器	蓋	-	1.4	-	DE	90	良好	灰	SB7 末野産か 擬宝珠形つまみ(径3.1cm) P1		
9	須恵器	蓋	(17.3)	2.9	-	BCGI	20	不良	黒褐	SB7 末野産 天井部回転ヘラケズリ 裏面：におい褐 P3		
16	土師器	甕	(19.4)	5.8	-	CHI	20	普通	橙	SB16 武蔵型甕 胴部ケズリ「ノッキング」痕 P9		
17	鉄製品	鉄鏃	-	-	-	-	-	-	-	SB16 長さ6.1cm 鏃身長1.9cm 鏃幅2.0cm 鏃厚0.3cm 頸部3.0cm 基部1.5cm P3	80-10	



第196図 第19号掘立柱建物跡

て3本のピットが直線的に並んで検出された。主軸方位は厳密には一致しないが、近接していることから塀などの区画施設が存在した可能性がある。

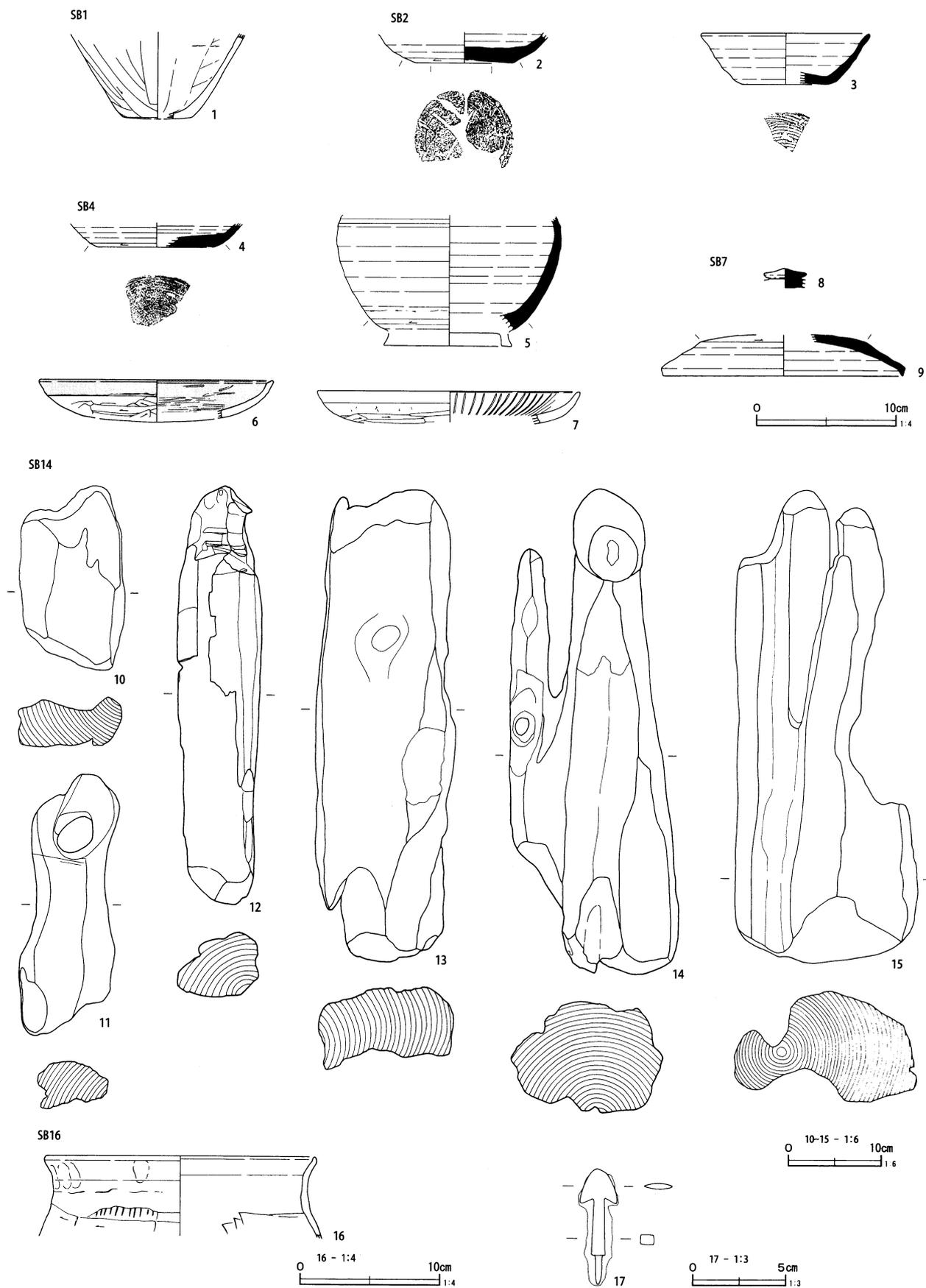
3本のピットは等間隔ではないが、いずれからも柱痕が認められた。P1-P2間距離は1.05m、P2-P3のそれは2.25mである。ピットは円形あるいは隅丸方形で、長径42~46cm、短径36~41cmで、

深さ15~17cmと浅い。主軸方位はN-82°-Eを指す。

出土遺物はない。

4. 土壌

銭塚遺跡第2・3次調査で検出された土壌は総数35基である。第1~19号土壌は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第340集『西浦/野本氏館



第197図 掘立柱建物跡出土遺物

跡／山王裏／錢塚』で報告されている。第31号土壙は弥生時代の土壙墓のため、別項で報告する。

第20号土壙（第198図）

第20号土壙はZN-10グリッドに位置する。重複する第2号住居跡覆土上に乗る、極めて浅い土壙である。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.52m、短径0.38m、深さ0.07mである。長軸方位はN-45°-Eを指す。

出土遺物はない。時期は第2号住居跡との関係から8世紀初頭以降という限定ができるのみである。

第21号土壙（第198図）

第21号土壙はZK-13グリッドに位置する。

重複する第6号住居跡との新旧関係は不明である。第6号住居跡貯蔵穴の可能性も考えたが、確証は得られなかった。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.73m、短径0.51m、深さ0.17mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。底面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。

出土遺物はない。時期は不明である。

第22号土壙（第198図）

第22号土壙はZK-12グリッドに位置する。第27号溝跡を切って掘削されていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.65m、深さ0.16mである。長軸方位はN-68°-Eを指す。底面は皿状に窪み、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第23号土壙（第198図）

第23号土壙はZL-11グリッドに位置する。遺構北西半分は調査区外に延びているため、全体は不明である。

平面形態は円形と推定され、残存規模は長径0.76m、短径0.27m、深さ0.93mである。長軸方位はN-35°-Eを指す。底面は平坦で、壁は上方

に向かって広がりながら立ち上がり、断面形態は逆台形の深いピット状である。柱痕はない。

出土遺物はない。時期は不明である。

第24号土壙（第198図）

第24号土壙はZL-12グリッドに位置する。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長径1.90m、短径1.11m、深さ0.26mである。長軸方位はN-5°-Wを指す。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。埋土は褐色土を基調とするが、人為的堆積か否かは明確には把握できなかった。

遺物は、土師器甕・壺の破片などが出土した（第202図1・2）。1は土師器甕、胴部ナデ調整。2は壺か。肩部指ナデ、内面は絞り目風。時期は古墳時代中期と考えておきたい。

第25号土壙（第198図）

第25号土壙はZL-14グリッドに位置する。

遺構北側は調査区外に延びているため、全体は不明である。重複する第41号住居跡を切っていた。

平面形態は長方形と推定され、残存規模は長径0.83m、短径0.51m、深さ0.27mである。長軸方位はN-11°-Eを指す。底面は凹凸があり、壁は緩やかな段を持って立ち上がる。

出土遺物は土師器北武蔵型坏と武蔵型甕の破片が少量出土したが、第41号住居跡に帰属する遺物と推定される。時期は不明である。第41号住居跡との関係から、8世紀前半～中葉以降という限定はできる。

第26号土壙（第198図）

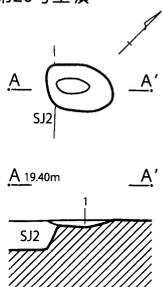
第26号土壙はZK-19グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.05m、短径0.63m、深さ0.16mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。隣接する第27号土壙と埋土が酷似している。第17号溝跡埋没後に掘り込まれていた。

埋土は黒褐色炭化物層を基調としており、灰・焼土を含む。灰溜め状の土壙と考えられる。

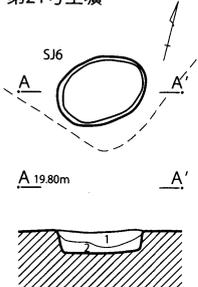
出土遺物は土師器甕、須恵器甕片が出土した。

第20号土壌



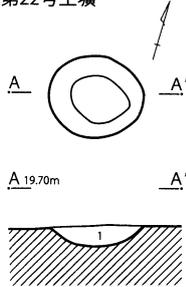
S K 20
1 灰色粘土

第21号土壌



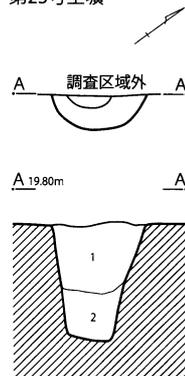
S K 21
1 明褐色土 焼土粒子やや多い
2 暗褐色土 炭化物粒子少量

第22号土壌



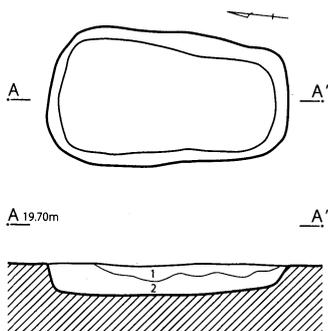
S K 22
1 暗褐色土 やや砂質 白色～黄褐色土ブロック多い

第23号土壌



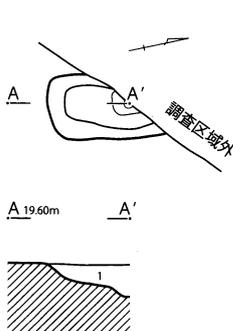
S K 23
1 褐色土 炭化物少量含む
2 灰褐色土 炭化物やや多量

第24号土壌



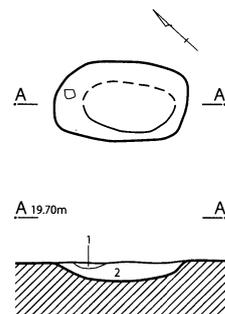
S K 24
1 灰褐色土 焼土少量混じる
2 褐色土

第25号土壌



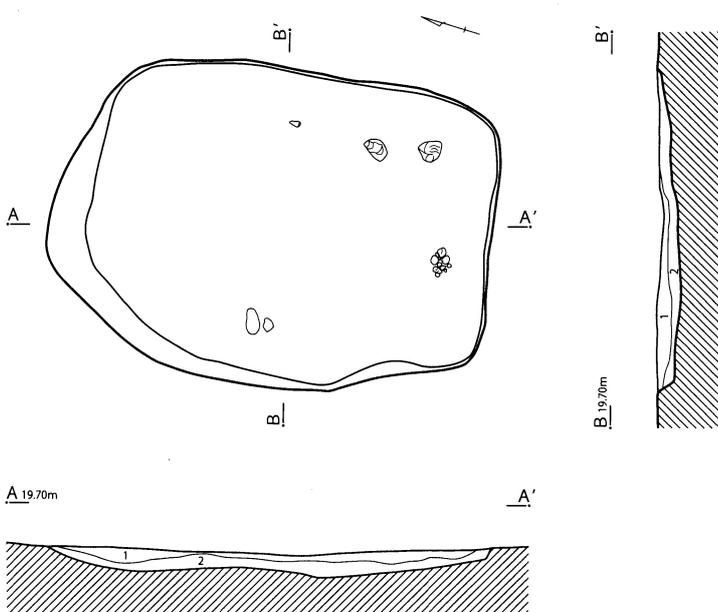
S K 25
1 暗褐色土 炭化物・焼土少量含む

第26号土壌



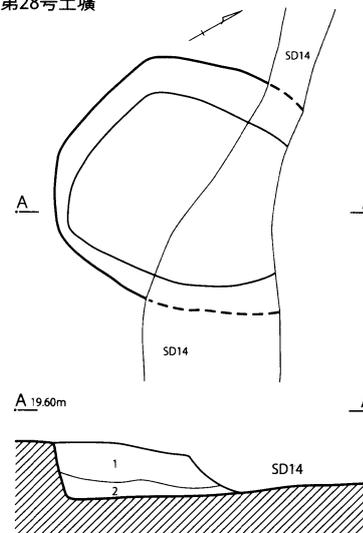
S K 26
1 暗褐色土 焼土粒子(φ 2mm前後)・炭化物少量含む
2 黒色炭化物層 焼土(φ 1cm前後)を少量含む 暗褐色土ブロックを含む

第27号土壌



S K 27
1 暗褐色土 灰褐色粘土ブロックが多量に混じる 炭化物粒子(φ 2mm前後)・焼土粒子をやや多量含む
2 黒色炭層 炭化物(灰)層に焼土ブロック(φ 10mmくらい)少量 焼土粒子をやや多量混じる

第28号土壌



S K 28
1 暗褐色土 炭化物・焼土少量
2 暗褐色土 炭化物含む 灰色粘土少量含む



第198図 第20～28号土壌

実測可能遺物はないが、土師器甕は武蔵型甕であり、8～9世紀代と考えられる。

第27号土壙（第198図）

第27号土壙はZK-19グリッドに位置する。

平面形態は歪んだ長方形で、規模は長径3.50m、短径2.56m、深さ0.26mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。底面は凹凸があり、壁は断面の北側は緩やかに、南側はほぼ直立する。覆土中に灰・炭化物、焼土が多量に含まれており、土器焼成壙を疑ったが、床面は被熱しておらず、否定的である。内部からは被熱した生粘土（白色針状物質を含む）が数か所から検出された。粘土は面取りされており、混和材は含まれていない（図上でS-1～4で示した）。第26号土壙同様の黒色灰が基調となり、灰溜め土壙と推定される。

須恵器坏・甕の破片、土師器甕破片、被熱粘土塊が出土した。図示可能な遺物はないが、土師器甕は武蔵型甕底部と須恵器坏の特徴から9世紀代を中心とした年代と推定しておきたい。

第28号土壙（第198図）

第28号土壙はZK-19・20グリッドに位置する。重複する第14号溝跡に切られていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径2.19m、短径1.97m、深さ0.48mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。底面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期は不明である。第14号溝跡との関係から、8世紀初頭以前という限定は可能である。

第29号土壙（第199図）

第29号土壙はZM-16グリッドに位置する。重複する第36号住居跡を切り、第5号掘立柱建物跡柱穴が重なる。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.07m、短径0.64m、深さ0.15mである。長軸方位はN-40°-Eを指す。底面はわずかに皿状に窪み、壁は緩やかに立ち上がる。

埋土は下層に炭化物粒子、上層に粘土ブロックが多量に含まれていた。第5号掘立柱建物跡柱穴掘り方の可能性もある。

出土遺物は土師器暗文坏、土師器甕片が少量あるが、第36号住居跡に帰属すると思われる。時期は不明である。第36号住居跡との関係から、7世紀末葉以降という限定はできる。

第30号土壙（第199図）

第30号土壙はZN-15グリッドに位置する。第39号住居跡と僅かに重複し、本土壙の方が古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.88m、深さ0.32mである。長軸方位はN-0°を指す。底面はわずかに窪み、壁は緩やかに立ち上がる。

埋土は褐色粘土ブロックが多量に含む暗褐色土で構成されていた。

出土遺物は土師器坏・甕片がある（第202図3・4）。土師器坏は風化により暗文は不明であるが北武蔵型暗文坏。土師器甕は器壁の厚い鬼高系の長胴甕である。時期的には7世紀末葉～8世紀初頭頃に位置付けられよう。

第32号土壙（第199図）

第32号土壙はZS-25グリッドに位置する。

平面形態は円形である。規模は直径0.57m、深さ0.14mである。長軸方位はN-57°-Eを指す。底面は平坦で、壁は明確な立ち上がりを持って斜めに立ち上がり、断面形態は逆台状である。埋土は黄灰色土を基調とし、灰色粘土ブロックが目立った。

出土遺物はなく、時期は不明である。

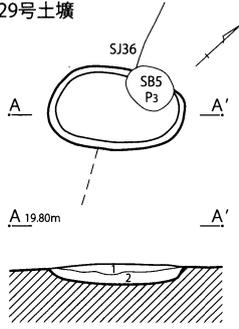
第33号土壙（第199図）

第33号土壙はZR-25グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.82m、短径0.76m、深さ0.42mである。

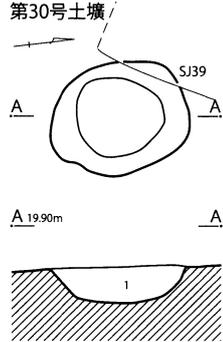
底面には長径24cm、短径20cm、深さ42cmの掘り込みがあり、周囲は浅く壁は緩やかに立ち上がる。柱痕状の土層が観察されたため、建物跡を予測し

第29号土壌



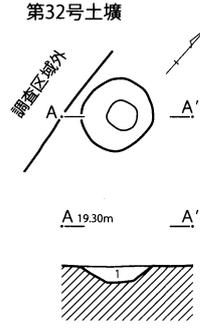
S K 29
1 灰褐色土 粘土ブロック主体
2 暗褐色土 炭化物粒子主体 焼土・褐色土ブロック少量

第30号土壌



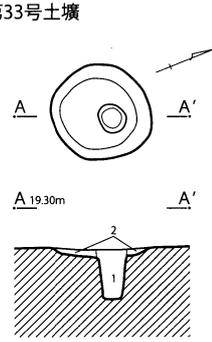
S K 30
1 暗褐色土 炭化物粒子主体 褐色粘土ブロック 焼土少量

第32号土壌



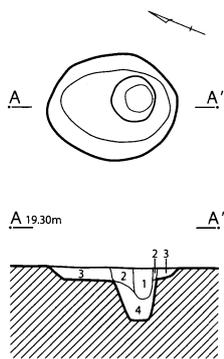
S K 32
1 黄灰色土 灰色粘土ブロック (1cm)少量

第33号土壌



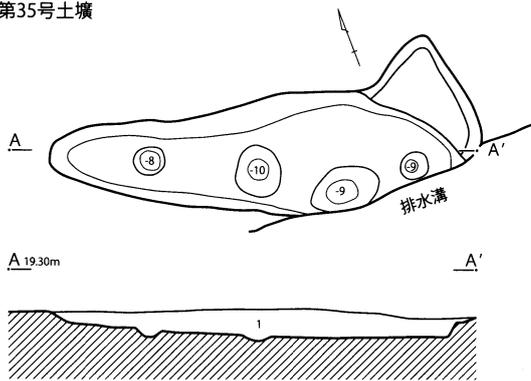
S K 33
1 褐灰色土 灰色粘土ブロック (1cm)少量
2 黄灰色土 灰色粘土ブロック (1cm)少量

第34号土壌



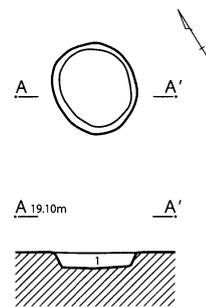
S K 34
1 褐色土 灰色粘土ブロック (3~5cm)を含む
2 褐色土 灰色粘土ブロック (1cm)少量
3 黄灰色土 灰色粘土ブロック (1cm)少量
4 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1cm)少量

第35号土壌



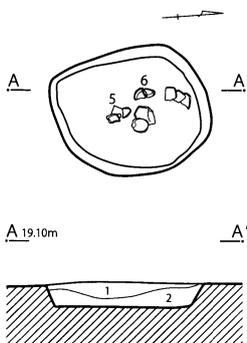
S K 35
1 暗青灰色土 鉄分やや多量 炭化物・褐色粘土少量

第36号土壌



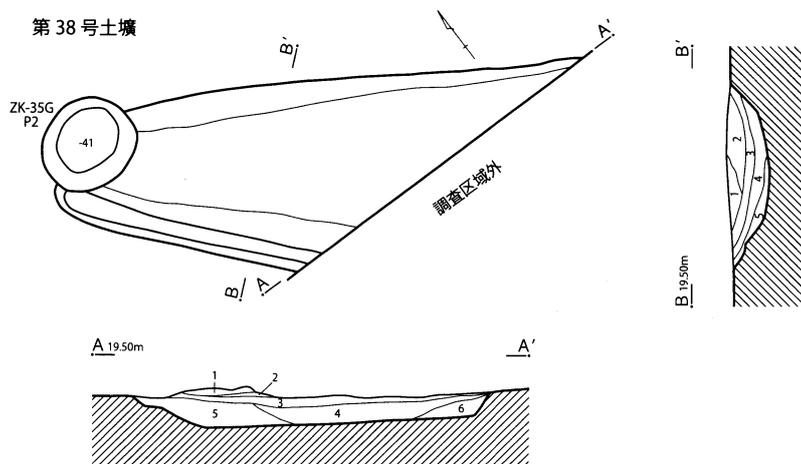
S K 36
1 褐色土層 黄褐色土ブロックやや多量 暗褐色土少量

第37号土壌



S K 37
1 暗褐色土 炭化物(2~3mm)少量 暗灰色粘土ブロック(1cm)をまだらに含む
2 黄褐色土 炭化物(2~3mm)少量

第38号土壌



S K 38
1 暗灰色土 砂多量 炭化物(2~3mm)少量
2 暗灰色土 黄灰色粘土ブロック(5~8mm)多量 砂少量 粘土質
3 暗灰色土 砂多量 炭化物(3~5mm)少量
4 暗灰色土 砂少量 炭化物(3~5mm)少量 粘土質
5 暗褐色灰色土 炭化物(3~5mm)多量
6 暗黄褐色土 暗褐色土中に黄褐色粘土多量



第199図 第29・30・32~38号土壌

て精査したところ、北東1.2mに同様な土壙（第34号土壙）が検出されたが、周囲には確認できなかった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第34号土壙（第199図）

第34号土壙はZR-25グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.04m、短径0.84m、深さ0.43mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。底面には長径36cm、短径34cm、深さ43cmの掘り込みがあり、周囲は浅く壁は斜めに立ち上がる。柱痕状の土層が観察され、第33号土壙と類似していたが、建物跡は検出されなかった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第35号土壙（第199図）

第35号土壙はZS-20グリッドに位置する。遺構南部が調査区外に抜けており、全体は不明である。溝状遺構になる可能性もある。

平面形態は不整楕円形で、残存規模は長径3.42m、短径1.12m、深さ0.31mである。長軸方位はN-73°-Wを指す。底面はわずかな窪みを持つが、ほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

出土遺物は土師器甕と赤彩された高坏？細片が出土した。古墳時代中期～後期初頭頃に位置付けられるものであろう。

第36号土壙（第199図）

第36号土壙はZS-34グリッドに位置する。畠状遺構（畝跡）の一角にある。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.73m、短径0.65m、深さ0.14mである。底面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。埋土は黄褐色土ブロックを多量に含む褐色土であった。畠状遺構に関連すると思われるが、性格は不明である。

出土遺物がなく時期は不明であるが、掘り込み面が深く、古代以前に遡るだろう。古墳時代中期～後期に属すると考えておきたい。

第37号土壙（第199図）

第37号土壙はZS-27グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.32m、短径1.10m、深さ0.21mである。長軸方位はN-23°-Eを指す。底面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。

出土遺物は土師器坏・鉢、壺などがある。鉢と坏を図示した（第202図5・6）。いずれも内外面赤彩が施される。5は平底の鉢。6は口縁部が内傾する坏身模倣坏か。時期は鬼高期初頭頃である。

第38号土壙（第199図）

第38号土壙はZK-35グリッドに位置する。遺構南東部は調査区外に延びているため、全体は不明である。土壙としたが、溝状遺構となる可能性もある。

平面形態は不整形で、残存規模は長径3.35m、短径1.50m、深さ0.48mである。長軸方位はN-54°-Wを指す。底面は平坦で壁の一方はほぼまっすぐに、一方は段を持って緩やかに立ち上がる。

出土遺物は土師器の壺肩部片がある。時期は不明確だが、ケズリ調整が見えることから古墳時代中期～後期のものと推定される。

第39号土壙（第200図）

第39号土壙はZK-34グリッドに位置する。遺構北半分あるいは半分以上は排水溝に切られているため、全体は不明である。

平面形態は方形あるいは長方形と推定され、残存規模は長径1.31m、短径0.49m、深さ0.33mである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。遺物がまとまって出土しており、住居跡の可能性もある。

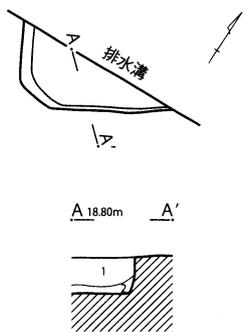
須恵器坏・蓋・壺、土師器甕・壺・台付甕・坏の破片などが出土した（第202図7～17）。7は続比企型坏で、赤彩される。8は丸底形態の北武蔵型坏である。10～12は環状つまみの蓋で南比企産。13は高台付坏。14は無台坏である。土器様相から7世紀末葉～8世紀初頭頃に位置付けられる。

第40号土壙（第200図）

第40号土壙はZK-17グリッドに位置する。

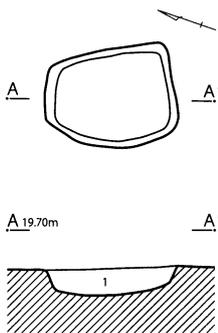
平面形態は歪んだ長方形で、規模は長径1.03m、

第39号土坑



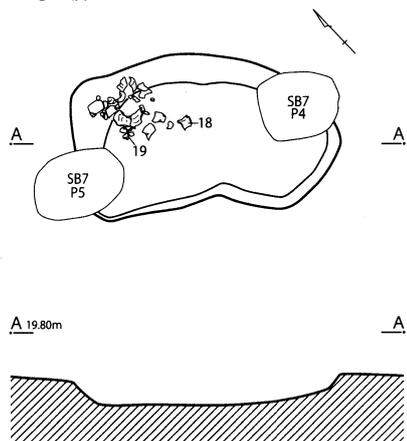
S K 39
 1 褐色泥質土 全体に白黄色粘土ブロック (φ10cm) が不規則に混じる
 2 黄褐色粘土 炭化物粒子と粘土が少量混じる

第40号土坑

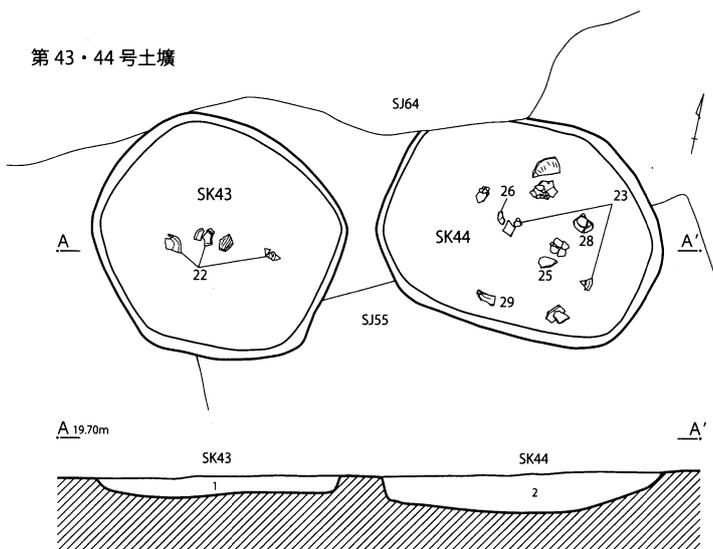


S K 40
 1 暗褐色土 炭化物少量含む

第42号土坑

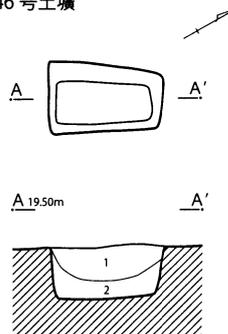


第43・44号土坑



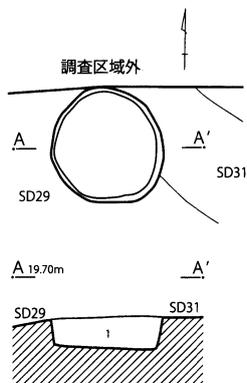
S K 43・44
 1 褐色土 灰色粘土多量 炭化物・焼土含む
 2 褐色土 炭化物多量 焼土ブロック・灰色砂少量

第46号土坑



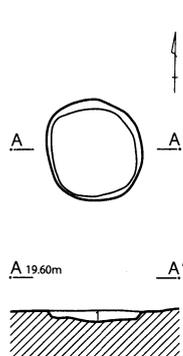
S K 46
 1 暗灰褐色土 (砂質) 炭化物粒子を少量含む
 2 暗褐色土 灰褐色土ブロック・炭化物粒子を少量含む

第47号土坑



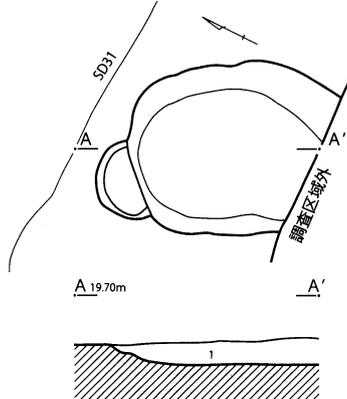
S K 47
 1 暗褐色土 褐色土ブロック多量 炭化物粒子少量

第48号土坑



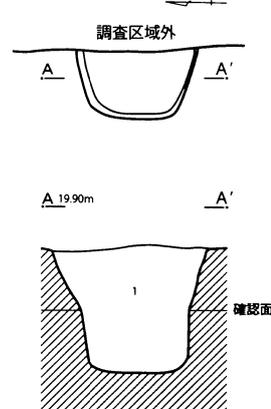
S K 48
 1 暗褐色土 褐色土ブロック多量

第49号土坑



S K 49
 1 暗褐色土 鉄分・褐色土粒子少量 炭化物少量

第50号土坑



S K 50
 1 灰褐色土 灰色粘土ブロック・褐色土ブロック多量

0 2m 1:60

第200図 第39・40・42～44・46～50号土坑

短径0.80m、深さ0.23mである。長軸方位はN-24°-Wを指す。底面はわずかに皿状に窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は炭化物混じりの暗褐色土単層で、土層変化は観察されなかった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第41号土壙（欠番）

第42号土壙（第200図）

第42号土壙はZO-17グリッドに位置する。重複する第7号掘立柱建物跡柱穴に切られていた。

平面形態は不整形で、規模は長径2.07m、短径1.19m、深さ0.38mである。長軸方位はN-60°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は、土師器坏・甕がある（第202図18・19）。18は比企型の坏身模倣坏である。内外面赤彩が施される。19は土師器甕。胴部の膨らみはまだ大きい。

時期は鬼高期初頭に位置付けられる。

第43号土壙（第200図）

第43号土壙はZO-27・28グリッドに位置し、東側に第44号土壙が隣接する。重複する第55号住居跡を切っていた。

平面形態は不整形で、規模は長径2.05m、短径1.84m、深さ0.29mである。底面は緩やかな起伏がある。壁の一方はほぼ垂直に、一方は緩やかに立ち上がる。

埋土は灰色粘土と焼土、炭化物粒子を含む褐色土であった。

遺物は土師器坏、須恵器蓋が出土した（第202図20～22）。20は比企型坏で、重複する第55号住居跡に帰属するものかもしれない。21は北武蔵産の土師器坏。22は末野産のかえり蓋。内面に同心円文当具痕を残す。時期は7世紀末葉～8世紀初頭と考えられる。

第44号土壙（第200図）

第44号土壙はZO-28グリッドに位置する。重

複する第55号住居跡を切り、第64号住居跡に切られていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径2.28m、短径1.73m、深さ0.32mである。底面は皿状に窪み、壁の一方は緩やかに、一方はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は炭化物粒子・焼土混じりの褐色土で構成されていた。遺物は、須恵器蓋、土師器坏・壺などが出土した（第203図23～29）。23・24は末野産と思われるかえり蓋で、前者は小型、後者は大型品である。法量分化が認められる。25は北武蔵型暗文坏。26は有段口縁坏である。27は口唇部内面に沈線が巡る。続比企型坏か。赤彩は不明。28は模倣坏と捉えるべきか。第55住居跡に帰属するものかもしれない。

時期は7世紀末葉～8世紀初頭に位置付けられる。第64号住居跡との時間差は少ない。

第45号土壙（欠番）

第46号土壙（第200図）

第46号土壙はZO-25グリッドに位置する。第52号住居跡覆土上面に掘り込まれていた。

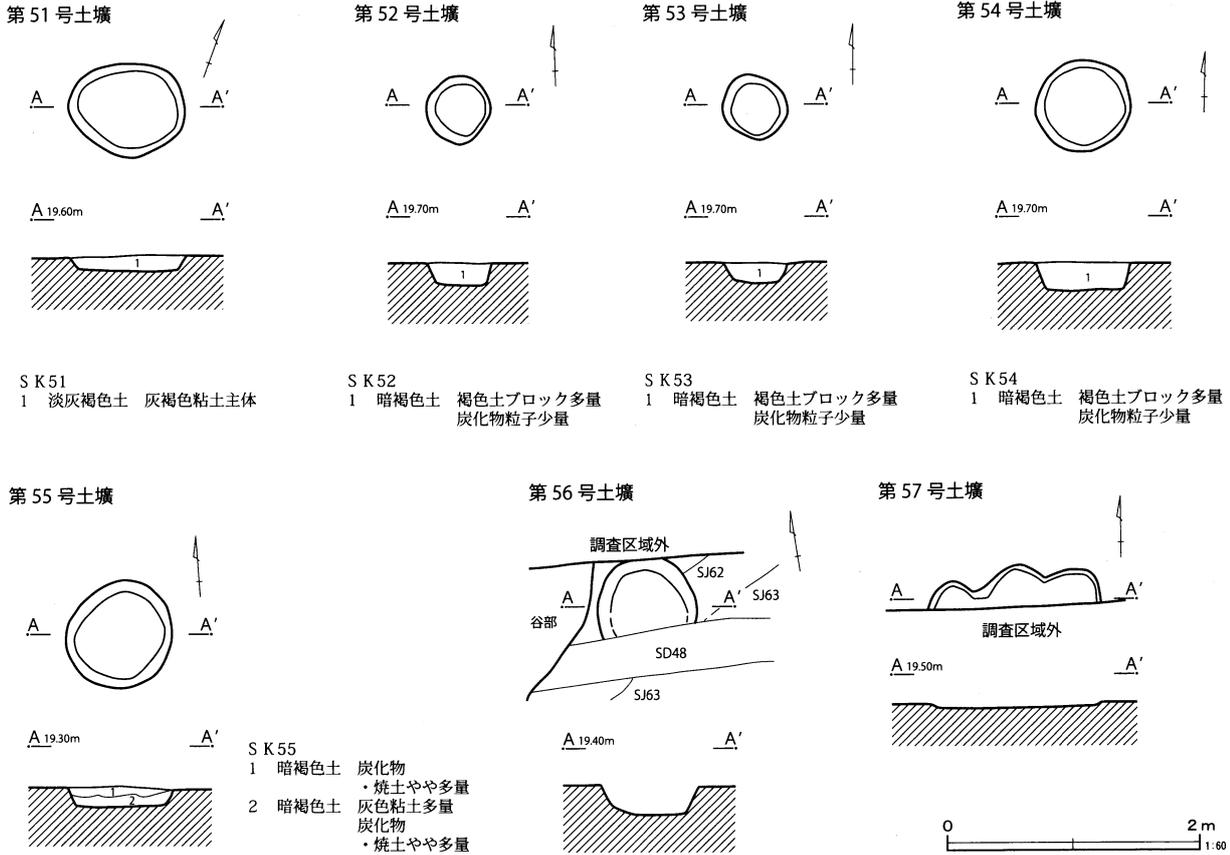
平面形態は長方形で、規模は長径0.89m、短径0.56m、深さ0.42mである。長軸方位はN-28°-Eを指す。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は炭化物粒子混じりの暗褐色土を基調としていた。

出土遺物は土師器甕片がある。図示可能な遺物はないが、器壁の薄い武蔵型甕の胴部から底部の破片が含まれており、8世紀後半～9世紀代の幅の中に収まると考えられる。

第47号土壙（第200図）

第47号土壙はZO-31グリッドに位置する。遺構北端部が調査区の壁際に接している。重複する第29・31号溝跡を切っている。

平面形態は円形で、長径0.96m、短径0.87m、深さ0.35mである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。



第201図 第51～57号土壙

埋土は褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土で、第48・49号土壙と類似していた。

遺物はなく時期は不明であるが、中・近世以降に降る可能性がある。

第48号土壙 (第200図)

第48号土壙はZO-32グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.83m、短径0.80m、深さは0.09mと浅い。底面は僅かに凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

第47・49号土壙と類似した覆土であった。

出土遺物はなく時期は不明であるが、中・近世以降に降る可能性がある。

第49号土壙 (第200図)

第49号土壙はZO-32グリッドに位置する。遺構南側は調査区外に延びているため、全体は不明である。

平面形態は不整形で、残存規模は長径1.80m、短径1.37m、深さ0.20mである。長軸方位はN-

38°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、壁は段を持って緩やかに立ち上がる。

第47・48号土壙、第31号溝跡と類似した覆土であった。

出土遺物は土師器甕の細片があるのみで時期は不明であるが、中・近世以降に降る可能性がある。

第50号土壙 (第200図)

第50号土壙はZP-25グリッドに位置する。遺構東半分は調査区外に延びているため、全体は不明である。

平面形態は楕円形と推定され、残存規模は長径1.24m、短径0.61m、確認面からの深さ0.54mである。底面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。

埋土は灰色粘土ブロック混じりの灰褐色土単層で構成され、人為的に埋め戻されたと推定される。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第51号土壙 (第201図)

第51号土壙はZO-33グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.75m、深さ0.21mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形態は逆台形状である。

遺物は瓦細片がある。時期は不明である。

第52号土壙 (第201図)

第52号土壙はZO-34グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.55m、短径0.51m、深さ0.18mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形態は逆台形状である。

埋土は褐色土ブロック混じりの暗褐色土で、第53・54号土壙と同一の覆土である。

出土遺物はなく時期は不明である。

第53号土壙 (第201図)

第53号土壙はZO-34グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.53m、短径0.50m、深さ0.16mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形態は逆台形状である。

埋土は褐色土ブロック混じりの暗褐色土で、第52・54号土壙と同一の覆土である。

出土遺物はなく時期は不明である。

第54号土壙 (第201図)

第54号土壙はZO-34グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.75m、短径0.73m、深さ0.22mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形態は逆台形状である。

埋土は第52・53号土壙と同一の覆土である。出土遺物はなく時期は不明である。

第55号土壙 (第201図)

第55号土壙はZJ-37グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.82m、短径0.80m、深さ0.15mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形態は逆台形状である。

出土遺物は土師器甕の細片がある。時期は不明である。

第56号土壙 (第201図)

第56号土壙はZF-36グリッドに位置する。遺構北端部が調査区の壁際に接している。重複する第62号住居跡を切り、第48号溝跡に切られていた。

平面形態は円形と推定され、残存規模は直径0.76m、深さ0.25mである。底面は平坦で、壁の一方はほぼ垂直に、一方は傾斜を描きながら立ち上がる。

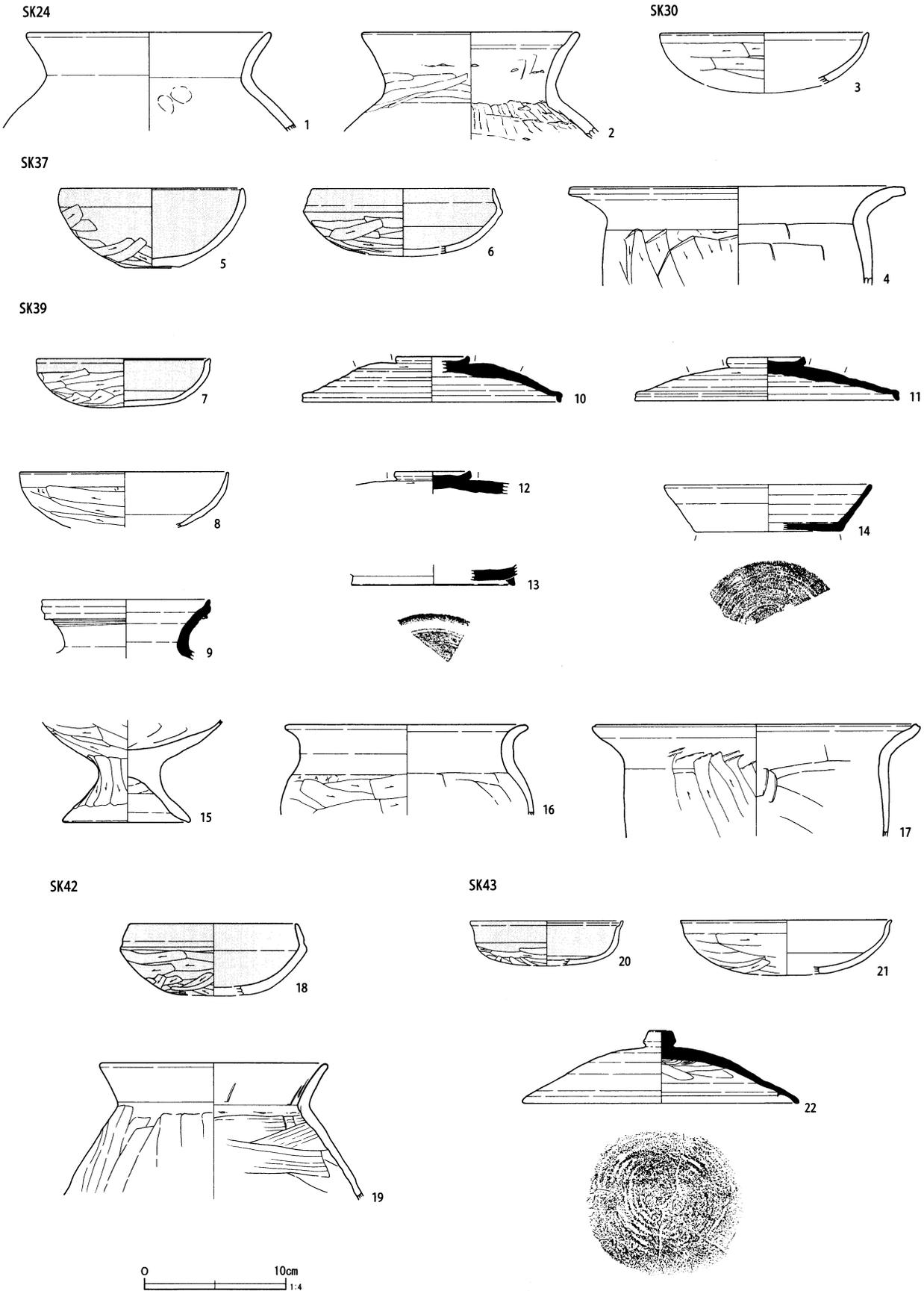
出土遺物は土師器甕細片がある。時期は不明であるが、第62号住居跡との関係から9世紀後半以降という限定はできる。

第57号土壙 (第201図)

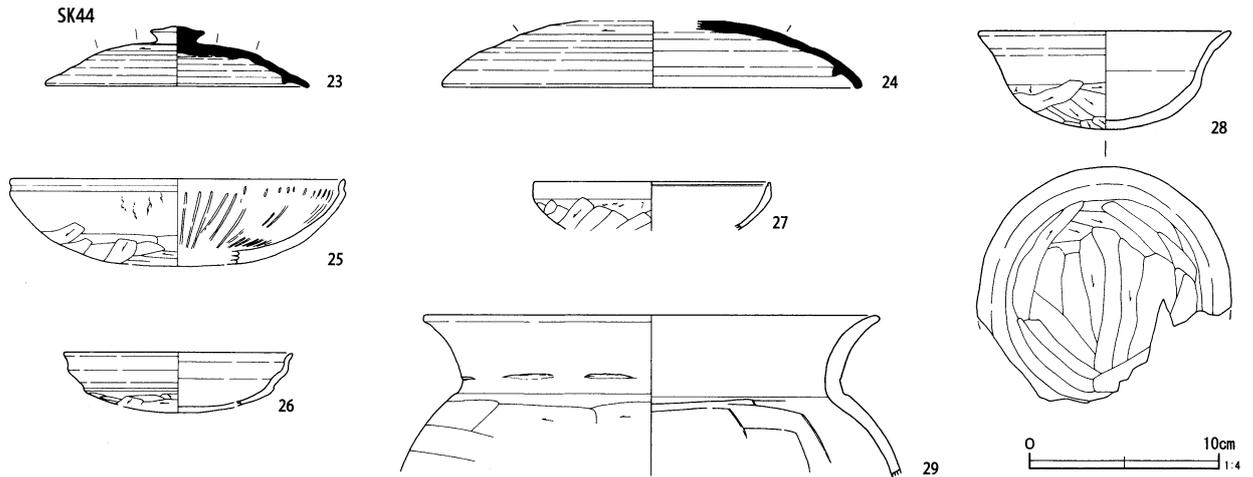
第57号土壙はZO-35・36グリッドに位置する。遺構南半分は調査区外に伸びているため、全体は不明である。

平面形態は不整形で、残存規模は長径1.37m、短径0.32m、深さは0.04mと極めて浅い。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第202図 第24・30・37・39・42・43号土壙出土遺物



第203図 第44号土壌出土遺物

第51表 土壌出土遺物観察表 (第202・203図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	甕	(17.0)	7.0	-	DH I K	20	普通	にぶい橙	SK24 ナデ整形 和泉期か		
2	土師器	壺	(15.0)	7.6	-	C E G H L	25	良好	橙	SK24 和泉期頃か 外面ナデ 内面絞り目+ナデ		
3	土師器	坏	(14.8)	3.7	-	A C D H I	20	普通	明赤褐	SK30 北武蔵型暗文坏 内面風化著しく暗文不明		
4	土師器	甕	(24.0)	7.0	-	A C E H I K	25	普通	にぶい赤褐	SK30 口径は最大径 胴部器壁厚い 北武蔵の土か 鬼高系		
5	土師器	鉢	(12.8)	5.6	3.8	C G H I	50	普通	橙	SK37 底部無調整 体部ナデ+ケズリ 赤彩(体部下位と底部は不明瞭) No1・2		
6	土師器	坏	(12.7)	4.6	-	A C E H I J	25	普通	橙	SK37 比企型坏身模倣坏 白針含む 内外面赤彩 No3		
7	土師器	坏	12.2	3.4	-	C H J	75	普通	橙	SK39 続比企型坏 白針含む 赤彩 ZK-32G		81-1
8	土師器	坏	(14.7)	3.9	-	C H I K	20	普通	橙	SK39 北武蔵型坏 ZK-32G		
9	須恵器	壺	(11.9)	4.2	-	E I J K	20	良好	灰	SK39 南比企産? 白針少含む 頸部弱い沈線2条 ZK-32G		
10	須恵器	蓋	18.2	3.2	-	I J K	70	普通	灰	SK39 南比企産 環状つまみ(径5.0cm) ZK-32G		
11	須恵器	蓋	18.7	3.1	-	H I J K	75	普通	灰	SK39 南比企産 環状つまみ(径5.3cm) ZK-32G		81-2
12	須恵器	蓋	-	1.6	-	I J	30	普通	灰	SK39 南比企産 環状つまみ(径5.2cm) ZK-32G		
13	須恵器	高台付坏	-	1.5	(11.5)	E H I J K	10	普通	灰	SK39 南比企産 底部回転ヘラケズリ ZK-32G		
14	須恵器	坏	(14.4)	3.3	(10.2)	I J K L	30	普通	灰	SK39 南比企産 底部回転ヘラケズリ ZK-32G		
15	土師器	台付甕	-	7.3	8.8	A C H I	90	普通	橙	SK39 北武蔵の土? 外面二次被熱し、器面剥離 ZK-32G		
16	土師器	壺	(16.8)	6.4	-	A C H I K	20	普通	橙	SK39 北武蔵の土? 白針なし ZK-32G		
17	土師器	甕	(22.8)	7.9	-	A B C E H I	15	普通	橙	SK39 ZK-32G		
18	土師器	坏	(11.7)	5.1	-	E H I J	25	普通	橙	SK42 比企型坏身模倣坏 白針含む 全面赤彩		
19	土師器	甕	(15.8)	9.6	-	C H I K	25	普通	にぶい橙	SK42 北武蔵の土か 胴部ヘラナデ 内面木口ナデ No2		
20	土師器	坏	(10.8)	3.1	-	C H I J K	20	普通	赤褐	SK43 比企型坏 白針含む 赤彩		
21	土師器	坏	(14.9)	3.8	-	C H I	20	普通	橙	SK43 北武蔵の土 坏蓋模倣坏? 北武蔵型坏出現している可能性高い		
22	須恵器	蓋	19.2	5.1	-	C I K L	95	普通	灰	SK43 末野産 径5~8mm大の礫含む 内面同心円文当て具後ナデ 外面ケズリ後ロクロナデ(ケズリを残さない) No1・2・4 SK44		81-3
23	須恵器	蓋	(13.2)	3.1	-	E I K	30	普通	灰	SK44 末野産か No6・10		
24	須恵器	蓋	(21.8)	3.5	-	I	15	良好	青灰	SK44 末野産か 外面降灰		
25	土師器	坏	(17.6)	4.5	-	C E H I	40	普通	明赤褐	SK44 北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 器面剥落し不明瞭 No9		
26	土師器	坏	(12.0)	2.8	-	C E H I	20	普通	橙	SK44 有段口縁坏 北武蔵の土 No4		
27	土師器	坏	(12.4)	2.5	-	E H I	40	普通	にぶい橙	SK44 続比企型坏 白針なし 赤彩不明(無彩か)		
28	土師器	坏	13.2	5.2	-	B C E H J K L	75	普通	橙	SK44 模倣坏? 緑泥片岩、白針含む 梶川流域の土か 作り雑で胎土粗い No7		81-4
29	土師器	壺	(23.6)	8.5	-	C G H I	15	普通	橙	SK44 北武蔵の土か No13		

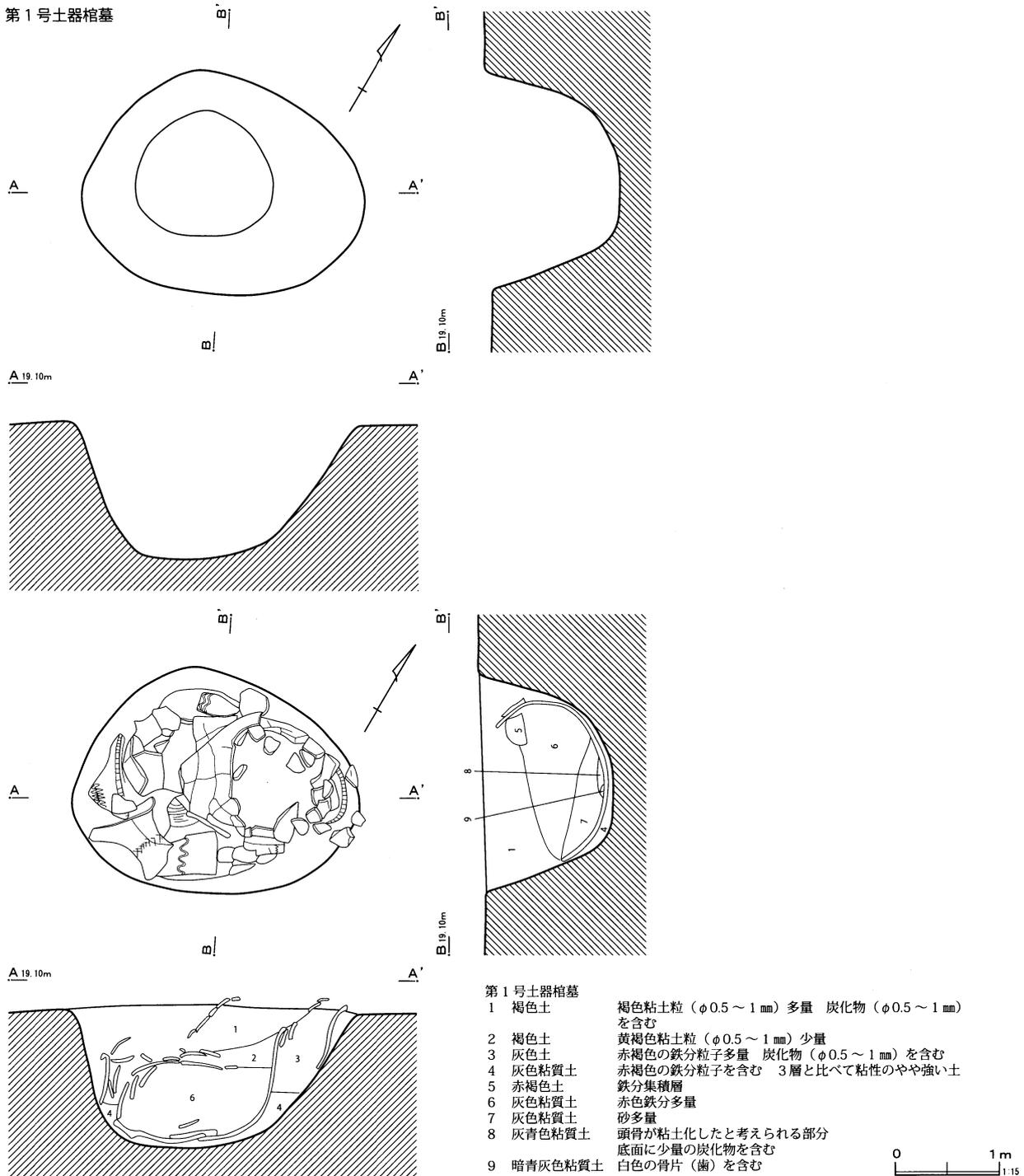
5. 土器棺墓

本遺跡からは土器棺墓が1基検出されている。本遺構以外には調査区から弥生時代の遺構は検出されていない。東西の調査区域外に分布が延びる可能性もあるが、極めて限られた分布であった

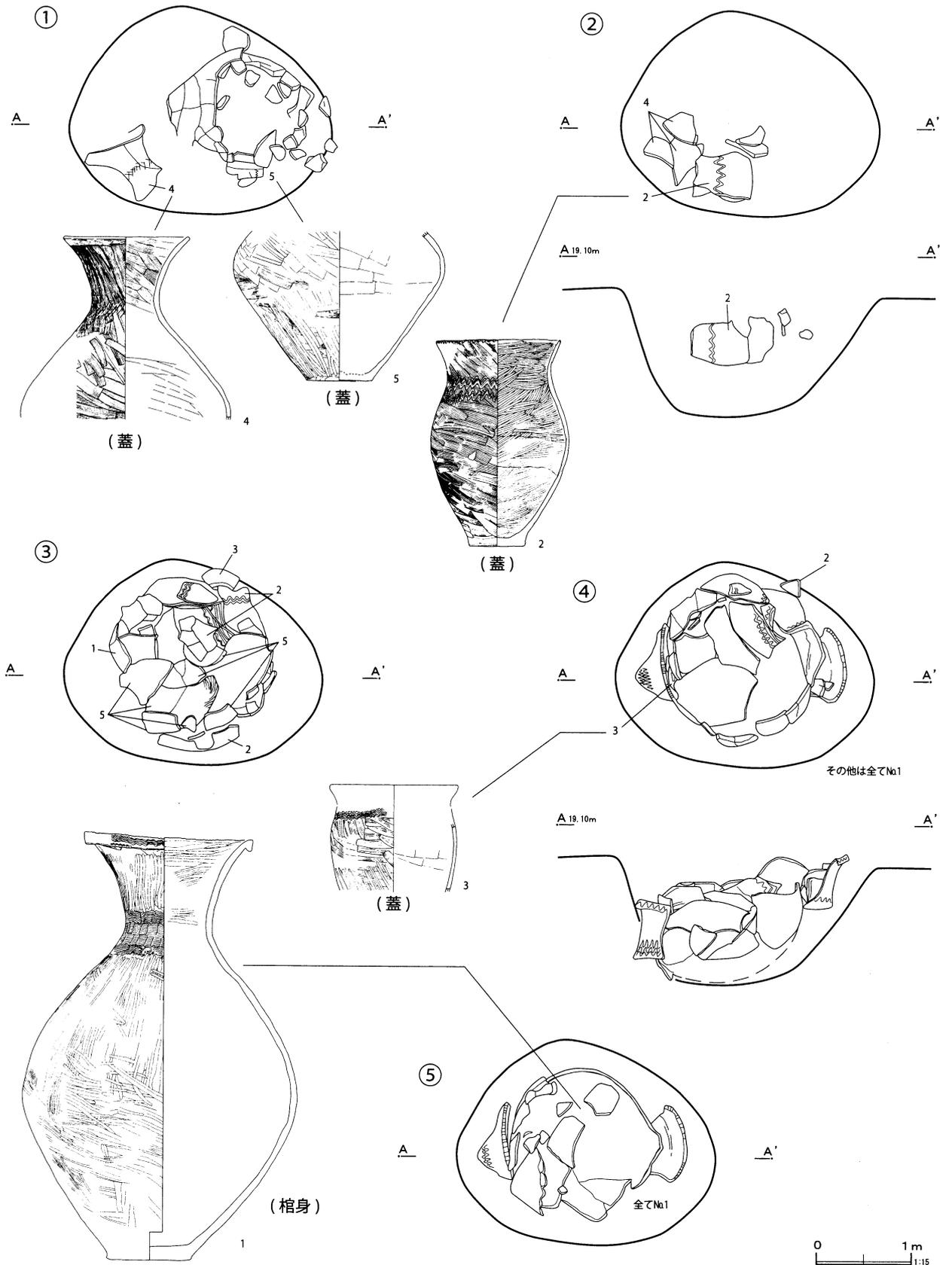
可能性が高い。

第1号土器棺墓 (第204~206図)

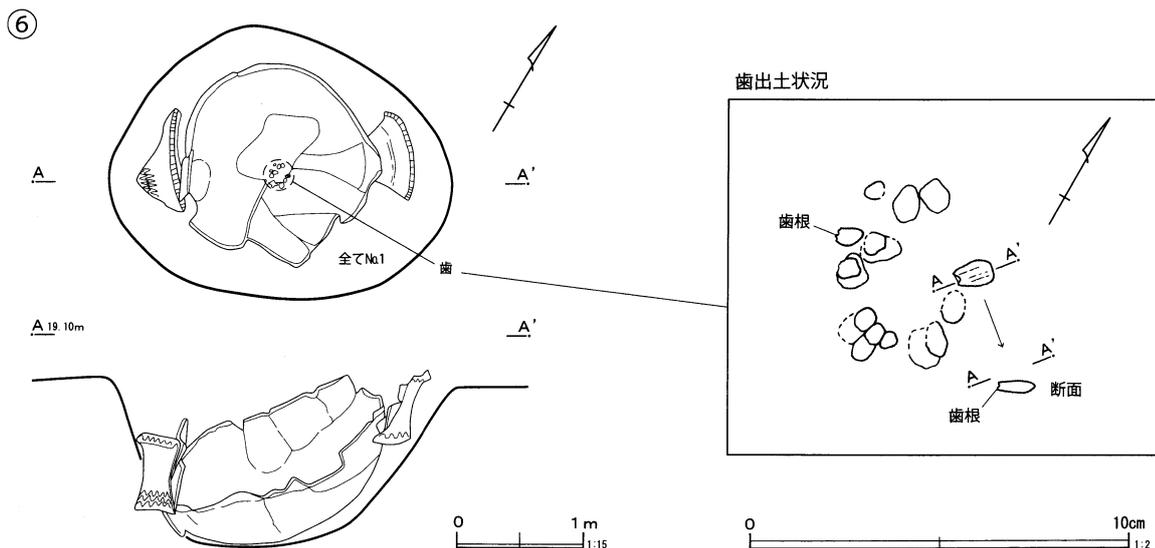
調査区の南側中央、ZQ-14・15グリッドに位置する。他の時代も含めて最も遺構が希薄な箇所



第204図 第1号土器棺墓



第205図 第1号土器棺墓遺物出土状況(1)



第206図 第1号土器棺墓遺物出土状況（2）

である。城敷遺跡とした河川跡である第10号溝跡が南側15mにあり、同時期に存在していた可能性がある。

全体の平面形は長軸をやや南側に持つ不整楕円形である。規模は長軸68cm、短軸54cmで、深さは33cmである。主たる棺身である1の口縁部側を主軸方向とすると、N-60°-Eになる。

覆土は9層に分けられる。1～7層は大きく褐色土系のものと灰色土系のものがあり、前者は各土器片全体を覆う、もしくはその隙間に入り込むように分布することから埋納後の流入土、後者は下層の1の外側、もしくはその中に分布することから、棺を設置するのに用いられた裏込め土と、設置後に全体を被覆していたものと考えられる。

8・9層は青みがかった灰色の粘土で、9層はごく微細な歯を含み、遺体が腐朽して粘土化したものと考えられる。骨は検出されなかった。

4層は1の外側にほぼ平らな状態で認められ、棺を固定するために用いられた裏込め土と考えられる。

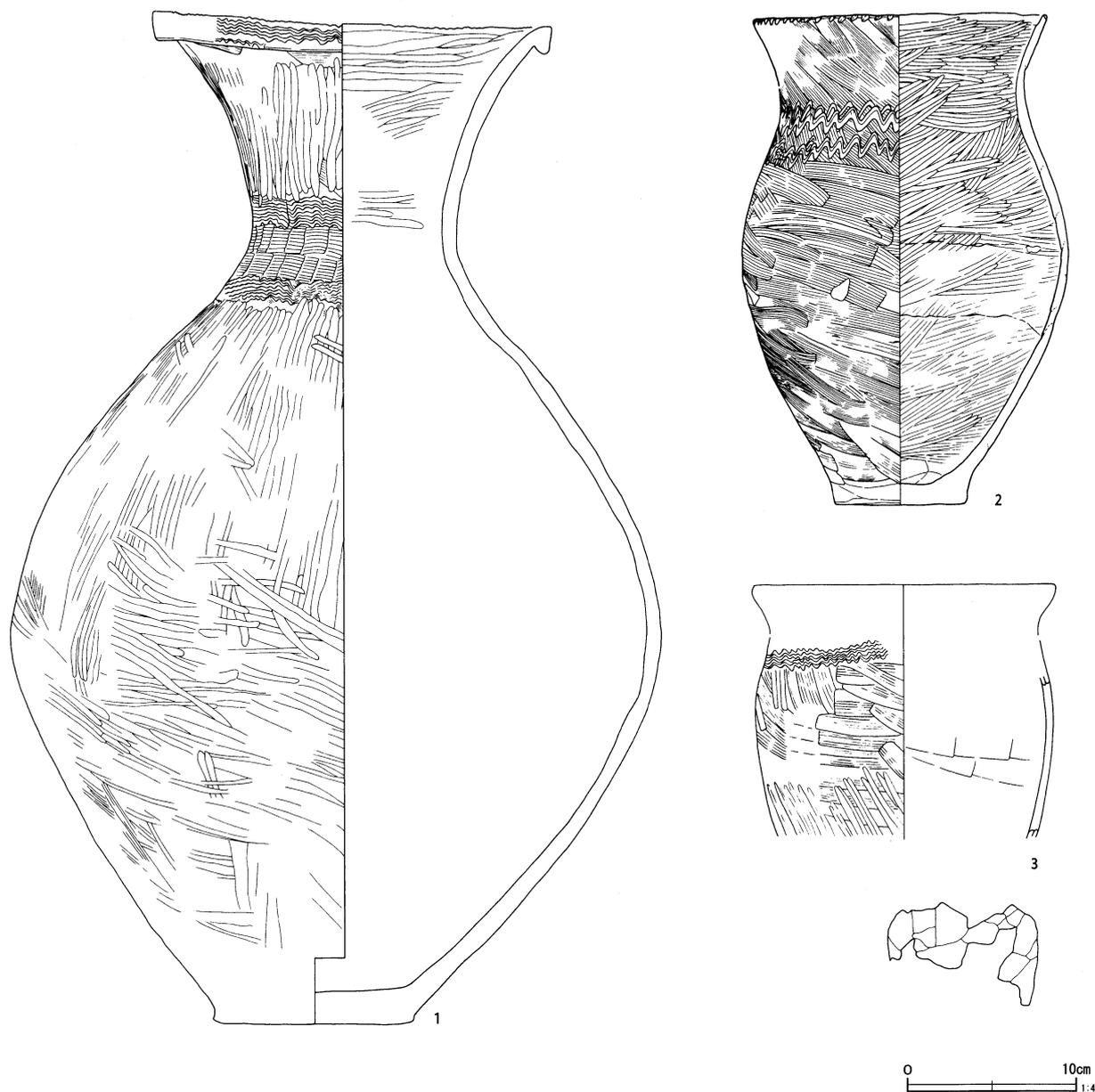
規模と後述する検出された歯の様相から、本遺構は小児墓と考えられる。

覆土中からは、副葬品と考えられる遺物は出土しなかった。

確認面で壺の胴部が露出していたため、断面図を作成しながら掘り下げていく方法をとった。1の棺体が露出した後は、側面の状況を確認するために、土壌の南側半分の壁を取り除いて調査を行った。

土器は図示を行いながら、およそ六つの段階に分けて取り上げた。

- ① まず確認面で5の壺の胴部を横転した状態で確認した。
- ② 土層断面を残しながら掘り進めると、2・4の土器片が南側から出土した。
- ③ その下から、2・4・5の破片が全体を覆った状態で出土した。
- ④ この土器片を外すと下に砂が入っており、割れた1の上半分が現れた。
- ⑤ 割れた破片を取り除くと更に破片が若干出土した。
- ⑥ 更に掘り進めると下側の土器片が現れた。土器の左右には1の口縁部を縦に割った破片が差し込まれていた。これを掘り進めると底面付近に粘土の集積が認められ、その中から小児のものと考えられるごく微細な歯が検出された。この土器片の直下が土壌の底面であった。以上の様相から全体を俯瞰すると、土器棺は次



第207図 第1号土器棺墓出土遺物(1)

の手順で埋納されたものと考えられる。

<1>まず、土壙内に4層の暗褐色土を半ばまで入れる。

<2>1の壺の口縁部を外し、それを斜めに据える。外した口縁部は二つに分け、胴部を左右から挟むように遺構壁面との隙間に差し込む(④~⑥)。

<3>他の壺(4・5)、甕胴部(3)の破片で1の胴部を覆う(②・③)。

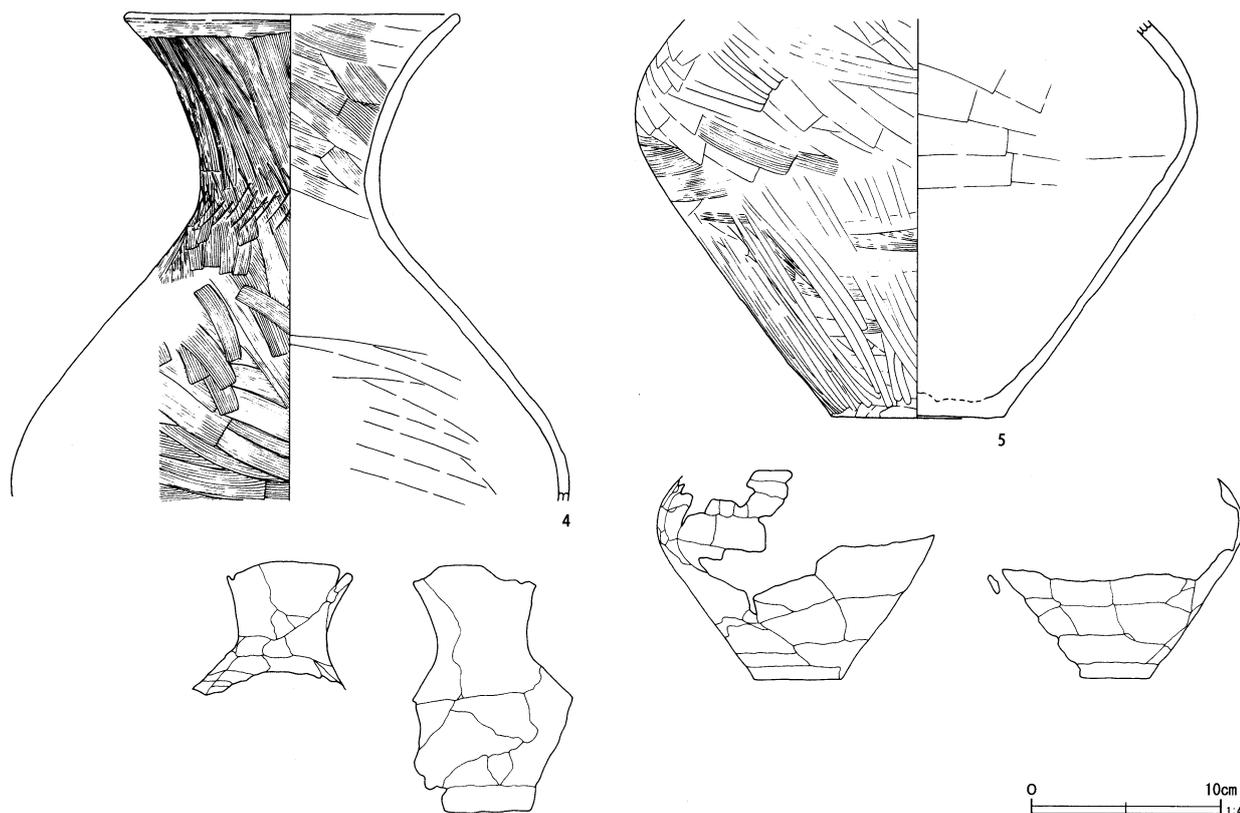
<4>他の壺(5)で口縁部を塞ぎ、残った破片

を入れる(①)。1の中の下層の粘土の存在から全体を粘土で覆っていた可能性もある。

<5>これが④や7層に見られる砂が流入した洪水等によって潰れ、その空いた隙間に1層が堆積したのと考えられる。

以上のように1が棺身、2~5はその蓋とすることができる。実測図には2~5の残存している破片の形状も掲載した。

1の壺は棺身に使用されたものである。口縁部が外された状態で出土している。口径23.7cm、胴



第208図 第1号土器棺墓出土遺物(2)

部最大径39.0cm、底径12.0cm、器高60.2cmを測る。口縁部の3分の1と頸部、胴部の一部が欠けている。口縁部は端部の外側に粘土帯を貼付する複合口縁で、端部は面を持つ。直線的に外反し、頸部はあまり締まらず、縦長の胴部に至る。底部は分厚い円板になっており、大きめである。

口縁端面には棒状工具による押捺が間隔を置いて施されている。遺存している範囲で6単位確認できるが、各単位ごとに押捺の数が異なり、左から15・10・9・14・15条が施され、最後の単位は2条確認できるのみである。複合部外面には5条1単位、右回転の櫛描文が2段、下位の波状文を切って上位の波状文が施されている。

外面の調整は、横方向のヘラナデ後に文様が施され、それを切る形で口縁部、胴部のヘラ磨きを加えられている。肩部の文様は右回転の簾状文と波状文によって構成される。簾状文は9条1単位で下から上の順に、2段施されている。その上下に9条1単位の波状文が施文されている。底面は

ヘラ削りに近いナデが施されている。

内面は、口縁部が横方向のヘラ磨き、胴部が横方向のヘラナデである。白色の軟質粒子を多く含む胎土である。

2の甕は4・5の下位から1の上の南側半分を覆うように出土した。口径17.4cm、胴部最大径19.3cm、底径7.7cm、器高29.0cmを測る。縦長の胴部から頸部は締まらず、口縁部は緩やかに外反する。

口縁端部には斜め左上から刷毛目工具により刻み目が施されている。頸部には3条1単位右回転の櫛描波状文が2段施されている。

外面の調整は刷毛目である。口縁部に斜位に施された後、胴部に横位に施されている。底部の外周には指頭痕が見られる。底面はヘラ削りである。

内面は横位の刷毛目後ヘラ磨きが施される。外面の胴部上半、内面の見込み部分に煤が付着する。色調は鈍い褐色で、雲母・白色粒子・黒色微粒子を含み、砂粒子が多い胎土である。

3の甕は胴部のみ破片である。1の上位から散在して出土している。胴部最大径17.6cm、現存高11.8cmである。頸部の締まらない縦長の胴部と考えられる。

頸部には6条1単位右回転の櫛描波状文が施されている。外面の調整は横位の刷毛目後縦方向の粗いヘラ磨きが施されている。内面は横位のヘラナデが施されるが器面の風化が進み判然としない。外面全体に煤が付着する。色調はにぶい橙色で、雲母・白色粒子・黒色微粒子を含み、砂粒子を多く含む胎土である。

4の壺は5と共に1～3の上位から出土している。口縁部から胴部の破片だが、頸部以外のごく一部が遺存しているのみである。口径17.6cm、現存高25.8cmを測る。口縁部は単口縁で端部は丸く収められる。端部外周には横位の刷毛目が施される。肩のなだらかな胴部から、頸部はあまり締まらず、口縁部は直線的に外反する。

頸部には細い羽状のヘラ描文が施されている。外面の調整は刷毛目と木口の間のような工具によるナデで、口縁部は縦位、胴部は横位から斜位に施されている。内面は木口状工具による横位のナデが施されている。内面は器面が荒れており、見えない部分もある。色調は浅黄橙色で、雲母・

白色粒子・黒色微粒子を含み、砂粒子を多く含む胎土である。

5の壺は確認面から確認された。1の外された頸部を塞ぐように乗せられていたものである。全体に傷みが著しい。胴部中位に最大径を持つ細長い算盤玉状の器形と考えられる。

外面の調整は刷毛目と木口の間のような工具による横位から斜位のナデが施される。下半には幅広の工具による縦位のヘラ磨きが施される。底面はヘラにより、削りに近い状態で整えられており、草の種子の痕跡が見られる。内面はヘラナデが施されるが、全体に剥離していて見えない部分が多い。特に見込み部分は剥離が著しい。色調は浅黄橙色で、雲母・石英・白色軟質粒子・黒色微粒子・白色針状物質を含む。

検出された歯は非常に脆弱で、個別に取り上げることが不可能であったため、薬剤（バインダー）で固めて下側の土器と一緒に取り出した。調査時には歯の部位は特定できなかったが、整理時に表面を精査したところ、切歯と歯根と考えられる部分を確認することができた（第206図）。南側に重なって径3cmの弧状となる歯列が認識でき、土器の傾きに沿って、頭を北東側にして納められたものと考えられる。

6. 井戸跡

銭塚遺跡第2次調査で検出された井戸跡は7基である。第1～3・5～8号井戸跡は調査区東端部に集中して掘り込まれていた。第6・7号井戸跡は第18号掘立柱建物跡の西側に近接している。7基中、底面まで掘り上げられたものは第1～3号井戸跡の3基である。

第1号井戸跡（第209図）

第1号井戸跡はZK-36グリッドに位置する。西側約15mに第2号井戸跡が近接し、北東約4mには第3号井戸跡が隣接している。

平面形態は円形で、規模は長径1.16m、短径1.08m、深さ1.23mである。

断面形態は筒状に掘り込まれている。第1～4層は埋め戻されており、第4層は埋土がグライ化し、暗灰色粘土層である。

遺物は、須恵器坏の破片（第210図1）、中層から桃の核、底面から葦状の繊維、破損した板状木製品、細い竹が出土した。1の須恵器は底部再調整が施されるもので、8世紀後半頃のものである。

時期は不明確であるが、井戸跡が群在すること、かわらけが出土する井戸跡があること、東に展開する銭塚遺跡第1次調査区から中世の区画施設が検出されていることから、中世段階に属すると推定しておく。

第2号井戸跡（第209図）

第2号井戸跡はZK-36グリッドに位置する。東側約15mに第1号井戸跡が近接している。

平面形態は円形で、規模は長径1.39m、短径1.28m、深さ1.17mである。

断面形態は逆台形状に掘り込まれている。下層（第4・5層）は埋土がグライ化した暗灰色粘質土が堆積していた。

第1層下端から石が、埋土中から木札状木製品が出土した（第210図2）。2は木札状木製品である。長さ10.9cm、幅4.0cm、厚さ0.3cm。図上で左側は欠損する。右上端と右下端は隅切されている。

樹種同定の結果ヒノキであることが判明した。柾目取りである。

時期は不明確であるが、中世段階と推定される。

第3号井戸跡（第209図）

第3号井戸跡はZJ・ZK-37グリッドに位置する。南西約4mに第1号井戸跡が、東側約4mには第5号井戸跡が隣接している。

平面形態は本来円形であるが、東側がやや崩落して広がっていた。規模は長径1.40m、短径1.08m、深さは1.32mである。

断面形態は筒状に掘り込まれている。第1～4層は人為的な埋め戻しによる堆積と考えた。第3・4層は埋土がグライ化し、第3層は暗灰色砂質層、第4層は暗灰色粘土層である。

出土遺物はない。時期は不明であるが、中世と推定しておく。

第4号井戸跡（欠番）

第5号井戸跡（第209図）

第5号井戸跡はZJ-37グリッドに位置する。北側約4mには第18号掘立柱建物跡、第6・7号井戸跡が隣接している。

平面形態は歪んだ楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.96m、深さは1.78m以上となるが、湧水のために調査は断念した。

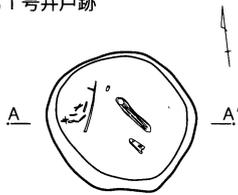
断面形態は筒状に掘り込まれ、下層にはグライ化した青灰色粘質土が堆積していた。

出土遺物は、下層から曲物底板（第210図3）と木杭状木製品（第210図4）と不明木製品が出土した。不明木製品は腐食が進み、取り上げられなかった。

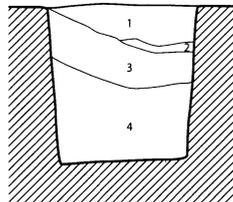
第210図3は曲物底板である。2枚に割れ、中央部が欠損している。表裏面ともに平滑である。大きさは推定直径20.0cm、厚さ0.8cm。樹種は不明で、柾目取り。

4は木杭である。残存長は38.8cm、直径2.4cm～3.0cm。上部は欠損、途中も2か所折損している。杭

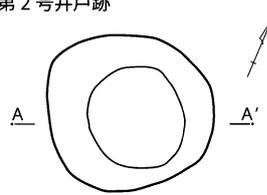
第1号井戸跡



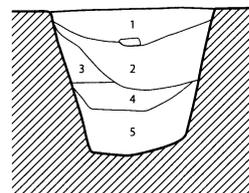
A 19.30m A'



第2号井戸跡



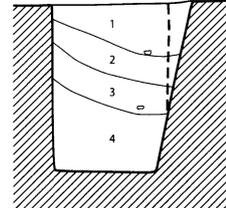
A 19.30m A'



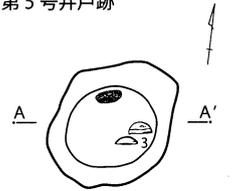
第3号井戸跡



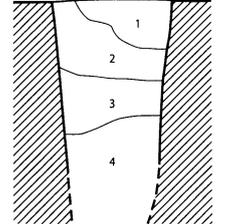
A 19.30m A'



第5号井戸跡



A 19.10m A'



SE 1

- 1 暗灰色砂質土 白色粘土ブロック (φ 10 cm) を全体的にランダムに多量混入 灰少量
- 2 灰色粘土が層状に入る
- 3 黄褐色粘土質 灰色粘土ブロック (φ 10 cm) まばらに少量
- 4 暗灰色粘土質層 底グライ化

SE 2

- 1 暗灰色砂質層 炭化物 (φ 0.5 cm) 少量 礫 (φ 1 ~ 20 cm) 少量 灰色砂質ブロック (φ 5 cm) 少量混入 しまりなし
- 2 暗灰色砂質層 白色ブロック (φ 3 cm) を全体的に不規則に多量混入
- 3 暗褐色砂質層 炭化物 (φ 0.5 cm) を極少量含む
- 4 暗褐色粘土質 炭化物 (φ 1 cm) を少量散在して含む
- 5 暗灰色粘土質 均一 グライ化する

SE 3

- 1 暗灰色砂質層 白色粘土ブロック (φ 5 cm) をまばらに含む 礫少量 しまり弱い 埋め戻し 白色粘土ブロック (φ 20 cm) が大部分 しまり弱い 埋め戻し土
- 2 暗灰色土
- 3 暗灰色砂質層 礫をまばらに含む 埋め戻し土がグライ化
- 4 暗灰色粘土質 ほぼ均一の質 埋め戻し土 グライ化

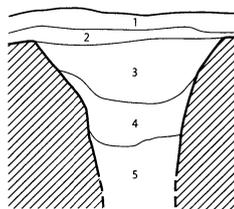
SE 5

- 1 灰褐色土 灰色粘土主体 小石少量 炭化物少量
- 2 黄褐色土 黄褐色粘土主体 灰色粘土少量
- 3 暗褐色土 灰暗褐色粘土多量
- 4 青灰色土 青灰色粘土・炭化物少量

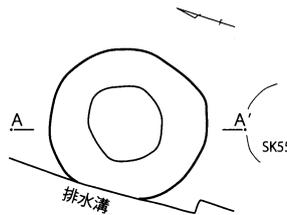
第6号井戸跡



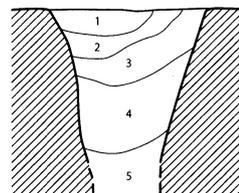
A 19.80m A'



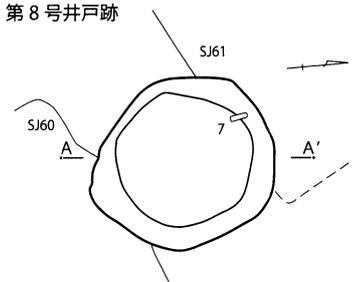
第7号井戸跡



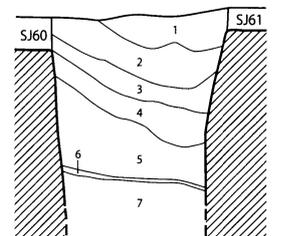
A 19.30m A'



第8号井戸跡



A 19.30m A'



SE 6

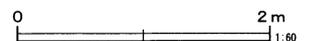
- 1 現耕作土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 灰色粘土粒子やや多量 焼土少量
- 4 暗褐色土 褐色粘土・炭化物多量に含む
- 5 暗褐色土 灰色粘土多量 炭化物少量

SE 7

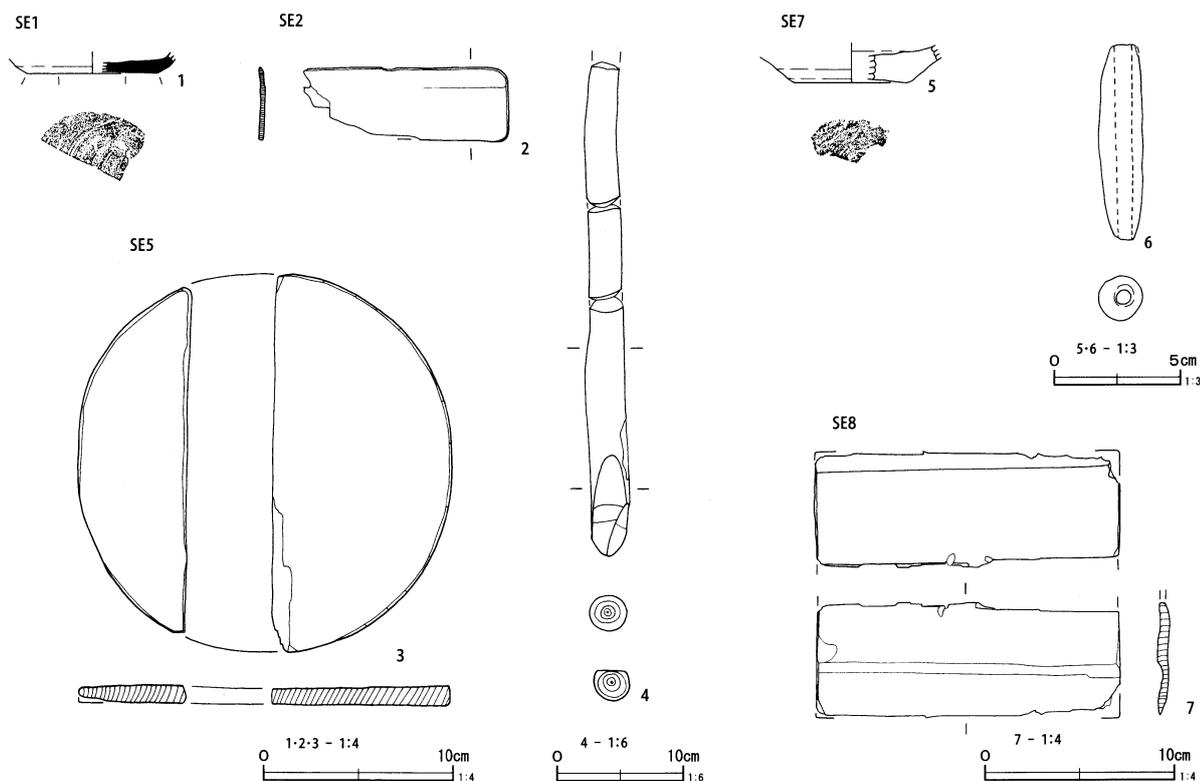
- 1 暗褐色土 灰色粘土多量 炭化物やや多量
- 2 暗褐色土 灰色粘土・褐色砂多量 砂質土
- 3 暗褐色土 炭化物多量 褐色粘土ブロック・焼土やや多量
- 4 暗褐色土 褐色土・炭化物少量
- 5 青灰色土 粘土質

SE 8

- 1 黄褐色粘土 小石 (φ 5 cm 大) 多量
- 2 茶褐色土 黄褐色粘土ブロック少量
- 3 黄褐色粘土 1層と同じだが小石含まない
- 4 茶褐色土 灰色粘土多量
- 5 茶褐色土 黄褐色粘土ブロック少量
- 6 赤褐色土 褐鉄鉱の凝集層
- 7 青灰色土 (粘土)



第209図 第1~3・5~8号井戸跡



第210図 第1・2・5・7・8号井戸跡出土遺物

第52表 井戸跡出土遺物観察表 (第210図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	-	1.1	(7.0)	E I J	20	普通	淡黄	SE1 南比企産 白針含む 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 底部ヘラ記号「一」		
5	かわらけ	皿	-	2.0	(6.0)	H I	25	普通	にぶい橙	SE7 底部静止糸切りか		
6	土製品	土錘	-	-	-	C E H I K	95	普通	にぶい橙	SE7 長さ7.7cm 最大径1.8cm 孔径0.7cm 重さ21.3g 北武蔵の土か	80-11	

先は長さ7.9cmにわたって、3面から斜めにカットされている。全面に樹皮が残る芯持ち材である。樹種はクリと同定されている。

時期は不明確であるが、中世と推定しておきたい。

第6号井戸跡 (第209図)

第6号井戸跡はZJ-37グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外に延びているため、全体は不明である。東に第7号井戸跡が近接している。

平面形態は円形あるいは楕円形と推定され、残存規模は長径1.22m、短径0.80m、深さは1.06mを超えるが、湧水のため底面までは調査できなかった。

断面形態は上方が広がる漏斗状である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第7号井戸跡 (第209図)

第7号井戸跡はZJ-37グリッドに位置する。東側に第18号掘立柱建物跡が、西側に第6号井戸跡が近接して位置する。

遺構西端部をわずかにトレンチに切られているが、平面形態は円形で、残存規模は長径1.23m、短径1.20m、深さは1.31mを超えるが、底面には達していない。

断面形態は上方が広がる漏斗状である。

遺物は、かわらけ、土錘が出土した (第210図5・6)。かわらけ皿は小破片で、底部は静止糸切りの可能性がある。時期は中世であるが、詳細な時期限定は難しい。

第8号井戸跡 (第209図)

第8号井戸跡はZF・ZG-38グリッドに位置す

る。重複する第60・61号住居跡を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.50m、短径1.34m、深さは1.81mを超えるが、湧水のために底面まで調査できなかった。

断面形態は筒状に掘り込まれている。第6層は褐鉄鉱（鉄分）の凝集層であった。

遺物は箱状容器の側板と思われる木製品が出土した（第210図7）。7は板状木製品である。大

7. 溝跡

銭塚遺跡第2次調査で検出された溝跡は38条である。第1～6、8～11号溝跡は埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第340集『西浦／野本氏館跡／山王裏／銭塚』で報告されている。

第7号溝跡（第211～214図）

第7号溝跡はZL-11、ZM-11・12、ZN-15、ZO-16・17グリッドに位置する。北西から南東方向に伸びていた。南側約2mには第12号溝跡がほぼ並行して伸びていた。検出長23.28m、総延長約64mである。上端幅は1.10～2.62m、下端幅0.14～1.48m、確認面からの深さは0.21～0.43mで、断面は逆台形状に掘り込まれていた。埋土は焼土、炭化物を含む黒灰色土である。

遺物は、溝全体から満遍なく出土している。平行する第12号溝跡からもほぼ同時期の遺物が多数検出され、両側側溝の道路跡を想定して精査したが、溝間の平坦面に硬化面は検出されなかった。また、断面観察によってもその証拠は見出せなかった。第7・12号溝跡からは多数の須恵器を中心に律令期の土器が多量に出土した。律令期集落は両溝以北に分布がほぼ限定されることを考えると、集落域を区画した区画溝と考えた方がよいと判断される。

出土遺物は土師器坏・皿・小型壺・鉢、須恵器坏・高台付坏・椀・蓋・高盤・長頸瓶・壺・甕・鉢、丸瓦、土製紡錘車、石製紡錘車、土器片転用紡錘車、土錘、砥石がある（第215図～220図）。

第215図1～11は土師器坏類である。1・2は

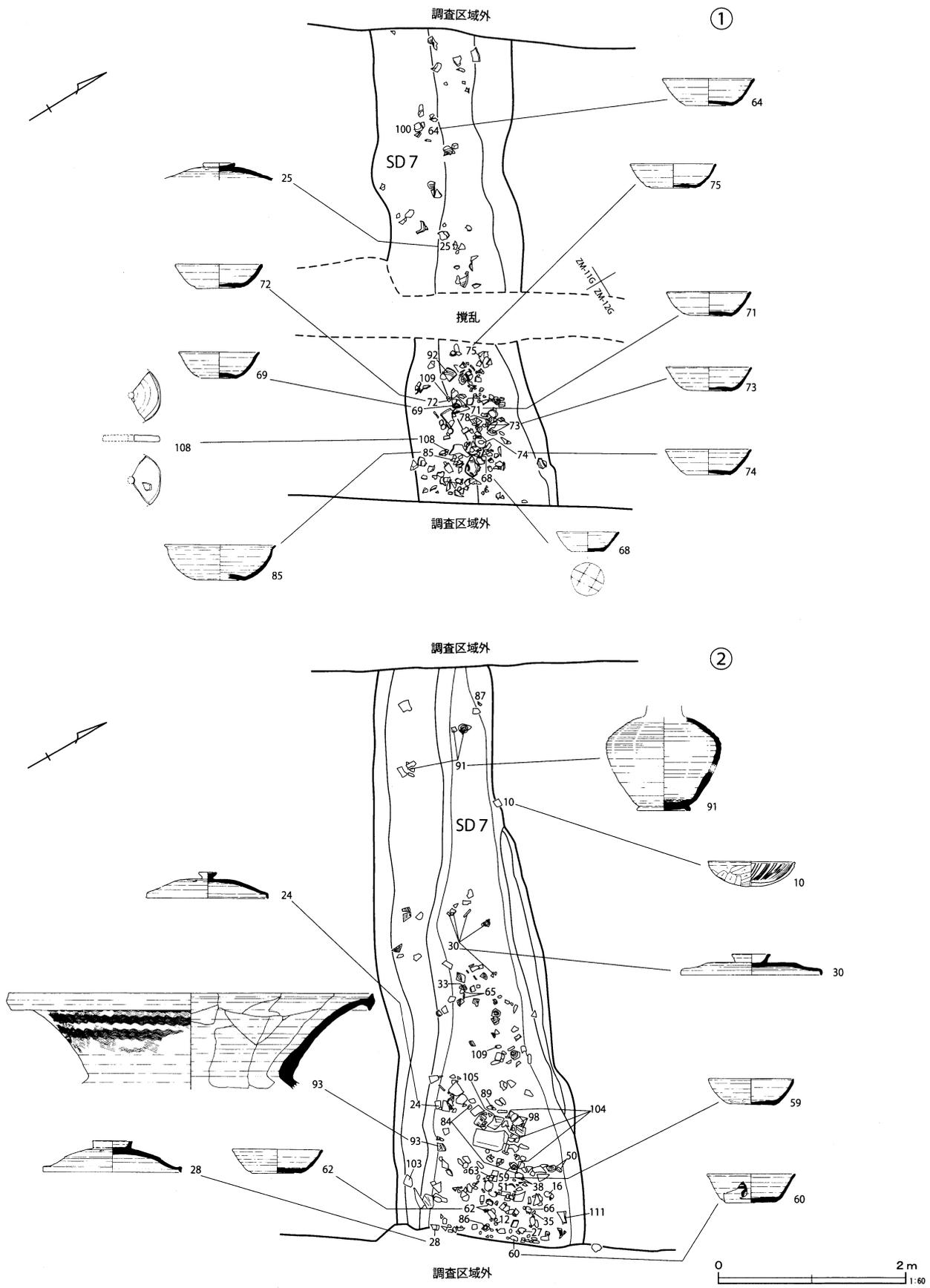
きは長さ16.2cm、幅6.0cm、厚さ0.6cmである。長側縁の一方は斜めに面取りされている。一端は垂直に断ち落とされる。表面は平滑であるが、裏面は凹凸がある。箱状容器の側板と推定しておきたい。

時期は不明確であるが、古代の住居跡を切っており、他の井戸跡同様中世の所産と推定しておきたい。

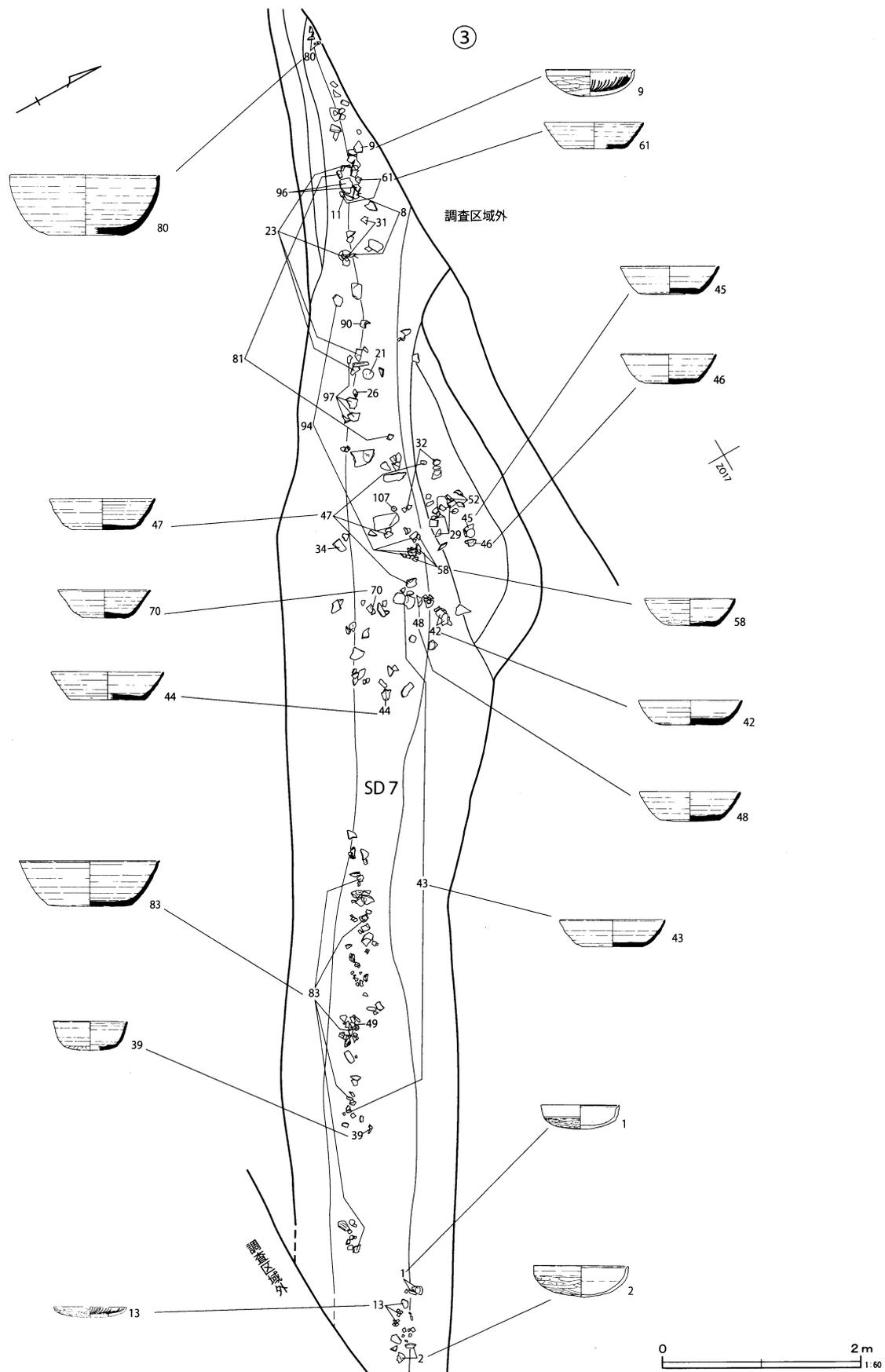
（続）比企型坏、3・4は扁平丸底タイプ、8は深椀タイプの北武蔵型坏である。5・6は内外面、特に内面に厚く漆が付着する。漆パレットとして使用されたものと考えられる。7・9・10は北武蔵型暗文坏である。7は内面が風化しているが、他は内面に放射暗文が施文される。11は内面ヘラミガキされる坏、北武蔵産か。12は内外面ヘラミガキで平坦、内面は黒色処理される。13は北武蔵型暗文皿で、内面黒色処理が施される。14～18は器壁の厚い皿で、内面にヘラミガキ、底部に木葉痕を残すものがある。系譜が不明確であるが、胎土に白色針状物質がなく、角閃石が多量に含まれることから北武蔵に由来するものであろうか。不明確であるが、黒色処理が施されているかもしれない。土師器坏類は7世紀後半代のもを一部含むが、主体は8世紀初頭～前半と推定される。

22～36は須恵器蓋である。28～30は高台状つまみ。25・31は環状つまみである。35は壺蓋か。36は南比企産のかえり蓋である。

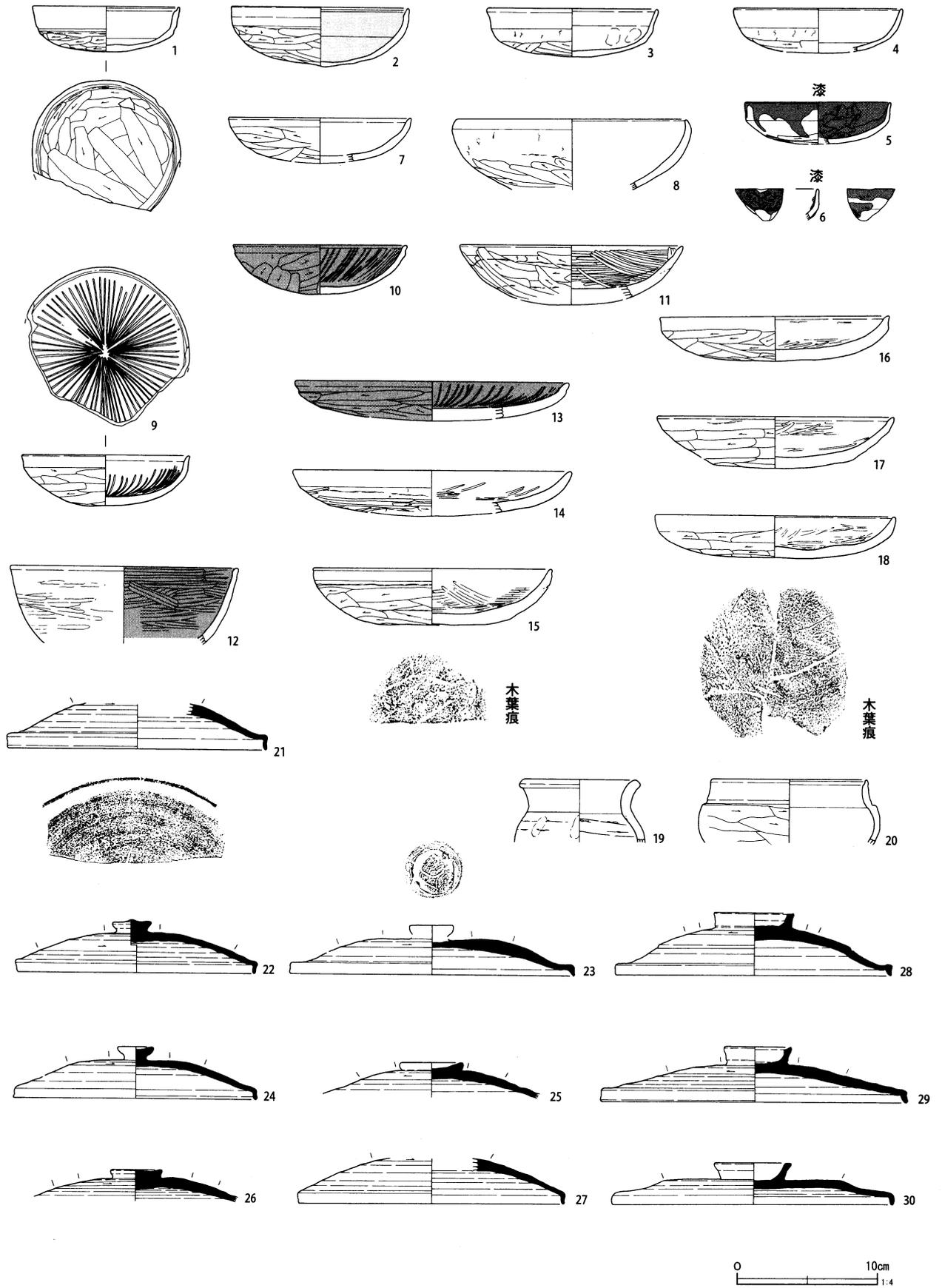
37は高台付坏、産地不明である。底部は高台よりもやや突出する。底部は篋切り、腰部まで回転ヘラケズリされる。湖西産風であるが、焼きが甘く歪み大きい。38は南比企産の高台付坏である。39は湖西産の坏G。40～79は南比企産の坏で多量に出土した。40は口径16cmを超える大型坏で、底部は丸底風となる。坏は口径14～15cmと大振り、底部が回転ヘラケズリ調整されるものから、やや小型化して再調整範囲も狭まるもの、口径12cm前



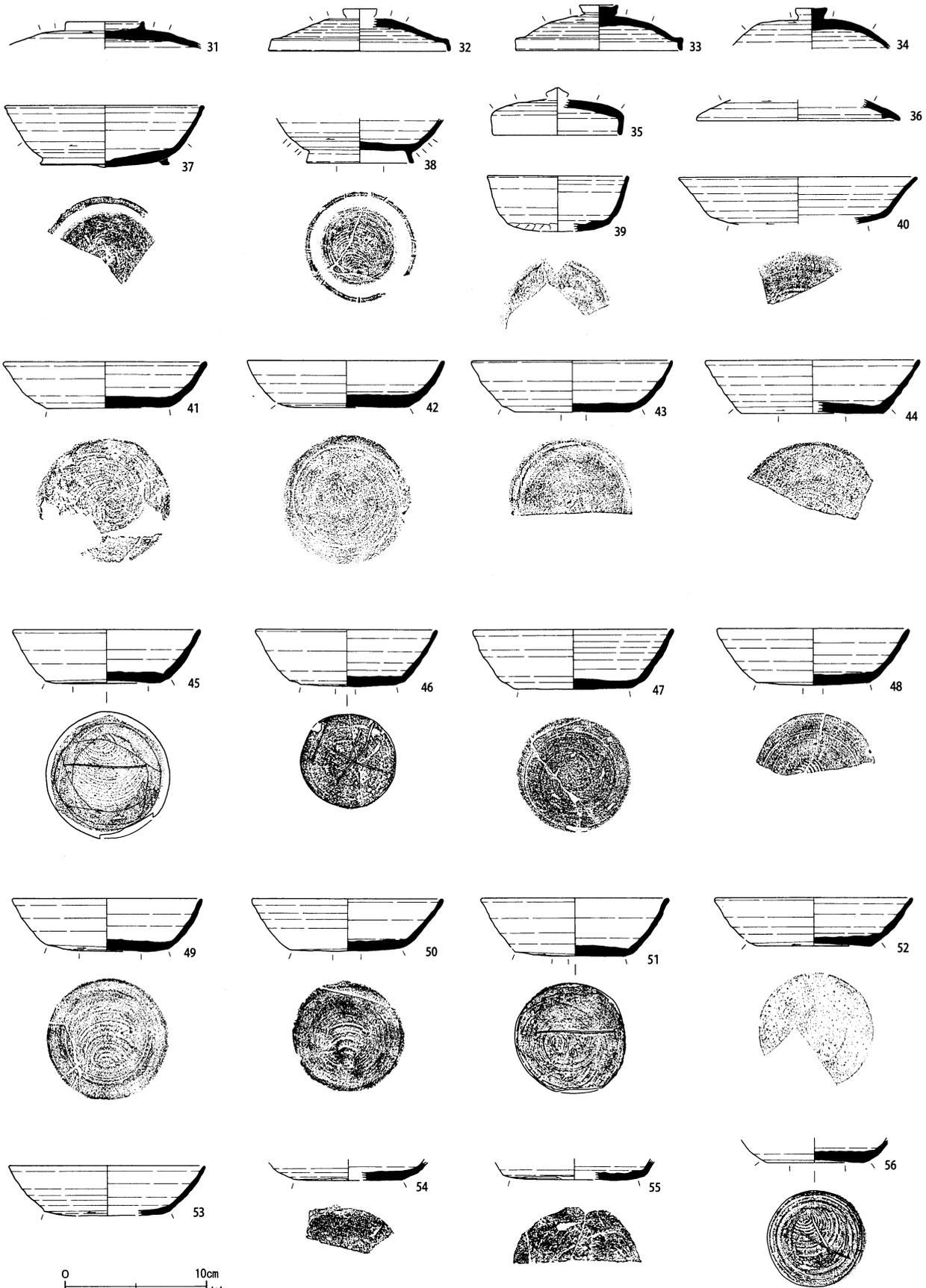
第213図 第7号溝跡遺物出土状況 (1)



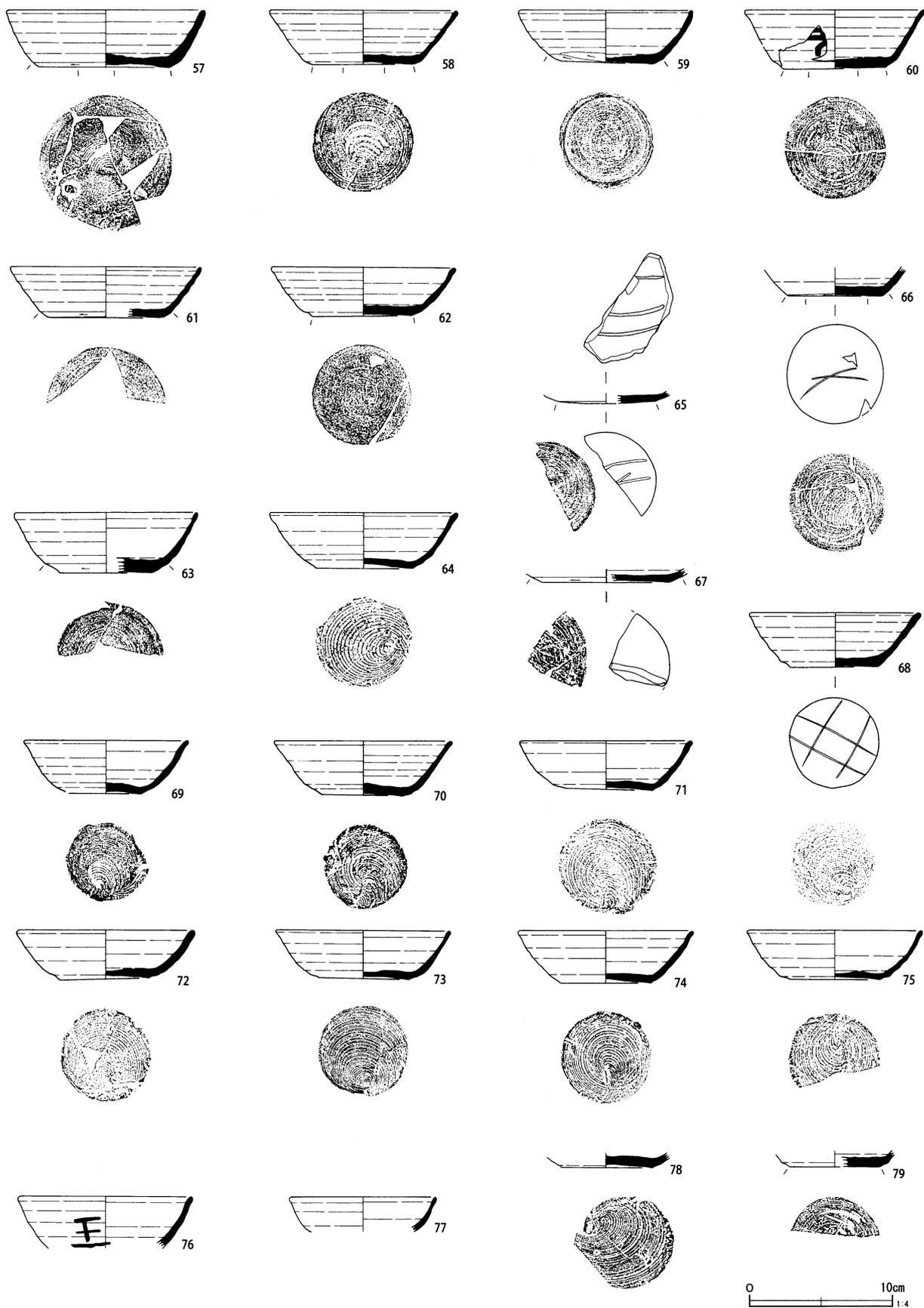
第214図 第7号溝跡遺物出土状況(2)



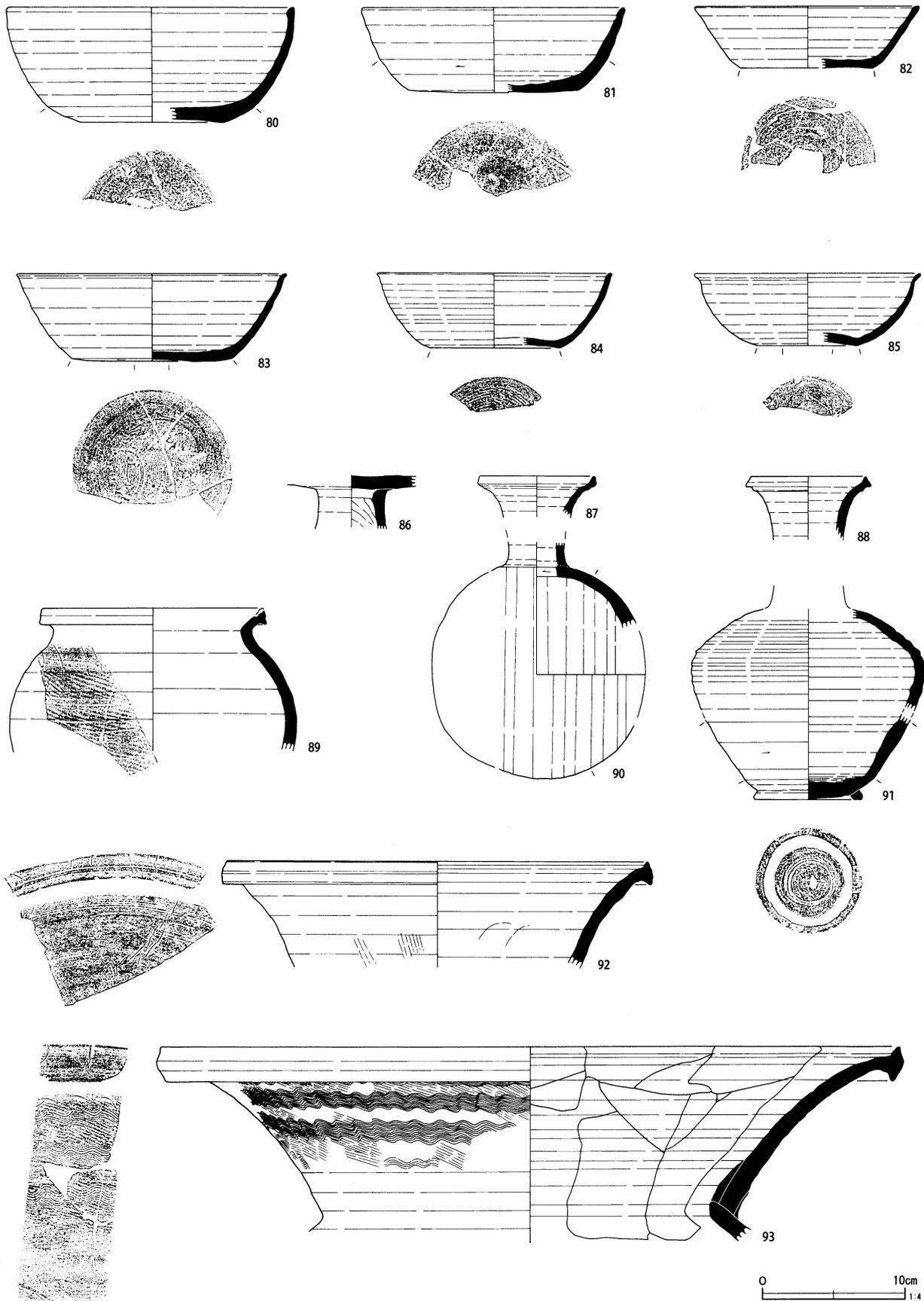
第215图 第7号沟迹出土遗物(1)



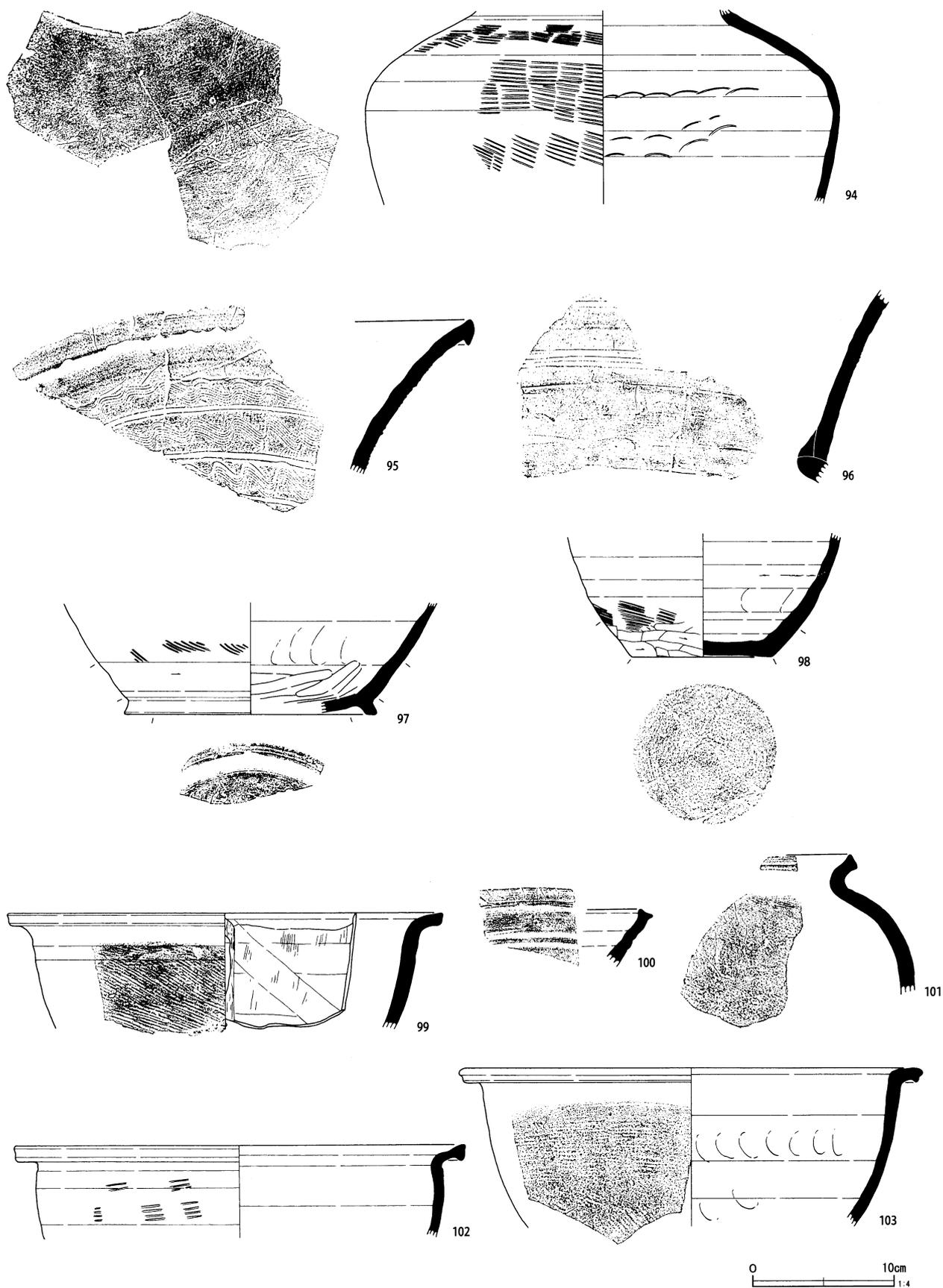
第216図 第7号溝跡出土遺物(2)



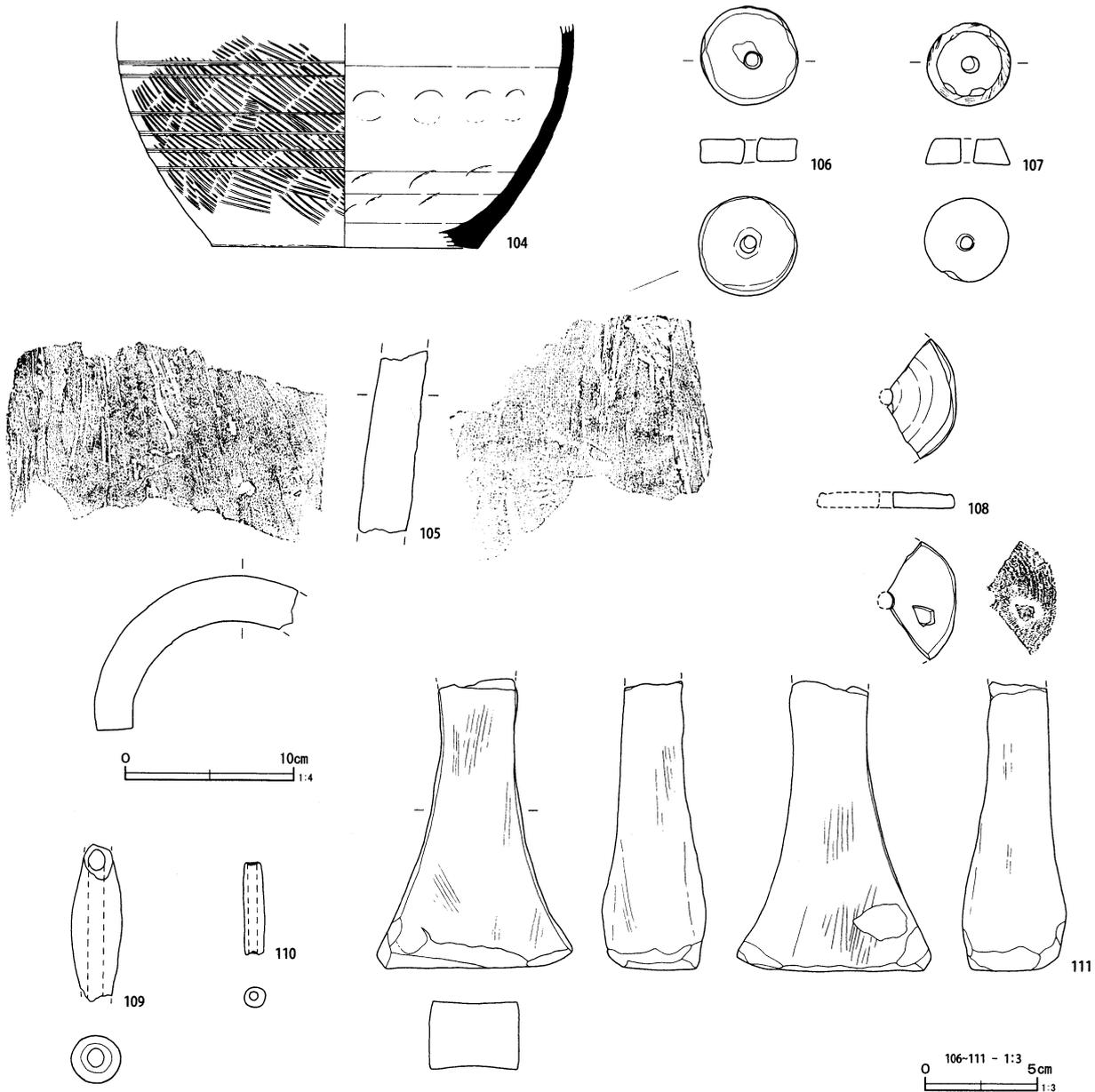
第217图 第7号沟迹出土遗物(3)



第218図 第7号溝跡出土遺物(4)



第219図 第7号溝跡出土遺物（5）



第220図 第7号溝跡出土遺物(6)

後で底部回転糸切り後無調整のものまで時期幅のある土器が出土している。60は体部側面に墨痕が残るが、判読できない。76の体部側面にも墨書「王」か。68は底部外面に「井」状の線刻（ヘラ記号）が刻まれていた。

80～85は無台椀である。86は高盤。87・88・90・91は東海産の長頸瓶類。90はフラスコ形瓶である。89・98は壺。92～96は甕。93の大甕は破損後、砥石に転用されていた。97は短頸壺か。99・102～104は鉢。105は丸瓦である。106は土製紡錘車。

107は石製紡錘車。108は須恵器坏底部を再利用した紡錘車である。

須恵器は坏Gやかえり蓋、湖西産瓶類などが最も古く7世紀後半代、8世紀前半代から新しいものでは9世紀中頃の須恵器坏が定量で含まれる。

地点毎に時期の異なる遺物が集積する状況や層位的な堆積状況の差は明確には認められなかった。100数十年間における投棄行為の累積とみるべきか、時期の異なる遺物を一括して投棄したのか俄かには確定できないが、前者の可能性を

第53表 第7号溝跡出土遺物観察表 (第215~220図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	104	32	-	CHJK	80	普通	橙	続比企型坏 白針含む 無彩	No49 ZO-17G	83-1
2	土師器	坏	126	42	-	EHIJK	60	普通	明赤褐	続比企型坏 白針含む 内面赤彩 外面赤彩不明	No53・54 ZO-17G	83-2
3	土師器	坏	(121)	35	-	CEHI	40	普通	橙	北武蔵型坏	ZN-15G	
4	土師器	坏	(120)	30	-	ACHI	25	普通	橙	北武蔵型坏	ZN-15G	
5	土師器	坏	(103)	29	-	AHI	25	普通	にぶい橙	在地の土か 白針・角閃石なし 無彩 漆パレット 特に内面に厚く付着	ZN-15G	83-3・4
6	土師器	坏	-	-	-	AI	5	普通	橙	坏両面に漆付着 特に内面に厚く付着		83-5・6
7	土師器	坏	(128)	29	-	CEHI	20	良好	明赤褐	北武蔵型暗文坏と思われる 内面風化著しく暗文不明	ZO-17G	
8	土師器	坏	(162)	50	-	CI	30	普通	橙	北武蔵型坏 内面一部煤付着	No25・84 ZO-16G	
9	土師器	坏	119	36	-	CHI	80	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	No82 ZO-16G	83-7・8
10	土師器	坏	(123)	35	-	ACHI	25	普通	褐灰	北武蔵型暗文坏 内外面黒色処理	No7 ZN-15G	
11	土師器	坏	(158)	37	-	CHIK	30	普通	橙	北武蔵の土? 内面ヘラミガキ 外面ケズリ 接合痕残る	No20 ZO-16G	
12	土師器	椀	(162)	55	-	ACEL	20	普通	にぶい黄橙	内面黒色処理 内外面ミガキ	No116 ZN-15G	
13	土師器	盤	(192)	26	-	CHIK	15	普通	明赤褐	北武蔵型暗文皿 内外面黒色処理	No50 ZO-17G	
14	土師器	皿	(198)	30	-	CIK	15	普通	にぶい黄橙	北武蔵の土? 外面粗いケズリ後ミガキ 内面ヨコナデ+ミガキ	ZN-15G	
15	土師器	皿	(169)	40	-	ACHI	30	普通	にぶい黄橙	内面ミガキ 底部木葉痕 北武蔵の土か	ZO-16G	
16	土師器	皿	(162)	31	-	CIKL	25	普通	浅黄橙	北武蔵の土? 内外面黒色処理か 内面ヨコナデ+ミガキ	No99 ZN-15G	
17	土師器	皿	(168)	37	-	CIK	30	普通	にぶい黄橙	北武蔵の土? 角閃石多 内面ミガキ外面ケズリ 黒色処理の可能性あり	ZN-15G	84-1
18	土師器	皿	-	-	-	CIK	35	普通	浅黄橙	北武蔵の土? 底部外面木葉痕残る 内面ミガキ 体外面黒色処理か	ZN-15G	
19	土師器	小型壺	(81)	45	-	AHIJ	25	普通	橙	在地産 白針含む 胴部指頭+雑なナデ	ZN-15G	
20	土師器	鉢	(110)	45	-	AHIJL	20	良好	明赤褐	在地産 白針含む 無彩か 割れ口に一部擦痕有り 二次的に砥石として転用された可能性有り	ZO-17G	
21	須恵器	蓋	(183)	32	-	EIJK	25	良好	灰	南比企産 内面線刻「ヘラ記号?」有り	No33	
22	須恵器	蓋	(169)	38	-	EIJK	20	普通	灰	南比企産	ZN-15G	
23	須恵器	蓋	(202)	25	-	EHIJL	40	普通	灰	南比企産 つまみ欠失 剥離面に糸切り痕残る	No16・24・29・36 ZO-16G	
24	須恵器	蓋	(172)	37	-	GIJ	20	普通	灰	南比企産	No66 ZN-15G	
25	須恵器	蓋	-	25	-	IJ	25	良好	灰	南比企産 つまみ径4.3cm	No24	
26	須恵器	蓋	-	22	-	EIJ	40	良好	灰	南比企産 つまみ径3.6cm	No37 ZO-16G	
27	須恵器	蓋	(188)	32	-	EIJK	20	普通	灰	南比企産	No112 ZN-15G	
28	須恵器	蓋	(196)	45	-	EIJK	70	普通	灰	南比企産 佐波理模倣椀蓋 高台状つまみ (径4.7cm)	No153 ZN-15G	84-2
29	須恵器	蓋	21.6	39	-	EHIJL	70	良好	灰	南比企産 内面降灰	No48・49・51 ZO-16G	84-3
30	須恵器	蓋	198	30	-	IJL	70	良好	灰	南比企産 高台状つまみ (径5.5cm) 天井部回転ヘラケズリ後	84-4	
31	須恵器	蓋	-	19	-	A EI J	40	良好	灰	南比企産 環状つまみ (径5.3cm)	No22・24 ZO-16G	
32	須恵器	蓋	(126)	23	-	EJ	40	良好	灰	南比企産	No43・45	
33	須恵器	蓋	(117)	32	-	EJK	40	普通	灰	南比企産 つまみ径2.8cm	No20 ZN-15G	
34	須恵器	蓋	-	29	-	EIJK	50	普通	灰	南比企産	No54 ZO-16G	
35	須恵器	蓋	(90)	25	-	IJK	25	良好	灰	南比企産 壺蓋 自然釉掛かる	No103 ZN-15G	
36	須恵器	蓋	(143)	15	-	EHIJ	15	普通	灰	南比企産 白針含む		
37	須恵器	高台付坏	(139)	44	(92)	IK	25	良好	青灰	産地不明 歪み有り 底部中心出尻風に突出 底部ヘラ切り後回転ヘラケズリか	ZO-17G	
38	須恵器	高台付坏	-	31	76	EJ	60	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端ケズリ	No94・95 ZN-15G	
39	須恵器	坏	(98)	39	(72)	IK	30	良好	灰白	湖西産 坏G 底部ヘラ切り後軽いケズリ又はナデ 胎土精選	No43 ZO-17G	84-5
40	須恵器	坏	(167)	33	(122)	IJK	15	良好	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ	ZN-15G	
41	須恵器	坏	142	34	87	EIJKL	80	普通	灰	南比企産 底部全面手持ちヘラケズリ	ZO-16G	84-6
42	須恵器	坏	(138)	33	85	EIJK	70	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ	No75 ZO-16G	
43	須恵器	坏	142	36	81	HIJ	60	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ 底部中心部に糸切り痕残る	H II 新~H III 古 No40 ZO-17G No72 ZO-16G	84-7

銭塚遺跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
44	須恵器	坏	(150)	38	(100)	E H J	20	良好	灰	南比企産 回転糸切り後、底部+体部下端回転ヘラケズリ 内底径9.5cm No80 ZO-16G		
45	須恵器	坏	131	38	8.8	I J K	85	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後手持ちヘラケズリ 「一」 状のヘ ラ記号 H III期 No53 ZO-16G ZO-17G	84-8	
46	須恵器	坏	127	40	6.8	E I J K	70	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ 内底径 7.8cmヘラ記号あり No55 ZO-16G	84-9	
47	須恵器	坏	141	42	7.9	I J	95	普通	明灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ 重量感有り 口縁内外 面に焼けムラ有り H III期 No40・56・70 ZO-16G	84-10	
48	須恵器	坏	(135)	40	(8.1)	E I J K	35	良好	青灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ H III期 内底径8.2cm No73 ZO-16G		
49	須恵器	坏	134	37	8.5	E I J	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径8 cm H III期 内面：にぶい橙 No28 ZO-17G	85-1	
50	須恵器	坏	134	37	7.9	E I J	80	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ (ロクロ 右回転) 内底面磨減 H III期 No92・93 ZN-15G	85-2	
51	須恵器	坏	(132)	41	7.8	I J K	70	良好	灰	南比企産 底部糸切り後回転ヘラケズリ ヘラ記号「一」 内 底径7.8cm No97 ZN-15G	85-3	
52	須恵器	坏	(139)	34	8.0	I J	50	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ 外面全体降灰 内底径9.5cm No49 ZO-16G	85-4	
53	須恵器	坏	(138)	35	(9.0)	E J	20	良好	暗青灰	南比企産 ZO-16G		
54	須恵器	坏	-	1.5	(7.8)	I J K	10	良好	灰	南比企産 底部手持ちヘラケズリ ZN-15G		
55	須恵器	坏	-	1.4	(10.3)	I J K	30	普通	灰	南比企産 底部手持ちヘラケズリ ZN-15G		
56	須恵器	坏	-	1.8	6.8	I J K	90	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ ZN-15G		
57	須恵器	坏	138	40	9.2	H I J	70	普通	灰白	南比企産 回転糸切り後底部+体部下端回転ヘラケズリ ZN-15G	85-5	
58	須恵器	坏	130	38	7.0	I J K	65	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ ロクロ左 回転No69 ZO-16G	85-6	
59	須恵器	坏	120	37	6.2	I J K	70	良好	灰	南比企産 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ No84 ZN-15G	85-7	
60	須恵器	坏	(124)	41	7.2	E I J K	70	普通	橙	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 体側部に 墨痕有り 判読不能 No114 ZN-15G	85-8	
61	須恵器	坏	(132)	35	8.2	I J K	25	良好	灰白	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ 内底径8.7cm No 19・20 ZO-16G		
62	須恵器	坏	128	34	7.0	E I J K	70	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 内底径8.3cm No120・134 ZN-15G	85-9	
63	須恵器	坏	(127)	42	6.6	I J	70	普通	灰	南比企産 体部下端+底部回転ヘラケズリ No129 ZN-15G	85-10	
64	須恵器	坏	(130)	39	6.8	E H I J	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 底部ヘラ記号有り No9	86-1・2	
65	須恵器	坏	-	1.7	(7.0)	I J K	40	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ 内外面ヘラ記号有り No21 ZN-15G		
66	須恵器	坏	-	2.0	6.8	I J K	80	普通	灰白	南比企産 底部糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ 底 部ヘラ記号有り No102 ZN-15G		
67	須恵器	坏	-	0.9	(9.0)	I J K	20	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ 底部ヘラ記号有 り ZO-17G		
68	須恵器	坏	120	38	6.4	I J	80	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 底部ヘラ記号「井」 No108	86-3・4	
69	須恵器	坏	(113)	37	5.2	E H I J	65	普通	にぶい褐	南比企産 底部回転糸切り No52		
70	須恵器	坏	123	38	5.7	C E H I J	95	普通	にぶい橙	南比企産 底部回転糸切り No65 ZO-17G	86-5	
71	須恵器	坏	119	34	6.2	I J K	75	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り No50・66	86-6	
72	須恵器	坏	122	34	6.3	E I J L	70	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り 内底径7.0cm No46	86-7	
73	須恵器	坏	121	34	6.4	I J	70	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り 内底径7.1cm No81・82・139	86-8	
74	須恵器	坏	121	36	6.3	J K	100	不良	灰白	南比企産 底部回転糸切り 内底径6.4cm H VII期 No86	86-9	
75	須恵器	坏	(120)	34	6.3	I J K	50	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り No37	87-1	
76	須恵器	坏	(119)	3.6	-	I J K	20	普通	灰白	南比企産 体側面墨書「王」	87-2	
77	須恵器	坏	(102)	2.4	-	I J	20	良好	青灰	南比企産 坏Gか		
78	須恵器	坏	-	1.1	6.4	E I J K	90	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号有り「一」 No67		
79	須恵器	坏	-	1.2	(6.3)	G J	30	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)		
80	須恵器	無台碗	(20.0)	8.0	(10.0)	I J L	40	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ No1 ZO-16G	87-3	

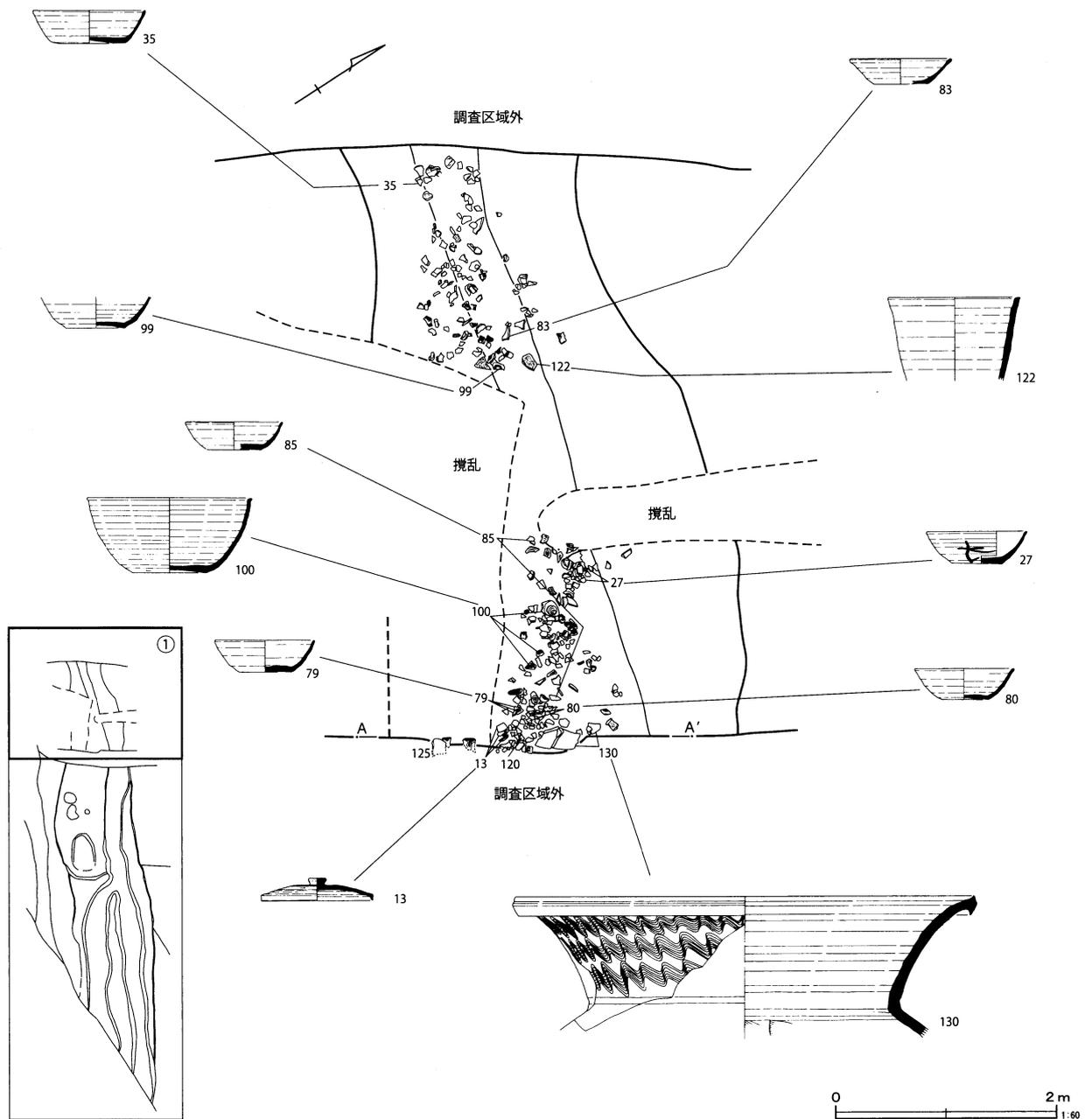
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
81	須恵器	椀	(188)	5.7	(12.0)	D I J L	20	良好	暗灰	南比企産 口唇内面沈線巡る 体部下端回転ヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリか 内面自然釉厚くかかる No15・38 ZO-16・17G		
82	須恵器	無台椀	(157)	4.3	(9.4)	I J K L	25	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ ZO-16G		
83	須恵器	無台椀	(187)	6.1	(11.2)	H I J K	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内面：橙 No.4・10・29・36・48 ZO-17G	87-4	
84	須恵器	無台椀	(164)	5.2	(9.0)	E I J K	25	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No58・85 ZN-15G		
85	須恵器	無台椀	(158)	5.0	(7.1)	E H I J	15	普通	にぶい橙	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ ヘラ記号有り No92		
86	須恵器	高盤	-	3.6	-	E I J	70	良好	灰	南比企産 坏部外面に糸切り痕見える No118 ZN-15G		
87	須恵器	長頸瓶	(80)	2.9	-	I K	25	良好	灰白	湖西産 胎土精選 内面淡緑色の自然釉 フラスコ瓶or平瓶か No158 ZN-15G		
88	須恵器	長頸瓶	(80)	4.4	-	I K	15	良好	灰白	湖西産か 胎土精選 内外面に緑色の自然釉 ZO-17G		
89	須恵器	壺	(155)	9.8	-	E I J K	15	普通	灰	南比企産 No55 ZN-15G		
90	須恵器	フラスコ形瓶	-	16.6	-	I K	20	良好	灰白	東海産 外面自然釉 No28 ZO-16G		
91	須恵器	長頸瓶	-	13.3	7.6	I K	40	普通	灰白	湖西産 胎土精選 胴部下位回転ヘラケズリ No.2・3・5 ZN-15G		
92	須恵器	甕	(296)	7.4	-	E I J K	10	普通	灰	南比企産 頸部平行叩き痕僅かに残る No36		
93	須恵器	大甕	(518)	13.7	-	G I J L	20	普通	褐灰	破片の一部を砥石に転用 南比企産 櫛描波状文 (11本組) 3段、一部4段 No144 SD-12No525・541・542・682 ZO-14・15G		
94	須恵器	甕	-	13.8	-	E I J	20	普通	灰	南比企産 No27・69 ZO-16・17G		
95	須恵器	大甕	-	10.9	-	I J	15	良好	黒灰	南比企産 頸部沈線区画 (3条) + 櫛描波状文 (9本単位、3条) ZN-15G		
96	須恵器	大甕	-	13.5	-	E I J K	5	普通	灰白	南比企産 頸部沈線+櫛描平行線文 (4条) No13 ZO-16G		
97	須恵器	短頸壺	-	7.9	(17.9)	E I J K	20	普通	灰	胴部下端+底部回転ヘラケズリ 内面自然降灰 No37 ZO-16G		
98	須恵器	壺	-	8.8	10.0	E J K	70	良好	灰	南比企産 No76 ZN-15G		
99	須恵器	鉢	(307)	8.2	-	E G I J	20	普通	灰	南比企産 断面の内側面を砥石に転用 ZO-16G		
100	須恵器	大甕	-	-	-	E I K	5	良好	灰白	東海産 (湖西産か) 胎土精選 外面沈線に区画された突帯あり 自然釉 No10		
101	須恵器	壺	-	9.9	-	A E I J K	5	普通	灰	南比企産 平行叩き+無文当て具 ZO-16G		
102	須恵器	鉢	(318)	6.5	-	E I J	10	普通	灰	南比企産 ZN-15G		
103	須恵器	鉢	(328)	11.2	-	A E G	20	普通	灰	南比企産 胴部平行叩き No152 ZN-15G		
104	須恵器	鉢	-	13.3	(16.0)	G I J	10	普通	灰	南比企産 胴部平行叩き後カキ目 No75・77・85 ZN-15G		
105	瓦	丸瓦	-	-	-	E G J	5	普通	灰白	残存長10.1cm 厚さ2.9cm 残存幅12.8cm 南比企産 凸面ヘラケズリ 凹面布目+指ナデ No74 ZN-15G	87-5・6	
106	土製品	紡錘車	-	-	-	H I	100	普通	橙	直径4.2~4.3cm 孔径0.7cm 厚さ1.1cm 重さ2883g 土師質 白針なし	88-1	
107	石製品	紡錘車	-	-	-	-	100	普通	灰白	上径2.8cm 底径3.7cm 孔径0.6~0.7cm 石材は凝灰岩と思われる 色調：灰白 ほぼ完存 重さ1986g No41	88-2	
108	須恵器	紡錘車	-	-	-	I J	25	普通	灰	径 (6.1cm) 厚さ0.7cm 南比企産 須恵坏を転用 底部回転糸切り痕残る No132	87-7・8	
109	土製品	土錘	-	-	-	G H I J	95	普通	褐灰	長さ6.9cm 最大径2.2cm 孔径0.8cm 重さ2663g 在地産 白針含む No46	88-3	
110	土製品	土錘	-	-	-	I J	100	普通	褐灰	長さ4.1cm 最大径0.9cm 孔径0.4cm 重さ3.35g 下端僅かに欠く 白針含む ZN-15G	88-4	
111	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	-	長さ12.9cm 最大幅8.6cm 厚さ4.5cm 重さ436.38g 凝灰岩製か 上部欠損 底面を除く四面を使用 No104 ZN-15G	88-5	

想定しておきたい。

第12号溝跡 (第221図)

第12号溝跡はZM-11、ZN-14・15、ZO-14~16グリッドに位置する。第7号溝跡の南側約2mにはほぼ並行してあり、北西から南東方向に延びる。検出長22.20m、延長距離は約52mになる。途中、

調査できない部分があり、正確には同一溝跡という保証はないが、遺物の出土状況や延長方向から同一溝跡と判断して良い。上端幅は1.23~4.87m、下端幅0.30~1.26m、確認面からの深さ0.06~0.34mである。西側が幅狭で、東に行くに従って幅を広げる。東側では二条に分流している。埋土は黄



第222図 第12号溝跡遺物出土状況（1）

灰色粘土ブロックを多量に含む褐色～暗褐色土で粘土質であった。

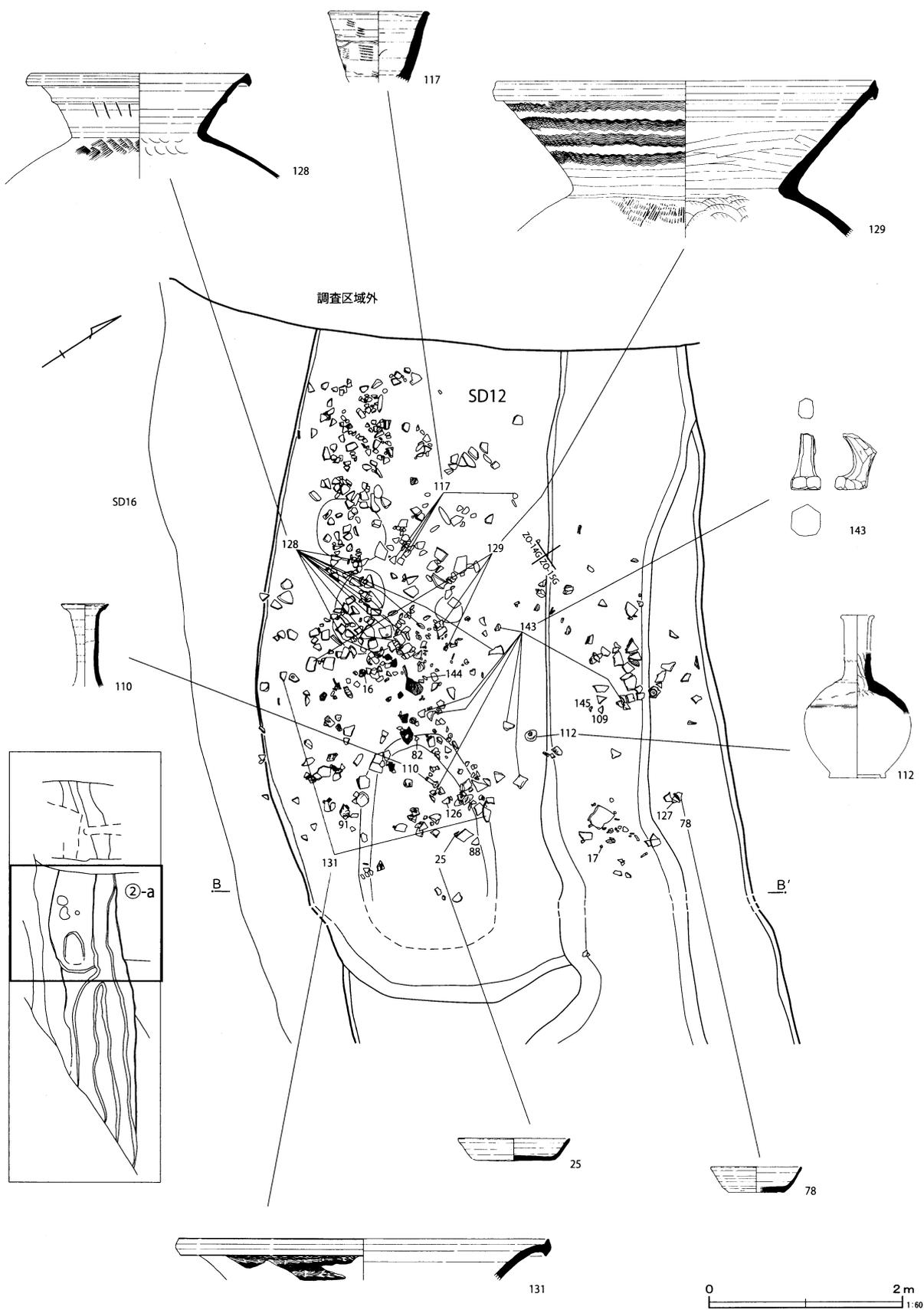
遺物は溝跡全体から多量に出土した。西側調査区では比較的須恵器壺・甕類が目立った。短頸壺脚部（獣脚）が2点出土したのもこの一角である。溝の中では中央付近により多く分布していた。

東側調査区では非常に多量の遺物、特に須恵器坏類が多量に出土した。須恵器が主体であるが、土師器もあり、漆パレットに使用したと思われる

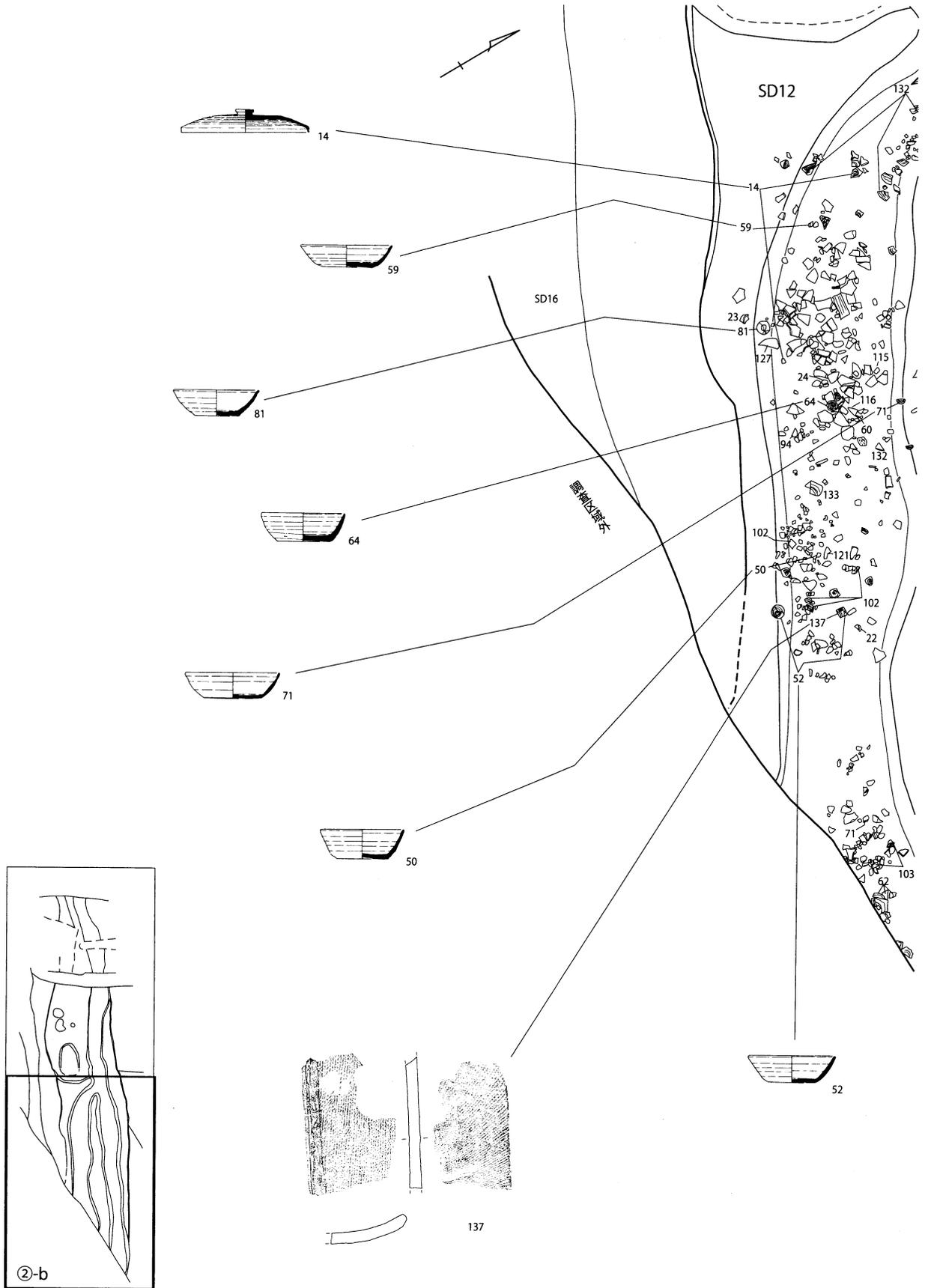
坏や、窠描文字のある平瓦、馬の歯等が出土しており、注目される。

出土遺物は土師器坏・皿・椀、須恵器蓋・高台付坏・坏・無台椀・皿・長頸瓶・水瓶・平瓶・コップ形土器・鉢・鉄鉢形・磨鉢・円面硯・壺・甕・短頸壺、平瓦、漆パレットに転用された土師器坏、紡錘車、土錘、鞆羽口など多種多様である（第225図～233図）。

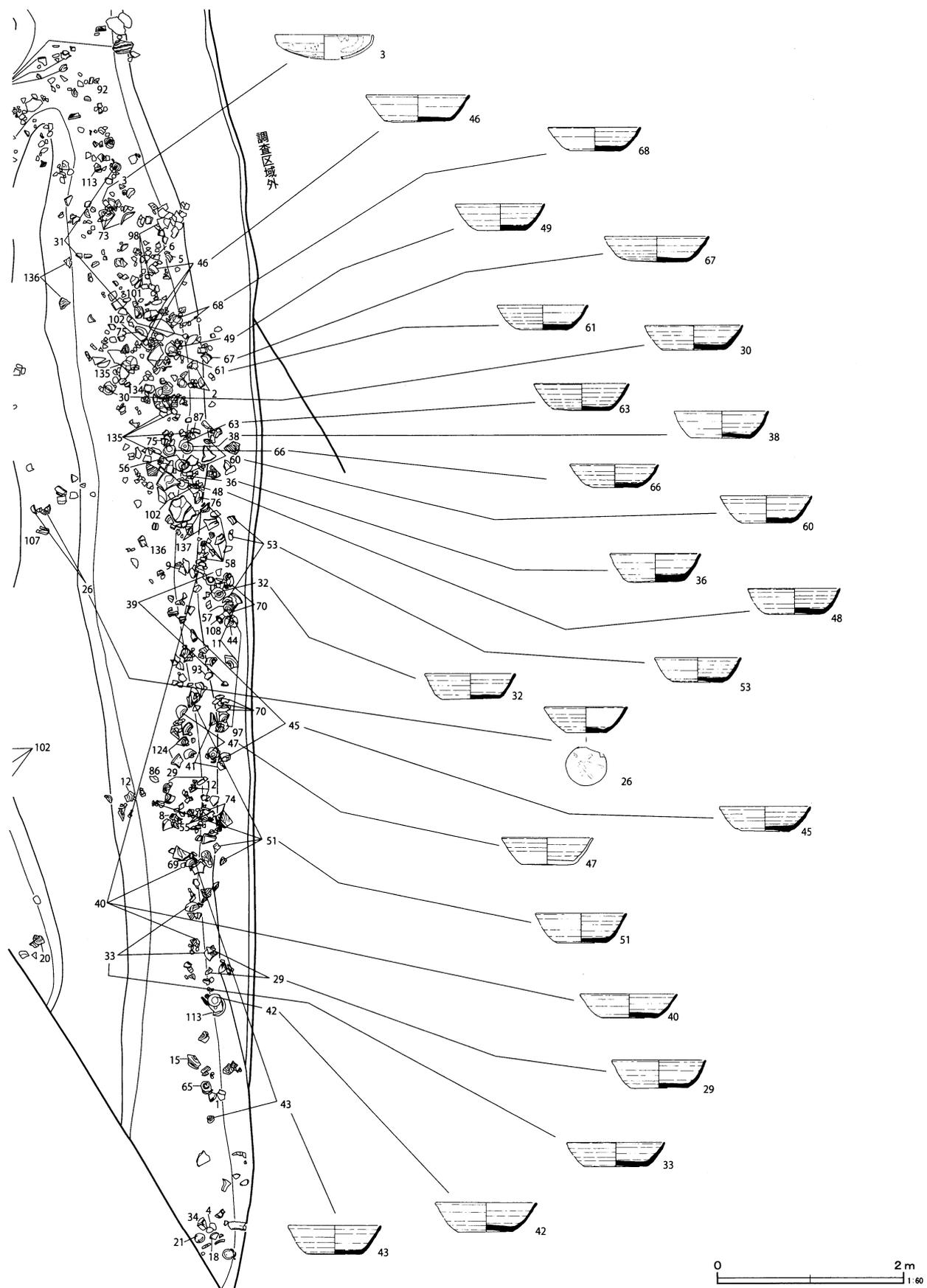
1～10は土師器坏類である。1は北武蔵型暗文

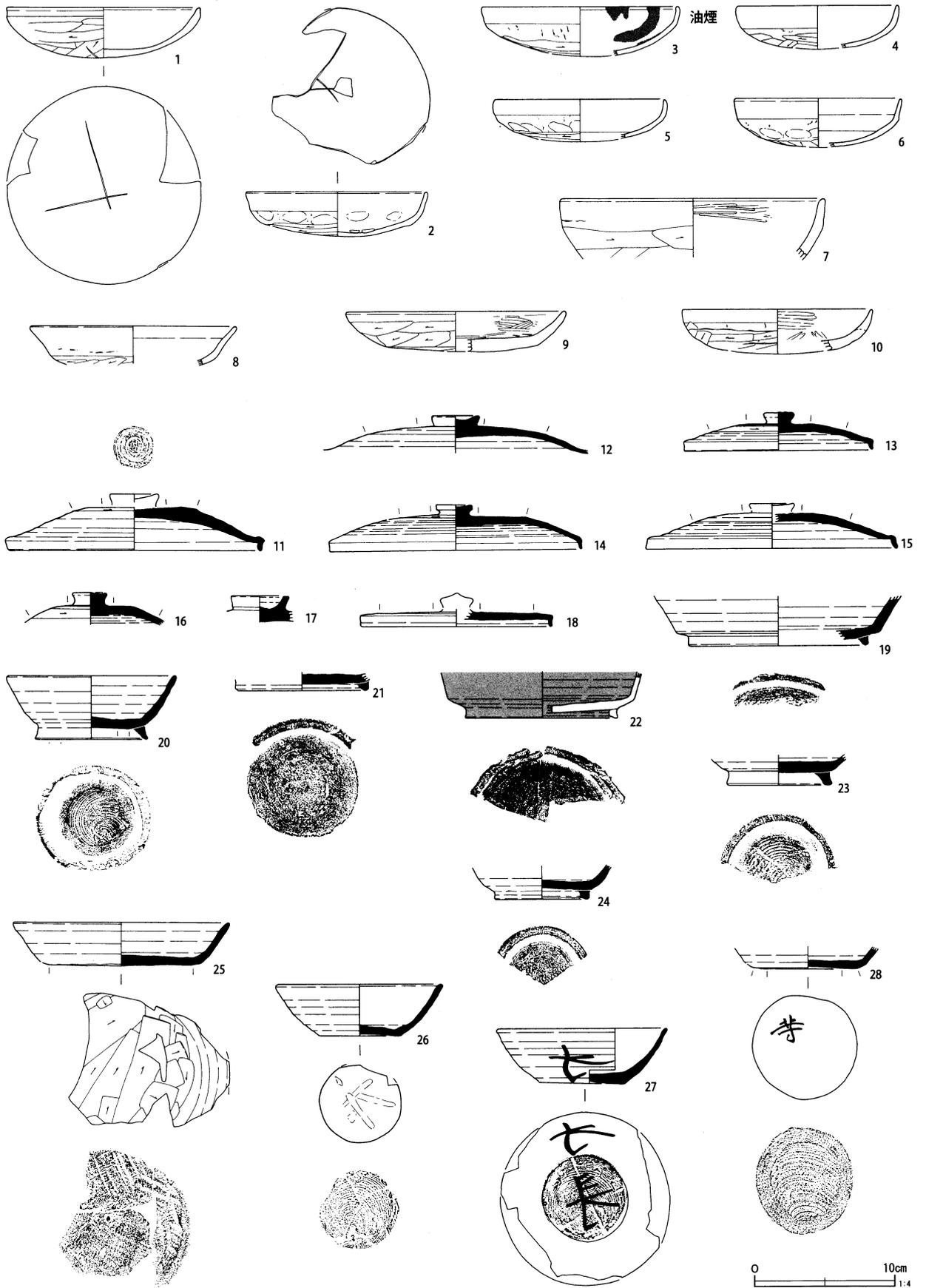


第223図 第12号溝跡遺物出土状況(2)

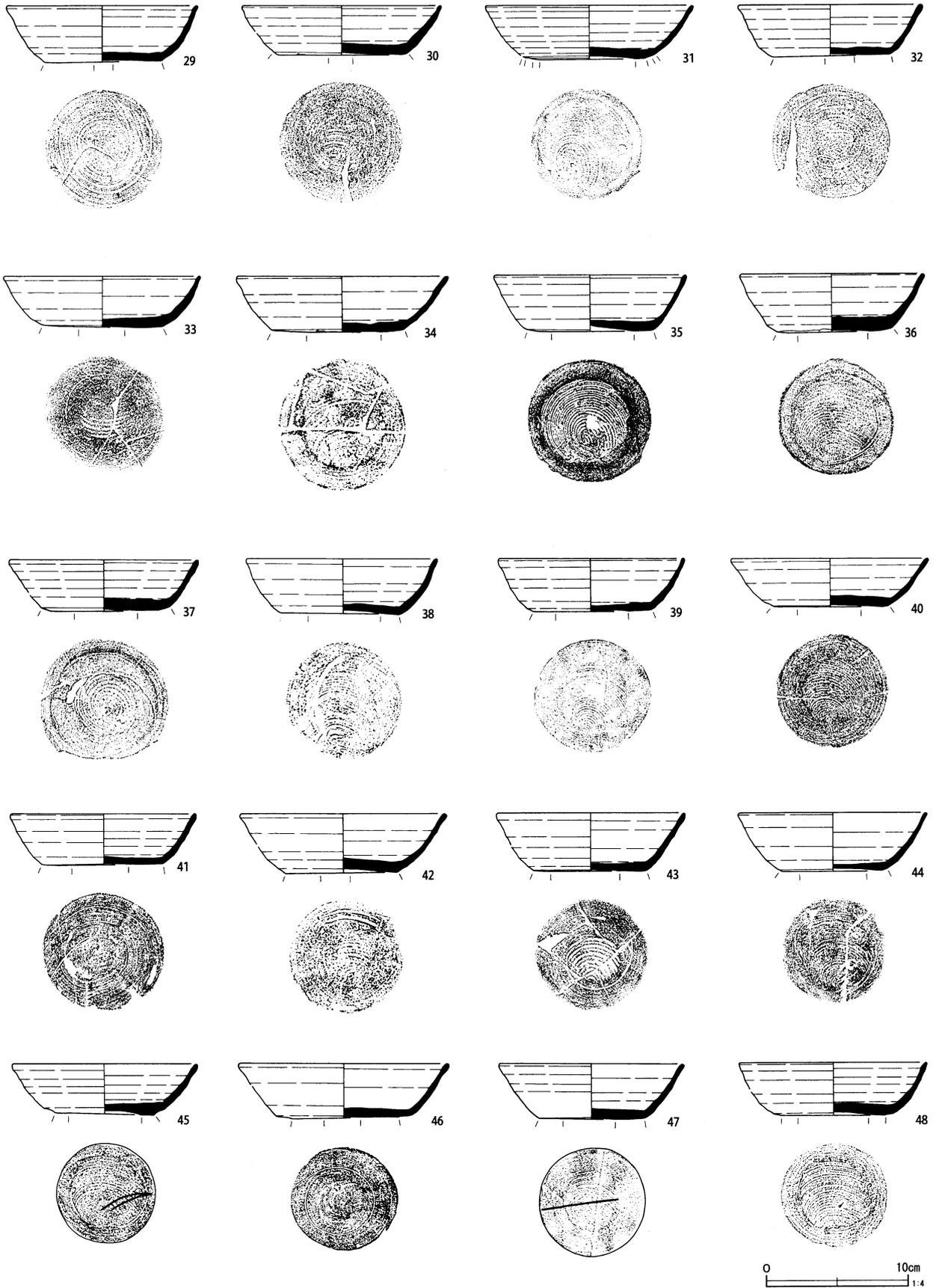


第224図 第12号溝跡遺物出土状況 (3)

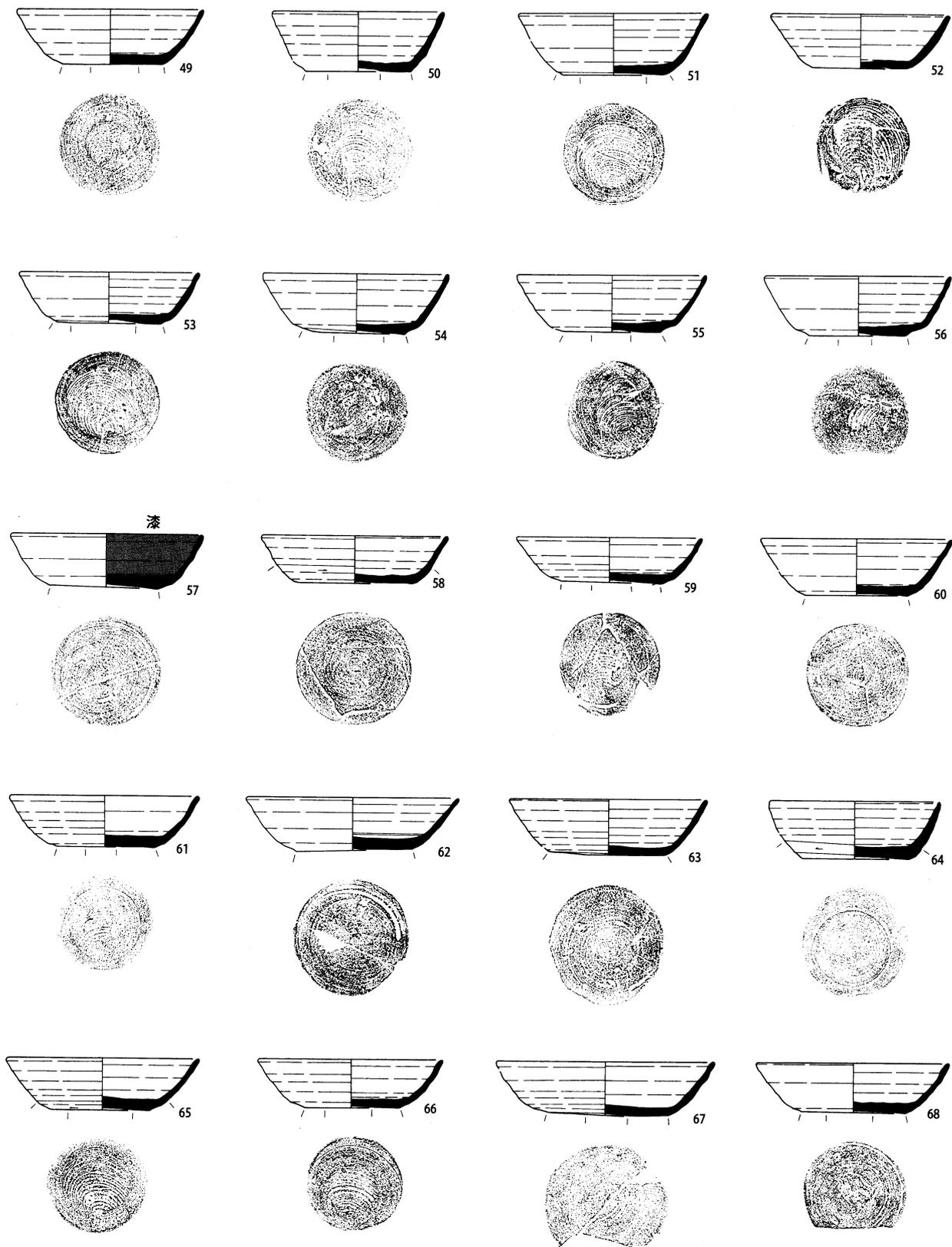




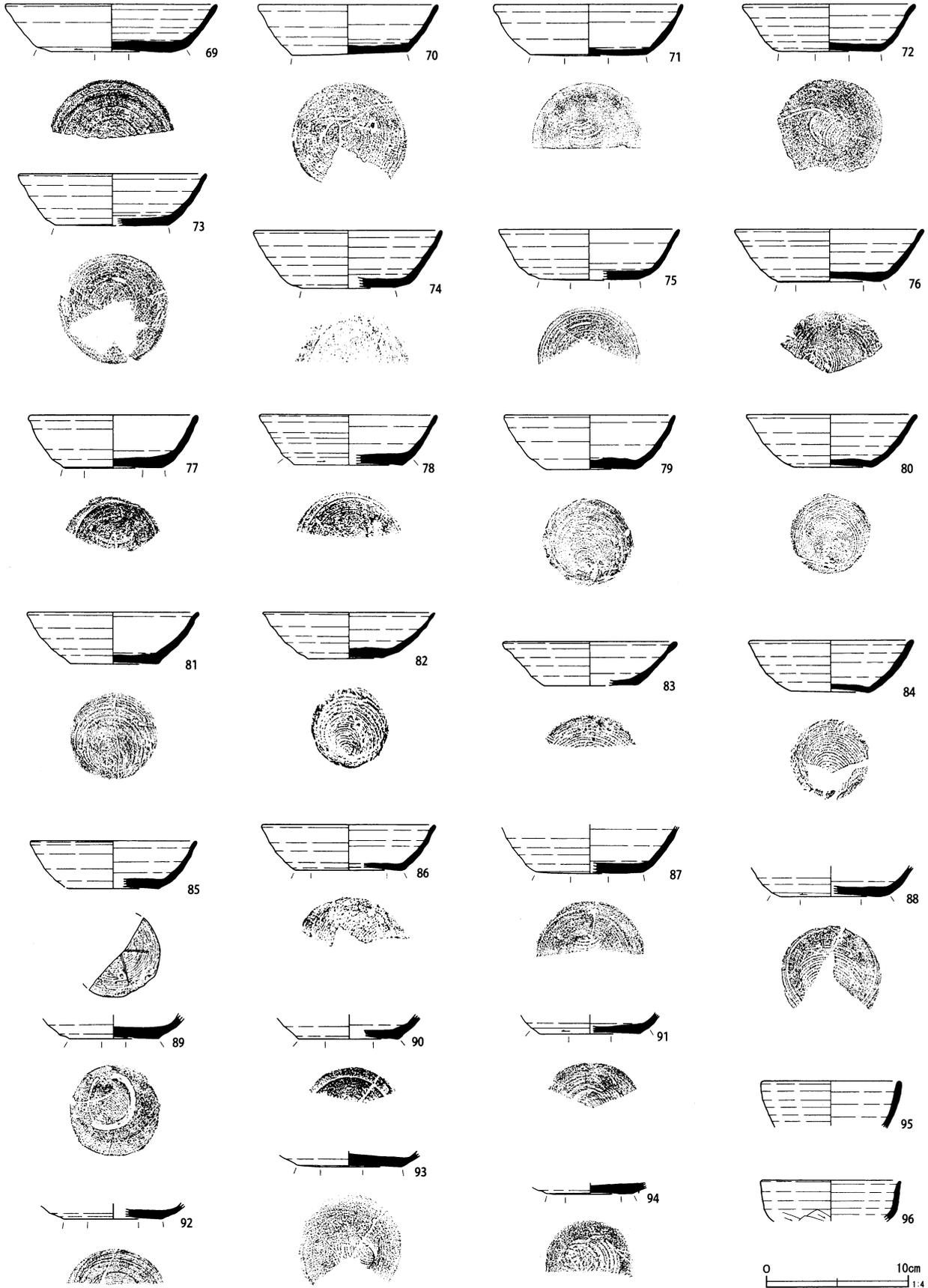
第225図 第12号溝跡出土遺物（1）



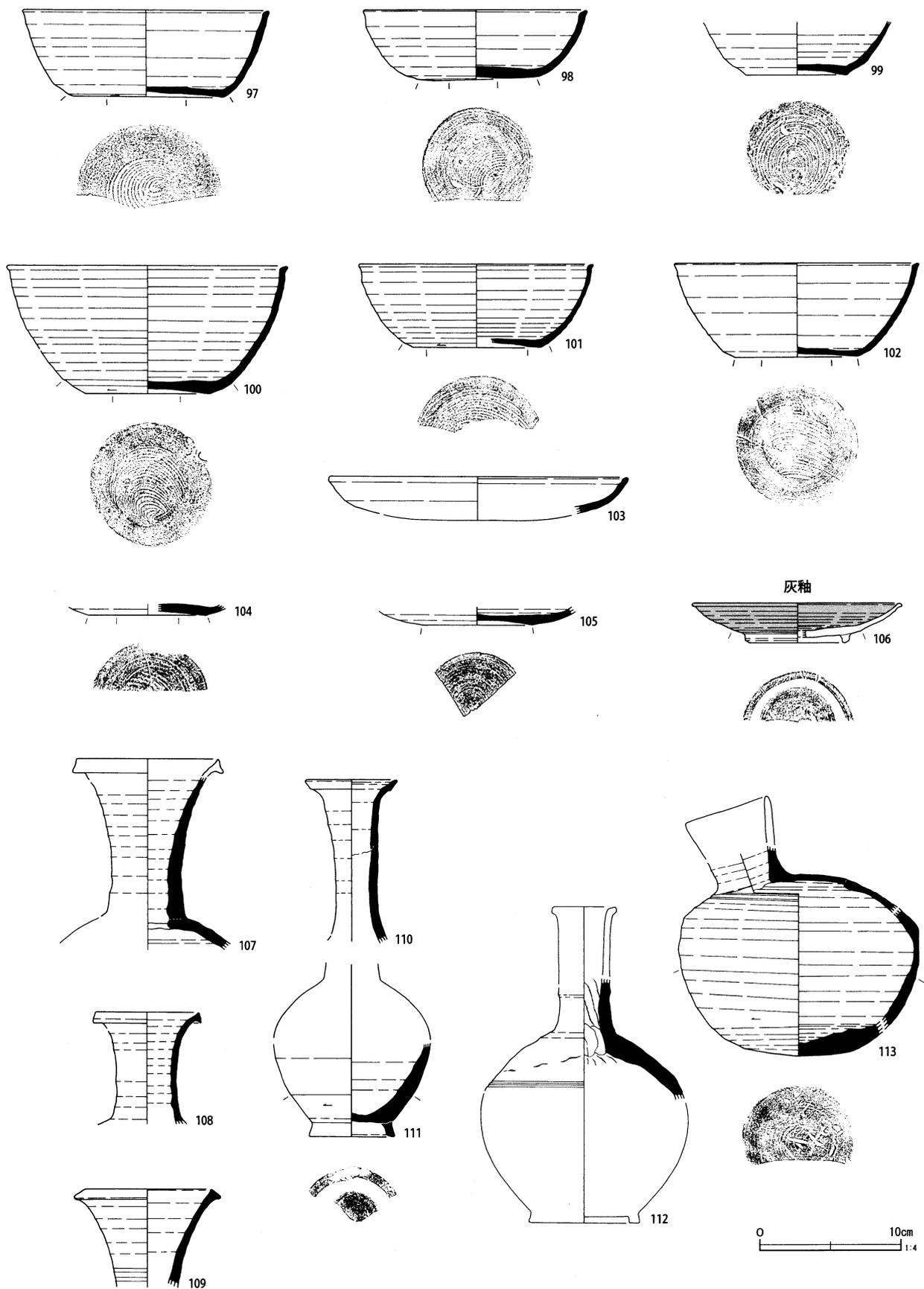
第226図 第12号溝跡出土遺物 (2)



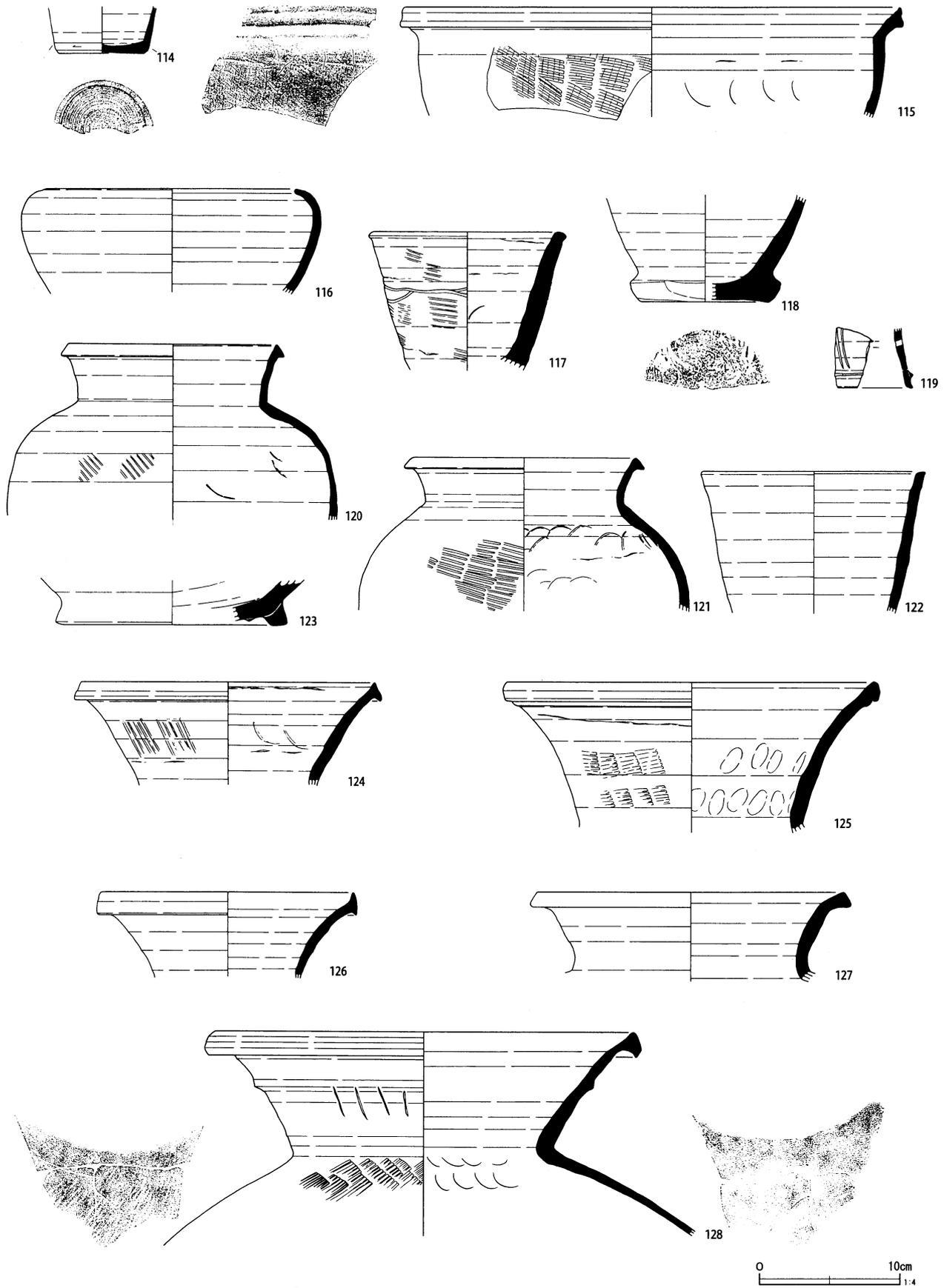
第227图 第12号沟迹出土遗物(3)



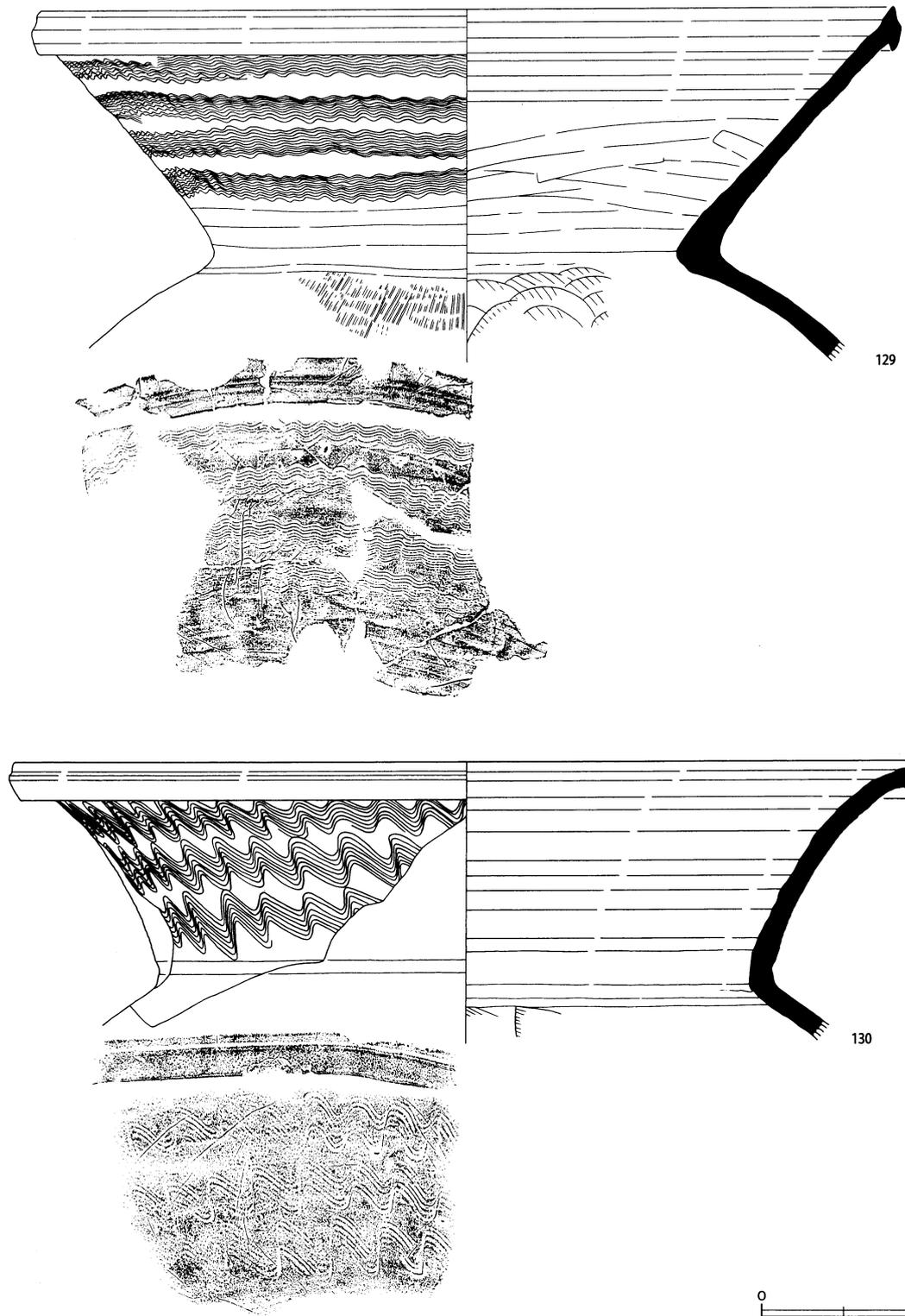
第228図 第12号溝跡出土遺物（4）



第229图 第12号沟迹出土遗物 (5)



第230図 第12号溝跡出土遺物（6）

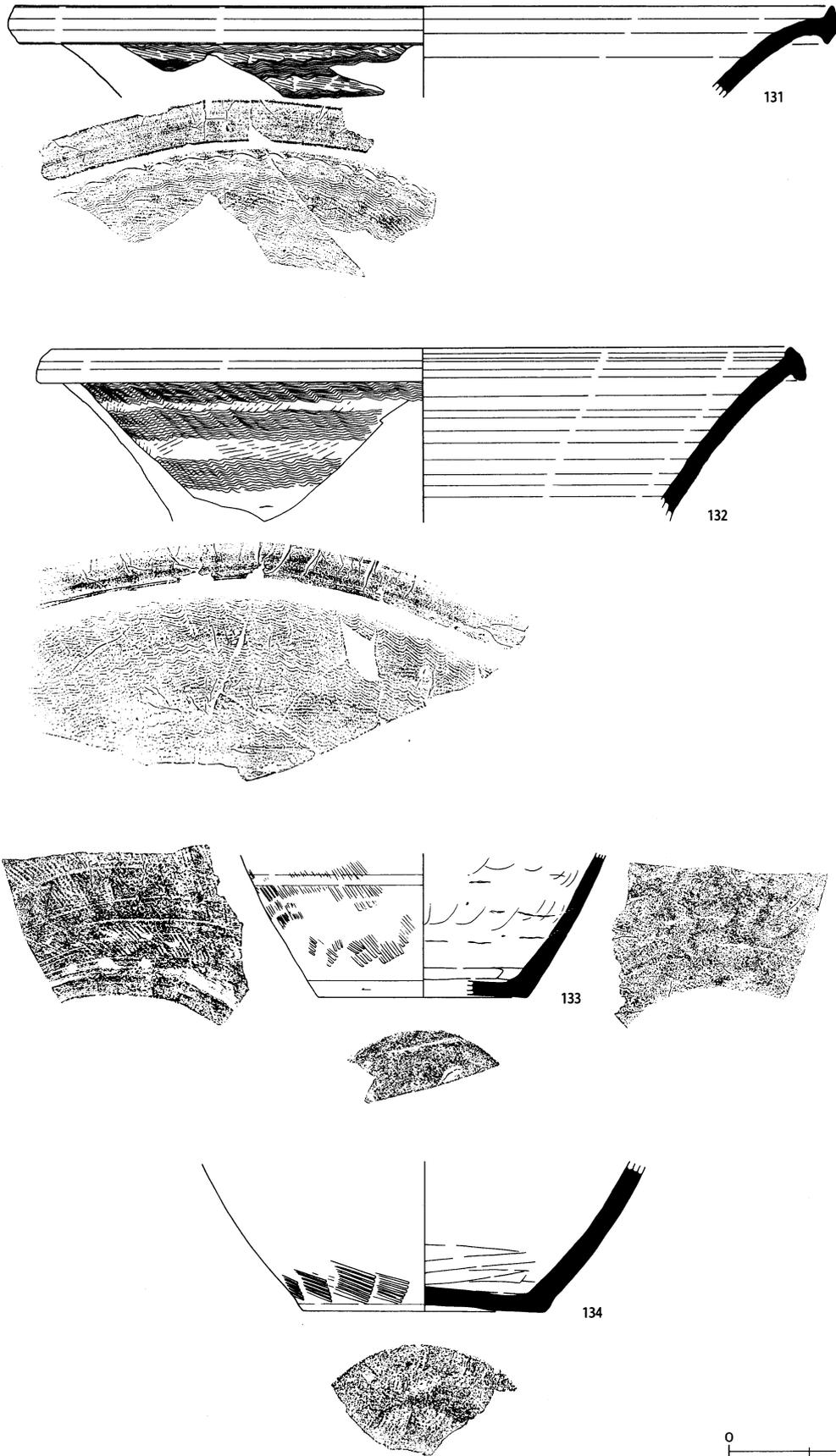


第231図 第12号溝跡出土遺物（7）

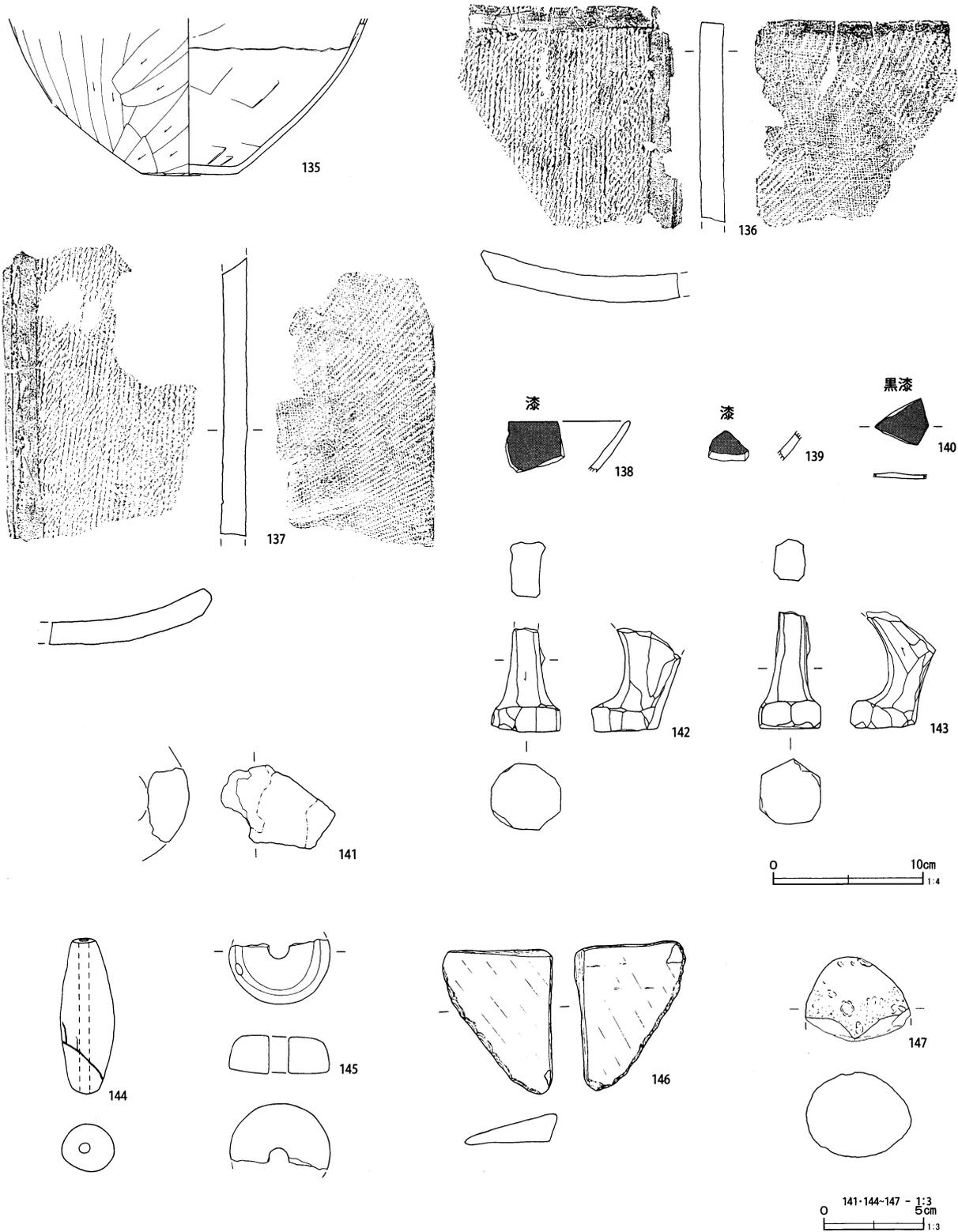
坏と思われるが、内面風化しており暗文は不明。
外面に線刻がある。2～5は北武蔵型坏である。
2は内面に線刻、3は油煙が付着する。9・10は

第7号溝跡からも出土した系譜不明確な厚手の
皿である。

11～18は須恵器蓋。18は白色針状物質が含まれ



第232図 第12号溝跡出土遺物(8)



第233図 第12号溝跡出土遺物（9）

ない。壺蓋である。19～24は高台付坏である。21は末野産か。22は南比企産のロクロ土師器の疑いがある。ロクロ整形され、底部は回転ヘラケズリ

調整。全面黒色処理されている可能性がある。

25～96は須恵器坏。25は口径15cmを超える大型坏で、底部は手持ちヘラケズリ調整される。南比

第54表 第12号溝跡出土遺物観察表 (第225~233図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	138	35	-	CEHI	90	普通	浅黄橙	北武蔵型暗文坏か 内面風化し暗文不明瞭 底部外面線刻		88-6
2	土師器	坏	(127)	32	-	CEHI	50	普通	橙	北武蔵型坏 内面「×」線刻(ヘラ記号) No1033・1037		
3	土師器	坏	139	34	-	CHIK	60	普通	橙	北武蔵型坏 油煙付着 No1134 ZO-15・16G		89-1・2
4	土師器	坏	(114)	30	-	CEGI	30	普通	橙	北武蔵型坏 風化 No160		
5	土師器	坏	(120)	28	-	CEHIK	20	普通	橙	北武蔵型坏 No1105 ZO-15・16G		
6	土師器	坏	(118)	34	-	CHI	40	普通	橙	模倣坏か 北武蔵の土 No1109 ZO-15・16G		
7	土師器	椀	(186)	42	-	CI	20	普通	淡黄	角閃石多量 内面ミガキ 系譜不明確 ZO-15G		
8	土師器	皿	(146)	28	-	CEHI	25	普通	にぶい赤褐	北武蔵型皿 No215 ZO-15・16G		
9	土師器	皿	(156)	28	10.9	CEIK	70	普通	にぶい黄橙	白っぽい胎土 底部平底風 厚手 内面ミガキ 角閃石多 系譜不明確 内面:橙 No956 ZO-15・16G		88-8
10	土師器	皿	(134)	28	-	CHI	40	普通	にぶい黄橙	内面ミガキ 角閃石多量 接合痕明瞭 系譜不明確 ZO-15・ 16G ZU-15G		
11	須恵器	蓋	17.9	3.1	-	IJKL	80	良好	にぶい赤褐	南比企産 重量感有り No269・277 ZO-15G ZU-15G		88-7
12	須恵器	蓋	-	2.7	-	HIJ	30	普通	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ つまみ径3.4cm No221・ 223・227 ZO-15・16G		
13	須恵器	蓋	(134)	2.7	-	IJK	30	良好	灰	南比企産 高台付蓋 No149 ZO-15・16G		
14	須恵器	蓋	(180)	3.2	-	EIJ	35	普通	灰	南比企産 つまみ径2.6cm No797・1218 ZO-15・16G		
15	須恵器	蓋	(178)	2.6	-	EIJK	20	普通	灰	南比企産 内面自然降灰 つまみ欠 No177 ZO-15・16G		
16	須恵器	蓋	-	2.4	-	EIJK	70	普通	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) つまみ径 2.5cm No650 ZO-15・16G		
17	須恵器	蓋	-	1.9	-	HIJ	85	普通	灰褐	南比企産 つまみ部分 つまみ径4.1cm No555 ZO-15・16G		
18	須恵器	蓋	(135)	1.2	-	IK	25	良好	灰	東金子産? 白針なし 壺蓋 No159 ZO-15・16G		
19	須恵器	高台付坏	-	3.6	(12.5)	EIJK	15	普通	灰	南比企産 器種不明確 底部調整不明 ZO-15G		
20	須恵器	高台付坏	(120)	4.5	(8.0)	EIJK	30	良好	青灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ ヘラ記号「×」 No236 ZO-15・16G		
21	須恵器	高台付坏	-	1.2	(9.0)	ABCGHIK	70	不良	にぶい黄橙	未野産か 底部回転ヘラケズリ No157 ZO-15・16G		
22	須恵器	高台付坏	-	3.3	(10.8)	IJ	25	不良	黒	南比企産 底部回転ヘラケズリ 内外面黒色処理か No928 SJ7(ZN-15G)と接合		
23	須恵器	高台付坏	-	2.2	(7.5)	AHIJK	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号有り No756 ZO-15・ 16G		
24	須恵器	高台付椀	-	2.4	(6.6)	EIJ	20	普通	暗灰	南比企産 底部中央ナデか No802 ZO-15・16G		
25	須恵器	坏	15.2	3.1	10.2	EJ	20	普通	灰	南比企産 底部手持ちヘラケズリ No705 ZO-15・16G		
26	須恵器	坏	11.7	3.7	5.8	IJKL	75	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り 底部不明墨書有り「我」? No 945 ZO-15・16G		89-3・4
27	須恵器	坏	12.1	3.9	6.2	EJKL	70	普通	灰白	南比企産 墨書:底部「長」:側面「長?」 底部回転糸切り No82・90		89-5・6
28	須恵器	坏	-	1.6	7.4	CEGIJ	80	良好	灰白	南比企産 底部墨書「芋」か 内底径7.8cm 底部回転糸切り 後周辺回転ヘラケズリ ZM-12G		88-9
29	須恵器	坏	13.3	4.0	8.2	EIJ	95	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径8.2 cm No183・189・221・222 ZO-15・16G		89-8
30	須恵器	坏	(139)	3.5	8.7	HIJL	60	普通	灰	南比企産 底部静止? 糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズ リ No1066 ZO-15・16G		89-7
31	須恵器	坏	(145)	3.8	7.9	IJK	40	普通	灰白	南比企産 内底径9.0cm 底部回転糸切り後周辺+体部下端回 転ヘラケズリ No1043・1143 ZO-15G		
32	須恵器	坏	12.9	3.7	8.3	EGHJL	80	良好	にぶい褐	南比企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ 内底径8.5cm No279 ZO-15・16G		89-9
33	須恵器	坏	13.8	3.6	8.4	EGJ	90	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 全体に磨 減(使用による) No189・194 ZO-15・16G		90-1
34	須恵器	坏	(148)	3.9	9.4	EIJKL	70	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径9.8 cm No161 ZO-15・16G		90-2
35	須恵器	坏	(134)	4.0	8.8	EIJ	60	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径9.2 cm No154 ZO-15・16G		
36	須恵器	坏	12.8	4.0	8.0	EIJK	85	良好	灰	南比企産 内底径8.2cm 底部回転糸切り後周辺手持ちヘラケ ズリ No1015 ZO-15・16G		90-3
37	須恵器	坏	(132)	3.6	7.7	EIJK	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ ZO-15G		90-4
38	須恵器	坏	13.4	3.9	8.3	ACEHIJL	95	不良	にぶい黄橙	南比企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ 内底径8.1cm No1012 ZO-15・16G		90-5
39	須恵器	坏	13.0	3.7	8.4	EIJK	90	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No249・ 252・284 ZO-15・16G ZU-15G		90-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
40	須恵器	坏	138	44	80	C G J	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ 内底径8.5cm No192・296・958 ZO-15・16G		90-7
41	須恵器	坏	129	36	86	E I J L	85	普通	紫灰	南比企産 内底径8.3cm 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ No240・242 ZO-15・16G		90-8
42	須恵器	坏	(144)	42	80	E I J K	60	普通	灰	南比企産 底部糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径8.6cm No180 ZO-15・16G		90-9
43	須恵器	坏	(132)	41	80	E I J	75	普通	灰	南比企産 内底径7.9cm 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No102・169・204 ZO-15・16G		90-10
44	須恵器	坏	131	41	71	C E H I J	70	普通	灰	南比企産 内底径7.6cm 底部回転糸切り後周辺+体部下端回 転ヘラケズリ No274 ZO-15・16G		91-1
45	須恵器	坏	127	36	70	E J	70	普通	灰	南比企産 内底径8.2cm 底部ヘラ記号か 底部回転糸切り後 周辺回転ヘラケズリ No239・259 ZO-15・16G		91-2
46	須恵器	坏	146	38	93	I J K	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ ケズリ径 7.6cm 内底径9.3cm No1079・1100 ZO-15・16G		91-3
47	須恵器	坏	129	38	75	H I J	95	普通	灰	南比企産 磨減度は弱い 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ ロクロ左回転 内底径7.5cm H IV期 ヘラ記号 No233・ 251・261 ZO-15・16G ZU-15G		91-4
48	須恵器	坏	(132)	37	74	E G I J K	70	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径8.6 cm No985 ZO-15・16G		91-5
49	須恵器	坏	127	37	70	E I J K L	85	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径7.7 cm 内外面火摺痕 No1069 ZO-15・16G		91-6
50	須恵器	坏	(117)	41	73	E I J L	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No890 ZO-15・16G		
51	須恵器	坏	(128)	42	69	E I J K	70	普通	灰	南比企産 内底径7.8cm 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転 ヘラケズリ ヘラ記号あり No208・247・286・287 ZO-15・16G		91-7・8
52	須恵器	坏	121	38	65	D E J	100	普通	灰	南比企産 底部「×」ヘラ記号 回転糸切り 内底径6.7cm No900・913		91-9
53	須恵器	坏	123	34	76	E I J	80	良好	暗灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ 内底径8.0cm No276・970・971 ZO-15・16G		91-10
54	須恵器	坏	125	40	70	E I J	70	普通	灰	南比企産 内底径8.1cm 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ ZO-15G		92-1
55	須恵器	坏	(129)	39	67	G I J K	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺手持ちヘラケズリ 内底径 8.3cm No210・290・294 ZO-15・16G		
56	須恵器	坏	127	40	68	E I J K	75	普通	灰	南比企産 内底径8.6cm 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No1014 ZO-15・16G		92-2
57	須恵器	坏	(131)	37	74	D I J L	75	普通	灰白	南比企産 白針含む 内底径9.1cm 内面ほぼ全面暗茶褐色の 漆被膜付着 外面にも部分的に漆付着 漆パレットとして使 用 No275 ZO-15・16G		92-6・7・8
58	須恵器	坏	127	32	79	E I J L	80	普通	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) 内底径8.0cm No962・968・970・973 ZO-15・16G		92-3
59	須恵器	坏	127	32	69	E I J K	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径8.4 cm No739 ZO-15・16G		92-4
60	須恵器	坏	(134)	38	70	C D E I J	65	良好	青灰	南比企産 内底径8.2cm 底部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) No827・988・1024 ZO-15・16G		92-5
61	須恵器	坏	129	35	66	E H J	40	普通	灰	南比企産 内底径8.1cm 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No1068 ZO-15・16G		92-9
62	須恵器	坏	(145)	37	81	A D E J K	70	良好	青灰	南比企産 内底径9.7cm 底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 内外面火摺痕 No1250 ZO-15・16G ZU-15G		93-1
63	須恵器	坏	(134)	38	80	E J K L	40	普通	灰	南比企産 内底径8.4cm 底部全面回転ヘラケズリ No1011 ZO-15・16G		93-2
64	須恵器	坏	(117)	40	74	I J K	70	普通	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ No809 ZO-15・16G		93-3
65	須恵器	坏	(131)	36	68	A I J K	45	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) No172 ZO-15・16G		
66	須恵器	坏	127	33	66	I J K	80	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径8.0 cm No1010		93-4
67	須恵器	坏	(147)	37	84	E I J K	50	普通	灰白	南比企産 底部糸切り後周辺回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 内底径9.3cm No251・1038 ZO-15・16G		
68	須恵器	坏	131	33	72	E G H J	60	不良	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No1073・ 1074 ZO-15・16G		93-5
69	須恵器	坏	(148)	33	(86)	E I J K	45	普通	青灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ H II期 ケズリ径10.4cm 内底径10.0cm No203 ZO-15・16G		
70	須恵器	坏	125	35	81	E H I J L	90	普通	灰	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ 内底径8.5cm No245・ 246・248・274・278 ZO-15・16G		93-6
71	須恵器	坏	(132)	36	80	E I J	35	良好	紫灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ No819・ 1233 ZO-15・16G		
72	須恵器	坏	(120)	33	72	E H I J	55	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ(ロクロ右回転) ZO-15G		

銭塚遺跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
73	須恵器	坏	131	36	80	E I J K L	75	普通	褐灰	南比企産 内底径8.4cm 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)		93-7
										No1132・1133 ZO-15G		
74	須恵器	坏	131	40	66	E I J K	50	普通	灰	南比企産 内底径7.8cm 底部回転ヘラケズリ (ロクロ左回転)		
										No210・288 ZO-15・16G ZU-15G		
75	須恵器	坏	(125)	36	(70)	E I J K	55	普通	灰	南比企産 内底径8.6cm 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ		93-8
										H IV期 No1008・1081 ZO-15・16G		
76	須恵器	坏	(132)	37	(74)	C E I J	30	普通	灰	南比企産 内底径 (8.3) cm 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ やや薄手、軽量感あり		
										No982		
77	須恵器	坏	(118)	37	(71)	I J K	30	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ ヘラ記号有り		
										ZO-15G		
78	須恵器	坏	(123)	36	(76)	E I J K	25	普通	灰	南比企産 底部+体部下端 回転ヘラケズリ (ロクロ左回転)		
										No543 ZO-15・16G		
79	須恵器	坏	120	39	63	E I J	80	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り 内外面鉄分付着		93-9
										No141・143 ZN-12G		
80	須恵器	坏	(119)	37	55	A E H I J	50	不良	にび黄緑	南比企産 底部回転糸切り 内底径5.8cm		
										No142 ZM-12G		
81	須恵器	坏	120	36	62	C H I J	95	不良	灰黄褐	南比企産 底部回転糸切り 内底径6.0cm		93-10
										No757 ZO-15・16G		
82	須恵器	坏	120	33	52	E J L	50	良好	青灰	南比企産 底部回転糸切り		94-1
										No660・665 ZO-15・16G		
83	須恵器	坏	(120)	30	(66)	D J K	30	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号有り 全体に歪む		
										No49		
84	須恵器	坏	115	36	55	E H I J	75	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り		94-2
										No5		
85	須恵器	坏	116	33	66	I J K	50	普通	灰	南比企産 底部ヘラ記号 回転糸切り 内底径6.6cm		
										No75・135		
86	須恵器	坏	(121)	32	(76)	E J K	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺手持ちヘラケズリ		
										No230 ZO-15・16G		
87	須恵器	坏	-	34	(75)	E J K	35	普通	灰	南比企産 底部ヘラキズ (ヘラ記号?) 回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		
										No1225 ZO-15・16G		
88	須恵器	坏	-	22	70	E J K	30	良好	青灰	南比企産 内底径7.7cm 底部回転糸切り後周辺+体部回転ヘラケズリ		
										ヘラ記号有り No705 ZO-15・16G		
89	須恵器	坏	-	18	63	I J K	70	良好	灰	南比企産 底部ヘラ記号 回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)		
										ZO-15G		
90	須恵器	坏	-	18	(70)	D J	20	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ ヘラ記号有り		
										ZO-15G		
91	須恵器	坏	-	14	(70)	E I J K	30	普通	灰	南比企産 内底径 (7.4) cm 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ		
										ヘラ記号有り No695 ZO-15・16G		
92	須恵器	坏	-	11	(70)	E I J K	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		
										ヘラ記号有り? No1172 ZO-15G		
93	須恵器	坏	-	(11)	75	I J K	80	普通	灰	南比企産 内底径8.4cm 底部ヘラ記号 回転糸切り後周辺ヘラケズリ		
										No264 ZO-15・16G		
94	須恵器	坏	-	08	60	D E I J	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		
										ヘラ記号有り? No846 ZO-15・16G		
95	須恵器	坏	(96)	32	-	I J K	20	普通	灰	南比企産 坏Gか		
										ZO-15G		
96	須恵器	坏	(98)	29	-	E I	10	普通	暗灰	坏G 末野産か 底部手持ちヘラケズリ		
										ZM-12G		
97	須恵器	無台碗	173	61	104	E I J K	45	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ		94-3
										No244・274 ZO-15・16G		
98	須恵器	碗	157	49	84	I J K	60	良好	黒灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		94-4
										No1096・1113 ZO-15・16G		
99	須恵器	無台碗	-	37	71	I J K	70	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り		
										No71		
100	須恵器	無台碗	(199)	90	88	E I J K	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ (ロクロ右回転)		
										No101・110・111		
101	須恵器	無台碗	(165)	59	(90)	D E G J	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺+体部下端回転ヘラケズリ		
										No1082 ZO-15・16G		
102	須恵器	碗	173	65	87	E I J K	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		94-5
										No231・877・905・937・983・1222・1229・1235 ZO-15・16G		
103	須恵器	盤	(210)	26	-	I J	10	普通	青灰	南比企産 口縁内面に凹線		
										No1244・1248		
104	須恵器	無台碗か	-	08	(84)	D E G K	20	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ		
										ヘラ記号有り? ZO-15・16G		
105	須恵器	皿?	-	13	(74)	I J	25	普通	灰	南比企産 器種不明確 底部回転ヘラケズリ後ロクロナデか		
										ZO-15G		
106	灰釉陶器	皿	(147)	28	(74)	I K L	40	良好	灰白	東濃産か 腰部以下回転ヘラケズリ 灰釉刷毛塗り		94-6
										三ヶ月高台 ZO-15G		
107	須恵器	長頸瓶	-	121	-	G I	60	良好	明灰	東海産 (湖西産か)		
										No944		
108	須恵器	長頸瓶	(73)	80	-	I J	80	普通	明灰	南比企産 内外面自然降灰		
										No273 ZO-15・16G		
109	須恵器	長頸瓶	(88)	69	-	I K	45	普通	灰	南比企産か 降灰多い		
										No536 ZO-15・16G		
110	須恵器	水瓶	63	115	-	I J	100	普通	灰	南比企産		
										No719 ZO-15・16G No111と同一個体の可能性有		
111	須恵器	水瓶	-	65	(60)	I J	20	普通	灰	南比企産		
										ZO-15G No110と同一個体の可能性有		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
112	須恵器	水瓶か	-	-	-	I J K	90	良好	灰	南比企産 器壁厚くやや雑な作り 外面緑灰色の自然釉	No 558 ZO-15・16G	
113	須恵器	平瓶	-	148	-	I K	60	良好	灰白	東海産 (猿投産か) 天井部沈線2条 胎土精選 硬質で重量感	No1147・1227 SD-7No30 ZO-15・16G	94-7
114	須恵器	コップ形	-	33	(6.1)	E J L	50	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ	ZO-15G	
115	須恵器	鉢	(35.0)	7.9	-	I J K	5	普通	灰	南比企産 胴部平行 (擬斜格子) 叩き	No780 ZO-15・16G	
116	須恵器	鉄鉢形	(178)	75	-	I J K	15	良好	灰	南比企産	No825	
117	須恵器	磨鉢	134	98	-	I J K	30	普通	灰	南比企産 体部平行叩き ヘラ描き沈線2条	No385・403・417・459 ZO-13G	94-8
118	須恵器	磨鉢	-	76	(9.1)	E I J K	40	良好	灰	南比企産 内面磨滅 底部糸切り	ZM-12G	
119	須恵器	円面硯	-	-	-	I J K	5	良好	灰	南比企産 脚部片 沈線 (2条) + 透孔加飾	ZO-15G	
120	須恵器	壺	(149)	12.1	-	E I J K	20	良好	灰	南比企産 胴部平行叩き + 無文当て具	No147 ZM-12G	
121	須恵器	壺	(160)	10.9	-	I J K	20	良好	灰	南比企産 胴部平行叩き + 無文当て具 外面自然釉	No888・1127	
122	須恵器	壺?	(158)	10.0	-	E I K	30	普通	灰	外面自然釉 産地・器種不明 南比企産か 破面を二次的に磨っている	No73	
123	須恵器	壺	-	33	(15.4)	E I J K	20	普通	灰	南比企産 内面自然釉	ZO-15G	
124	須恵器	甕	(21.0)	7.4	-	E I J K	40	普通	灰	南比企産 頸部平行叩き + 無文当て具後ロクロナデ	No232・237 ZO-15・16G	
125	須恵器	甕	(26.3)	10.7	-	E I J K	20	普通	灰	南比企産 頸部外面平行叩き + 無文当て具後ロクロナデ	No 153	
126	須恵器	甕	(17.9)	6.1	-	E I K	20	良好	灰	南比企産か 白針なし	No717 ZO-15・16G	
127	須恵器	甕	(21.6)	6.3	-	E G H J	60	普通	灰	南比企産	No545・754・798 ZO-15・16G	
128	須恵器	大甕	296	15.0	-	I K	60	良好	灰	湖西産か 頸部縦位の線刻4本 胎土精良 薄甕	No452・460・461・474・506・591・609・610・612・628 ZO-15・16G	94-9
129	須恵器	大甕	(520)	21.8	-	I J K	25	不良	灰	南比企産 頸部11本組の櫛描波状文4段施文 胴部平行叩き + 無文当て具	No504・534・559・560・565・602・605・623・662・714・966 SD-7No28 SD-7 (ZA-15G) ZO-15・16G	95-1・2
130	須恵器	大甕	(550)	17.2	-	I J K	30	良好	灰	南比企産 7本組櫛描波状文3段 (上→下) に施文	No131・133 ZM-12G	95-3・4
131	須恵器	大甕	(508)	5.7	-	G I J	10	良好	灰	南比企産 頸部平行叩き後11本組櫛描波状文3段施文	No 508・567・597 ZO-15・16G	
132	須恵器	大甕	(46.0)	11.0	-	E I J K	30	良好	灰	南比企産 13本組の櫛描波状文3段	No730・821・1177・1180・1184・1189・1202・1210・1213・1280 ZO-15・16G	95-5・6
133	須恵器	甕	-	9.0	(130)	E I J K	25	良好	灰	南比企産 平行叩き + 無文当て具後ロクロナデ	No853 ZO-15・16G	
134	須恵器	甕	-	9.4	(15.2)	E H J	20	普通	灰	南比企産 胴部下端平行叩き痕残る	No1053 ZO-15・16G	
135	土師器	壺	-	10.4	6.6	C H I	70	普通	にぶい黒褐	武蔵型壺 北武蔵の土	No1007・1016・1028・1064 ZO-15・16G	
136	瓦	平瓦	-	-	-	E G J	5	普通	灰	南比企産 一枚造り 凹面糸切り + 布目 凸面繩叩き 残存長13.1cm 残存幅13.2cm 厚さ1.8cm	No954・1092 ZO-15・16G	95-7・8
137	瓦	文字瓦	-	-	-	E G J	5	普通	灰	残存長18.7cm 残存幅10.5cm 厚さ1.6cm 郡名瓦「足」か一枚造り	No913・972 ZO-15・16G	96-1・2・3
138	土師器	坏	-	-	-	G I J	5	普通	橙	内面漆付着 外面手持ちヘラケズリ 系統不明確	ZO-15G	96-8
139	土師器	坏	-	-	-	G I J	5	普通	橙	内面漆付着	ZO-15G No138と同一個体	96-9
140	土師器	坏	-	-	-	A H I	5	普通	にぶい褐	内面に黒漆が塗られている 黒煙吸炭とは異なる 坏は北武蔵型坏の底部破片で平安時代 (9世紀代) である	パレット転用か	97-1
141	土製品	鞆羽口	-	-	-	H I	-	普通	淡橙	一部還元面残る	ZO-15G	110-11・12
142	須恵器	獸脚付短頸壺	-	-	-	I J	-	良好	青灰	南比企産 短頸壺の獸脚 長さ6.9cm 幅4.7cm	ZO-15G	96-4・5
143	須恵器	獸脚付短頸壺	-	-	-	I J	-	良好	暗灰	南比企産 短頸壺の獸脚 長さ7.7cm 幅4.2cm	No590 ZO-15・16G	96-6・7
144	土製品	土錘	-	-	-	B H I	100	普通	にぶい赤褐	長さ7.8cm 幅2.7cm 孔径0.5cm 重さ46.70g	No632 ZO-15・16G	97-2
145	土製品	紡錘車	-	-	-	E G I	50	普通	橙	土師質 白針なし 最大径5.0cm 最大厚1.9cm 孔径1.0cm 重さ29.3g	No537 ZO-15・16G	97-3
146	石製品	砥石?	-	-	-	-	-	-	-	長さ7.3cm 幅5.5cm 厚さ1.75cm 重さ65.8g 砂岩製 用途不明だが砥石の可能性あり 左側縁は剥離が認められるが端部は磨耗している	ZO-15G	
147	石製品	軽石	-	-	-	-	-	-	-	最大径5.2cm 厚さ4.2cm 重さ50.91g 図上下半欠失	ZU-16G	

企産。26～28は墨書土器。26は不明。27も不明確で、「長」か？。28は「寺」もしくは「芋」か。口径が14cm大～12.5cm前後と比較的大きく、底部回転糸切り後ヘラによる再調整を施す一群（29～78・86～94）と、口径が12cm前後と縮小し底部回転糸切り後無調整の一群がある。また、95・96は非常に小振りであり、坏Gの可能性ある。

97～102は須恵器無台椀。103は須恵器無台盤。104・105は無台皿。106は灰釉陶器高台付皿で灰釉刷毛塗りである。

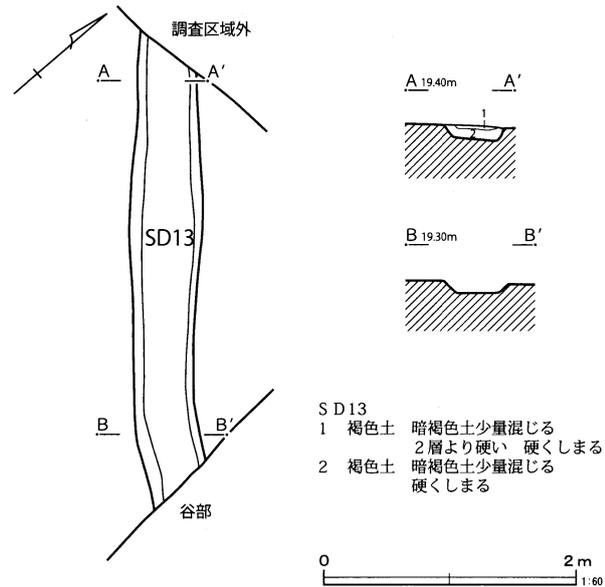
107～113は須恵器瓶類。107は東海産（湖西産か）。110・111は水瓶で同一個体かもしれない。112も水瓶。113は平瓶。接合しない破片を復元実測した。東海産と思われる。114はコップ形土器。116は鉄鉢形土器である。117・118は磨鉢。119は円面硯脚部片である。円面硯は縦位に刻まれた2条の沈線と透孔が確認できる。120・121は須恵器壺。122は器種不明。123～134は須恵器甕。135は土師器武蔵型壺である。136・137は平瓦。137の凹面には線刻がある。「足」か。足とすれば「足立郡」を示す郡名瓦となる。

138・139は土師器坏。系譜は不明確。おそらく同一個体と思われ、漆が付着する。140も漆が付着し、パレットに使用されたものと思われる。北武蔵型坏、9世紀代のものであろう。141は鞆羽口である。142・143は須恵器短頸壺の脚部で、獸脚が表現されている。

須恵器坏類は坏Gと思われる破片があり、7世紀後半にさかのぼるものがあるが、主体は8世紀2/4期を含む中葉以降で、9世紀中頃の坏を定量で含むこと、K-90号窯期の灰釉陶器を含むことから9世紀中頃から後半までは、区画溝として機能していたのは確実である。第7号溝跡とほぼ同時併存したと考えられる。

第13号溝跡（第234図）

第13号溝跡はZG-19・20グリッドに位置する。北西から南東方向に走り、北西端は調査区外に、



第234図 第13号溝跡

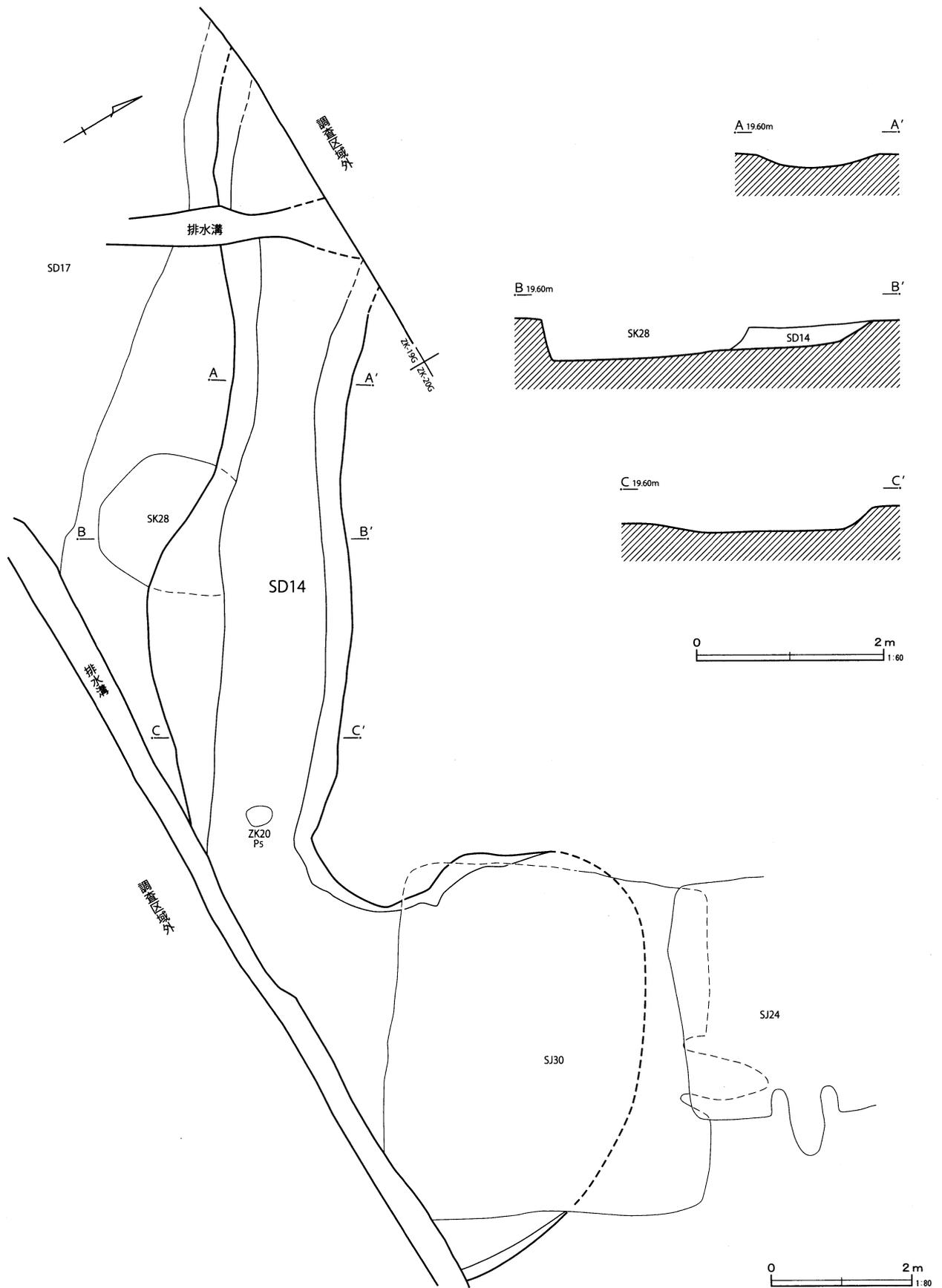
南東部は谷部に延びる。検出長3.45m、上端幅0.46～0.58m、下端幅0.32～0.40m、確認面からの深さは0.07～0.10mと極めて浅い。断面は逆台状に掘り込まれていた。埋土は褐色土で硬くしまっていた。

出土遺物はなく、時期は不明である。

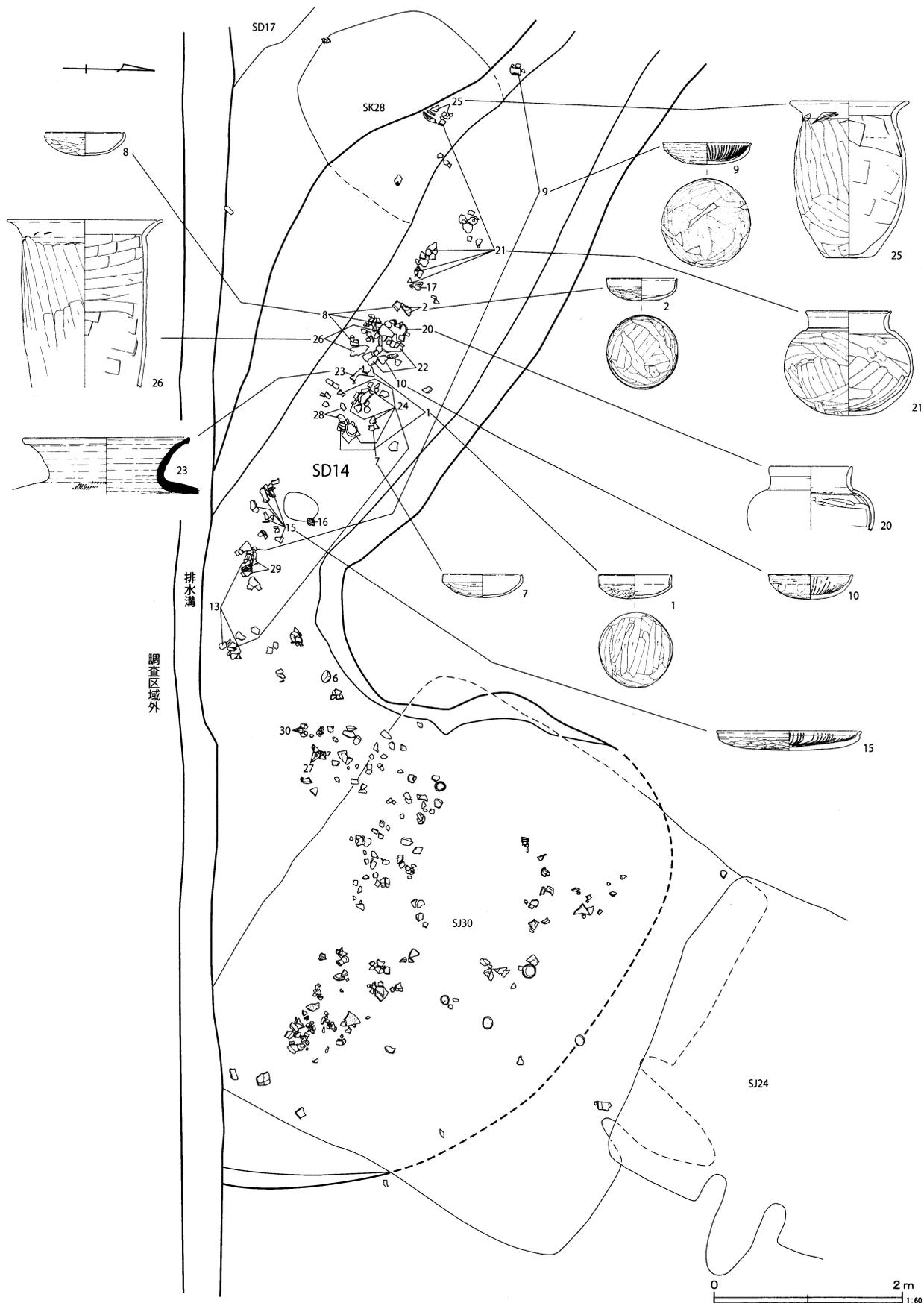
第14号溝跡（第235・236図）

第14号溝跡はZK-19・20グリッドに位置する。浅い谷状地形を呈する第17号溝跡の東側約2mを並行して北西から南東方向に延びている。重複する第30号住居跡、第28号土壇を切っていた。南東部は第30号住居跡に向かって「L」字状に屈曲する。その先は不明瞭で明確に捉えられなかったが、遺物の出土状況を検討すると、第30号住居跡の中で、再度流路を南東方向に変えていくと見るのが妥当であろう（第101図）。溝跡東側の立ち上がりは不明確である。検出長11.60m、上端幅1.65～2.92m、下端幅0.82～1.53m、確認面からの深さ0.11～0.24mである。

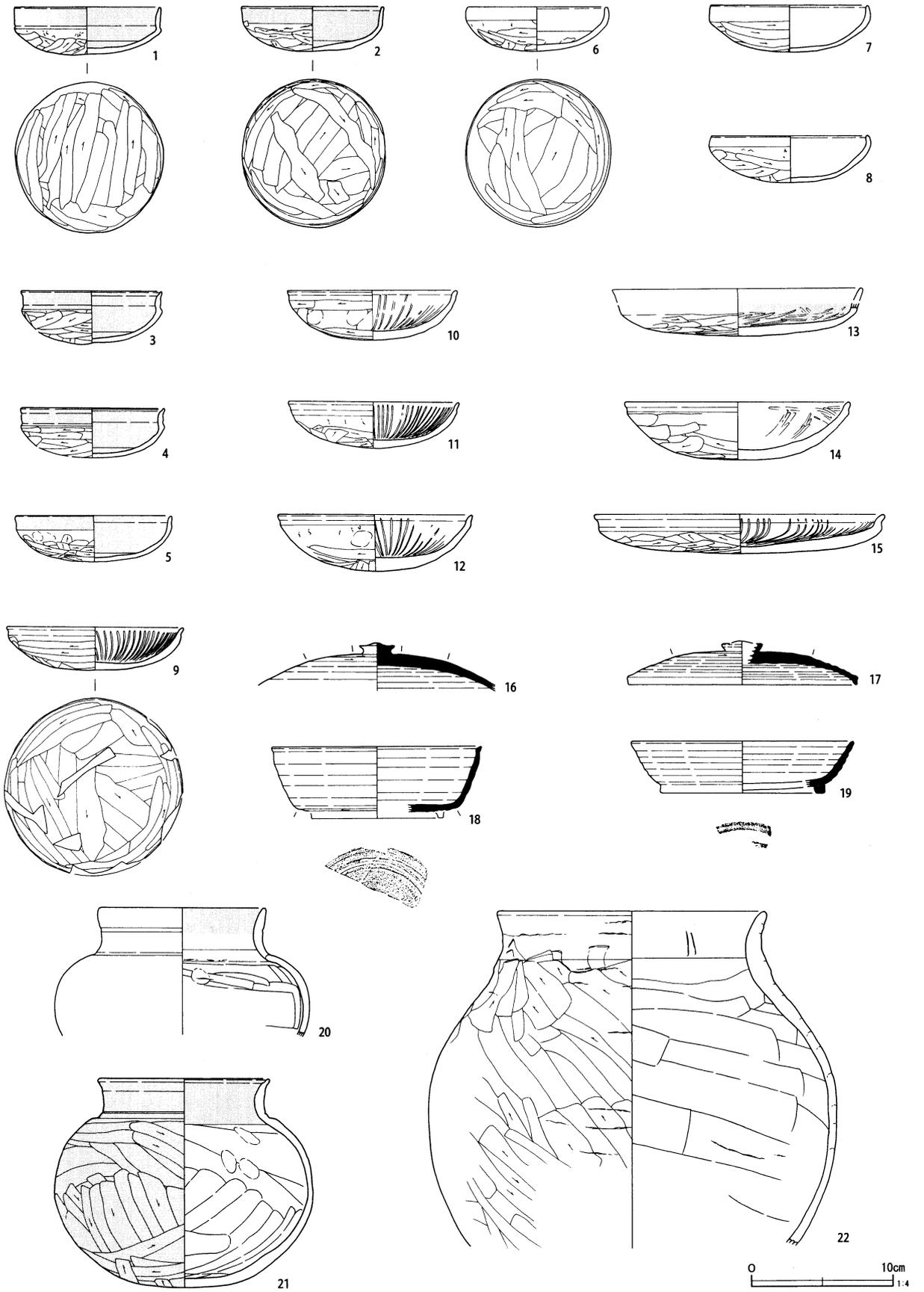
遺物は、溝跡全体に分布して出土した。土師器坏・皿・壺・甕、須恵器蓋・高台付坏・長頸瓶・甕などがある（第237・238図）。その他、第30号住居跡内から出土した遺物は住居跡に収録した



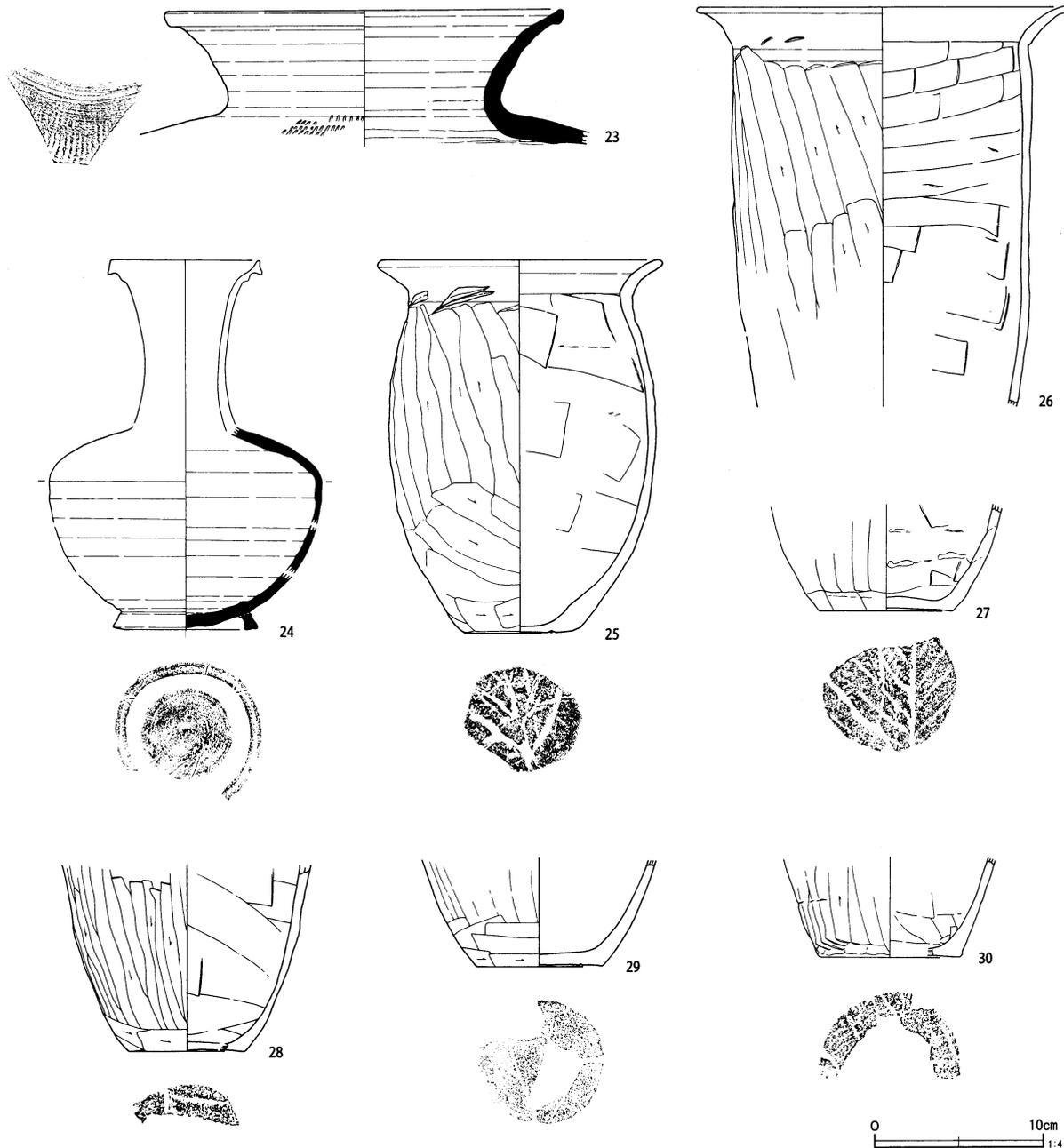
第235图 第14号沟迹



第236図 第14号溝跡遺物出土状況



第237图 第14号沟迹出土遺物 (1)



第238図 第14号溝跡出土遺物（2）

（第103～106図）が、本来的には本溝跡出土のものが大半を占めると推定される。

第237図1～5は小振りの（続）比企型坏で、赤彩が施されている。6～8は北武蔵型坏。丸底で口縁部は小さく内湾する。9～12は北武蔵型暗文坏である。丸底で内面放射暗文が施文される。13は続比企型の皿で、赤彩される。14は系譜が不明確な皿。北武蔵の土の可能性もあるが、確定できない。15は北武蔵型暗文皿である。

16・17は須恵器蓋。18・19は高台付坏である。17・19は湖西産と考えられるがセットとなろうか。20～22は在地産の土師器壺である。20・21は赤彩が施される。22には赤彩はないが、胎土中に白色針状物質が含まれている。23は須恵器甕。24は湖西産の須恵器長頸瓶である。接合しない破片を合成図示した。全体に焼け歪みが目立つ。25～30は土師器甕である。底部は木葉痕が残る。28～30には胎土中に緑泥片岩と思われる鉱物が含まれる。

第55表 第14号溝跡出土遺物観察表 (第237・238図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	10.3	3.2	-	E H I K	95	良好	橙	比企型模倣坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	No59・72	97-5
2	土師器	坏	10.0	3.2	-	C E H I L	100	良好	明赤褐	(続) 比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩	No8・100	97-6
3	土師器	坏	(9.8)	3.8	-	E H I K	50	普通	橙	(続) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針なし		
4	土師器	坏	10.0	3.5	-	E H I L	60	普通	にぶい橙	(続) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針なし	No96	97-7
5	土師器	坏	(10.9)	3.3	-	C D E H I	30	普通	橙	(続) 比企型坏 内面+口縁外面赤彩 白針なし 底部黒斑あり		
6	土師器	坏	9.7	3.1	-	A C H I K	100	普通	橙	北武蔵型坏 上層	No1	97-8
7	土師器	坏	10.9	3.3	-	A B C E H I	70	普通	橙	北武蔵型坏 内面やや風化	No70	98-1
8	土師器	坏	10.9	3.3	-	C E	80	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 全体にやや風化	No77・81	97-4
9	土師器	坏	12.5	3.1	-	C H I K	90	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文	No37・97	98-2・3
10	土師器	坏	11.9	3.5	-	C E G H I	75	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 口縁直下と底部ヘラケズリ 一部指頭痕残す	No73	98-4
11	土師器	坏	(12.0)	3.2	-	C E H I	40	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
12	土師器	坏	(13.6)	4.0	-	C E H I K	20	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文		
13	土師器	皿	-	2.3	-	G H I J	70	普通	橙	続比企型坏 (皿) 内面赤彩 白針有り 口縁外面赤彩不明 内面ミガキ	No15・19・36	
14	土師器	坏	(15.8)	4.1	-	C G H	25	普通	浅黄橙	北武蔵の土? 内面ヘラミガキ 同化しており不鮮明 外面ヘラケズリ 器壁厚い		
15	土師器	皿	(20.3)	2.8	-	C H I	50	普通	にぶい黄橙	北武蔵型暗文坏 (皿) 内面放射暗文 風化のため不明瞭	No42・46・48・51・52	
16	須恵器	蓋	-	3.4	-	E I J L	25	良好	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) つまみ径2.6cm	No53	
17	須恵器	蓋	(16.0)	2.9	-	I K	40	良好	灰白	湖西産 胎土精選 外面淡緑色の自然釉	No9	
18	須恵器	高台付坏	(14.6)	4.6	-	E H J	10	普通	橙	南比企産 底部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) 高台剥落		
19	須恵器	高台付坏	(15.6)	3.7	(11.6)	E I J K	20	良好	灰白	湖西産 底部調整不明 胎土精選		
20	土師器	壺	(11.6)	9.0	-	A E H I L	25	普通	明赤褐	比企型 口縁内面赤彩 外面不明 (赤彩か) 外面風化著しく 整形不明	No84	
21	土師器	壺	(11.9)	14.6	-	C D G H I	30	良好	橙	比企型壺 白針なし 外面+口縁内面赤彩 器面剥落部分あり	No85・86・88・94	
22	土師器	壺	(18.7)	23.7	-	C E G H J	40	普通	褐	在地産 白針含む 外面煤付着	No76・98	
23	須恵器	甕	(23.2)	8.0	-	H I J	25	不良	にぶい黄橙	南比企産 胴部外面平行叩き	No7	
24	須恵器	長頸瓶	-	12.1	8.4	G K	40	良好	灰白	湖西産 接合しない破片を合成図化 肩部緑色の自然釉 全体に焼け歪み目立つ 胴部回転ヘラケズリ	No1・3・6・14	98-1・2・3・4
25	土師器	小型甕	16.3	22.2	6.5	E H I L	70	普通	にぶい橙	在地産か 白針なし 角閃石なし 胴部ケズリ 底部木葉痕	No94	98-5
26	土師器	甕	21.6	23.6	-	A E H I K	50	普通	にぶい橙	在地の土? 白針なし 角閃石なし 胴部ケズリ後ナデ 二次被熱により器面荒れる	No78・81	98-6
27	土師器	甕	-	6.3	8.0	A B E H I	35	普通	橙	底部木葉痕 胴部ナデ+ケズリ 雲母粒子入る 上層	No55	
28	土師器	甕	-	11.1	(7.0)	A B E G H	25	普通	橙	緑泥片岩多 槻川流域の土か	No57・58	
29	土師器	甕	-	6.5	7.3	B C E H	40	普通	橙	緑泥片岩多 胴部ナデ+ケズリ 底部木葉痕 槻川流域の土か	No30・40	
30	土師器	甕	-	6.0	(8.4)	A B E H K L	40	普通	橙	底部木葉痕 緑泥片岩入る 上層	No54	

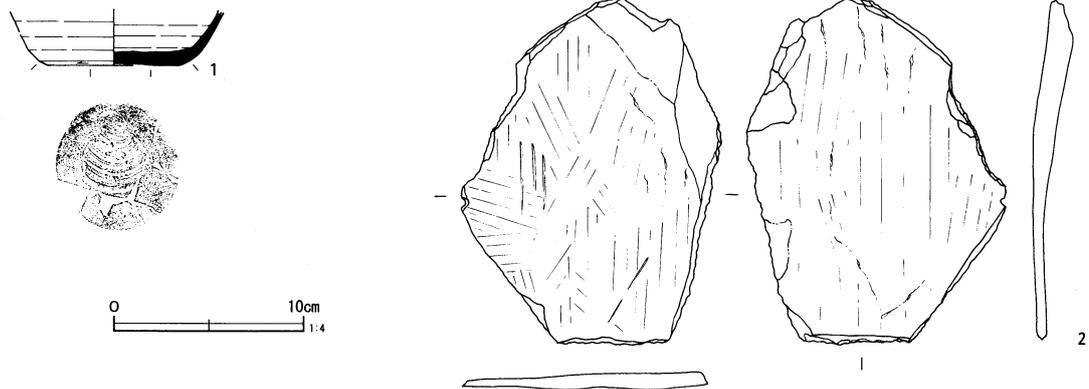
出土遺物に山下6号窯期に降る土器はなく、基本的にそれ以前、時期は7世紀後半～末葉が主体とみてよいであろう。

第15号溝跡 (第239図)

第15号溝跡はZN-15、ZO-17～21グリッドに位置する。第7号溝跡の北側に位置し、東西方向に途切れながら延びる。西端は比較的幅広く東に行くに従い幅狭となり、調査区内で二度途切れた後、調査区外に抜けている。第6・7・8号掘立

柱建物跡と重複するが、新旧関係は溝跡が新しいと考えられる。長さは36.05m、上端幅0.33～2.10m、下端幅0.08～1.86m、確認面からの深さ0.02～0.21mと浅い。溝の中央付近に流路に沿うように木杭列が検出された。埋土は黄灰色粘土ブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物は少ない。図示できたのは須恵器坏と石製品がある (第240図)。図示した以外に近世陶磁器片がある。



第240図 第15号溝跡出土遺物

第56表 第15号溝跡出土遺物観察表 (第240図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	-	29	68	E I J K	70	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径80cm 底部回転切後周辺+体部下端回転ヘラケズリ		
2	石製品	砥石?	-	-	-	-	-	-	-	長さ137cm 幅10.3cm 厚さ1.6cm 重さ1520g 粘板岩製 硯の再利用とも考えたが剥片状に割れた素材を砥石として使用していたとも考えられる ZO-17G	99-5	

第16号溝跡 (第241図)

第16号溝跡はZO-14・15グリッドに位置する。第12号溝跡の南西側約1~1.5m離れて平行して延びる。検出長12.40m、上端幅0.66~1.57m、下端幅0.29~0.63m、確認面からの深さ0.19~0.50mで、断面は逆台形状に掘り込まれていた。埋土は黄灰色粘土ブロックを含む褐色~暗褐色土で粘土質である。

出土遺物はなく、時期は不明である。第12号溝跡を意識していれば古代に遡る可能性もあろうか。

第17号溝跡 (第241図)

第17号溝跡はZK-17~19グリッドに位置する。北西から南東方向に延びている。東側2m前後の位置を第14号溝跡がほぼ並行している。検出長6.60m、上端幅1.56~2.23m、下端幅1.60~2.01m、確認面からの深さ0.44~0.57mである。幅広で深度の浅い谷状地形である。南東側に延長すると、第18号溝跡がほぼ同じ規模・形態を示し、同一溝跡の可能性はある。

出土遺物は須恵器片とともに、中・近世の陶磁器類が含まれるが、混入資料と考えた。北西側延

長部には対応する溝跡は検出されなかった。

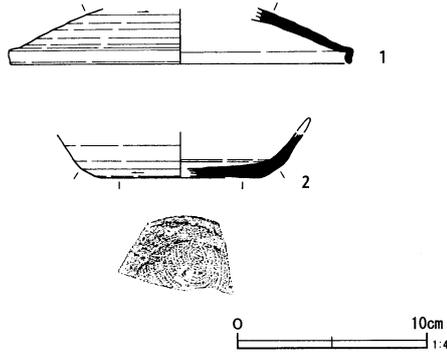
埋土は炭、焼土を少量含む暗褐色土を基調としていた。出土遺物は少ない。須恵器坏と蓋を図化した(第242図)。

第242図1は須恵器蓋である。推定口径18.0cm、残存高2.9cm。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質・黒色粒子を含む。焼成は普通で、色調は灰色。約15%残存する。つまみ部分を欠損する。天井部回転ヘラケズリ調整(ロクロ右回転)。内外面に火襻痕がみられる。南比企産である。

2は須恵器坏である。口縁部を欠き、口径は不明であるが、13.5~14cmほどとなろうか。残存高24cm、底径は9.0cm。平底の器形から腰は強く張る。底部は回転ヘラケズリ後、周辺部と体部下端を回転ヘラケズリ調整している。胎土に石英・白色粒子・白色針状物質・黒色粒子を含み、焼成は普通。色調は灰色、約20%残存する。南比企産である。時期は8世紀中葉以降となろうか。

第18号溝跡 (第243図)

第18号溝跡はZM・ZN-22グリッドに位置し、東西方向に延びている。規模は長さ7.20m、上端幅13.35~17.60m、下端幅10.60~15.25m、確認面か



第242図 第17号溝跡出土遺物

らの深さ0.56～0.59mである。

幅広の浅い谷状地形を呈する。溝跡北寄り部分にはピットが8本検出されたが、全てが本溝跡を切る。底面は小さな起伏が目立ち、炭化物粒子が比較的多く含まれていた。

出土遺物は比較的多い。溝跡中央と北岸寄りの地域にまとまる傾向が認められた。南岸寄りからは少ない。土師器坏・皿・椀・壺・甕・甑、須恵器蓋・坏・高台付坏・高台付椀・円面硯・長頸瓶・壺・甕、青銅製帯金具、砥石、土錘、鞆羽口、椀形滓、鉄製品などがある（第244～247図）。

第244図1～4は北武蔵型坏である。丸底で口縁部は小さく直立する。5・6は北武蔵型暗文坏である。丸底で内面に放射暗文が施文される。7～9は続比企型坏である。7は赤彩されるが、8・9には赤彩が認められない。10は北武蔵型皿。11は続比企型の皿で赤彩される。12は北武蔵型暗文皿である。

13・15は在地産の椀と思われる。16は北武蔵の土に似る。14は畿内産土師器の坏Aか。破片であるが、口唇部が内に巻いており、体部外面ミガキ、底部外面は軽いケズリと指頭痕（無調整）がみえる。内面は右上がりの暗文が施される。風化が著しく不鮮明ではあるが、上位にもう1段斜方向の暗文が施されているようにも見える。畿内産土師器にしては胎土があまり良くないように思われるが、在地産土師器の系譜には乗らないことは確

実である。畿内産土師器坏Aそのものまたは、畿内産土師器を模倣して製作したものであろう。

17～34は須恵器蓋である。18・19・24～27は内面にかえりをもつ。18～20・24は胎土から末野窯跡群産と考えられる。21～23・33・34は湖西産と推定される。それ以外は南比企産で、31・32は環状つまみをもつ。17の内面には「×」状の線刻がある。

35～37は須恵器坏Gである。35は片岩を含み末野産。36・37は南比企産である。38～42は大型の無台坏である。38・39・41・42は末野産と思われる。40は南比企産で、内面に焼成前の線刻「×」が刻まれている。41・42は内面に同心円（渦巻き）状の沈線（ノタ目）が巡り、一見すると湖西産須恵器かとも思われるが、末野産である。

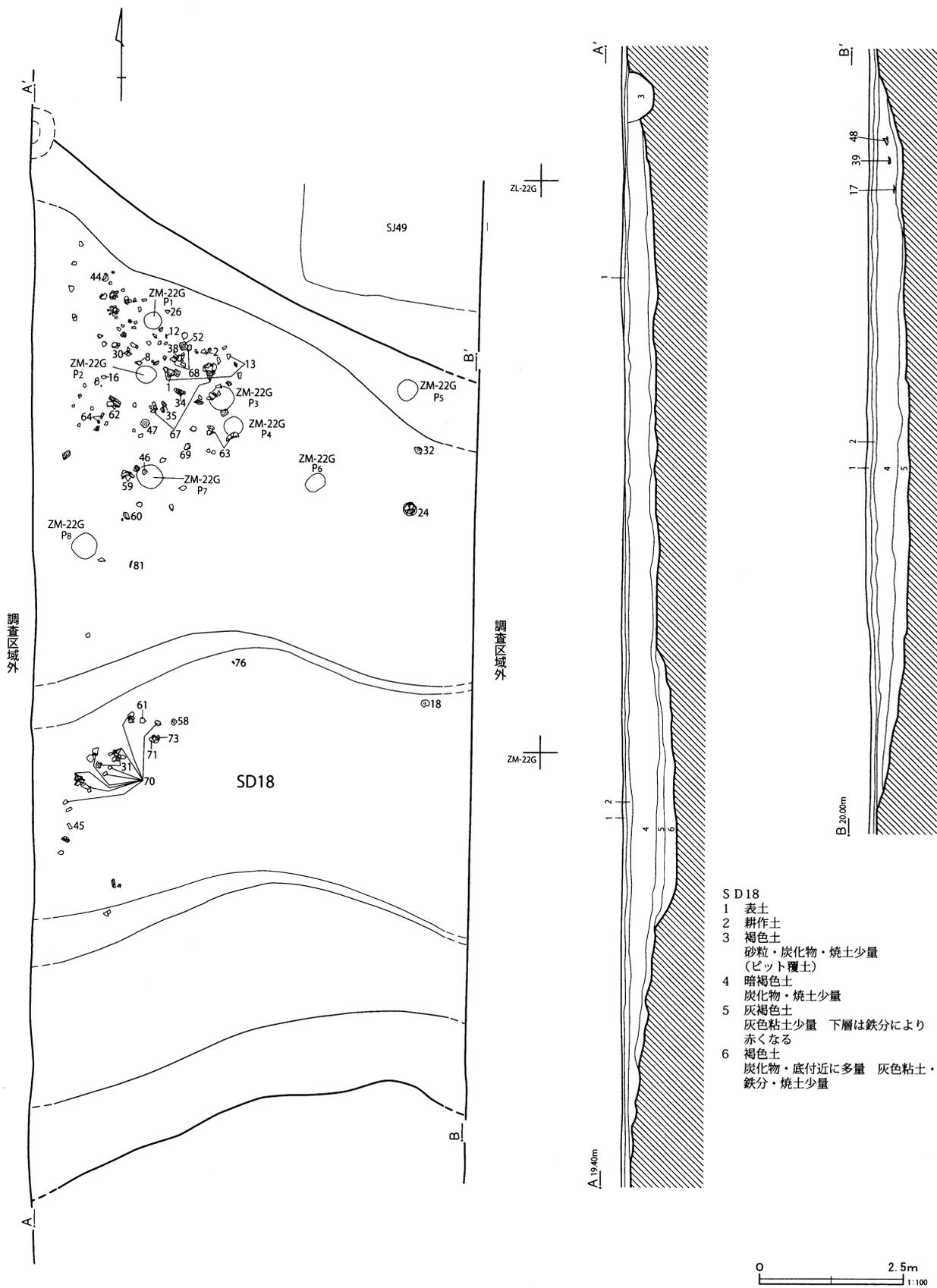
43～52は高台付坏である。43・49～51は南比企産で高台は底部外縁近くに付く。52は末野産か。44～48は湖西産と推定される。48内面には「ノタ目」が巡る。

53は南比企産の円面硯で、硯面は使用により磨滅している。54は体部破片であるが、突帯が付くことから佐波理模倣椀と思われる。55～58は長頸瓶。東海産であろう。58は産地不明。59は壺。60は鉢である。62は須恵器大甕。やや太い櫛描ヘラ状高波状文を描く。正面図の左側縁と右斜め下の破面に再調整した痕跡（ナデ）がみられ、補修して焼いたものと思われる。

63～67は土師器壺。68・69は土師器甕である。70は大型甑。71は小型甑で、底部中心に小孔が開けられている。

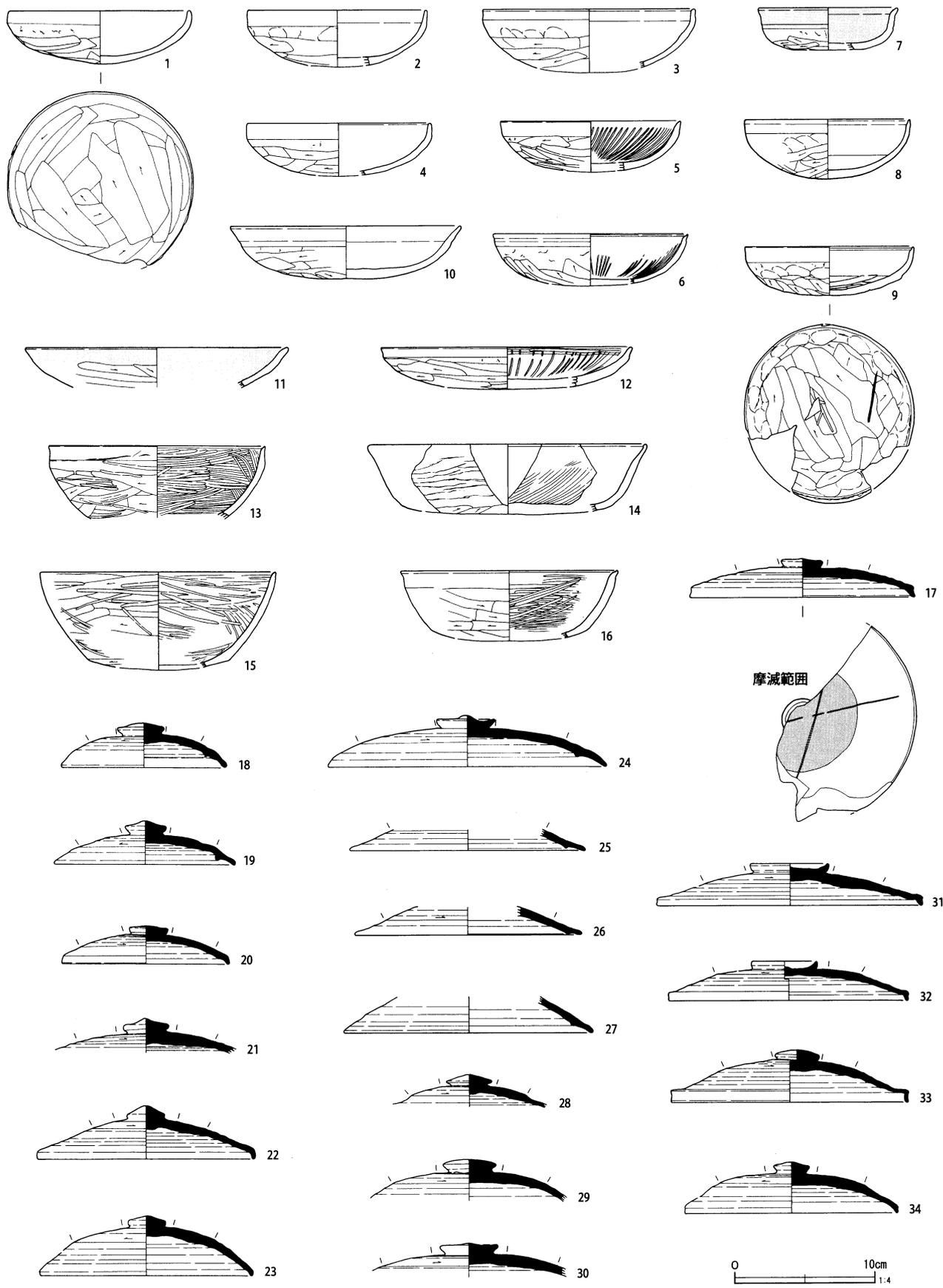
72は鉸帯金具、青銅製鈍尾と思われる。長さ1.3cm、幅1.3cmと小型である。73・74は砥石。75は須恵器坏を転用した砥石である。77～79は鞆羽口、小口径であり鍛冶用と思われる。80は椀形滓で、鍛冶滓と推定される。81は棒状鉄製品である。

谷状地形から出土した遺物ではあるが、時間幅が限定される一括性の高い土器群であると評価

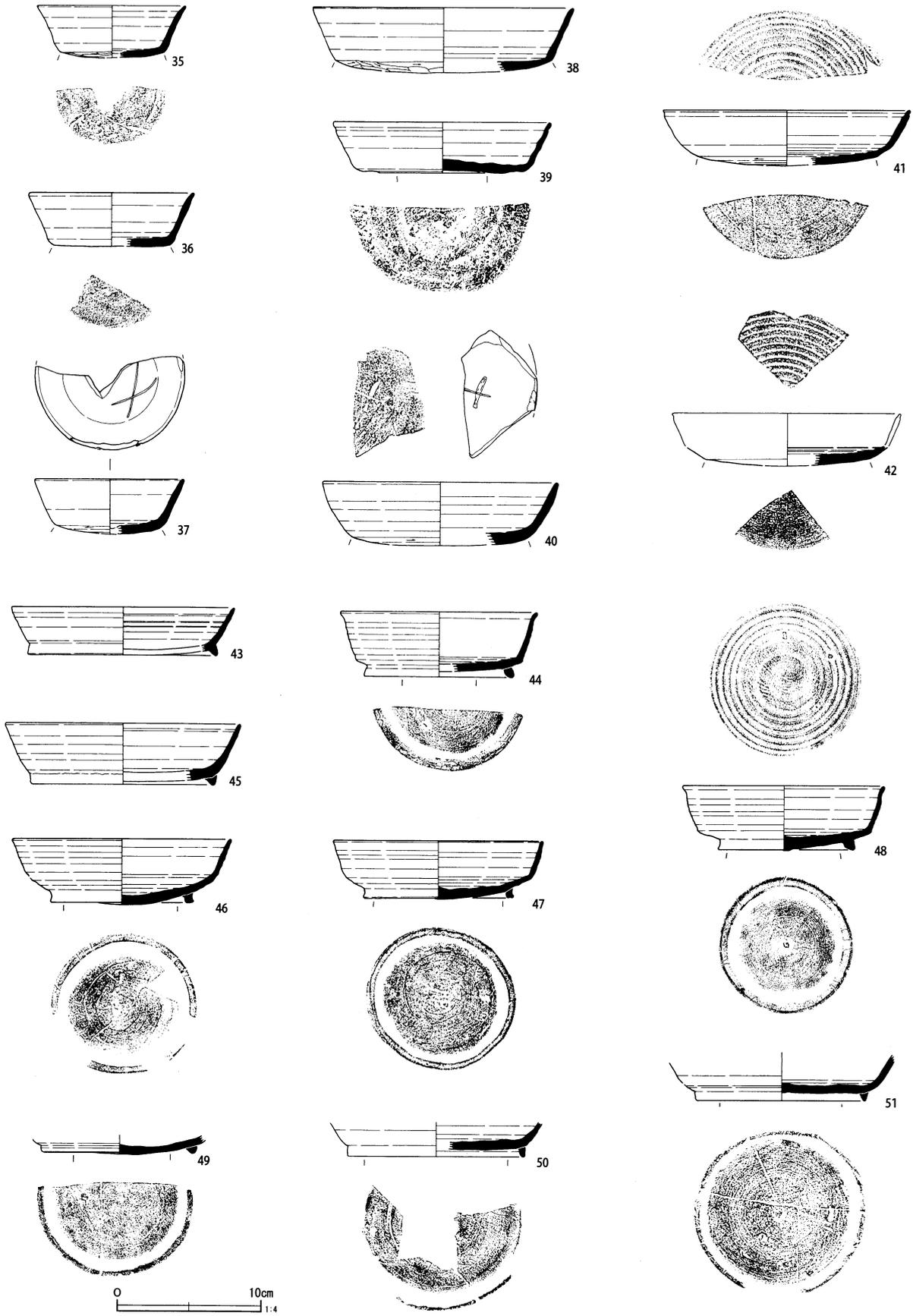


- SD18
- 1 表土
 - 2 耕作土
 - 3 褐色土
砂粒・炭化物・焼土少量
(ピット覆土)
 - 4 暗褐色土
炭化物・焼土少量
 - 5 灰褐色土
灰色粘土少量 下層は鉄分により
赤くなる
 - 6 褐色土
炭化物・底付近に多量 灰色粘土・
鉄分・焼土少量

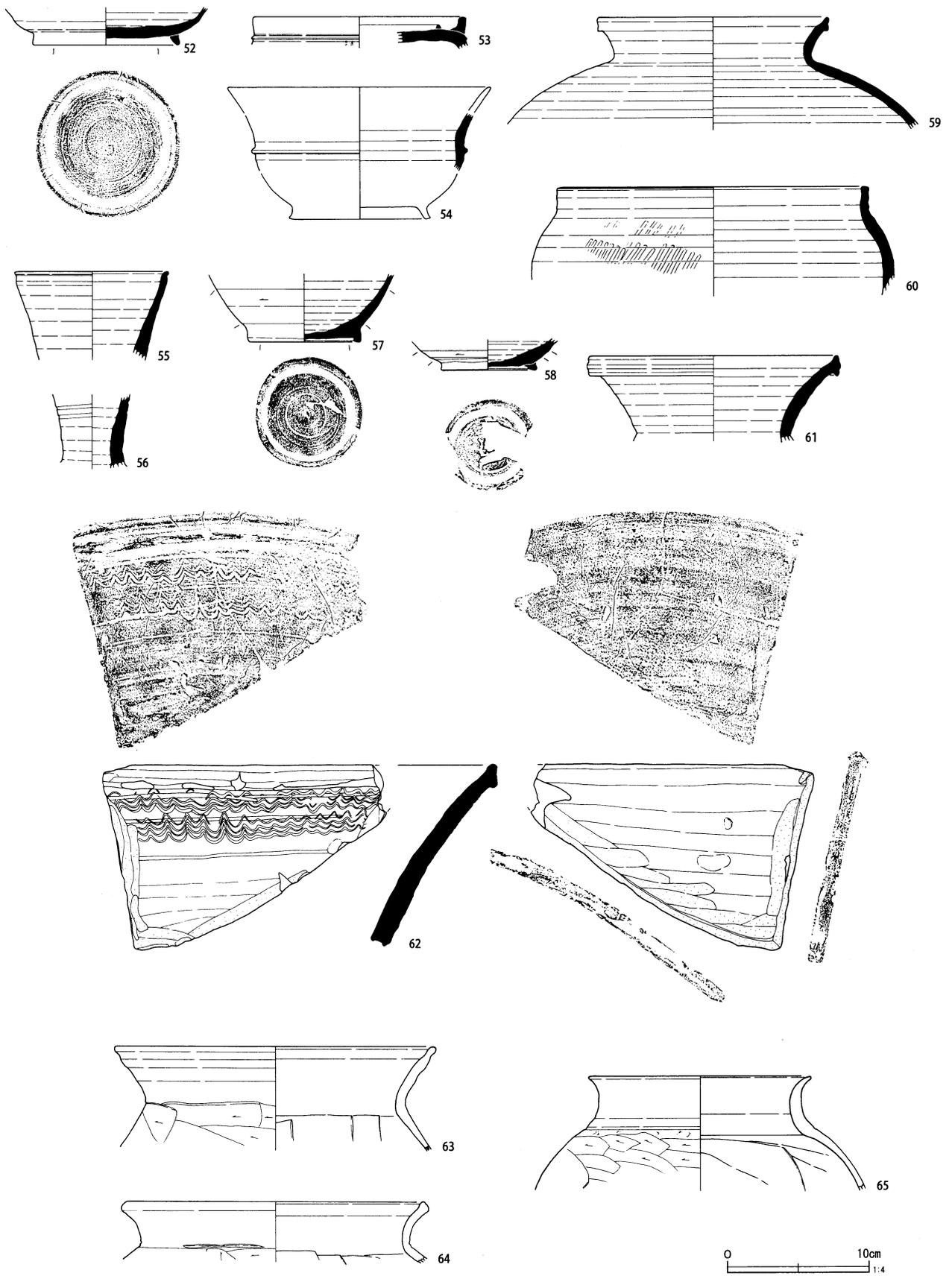
第243図 第18号溝跡



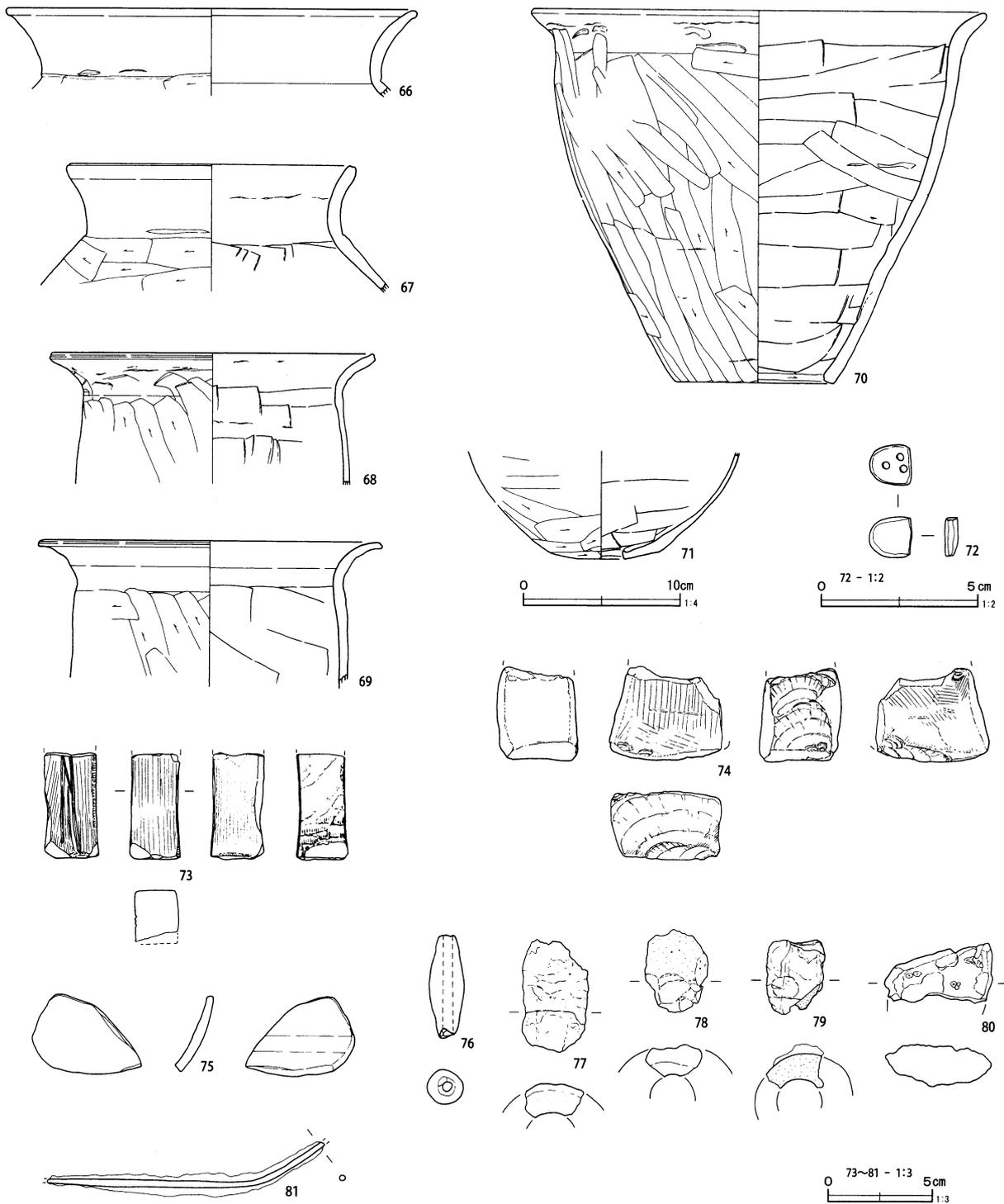
第244图 第18号沟迹出土遗物 (1)



第245図 第18号溝跡出土遺物（2）



第246图 第18号沟迹出土遗物 (3)



第247図 第18号溝跡出土遺物（4）

できる。須恵器の量産期である鳩山Ⅰ期に降る須恵器坏類がなく、末野産須恵器と東海産須恵器を定量で含むこと、坏G、かえり蓋を含む、山下6号窯平行と思われる大型坏を含むことなどが特徴である。また、畿内産土師器坏Aが伴出する点

も注目される。畿内産土師器の編年に当て嵌めれば、飛鳥Ⅴ期～平城Ⅱ期の幅の中には入るものと思われる。時期的には7世紀末葉～8世紀初頭頃に位置付けておきたい。

第57表 第18号溝跡出土遺物観察表 (第244~247図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版	
1	土師器	坏	129	38	-	CEI	85	普通	にぶい橙	北武蔵型坏 No86	ZM-22G	99-6	
2	土師器	坏	(126)	39	-	CEHI	25	普通	橙	北武蔵型坏 No101	ZM-22G		
3	土師器	坏	(148)	42	-	CEHI	20	普通	橙	北武蔵型坏			
4	土師器	坏	(130)	37	-	CEGI	20	普通	にぶい橙	北武蔵型坏			
5	土師器	坏	(128)	35	-	CGI	20	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 黒色粒子(5mm大)目立つ(鉄分か) ZM・ZN-22G			
6	土師器	坏	(138)	35	-	CEHI	25	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射暗文 一部器面剥離して不鮮明		99-7	
7	土師器	坏	(98)	30	-	EHI	25	普通	にぶい橙	続比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩			
8	土師器	坏	(118)	43	-	HIKL	30	普通	明赤褐	続比企型坏 白針なし 赤彩なし 口唇内面沈線 No78	ZM-22G		
9	土師器	坏	120	35	-	CEHI	85	普通	橙	続比企型坏 白針なし 赤彩なし 口唇内面沈線 底部木葉痕とヘラ記号「一」			
10	土師器	皿	(163)	37	-	CEHI	30	普通	橙	北武蔵型坏(皿) 内面やや風化 ZM-22G	谷包含層	100-1-2	
11	土師器	皿	(186)	29	-	AHIK	15	普通	橙	続比企型坏(皿) 内面+口縁外面赤彩 白針なし			
12	土師器	皿	(178)	28	-	CHI	15	普通	橙	北武蔵型暗文坏(皿) 内面放射暗文 一部ミガキ 器壁厚い No95	ZM-22G		
13	土師器	坏(碗)	(154)	51	-	CHI	30	普通	にぶい橙	在地産(比企型) 口唇部沈線 内面丁寧なミガキ 外面ケズリ+ミガキ No85・105	ZM-22G	100-1-2	
14	土師器	坏	(196)	48	-	GHI	10	普通	橙	畿内産土師器坏A I 外面ミガキ 底部ケズリ 内面放射暗文 上位の暗文不明 ZN-22G			
15	土師器	碗	(168)	67	-	EHIJ	15	普通	橙	在地産か 外面ケズリ後ミガキ 内面ミガキ 内面赤彩の可能性有り ZM・ZN-22G	谷包含層		
16	土師器	碗	(143)	48	-	CEHI	15	普通	明赤褐	北武蔵の土 内面ミガキ 口唇部沈線巡る No72	ZM-22G	100-3	
17	須恵器	蓋	(160)	27	-	EIJKL	40	普通	灰	南比企産 内面「×」ヘラ記号あり 内面中央付近磨減	No138		
18	須恵器	蓋	116	32	-	BEIK	95	良好	青灰	末野産 かえり径8.7cm 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) つまみ径3.3cm	No20		ZM-22G
19	須恵器	蓋	129	31	-	BEHIK	70	普通	黒灰	末野産 片岩含む 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) つまみ径2.9cm	ZN-22G		谷部 谷包含層
20	須恵器	蓋	118	27	-	EIKL	40	普通	灰	末野産か 胎土粗く白針不明瞭 つまみ径2.3cm			
21	須恵器	蓋	-	25	-	I	50	良好	灰白	湖西産 つまみ径3.2cm			
22	須恵器	蓋	(154)	38	-	IK	35	普通	明灰	湖西産 胎土精選 つまみ径2.7cm			
23	須恵器	蓋	(150)	42	-	CGIK	60	不良	淡灰	産地不明 夾雑物少ない 湖西産?(ロクロ左回転) つまみ径2.1cm			
24	須恵器	蓋	198	36	-	BDEHIKL	90	普通	黄灰	末野産 天井部回転ヘラケズリ かえり径15.6cm つまみ径4.2cm	No27		ZM-22G
25	須恵器	蓋	(167)	15	-	IJK	10	普通	灰	南比企産 かえり蓋 白針含む			
26	須恵器	蓋	161	20	-	EIJKL	15	普通	灰	南比企産 白針含む かえり蓋 かえり径(14.2cm)	No112		ZM-22G
27	須恵器	蓋	(176)	26	-	EIJK	10	普通	灰白	南比企産か 白針少含	ZM-22G		
28	須恵器	蓋	-	23	-	IJK	50	普通	灰	南比企産 つまみ径3.2cm	ZM・ZN-22G		
29	須恵器	蓋	-	29	-	EIJK	30	普通	灰白	南比企産 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) つまみ径3.9cm	ZM-22G		
30	須恵器	蓋	-	23	-	A E I K L	20	普通	灰	末野産か 白針なし	No77	ZM-22G	
31	須恵器	蓋	(188)	29	-	E I J K	70	普通	灰	南比企産 環状つまみ(径5.6cm)(ロクロ右回転) 重量感有り 内面:灰白 No.4・8	ZM・ZN-22G	谷包含層	
32	須恵器	蓋	(170)	28	-	E I J K	40	普通	灰白	南比企産 白針含む 環状つまみ(径4.6cm)(ロクロ左回転)	No28	ZM-22G	100-6
33	須恵器	蓋	(168)	37	-	IK	40	良好	灰	湖西産 天井部淡緑色の自然釉 つまみ径3.2cm 内面中心部磨減	ZM-22G		
34	須恵器	蓋	(151)	37	-	IK	55	普通	灰	湖西産 胎土精選 つまみ径2.6cm	No51	ZM-22G	100-7
35	須恵器	坏	(103)	36	(7.4)	BEIK	40	普通	灰	末野産 坏G 片岩含む 底部手持ちヘラケズリ	No53	ZM-22G	100-8
36	須恵器	坏	(113)	38	(8.1)	CEIJK	20	普通	黄灰	南比企産 白針含む 底部手持ちヘラケズリ後ナデか	ZM-22G		
37	須恵器	坏	103	38	7.3	CDJ	50	普通	灰白	南比企産 白針含む 底部全面回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 内面見込み部「×」ヘラ記号		100-9	
38	須恵器	坏	(181)	44	(15.1)	BEHI	20	不良	橙	末野産か 焼成甘く、酸化焰焼成風 底部手持ちヘラケズリ	No91	ZM-22G	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
39	須恵器	坏	(15.0)	35	(12.0)	BEIK	45	良好	青灰	末野産 底部ヘラ切り後中心部一方向の手持ちヘラケズリ		101-1・2
40	須恵器	坏	(16.3)	43	(12.0)	EHIJK	20	普通	灰	南比企産 白針含む 底部回転ヘラケズリ 見込み部「×」ヘラ記号 焼成前の線刻		
41	須恵器	坏	(17.0)	38	(12.3)	BDEHI	30	普通	黄灰	末野産 白針なし 片岩含む 内面「ノタ目」 底部回転ヘラケズリ ZM-22G 谷包含層		101-3・4
42	須恵器	坏	-	1.1	(12.0)	BDEIK	25	普通	灰	末野産か 底部外面回転ヘラケズリ 内面「ノタ目」 白針なし 片岩不明確 ZM-22G		
43	須恵器	高台付坏	(15.5)	33	(13.0)	IK	5	普通	明灰	南比企産 白針少含む ロクロ目「ノタ目」状 湖西産にしては肌目粗い ZM-22G		
44	須恵器	高台付坏	(13.6)	45	(10.3)	IK	40	良好	灰白	湖西産 底部回転ヘラケズリ No116 ZM-22G		100-10
45	須恵器	高台付坏	(16.2)	42	(13.4)	EHIL	20	不良	淡黄	産地不明 調整不明瞭 湖西産? No15 ZM・ZN-22G		
46	須恵器	高台付坏	(15.2)	46	9.8	IK	55	普通	灰	湖西産 底部突出(出尻底) 底部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) 外面一部銀化 No38 ZM-22G 包含層		101-5
47	須恵器	高台付坏	14.5	40	10.4	IK	70	良好	灰	湖西産 底部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) やや突出 No56 ZM-22G		101-6
48	須恵器	高台付坏	13.9	45	9.3	IK	90	良好	灰白	湖西産 胎土精選 底部回転ヘラケズリ 中央部ヘソ状に突出 内面に同心円文当て具痕残る No136		101-7・8
49	須恵器	高台付坏	-	1.3	10.8	EIJK	50	良好	にぶい黄橙	南比企産 白針含む 底部手持ちヘラケズリ 内面不定方向ナデ 出尻底		
50	須恵器	高台付坏	-	2.4	(12.2)	EIJK	30	普通	灰	南比企産 白針含む 底部全面回転ヘラケズリ ZM-22G 谷包含層		
51	須恵器	高台付坏	-	3.3	11.7	EIJ	70	普通	灰	南比企産 白針含む 底部全面回転ヘラケズリ ZM-22G 谷包含層		
52	須恵器	高台付坏	-	2.7	10.1	CEIK	80	不良	黄灰	産地不明(末野産か) 焼き甘い 底部回転ヘラケズリ 内面: 灰 No97 ZM-22G		
53	須恵器	円面硯	14.8	2.3	-	EIJK	15	良好	灰	南比企産 硯面使用痕(磨滅) 脚部に沈線2条残る		102-4
54	須恵器	佐液理模倣碗	-	4.1	-	EHIJ	5	普通	灰	南比企産 ZN-22G		
55	須恵器	長頸瓶	(10.8)	6.3	-	EIK	15	普通	灰	東海産か 胎土精選 平瓶口縁の可能性もある ZM-22G		
56	須恵器	長頸瓶	-	5.3	-	IK	60	良好	暗灰	東海産(猿投産か) 頸部沈線2条 硬質な焼きで器肉は紫灰色を呈する ZM-22G		
57	須恵器	長頸瓶	-	4.8	7.9	IK	60	良好	灰	東海産(湖西産か) 胴部下端底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 内面中央自然釉 ZM-22G 谷包含層		
58	須恵器	長頸瓶	-	2.2	(6.5)	AHI	80	不良	橙	酸化焰焼成 粉っぽい 産地不明 胎土精良 外面回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリか No26		
59	須恵器	壺	(16.2)	7.9	-	EIJ	20	普通	灰白	南比企産 内外面ロクロナデ No36 ZM-22G		
60	須恵器	鉢?	(22.3)	7.7	-	CEGJ	10	普通	灰白	南比企産 短頸壺の可能性もある 胴部平行叩き後ロクロナデ No32 ZM-22G		
61	須恵器	甕	(17.7)	6.1	-	EIJKL	20	良好	暗灰	南比企産 白針含む 内外面ロクロナデ No24		
62	須恵器	大甕?	-	-	-	CEHIJ	95	不良	にぶい黄橙	推定径45cm程 頸部横位の沈線区画3本に4本組ヘラ描波状文2段(上→下)に施文 正面図の左側縦際と下面際に再調整痕(ナデ)あり、補修痕と思われる 南比企産 内面: 褐灰 No60 ZM-22G		102-3
63	土師器	壺	(22.4)	7.4	-	ACEG	25	普通	橙	武蔵型 No43・44 ZM-22G		
64	土師器	壺	(20.8)	4.3	-	AEHI	20	普通	にぶい赤褐	北武蔵の土? 系譜不明確 No62 ZM-22G		
65	土師器	壺	(15.6)	8.2	-	CEHIJ	30	普通	橙	比企型(在地産) 白針含む 赤彩なし		
66	土師器	壺	(26.0)	5.5	-	ACEHI	35	普通	橙	武蔵型 北武蔵の土 谷包含層 ZM-22G		
67	土師器	壺	18.0	8.1	-	CEHI	70	普通	橙	武蔵型 北武蔵の土 No55・106 ZM-22G		
68	土師器	甕	(20.6)	8.3	-	ACEHI	20	普通	橙	北武蔵の土か No90・98 ZM-22G		
69	土師器	甕	(21.1)	9.3	-	EGHI	20	普通	橙	角閃石 白針なし 在地産? No50 ZM-22G		
70	土師器	甕	28.6	23.8	(10.0)	CEHIJL	40	普通	にぶい褐	在地産 白針少含む 外面ケズリ 内面ヘラナデ No5~7・9・11~13 (ZN-22G)・No23・25 (ZM-22G)・谷部・谷包含層		102-5
71	土師器	甕	-	6.9	7.0	CHI	60	普通	橙	北武蔵の土 孔径3.0cm No2 ZN-22G		
72	銅製品	革帯金具	-	-	-	-	-	-	-	長さ1.3cm 幅1.3cm 厚さ0.4cm ZM-22G		102-10・11
73	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	暗褐	長さ5.0cm 最大幅2.5cm 重さ49.8g 凝灰岩製 一側面剥離後再調整している 底面にも刃先状の条線あり 上部欠失 三側面は良く使い込んでいる No1		102-6
74	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.5cm 最大幅5.3cm 厚さ3.9cm 重さ76.7g 凝灰岩製 方柱状砥石残欠 灰白色で軟質 上下と一側面が欠損し、三面が使用されている 使用面には擦痕や条線が残る ZM-22G		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
75	須恵器	転用砥石	-	-	-	I J K	100	普通	灰	須恵器坏体部片を加工 表裏と側縁磨減 二次的に砥石に使用したと思われる		
76	土製品	土錘	-	-	-	G I	100	普通	灰褐	長さ4.9cm 最大径1.7cm 孔径0.4cm 重さ10.7g No21	102-7	
77	土製品	羽口	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶用 小口径羽口 先端部片 外面環元している 長さ52cm 幅3.1cm ZM-22G	110-11-12	
78	土製品	羽口	-	-	-	-	-	-	-	羽口片 周囲は環元している 内径の一部残存 長さ40cm 幅3.0cm ZM-22G	110-11-12	
79	土製品	羽口	-	-	-	-	-	-	橙	内径2cm前後の小口径羽口 先端部片 周囲は環元し滓化している 鍛冶用羽口か 長さ3.6cm 幅2.8cm ZM-22G	110-11-12	
80	鉄滓	碗形滓	-	-	-	-	-	-	黒	器面には小さな気泡が無数に見られる 上面から側面及び底面には鉄滓が付着する 磁着はしない 長さ5.10cm 短軸長2.40cm 厚さ1.95cm 重さ33.5g	102-8	
81	鉄製品	棒状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ13.8cm 径0.25cm No30 ZM-22G	102-9	

第19号溝跡 (第248図)

第19号溝跡はZQ・ZP-14グリッドに位置する。第1号土器棺墓が北側に隣接する。北西から南東方向に延びるが、北西側と南東側延長がどの溝跡に対応するのか明確ではない。第19号溝跡南側に流れる城敷遺跡第10号溝跡の分流と見ることできる。南東側は城敷遺跡第24号溝跡または第25号溝跡に対応する可能性がある。

規模は長さ7.62m、上端幅0.72~0.96m、下端幅0.55~0.63m、確認面からの深さは0.08~0.15mと浅い。

出土遺物はないが、古代まで降ることはない。掘り込み面からみて古墳時代に収まる溝跡と思われる。

第20号溝跡 (第249図)

第20号溝跡はZP-14・15グリッドに位置する。北側約2m前後には第21号溝跡が検出された。北西から南東方向に延びる。第21号溝跡とは規模や覆土の状況が近似していた。規模は長さ6.60m、上端幅0.18~0.32m、下端幅0.06~0.18m、確認面からの深さ0.03~0.13mと小規模である。

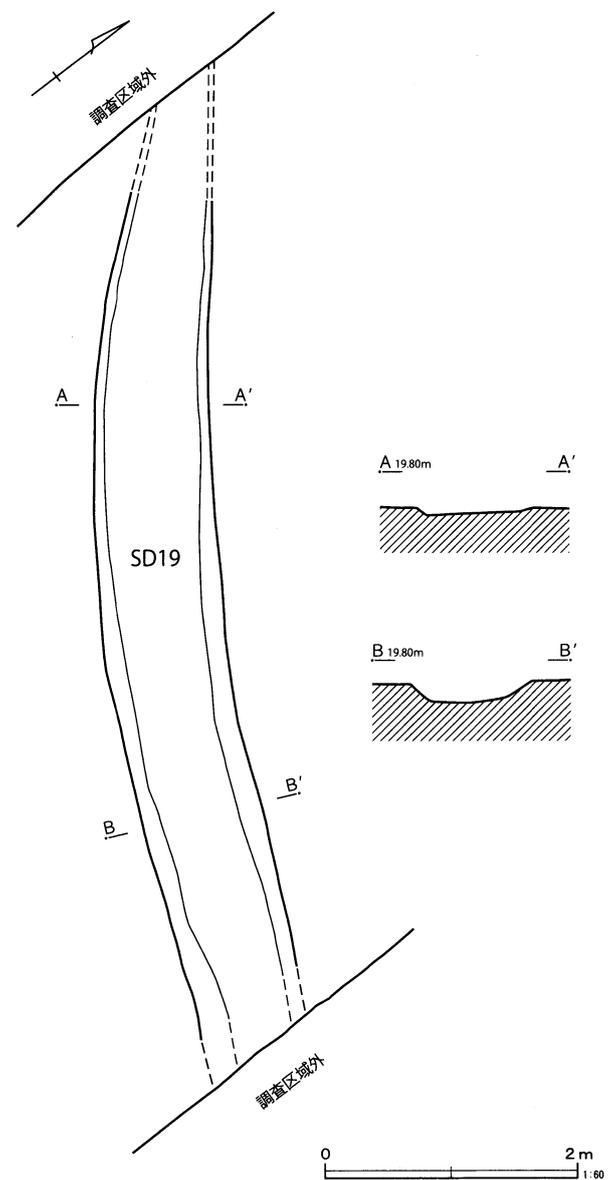
断面は逆台形状に掘り込まれていた。埋土は黄灰色粘土を含む褐灰色土である。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、古墳時代後期頃であろうか。

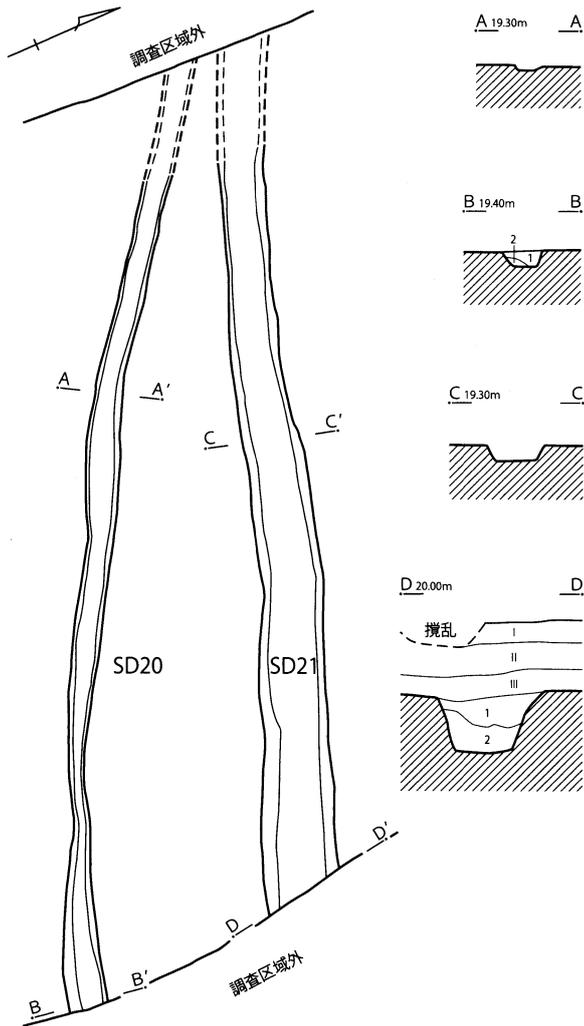
第21号溝跡 (第249図)

第21号溝跡はZP-14・15グリッドに位置する。南側約2m前後には第20号溝跡が検出された。北

西から南東方向に延びている。西側に辿ると、城敷遺跡第23号溝跡に連続する可能性がある。



第248図 第19号溝跡

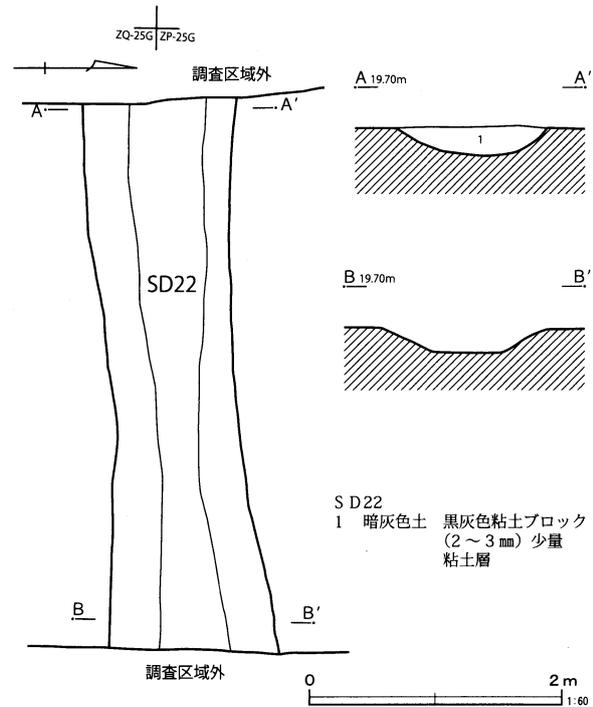


- SD20
 1 褐灰色土 黄灰色粘土粒子 (φ0.5~1mm) 少量
 2 黄灰色土 黄灰色粘土粒子・褐灰色土の混土層
- SD21
 I 褐色土 AS-aを含む 現図面下
 II 褐色土 酸化鉄まだら多量 マンガン沈着
 III 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (5~8mm) 多量
 1 黄灰色土 褐灰色土中に黄灰色粘土ブロック (2~3mm) 多量
 炭化物少量
 2 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1cm) 少量 炭化物 (2~3mm) 全体を含む
- 0 2m
1:60

第249図 第20・21号溝跡

規模は長さ5.76m、上端幅0.40~0.57m、下端幅0.24~0.37m、確認面からの深さ0.16~0.32mで、断面は逆台形状に掘り込まれていた。埋土は黄灰色粘土、炭化物を含む暗褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、城敷遺跡第23号溝跡が城敷遺跡第106号住居跡を切っているため、それ以降という限定はできる。



第250図 第22号溝跡

第22号溝跡 (第250図)

第22号溝跡はZP・ZQ-25グリッドに位置する。北側に第32・33号溝跡があり、第32号溝跡はほぼ並行している。東西方向に走り、両端は調査区外に延びる。

規模は長さ4.35m、上端幅0.95~1.29m、下端幅0.32~0.60m、確認面からの深さ0.15~0.37mである。埋土は黒灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘質土である。

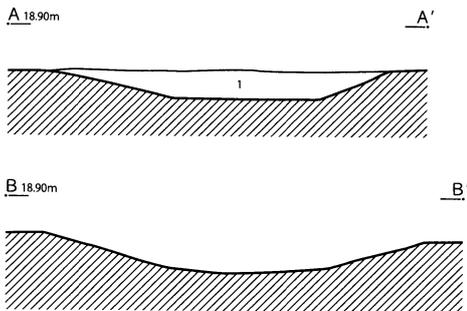
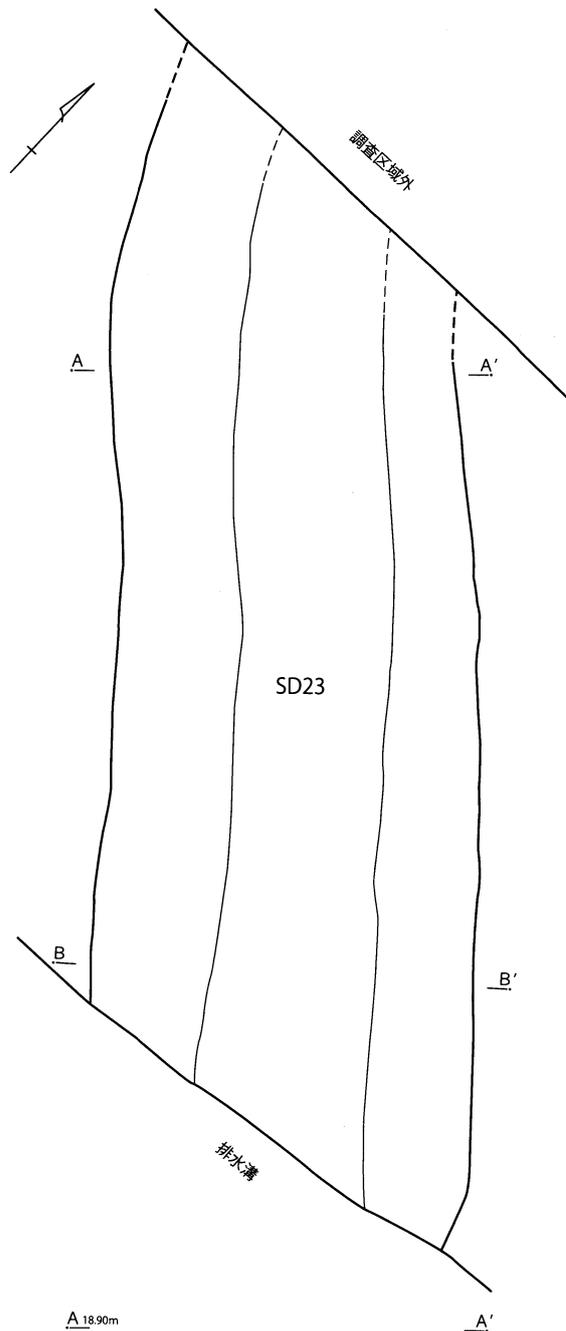
出土遺物は土師器北武蔵型坏の小片がある。口縁部が内湾する特徴から7世紀末葉前後となろうが、溝跡の時期は不明である。

第23号溝跡 (第251図)

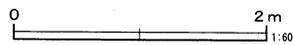
第23号溝跡はZS-21グリッドに位置する。東側約2~3mに第24号溝跡がある。北西から南東方向に延びる。

規模は長さ7.71m、上端幅2.72~3.00m、下端幅1.11~1.30m、確認面からの深さ0.23~0.33mで、断面は逆台状に掘り込まれていた。埋土は黒灰色粘土を含む暗灰色粘質土である。

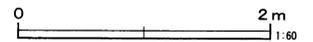
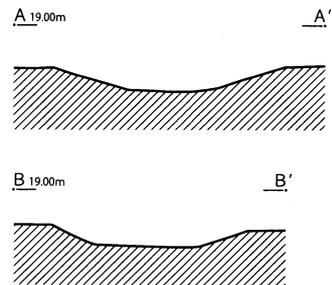
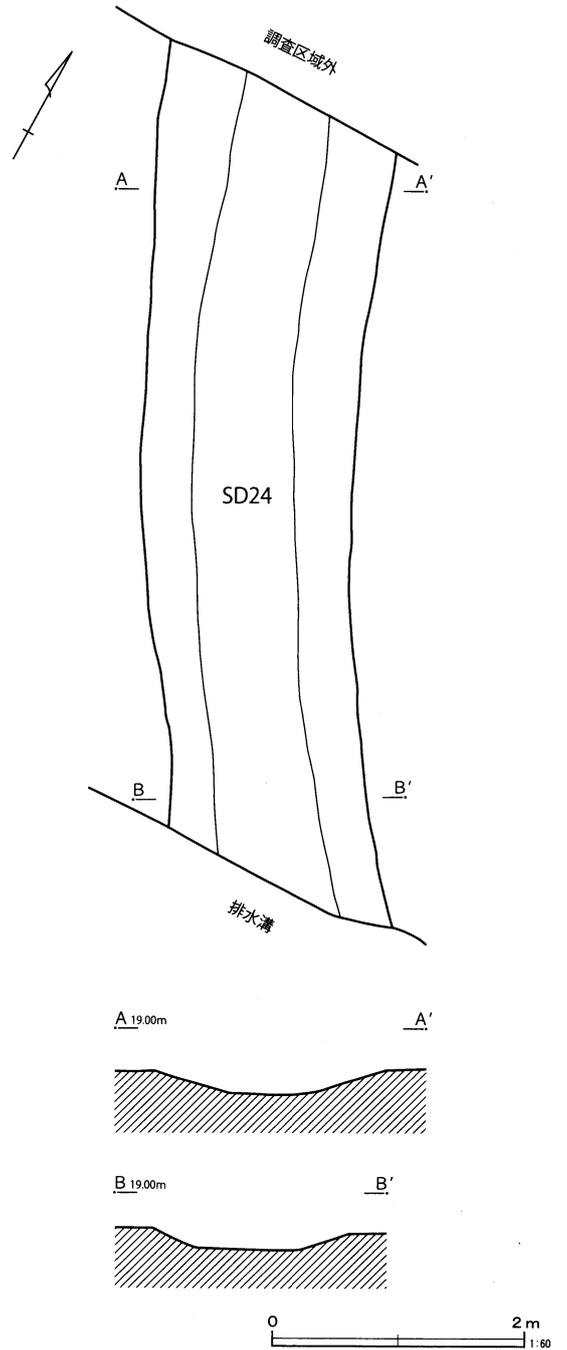
出土遺物はなく、時期は不明である。



SD23
1 暗灰色土 黒灰色粘土 (2~3mm) 少量 粘土層



第251図 第23号溝跡



第252図 第24号溝跡

第24号溝跡 (第252図)

第24号溝跡はZS-21・22グリッドに位置する。西側約2~3mに第23号溝跡が、東側に第25号溝跡がある。北北西から南南東方向に延びる。第25号溝跡とは延長上で直交すると思われるが関係

は不明である。

規模は長さ6.24m、上端幅1.49～1.88m、下端幅0.76～0.79m、確認面からの深さ0.18～0.64mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第25号溝跡 (第253図)

第25号溝跡はZS-22・23グリッドに位置する。西側に第23・24号溝跡がある。延長上で直交する可能性も考えられるが、その関係は不明である。北東から南西方向に延びる。

規模は長さ7.80m、上端幅1.82～2.10m、下端幅0.84～0.89m、確認面からの深さ0.11～0.14mと極めて浅く、断面は底面と立ち上がりになだらかな皿状を呈している。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第26号溝跡 (第254図)

第26号溝跡はZK-32・33グリッドに位置する。西側に位置する深い谷地形に沿うように、北東から南西方向に延びている。規模は長さ4.77m、上端幅3.67～5.63m、下端幅2.76～4.35m、確認面からの深さ0.27～0.33mである。

埋土は黄褐色粘土ブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

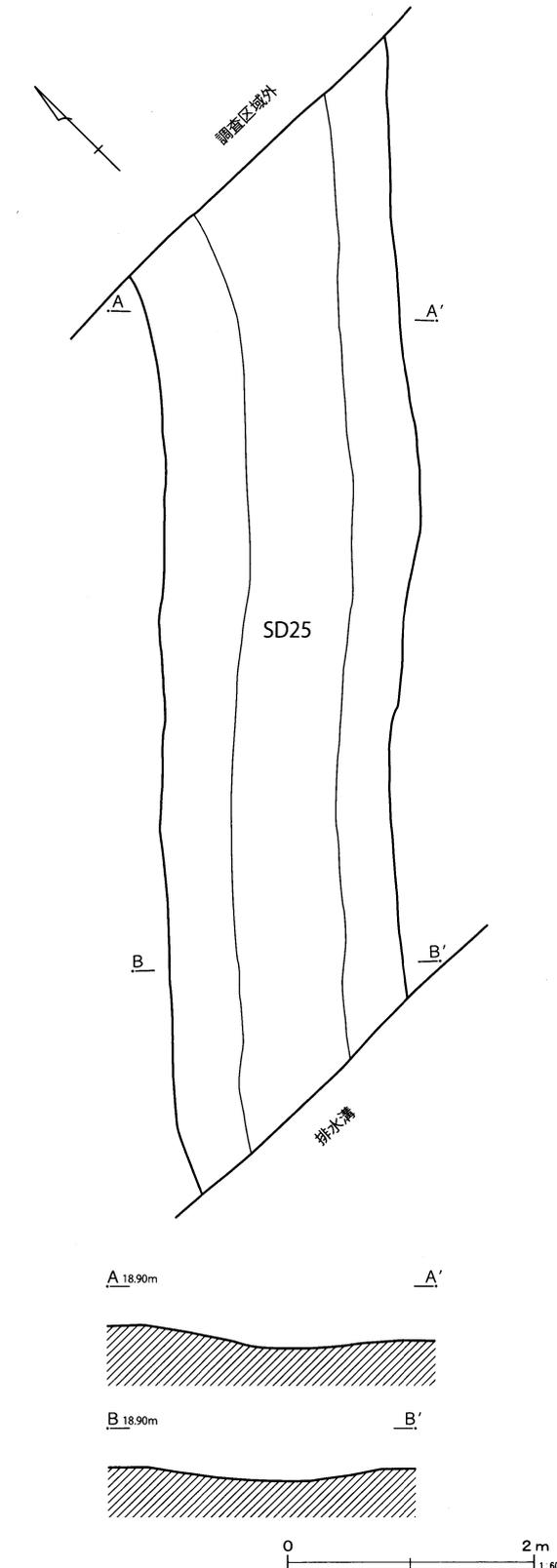
第27号溝跡 (第254図)

第27号溝跡はZK-12・13グリッドに位置する。第22号土壙に上面を削平されていた。東西方向に延び、西端は調査区外に抜ける。東端はトレンチの東側で検出されなかった。規模は長さ2.94m、上端幅0.72～0.84m、下端幅0.22～0.28m、確認面からの深さ0.23～0.33mで、断面は逆台状に掘り込まれていた。埋土は褐色土が主体で灰色粘土を多量に含んでいた。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第28号溝跡 (第254図)

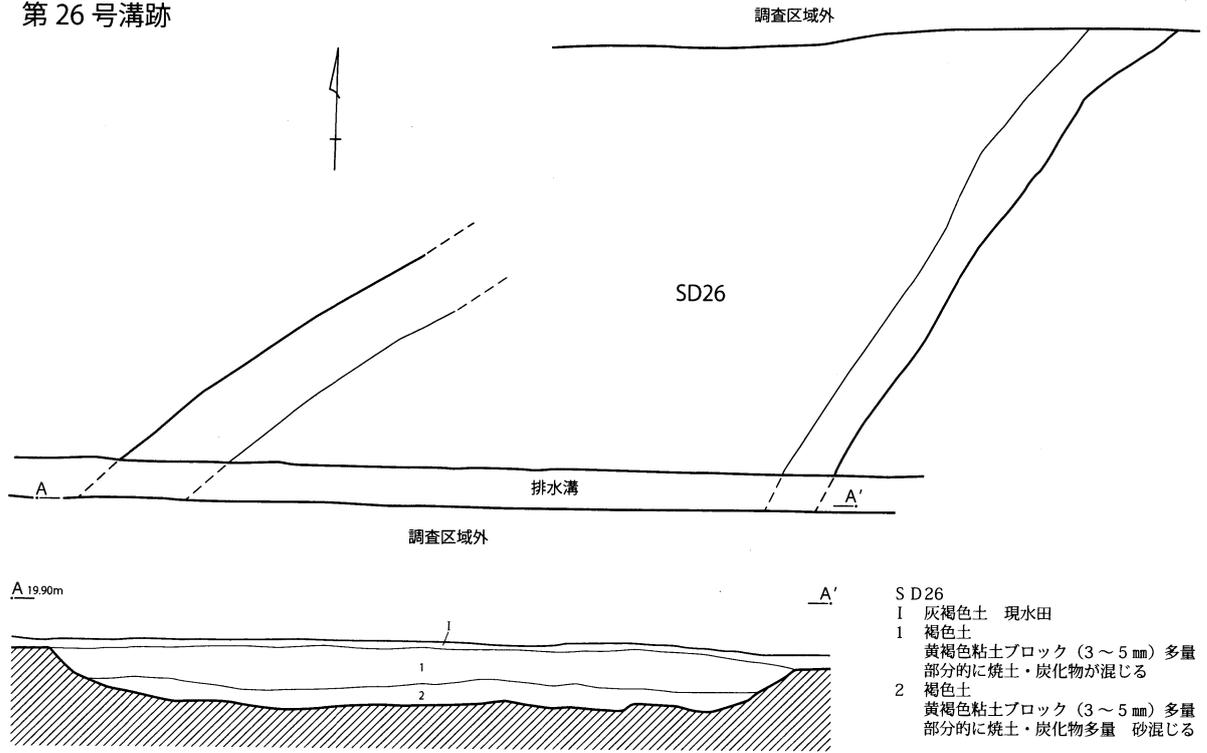
第28号溝跡はZM-11・12グリッドに位置する。第7号溝跡の下層から検出された。北西から南東方向に延びていた。規模は長さ3.78m、上端幅0.82



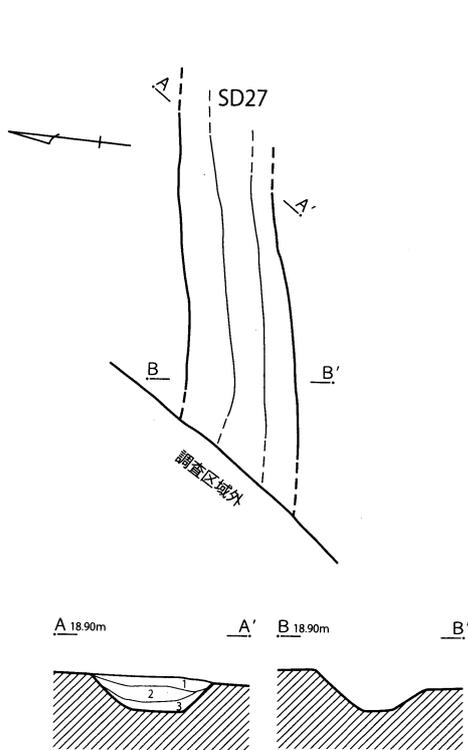
第253図 第25号溝跡

～1.90m、下端幅0.54～1.32m、確認面からの深さ0.22mで、断面は逆台状に掘り込まれていた。埋

第 26 号溝跡

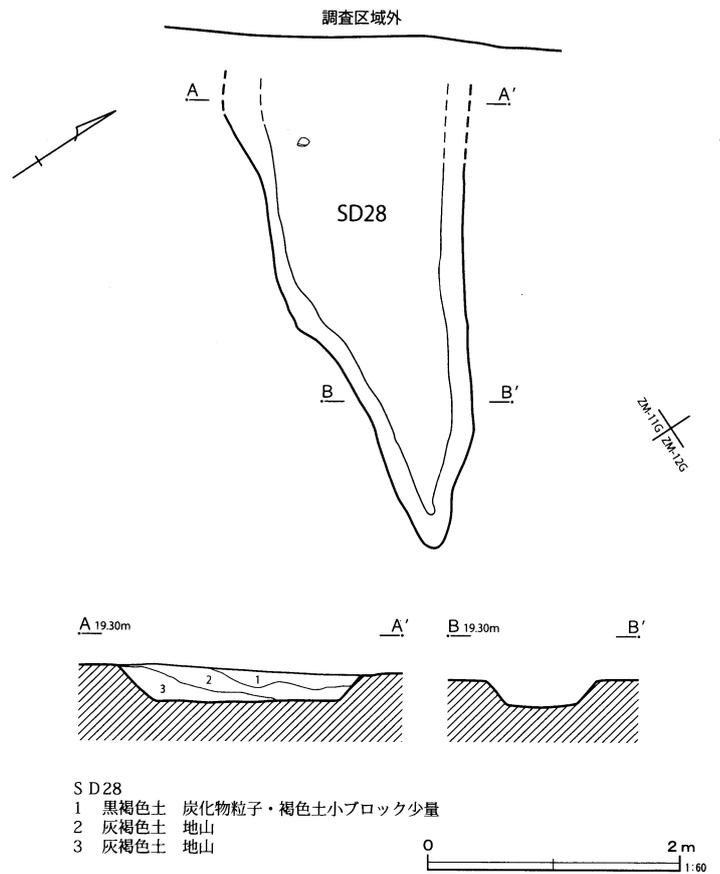


第 27 号溝跡



- SD27
 1 淡褐色土 灰色粘土多量 砂少量
 2 褐色土 褐色砂主体
 3 褐色土 灰色粘土多量

第 28 号溝跡



- SD28
 1 黒褐色土 炭化物粒子・褐色土小ブロック少量
 2 灰褐色土 地山
 3 灰褐色土 地山

第254図 第26・27・28号溝跡

土は黒褐色土である。

出土遺物は少なく、土師器台付甕脚部片と土師器甕片がある。図示可能な遺物はないが、第7号溝跡との関係や出土遺物から古墳時代前期の溝跡と考えられる。

第29号溝跡（第255・256図）

第29号溝跡はZO-28～31グリッドに位置する。南西から北東方向、南西から東方向に伸びる2筋が存在する。東方向に伸びる溝跡はトレンチによって途中切れ、調査区外に伸びる。重複する第55号住居跡を切り、第47号土壌に切られていた。また、北東端は東側にある第31号溝跡と直交し、本溝跡のほうが古いと考えられる。

規模は長さ24.0m、上端幅19.88～19.32m、下端幅17.12～18.12m、確認面からの深さ0.09～0.69mである。埋土は炭化物粒子混じりの暗灰褐色土を基調としていた。

出土遺物は溝全体から満遍なく出土している。特に東に伸びる流路から多く検出された。

土師器杯・台付甕・甌、須恵器杯・高台付杯・皿・壺類・瓶類・甕・円面硯、滑石製紡錘車、須恵器転用紡錘車、土錘などがある（第257図～259図）。

1は北武蔵型杯。扁平な丸底形態である。2は続比企型杯。3は比企型杯である。4・5は北武蔵型暗文杯で内面に放射暗文が施文される。

6～10は須恵器蓋。11・12は高台付杯である。12は東海産と推定される。13・14は大振りの無台杯。底部はやや丸底風で糸切り後再調整されている。15～32は小振りの杯で底部回転糸切り後無調整である。26～32にはヘラ記号、33は墨書と思われる。字形は不明確であるが「成」か。33は高台付杯で底部ヘラ記号がある。

34は須恵器提瓶。鉤状把手が付く。35は無台皿。36はいわゆる杯H身と思われる。湖西産である。37は壺Gに似る。南比企産で底部静止糸切り後ナデか。ヘラ記号がある。38は器壁の厚い扁壺状。末野産かとも思われるが、器種もよくわからない。

39は東海産の長頸瓶。40は末野産の横瓶か。

42は湖西産の大甕で、頸部に櫛歯状工具による列点文が2段巡る。44は筆立て付きの円面硯である。硯面は良く使い込まれている。脚部は欠損しているが、方形透孔の痕跡が4か所残る。産地は不明確であるが、胎土は精選されており東海産であろうか。45は墨書土器。椀体部に「西」と記されていた。46は土師器甌。古墳時代後期の所産であろう。

出土遺物の時期幅は大きい。古墳時代後期7世紀初頭前半、7世紀後半、8世紀前半～9世紀中頃までの遺物を含んでいる。最も多いのは底部回転糸切り後無調整の須恵器杯である。9世紀代を中心に機能していたと考えられる。

第30号溝跡（第260図）

第30号溝跡はZO-32グリッドに位置する。南北方向に伸び、調査区外に抜けていた。重複する第31号溝跡を切っていた。規模は長さ6.36m、上端幅0.30～0.45m、下端幅0.16～0.27m、確認面からの深さ0.07～0.11mと極めて浅く、断面は逆台状に掘り込まれていた。埋土は灰褐色土を基調としていた。

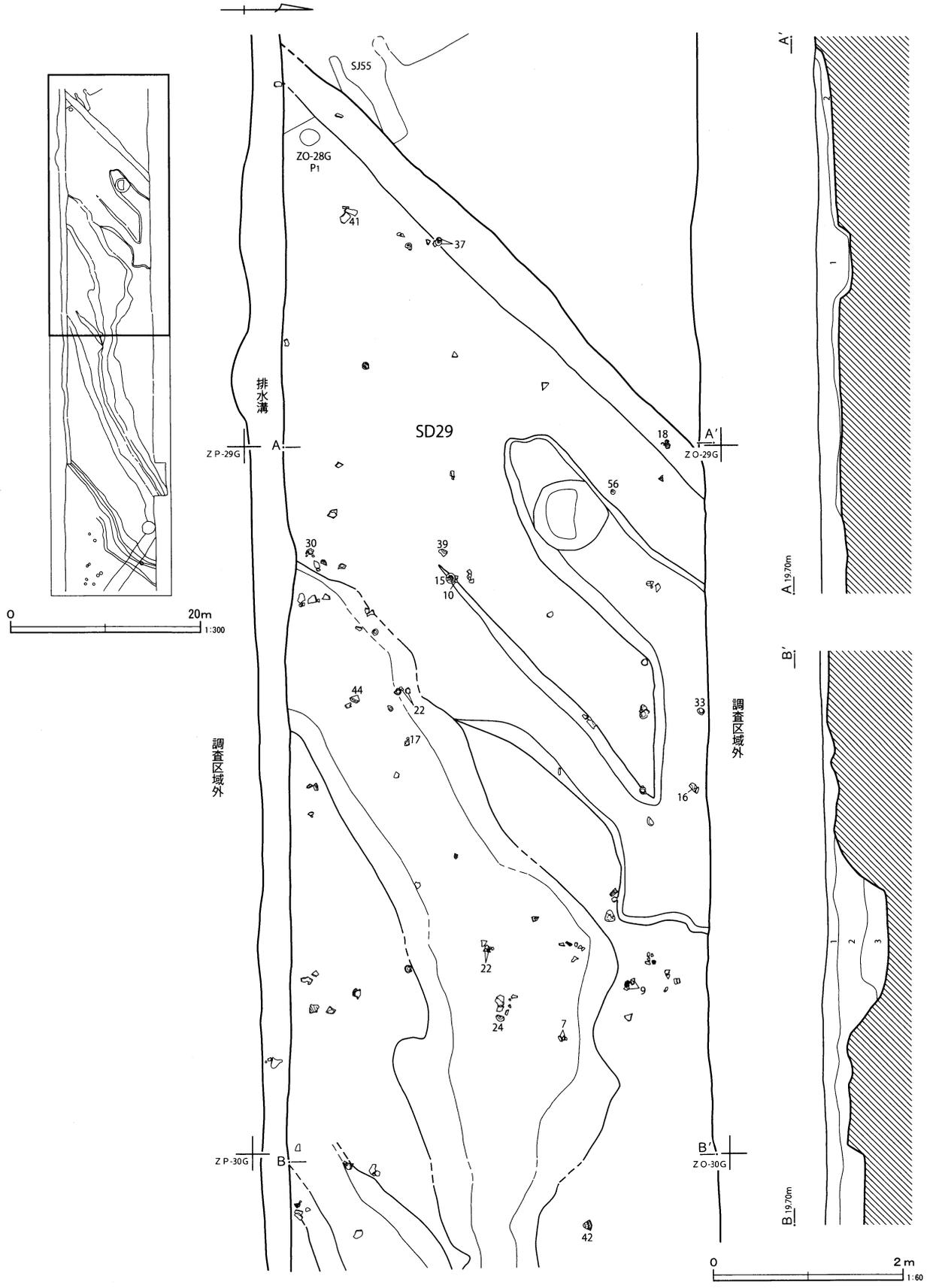
出土遺物は瓦片、土師器甕の小片があるのみである。時期は近世以降と推定される。

第31号溝跡（第261図）

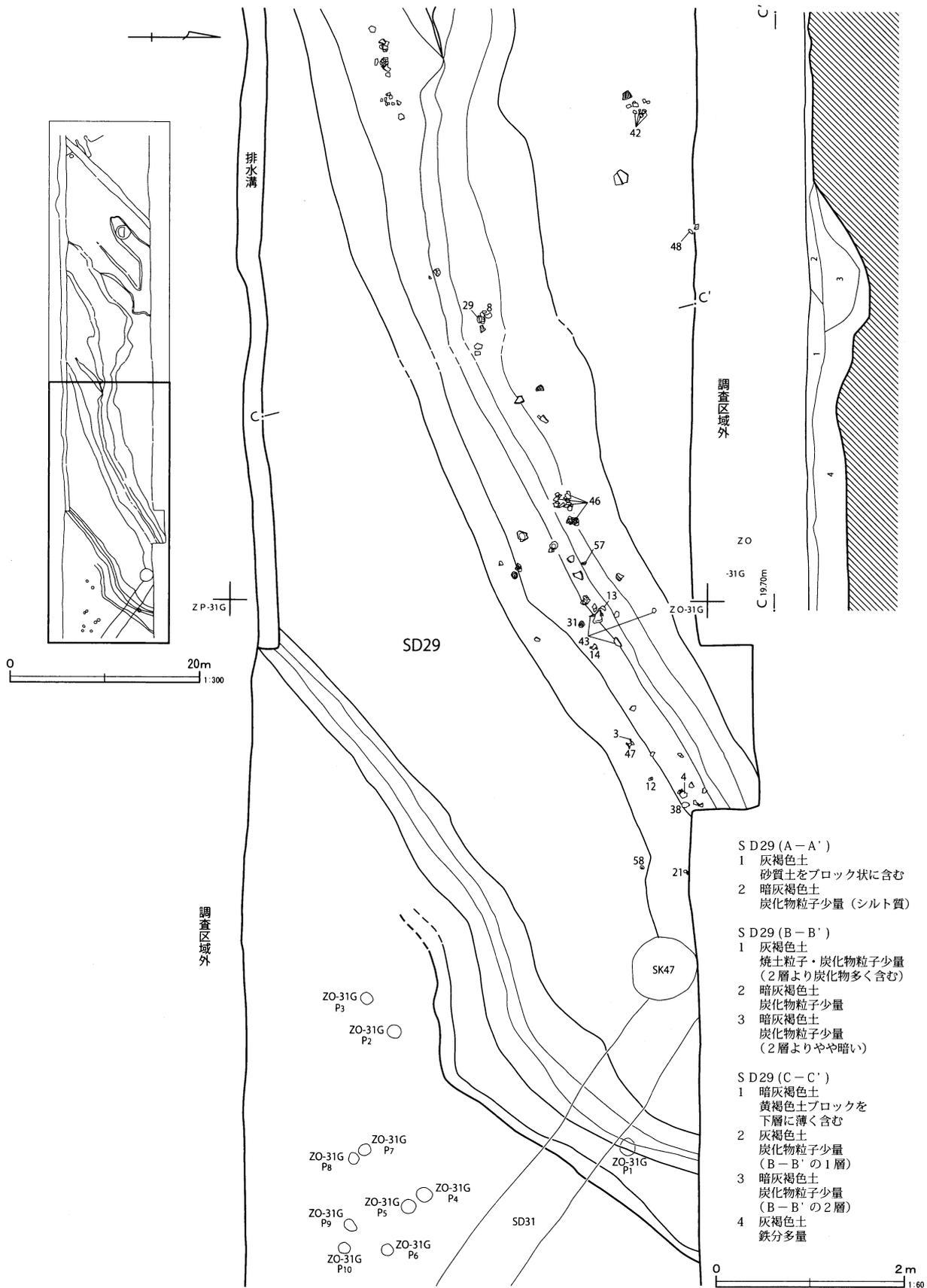
第31号溝跡はZO-31～33グリッドに位置する。重複する第47号土壌、直交する第30号溝跡に切られていた。北西端は西側にある第29号溝跡と直交し、本溝跡のほうが新しいと考えられる。北西から南東に、緩やかに弧を描きながら伸びている。規模は長さ13.92m、上端幅0.61～1.03m、下端幅0.34～0.80m、確認面からの深さ0.02～0.13mと極めて浅い。

埋土は暗褐色土を基調としていた。重複する第47号土壌、近接する第48・49号土壌と埋土が類似している。

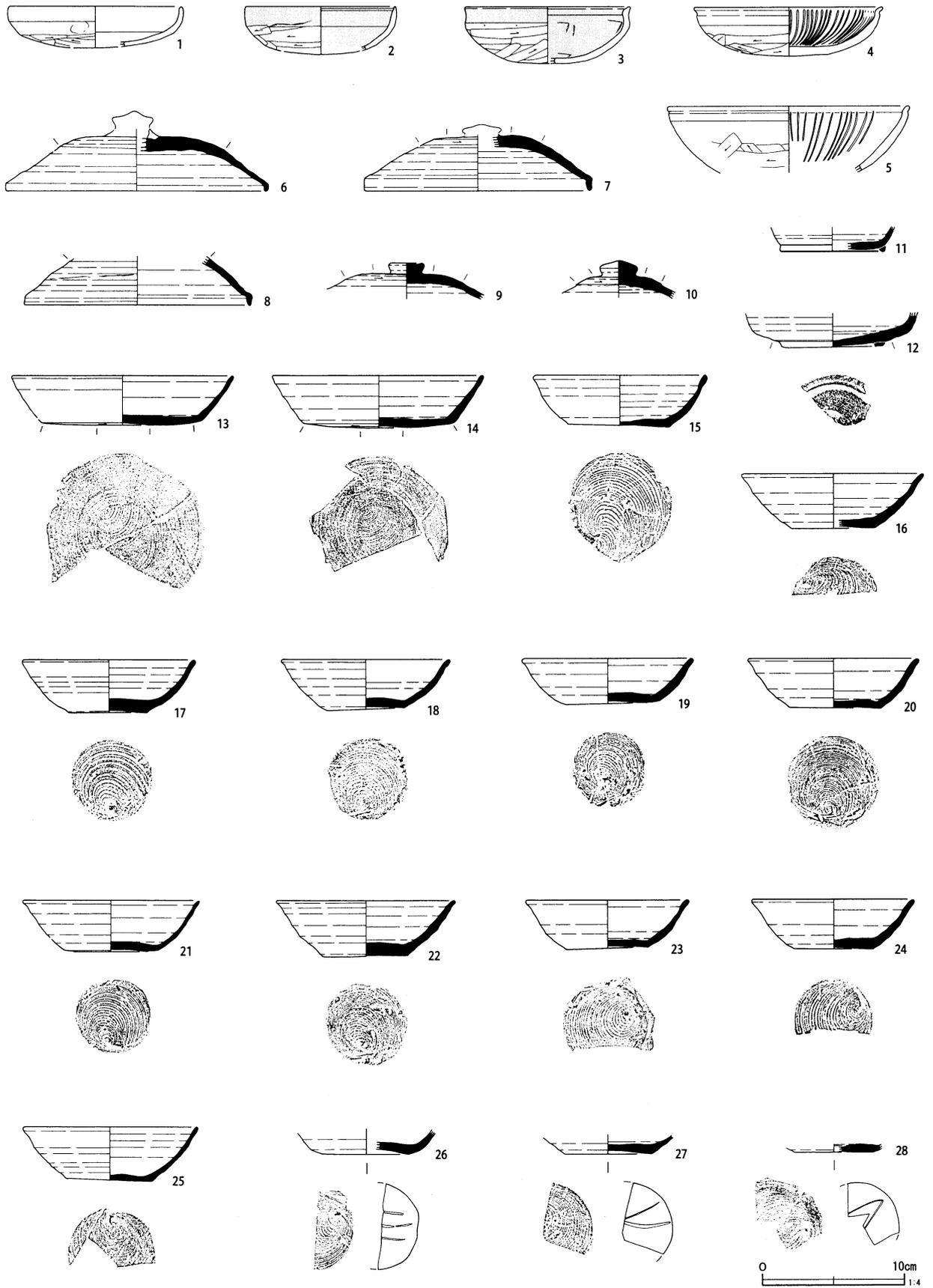
出土遺物は土師器杯と甕の小破片がある。時期



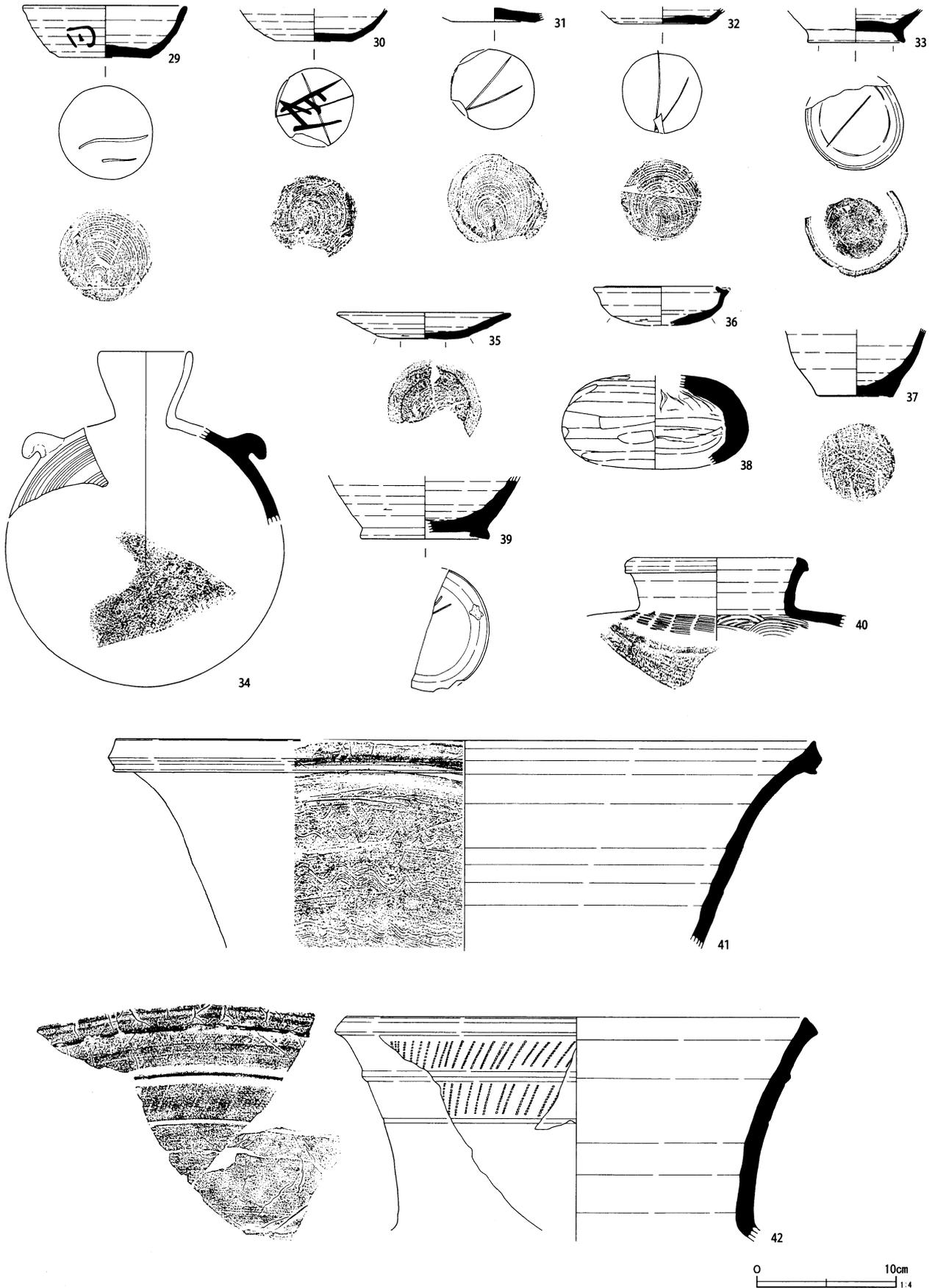
第255図 第29号溝跡 (1)



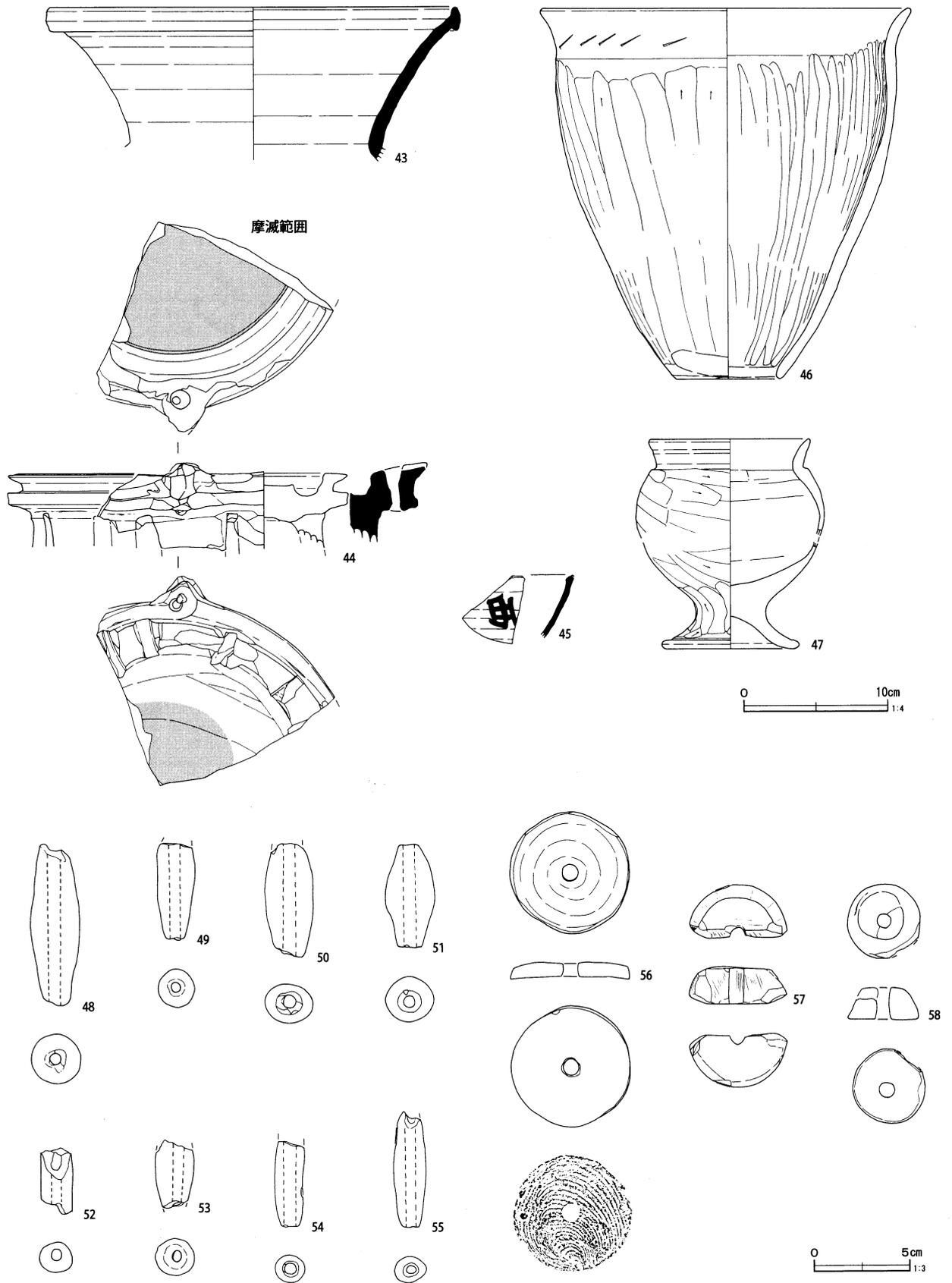
第256図 第29号溝跡 (2)



第257图 第29号沟迹出土遗物 (1)



第258図 第29号溝跡出土遺物（2）



第259图 第29号沟迹出土遗物 (3)

第58表 第29号溝跡出土遺物観察表 (第257~259図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	121	28	-	A C H I	40	普通	橙	北武蔵型坏 ZO-30G		
2	土師器	坏	(106)	31	-	E G H I	40	普通	橙	続比企型坏 白針なし 内面+口縁外面赤彩 ZO-30G		
3	土師器	坏	(116)	40	-	E H I J	30	普通	明赤褐	比企型坏 白針少含む 内面+口縁外面赤彩 Na152 ZO-30・31G		
4	土師器	坏	(132)	34	-	C E H I	40	普通	橙	北武蔵型暗文坏 内面放射状暗文 赤色粒子を多く含む 見込み部は風化により不鮮明 Na159 ZO-31G	103-1	
5	土師器	坏	(169)	47	-	C E H I K	30	普通	明赤褐	北武蔵型暗文坏 内面放射状暗文 ZO-30・31G		
6	須恵器	蓋	(184)	43	-	C E I J L	35	普通	暗灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ (ロクロ左回転) つまみ形不明確 ZO-29・30G		
7	須恵器	蓋	(158)	39	-	H I J	25	普通	にぶい褐	南比企産 白針含む 天井部回転糸切り後周辺ヘラケズリ (ロクロ右回転) つまみ欠失 Na63・64 ZO-29G		
8	須恵器	蓋	159	34	-	E I J K	60	良好	青灰	南比企産 内面自然釉 外面粘土積み上げ痕残る Na115 ZO-30・31G		
9	須恵器	蓋	-	25	-	E I J K	90	普通	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) つまみ径2.5cm Na60 ZO-29G		
10	須恵器	蓋	-	28	-	E I J K	30	普通	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) つまみ取り付け位置中心からずれている Na31 ZO-29G		
11	須恵器	高台付坏?	-	17	(74)	E I J K	25	良好	青灰	南比企産 外面自然釉付着し底部調整不明瞭 ZO-31G		
12	須恵器	高台付坏	-	24	(72)	I K	10	良好	灰	東海産か 微砂質で胎土精選 底部回転ヘラケズリ (方向不明) Na154 ZO-31G		
13	須恵器	坏	(155)	35	11.2	E G J	30	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内底径11.0cm Na144 ZO-30・31G		
14	須恵器	坏	(148)	37	(104)	D E J	30	普通	灰	南比企産 白針含む 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) 内底径9.5cm Na148 ZO-30・31G		
15	須恵器	坏	120	36	7.2	I J K	100	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径6.3cm 底部回転糸切り 外底面ヘラ記号あり Na30 ZO-29G	103-2・3	
16	須恵器	坏	(127)	38	(60)	E J K	30	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径5.8cm 底部回転糸切り 底径口径比47.2 Na47 ZO-29G		
17	須恵器	坏	121	37	5.6	E J K	60	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径6.2cm 底部回転糸切り 底径口径比46.3 Na94 ZO-29G	103-4	
18	須恵器	坏	(116)	36	5.5	E I J L	30	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径5.5cm 底部回転糸切り ヘラ記号有り 内外面火樺痕有り Na13 ZO-29G		
19	須恵器	坏	118	32	5.7	C G J	60	普通	灰白	南比企産 白針含む 内底径6.3cm 底部回転糸切り 底径口径比48.3 ZO-29G	103-5	
20	須恵器	坏	119	34	6.7	E I J K	85	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径6.1cm 底部回転糸切り 底径口径比56.3 ZO-29G	103-6	
21	須恵器	坏	(123)	36	5.2	E I J K	60	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径6.6cm 底部回転糸切り 底径口径比42.3 Na163 ZO-30・31G	103-7	
22	須恵器	坏	125	40	6.0	I J K L	60	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径5.4cm 底部回転糸切り 底径口径比48.0 Na78・98・99 ZO-29G	103-8	
23	須恵器	坏	(113)	35	5.8	I J	35	普通	灰	南比企産 白針含む 内底径5.8cm 底部回転糸切り 底径口径比51.3 ZO-29G		
24	須恵器	坏	(113)	35	(56)	I J K	45	普通	灰	南比企産 白針多 内底径5.8cm 底部回転糸切り 底径口径比49.6 Na77 ZO-29G	103-9	
25	須恵器	坏	121	38	6.1	I K L	60	良好	灰白	南比企産 内底径4.8cm 底部回転糸切り 外底面ヘラ記号有り ZO-29G	104-1	
26	須恵器	坏	-	18	(60)	I J K	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 外底面ヘラ記号「川」字状 ZO-29G		
27	須恵器	坏	-	14	(62)	I J	30	普通	青灰	南比企産 底部回転糸切り 外底面「く」状ヘラ記号有り ZO-28G		
28	須恵器	坏	-	0.6	(60)	I J K	30	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 「く」状ヘラ記号 ZO-28・31G		
29	須恵器	坏	11.6	3.7	6.6	E I J K	75	普通	灰	南比企産 体部側面不明墨書「内」か 内底径5.8cm 底部回転糸切り ヘラ記号有り Na115 ZO-30G	104-2	
30	須恵器	坏	-	2.4	5.6	E G I J	30	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り 内底径5.7cm 外底面墨書「成か?」「×」ヘラ記号 Na18 ZO-29G	104-3	
31	須恵器	坏	-	1.1	6.0	J K	90	普通	青灰	南比企産 白色針状物質多量に含む 底部回転糸切り ヘラ記号有り Na149 ZO-31G		
32	須恵器	坏	-	1.2	6.1	I J K	90	普通	灰	南比企産 内底径6.7cm 底部回転糸切り 底部ヘラ記号 内外面火樺痕 ZO-29G		
33	須恵器	高台付碗	-	2.5	6.9	E J K	70	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ 「一」状のヘラ記号 Na40 ZO-29G		
34	須恵器	提瓶	-	-	-	I L	5	良好	灰	提瓶の胴部片 鉤状把手が付く 外面同心円状カキ目 白色~淡黄色の自然釉 胎土白色微細粒子含み緻密 断面小豆色に焼き上がる 産地不明 ZO-29G	104-4	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
35	須恵器	皿か	(12.4)	1.9	6.6	E I J K	50	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ	ZO-29G	104-5
36	須恵器	坏	(8.0)	2.9	-	I	20	良好	灰	湖西産 坏H身 受部径9.8cm 底部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転)	ZO-29G	
37	須恵器	壺G?	-	4.8	5.5	E I J	70	普通	灰	南比企産 白針含む 底部静止?糸切り後ナデか「×」状のヘラ記号	No8 ZO-28G	104-6
38	須恵器	壺?	-	6.4	-	E I K L	40	普通	灰	末野産か 片岩なし 外面ヘラナデ(軽いケズリ) 内面絞り目	口縁欠失 非常に器壁厚い No160 ZO-31G	104-7.8
39	須恵器	長頸瓶	-	4.5	(9.2)	I K	20	良好	灰白	東海産 胴部~底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 器壁厚い	内外面に自然釉付着 外底面ヘラ記号有り No32 ZO-29G	
40	須恵器	横瓶か	11.9	5.9	-	B D E I K	75	良好	暗灰	末野産 片岩含む 横瓶(俵壺)の可能性あり 平行叩き+青海波文		
41	須恵器	大甕	(50.0)	15.1	-	E I J K	10	良好	灰	南比企産 頸部に13本組?の櫛描波状文を4段施文 内面自然釉	No3 ZO-28G	105-1
42	須恵器	甕	(33.0)	16.1	-	I	15	良好	灰白	湖西産 頸部凸帯の上下に櫛描列点文(12本組)を2段施文	No102・105 ZO-30G	105-2
43	須恵器	甕	28.2	10.7	-	I J K L	70	良好	灰	南比企産 No142・146・147 ZO-31G		105-3
44	須恵器	円面硯	(17.6)	4.5	-	E I K	25	良好	灰	筆立て付き 産地不明(湖西産か) 硯面は使い込まれ磨耗	脚部には方形透孔4孔 No96 ZO-29G	105-5・6・7
45	須恵器	無台椀	-	3.9	-	I J	5	普通	灰	南比企産 体部側面に墨書「西」横位に施す	ZO-29G	105-4
46	土師器	甌	(25.6)	25.8	(7.1)	C H I L	25	普通	にぶい黄橙	北武蔵の土か 白針なし 胴部外面ケズリ 下半はナデか	内面粗いミガキ又はナデ 器面風化しており調整不明瞭 No129・130・180 ZO-30G	
47	土師器	小型台付甕	(11.0)	14.5	(9.2)	C H I	50	普通	明赤褐	北武蔵の土 外面二次被熱を受けている 接合しないが同一	個体 No152 ZO-30・31G	
48	土製品	土錘	-	-	-	E H I	100	普通	赤褐	両端を僅かに欠く 大型品 長さ8.1cm 最大径2.6cm 孔径0.6	cm 重さ50.2g No108 ZO-30G	105-8
49	土製品	土錘	-	-	-	A E H I J	80	普通	明赤褐	上部を欠く 長さ(5.0cm) 最大径1.9cm 厚さ2.0cm 孔径0.5	cm 重さ16.9g ZO-29G	105-9
50	土製品	土錘	-	-	-	A E H I	-	普通	明褐	上端を欠く 長さ5.9cm 最大径2.5cm 厚さ2.1cm 孔径0.7cm	重さ28.7g ZO-29G	106-1
51	土製品	土錘	-	-	-	A E H I	100	良好	にぶい橙	長さ5.4cm 最大径2.5cm 厚さ2.4cm 孔径0.6cm 重さ27.9g	ZO-28G	106-2
52	土製品	土錘	-	-	-	A H I	40	普通	赤褐	上下両端を欠く 長さ(3.5cm) 最大径1.7cm 厚さ1.7cm 孔径0.7cm	重さ7.7g ZO-29G	
53	土製品	土錘	-	-	-	A C E H I	40	普通	赤褐	上下両端欠く 長さ(3.5cm) 最大径2.0cm 厚さ2.0cm 孔径0.6	cm 重さ11.5g ZO-29G	
54	土製品	土錘	-	-	-	E H I	-	普通	明赤褐	上端を欠く 長さ(4.4cm) 最大径1.6cm 厚さ1.4cm 孔径0.6	cm 重さ8.8g ZO-29G	106-3
55	土製品	土錘	-	-	-	C E H I	-	普通	浅黄橙	一部欠失 長さ6.0cm 最大径1.2cm 孔径0.6cm 重さ12.8g	ZO-29G	106-4
56	須恵器	転用紡錘車	-	-	-	E I J	100	普通	灰	南比企産 須恵器坏底部を転用 径6.2~6.3cm 孔径0.8~1.0cm	厚さ0.8cm 重さ39.25g 坏底部の周縁を擦って整形 裏面糸切り痕残る No15 ZO-29G	106-5
57	石製品	紡錘車	-	-	-	-	50	-	明灰	約半分欠損するが破面にも擦った痕跡がある 残存径5.1cm	厚さ1.9cm 孔径0.8cm 重さ44.04g 滑石製 No137 ZO-30G	106-7.8
58	石製品	紡錘車	-	-	-	-	-	-	-	上面の2/3欠損する 側面と底面は平滑 直径3.8cm 厚さ1.7cm	孔径0.7~0.8cm 重さ30.62g 滑石製 No164 ZO-31G	106-6

は不明確であるが、中・近世と思われる。

第32号溝跡(第262図)

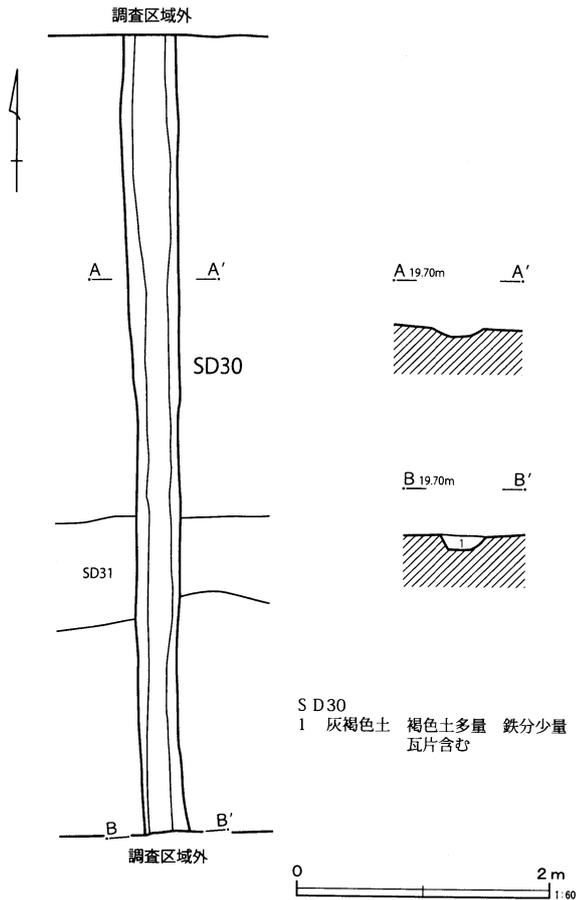
第32号溝跡はZP-25グリッドに位置する。東西方向に延び、両端は調査区外に抜けている。南側にある第33号溝跡は概ね平行しており、覆土も近い。また、南側約6mにはほぼ並行して第22号溝跡がある。

規模は長さ4.26m、上端幅1.36~1.53m、下端幅0.22

~0.37m、確認面からの深さ0.29~0.37mである。

埋土は灰色粘土を多量に含む暗灰色土から暗茶褐色土を基調としていた。

出土遺物は第33号溝跡と混在してしまった。土師器比企型坏・北武蔵型坏・鉢・甕と壺の破片がある。大部分は甕類の胴部片であり図示可能な遺物はない。口縁が内屈する北武蔵型坏があり、7世紀後半代の遺物も若干含まれるが、須恵器が全



第260図 第30号溝跡

く含まれないことを考えると7世紀前半中心と
考えておきたい。

第33号溝跡 (第262図)

第33号溝跡はZP-25グリッドに位置する。東
西方向に延び、両端は調査区外に抜けている。北
側に第32号溝跡が概ね平行して延びている。南側
約4mには第22号溝跡がある。

規模は長さ462m、上端幅0.63~0.77m、下端幅0.18
~0.28m、確認面からの深さ0.09~0.18mと浅い。
埋土は灰色粘土を多量に含む暗灰色土である。

出土遺物は第32号住居跡と分離できないが、土
師器坏・甕などがある。7世紀前半中心と考えて
おきたい。

第34号溝跡 欠番

第35号溝跡 (第262図)

第35号溝跡はZO-33・34グリッドに位置する。

概ね南北方向に延び、北端は調査区外に抜けてい
る。南端は調査区内で消滅していた。規模は長さ
4.62m、上端幅0.20~0.30m、下端幅0.06~0.22m、
確認面からの深さ0.03~0.07mと極めて浅く、断面
は逆台形状に掘り込まれていた。

出土遺物はない。時期は不明である。

第36号溝跡 (第262図)

第36号溝跡はZO-34グリッドに位置する。重
複する第37号溝跡を切っていた。南西から北東方
向に延びる。南西端は調査区外に抜けていた。

規模は長さ7.74m、上端幅0.28~0.40m、下端幅0.12
~0.22m、確認面からの深さ0.04~0.06mと極めて
浅く、断面は逆台形状に掘り込まれていた。埋土
は灰色粘土を含む暗褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明である。

第37号溝跡 (第263図)

第37号溝跡はZO-34グリッドに位置する。重
複する第36号溝跡に切れ、東側約1.5mにはほぼ
平行して第38号溝跡がある。南北方向に延び、南
端は調査区外に抜けていた。

規模は長さ3.99m、上端幅0.25~0.45m、下端幅0.25
~0.38m、確認面からの深さ0.04~0.20mと浅く、
断面は逆台形状に掘り込まれていた。埋土は灰色
粘土を多量に含む灰褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第38号溝跡 (第263図)

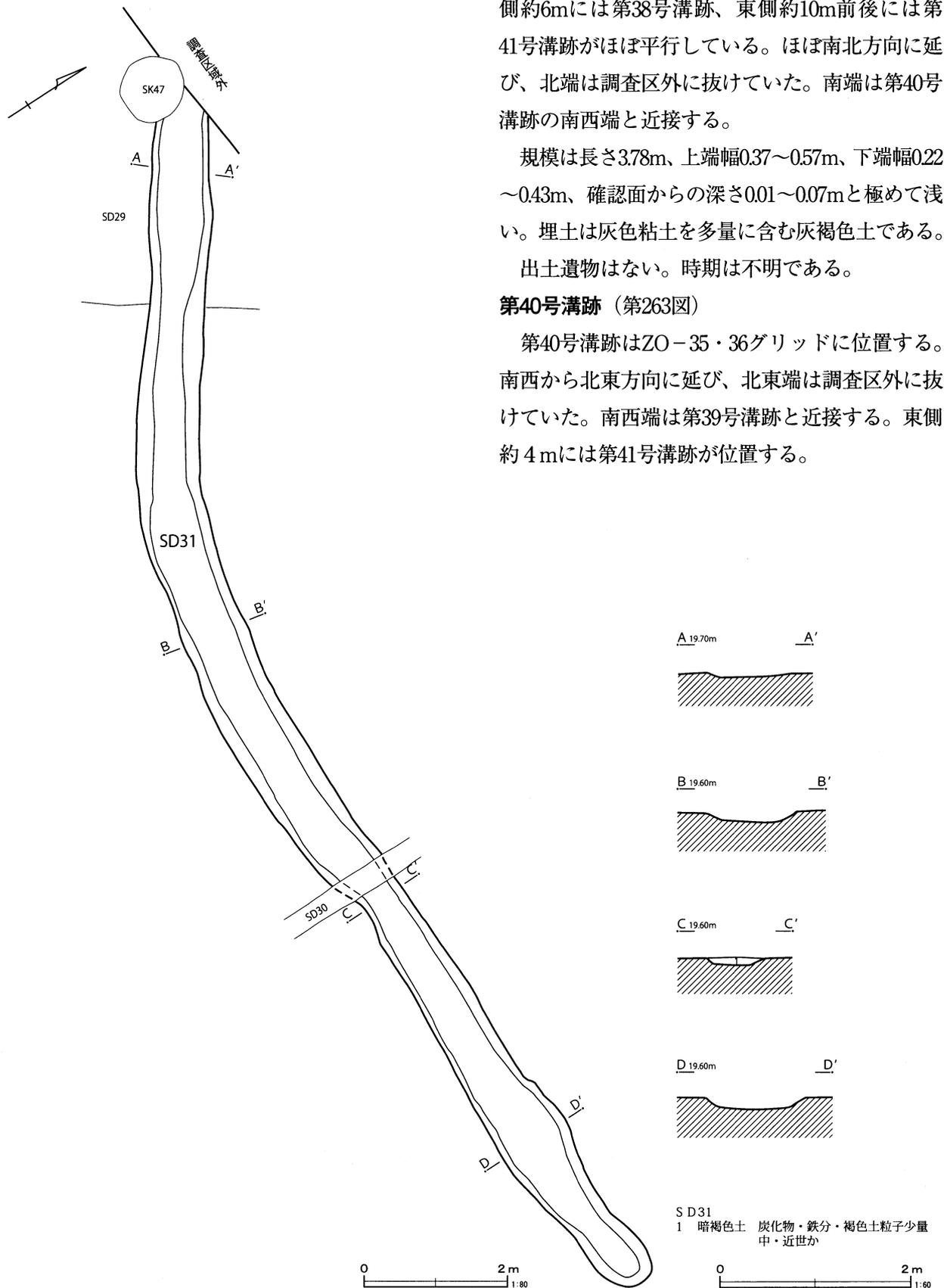
第38号溝跡はZO-34・35グリッドに位置する。
西側には第36号溝跡が近接するが、直接重複はし
ない。約1.5m前後には第37号溝跡、東側6mには
第39号溝跡が位置する。ほぼ南北方向に延び、南
端は調査区外に抜けている。

規模は長さ3.84m、上端幅0.27~0.35m、下端幅0.09
~0.23m、確認面からの深さ0.03~0.09mと極めて
浅い。

出土遺物はなく、時期は不明である。

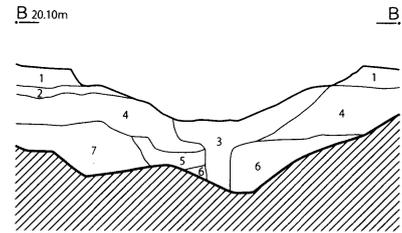
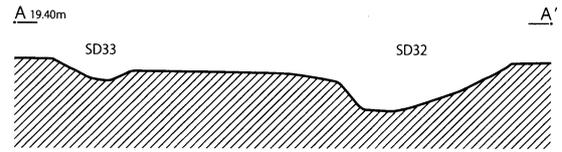
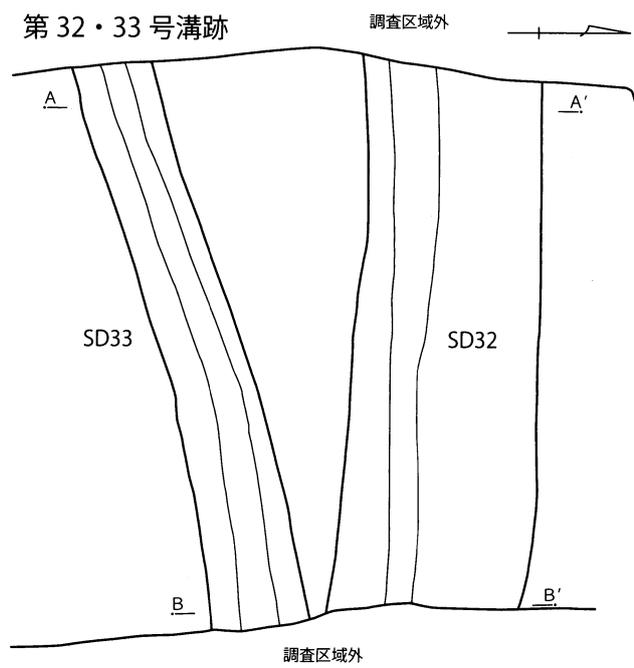
第39号溝跡 (第263図)

第39号溝跡はZO-35グリッドに位置する。西



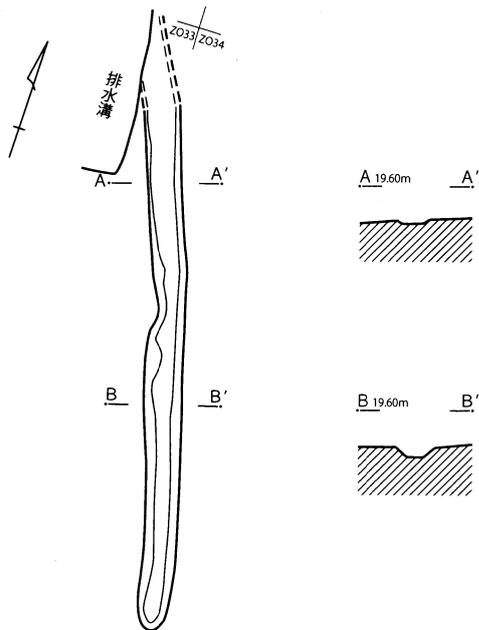
第261図 第31号溝跡

第 32・33 号溝跡

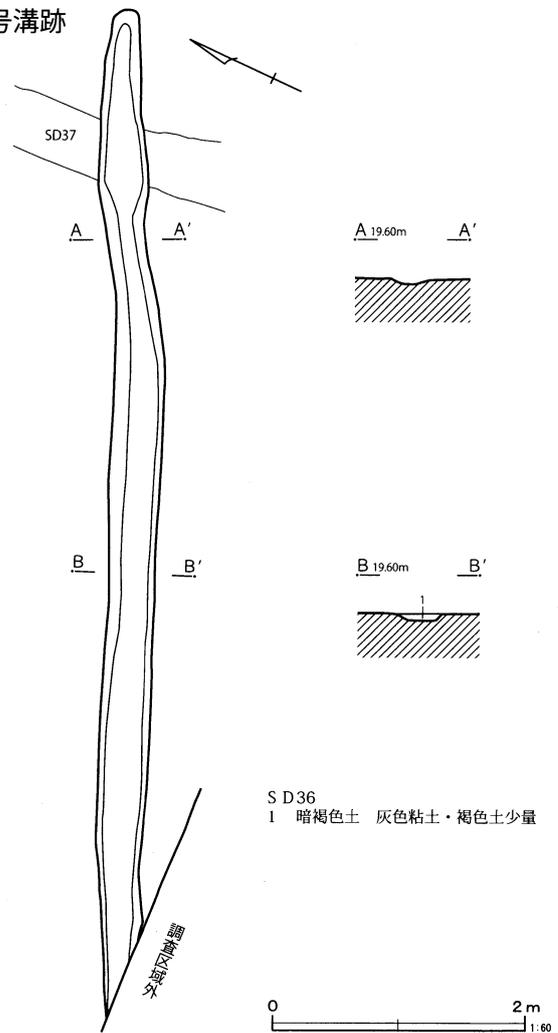


- S D 32・33
- 1 現耕作土
 - 2 暗褐色土 古い耕作土
 - 3 暗灰色土 水路掘り込みか
 - 4 暗褐色土 鉄分多量 褐色粘土少量
 - 5 暗灰色土 灰色粘土主体
 - 6 暗茶褐色土 灰色粘土多量
 - 7 暗灰色土 灰色粘土多量 鉄分多量

第 35 号溝跡

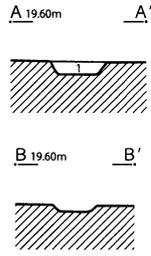
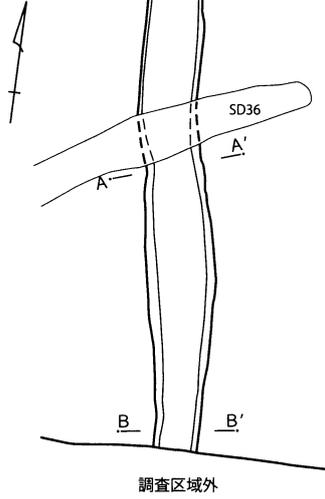


第 36 号溝跡



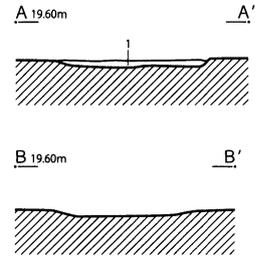
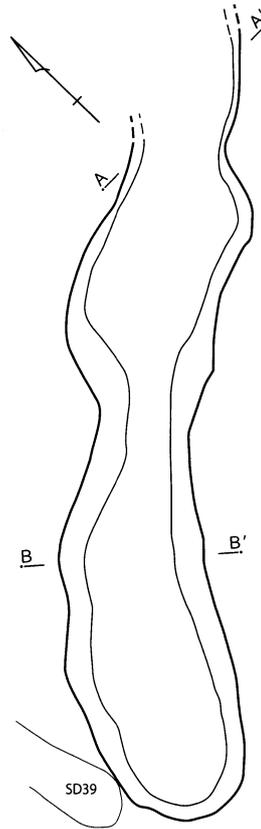
第262図 第32・33・35・36号溝跡

第 37 号沟迹



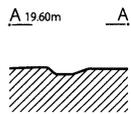
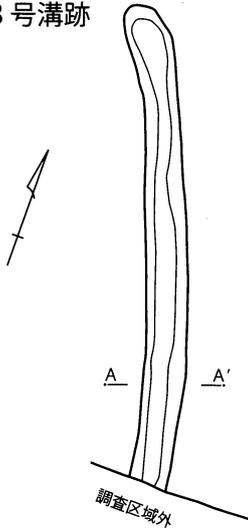
S D 37
1 灰褐色土 灰色粘土多量

第 40 号沟迹

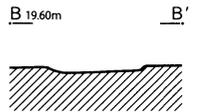
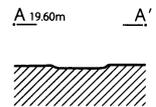


S D 40
1 暗褐色土 灰色粘土・褐色土少量

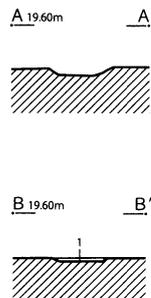
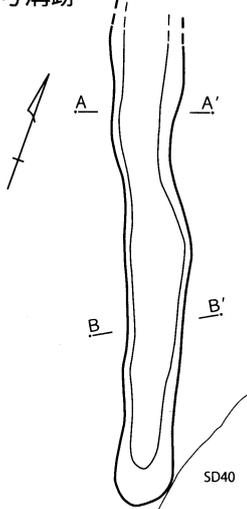
第 38 号沟迹



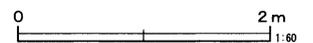
第 41 号沟迹



第 39 号沟迹



S D 39
1 灰褐色土 灰色粘土やや多量



第263图 第37~41号沟迹

規模は長さ6.12m、上端幅0.73~1.32m、下端幅0.35~0.91m、確認面からの深さ0.05~0.08mと極めて浅い。埋土は灰色粘土を含む暗褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明である。

第41号溝跡 (第263図)

第41号溝跡はZO-36グリッドに位置する。西側約10m前後には第39号溝跡がほぼ平行し、約4m西側には第40号溝跡がある。ほぼ南北に延び、北端は調査区外に抜けていた。

規模は長さ4.38m、上端幅0.43~0.76m、下端幅0.38~0.70m、確認面からの深さ0.04mと極めて浅い。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第42号溝跡 (第264図)

第42号溝跡はZO-37グリッドに位置する。南側約1mに第43号溝跡が平行している。断面の状況からも同一の溝跡と思われる。東西方向に延び、両端は調査区外に抜けていた。

規模は長さ7.80m、上端幅0.60~0.86m、下端幅0.28~0.33m、確認面からの深さ0.04~0.13mと極めて浅い。埋土は灰褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明である。

第43号溝跡 (第264図)

第43号溝跡はZO-37グリッドに位置する。北側約1mに第42号溝跡が平行している。東西方向に延び、東西両端は調査区外に抜けていた。

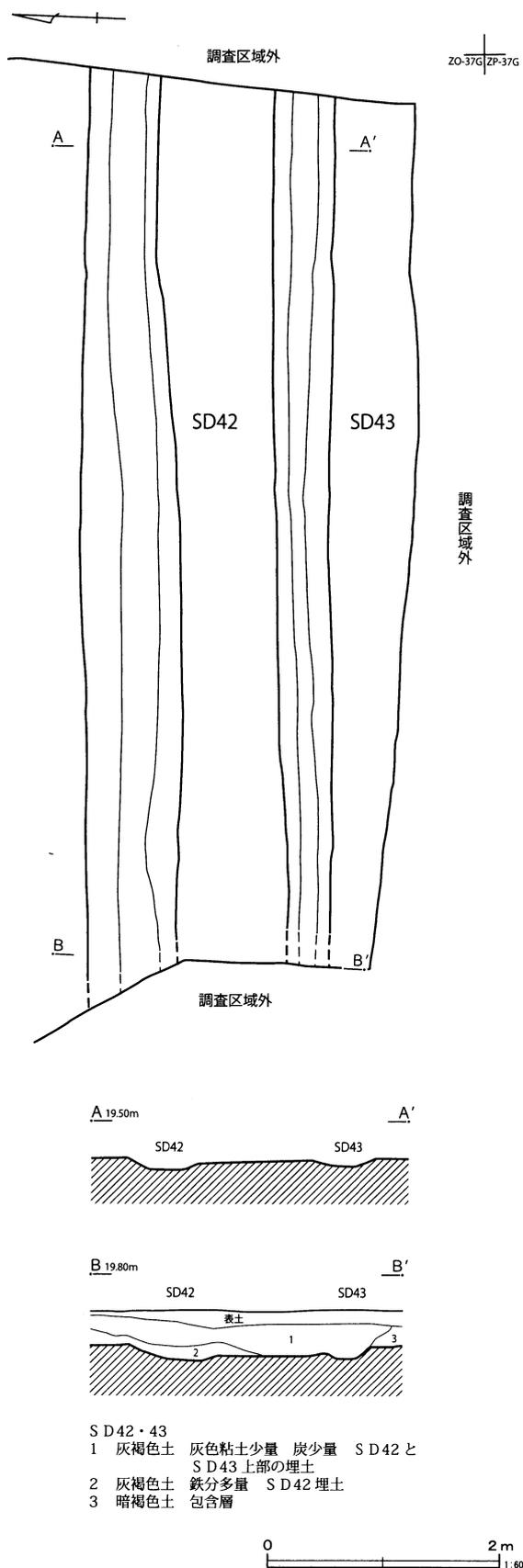
規模は長さ7.20m、上端幅0.35~0.52m、下端幅0.12~0.22m、確認面からの深さ0.07~0.10mと極めて浅い。埋土は灰褐色土である。

出土遺物は器壁の厚い土師器甕の胴部片と土師器坏片が少量あるが、風化している。遺構に伴うか否か不明確であり、溝跡の時期は不明である。

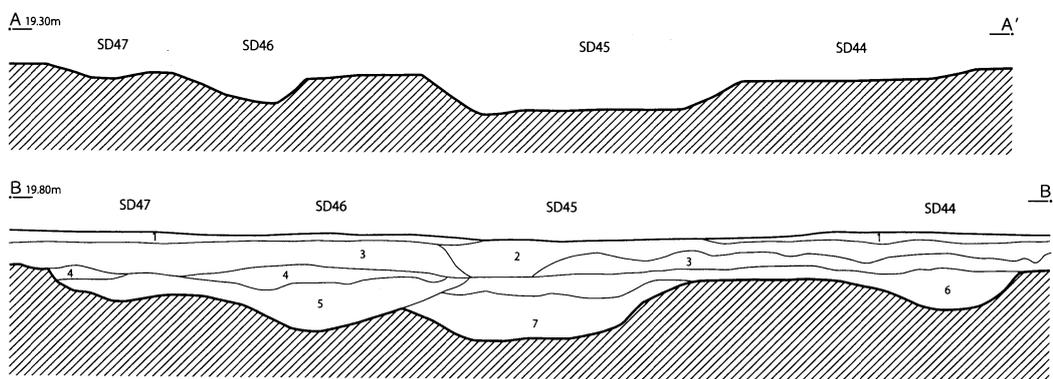
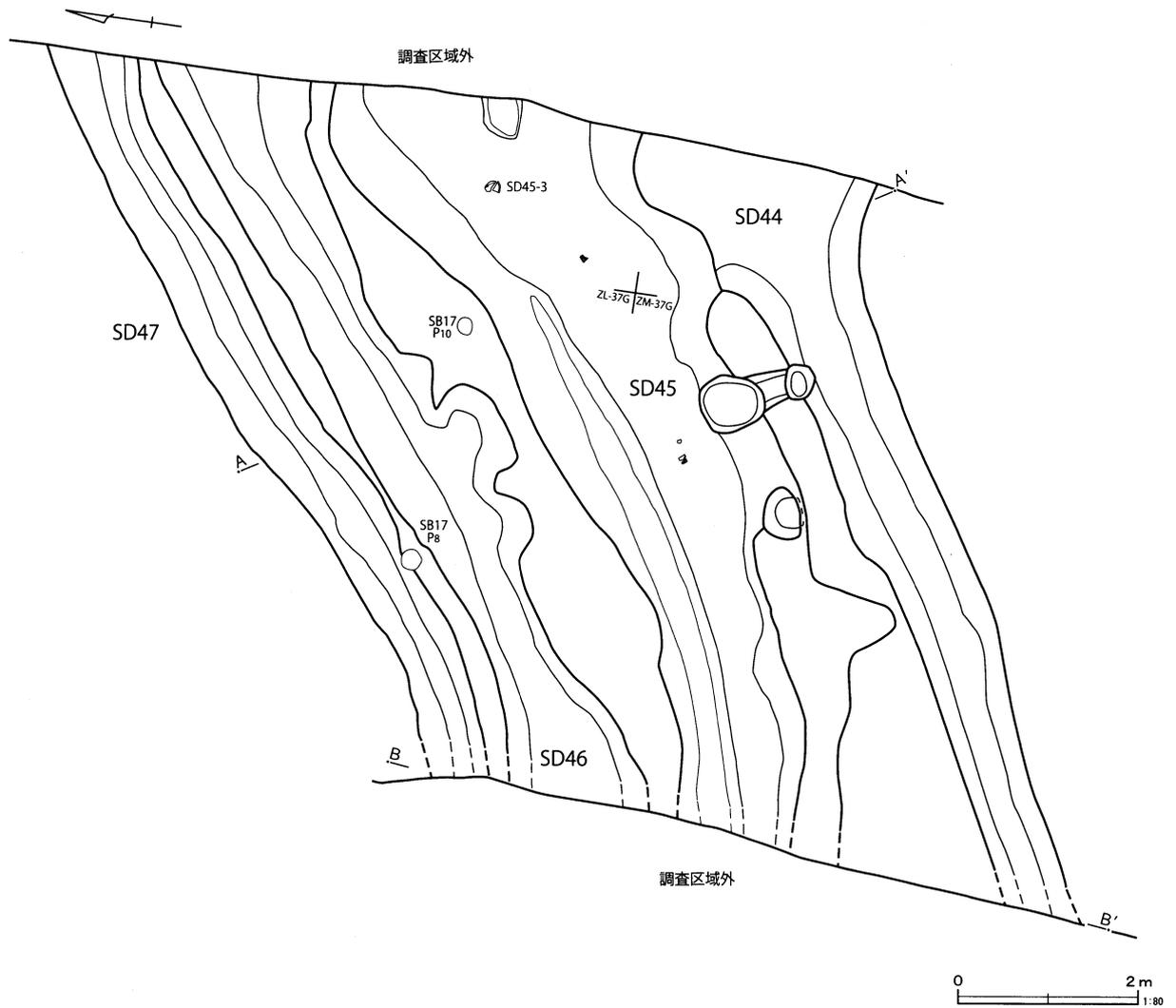
第44~47号溝跡 (第265図)

第44~47号溝跡はZL・ZM-37・38グリッドに位置する。流路は4条あるが、断面の状況から一連の溝跡と考えられる。南西から北東方向に延び、両端は調査区外に抜けていた。

規模は長さ8.72m、上端幅6.60~8.00m、掘り込

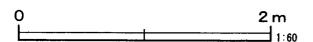


第264図 第42・43号溝跡



S D 44・45・46・47

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 表土 | 5 褐色土 灰色粘土・鉄分多量
炭化物微量 |
| 2 暗褐色土 灰色粘土少量 旧表土 | 6 褐色土 炭化物・灰色粘土少量 |
| 3 褐色土 炭化物少量 包含層 | 7 褐色土 灰色粘土・炭化物多量 |
| 4 褐色土 灰色粘土多量 鉄分少量 炭化物微量 | |



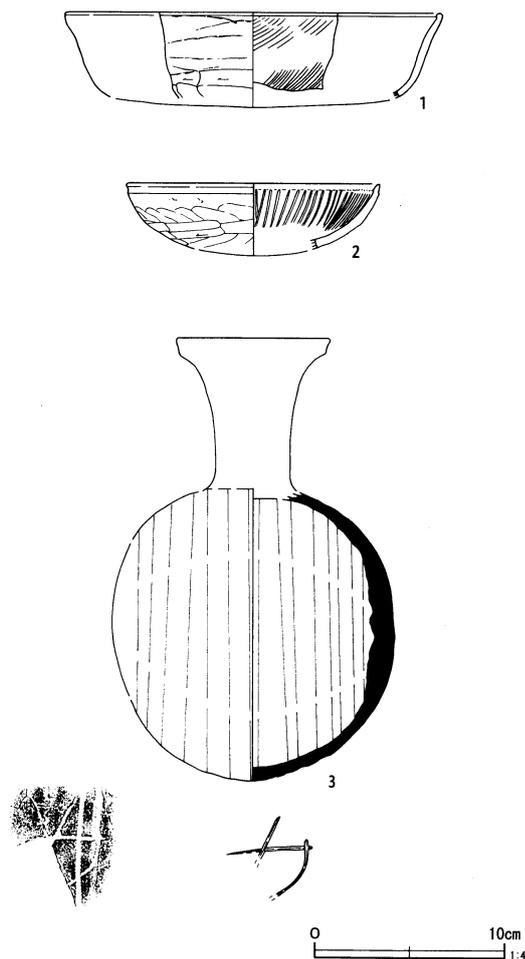
第265図 第44～47号溝跡

み面からの深さ0.48mである。埋土は灰色粘土、炭化物を含む褐色土を基調としていた。

出土遺物は主に第45号溝跡とした部分から出土

した。土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶などがある。3点を図示した（第266図）。

1は畿内産土師器坏Aである。推定口径19.7cm、

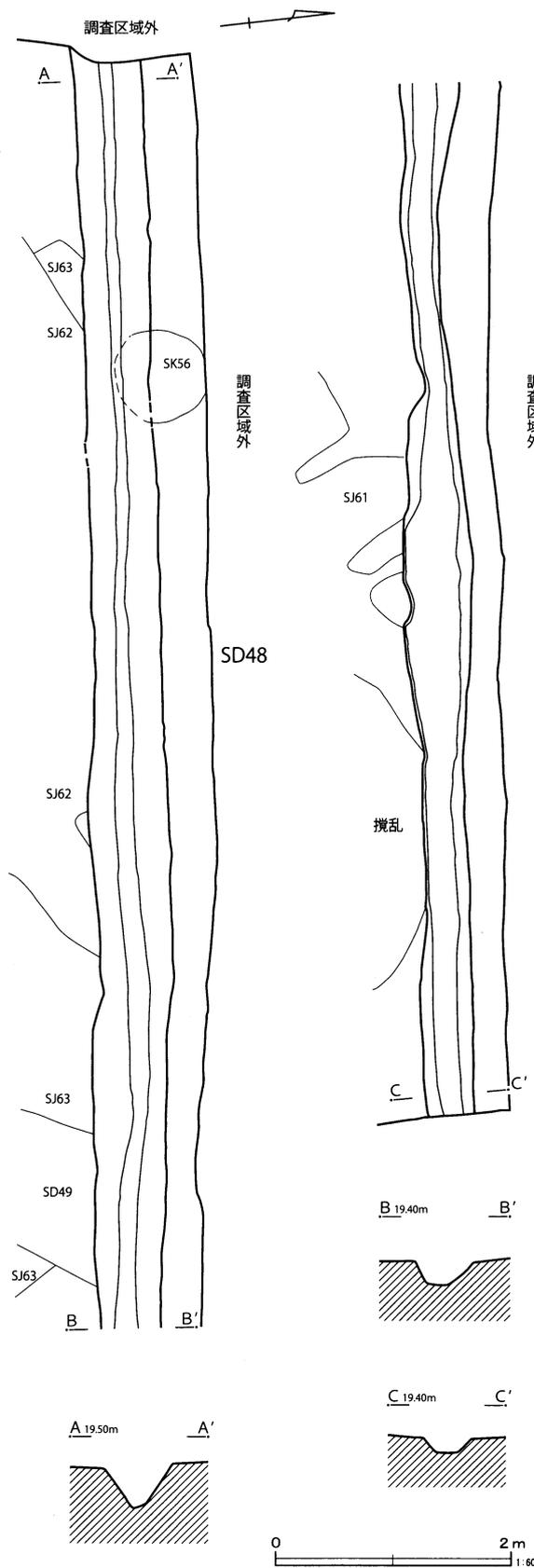


第266図 第45号溝跡出土遺物

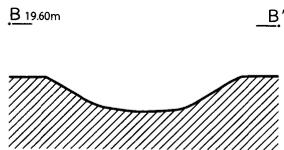
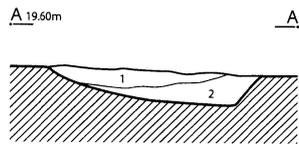
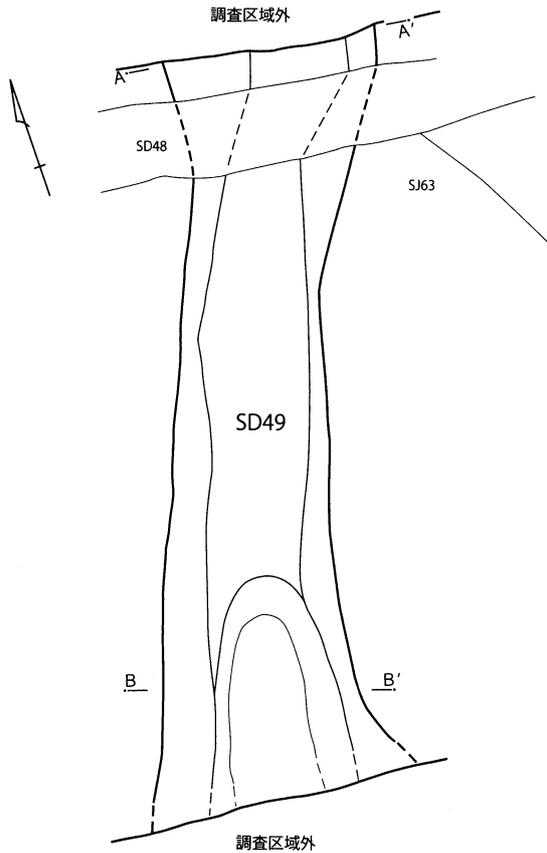
残存高45cm。底部を欠くが、口縁部は屈曲し、端部を内側に巻き込む。薄手で硬質な焼き上がりである。外面はヘラミガキと底部付近はヘラケズリか。内面は斜め（右上がり）の放射暗文が2段施文されている。一部風化しており、暗文が見えない部分がある。残存部には底部の螺旋暗文は施されない。胎土に白色粒子を含み、精良である。焼成は良好で、色調は橙褐色。10%残。図版No. 106。畿内産土師器の搬入品と考えられる。

2は土師器北武蔵型暗文坏である。推定口径132cm、残存高34cm。胎土に角閃石・白色粒子・赤色粒子を含む。色調は橙褐色。焼成は普通で25%残存する。内面に放射暗文が施文される。

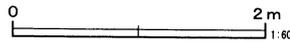
3は須恵器フラスコ形瓶。口縁部を欠いている。



第267図 第48号溝跡



SD49
 1 淡暗褐色土 炭化物少量 2層より淡い
 2 暗褐色土 炭化物・褐色土少量



第268図 第49号溝跡

残存高15.3cm。図示部の50%残存。肩部外面と底部内面に自然釉が付着する。胎土には白色粒子と黒色粒子が含まれるが緻密である。焼成は良好で、色調は灰白色。底部外面に「サ」状のヘラ状工具で刻まれた線刻（ヘラ記号）がある。東海産、おそらく湖西産と推定される。図版No.107。

遺物の時期は7世紀後半から8世紀前半が中心と考えられる。

第48号溝跡（第267図）

第48号溝跡は調査区北東端部のZF-36・37・38グリッドに位置する。東西方向に延び、両端は調査区外に抜けていた。重複する第62・63号住居跡、第56号土壌、第49号溝跡を切っていた。ガラス片、陶磁器片などを含む近代の溝跡と考えられる。

規模は長さ19.62m、上端幅0.23~0.67m、下端幅0.11~0.38m、確認面からの深さ0.10~0.42mで、断面は逆台形状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器、須恵器片とガラス片や陶磁器片を含み、近代以降の溝跡と考えられる。

第49号溝跡（第268図）

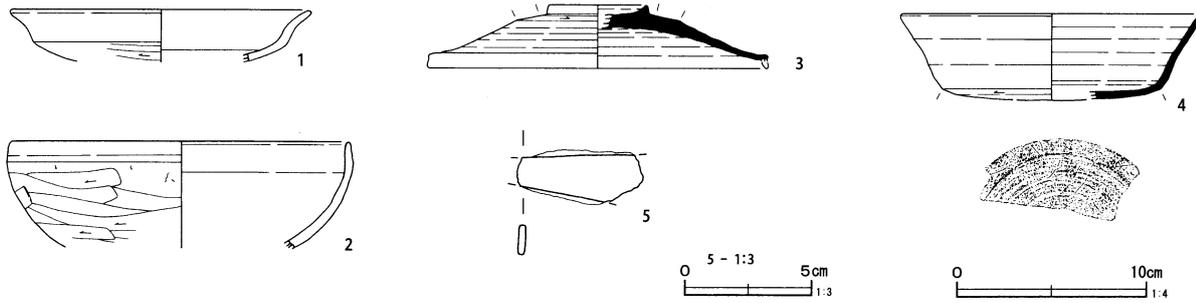
第49号溝跡はZF-37グリッドに位置する。北北東から南南西方向に走り、両端は調査区外に延びる。重複する第63号住居跡を切り、第48号溝跡に切られていた。陶磁器片などを含む近世（18世紀後半~19世紀前半）の溝跡と考えられる。

規模は長さ5.97m、上端幅1.07~1.82m、下端幅0.60~0.79m、確認面からの深さ0.10~0.36mである。埋土は炭を含む暗褐色土である。

出土遺物は土師器、須恵器片と近世後期（18世紀後半~19世紀前半）の陶磁器片、馬の歯が含まれる。

第59表 第49号溝跡出土遺物観察表（第269図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	皿	(158)	27	-	C E I	10	普通	橙	北武蔵型皿		
2	土師器	椀	(178)	56	-	A B E H I	20	良好	橙	北武蔵型椀(椀) 無黒斑土器か 角閃石高温で消失か		
3	須恵器	蓋	-	29	-	E G J L	25	普通	灰白	南比企産 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 環状つまみ(径5.2cm) 口縁欠失		
4	須恵器	坏	(158)	45	(11.4)	E I J K	15	良好	灰	南比企産 白針含む 底部全面回転ヘラケズリ Y6段階		
5	鉄製品	板状品	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.9cm 幅1.1~1.8cm 厚さ0.35cm		107-4



第269図 第49号溝跡出土遺物

8. 畠跡

銭塚遺跡南東部のZS-30~34グリッドにかけて浅い溝跡が連続する遺構が検出された。周囲には住居跡が分布せず、非集落域であること、溝状遺構の集積が畠状遺構、畝状遺構と呼ばれるものに近似することから、ここでは畠跡として扱う。

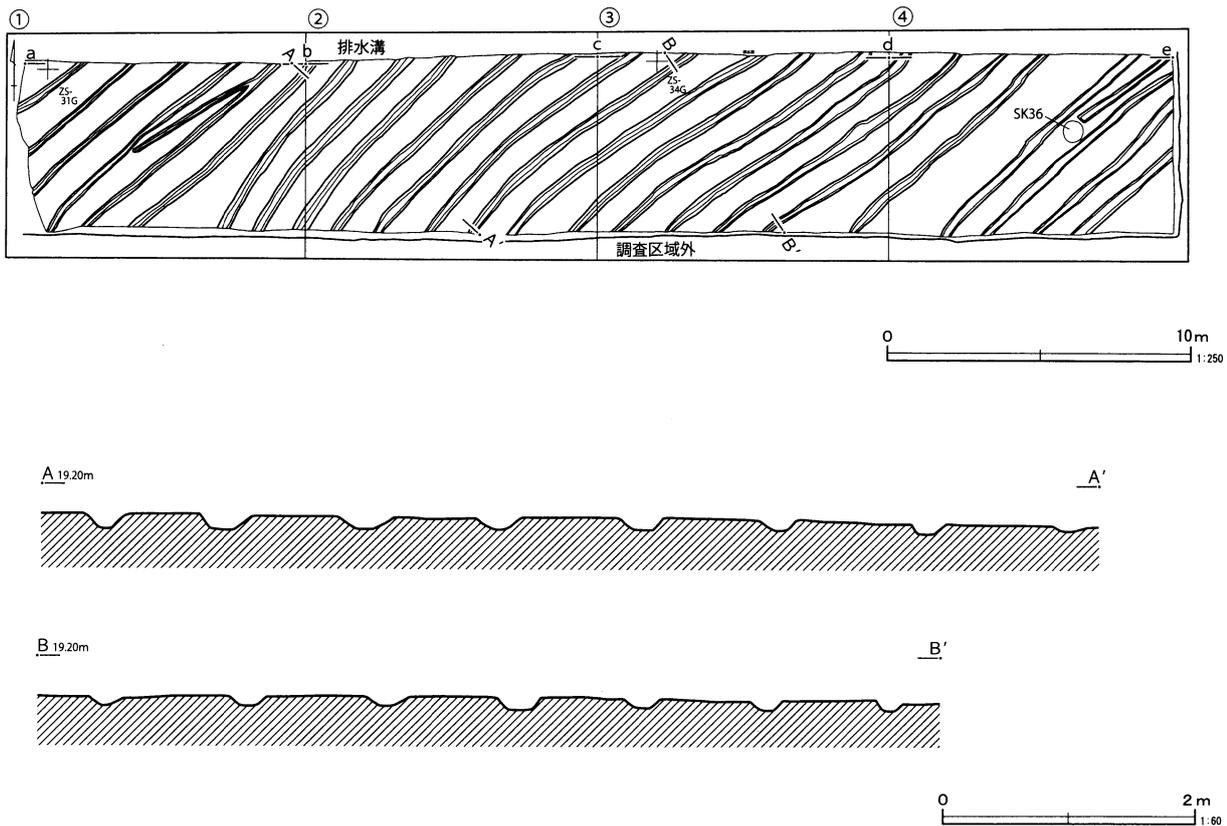
第1号畠跡（第270~273図）

第1号畠跡はZS-30~34グリッドに位置する。西側の広がり是不明である。東側は調査区外に延びており、全体像は不明である。幅20cm~40cm前

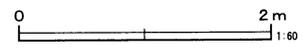
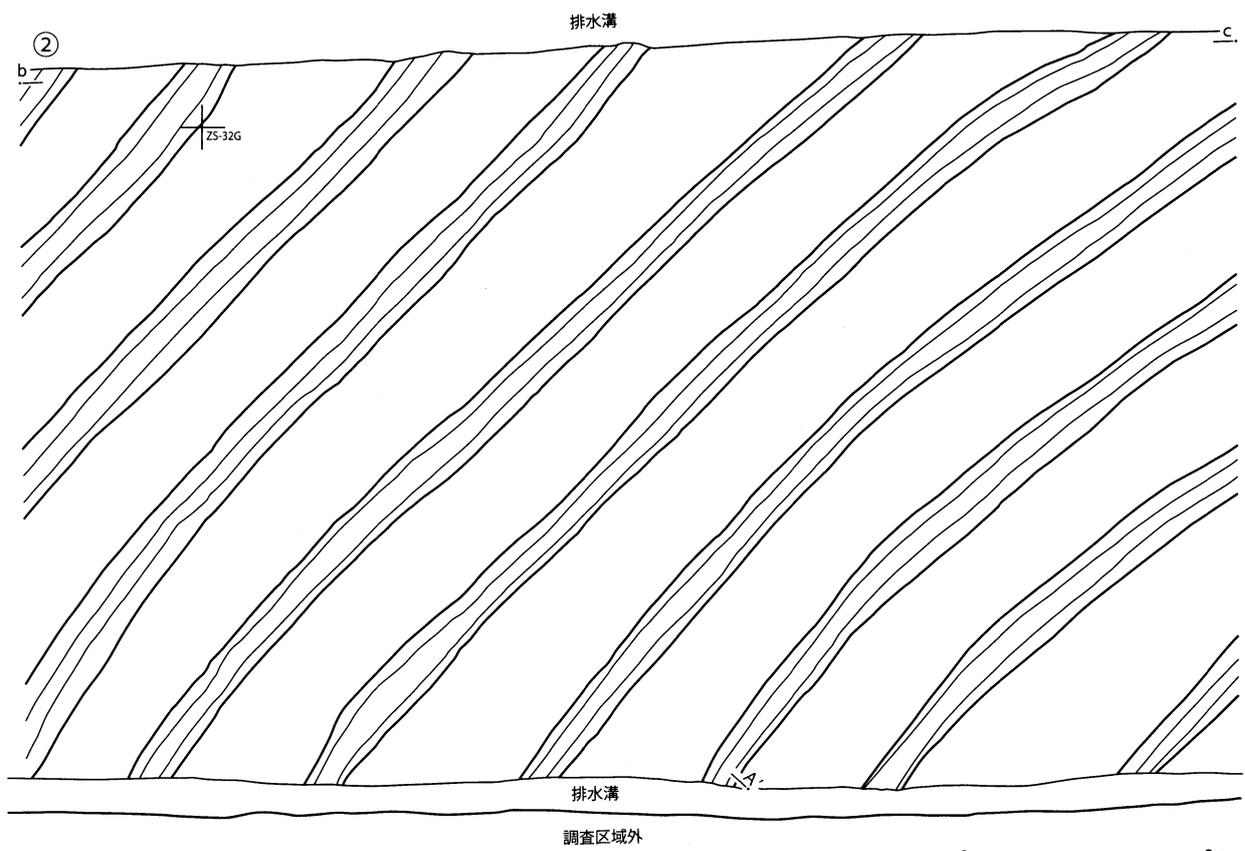
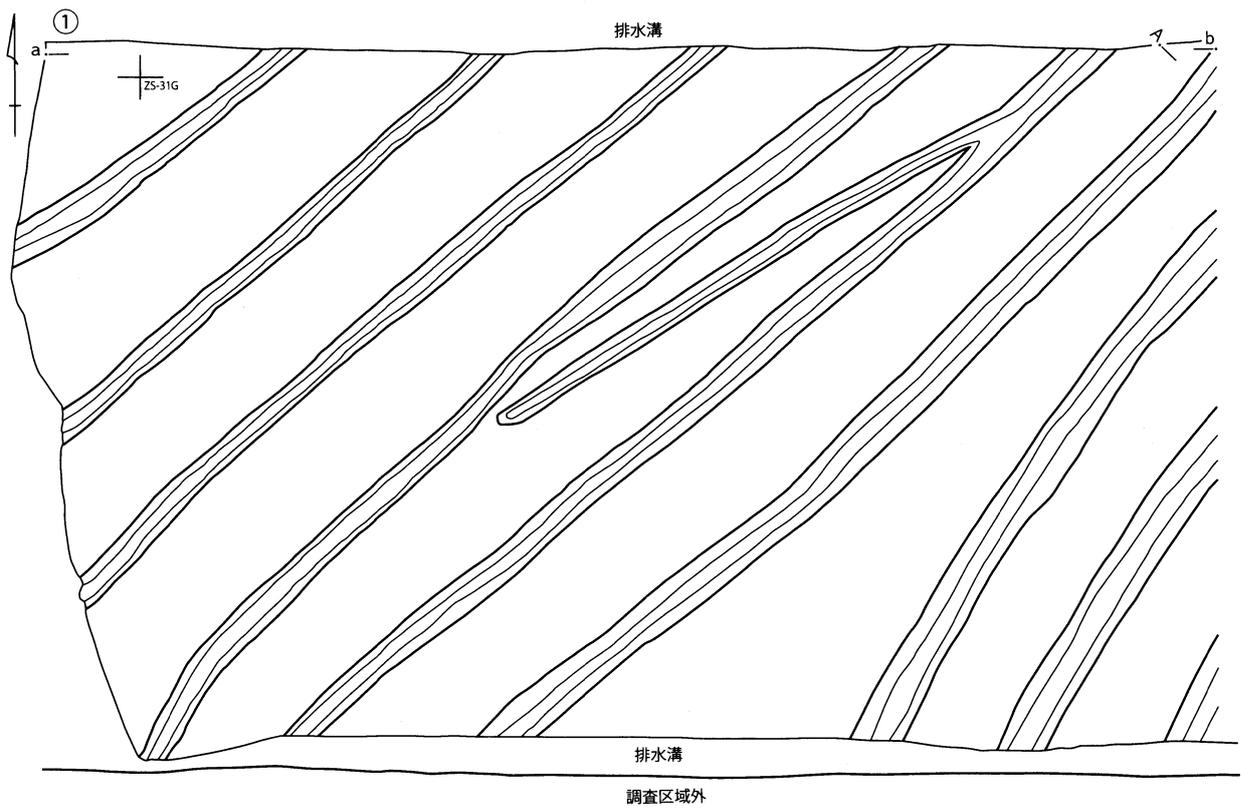
後、深さ10cm前後の細長い溝跡が26条整然と並んだ状態で検出された。傾きは北から45° 前後振れており、概ね地形の傾斜に平行して作られているといえよう。但し、西から5条目と東から4条目の溝跡がやや角度を異にしていた。

溝跡相互の間隔は60cm~100cmほどであるが、東から5条目と6条目の溝間隔と東端の溝跡東側は160cm前後と広がっていた。

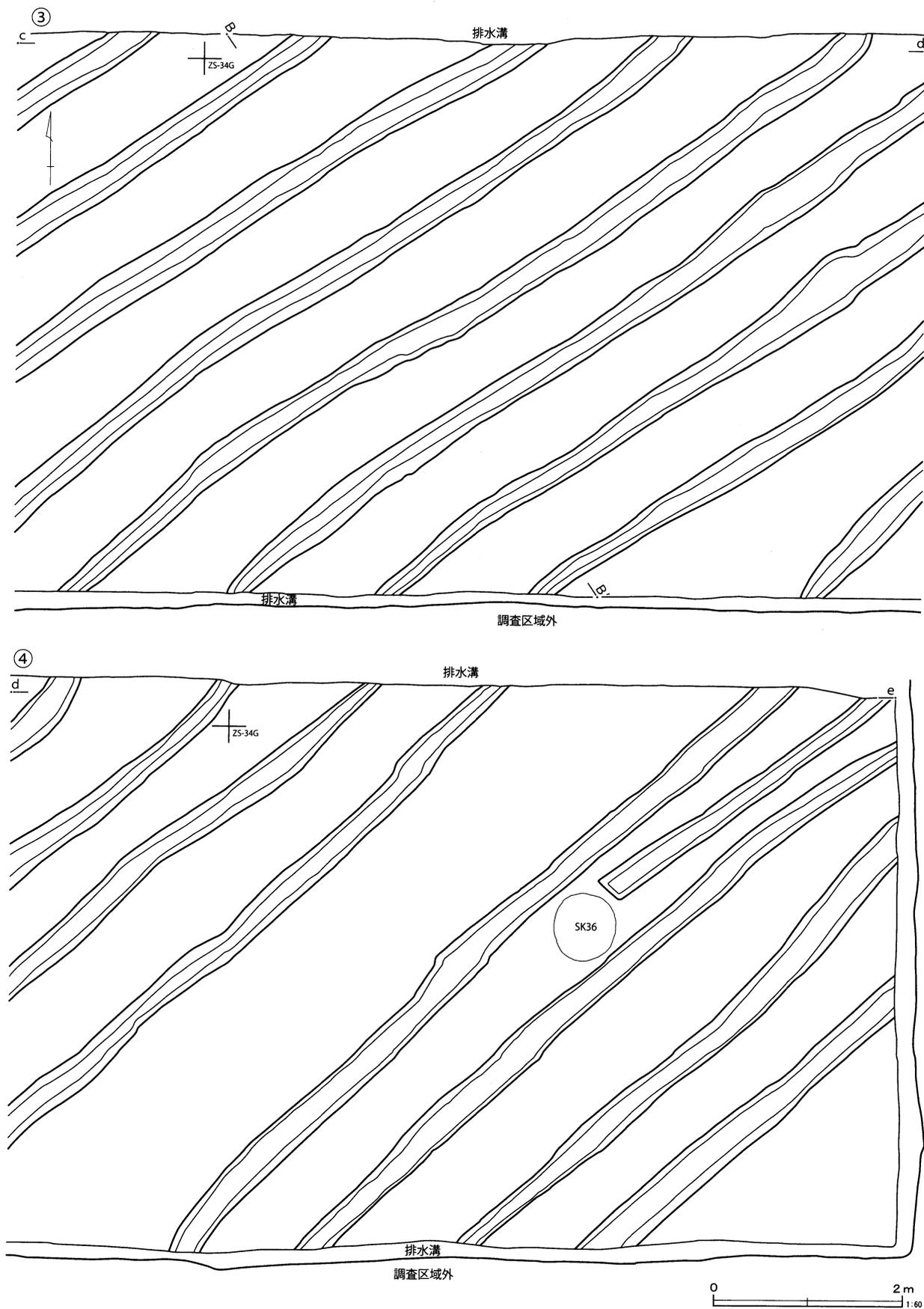
畠区画そのものは検出されなかった。溝跡が畠



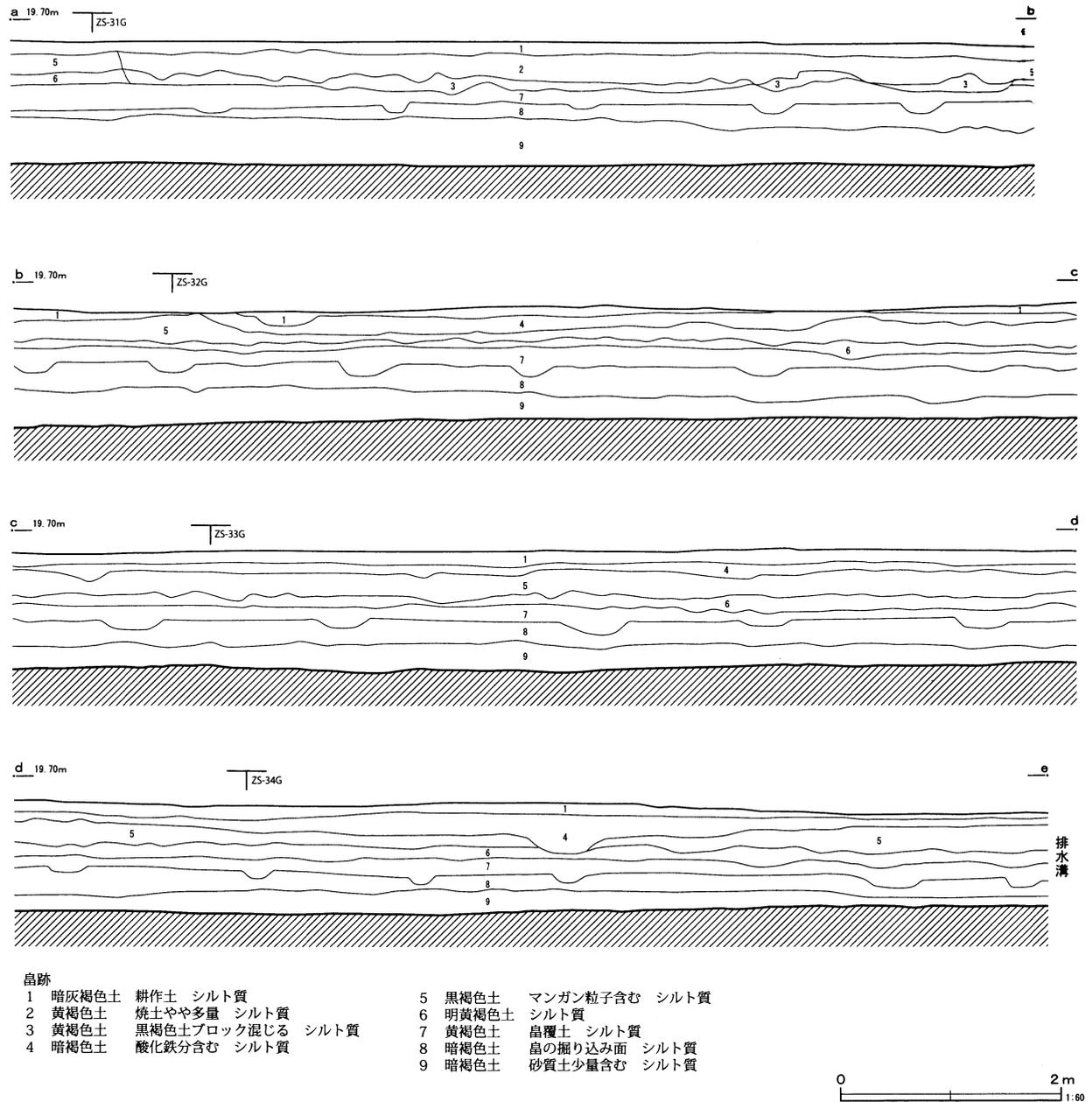
第270図 畠跡（1）



第271図 畠跡 (2)



第272図 畠跡 (3)



第273図 畠跡（4）

区画に平行していると仮定すると、畠一枚は最低36m×24m、864㎡を超える面積となる。一枚一反程度の畠を想定してよいのかもしれない。

出土遺物はない。時期は不明とせざるを得ない

が、掘り込み面は深く、古墳時代に遡る可能性がある。降っても古代までで、中世以降にはないと考えている。

第60表 銭塚遺跡ピット一覧表

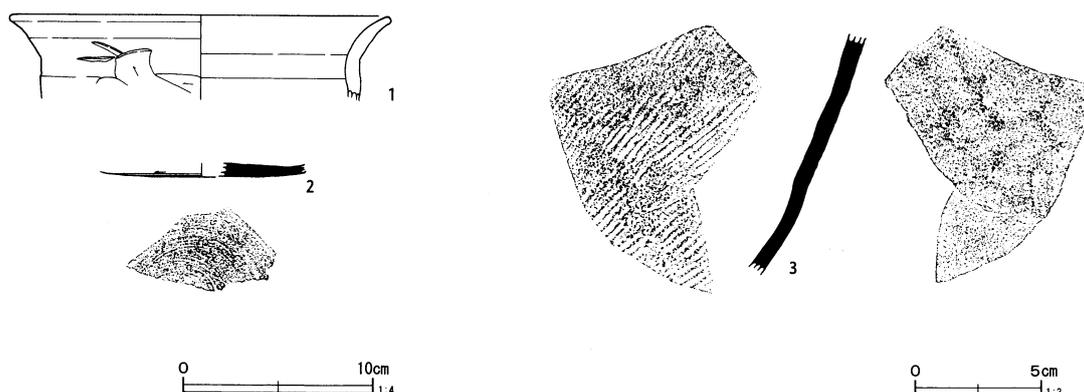
グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
ZH-15	1	63		25	
	2	44		20	
	3	57		51	
ZH-17	1			166	SJ29-P2に変更
	2				SJ-13と重複
ZI-14	1				SJ7-P3に変更
	2				SJ7-P4に変更
	3				SJ7-P5に変更
	4	40	40	495	土師器甕 (奈良・平安時代) ZI14G-P5と重複
	5	25	19	15	土師器坏・甕 (奈良・平安時代) ZI14G-P4と重複
	6	25	23	435	須恵器坏・甕 土師器甕 (奈良・平安時代)
	7				SJ41-P2に変更
	8				土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ41-P3に変更
	9	63	28	55	
ZJ-13	1	53	53	398	土師器甕 (奈良・平安時代)
	2	23	23	69	
	3	24	17	497	
ZJ-14	1	18	16	245	
ZK-16	1				ZL16G-P13に変更
	2				SJ47-P1に変更
	3				土師器甕 (奈良・平安時代) SJ47-P2に変更
	4	17	17	183	
ZK-17	1	39	35	223	土師器甕 (奈良・平安時代)
	2	28	24	198	
	3	18	18	75	
	4	17	17	18	
ZK-20	1	80	50	566	須恵器坏・蓋 土師器甕 (奈良・平安時代)
	2	60	54	295	
	3	92	52	249	土師器甕 (奈良・平安時代)
	4				須恵器蓋 土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ31-P1に変更
	5	32	29	301	須恵器坏・蓋 土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	6				SJ30-P6に変更
	7	27	23	502	
ZK-21	1	50	37	246	須恵器壺 土師器甕 (奈良・平安時代)
	2	55	55	273	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	3				土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ25-P1に変更
	4	50	40	16	須恵器坏 土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	5	148	52	562	須恵器坏・甕・蓋 土師器坏 (奈良・平安時代)
	6	40	30	367	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	7	27	24	144	
ZK-22	1				土師器坏・甕・壺 (奈良・平安時代) SJ48-P9に変更
	2				土師器甕 (奈良・平安時代) 石製品 SJ48-P8に変更
ZK-33	1	75	73	372	
ZK-35	1	70	50	564	
	2	77	70	427	
ZK-37	1	24	18	135	
	2	17	15	32	
	3	12	10	146	
ZL-12	1	40	20	191	
	2	10	35	277	須恵器蓋 (奈良・平安時代)
	3	47	47	313	
	4	38	38	47	土師器甕 (奈良・平安時代)
	5	34	32	421	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
ZL-16	1				須恵器坏・蓋 土師器甕 (奈良・平安時代) SJ45-P1に変更

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
ZL-16	2				須恵器坏 土師器甕 (奈良・平安時代) 軽石 貝巢穴泥岩 SJ44-P10に変更
	3				SJ44-P1に変更
	4	30	28	53.5	土師器甕 (奈良・平安時代)
	5				土師器甕 (奈良・平安時代) SJ44-P7に変更
	6	61	55	8.1	土師器坏・甕・高坏? (奈良・平安時代)
	7	38	33	26	土師器甕 (奈良・平安時代)
	8	65	50	16	
	9	53	47	10.5	
	10	20	20	11.2	
	11	17	17	7.2	
	12	37	30	12.1	
	13	89	47	4.6	ZK16G-P1から移動
	14	40	30	4.6	
	15	57	55	7.4	
	16	18	18	9	
	17	20	16	14.8	
	ZL-17	1	85	70	71.4
2		18	12	13	
ZM-15	1				須恵器坏 土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ36-P1に変更
	2				須恵器坏・甕 土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	3				土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ40-P7に変更
	4				SJ39のカマド?
	5				SJ40-P5に変更
	6				土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ40-P5に変更
	7				土師器甕 (奈良・平安時代) SJ40-P6に変更
ZM-16	1				SJ44-P2に変更
	2				湖西産須恵器長頸瓶 須恵器坏 土師器甕 (奈良・平安時代) SJ44-P6に変更
	3				須恵器甕 土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ44-P1に変更
	4				SJ40-P1に変更
	5				SJ45-P3に変更
	6	25	19	52.9	土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SJ37-P2から移動
	7	33	20	59.9	SJ37-P1から移動
ZM-22	1	30	30	14.8	須恵器蓋 土師器坏・甕 (奈良・平安時代) 緑泥片岩
	2	35	27	11.7	須恵器坏・蓋 土師器甕 (奈良・平安時代)
	3	42	41	12.9	
	4	34	32	13.6	
	5	36	33	18.1	
	6	31	31	12.4	
	7	45	41	15.7	
	8	43	43	17	
ZM-38	1	55	38	13.2	
ZN-10	1	32	23	35.7	
	2	33	25	31.8	
	3	35	30	37.4	
	4	19	15	36.2	
ZN-11	1	18	17	43.5	
	2	18	15	26.9	ZN11G-P3と重複
	3	20	19	32.8	ZN11G-P2と重複
	4	23	21	34.5	
ZN-15	1	35	35	22.4	
	2	58	45	18	
ZN-22	1	31	31	31.9	
ZN-37	1	22	20	23.4	
	2	13	12	11.1	

グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物・備考
ZO-14	1	21	18	11.1	
	2	22	19	8.5	
	3	73	64	14	
	4	90	71	14.8	
	5	29	28	27.4	
	6	30	25	12.8	
	7	35	28	24.4	
	8	58	48	22.8	
	9	50	50	17.2	
	10	41	38	19.4	
	11	29	28	14.4	
ZO-18	1	32	30	3.3	
	2	25	23	9	
	3	33	30	18.9	
	4	27	26	22.7	
	5	45	42	11.2	
	6	28	27	11.7	
ZO-19	1	73	59	21.9	ZO19G-P2と重複
	2	65	45	18.2	ZO19G-P1と重複
	3	18	17	8.7	
	4	18	18	12.3	
ZO-20	1	42	33	12.9	土師器甕 (奈良・平安時代)
	2	37	35	20.1	須恵器坏 土師器甕 (奈良・平安時代)
	3	28	26	11.4	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	4	28	28	11.4	
	5	22	20	34.1	
	6	35	30	12.1	
	7	41	40	21.6	
	8	51	33	8.9	
	9	32	30	25.5	
	10	28	24	17.9	
	11	33	30	23.9	
ZO-21	1	18	16	7.6	
	2	29	25	6.5	
	3	83	73	37.3	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	4	36	32	6.1	
	5	34	30	10.3	
	6	52	32	13.7	
	7	35	32	15.3	
	8	28	28	10.8	
	9	40	36	9	
ZO-22	1	45	45	2.6	
	2	103	68	33.7	
ZO-25	1	21	20	17.3	
ZO-26	1	30	24	2.6	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	2	36	31	29.4	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	3	73	55	37.4	
ZO-27	1				土師器甕 (奈良・平安時代) SBI9-P4に変更
	2				SBI9-P5に変更
	3				土師器坏・甕 (奈良・平安時代) SBI9-P6に変更
	4				SBI9-P7に変更
	5				SBI9-P3に変更
	6				SBI9-P2に変更
	7				SBI9-P1に変更

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
ZO-27	8				土師器甕 (奈良・平安時代) SB19-P9に変更
	9				須恵器甕 (奈良・平安時代) SB19-P8に変更
	10	32	30	18.7	
	11	41	28	71.2	須恵器坏 土師器甕 (奈良・平安時代)
	12				SJ64-P6に変更
	13				土師器甕 (奈良・平安時代) SJ64-P5に変更
ZO-28	1	27	23	20.5	
ZO-31	1	32	31	20.6	
	2	20	20	16.6	
	3	18	17	11.8	
	4	22	22	16	
	5	20	20	12.7	
	6	16	16	21.3	
	7	17	15	14.7	
	8	17	14	12.9	
	9	19	14	23.2	
	10	16	15	12	
ZO-32	1	68	28	20	土師器坏・甕 (奈良・平安時代)
	2	26	24	26.8	須恵器蓋 (奈良・平安時代)
	3	19	18	7.8	須恵器坏 (奈良・平安時代)
	4	18	18	48.6	
	5	18	16	39.7	
	6	32	26	35.8	
	7	25	20	10.2	
	8	18	14	10.3	
	9	20	18	37.5	
	10	26	22	23.7	
	11	20	20	27.5	
	12	25	20	22.9	
	13	27	21	32.8	
	14	30	28	22.1	
	15	25	17	21.8	
	16	22	22	28.7	
	17	23	20	14.7	
	18	24	20	2.5	
	19	17	14	23.5	
	20	19	18	19.7	
	21	20	19	15.1	
	22	18	18	32.7	
	23	16	16	3.2	
	24	17	14	10.6	
	25	14	13	24.7	
ZO-33	1	22	20	34.8	
	2	16	16	19.8	
	3	23	22	35.4	
	4	18	18	3.8	
	5	15	8	19.1	
	6	14	14	20.4	
ZO-34	1	35	28	13.4	
ZO-35	1	39	38	10.8	
	2	49	38	6.9	
	3				SK53に変更
ZO-36	1	47	45	10.9	
	2	36	36	8.6	
ZP-14	1	37	36	23.2	
	2	22	22	16.6	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物・備考
ZP-14	3	20	16	16.1	
	4	31	22	15.3	
ZQ-14	1	30	28	18	
	2	26	26	16.4	
ZR-25	1	63	45	44.3	
	2	40	39	53.8	
ZS-19	1	32	16	9.2	
	2	25	24	8.6	
	3	40	12	8.2	
	4	52	46	13.4	
	5	26	17	10	
	6	26	22	10.8	ZS19G-P7と重複
	7	31	21	12.4	ZS19G-P6と重複
	8	44	40	14.6	
	9	31	31	11.6	ZS19G-P10と重複
	10	26	18	8.2	ZS19G-P9と重複
	11	31	31	14.2	
	12	26	23	11.8	ZS19G-P13と重複
	13	24	22	9.4	ZS19G-P12と重複
	14	20	19	5.8	
	15	19	18	10.8	
	16	14	12	5	
	17	35	25	14.6	
	18	42	28	20	ZS19G-P19と重複
	19	26	22	6.2	ZS19G-P18と重複
	20	22	20	4.2	
	21	17	16	4.8	
	22	48	38	28.4	
	23	30	28	10.4	
	24	29	29	16.6	
	25	29	26	38.6	
	26	32	31	20	
	27	18	18	9.8	
	28	23	21	10.4	
	29	55	32	17.2	
	30	23	20	11.4	
	31	49	32	12.8	
	32	36	21	8.6	
	33	30	25	9.8	
	34	23	19	5.6	
	35	27	26	10.4	
	36	40	36	10.4	
	37	33	24	3.5	
	38	37	26	15.2	
ZS-20	1	26	26	12.8	
	2	30	26	14.6	
	3	23	19	11	
	4	29	21	13	
	5	16	16	7.8	
	6	22	20	1.5	
	7	24	22	22.6	
	8	25	20	8.8	
	9	25	13	8	
	10	19	17	10	
ZS-25	1	44	29	17.6	



第275図 ピット出土遺物

第61表 ピット出土遺物観察表 (第275図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	甕	(20.0)	4.5	-	ACEHIL	10	普通	橙	北武蔵の土か	ZJ-13G P1	
2	須恵器	坏	-	0.7	-	E I J L	20	普通	灰白	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ	ZI-14G P6	
3	須恵器	甕	-	-	-	E I J	5	良好	灰	南比企産 外面平行叩き 内面無文当て具	ZI-14G P6	

11. グリッド他出土遺物

本項では、遺構に伴わずに、あるいは伴出以降の不明な遺物の実測図を掲載する。第276図～280図にはグリッド等出土遺物、第281図には試掘調査の際出土した遺物を掲載した。

以下、特徴的な遺物について説明する。1は北武蔵型坏で、内面上位に油煙が付着する。燈明皿として使用されたものであろう。7は胎土に片岩を含む。槻川流域の土か。整形に木口ナデを多用する。

10は環状つまみの須恵器蓋である。ロクロ整形後、内外面にヘラミガキ調整を加えている。白色針状物質は含まれず、胎土は比較的精良である。非南比企産と考えられる。西毛産であろうか。

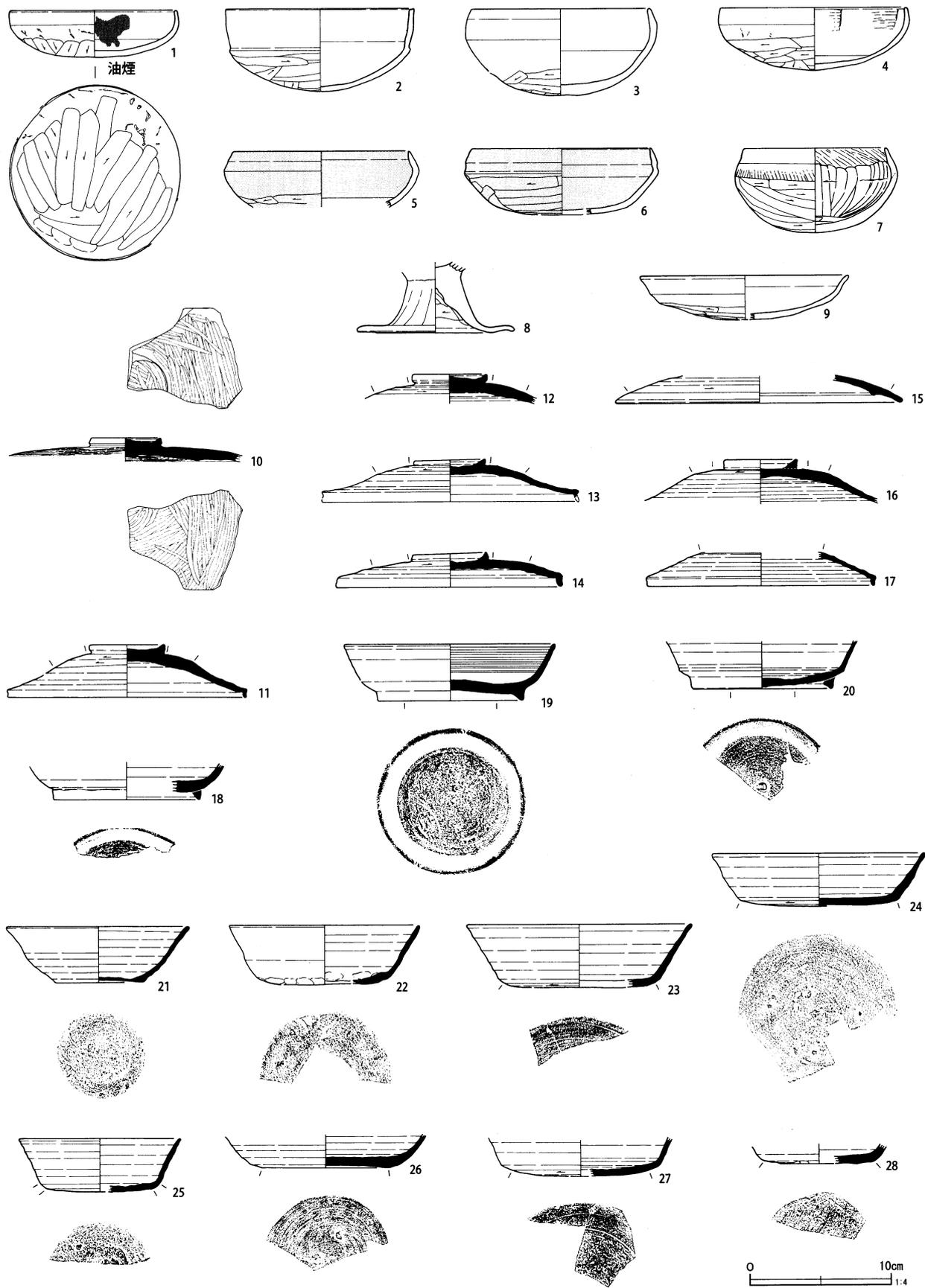
19は東海産に似るが、南比企産の坏Bである。22・25・28は末野産の無台坏。22は底部にケズリが見えない。ヘラ切り後ナデか。25も同様であろう。28は坏Gか。31・32は内面にヘラ状工具による渦巻き状の沈線、「ノタ目」が付く。末野産と思われる。

39は短頸壺の底部片で、内面が磨滅。硯に転用

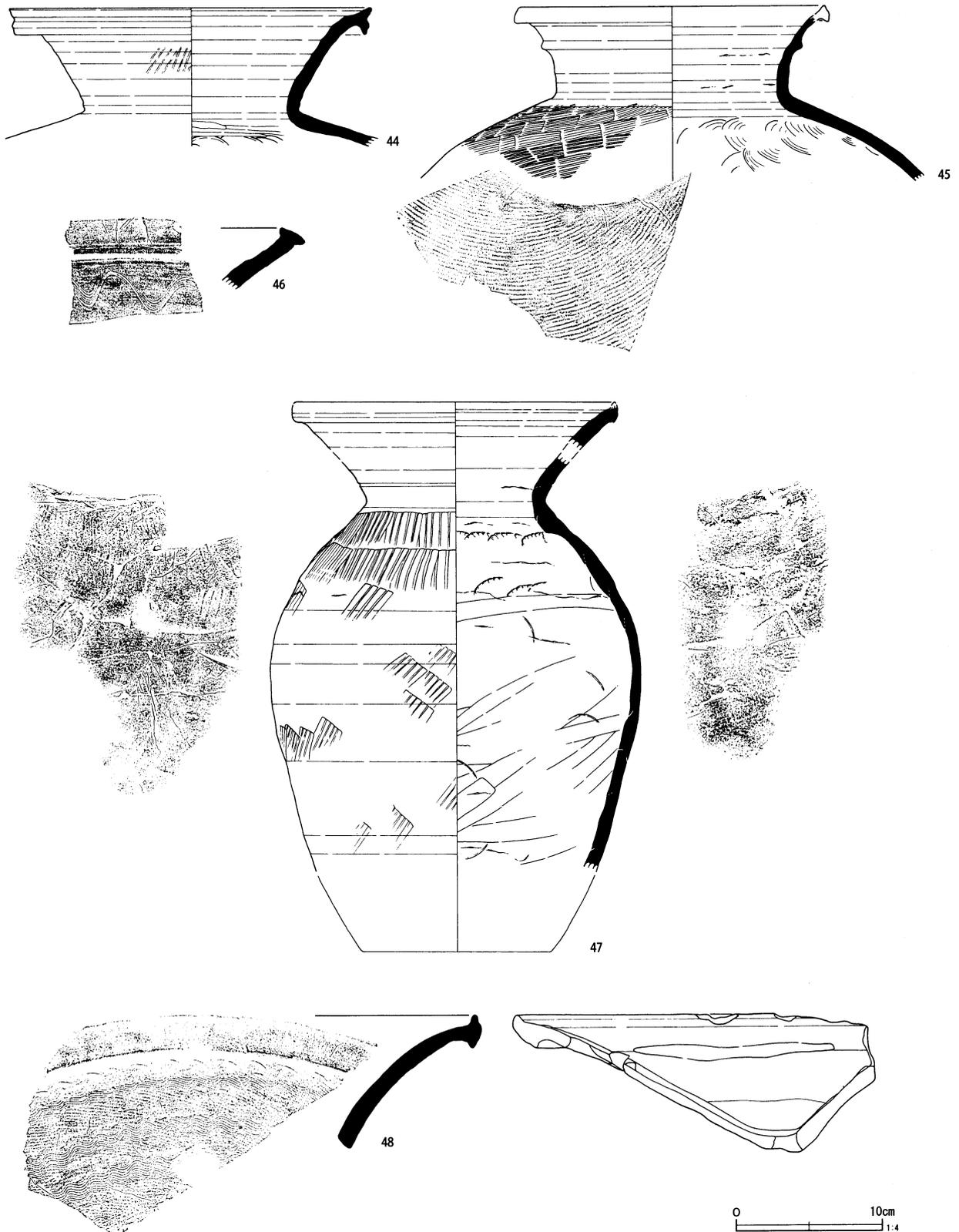
されたと思われる。40は壺か。胴部側面に「内」の刻印が押されていた。南比企産である。62は滑石製の石帯。破損していた。

第18号溝跡はZL・ZM・ZN-22グリッドに位置する。当初、帰属遺構が不明確で、確認面付近の遺物を谷部包含層としてグリッド単位で取り上げたものがある。第276図10～12・15～17の須恵器蓋、18～20の須恵器高台付坏、22・25・27～32の須恵器無台坏、35の須恵器平瓶、36の須恵器水瓶などがそれで、本来的には第18号溝跡に帰属すべき遺物である。東海産（湖西産）、末野産須恵器を定量で含むこと、鳩山I期の供膳器がほとんど含まれないことは、第18号溝跡の傾向と一致している。南比企産須恵器は山下6号窯またはそれ以前の段階と思われる。

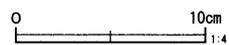
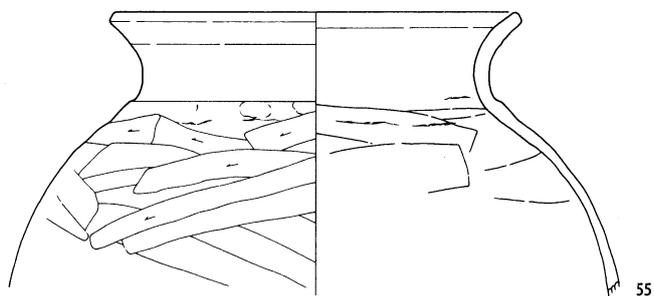
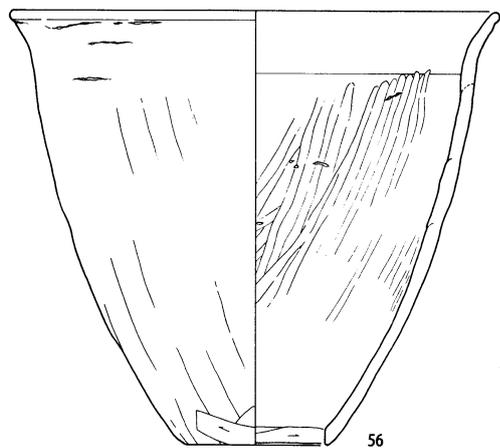
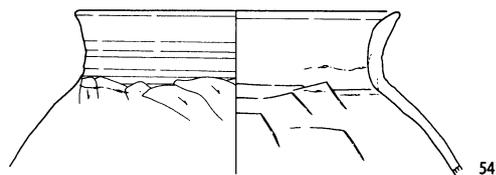
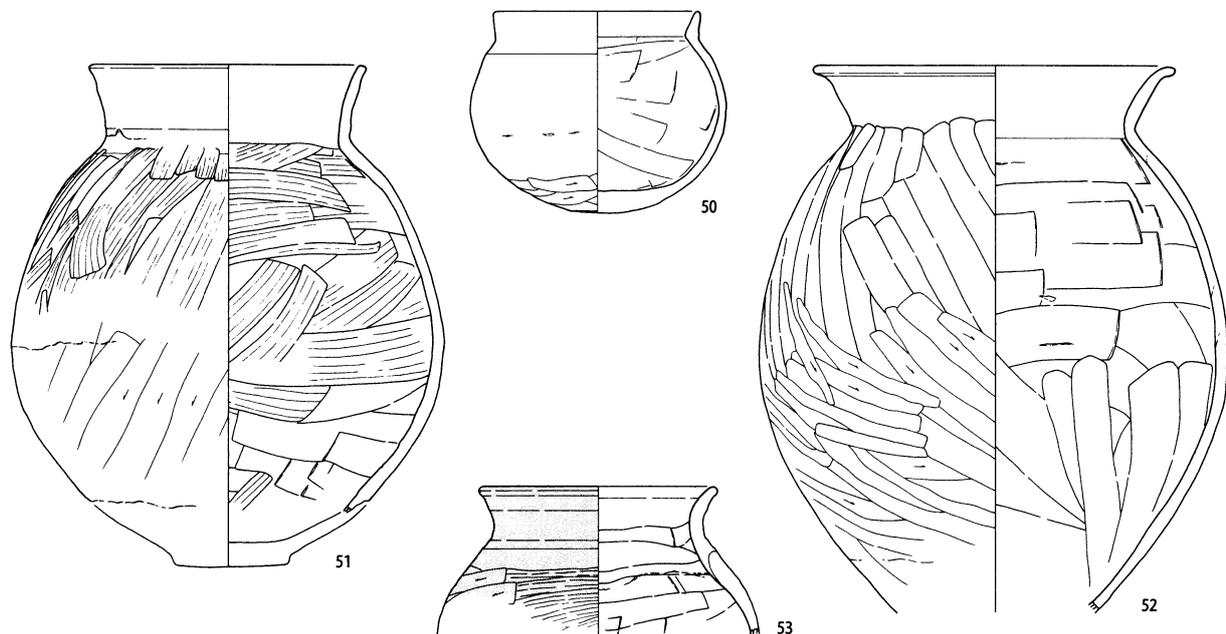
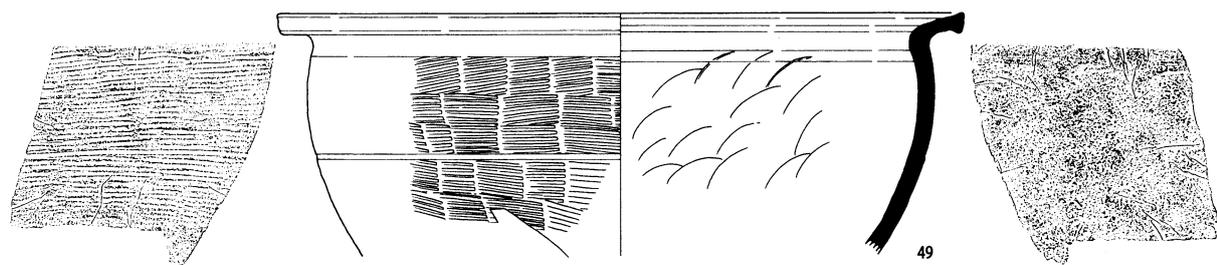
また、グリッド出土資料からはミガキ調整をもつ須恵器蓋が新たに見つかり（10）、上野（西毛）産須恵器がその組成に加わる可能性が高まった。



第276図 グリッド他出土遺物 (1)



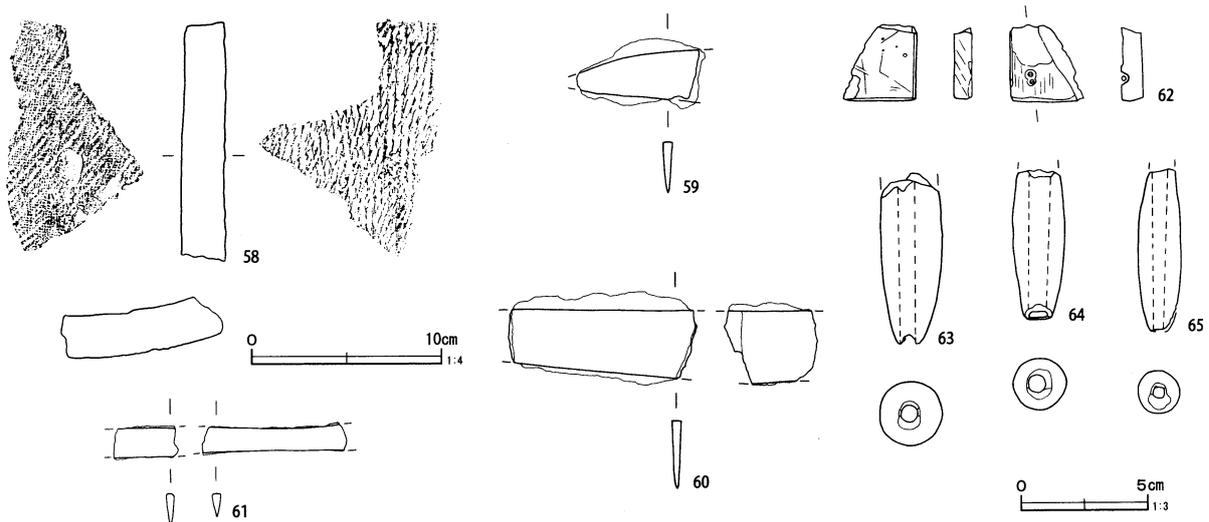
第278図 グリッド他出土遺物（3）



第279図 グリッド他出土遺物（4）

第62表 グリッド他出土遺物観察表 (第276~280図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	坏	11.7	33	-	CEI	95	普通	橙	北武蔵型坏 底部ヘラケズリ 口縁下に無調整部有り 内外面油煙付着 ZG-19~21G		107-5
2	土師器	坏	(133)	58	-	CHI	60	普通	橙	北武蔵の土 坏蓋模倣坏 ZO-12G北壁Ⅲ層		107-7
3	土師器	坏	(126)	61	-	DEGHIL	70	普通	橙	在地産か 白針含まない 無彩 ZO-12G北壁Ⅲ層		107-8
4	土師器	坏	131	44	-	AHI	60	良好	橙	北武蔵型坏 焼成良好 雲母状微粒子含む 底部外面黒斑 ZF-36・37G確認面		107-6
5	土師器	坏	(125)	40	-	HIKL	40	普通	にぶい橙	在地産 赤彩坏 全面赤彩 体部上位ナデ、下位ヘラケズリ 白針含まない ZL-12G		
6	土師器	坏	(126)	47	-	DHIK	40	良好	にぶい橙	在地産 全面赤彩 白針無し ZY-14G		
7	土師器	椀	100	60	-	BCEHI	70	普通	橙	槻川流域の土か 片岩含む 体部上位木口ナデ 中位以下ケズリ 口縁内面木口ナデ 体部ヘラナデ+ナデ ZH-37GNo1		108-1
8	土師器	高坏	-	50	(108)	CEGHI	80	普通	橙	北武蔵の土か 坏部風化著しい ZO-12G北壁Ⅲ層		
9	土師器	皿	(148)	31	-	AHI	45	良好	橙	北武蔵型坏(皿) 高温焼成 粉っぽい土 器面風化 ZI-38G		
10	須恵器	蓋	-	17	-	DEIK	20	良好	灰	産地不明(西毛産か) 白針無し 環状つまみ(径4.9cm) ロクロ整形 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 後ヘラミガキ 内面ヘラミガキ ZM-22G谷部包含層		108-2・3
11	須恵器	蓋	(169)	37	-	EIJK	40	普通	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ 環状つまみ(径5.4cm) ZM-22G谷部包含層		
12	須恵器	蓋	-	21	-	EIJK	50	普通	灰	南比企産 天井部回転ヘラケズリ 環状つまみ(径5.2cm) ZM-22G谷部包含層		
13	須恵器	蓋	-	27	-	DEIJ	20	良好	灰	南比企産 環状つまみ(径5.0cm) 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ左回転) 口唇部欠 ZF-36G確認面		
14	須恵器	蓋	160	25	-	IJKL	70	良好	灰	南比企産 白針含む 天井部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 環状つまみ(径5.2cm) 天井部内面磨滅 転用硯の可能性有り 外面煤付着 ZG-19~21G		108-4
15	須恵器	蓋	(201)	19	-	EIK	5	普通	灰	末野産か 白針無し 内面に「かえり」付き 天井部回転ヘラケズリ ZM-22G谷部包含層		
16	須恵器	蓋	-	32	-	BCDI	30	不良	にぶい黄緑	末野産か 白針無し 緑泥片岩状の鉱物含む 環状つまみ(径5.0cm) 形態的には南比企産に似る ZM-22G谷部包含層		
17	須恵器	蓋	(161)	23	-	IK	15	良好	灰白	湖西産 胎土精選 天井部一部回転ヘラケズリ残る ZM-22G谷部包含層		
18	須恵器	高台付坏	-	26	(105)	EIJK	20	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ後ロクロナデ 実測No62と類似 湖西産模倣か ZM-22G谷部包含層		
19	須恵器	高台付坏	(149)	40	102	DJK	60	良好	明灰	南比企産 白針含む 底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) 内面沈線巡る 湖西産類似 ZM-22G谷部包含層		108-5
20	須恵器	高台付坏	-	33	(100)	IK	25	良好	灰白	湖西産 胎土精選 焼成堅緻 底部回転ヘラケズリ 中心部ヘラ切りに伴う突起有り ZN-22G谷部包含層		
21	須恵器	坏	128	40	63	EFHIJK	100	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り 内底径4.4cm ZI-37G		108-6
22	須恵器	坏	135	42	(94)	BEIL	40	普通	青灰	末野産 底部指押え+指ナデ ケズリ調整は認められない ZM-22G谷部包含層		108-7
23	須恵器	坏	(158)	45	115	EIJK	20	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) Y6段階 ZF-36・37G確認面		
24	須恵器	坏	(150)	37	111	EIJK	50	普通	青灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) ZF-36・37G確認面		108-8
25	須恵器	坏	(114)	38	(76)	BCI	30	不良	灰	末野産 体部下端回転ヘラケズリか 底部ヘラ切り後軽いナデ ZM-22G谷部包含層		108-9
26	須恵器	坏	-	24	(90)	EIJK	30	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) ZF-36・37G確認面		
27	須恵器	坏	-	27	(113)	EIJK	15	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ ZM-22G谷部包含層		
28	須恵器	坏	-	14	(78)	IK	20	普通	灰	末野産か 黒色粒子目立つ 底部手持ちヘラケズリ ZM-22G谷部包含層		
29	須恵器	坏	-	15	(110)	EIJ	20	良好	青灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) ZM-22G谷部包含層		
30	須恵器	坏	-	14	(140)	IK	25	良好	灰	末野産か 白針無し 片岩不明瞭 底部手持ちヘラケズリ ZM-22G谷部包含層		
31	須恵器	坏	-	13	(136)	CEIK	25	普通	灰	末野産 白針含む 内面「ノタ目」 外面回転ヘラケズリ(ロクロ右回転) ZN-22G谷部		
32	須恵器	坏	-	17	(110)	CEIK	20	普通	灰	末野産 内面「ノタ目」 底部回転ヘラケズリ ZM-22G谷部包含層		
33	須恵器	坏	126	38	61	EHIJK	80	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号あり 内底径6.6cm ZJ-22G		109-1
34	須恵器	坏	-	12	66	HJK	85	普通	灰白	南比企産 底部ヘラ記号 回転糸切り ZO-31G		



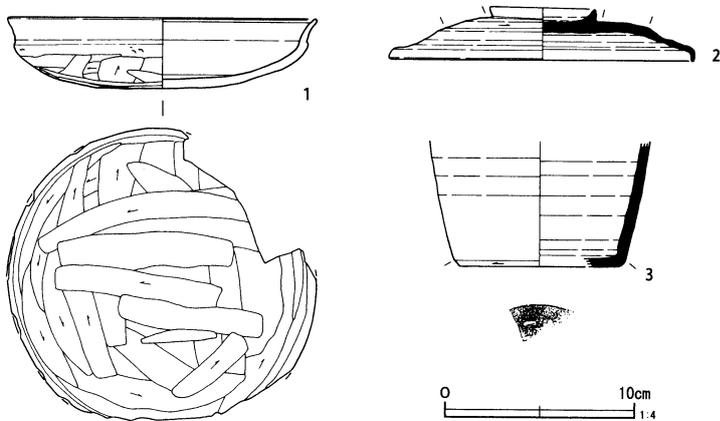
第280図 グリッド他出土遺物 (5)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
35	須恵器	平瓶	-	76	-	I K	25	良好	灰白	湖西産か 胎土精選 口縁底部欠失 淡緑色の自然釉	ZN-22G谷部	
36	須恵器	水瓶	-	73	-	J K L	20	普通	黒灰	南比企産 頸部下端に凸帯 胴部に2条1単位の平行沈線2段 残存部下端にも沈線見える 内面絞り目	ZN-22G谷部	
37	須恵器	長頸瓶	132	150	-	E I K L	80	良好	灰	南比企産か 白針不明瞭 白色粒子の混入多く胎土やや粗い 頸部沈線2条 下位ケズリ	ZI-38G	109-4
38	灰釉陶器	長頸瓶	-	142	-	I K	25	良好	灰白	頸部・胴部外面灰釉施す 猿投産か?	ZK-19G	
39	須恵器	短頸壺	-	33	108	E I J	95	良好	灰	南比企産 転用硯と思われる 底部内面磨滅著しい 周辺部故意に打ち欠いたものか	ZG-19~21G	109-2
40	須恵器	(短頸) 壺か	-	47	(140)	E I J K	10	普通	灰	南比企産 白針含む 胴部外面「内」の押し印	ZG-18G	109-5
41	須恵器	小型壺	(49)	53	(27)	E I J	25	良好	暗灰	南比企産 胴部外面~底部手持ちヘラケズリ 底部内面指押え	ZK・ZL-12G	
42	須恵器	円面硯	-	14	-	I J K	5	良好	紫灰	南比企産 円面硯脚部片 方形透孔2ヶ残る	ZM-22G谷部包含層	109-3
43	須恵器	甌	-	150	(154)	G I J K	20	良好	灰	南比企産 外面ヘラケズリ 内面無文当て具後ナデ 一部ケズリ	ZO-32G	
44	須恵器	甕	(248)	94	-	I J K	40	良好	黒灰	南比企産 胴部口縁内面自然釉 頸部平行叩き後ロクロナデ 胴部内面無文当て具	ZK-38G	
45	須恵器	甕	-	113	-	I K	20	良好	灰	湖西産か 胎土精選 口縁欠失 頸部に突帯 胴部平行叩き +同心円文当て具 ナデ消し	ZF-36・37G確認面	
46	須恵器	大甕	-	42	-	C E H I K	5	不良	灰黄褐	産地不明 白針無し 8本組櫛歯状工具による波状文	ZM-22G谷部包含層	
47	須恵器	甕	-	286	-	E H I J L	25	普通	灰	南比企産 胴部平行叩き+無文当て具	ZK-38G	
48	須恵器	甕	-	-	-	G I J K	5	普通	灰	転用砥石 南比企産 頸部平行叩き後櫛歯波状文 (9本4段) 施文 割れ口と内面擦痕顕著	ZO-14G	
49	須恵器	鉢	(36.0)	129	-	I J K L	15	良好	灰	南比企産 胴部平行叩き+無文当て具	ZF-36G	
50	土師器	鉢	(10.9)	106	-	C E H I	50	普通	橙	北武蔵の土 胴部ナデ 底部ケズリ 内面ヘラナデ	ZO-12G北壁Ⅲ層	109-6
51	土師器	甕	(14.0)	237	-	C D E H I L	30	普通	褐灰	北武蔵の土か 胴部上半木口ナデ 下半ケズリ 二次被熱により器面剥落	ZO-10G	
52	土師器	甕	(18.6)	289	-	E G H J	30	普通	灰褐	在地産 白針含む 胴部上半ヘラナデ 下半ヘラケズリ 内面ヘラナデ	ZP-10G	
53	土師器	壺	(12.2)	79	-	C E H I L	25	普通	橙	在地の土か 比企型の壺 白針無し 外面赤彩 内面無彩 胴部木口ナデ後ケズリ 内面ヘラナデ	ZK-20・21G	
54	土師器	壺	16.8	86	-	G H I	70	普通	明赤褐	在地の土 (白針無し 角閃石不明確)? 胴部ケズリ+ヘラナデ	ZG-19~21G	
55	土師器	壺	(21.0)	150	-	A C E H I	25	普通	橙	北武蔵の土	ZK-20・21G	
56	土師器	甌	(25.6)	229	(7.6)	C E H I	20	普通	橙	北武蔵の土か 白針無し 胴部ヘラケズリ後ナデ 二次被熱により器面荒れる 内面ヘラミガキ	ZP-10G	
57	土師器	甌か	(24.2)	87	-	A C E H I	25	普通	にぶい橙	北武蔵の土 胴部ケズリ+ナデ 口縁部にヘラキズ	ZF-36・37G確認面	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
58	瓦	平瓦	-	-	-	E G J	5	普通	灰	残長12.5cm 残幅8.5cm 厚さ2.3cm 南比企産 凹面糸切り + 布目 凸面縄叩き 一枚造り 端面はナデ調整 ZO-14G		109-7・8
59	鉄製品	鎌?	-	-	-	-	-	-	-	刃長5.1cm 刃幅2.0~1.4cm 背幅0.35cm ZF-36G		110-6
60	鉄製品	刀子か	-	-	-	-	-	-	-	長さ11.0cm 幅2.9~2.1cm 背幅0.35cm ZG-37G		110-7
61	鉄製品	刀子か	-	-	-	-	-	-	-	出土遺構不明 2片あり (同一個体と考えられるが接合しない)		110-10
62	石製品	石帯	-	-	-	-	-	-	-	縦2.9cm 横2.6cm 厚さ0.7cm 重さ12.9g 滑石製 非常に良く研磨されている ZO-28G		110-1・2
63	土製品	土錘	-	-	-	E H I	-	普通	黒褐	残存長6.7cm 最大径2.4cm 孔径0.6cm 重さ36.8g 大型品 上端欠失 ZO-32G		110-3
64	土製品	土錘	-	-	-	E H I K	85	普通	赤褐	残存長5.9cm 最大径2.1cm 孔径0.7cm 重さ20.8g 上端欠損 ZO-14G		110-4
65	土製品	土錘	-	-	-	E H I K	-	普通	にぶい赤褐	残存長6.5cm 最大径1.7cm 孔径0.4cm 重さ15.7g 上端裏面欠損 ZO-32G		110-5

第63表 試掘出土遺物観察表 (第281図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	皿	16.2	3.8	-	A E H I	85	普通	橙	(続) 比企型坏 (皿) 口唇内面沈線 白針含む 赤彩無し 内外面黒ずみ黒色処理の可能性もある		110-8
2	須恵器	蓋	16.0	2.8	-	I J K	60	良好	灰	南比企産 白針含む 天井部回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) 環状つまみ (径5.5cm)		110-9
3	須恵器	コップ形?	-	6.6	(8.4)	I J K	15	良好	灰	南比企産 底部+体部下端回転ヘラケズリ (ロクロ右回転) コップ形とすれば大型品		



第281図 試掘出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぜにづかに／しろしきいち								
書名	銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ								
副書名	高坂駅東口第二特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告								
巻次	Ⅱ								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書								
シリーズ番号	第369集								
編著者名	富田和夫・山本 靖								
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団								
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1 TEL 0493-39-3955								
発行年月日	西暦2010（平成22）年3月24日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
ぜにづかいせき 銭塚遺跡 (第2・3次)	さいたまけんりがしまつやまし 埼玉県東松山市 おおあざたかさか 大字高坂307-1 ばんちほか 番地他	11212	369	36° 00′ 28″	140° 15′ 38″	20030408 ～ 20030430 20030801 ～	21,700	土地区画 整理	
						20040324 20040408 ～ 20050331 20050401 ～ 20060331			
しろしきいせき 城敷遺跡 (第1・2次)	さいたまけんりがしまつやまし 埼玉県東松山市 おおあざたかさか 大字高坂347-1 ばんちほか 番地他	11212	370	36° 00′ 24″	140° 15′ 38″				
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
銭塚遺跡	集落跡	弥生時代	土器棺墓 1基		弥生土器（岩鼻式）		小児の歯出土。		
		古墳時代	住居跡 15軒		土師器 須恵器				
			掘立柱建物跡 6棟						
			土壇 10基						
			溝跡 6条						
奈良・平安時代	住居跡 45軒		土師器 須恵器		畿内産土師器2点出土。 4×3間総柱建物跡。				
	掘立柱建物跡 12棟		鉄製品						
	土壇 8基								
中・近世	溝跡 9条								
	ピット列 1列								
	中・近世	掘立柱建物跡 1棟		陶磁器 木製品					
		土壇 3基							
溝跡 5条									
時期不明	井戸跡 7基								
	時期不明	住居跡 2軒		土師器 須恵器					
		土壇 14基							
		溝跡 18条							
ピット 多数									
城敷遺跡	集落跡	古墳時代	住居跡 31軒		土師器 須恵器		大溝跡から多量の土器・木製品が出土。 初期須恵器(樽形甕)、 木製梯子など出土。		
			掘立柱建物跡 3棟		木製品 石製品				
		中・近世	土壇 9基						
			溝跡 16条						
			大溝跡 1条						
		中・近世	溝跡 5条		陶磁器				

要 約

銭塚遺跡・城敷遺跡は埼玉県東松山市高坂に位置する。都幾川右岸の自然堤防上に立地し、標高20m前後である。東約400mに位置する反町遺跡も有機的な関連をもつ遺跡で、3遺跡によって一つの遺跡群（反町遺跡群）を構成する。

銭塚遺跡は古墳時代中期～奈良・平安時代にかけて営まれた集落である。第18号掘立柱建物跡は4×3間総柱構造の建物跡で、柱穴掘り方が大きく、栗石が敷設されていた。一般集落の倉庫の中では破格の規模と構造である。出土遺物の中には、畿内産土師器が2点含まれていた。畿内産土師器は地方官衙や関連遺跡から出土する例が多く、注目される資料である。

城敷遺跡は主に古墳時代前期～古墳時代後期前半にかけて存続した集落遺跡である。集落の中を大溝跡（河川流路）が蛇行して流れ、集落と大溝跡が一体として機能したことが判明した。水辺に降りる階段状施設や堰、護岸施設の木組みなどが検出され、大溝内からは多量の遺物と祭祀の跡が発見された。本書報告分からは木製槽や長さ3mにも及ぶ一木を削り出した梯子、漆掻きの痕跡を残す漆原木等が出土した。土器類では初期須恵器の樽形甕が破碎された状態で出土した。樽形甕は非常に出土例の少ない遺物であり、何らかの祭祀に使用されたと考えられる。巨視的にみると、城敷遺跡から銭塚遺跡へ集落の移動が認められる。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第369集

銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ

高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ
(第1分冊)

平成22年3月19日 印刷

平成22年3月24日 刊行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1
電話 0493-39-3955
<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／藤庄印刷株式会社